恋姫†BASARA学園物語

世紀末雑魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語

【Ｎコード】
Ｎ８２３１Ｎ

【作者名】
世紀末雑魚

【あらすじ】
戦国ＢＡＳＡＲＡと真・恋姫†無双の学園物語!!
彼らの周りで起こる様々な問題に彼らは立ち向かえるのか!?
笑いあり！　涙はあるのか!?　今、開校!!!!!
戦国無双参戦!!　恋ＢＡＲＡ学園に新たな風が吹く!!

２０１１，１２／１６　凍結解除

第一話、始まりの朝（前書き）

※注意、この物語は混沌（カオス）で出来ています気分を損ねる場合もありますのでそれは嫌だと言う人はそのままｂａｃｋして下さい

第一話、始まりの朝

ある日の朝、とある場所にて…

ジリリリリ！！！

？？？

「う～～ん……」

今、気持ちよく寝ている人物がこの物語の主人公である。
どうやら彼は朝は弱い方らしい。

と、そこへ……

ガシャン！ガシャン！　ジリリリ……グシャ！！

？？？

「！！！！？？」

彼を起こした人物（？）は身長が遥かに人間の域を越えている
というか、ところどころに機械音が聞こえる

？？？
「……ん？おぉ、なんだ起こしに来てくれたのか！」
？？？
「！！！」
ブシューーーー！！
？？？
「アハハハ！そうか、もうそんな時間か。では、起きるとするかな！」
そう言うと彼は布団から起き上がり、背筋を伸ばして起こしてくれた人物（？）に、挨拶をした。
？？？
「おはよう、忠勝（ただかつ）！」
彼の名は徳川（とくがわ）　家康（いえやす）
元気が似合う青年である。
この物語は学園で起こる奇想天外な事に徳川家康と仲間が絆の力で、

立ち向かう熱血アドベンチャーである！！！！！！

嘘である！！！！！

第一話、始まりの朝（後書き）

ハャッハーーー！！！！

作っちまったゼェ！

後悔はネェーー！！

はい、すいません調子に乗りました！

感想、質問の方もよろしくお願いします（こんな小説見てくれる人いるのかなぁ…）

学園の歴史（前書き）

説明みたいな物です

次回から進めます

学園の歴史

私立恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園。

この学園は日本のどこかにある学園の一つ。

学園はかなり大きく（東京●ーム2個くらいかなぁ）校則がかなり自由なため競争率が高い。

また小、中、高、大がエスカレーター式になっているため小学校の時点で入学希望者が後を絶たない。

この恋姫†ＢＡＳＡＲＡ（略して恋ＢＡＲＡ）学園の試験は筆記試験と面接試験の他に試験がある。

それは……

武力試験！！！！！！
（ババァーーーーン）

この武力試験は、筆記試験と対等な試験で二つの合計と面接で入学を決めている。

武力試験の内容はいたって簡単。
在学中の学生との武力を競うもの。
勝てば高得点だが、負けても負け方次第では得点は高い。

最早何でもありである！

君も気になったら試験を受けてみよう！（小学校の試験は武力試験はないから安心してくれ）

そんな恋ＢＡＲＡ学園の創設者は……

卑弥呼。

可愛らしい名前とは裏腹にボディービルダー以上の筋肉質

某●方不敗を思わせるようなたくましい声

そして漢女（おとめ）

彼女（！？）がこの恋ＢＡＲＡ学園の理事長も勤めている。

そして、この恋ＢＡＲＡ学園の校長は……

織田信長。

彼を一言で表すなら……

“魔王”

正に、この言葉は彼のためにあるような物。

魔王を思わせる鎧。

刀と銃を常に装備（完全に銃刀法違反ですが、まぁカオスだしね♪）

某細胞の野太い声。

なぜ彼が校長をやっているかと言うと……

信長はこの恋ＢＡＲＡ学園ＯＢで学生の内は生徒会長をして卑弥呼と幾度となく闘った。

闘ってく内に卑弥呼は信長ならこの学園の校長にふさわしいと思った。

そして信長が卒業をし、数年後に卑弥呼は彼の家を訪れた。

卑弥呼
「おぬし、ワシの学園で校長をしてくれるか？」

信長
「是非もなし」

信長の回答は意味不明だが信長は卑弥呼の申し出を受け入れた。

これが信長校長伝説である。

ちなみに、信長が校長をやる前の仕事は。

“保育士”

案外、子供好きなのかもしれない

第二話、絆、そして出会い（前書き）

家康
「ワシは絆の力で天下統一を果たす！」

愛紗
「いや、学校に天下もクソもないです」

家康
「何と！」

桃香
「アハハ…恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語始まります♪」

第二話、絆、そして出会い

～徳川宅～

ここでは、この物語の主人公である徳川家康が準備をしていた

～家康ｓｉｄｅ～

やぁ！
ワシの名は徳川家康！
今年から恋ＢＡＲＡ学園に入学することが決まって今日がその入学式だ！
その学校の支度をしていた。
様々な出会いが待っている。
そう考えるだけでワシは興奮して、心を踊らせる。

そしたらワシの心を察したのか忠勝は・・・

忠勝
「！！！」

ウィーーーン！！！！

と、言ってくれた。

家康
「あぁ！　楽しみだ！！」

ワシは忠勝にそう言った。
ん？何て言ってるかわからない？
安心しろ、ワシもだ！！
こいつは、本多（ほんだ）　忠勝。
ワシの両親が作ったロボット
だが、ワシと忠勝は一心同体と言えるくらい共にいる
因みに、ワシの親戚は忠勝を見て

「徳川の科学は地球1ーーーーー！！！」

と、毎回言ってる
ワシの両親は幼い頃に亡くなっている。
おっと、その話しはまた今度にしよう。

ワシは準備が出来て、忠勝に・・・

家康
「それでは、行ってくる。留守番を頼むぞ！」

忠勝
「！！！！」

ブシューーーー！！！

ワシがそう言うと忠勝は力強い返事をしてくれた。
忠勝ばかり頼ってはいけない。
ワシは自分の力で絆を作る！！！

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

家康登校中……

家から学校まで歩いて３０分くらいだ。
彼が登校してるとある道で揉め事が起きていた。

～？？？ｓｉｄｅ～

？？？
「イヤ！　どいて下さい！」

不良１
「そんなこと言わずに俺らと一緒どっか行こうぜ～」

不良2
「そうそう、俺らと一緒なら楽しめるよ～」

モヒカン
「ヒャッハーー！！」

う～～っ、困ったよ～（泣）
何で、こんな朝早くから怖い人たちに絡まれなきゃいけないの～（泣）
一人は何か世紀末みたいだし……
朝早いから全然人来ないし……困ったよ～！！
彼女絶賛お困り中……

不良1
「もう、めんどくせーなオラいくぞ！」

そう言うと一人が私の腕を掴み強引に引っ張って来た

？？？
「！　ヤメッ」
？？？
「やめんか！！　お前たち！」

私が言い終わる前に、後ろから声がした。
後ろを振り向くと其処には一人の明るそうな高校生みたいな人が立っていた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～家康ｓｉｄｅ～

ワシはこれからクラスでどういう風に自己紹介しようかと考えていると・・・

？？？
「…どいて…さい！」

と言う声が聞こえた。
そちらの方に視線を向けると不良２人とモヒカン１人、さらには高校生みたいな女の子１人が何か揉めていた。
いや…正確には女の子をナンパしているところかな。
これは、見過ごせんな！

家康
「やめんか！！お前たち！」

そう言うと、ワシはそこの不良とモヒカンと女の子が振り向いた

～sideout～

第二話、絆、そして出会い（後書き）

今回は少し王道な展開ですね。

これから、少しずつ混沌にもって行きます。

感想と評価をよろしくお願いします。

第三話、道端の戦い（前書き）

～あらすじ～

ヒャッハーー！！

みちばたで、モヒカンとそうぐうした！
どうする？

たたかう へ
おうぎ
どうぐ
にげる

愛紗
「なに！？このドラクエテイストは！？」

家康
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語…開幕！」

第三話、道端の戦い

～あらすじ～

通学中に不良とモヒカンが女の子を困らせていた！
その時、家康が動いた！

～とある道端～

家康
「お前たち…彼女が困っているだろう。やめてやったらどうだ？」

不良1
「ハァ？何いっちゃってるの？」

不良2
「俺ら、今忙しいからどっか逝ってくんねぇ？」

モヒカン
「ヒャッハーー！！汚物は消毒ダァー！！」

家康の言葉に一切どうじない不良とモヒカン。
それを見て家康は溜め息混じりに・・・

家康
「ハァ…聞く耳持たんか…ならば、仕方ないか！」

そう言った家康は構えて一言。

家康
「ワシは少しばかし強いぞ」

～???side～

家康
「ワシは少しばかし強いぞ」

彼は構えながらそう言った。
それに対して不良とモヒカンは・・・

不良1
「おいおい、お前馬鹿だろう…こっちは3人いんだぞ」

不良2
「うわぁー今時いんだねこういう奴。見てるこっちが寒くなっちゃった」

モヒカン

「ヒャッハーー！！　水ダァー！」

と、答えた。
どうでもいいけど、私的にはそこのモヒカンの人の方が珍しいと思うんですけど……（汗）
てか、モヒカンの人なにしに来たんですか？
って、それどころじゃなかった！

？？？
「あの、危ないですよ！！」

私は男の人にそう言った。
だが、彼は…

家康
「心配してくれてありがとう、だが！ワシは負けんよ」

と、笑顔で答えた。
私はその笑顔を見て不思議と心がドキっとしてしまった。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

家康はさらに不良とモヒカンを挑発的に……

家康
「どっからでもかかってこい。ワシは逃げも隠れもせん！」

家康がそう言った。
すると不良1が挑発に乗っかってしまった。

不良1
「おい、あんま調子に乗ってんじゃねー…ゾ！」

シュッ！

不良1が放つパンチは一般人としては速いパンチだ。

しかし……

パシッ！

不良1
「！？」

家康
「ほぅーいいパンチを持っているな」

不良1は自分のパンチに自信を持っていたのだろう。
しかし、そのパンチはいとも簡単に止められてしまった。
そして……

家康
「今度はこちらからいくぞ！」

ブォンッ！！

先程不良1が放ったパンチを軽く上回る速さで不良1の腹目掛けた。

そして……

ボコッ！！！

不良1
「$#’”&?¥、・¥」

声にならない声を叫びながらうずくまり動かなくなった。

不良2と女の子は驚いて目を丸くしていたが……

モヒカン
「汚物は……消毒ダァー！！」

ボオォォォォ！！！

モヒカンはどこから出したかわからないが火炎放射機を使い、家康目掛け放った。

？？？
「危ない！」

女の子は思いっきり叫んだ。
その声に気付いた家康は……

家康
「！　フッ、タァ！」

素早く避け、思いっきり飛んだ。

そしてモヒカン目掛け……

家康

「フンッ！！」

ゴーーン！

モヒカン
「アベシッ！」

思いっきり頭突きを喰らわせた。
モヒカンは世紀末的発言をして気絶した。

家康
「さて、残るはお前だけだがどうする？」

家康は残った不良2にそう言い放った。

不良2
「う…ク、クソ！」

不良2は自分では勝てないと思い逃げ出した。

家康
「あっ！　待て……行ってしまったか。全く、友が気絶している

のに置いてくなんてなんて奴だ」

気絶させた本人が言うセリフではないが。

と、そこへ……

???

「あの～…」

家康

「ん？　…おぉ！大丈夫だったか？」

???

「はい♪　ありがとうございます、助けて頂いて」

家康

「なに、気にするな！　人として当たり前のことをしたまで」

などと、家康と女の子が喋っていると……

???

「桃香様ッ！！」

声の方に向けるとそこには黒髪が綺麗な女性が向かって来た。

第三話、道端の戦い（後書き）

いや～進まないなぁ～……

なんか涙が出ちゃう、だって漢女（おとめ）だもん！！

……自分でやってると気持ち悪くなるな（汗）

こんな小説ですがよろしくお願いします。

第四話、黒髪の女性、アニキ登場!?（前書き）

政宗
「Ｌｅｔ's　ｐａｒｔｙ　!!」

華琳
「どうしたの、彼？」

秋蘭
「はい、なんでも未だに出番がない事に腹を立て暴れ回っております」

華琳
「……」

秋蘭
「華琳様？」

華琳
「……そんなことで出番が増えたら苦労はしないわよぉぉぉぉぉぉ

お！！」

秋蘭
「華琳様！？だ、誰か！！誰かおるか！？」

小十郎
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、皆、刮目せよ！！」

第四話、黒髪の女性、アニキ登場!?

～あらすじ～

家康は女の子を助けたら、黒髪の女性が現れた。

～とあす道端～

???

「桃香様ッ!!」

???

「愛紗ちゃん!?」

どうやら彼女たちは知り合いのようだ。

愛紗（？）

「何処におられたのですか!?」

桃香（？）

「アハハ……ごめんね、愛紗ちゃん。今日がすごく楽しみで早起きしちゃっていてもたってもいられなくて、つい……」

愛紗（？）

「ついではありません！！！　もし、この時に人に襲われたらどうするのですか！！」

桃香（？）
「はい、すいません……」

愛紗（？）
「このようなことは今回限りでお願いいたします。わかりましたか？」

桃香（？）
「はい…わかりました」

愛紗（？）
「全く、桃香様は……ん？　失礼ですが、あなた様は？」

ここでようやく家康に目を向けた。

家康
「ワシか？　ワシの名は徳川家康。先程そちらの女性が困っていたのでな」

愛紗（？）
「困っていたとは？」

家康
「あぁ、実は……」

家康説明中……

説明し終わったと同時に……

愛紗（？）
「桃香様ッ！！！（怒）」

桃香（？）
「ハイィィィ！　ゴメンナサイィィィ！！！（泣）」

ぶち切れていた。

愛紗（？）
「全く……桃香様ときたら……コホンッ、先程の見苦しい姿を見せて申し訳ありません。桃香様を助けていただき感謝します。我が名は、関（かん）　愛紗（あいしゃ）と申します」

桃香（？）
「アアァァァッ！　ずるいよ愛紗ちゃん！　私もまだ名乗ってないのに～！」

愛紗

「……ハァ、それでは今から名乗ればよろしいでしょうに」

桃香（？）
「ウーーッそういう問題じゃないの……ま、いっか♪　私の名前は劉桃香です。さっきは本当にありがとう♪」

家康
「いやなに気にすることではない、ワシは当然のことをしたまでだ」

愛紗
「ところで、徳川殿……」

家康
「ワシのことは、家康で構わないぞ」

愛紗
「え、ですが……」

家康
「遠慮などいらんぞ、それにワシはそう呼ばれたいだけだ」

愛紗
「……わかりました。では、私も愛紗とお呼びください」

桃香
「私も桃香って呼んでね♪」

家康
「わかった」

愛紗
「では改めて聞きますが家康殿、家康殿の学生服ですが……」

といって、愛紗は家康の服装を見た。

家康
「あぁ、これか。実は今日からワシは恋姫ＢＡＳＡＲＡ学園の生徒になるんだ」

桃香
「嘘っ！　家康君も！？」

家康
「も？　ということは……」

愛紗
「はい、私と桃香様も今日から恋姫ＢＡＳＡＲＡ学園の生徒です」

家康は、女の学生服を見るのは今回が初めてである。

家康
「なんだって！　アッハハハ！　そうか君たちもか。　よし！　桃香と愛紗に早速で悪いのだが一つ頼みたいことがあるのだが……」

桃香
「うん♪いいよ。私たちにできることなら」

愛紗
「先程の借りもありますし……わかりました。なんなりと申してください」

家康
「ありがとう。では、頼みこみたいこととは……」

？？？
「あ、いやがった！」

家康
「うん？」

3人は振り向くと、そこには先程の不良2がいた。

愛紗
「桃香様、この方は？」

桃香
「さっき言ってた不良の人だよ」

愛紗
「ほう……コヤツガ」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

愛紗からスタ●ド並の殺気を不良2にぶつけた

不良2
「ヒぃ！！！」

愛紗
「貴様……トイレは済ませたか？　念仏は唱えたか？　部屋の隅でガタガタ震える準備はＯＫ？」

不良2はかなり脅えていた。
因みに桃香は泣きながら脅え、家康は尋常じゃない汗をかいていた。

だが、不良2は……

不良2
「だ、黙れ！　こっちには心強いアニキがいんだよ！！　お、お前らんかあっという間だぁ！」

それに対し家康は……

家康
「ほう、面白いじゃないか！　そいつはかなり強いのか？」

不良2
「当り前だろうが！！もう我慢ならねぇ！アニキやっちゃってくれ！」

そう言ってアニキを呼んだ。

？？？
「やっとお出ましか」

はたして、アニキの正体は！？

第四話、黒髪の女性、アニキ登場！？（後書き）

いや～～なんかあったまガンガンするＺＥ☆

……よし頑張るか。

感想、質問、よろしくお願いします

第五話、アニキの正体（前書き）

信玄
「幸村ぁァァ！」

幸村
「お館様あぁぁァァァァ！！」

信玄
「幸村ぁァァ！」

幸村
「うぉお館様あぁぁァァァァ！！」

蓮華
「思春……あれは何？」

思春
「見てはいけません蓮華様」

雪蓮

「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語始まるわよ～♪」

第五話、アニキの正体

～あらすじ～

不良2が連れて来たアニキとは！？

～とある道端～

アニキ（？）
「コイツらか？テメーの仲間を襲ったのは？」

不良2
「ハ、ハイ！そうなんですよ！とっととコイツらを畳んじまってください！」

アニキ（？）
「まぁ、任せときな……オイ！テメーら！」

愛紗
「なんだ！？」

アニキ（？）
「随分と仲間が世話になったみてーだなぁ！！」

桃香
「ち、違うんです！……話しを聞いてください！」

アニキ（？）
「アァン？」

桃香はアニキ（？）に事情を説明した。

だが……

アニキ（？）
「ふざけんじゃねぇー！　オレの仲間がそんな事するわけねぇーだろうがぁ！！」

実はアニキ（？）は仲間がやられた時点で頭に血が上っている。
ゆえに、桃香の説明を聞いても信用することはなかった。

桃香
「ほ、本当です！　信じてください！」

アニキ（？）
「うるせぇー！　ガタガタ言ってんじゃねぇーぞ！！」

愛紗
「貴様！！」

愛紗は自分の武器を手にとり、相手に向かおうとしたが……

家康
「待つんだッ！！　愛紗！」

家康が止めに入った。

愛紗
「家康殿！？　何故止めるのですかッ！」

愛紗は何故止めたのかを家康に言ったが家康は……

家康
「……」

家康は愛紗の問いに答えず、ずっとなにかを考えている様子だった。

桃香
「家康君？」

そんな様子が心配だったので声をかける桃香。
しかし、家康はまだなにかを考えている様子。

しばらくして、家康は……

家康
「お主、元親か？」

家康はそうアニキ（？）に対して名前を呼んだ。

名前を呼ばれたアニキ（？）は……

アニキ（？）
「…確かに俺の名前は元親だが……なんでテメーが俺の名前を知ってんだ？」

アニキ（？）の名前は元親で正しいようだ。
その答えに家康は……

家康
「やっぱり元親かッ！！　久しぶりじゃないか！　元親！」

と、嬉しいそうに言った。

元親
「オイッ！！　いきなり何なんだテメーは！？」

元親はいきなり馴れ馴れしくなった家康に苛立ちを覚えていた。

家康
「なんだ?覚えていないのか?　ワシだ!　家康だ!!」

元親
「家康ぅ〜?　……確かに俺の友には、家康はいる。だが俺の知っている家康は
小っさくて
泣き虫で
少しポッチャリした
狸みたいな奴が家康だ!」

なんかボロクソに言われている家康。

家康
「ま、まぁ幼い頃のワシはそうだったかも知れんなぁ〜〜(汗)」

少し慌てる家康。

家康
「だが、ワシは正真正銘の家康だ！　信じてくれ、元親！」

家康は真っ直ぐな目で元親を見続ける。
そんな真っ直ぐな目で見る家康に元親は質問をした。

元親
「……オイッ！　お前が本当に家康なら俺との二人だけの秘密を言ってみやがれぇ！」

家康
「ワシと元親が一緒に拾った“ドキッ！女だらけの戦国合戦”（ポロリもアルよ☆）の本は未だに忠勝の兜の中にあるぞッ！！！」

即答である！

愛紗
「オイィィィィィ！！　何言っているんですか家康殿ォォォォォ！？」

桃香
「家康君／／／／」

不良２
「……（汗）」

家康の答えに愛紗はツッコミ、桃香は赤面し、不良2は唖然としていた。
だが、元親は……

元親
「ッ！　お前今“忠勝”って……んじゃ、お前本当に家康なのか！？」

家康
「あぁ！　本当だ、元親！」

元親
「い、家康ゥゥゥ！！」

家康
「元親ァァァ！」

家康と元親はお互いの名前を呼びながら走り寄った。

そして……

元親
「オラァ！！」

家康
「ハアァァ！」

バギッ！

クロスカウンターをしていた。

桃香・愛紗・不良2

「何でぇぇぇぇぇ！！！！！？？」

第五話、アニキの正体（後書き）

進まないな物語……

てか、まだ学園に着いてないな……

それでも、諦めぬぞぉ！

それでは、また次回！！

第六話、再会。元親の想い（前書き）

小太郎
「……」

恋
「……ん」

忠勝
「！！！？？」

詠
「なんか喋んなさいよッ！！」

月
「詠ちゃん…1人（？）は話していると思うよ……多分」

氏政
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりじゃーー！」

第六話、再会。元親の想い

～あらすじ～

家康と元親は感動のクロスカウンターをした！

～とある道端～

家康
「……」

元親
「……」

家康と元親はお互いの顔面に拳がめり込んでいて動こうとしない。
そんな様子に3人は戸惑っていた。

愛紗
（な、何故ダァァァァ！？……お、落ち着け、落ち着くんだ私。家康殿と彼は知り合いで久々の再会に勢い余ってクロスカウンターをした……って、なるかぁァァァァ！）

桃香
「え？　え？（オロオロ）」

不良2
「……（ポカーン）」

それぞれご乱心している様子だった。

だが、家康と元親は……

元親
「……強くなったなぁ、家康」

家康
「……そういう元親は相変わらずの強さだなッ！」

そう言うとお互いは拳を離し……

ガシッ！！

元親
「久々に会えて嬉しーぜ！　家康！」

家康
「ああ！　ワシもだ元親！」

熱い握手を交わし互いの成長と友との再会に心底喜んだ両者。

愛紗
「家康殿・・・この方は一体何者何ですか？」

家康
「ん？　おっと、そうだった！　コイツは長曾我部（ちょうそかべ）　元親（もとちか）！　ワシの幼い頃からの親友だ！」

元親
「そういう訳だ、よろしくな！」

愛紗
「そうだったのですか・・・私の名は関愛紗と申します」

桃香
「私は劉桃香です♪　よろしくお願いします！」

元親
「おぅよ！　よろしくな！」

家康
「しっかし、ホントに久しぶりじゃないか元親！　お前が急に引っ越ししたときは思わず泣いてしまったぞ！」

元親
「ダッハハハ！！　あの頃か・・・わりぃーな、何にも言えずにいなくなっちまって」

家康
「まぁ構わんさ！　このようにまた再会出来たのだからな！」

元親
「そう言ってくれると嬉しーじゃねーかッ！！」

しばらく雑談をしている不良2が痺れをきらし元親に話しかけた。

不良2
「ア、アニキ！　そんなことどーでもいいっすから早くやっちゃってください！」

一同
「「「「……あ」」」」

どうやら、忘れていたようだ。

元親
「っと、そうだったな。たが、家康がそんなことするはずがねぇーんだが……」

家康
「因みに、あいつは元親に何と言ったのだ？」

元親
「何でも仲間と一緒に遊んでいたらいきなり襲われて仲間をボコボ

コにされったって……」

家康
「……元親、お前が仲間を信じている気持ちはわかる。しかし、先程桃香が言った通り何だ…信じてくれ！　元親！」

元親
「……」

家康がこんな事しない。
だが、仲間の事も信じたい。

一体どうしたらいいのかと悩んでいる元親に……

???
「こんな所にいたのか、長曾我部」

元親
「ん？　おぉ！　お前か、どうした？」

元親は声の方へ向けるとそこには

日焼けしたような肌

なにかを睨みつけているような鋭い目つき

だがそれでも顔が整っている綺麗な女性がいた

???

「どうした？　ではない、待ち合わせの時間になっても貴様が来ないから来たものの……遊んでいたのか？　長曾我部」

元親

「アッ！　……すまねぇ、ちょっといろいろあってな」

???

「言い訳など聞かん……ん？　貴様は確か……」

不良2

「ア、アンタは……（汗）」

元親

「どうした？　コイツが何かしたのか？」

???

「……その様子だと知らないようだな長曾我部。コイツはお前の名前を借りていろいろと悪行を行ってきた小汚い奴だ」

元親

「何だとッ！？」

元親は驚き、不良2を見た。

元親
「・・・今の話は本当か？」

不良２
「う、嘘に決まってるじゃないっすか！アニキ！」

？？？
「ほぅ、この期に及んでまだ“アニキ”と呼ぶか・・・知っているぞ、貴様が長曾我部の文句を言っている事を」

不良２
「うっ・・・・・・（汗）」

？？？
「なんなら長曾我部の仲間を呼ぶか？　ソイツらなら貴様の悪行をもっと詳しく教えてくれるはずだ」

不良２は現れた女性に自分の行ってきた悪行を暴露されて戸惑ってしまった。

元親
「もう一度聞く・・・今の話は本当か？」

元親は再度同じ質問をした

すると不良2……

不良2
「ク、クソ！」

状況がきびしくなったのかまた逃げ出そうとした。

が……

元親
「逃がさねえ！！」

元親は手に持っていた碇のような槍を不良2に目掛けて振った。
すると、碇の部分が外れ不良2の服に碇が引っ掛かり……

元親
「ウォリアァァ！」

そのまま元親は自分の方に引っ張り……

不良2
「なッ！？　グエッ！？」

“釣り上げた”

ドゴォーーーン！！

不良2は思いっきり地面に叩きつけられてむせてしまった。

不良2
「ゲホッ！　ゲホッ！　な、何だッ！？」

不良2は一体何が起きたのか解らずにいた。

元親
「オイ……」

不良2
「ヒィ！！」

元親
「今逃げたって事は……」

不良2
「ち、違うんだアニキ！ちょっとした出来心で……」

元親

「……さっきの嬢ちゃんの話も本当なのか？」

不良２
「あ、あれは仲間が一緒やろうって無理やり……」

元親
「馬鹿野郎！！！」

不良２
「！？」

不良２は言う終わる前に元親の怒鳴り声に圧倒されてしまった。

元親
「俺は別にテメーがしてきた事に対して言いたい事なんかなにもねぇ……俺だっていろいろと悪さをしてるから言える立場じゃあねーしな。だが、それは仲間の為と思ってやってきた。俺は仲間の為ならなんでもする。それが例え悪い事だとしてもだ……だかなッ！！」

元親は不良２の服を掴んだ

元親
「俺は仲間を……仲間を裏切るような事だけは絶対にしねぇ！！
だがなぁ、テメーはそれをした……それが何よりも許せねぇんだ！！」

一同
「「「「「……」」」」」

その場にいた全員が元親の言葉を聞いていた。
しばらく静かな時間が過ぎた頃……
元親は掴んでいた手を解き不良2に言葉をかけた。

元親
「いいか？　テメーが今までしてきた事は決して許されねぇ……
だが、やり直す事はいくらでもできる。そんな時にテメーがひとり
ぼっちだったらまた同じ事を繰り返してやがて取り返しのつかない
事になっちまう。だが、仲間がいたら……自分の間違いを気付か
せてくれる仲間がいたら……テメーは必ずやり直す事ができる」

不良2
「……」

元親
「それができたならテメーは、仲間が間違いを起こそうとする奴に
……間違いに気付く仲間になっているはずだ」

不良2
「……けど、俺は……」

不良2は下を向いたまま黙っていたが何か言おうとしていた。
そんな不良2に対し元親は不良2の肩に手を置き……

元親
「テメーはまだやり直せる……俺はそう信じるぜ。もし、またなにか問題や困った事があったなら……俺に頼んな。」

不良2
「!?　だ、だけど」

元親
「オイオイ……オメーと俺は“仲間”だろ?」

不良2
「ア、アニキィィィィ!!!（泣）」

そんなやり取りを見ていた4人は……

桃香
「元親ざんどっでもいい人だよ～（泣）」

愛紗
「……元親殿は非常に仲間想いなのですね」

桃香は元親の行動に感動し、号泣している。
一方の愛紗は元親がどういった人物なのか知ることができた。

家康
「元親は相変わらず変わらないな・・・自分の事より仲間を大事にする」

???
「だが、仲間の事になると周りが一切見えなくなるがな・・・」

家康
「アッハハハハ！　確かにその通りだ！　だが、それもまた元親のいいところだ！　・・・・ところで、お主は？」

???
「そう言えば名乗ってなかったな・・・我が名は甘（かん）。甘　思春（ししゅん）だ」

家康
「ワシの名は徳川家康だ！」

愛紗
「私の名は関愛紗と申します」

桃香
「私は劉桃香って言います♪　よろしくお願いします！」

それぞれが自己紹介を終えると・・・・・

元親
「劉の嬢ちゃん」

桃香
「はい？」

桃香は元親に呼ばれて振り向いた。

元親
「コイツがアンタにどうしても言いたい事があるらしい」

桃香
「言いたい事ですか？」

不良2
「あの、さっきはすいませんでした！」

不良2は気持ちがすごくこもった土下座をした。

元親
「俺からも頼む・・・コイツを許してやってくれねぇか？」

そう言うと元親は頭を下げた。

桃香
「だ、大丈夫です！　大丈夫ですから頭を上げてください！（焦）」

桃香はこういった事には慣れていないようだ。

不良2
「ありがとうございます！」

元親
「良かったじゃねーか！」

不良2
「アニキ！俺ぜってーに生まれ変わります！」

元親
「おぅ！頑張れよッ！！」

そう言って不良2は走り去っていった。

・・・・・ついでに、未だに気絶している不良1とモヒカンを引きずっていった。

家康
「・・・さて、問題は解決したな！」

桃香
「そうだね♪」

愛紗
「そうですね」

元親
「そうだな！　……と言っても俺の仲間が起こした問題だがな」

思春
「全くいい迷惑だな」

家康の言葉にそれぞれが答える。

愛紗
「ところで、元親殿に甘殿、その学生服を見ると……」

元親と思春は恋ＢＡＲＡ学園の学生服を着ている。

元親
「その通り！　俺らは恋ＢＡＲＡ学園の生徒だ！」

思春
「正確には今日からだがな…あと、私は思春で良い」

愛紗は「わかりました」と思春に答える。

家康
「そうか！　じゃあこれから元親と遊べるのか！」

元親
「そうだな！　家康！」

家康と元親はまた友と遊べることを喜んでいた。

そこへ、愛紗が……

愛紗
「家康殿、そろそろ学園に向かいませんか？」

先程の出来事があり、かなり時間を使ってしまったようだ。

家康
「おっと！もうそんな時間か…よし！では、皆で向かうとしよう！」

そして家康たちは学園に向かうのであった。

向っている最中桃香は……

桃香
「そう言えば家康君」

家康
「ん？　なんだい？」

桃香
「さっきの頼みたいことってなにかな？」

桃香は家康が自分たちに頼みたいことはなにか聞いてみた。

だが、家康は……

家康
「……いや、それはまた後で言うことにするよ」

と答えた。

～おまけ～

元親
「そう言えば思春」

思春
「なんだ？」

元親
「なんでさっきから俺の事“長曾我部”って呼んでんだ？いつも通りに“元ち・・・」

チリーン

元親
「か！？」

元親が質問を言っている最中に思春は剣を取り、元親の喉元に剣先を当てた。

思春
「なんのことだ？“長曾我部”・・・・私はいつも通りだろう？」

元親
「・・・・・・・・・・・」

思春
「返事はッ！？」

元親
「お、おぅ！！」

元親は戸惑いながらも大きな声で返事をした。
それを聞くと思春は剣をしまった。

だが、思春の内心は……

思春
（い、言えるか！／／／　公共の場では恥ずかしいからなんて……死んでも言えるかッ！！／／／）

本当は言いたいのに我慢している思春でした。

第六話、再会。元親の想い（後書き）

スイマセンでしたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

スライディング土下座！

今回はかなりキャラ崩壊をしました！

自分の中ではなかなか良いと思ったんですけど……

元親はＢＡＳＡＲＡで海賊みたいだし、思春は水軍を扱ってまして……

だから、許してください！！！！！

元親と思春の関係は次回載せます。

それでは、また次回！

第七話、若き虎と若き呉の王。独眼竜（前書き）

兼続
「俺は無敵の主人公ッ！！！」

華雄
「何を言うッ！！我こそが最強だ！」

武蔵
「へっ！　おれさまがさいきょーだもんね！」

霞
「……なんや、惨めに思うてもろた」

謙信
「ふふふ、ゆかいなり」

かすが
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぞ……ああ、謙信さまっ！！」

第七話、若き虎と若き呉の王。独眼竜

～あらすじ～

家康たちは学園に向かっていた。

～とある道～

家康
「なるほど、元親と思春は家が近所だったのか」

元親
「その通りよ・・・俺が引っ越した時に隣の家が思春だったわけよ」

思春
「かなりの迷惑だったがな」

家康は元親と思春の関係を聞くと引っ越した時にお互いの家が隣同士であった。
さらに聞くと学校も一緒だったらしい。

元親
「いきなりの引っ越しで右も左もわかんねー時にいろいろと世話になってよー」

思春
「そう言うが、貴様は転校初日でクラス全員を友達にしただろ」

元親
「あれ、そうだったか？」

家康
「アッハハハ！　元親らしいじゃあないか！」

家康は元親らしい行動に大笑いしていた。

愛紗
「家康殿と元親殿はどういった経由で親友になられたのですか？」

家康
「あぁ、ワシの両親は少し機械をいじるのが趣味でな……その時に元親の両親も同じように機械いじりが好きだった」

元親
「そん時に俺の親父が家康の親がすごい機械を作っているって聞いたもんで……すぐに家康の家に飛んだわけよ」

家康
「ワシは、元親の両親が来ている間はずっと元親と遊んでいたのだ！」

桃香

「へぇ～～……そうだったんだ！」

家康と元親の親友となった話をしていると……

……オオ……ォ…！

家康
「ん？」

桃香
「家康君？　どうしたの？」

家康
「……声が聞こえた」

愛紗
「声……ですか？」

家康
「あぁ」

家康の言葉に全員後ろを見た。

……オオオオッ！！

元親
「……確かに聞こえるな」

桃香
「な、なんだろう？」

桃香はさり気なく家康の服を掴んだ。

・・・オォォォォ！！！

その声は段々と近づいてきた。

そして……

？？？
「ウゥオオオオオォォォォォ！！！！！！」

なにやらやたらと熱血が似合いすぎる赤いハチマキを巻いた青年が自転車を爆走していた。

？？？
「寝坊したでござぁぁぁるうぅぅぅぅぅ！！！！」

ブゥウオォオォオォオォン！

そう言って彼は家康たちを一瞬で追い抜いた。

家康
「な、なんだアイツは（汗）」

桃香
「なんか“寝坊した”って言ってたけどもうそんな時間かな？」

愛紗
「いえ、まだ遅刻になる時間にはなっておりません」

いきなり現れ嵐のように去っていった人物に3人は戸惑った。

しかし、元親と思春は……

元親
「ダッハハハハ！！　相変わらず騒がしいヤツだなぁ！」

思春
「……すまん、長曾我部…すごく心配になってきた」

元親
「おぅ！　行ってこい！」

思春
「……フッ」

チリーン

鈴の音が聞こえた時には思春の姿はなかった。

桃香
「へ？　知り合いなんですか？」

元親
「おぅよ！　さっきのヤローは真田（さなだ）幸村（ゆきむら）！　俺と思春と同じ学校だった奴だ。ま、見たとおり暑苦しい野郎だが悪い奴じゃねぇよ」

家康
「ホゥ～…今度ゆっくりと話してみたいものだなぁ！」

そう言って家康たちは止めていた足を動かして学園に向かうのであった。

～一方その頃～

学園から近い公園の前で1人の女性が誰かを待っていた……

？？？

「ハァ～……」

ため息を吐きながら少し落ち込んだ女性。

彼女の名前は孫（そん）　蓮華（れんふぁ）。

何故、彼女が落ち込んでいるのか。その理由は……

蓮華

（……幸村の馬鹿……待ち合わせの時間になっても来ないなんて……なにをしているのよ？）

どうやら彼女は幸村という人物と待ち合わせをしているようだ。

だが、待ち合わせの時間時間になっても彼が来ないことで少し落ち込んでいるようだ。

蓮華

「（携帯に電話しても出ないし……）って幸村、まだ携帯の使い方わかんないだったわ」

こんな時代に携帯を使えないとは幸村はかなりのアナログ人間である。

蓮華
「（仕方ない…まだ待つとしよう）…これは幸村が道に迷ったら私まで迷惑がかかってしまうから仕方なく待つだけよ。決して幸村と一緒に登校したいなんてこれっぽっちも思ってないから勘違いしないで！」

一体誰に言っているがわからないがどうやら一緒に登こ「違うわよッ！！／／／」……作者にツッコミをいれる蓮華。

すると……

？？？
「……オオオ！！」

蓮華
「ん？」

声がした方を見る蓮華。

すると……

？？？
「ウゥオォォォォォォォォォォォ！！！！！！！」

先程の青年、真田　幸村はが転車を爆走してこちらに向かって来ていた。

蓮華
「ゆ、幸村!?」

蓮華は爆走してくる幸村に若干ビビりながらも幸村に声をかけた。

そして……

幸村
「トォォォウゥ!!!!」

幸村は自転車から天高く飛び……

幸村
「申し訳ござあいませぬぅぅぅぅぅ!!　蓮華殿ぉぉぉぉ!!!!」

ガシャーーーンッ!!

ジャンピング土下座!!
因みに自転車は電柱にぶつかった。

蓮華
「……（汗）」

蓮華は幸村の行動について来れてなかった。

幸村
「この幸村ッ！！　蓮華殿と待ち合わせの時間に遅刻し、蓮華殿に多大な迷惑をかけてしまわれた！！　この失態、某は腹を切る覚悟の上！！　介錯は蓮華殿にゴファ！！」

思春
「やめろ、馬鹿者」

幸村が自殺行為を行う寸前に急いで駆けつけた思春が幸村の腹に蹴りを入れ阻止した。

蓮華
「思春！？　どうしてここに！？」

思春
「はい、先程この男がもの凄いスピードでどこかに去っていったのでもしやと思い・・・」

思春は自分が駆けつけた理由を蓮華に教えた。

蓮華
「そ、そうなの（汗）」

幸村
「ゲホッ、ゲホッ……おお！　思春殿！　そなたが何故ここに！？」

思春
「貴様が原因だ馬鹿者（怒）」

思春は少し怒りながら幸村の質問に答えた。

蓮華
「ま、まぁ落ち着いて思春……幸村、私はもう怒っていないから安心してくれ」

幸村
「おお！　ありがたきお言葉！」

思春
（……単純な男だな）

思春は心の中でそう思っていた。

幸村
「そうだっ！思春殿！貴殿も一緒に登校しないか！？」

蓮華
「えっ！？」

幸村の発言に蓮華は驚いて幸村を見た。

幸村
「ん？　どうかなされたか、蓮華殿？」

蓮華
「い、いやなんでもない」

と、答えたが心の中ではかなり焦っていた。

蓮華
（なんでよっ！？　私は幸村と2人っきりで登校したいのに！／／／　……いや、思春は私の心境をわかってくれるはずだ！　だからやんわりと断ってく……）

思春
「よかろう」

蓮華
（思春の馬鹿ぁぁぁぁ！！）

蓮華は心の中で思春にツッコミをいれた。

思春
「……おい」

思春は先程幸村の自転車がぶつかった電柱に話しかけた。

すると……

???
「あ、やっぱバレてた?」

いきなり男が出てきた。

幸村
「佐助ッ！　どうしてお前が此処に!?」

男の名前は猿飛（さるとび）　佐助（さすけ）。
幸村が雇っている忍者で恋ＢＡＲＡ学園の生徒になる男である。

佐助

「いやぁ～、旦那の事が心配でこっそり付けてた訳わけよ」

幸村
「そうだったのか！？　クッ、佐助の気配をまだ読めぬとは……
某もまだまだ修行が足りぬっ！！」

幸村は膝をつき地面に拳を叩きつけ悔しがっていた。

蓮華
「だ、大丈夫だ幸村！　私も気付かなかったから！」

そんな幸村を見て蓮華は幸村にへんな慰めをしていた。

思春
「行かないのか？」

思春は幸村に学園にまだ行かないのかと聞いた。

幸村
「おお！　そうであった！　よし、では皆で学園に向かうぞ！」

こうして幸村たちは学園に向かうのであった。

向かう最中……

佐助
（……おい、思春ちゃん）

思春
（……なんだ？）

佐助と思春は小声で話していた。

佐助
（なんで旦那と蓮華ちゃんを2人っきりにしなかったんだよ？）

思春
（……あの2人が、2人っきりになってもあの男は蓮華様の気持ちを気付くことはできんだろ？）

佐助
（……確かにそうだけと）

思春
（それにな……）

佐助
（ん？）

思春

（あの男はこういう事になったら逃げ出すかもしれないしな・・・）

佐助
（・・・・・・それは言えるぜ）

何故かいらない信頼を得ている幸村であった。

～？？？～

ブウゥゥゥゥゥン！！

？？？
「Ｈｅｙ！　テメーらッ！！　ちゃんとついてこれてっか！？」

一同
「Ｙｅａｈーーーー！！」

なにやら暴走族みたいな連中が道路をバイクで颯爽と走っていた。

？？？
「ＯＫ！　そーこなくちゃあ始まんねーからな！」

その男は片方の目は眼帯をつけ

今の時代には珍しく三日月の兜を被り
バイクなのに両手は腕を組みハンドルを手放し状態
そんな彼は暴走族みたい連中の先頭を走っていた。

？？？
「これから俺を楽しませてくれよ……」

男は小声で自分の心境を言い、その後大きな声こう言い放った。

？？？
「テメーらッ！　目的地まで一気に駆け抜けるぜ！！　ちゃんとついてこいよっ！！！」

一同
「Ｙｅａｈーーーーー！！」

彼がそう言うと後ろの連中は元気な声で返事をした。

？？？
「さぁて……ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅだッ！！」

彼、伊達（だて）　政宗（まさむね）もまた、目的地“恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園”に向かうのであった……

第七話、若き虎と若き呉の王。独眼竜（後書き）

さて、いろいろありましたが次回はやっと学園に到着します！

長かったなぁ～……

どんどんキャラを登場させます。

もちろん、いろいろ崩壊していますので注意してください！？

それでは、また次回！

第八話、到着。対面。独眼竜と凶王（前書き）

顕如
「ブァッハッハッハッ！！　拙僧だ本願寺顕如であーる！」

麗羽
「オ～ッホッホッホ！！　わたくしが三国一名家である袁　本初ですわ！」

義元
「ホッホッホ！！　風流でおじゃる、風流でおじゃる！　まろが今川　義元でおじゃる！！」

華琳
「……馬鹿は金色が好きなのかしら？」

政宗
「ただ目立ちたいだけじゃねーの？」

美羽
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるのじゃ～！」

第八話、到着。対面。独眼竜と凶王

～あらすじ～

様々な人物が学園に向かっていった。

～学園・校門～

家康
「此処が……ワシの新しい学校か！」

家康は目の前にある自分の新しい学校に興奮していた。

愛紗
「嬉しそうですね、家康殿」

家康
「ああ！」

今の家康は例えるなら新しいオモチャを貰えた子供のようだ。

元親

「そういう嬢ちゃんたちは普通だな」

愛紗
「私は元々ここの小学校からずっと通ってますからね」

桃香
「私は中学校からだよ。でも、私も今興奮してるよ！」

桃香は少し興奮していた。

家康
「そうだったのか！　……ん？　だが、桃香はさっきワシの格好を見て驚いていたはずだが……」

愛紗
「はい、私たちは高校の学生服を見るのが初めてですから。私は事前に調べておきましたから」

家康
「なんだ、そういうことか！」

家康は納得したようだ。

元親
「そろそろ行こうぜ。どうやらクラス分けをやっているようだしな」

家康
「ああ、わかった！行くとしよう！」

家康達移動中……

～学園・掲示板～

掲示板の前ではワイワイガヤガヤと人集りが出来ていた。

家康
「いや～いっぱいだなぁ」

桃香
「ヒャッハー！　ホントだね～」

愛紗
「桃香様、落ち着いてください」

元親
「まぁなんでもいいから早く見に行こーぜ」

家康たちはどうにかして掲示板の前に来れた。

家康

「え～と、ワシの教室はっと……お、あった！　ワシは１－Ｂか！！」

桃香
「ホントにっ！一緒のクラスだね！！　愛紗ちゃんは？」

愛紗
「私も一緒です……元親殿は？」

元親
「アンタらと一緒さ！」

家康
「そうか！　皆一緒か！」

家康は全員と同じクラスになれたことを喜んだ。

そこへ……

？？？
「長曾我部」

元親
「ん？　おお、思春か！　それに幸村たちも来たのか！」

元親が振り向くと先程会った女性、思春と家康たちは初めて見る人たちがいた。

蓮華
「おはよう元親……思春？　この人たちは？」

思春
「はい、先程お話しました長曾我部の知り合いです」

蓮華
「この人たちが……はじめまして、私の名前は孫蓮華」

幸村
「某、真田幸村と申す！」

佐助
「俺様は猿飛佐助、みんなよろしくね～」

家康
「ワシの名は徳川家康！」

桃香
「私の名前は劉桃香と言います♪」

愛紗
「私の名前は関愛紗と申します、こちらこそよろしくお願いします」

それぞれが自己紹介をする。

家康
「そう言えば幸村たちはクラス発表を見たのか？」

幸村
「おぅ！　皆、１－Ｃ組でござる！」

蓮華
「あなたたちは？」

愛紗
「私たちは１－Ｂ組です」

思春
「……長曾我部もか？」

元親
「あぁ」

思春
「……そうか」

思春は元親と一緒のクラスではないとわかると少し落ち込む。

佐助
（あぁ～あ、長曾我部の旦那も鈍感だねぇ～）

と思っていた佐助であった。

しばらく雑談していると……

男1
「おい、今そこの近くで喧嘩が始まるみたいだぞ！」

男2
「マジッ！？　ちょっと見に行こーZE☆」

男3
「HA☆NA☆SE！？」

最後の1人は意味がわからないが近くで喧嘩が起こるらしい。

家康
「喧嘩か……面白い！　見に行ってみよう！」

そう言って家康は走っていった。

愛紗
「あ、家康殿！？」

桃香
「愛紗ちゃん、私たちも行ってみよ！」

そう言って桃香も走って行った。

愛紗
「桃香様まで！？」

佐助
「まぁまぁ愛紗ちゃん、こうなったらみんなで見に行こうぜ」

蓮華
「私は構わないわ」

幸村
「某も見に行きたいでござる！！」

元親
「家康が行ったなら俺も行くとするか！」

思春
「……蓮華様が行くのならば」

愛紗
「皆さんまで……わかりました、それでは参りましょう」

こうして一行は喧嘩が起きている場所に向かうのであった。

～学園・校庭～

？？？
「アンタ、腹の減った野良犬のようだぜ」
？？？
「元凶が……貴様を喰らって腹を満たす！」

現在、校庭では2人の男が睨み合っていた。
1人は伊達政宗。
先程バイクで登校し、教室に向かう途中であった。
しかし、それは目の前の男によって阻まれていた。

今、政宗と対峙している男は肌が白く
視線だけで人を殺せるような目つき
そしていつも機嫌が悪そうな態度

男の名前は石田（いしだ）　三成（みつなり）。
三成と政宗は今にも喧嘩を起こそうとしていた。

三成
「貴様が犯した罪……私は断じて許さない！」

政宗
「テメーが何を言ってるかわかんねぇが……いいぜ、来るってんなら相手になるぜ」

政宗は腰に差していた六本の刀の内一本を抜き。

政宗
「さぁ……ｐａｒｔｙの時間だぜ！」

三成を挑発した。

三成
「……斬滅してやる！！」

三成はその挑発に乗って政宗に飛びかかった。

彼らが何故このような事になったかというと……

～回想～

学園の駐車場に政宗と先程の暴走族みたい連中の姿があった。

政宗
「やっと着いたか」

政宗たちはバイクから降り、学園に向かう準備をした。

政宗
「そういやあ、小十郎（こじゅうろう）の姿がなかったな……どうしたんだアイツは？」

小十郎とは政宗の幼い頃から仕えている人物で常に彼の背中を守り続けているいわば兄貴分である。

舎弟１
「へい、どうやら小十郎様はどうしても外せない用事があるらしく、先に学園に行ってるらしいッスよ」

政宗
「Ａｈ～そんな事言ってたっけな～」

政宗たちは雑談しながら学園に向かっていると……

政宗
「ん？」

政宗は足を止め、なにか見ている。

舎弟１
「どうしたんスか？　筆頭？」

そんな様子に舎弟１が声をかけた。

政宗
「……ちょっとお前らは先に言っていろ」

舎弟１
「へ？　わ、わかりました」

そう言って舎弟たちは先に学園に向かった。
一方の政宗は先程見ていた方向へと足を進めた。

政宗が見ていた方向では……

学生
「ねぇねぇ君可愛いね～何してるの？　入学式なんて抜けてどっか遊びにいかない？」

？？？

「あ、あの……今、待ち合わせをしていて……」

学生
「いいじゃん、いいじゃん。そんなの別に～ちょっとでいいから遊ぼうぜ」

？？？
「へ、へぅ～……」

学生が女の子をナンパしていた。
女の子は学生にキッパリと断ることができず困っていた。

そこへ……

政宗
「オイ」

学生
「ん？」

政宗推参！！

政宗
「見た感じだとその子が困っているみたいだな」

学生

「は？　いきなりなんだお前」

政宗
「やめてやったらどーだ？」

学生
「うるせーな！　関係ね～だろ！？」

学生はイライラして来て政宗に強く言った。

政宗
「……オイ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

学生
「ヒッ！？」

それに対し政宗は今度は殺気を出しながら再度学生に言った。

政宗
「もう一度言う……やめてやったらどーだ？」

学生
「す、すいませんでしたーーー！！」

学生は政宗の殺気に耐えられず逃げていった。

政宗
「ったく、めんどくせーな……おい、大丈夫か？」

政宗はダルそうに女の子に声をかけた。

？？？
「へぅ……」

女の子は先程政宗が出した殺気に脅えていた。

政宗
（なんだコイツは？）

と、政宗が思っていると……

？？？
「何をしている貴様ッ！」

政宗
「ん？」

政宗は声のした方を向くとそこには三成が立っていた。

？？？
「みっちゃん！？」

政宗
「知り合いか？　だったらちょうどいい……俺は行くぜ」

政宗は立ち去ろうとしたが……

三成
「待て！！」

三成に止められた。

政宗
「今度はなんだ？」

政宗はかなりダルそうに振り向いた。

三成
「貴様ッ！　月（ゆえ）になにをしていた！？」

政宗
「……Ｈａ～？」

～回想終了～

原因：三成の勘違い。

第八話、到着。対面。独眼竜と凶王（後書き）

そんなにキャラが出なかったな……

次回は戦闘と入学式をやりたいと思います！

それでは、また次回！

第九話、校庭の陣。入学式（前書き）

大谷
「不幸よ、さんざめく降り注げ！」

白蓮
「……なにを言っている……」

官兵衛
「……こっちは最初っからな……」

詠
「……これでもかってくらいね……」

3人
「不幸ダァーーー！！」

大谷
「……」

恋
「……恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語…始まる……長い……」

第九話、校庭の陣。入学式

～あらすじ～

政宗と三成が激突！！

～学園・校庭～

ガキィィィィン！！

政宗
「ＭＡＧＮＵＭッ！！！」

三成
「号哭ッ！！」

ガキィィィィン！！

学生たち
「ギャーーー！？」

政宗と三成が刃を交え、凄い闘いを見せていた。

周りにいた学生たちは2人が刃を交えるたびに飛んでくる衝撃波によって飛ばされていた。

それを見ていた家康達は……

家康
「こ、これは凄いな！」

桃香
「と、飛ばされている～！？」

愛紗
「大丈夫ですか！？　桃香様！」

元親
「クッ！　気を抜いたらコッチが飛ばされるぜ！？」

蓮華
「まさかこんなにすごいとは！？」

思春
「蓮華様！」

幸村
「うおぉぉぉぉ！！　みなぎるぅぅぅぅ！！」

佐助
「なんで真田の旦那は元気なの！？」

各々がこの闘いに驚愕した。

政宗
「ハッ！」

ヒュウン！！

政宗の刀は三成の喉元目掛け攻撃をする。

それに対し三成は臆することなく少し屈み……

三成
「ッ！！」

スパァァン！！

眼にも止まらぬ速さで、同じく政宗の喉元目掛け抜刀をした。

政宗
「！？　チッ！」

ガキィン！！

政宗は辛うじて反応をし、刀でガードした。

政宗
「♪～やるね、アンタッ！！」

政宗はどこか余裕そうに口笛を吹きながら言った。

三成
「黙れ！！そして私に首を斬られろ！」

そんな態度が気に食わないのか三成は不機嫌そうに答えた。

政宗
「Ａｈ～コイツはとんだＭＡＤ　ＤＯＧだなぁ」

政宗は三成の姿をみてそう思った。
そして、刀を三成に指しこう言った。

政宗
「オイ！！　そろそろｆｉｎａｌといこうぜ！」

三成
「……いいだろう、そんなに死にたいなら殺してやるッ！！」

ドドドドドッ！！

政宗と三成は覇気を最大限まで出して大技を繰り出すつもりだ。

だが……

？？？
「両者、そこまで！」

突然の声に政宗と三成は声のした方へ向いた。

三成
「刑部！　何故邪魔をする！？」

三成名前を呼んだ男は

全身に包帯

興に座りそれが浮いている状態

端から見れば病人にも見える男

名を大谷（おおたに）　吉継（よしつぐ）。

三成の親友である。

大谷

「まぁ、待て三成……ぬしは自分の身内がなにかあると熱くなって周りが見えなくなる」

三成

「それがどうしたか！？」

大谷

「落ち着け三成……我は全て見ていた」

大谷

「そこの男が董（とう）　月を助けているとこを」

三成

「！？　それは……本当か？」

大谷

「ならば本人に聞けば良かろう」

そう言って吉継の後ろにいた女の子、董月が出て来た。

董月の外見は

かなり小柄な体型
いつもおどおどしている感じ
端から見れば中学生（小学生?）にも見える女の子

月
「ほ、本当だよ。みっちゃん‥‥」

三成
「なッ!?」

三成はその後に月から説明をした。

三成
「‥‥‥‥‥‥‥‥」

三成はそれを黙って聞いていた。
やがて、説明が終わると三成は政宗の方へと進んだ。

三成
「オイ‥‥‥」

政宗

「……」

三成
「私を斬れ……貴様にはその権利がある」

政宗
「……いや、斬らねぇよ」

三成
「なに？　貴様、私に情けをかけるつもりか？」

政宗
「そんなんじゃねぇ。なんだか邪魔がはいって急に冷めちまったから斬る気がなくなっただけだ」

三成
「……」

政宗
「だから……今は斬らねえ」

そう言って政宗は刀を鞘に戻した。

政宗
「それにテメーとはまだ決着がついてないからな……それからでも遅くはねーだろ？」

三成

「……フン」

三成は政宗の話しを聞いて立ち去った。

政宗
「……それからそこのアンタ」

大谷
「……我か？」

政宗
「最初っから見てたならすぐに止めれば良かったろ？」

大谷
「……なんの事が解らんが次から気をつけよう」

そう言って吉継は三成と一緒に学園にいった。

政宗
（……悪い趣味をしてやがるな）

月
「あの……」

政宗
「ん？」

政宗がそんな事を思っていると月に声をかけられた。

月
「先程はすいません……私のせいでこんな事になってしまって……」

政宗
「Ａｈ～……気にするな、こっちもいい運動になったからな」

月
「でも……」

政宗
「そんな事よりいいのか？　アイツらのこと追いかけなくて」

月
「え？　……あ！　ま、待ってぇ～」

月は三成たちを追いかけた。

それと同時に……

？？？

「政宗様ッ！！」

前から男が政宗に走り寄ってきた。

政宗
「よぅ小十郎、どうした?」

前から走り寄ってきた男

外見は頬に傷があり

かなりの強面

誰が見てもヤクザな男

名を片倉(かたくら)　小十郎。
政宗に仕えている人物である。

小十郎
「はっ、先程の騒ぎで政宗様が関わっているとの情報が入りまして急ぎ、駆けつけました」

政宗
「そうか・・・だがオレはこの通り元気だぜ」

政宗は体に怪我をしてない事を確認する。

小十郎
「もし政宗様の身に何かありましたらこの小十郎、右目を抉る覚悟」

政宗
「……そ、そうか（汗）」

政宗は怪我をしなくて良かったと思った。

政宗
「んじゃあそろそろ行くとするか…小十郎、オレの教室わかるか？」

小十郎
「はっ、政宗様は１－Ａでございます」

政宗
「小十郎は？」

小十郎
「ご一緒でございます」

政宗
「ＯＫ！」

そう言って政宗と小十郎は教室に向かっていった。

それを一部始終見ていた家康たちは……

～家康ｓｉｄｅ～

元親
「ダッハハハ！　全くスゲー喧嘩だったな！」

元親の言う通り先程の喧嘩は凄まじいものだった。

幸村
「おぅ！　某も熱くなってきたでござる！　佐助ッ！！　少し体を動かすのに付き合え！！」

佐助
「ちょっ！？　待って！　俺様死んじゃうから！」

蓮華
「落ち着いて幸村……それにしても先程の喧嘩は……」

思春
「はい、２人共凄まじい覇気でした」

桃香
「うん、同じ人間とは思えないよ～」

愛紗
「三成殿にあそこまで戦えるとは一体何者だ?」

家康
「愛紗、知り合いか?」

愛紗
「いえ、知り合い程ではないのですが・・・あの居合いを使っていた方は石田　三成と申します。彼もこの学園の小学校からいまして今の高校の生徒会長、豊臣（とよとみ）　秀吉（ひでよし）先輩を心底慕っており、腕は先程見た通りかなり腕が立つお方であります」

蓮華
「それなら私も姉様から聞いたことがあるわ・・・・・なんでも“凶王三成”と恐れられているとか」

愛紗
「はい、その通りです」

桃香
「へぇ～蓮華さん、お姉さんいるんだ」

蓮華
「えぇ、妹もいるわ。2人ともこの学園の生徒よ。本当なら私も中学からこの学園の生徒になれたんだけど、私は地元の中学を卒業してからこの学園を受験するつもりでいたからね」

桃香
「へぇ～、へぇ～、へぇ～」

蓮華
「……馬鹿にしてるの？」

思春
「気持ちはわかりますが抑えてください蓮華様」

……石田三成……か

家康
「今度、手合わせしたいものだな！」

ワシは心からそう思っていた。
その後、ワシたちも教室に向かった。

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～１－Ｂ～

家康達は幸村達と別れ、１－Ｂの教室に入った。
家康は既に自分の席についておりこの後のことについて考えている。

家康
（……これからワシは一体どれだけの出会いと遭遇するのだろう

・・・）

家康はこれから来る様々な出会いを待ち望んでいた。

家康
（ワシは必ずその出会いを“絆”に変えてみせる！）

家康は改めて決意した。

ピンポンパンポン♪

“新入生は体育館の方まできてください”

放送が流れて新入生が呼ばれた。

桃香
「家康君、行こう♪」

家康
「あぁ！！」

こうして新入生は体育館に行くのであった。

～体育館～

？？？
「……それでは、これより入学式を始める。一同、礼」

一同は椅子から立ち、礼をした。
今、入学式が始まった。

？？？
「これより進行は教頭である松永（まつなが）　久秀（ひさひで）が行う」

久秀
「まず、校長の言葉」

久秀の言葉に、ゆっくりと信長が立ち上がり教壇の前まで来た。
初めて見る人間は少し恐怖していた。

そして一言……

信長
「是非もなし」

そう言って信長は去っていった。

新入生
（……それだけ？）

新入生の心は一つになった。

久秀
「では、次に生徒会長の言葉」

久秀に呼ばれた生徒会長秀吉は

筋骨隆々な大男

なんでも壊せそうな剛腕

威風堂々とした態度

例えるなら……

ゴリラ。

ではなく、覇王。

そんな秀吉は教壇の前に立ち新入生に堂々とした態度で言った。

秀吉
「諸君！　まずは入学おめでとう！　我ら生徒会は心から歓迎しよう。我ら生徒会は諸君らの“力”が必要だ！！　そして諸君らの“力”によってこの腐敗した学園を新たに作り直そうではないか！」

そう言って秀吉の言葉は終わった。

新入生
「……」

新入生は唖然としていた。

三成
「秀吉様……」

……1人を除いて。

こうして入学式が終了した。

かかった時間：7分
校長の言葉：5文字
新入生の気持ち：Ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ

第九話、校庭の陣。入学式（後書き）

かなり無理やり感はあるが気にしないでください。

さぁみんなで激流に身をまかせ同化しよう！

……出来ませんよね～

次回は教室の風景を書きたいと思います

では、また次回！

第十話・A、それぞれの教室で～家康・政宗編～（前書き）

璃々
「ねぇ～どうしてそんなに怖い顔してるの？」

三成
「貴様の知った事か！」

璃々
「……ふぇ（泣）」

三成
「ウッ…」

璃々
「ふぇ……ふぇ……（泣）」

三成
「な、泣くな！クッ、どうしたら……」

璃々
「ヘックション！」

三成
「くしゃみかよ！？」

紫苑
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりますよ♪」

第十話・A、それぞれの教室で～家康・政宗編～

～あらすじ～

入学式が終わり新入生は教室に戻った。

～1－A～

政宗と小十郎の教室では……

ざわ…ざわ…ざわ…

どこかの希望の船の船内みたいなざわめきが起きていた。
何故、ざわめきが起きているのか。

その原因は……

政宗
「……」

この男である。
実はこの教室は校庭がここから見える距離で、先程の喧嘩を大体の

生徒が見ていた。
それに加え……

小十郎
「……」

小十郎が後ろの席に正座して座っていた。
見た目がかなり強面な上、正座をしていて非常に怖い為誰も近寄らよろうとはしなかった。

政宗
（……いずれぇ）

政宗が心の中で思っていると……

？？？
「アナタかしら？　さっき校庭で暴れていたのは？」

政宗
「アン？」

政宗は急に声をかけられそちらの方に反応する。
そこにいたのは金髪の少女、黒髪の女性、青髪の女性、猫耳フード

を被った少女が立っていた。

金髪の少女は

髑髏の髪飾りを付けたツインテール

小柄だが、かなりの覇気を持ち

我が強そうな少女

政宗

「……誰だ？」

？？？

「貴様ッ！　華琳様の質問に答えんか！」

そう言った黒髪の女性は

黒髪をオールバック

政宗と同じ片眼を蝶々の眼帯で隠し

いかにも頭が弱そうな女性

？？？
「姉者、少し落ち着け」

黒髪の女性を宥める青髪の女性は
片方の髪を前に下ろし片眼が隠れ
先程の女性とは姉妹なのか姉と呼び
冷静沈着な素振りを見せている女性

？？？
「ちょっと！　ジロジロと見ないでよ！」

最後の猫耳フードを被った少女は
常に猫耳フードを被っており
どうやら男嫌いな性格
こちらも小柄な少女

政宗
（……今日はやたらと変な奴らに会うな）

政宗は心の底から思った。

金髪
「それで、どうなの？」

政宗
「確かにオレだが……」

金髪
「そう……名前を聞かせて貰えないかしら？」

政宗
「……まずは、自分から名乗ったらどーだ？」

黒髪
「貴様ッ！！」

黒髪の女性は背中にあった大剣を手に取った。

小十郎
「！」

それを後ろで見ていた小十郎が刀を手に取って政宗を庇う。

金髪

「やめなさいッ！　春蘭！」

黒髪
「ですが、華琳様！」

金髪
「私はやめなさいと言ったのよ？」

黒髪
「わ、わかりました」

そう言って黒髪の女性は下がる。

政宗
「小十郎もＣｏｏｌになりな」

小十郎
「……はっ」

同じく小十郎も下がる。

金髪
「ごめんなさい、確かにそうね……私の名前は曹（そう）　華琳（かりん）よ」

華琳
「アナタたちも名乗りなさい」

猫耳フード
「華琳様ッ！？」

黒髪
「何故、このような者に！？」

華琳
「あら、私の命令が聞けないのかしら？」

黒髪
「ウッ……オイ！　私の名前は夏侯（かこう）　春蘭（しゅんらん）だ！」

青髪
「姉者は可愛いなぁ～……私の名前は夏侯　秋蘭（しゅうらん）です」

猫耳
「……荀（じゅん）　桂花（けいふぁ）よ。だけど気安く呼ばないでよ！」

華琳
「これでいいかしら？」

華琳は自分たちが名乗り終えると政宗に聞いた。

政宗
「まぁ、そっちが名乗ったならこっちも名乗るか……オレは伊達政宗。それでコッチは……」

小十郎
「片倉　小十郎だ」

華琳
「伊達　政宗ねぇ……ちょっといいかしら？」

政宗
「なんた？」

華琳
「アナタ、私に仕えなさい」

政宗
「……Ｈａ？」

政宗はスカウトされた。

政宗
「なんでいきなりわかんねー奴に仕えなきゃ行けないんだよ？」

華琳
「それは、私が欲しいと思ったからよ」

政宗
「……Ｃｒａｚｙな奴だな」

政宗は呆れた様子だった。

そこへ……

小十郎
（政宗様）

政宗
（ん？　どうした、小十郎）

小十郎が小声で政宗に話しかけた。

小十郎
（どうやらこの娘、ただの娘ではないみたいです）

政宗
（……どういう事だ？）

小十郎
（この娘、“曹魏”の社長令嬢みたいです）

政宗
（オイオイ……とてつもねぇＢｉｇ　ｎａｍｅじゃねーか）

“曹魏”
世界進出しているブランドで服やバック、靴に下着までこの名前を借りれば売れるとまで言われているブランド。

その社長令嬢が華琳なのである。

小十郎
（それにこの娘自体、頭脳明晰、スポーツ万能な完璧超人みたいです）

政宗
（なんでもアリだな）

政宗は目の前の華琳を見た。

華琳
「もういいかしら？」

政宗
「あぁ、すまねえな」

華琳
「構わないわ」

そう言うと華琳は再度聞いた。

華琳
「それで・・・私に仕える気になった？」

政宗
「Ａｈ～その事だが・・・悪いが断る」

春蘭
「なッ！？　貴様ッ！」

華琳
「やめなさいッ！！」

春蘭
「しかしッ！？」

華琳
「落ち着きなさい春蘭」

春蘭
「・・・・・わかりました」

そう言って春蘭が下がり、華琳は政宗に質問をした。

華琳
「・・・・・理由を聞いてもいいかしら？」

政宗
「理由か・・・・・強いて言うなら」

政宗は華琳の目を見た。

政宗
「アンタじゃこのオレを扱えねえ」

華琳
「……」

政宗が華琳にそう言い放ってしばらく静寂な時間が訪れていた。

すると……

華琳
「……ふふ」

政宗
「？」

政宗は華琳が急に笑い声を出してきて首を傾げた。

華琳
「初めてよ、私にこんなにもハッキリと断ったのは……いいわ、今は諦めましょう」

政宗

「……“今は”？」

華琳
「ええ……私、欲しいと思ったものは必ず手に入れたいの。だから私はアナタを必ず手に入れるわ
」

華琳は政宗にそう言い切った。

政宗
「おもしれぇ、やってみな……この“竜”が欲しいのならな」

華琳
「ふふッ、そう言うとますます欲しくなるわ」

政宗と華琳が話していると……

？？？
「みなさん、せきについてください」

突然、教室の扉が開き先生らしき人が2人現れた。
みんなは先生らしき人に言われ席に座った。

？？？

「はじめまして、わたくしこのえーぐみのたんにんのうえすぎ（上杉）　けんしん（謙信）です……そしてこちらが」

？？？

「どうも！　皆の衆、我輩は諸君らの副担任、最上（もがみ）　義光（よしあき）！　強くて！　賢い！　副担である！」

謙信の容姿は

細身で美しい立ち振る舞い

男性か女性かわからない強いて言うなれば麗人

常に落ち着いた物腰でいる人物

一方の義光の容姿は

顔には立派なカイゼル髭を生やし

どことなく西洋の紳士を思わせる風貌

そしてかなりうざそうなな人物である

謙信

「それでは、みなさん……まずはじこしょうかいをしましょう」

最上

「それじゃあまずは君！　名乗ってくれたまへ！」

最上は小指で生徒を指した。

学生

「俺は無敵の主人公ッ！！」

こうして政宗と華琳の時間は過ぎていった。

一方、家康たちの教室では……

～1－B～

家康

「さっきの入学式は変わっていたな！」

家康は先程行われた入学式のことについて語っていた。

桃香

「私びっくりしたよ～！」

愛紗

「はい、私も話は聞いていましたがまさかここまでとは」

元親
「でもまぁつまんねー入学式よりいいんじゃあねーの？」

家康
「ああ！」

しばらく雑談していると……

？？？
「みなさん、席についてください」

教室の扉が開き、先生らしき人が2人入ってきた。
みんなは席に座った。

？？？
「はじめまして、わたくしがここの担任になりました黄紫苑（こうしおん）です」

？？？
「わしは厳桔梗（げんききょう）だ。よろしく頼む」

紫苑の容姿は

髪が薄紫色の長髪

穏やかで母性あふれる人物

桔梗は
腰には壺をぶら下げ
いかにも豪快そうな人物

そしてなにより2人の特徴は……

バイーーン！

はちきれんばかりの胸である。
その胸を見た大概の男子は前屈みになっている。

元親曰く
“あれには夢と宝が埋まっている”

紫苑
「それじゃあ、みんなには自己紹介をして貰おうかしら。えっと、まずは……」

桔梗
「紫苑、わしに任してくれ」

紫苑
「え？」

桔梗は前に出てこう言い放った。

桔梗
「この中で我こそは1番に名乗りたいと言う奴はおるか！」

紫苑
「ち、ちょっと桔梗！？」

紫苑は困りながらも桔梗を止めに入った。

紫苑
「桔梗、みんな困ってるから普通に端からやるわよ」

桔梗
「何を言う紫苑、こんなのもできない奴が戦で生き残れるものか！」

紫苑
「ここは学校ですから戦はありません」

紫苑は桔梗ツッコミを入れた。
クラスは急に言われたことによって唖然としていた。

だが……

家康
「ワシが行こう！」

家康が立ち上がり教卓の前まで行った。

桔梗
「よう言うた！　それでこそ男……いや、漢と言うものだ！」

紫苑
「もう、桔梗ったら……ごめんなさい、任せても大丈夫かしら？」

家康
「ああ、任された！」

家康は前を向き、クラス全員の顔を見た。
全員を見た後、家康は目を瞑り何かを考えはじめた。

桃香
（家康君……大丈夫かな？）

桃香は家康を心配していた。

そして家康は目を開け笑顔で自己紹介をした。

家康
「某、徳川家康！　ワシはみんなに頼みたいことがある。それは・・・このクラス全員と“絆”を作りたい！　ワシはここでの出会いをそのままにしたくない。出来るなら、この出会いを新たな“強い絆”にしたい。そして願わくば・・・みんなと共に悔いのない1年を過ごしたい！」

そして家康は最後に拳を掲げた。

家康
「揺るがぬ“絆”を！」

全員
「・・・・・・・・・・」

クラスが静寂に包まれた。

そんな中、家康は・・・・・

家康
「ワシからは以上です。先生」

桔梗

「アッハッハッハ！　よう言うた家康！」

バンバンッ！

桔梗は家康の背中を叩いた。

紫苑
「うふふっ……それじゃあ家康君、席に戻っていいわよ」

紫苑は先程の自己紹介で満足した顔で言った。

クラスの反応は……

桃香
（朝、家康君が言いたかったことってこの事だったんだ…格好良かったなぁ／／／）

愛紗
（家康殿……／／／）

元親
「ダァッハハハ！　ったく、家康らしいぜ！　……よし。次は俺が行くか！」

？？？
「フッ……面白い御仁だ」
？？？
「……フン」
？？？
「……」

こうして家康たちのクラスは自己紹介をしていった。

第十話・A、それぞれの教室で～家康・政宗編～（後書き）

明らかにスピードが落ちている

北斗七星の横に赤い星が見えたな～

……まだだ、まだ終わらんよ！

次回は幸村・三成編です！楽しみにしてください！

それでは、また次回！！

第十話・B、それぞれの教室で～幸村・三成編～（前書き）

～おまけ～

三成
「オイ……」

月
「なに、みっちゃん」

三成
「その“みっちゃん”と言うのをやめろ！（怒）」

三成は月に怒鳴った。

月
「へぅ……駄目？」

ウルウル（涙目）

三成
「ウッ……好きにしろ」

大谷

「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……不幸を！」

第十話・B、それぞれの教室で～幸村・三成編～

～あらすじ～

政宗と家康たちは教室で自己紹介をしている中、幸村と三成は……

～1－C～

そこでは幸村たちが雑談していた。

佐助
「それにしても、この学園は変な奴が多いよねぇ～」

蓮華
「確かに、かなり変わっているわね」

幸村
「うむ！　某も精進しなればなるまい！」

思春
「まず貴様はその空気いすをやめろ」

幸村絶賛鍛錬中！！

そんなことしていると……

ガララッ！

？？？

「やっほ～♪　蓮華いる～？」

突然、扉が開き3人の学生が入ってきた。

蓮華

「姉様！？　どうしてここに！？」

蓮華が姉様と呼んだ女性の名は孫　雪蓮（しぇれん）と言う

容姿は髪は蓮華と同じ桃色で腰まで長く

性格は陽気で気さくな人柄

だが、どことなく威厳を持ち合わせている人物である

雪蓮

「そりゃあ、わたしの可愛い妹が入学したんだもん。姉としては嬉しいことじゃない♪」

？？？
「……本音は？」

雪蓮
「面白い事がわたしを呼んでいた！」

？？？
「だと思ったわ」

雪蓮に話しかけた女性は
黒髪で雪蓮と同じ位長髪
眼鏡をかけ、知的な印象を与える人物
ちなみに、この女性と雪蓮はかなりの巨乳である。

？？？
「この子かい？雪蓮ちゃんが言ってた可愛い妹さんは？」

雪蓮に聞いてきた男性は
肩に小猿を乗せ
自由が似合う風貌

イメージは、祭りと喧嘩が好きな傾奇者

雪蓮
「ええ・・・蓮華、紹介するわこの人たちはわたしの親友の」

？？？
「周　冥琳だ、よろしく頼む」

？？？
「俺は前田　慶次って言うんだ！　コイツは夢吉！　よろしくな！」

冥琳と慶次は自己紹介した。

蓮華
「私の名前は蓮華です・・・・・いつも、姉様が迷惑をかけてすいません」

冥琳
「いやなに、気にするな」

雪蓮
「ブーブー、それじゃあわたしがいつも迷惑かけてるみたいじゃない」

冥琳
「違うのか？」

雪蓮
「うわ～～～～ん！　慶次～～みんなわたしをいじめるよ～～（泣）
」

雪蓮は慶次に抱きついた。

慶次
「おーよしよし……ところでアンタらは妹さんの友達かい？」

慶次は蓮華の幸村たちを指差した。

幸村
「おう！　某、真田幸村と申す！」

思春
「私は甘　思春です…お久しぶりです、雪蓮様」

佐助
「アナタが蓮華ちゃんの姉さんかい？　俺様は猿飛佐助です」

幸村たちは名乗った後、雪蓮は思春に近づいた。

雪蓮
「久しぶりね思春、蓮華の事いろいろとありがとね」

思春
「いえ、雪蓮様も元気でなりよりです」

雪蓮
「ふふっありがと……それと」

雪蓮は幸村を見た。

雪蓮
「アナタが幸村かしら？」

幸村
「そうでござるが……」

雪蓮
「蓮華からいろいろ聞いているわよ♪」

蓮華
「ね、姉様！？／／／」

蓮華は慌てた。

雪蓮
「大丈夫よ蓮華、それに関してはなにも言わないから」

蓮華
「ホッ……それじゃあ何を？」

雪蓮
「決まっているじゃない♪　……幸村」

幸村
「なんでござるか？」

雪蓮
「蓮華はもう抱いた？」

ズサァァァァァ！！

周りにいた幸村以外の人は壮大に転けた。

蓮華
「姉様！／／／　な何を言っているの！？／／／」

蓮華は顔を真っ赤にしながら雪蓮にツッコミをいれた。

雪蓮
「あら、これは重要なことよ……答えによっては赤飯を炊かないといけないし」

蓮華
「もう黙ってください！／／／」

冥琳
「やれやれ……」

慶次
「アハハハ、相変わらず面白いねぇ雪蓮ちゃんは！」

思春
「なにも変わっておりませんね雪蓮様は……」

佐助
「な、なんて破天荒な人なんだ……」

各々が雪蓮に対して思っていると幸村は……

幸村
「雪蓮殿……抱くとはどういうことでござるか？」

と、質問をした。

雪蓮
「あら、その調子だとまだのようね」

雪蓮

「抱くとはつまりS○Xよ」

佐助
「オイィィィィィ！　何いっちゃってるのこの人ぉぉぉぉ！？」

佐助はツッコミを入れた。

冥琳
「ハァ……雪蓮、そろそろ時間よ」

雪蓮
「もうそんな時間？　わかったわ、行きましょう。それじゃあ、頑張ってね蓮華♪」

そう言って雪蓮たちは教室を出て行った。

佐助
「なんか嵐のような人だったな」

蓮華
「全くよ……ハァ～疲れたわ」

思春
「お疲れ様さまです、蓮華様」

雪蓮たちが去った後、蓮華たちは疲れた様子。

そこへ……

幸村
「佐助」

佐助
「ん、なんだい、旦那？」

佐助は幸村に呼ばれ振り向いた。

幸村
「S○Xとは何だ？」

佐助
「……旦那はまだ知らなくていいの」

？？？
「皆の者！席につけい！！」

佐助が答えると同時に先生らしき人たちが入ってきた。
生徒は席についた。

???
「儂の名前は武田（たけだ）　信玄（しんげん）！これからこの教室の担任だ、よろしく頼む！」
???
「おっほっほ、まろは今川（いまがわ）　義元（よしもと）でおじゃる！」

信玄の容姿は

頭は角が生えた赤いカツラみたいな兜を被り

迫力のある声

かなり体格がいい人物。

一方の義元は

顔が白く赤い口紅を塗ったバカである。

今川
「ヒドいでおじゃる！」

今川は作者にツッコんだ。

信玄

「それでは、まず自己紹介から……」

幸村のクラスは自己紹介を始めた。

三成の教室は……

～1－D～

三成

「……（イライラ）」

三成は黙って席についていたが何故かイライラしていた。

その理由は……

???

「なぁなぁ、アンタさっき校庭で暴れとったよな!?」

この女性のせいである。

女性の容姿は

女性なのに上着を羽織ってちゃんと着ていない

侠気に満ちて裏表がないような性格

そして、関西弁をあやつる女性である

三成は先程からこの女性に絡まれていた。
そのため、三成はイライラしていた。

???
「なぁ～、ウチの質問に答えてーな」

関西弁の女性は三成が黙っているがお構いなしに三成に絡む。

そして三成は我慢の限界に達し……

三成
「オイッ貴様！」

???
「ん？　なんや？」

三成
「先程からウルサいぞ！　少し黙ってろ！」

???

「え～～なんでや？　ウチは質問してるだけや」

三成
「それがウルサいと言っている！」

三成はイライラしていたため声を荒げて女性に言った。
そこへ、大谷と月が現れた。

大谷
「まぁ落ち着け三成」

月
「お、落ち着こう」

大谷と月は三成を宥める。

三成
「刑部、月！　邪魔をするな！」

月
「へぅ」

大谷
「やれやれ……ここは我に任せよ」

三成

「刑部……よかろう」

三成は大谷に任せた。

大谷
「あい、わかった……そこの女性少しいいか？」

？？？
「なんや？」

大谷
「まずは名前を名乗ったらどうだ？」

？？？
「おぉ、そうやったな…ウチの名は張（ちょう）　霞（しあ）や！」

大谷
「あい、わかった」

大谷は頷きながら次の質問をした。

大谷
「ぬしは三成のなにが知りたい？」

霞
「ウチはな、さっき暴れとったヤツが気になってな探しとったんや

！」

大谷
「……それで、会ったらどうするつもりだ？」

霞
「決まっとる！　ウチと勝負や！」

霞は自分の獲物を手に取りそう答えた。

大谷
「……何故だ？」

霞
「ウチは強いヤツと戦って、自分が一番強いっちゅーのを証明したいだけや！」

霞は大きな声で義継に言った。
そんな大谷は不気味な笑い声を発した。

大谷
「ヒッヒッヒ！　……ようわかった。では、取引をせぬか？」

霞
「取引？」

大谷
「ああ」

大谷は取引の内容を言った。

大谷
「我ら共に行動しろ。三成は非常に強い……だが、三成と一緒にいればもしかしたら三成と同等、それ以上の人物に出会うかもしれないぞ」

霞
「……」

義継は自分たちといたら強敵に出会うと霞に説明した。

その説明を聞いた霞は……

霞
「……確かに、そっちの方がウチが一番強いっちゅーこと証明できる。よし！　その話、乗ったるわ」

大谷
「あい、わかった」

そして霞は三成の前まで行き、手を差しだし握手を求めた。

霞
「ちゅーわけでこれからよろしゅーな！」

三成
「……好きにしろ」

そう言って三成が席に戻ろうとしたが……

月
「みっちゃん、握手しようよ……」

月がちゃんと握手するように言った。

その言葉に……

霞
「……（ニヤリ）」

霞は不適な笑いを見せた。

霞

「まぁまぁ、気にしなくてえぇーで」

月
「だ、だけど……」

霞
「かまへん、かまへんウチはいいから……なぁ～“みっちゃん”」

三成
「!?　貴様ッ!」

三成は霞に飛びかかろうとしたが……

月
「だ、駄目だよ!」

月が前に立った。

三成
「退け!　月ッ!」

月
「暴力は駄目だよみっちゃん!」

そんなやり取りをしていると……

霞
「だってウチ、名前知らんも～ん」

と、霞は言った。

三成
「クッ……フン！」

三成は席に戻っていった。

月
「みっちゃん！　……あの、すいませんでした」

霞
「かまへんよ、オモロいもん見れたし……アンタ、名前は？」

月
「あっ私の名前は董月です」

霞
「月っちか！　よろしゅーな」

すると、後ろの方から……

？？？
「何してるの、月？」
？？？
「……ん」

2人の女性が月に話しかけてきた。

月
「あ、詠（えい）ちゃんに恋（れん）ちゃん！」

詠の名は賈（か）　詠

容姿は月と同じくらいの身長で緑色の髪
眼鏡をかけており

少し強気な性格の持ち主

月たちとは幼なじみである。

恋の名は呂（りょ）　恋

容姿は三成よりちょっと背が小さく

赤い髪をして触覚みたく髪が2本立っている

無口、無表情で何を考えているかわからない人物

同じく月たちとは幼なじみである。

霞

「月っち、知り合いか？」

月

「あ、はい2人は幼なじみの詠ちゃんと恋ちゃんです」

霞

「ふ～ん、そっか・・・ウチの名前は張　霞や！　よろしゅーな！」

詠

「よろしく・・・それでどうしたの？」

月

「うん、実は・・・・・・」

月説明中・・・・・・

説明を聞いていた詠と恋は・・・・・

詠

「あの馬鹿……」

恋
「……ＺＺＺ」

詠
「起きなさい恋！」

恋
「……ん」

恋は起きた。

詠
「全く……何を考えているのかしら？」

月
「みっちゃんは大丈夫だよ」

詠
「いや、そういう問題じゃなくて……」

？？？
「全員、席につけ！」

話していると、先生らしき人たちが来たので生徒は席についた。

？？？
「今日からお前らの担任になった華雄（かゆう）だ！　そしてこちらが」
？？？
「おいどんは副担任の島津（しまづ）　義弘（よしひろ）！　おまはんら、よろしか！」

華雄の容姿は
銀髪でスタイルが良く
自分に誇りを持っているような女性。

島津の容姿は
白い髭を生やし
見た目の歳とは似合わない筋肉質な体
少し九州の方言が強い男性。

こうして三成のクラスの時間が過ぎていった。

華雄
「それではまず私と勝負だ！」

島津
「落ち着きんしゃい、華雄どん」

第十話・B、それぞれの教室で～幸村・三成編～（後書き）

いやぁ～方言が面倒くさいなぁ。

関西弁がわからない。

だが、諦めん！

あと、何人か名前表示を変更します。

質問、評価、感想の方をよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十一話、出会いの余興（前書き）

～あらすじ～

自己紹介が終わった……
彼らの物語はこれからだッ！！！

“完”

愛紗
「終わるなぁぁぁぁぁぁ！！！（怒）」

※まだ終わりません

元親
「野郎ども！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まるぜぃ！」

第十一話、出会いの余興

～あらすじ～

クラスの自己紹介が終わった昼休み……

～1－B～

家康
「クラス会？」

桃香
「うん♪　放課後、みんなで親睦を深めようと思って……」

桃香はクラス会の提案をした。

家康
「クラス会か……面白そうだな！　ワシは賛成だ。愛紗と元親は？」

愛紗
「私は構いません」

元親

「俺も賛成だ！」

愛紗と元親はクラス会に賛成した。

家康
「よし・・・そうと決まれば、クラスの皆に声をかけなくては！」

桃香
「そうだね！」

家康たちはクラスみんなに声をかけた。

？？？
「クラス会を？」

家康
「ああ！」

家康は青髪の女性に声をかけた。

青髪の女性の容姿は

髪はショートカット

制服の胸元のボタンを少し開け
ニヒルな笑い方が似合う女性である。

???
「ホゥ……それは確かにそそられる話だな」

家康
「そうだろ！　来てくれるか？」

???
「よかろう、私も参加するとしよう」

家康
「ホントかっ！？」

???
「ああ」

家康
「いやー、良かったッ！　ありがとう趙殿！」

彼女の名は趙　星と言う

星
「フッ……私の事は星で構わん」

家康
「そうか！　では、改めてよろしく頼む。星！」

星、参加！

？？？
「クラス会～？」

愛紗
「ああ、どうだろうか？」

愛紗が声をかけた女性

女性の容姿は

髪が茶髪でポニーテール

眉毛が少し太い

親しみやすい人物。

？？？
「面白そうだな！アタシはいいぜ！」

愛紗

「感謝します、馬殿（ばでん）」

彼女の名は馬　翠（すい）

翠

「アタシは翠でいいよ。“馬”って呼ばれるの慣れてなくて……」

愛紗

「わかりました」

翠、参加！

？？？

「興味ない」

桃香

「えぇ～！？　何で！？」

桃香が話しかけた女性

容姿は

髪が黒く、前髪の一部だけ白い

少し男勝りな性格

あまり人と関わりたくない人物。

桃香
「一緒に楽しもうよ！　焔耶(えんや)ちゃん！」

彼女の名は魏(ぎ)　焔耶

焔耶
「馴れ馴れしく名前を呼ぶな！」

焔耶は怒鳴りながら桃香に言った。

桃香
「ご、ごめんなさい・・・」

家康
「おい、どうした？」

怒鳴り声が聞こえた家康は桃香に駆け寄った。

桃香

「あ、家康君…何でもないよ」

焔耶
「……」

家康
「だったら怒鳴りはしないだろう？　魏殿、なにか桃香がしたのか？」

家康は焔耶に聞いた。

焔耶
「……なんでもない」

家康
「……そうか、わかった。では魏殿、放課後にクラス会をやろうと思っているのだがどうだ？　来てくれるか？」

焔耶
「さっきも言ったが興味がない」

家康
「……わかった、でも興味を持ってくれたらいつでも来てくれ」

焔耶
「……フン」

焔耶は教室を出ていった。

桃香
「……来てくれるかな?」

家康
「わからん……でも、ワシは信じてる!」

焔耶、不参加?

???
「……」

元親
「……」

元親は誘ったが男性は一切言葉を発しない。

男性の容姿は

背丈は家康と同じ位

赤髪でなにか黒い被り物をして顔がハッキリわからない

そして、無口な男性。

元親
（そういやコイツ自己紹介の時も喋んなかったよな……）

男性は自己紹介の時一切喋らなかったらしい。

元親
「……んで、お前さん、来てくれるのかい？」

？？？
「……」

それでも男性は言葉を発しない。

元親
（……どうすっかな～）

元親が悩んでいると……

トントン

元親
「ん？」

元親は肩を叩かれて振り向く。

？？？

「……」

男性は相変わらず無口だが、手には紙があり元親に差し出している。

元親

「俺にか？」

？？？

「……（コクン）」

男性は頷いた。

元親

「……んじゃあ読ませて貰うぜ」

元親は男性から貰った紙を捲り内容を読む。

紙の内容は……

《承知》

と、書かれていた。

元親
「……来てくれるってことか？」

？？？
「……（コクン）」

元親
「ダッハハハ！　何だよ、来るならちゃんと言えばいいじゃねぇかよ！」

？？？
「……」

元親
「お前さん、喋らんねぇのか？」

？？？
「……（コクン）」

元親
「それだと何かと不便だろ？　ちょっと待ってろ」

元親は一度席に戻った。
しばらくして元親は男性のところに戻ってきた。

元親
「ほれ、これを使いな」

そう言って渡したのはプラカード。

？？？
「……」

男性はプラカードを手に入れた！

元親
「それだったら多少なりのコミュニケーションができるだろ？」

男性は元親を見て元親の優しさに触れた。

そして……

？？？
『感謝する』

男性はプラカードを使い元親に感謝の言葉を表した。

元親
「ダッハハハ！　気にすんな、ところでアンタ名前は？」

元親は名前を知っていたがあえて聞いた。

？？？
『風魔（ふうま）　小太郎（こたろう）』

元親
「そうかい！　それじゃあよろしくな、風魔！」

風魔
『よろしく』

風魔、参加！

家康たちは様々な人物を招待した。

～１－Ａ～

政宗
「……今、何つった？」

華琳
「あら、聞こえなかったかしら？」

政宗と華琳が何か話していた。

華琳
「私が主催するクラス会に参加しなさいと言ったのよ」

華琳たちもクラス会の話をしていた。

政宗
「なんでテメー基準なんだよ？」

華琳
「それは私だからよ」

政宗
「ホントにＣｒａｚｙな奴だな」

政宗は本当に呆れていた。

政宗
「まぁいいぜ、その話は乗ってやる」

華琳
「ありがとう、ついでに私に仕えなさい」

政宗
「ＮＯ」

政宗は参加をすることにした。

政宗
「それで、どこでやるんだ？」

華琳
「そうね・・・“天下統一”でいいかしら？」

“天下統一”

そこは恋ＢＡＲＡ学園の近くにあるアミューズメントパークである。
ゲームセンター・ボーリング・カラオケ・ダーツ・ビリヤード・更
には飲食店などがある学生には夢のような場所。

政宗
「Ａｈ～あそこか・・・・・ＯＫ！　オレは問題ねーぜ」

華琳
「決まりね」

政宗
「他の奴には聞かねーのか？」

華琳
「あら、さっきも言ったじゃない……“私主催”ってね。それじゃあ」

華琳は去っていった。

政宗
「……Ｈａ～」

政宗はため息をついて机に突っ伏した。

その頃家康たちは……

～１－Ｂ～

家康
「よし、大方話しかけたな！」

桃香
「だねぇ～♪」

愛紗
「そうですね・・・そういえば場所はどうなさいますか？」

元親
「まだ決めてなかったな」

家康たちはクラス会の話をみんなにし、場所決めの話をしていた。

桃香
「やっぱり“天下統一”じゃない？」

愛紗
「やはりあそこしかありませんか」

家康
「天下統一？」

元親
「なんか心にグッとくる言葉だな」

家康たちは天下統一を知らないみたいだ。

愛紗

「“天下統一”とはこの学園の近くにあるアミューズメントパークです」

桃香
「なんでもあるんだよ～♪」

桃香と愛紗は家康たち天下統一を説明した。

家康
「なるほど、行ってみたいな！」

元親
「ああ！」

家康と元親は説明を聞きそこに行ってみたいと言った。

愛紗
「では、決まりですね」

桃香
「楽しみだね！」

家康たち待ちきれない気持ちでいっぱいだった。

これが、新たな出会いを呼ぶとも知らずに……

第十一話、出会いの余興（後書き）

さて、ネタがない……

もう…ゴールしていいのかな？

次回は家康と政宗が出会います！　お楽しみに！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十二話、出陣。真実（前書き）

～おまけ～

慶次
「頼む！宿題を見せてくれ！冥琳！！」

雪蓮
「私も！」

冥琳
「……一応聞く、何故やらなかった？」

2人
「「だってやったら負けじゃん！！」」

冥琳
「お前たちには貸さん（怒）」

祭
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぞぃ」

第十二話、出陣。真実

～あらすじ～

クラス会をやることになった家康と政宗は“天下統一”を目指す・・・・

～放課後～

政宗
「・・・・・・なあ、小十郎」

小十郎
「何ですか？　政宗様」

政宗
「オレはクラス会って聞いた筈なんだが・・・・」

小十郎
「この小十郎もそう聞いております」

政宗
「・・・・・じゃあ、何で女しかいねーんだ？」

政宗と小十郎はクラス会をやる聞いて集合場所に行ったのだがそこ

には華琳とその周りにいた人たちと知らない女性しかいなかった。

華琳
「来たわね。それじゃあ行くわよ」

政宗
「ちょっと待て」

華琳
「あら、何かしら？」

政宗
「……他の奴らは？」

華琳
「これで全員よ」

政宗
「……Ｗｈｙ？」

華琳
「だから、これで全員よ」

政宗は周りを見てから華琳に質問をした。

政宗
「何でこんなに少ねーんだ？　それに男は？」

華琳
「私は自分が興味を持った人以外には興味がないの。あと、男は嫌い」

桂花
「さすが華琳さま！　そこにシビれる、憧れるぅぅぅ！！」

政宗
「……ｊｏｋｅだろ？」

華琳
「本気と書いてマジよ」

政宗
「……」

政宗は頭を抱えながらクルッと回り……

政宗
「帰るぞ、小十郎」

小十郎
「はっ」

帰宅しようとした。

だが……

ガシッ！！

秋蘭
「おっと待っていただこうか。政宗に小十郎」

春蘭
「おとなしく従え！！」

夏侯姉妹に阻まれた。

華琳
「あら、それじゃあ政宗も友達を呼べば良かったじゃない……違うかしら？」

政宗
「……」

政宗は的確な理由を言われ黙り込んでしまった。

？？？

「まぁまぁお兄さん、ここは従った方がいいと思いますよ～」

政宗に声をかけた少女は

頭に人形を乗せ

半開きな目で常に眠そうな顔

何故かキャンディーを手に持っている少女。

政宗
「……アンタは？」

？？？
「……」

政宗
「？」

？？？
「ぐぅ～」

政宗
「寝るな！」

？？？
「おぉ！　そういえば言ってませんでしたね～」

？？？
「風の名前は程（てい）　風（ふう）と言います～」

風
「そしてこちらが」

人形
「オッス！　オイラは宝慧（ほうけい）！　よろしくな！」

風と宝慧は政宗に挨拶をした。

政宗
（なんで今日は変な奴に会うんだ？　厄日か？）

政宗が思っていると……

？？？
「なぁなぁ」

政宗
「アン？」

政宗は声をした方を向くと４人の女性がいた。

？？？

「ウチらも名乗ってえーか？」

政宗
「ああ、いいぜ」

？？？
「ありがと～なの♪　私は于（う）　沙和（さわ）っていうの～よろしくなの～♪」

沙和の容姿は

メガネをかけ、鼻の上に少しそばかすがあり

いろいろと小物を身に付け

ファッションが好きな女性。

？？？
「私は郭（かく）　稟（りん）と申します」

稟の容姿は

沙和と同じくメガネをかけ

少し冷静でキツい性格

天の邪鬼的な女性。

???
「私は楽（がく）　凪（なぎ）です」

凪の容姿は

髪が銀色で一つに纏めており

顔に何カ所かに傷があり

無骨で女の子らしいことに興味がないような女性。

???
「ほんで、ウチが李（り）　真桜（まおう）や！」

真桜の容姿は

かなりの巨乳で

お喋りで賑やかな性格

そして関西弁を話す女性。

政宗
（これまた変わった奴らがいたもんだな）

華琳
「それで来てくれるかしら？」

華琳は政宗に聞いた。

政宗
「……ＯＫ、行ってやるよ。小十郎、行くぞ」

小十郎
「はっ」

政宗と小十郎は行く決意を決めた。

華琳
「ふふッそれじゃあ行くわよ」

一同
「ハッ！！」

政宗たちは“天下統一”に向かった。

～校門～

家康
「みんな来たか？」

家康たちは校門を集合場所にしてみんなが来ているか確認した。

桃香
「それが……焔耶ちゃんがまだ来てないの」

ちなみに焔耶以外のみんなは来ていた。

愛紗
「やはり駄目でしたか……」

翠
「じゃあどうすんだ？　アイツ抜きでやるのか？」

風魔
『それは可哀相だな』

星
「確かにな……では、どうする？」

様々な声が上がる中家康は自分の考えを言った。

家康
「聞いてくれ！　みんなは先に行っててくれ！」

桃香
「家康君は？」

家康
「ワシは少し魏殿を探してくる！　必ず戻ってくるぞ！」

そう言って家康は学園に戻っていった。

桃香
「あ、家康君ッ！？」

桃香は家康を追いかけようとしたが……

ガシッ！

桃香
「え？」

誰かに止められた。

止めた人物は……

元親
「行っちゃいけねぇよ……桃香の嬢ちゃん」

元親だった。

愛紗
「何故ですか、元親殿？」

元親
「簡単さ……アイツが俺の“友”だからよ」

桃香
「だったら！」

元親
「だからさ。俺は友を信じる……だったら家康が言った事を信じて先に行こうぜ」

桃香
「……」

桃香はまだ納得していないようだった。

愛紗

「桃香様」

桃香
「愛紗ちゃん？」

そこへ愛紗が話しかけてきた。

愛紗
「私も家康殿を信じています……ですから、桃香様も家康殿を信じましょう」

桃香
「愛紗ちゃん……うん、わかった！」

桃香は納得した。

元親
「そんじゃあ、野郎ども！出発の準備だぁ！」

一同（男限定）
「アニキィィィィィィ！！」

風魔
『承知』

翠

「アタシは野郎じゃないんだけどなぁ……」

星

「フッ……まぁ良いではないか」

元親が声をかけるとみんなは“天下統一”へ目指した。

その頃焔耶は……

～屋上～

焔耶

「……」

焔耶は屋上のベンチに座っていた。

焔耶

（私は何してんだ……何か期待しているのか？　いや、期待なんてするな！　また裏切られるだけだ！）

焔耶が悩んでいると……

ガチャッ

屋上の扉が開き誰かが入ってきた。

家康
「おぉ！こんなところにいたのか！」

家康だった。

焔耶
「……何しにきた？」

家康
「何って……お前さんを探していた！」

焔耶
「私を？」

家康
「ああ！」

焔耶
「……何のために？」

家康
「クラス会に誘うためだ！」

焔耶
「……くだらない」

そう言って焔耶は屋上から出ようとした。

家康
「果たしてそれは本当かな？」

焔耶
「何？　それはどういう意味だ？」

焔耶は足を止めた。

家康
「では聞こう……お前さんは何故すぐに帰らなかった？」

焔耶
「そんなの貴様には関係ない」

家康
「いや、違うな。お前さんは何か期待をしていた……しかし、それと同時にその何かに怯えている。それは、その何かを失ってしまう恐怖からくる怯え……そんな目をしている」

焔耶
「！？」

焔耶は目を見開いた。

家康
「違うか？」

焔耶
「そんなの貴様が知ったことか！」

焔耶は家康に怒鳴りつけた。
それでも家康は引かなかった。

家康
「魏殿……本当の事を話してくれ。一体何があったのだ？」

焔耶
「……」

焔耶が黙り込んで静寂な時間が訪れた。

しばらくすると……

焔耶
「貴様には何がわかる……」

焔耶が口を開き過去を話した。

焔耶
「中学生の頃、私にも友達がいた。毎日一緒に帰り、毎日のように遊ぶような友達がな。そんなある日、友達がいじめを受けていると噂が流れた……私は友達に真意を確かめに行った。本当だった……私は許せなくなっていじめをしていた奴らのところに行った。私はいじめをしていた奴らを片っ端から片付けていった……そしたら次の日先生に呼ばれ私は謹慎をくらった。でも、私は後悔はしていなかった……友達が無事でいてくれたら何でも良かったんだ。」

家康
「……」

焔耶
「謹慎をくらってるある日、私は外で散歩していると友達といじめをしていた奴らを見かけた……私はまたいじめをされていると思って急いで駆けつけた。だけど違った……見てみると、友達といじめをしていた奴らが学生からカツアゲをしていた。理解出来なかった私は友達に聞いた、そしたら友達は“アンタが少しウザくなってきたから”と答えたんだ。頭が真っ白になった……私は友達に騙されていたと初めて知ったんだ。その後、そいつ等を片付けたけど私の気持ちは晴れることはなかったよ」

家康
「……」

家康は焔耶の話を黙って聞いていた。

焔耶
「これでわかっただろ？　だから私に構わ……」

焔耶が言い終わる前に……

ギュッ

焔耶
「！？／／／」

家康は焔耶を抱きしめた。
いきなり抱きしめられた焔耶は慌てた。

焔耶
「お、おい！？／／／　何を……」

家康
「寂しかっただろ」

焔耶
「！」

家康
「お主はたった一人で闘ってきた。しかし、その心は寒かったであろう。だから……今は泣け。思いっきり泣くがよい」

焔耶
「…私は…別……に……」

家康
「自分に帰れッ！　焔耶!!」

焔耶
「!?　……う……う……うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」

焔耶は家康に抱きつきながら思いっきり泣いた。

家康
「それで良い。ワシは“絆”を裏切らん……信じてくれ」

家康は泣いている焔耶にそう言って強く抱きしめた。

第十二話、出陣。真実（後書き）

最近……世紀末が足りない。

こういうの苦手です、はい。

次回はふざけます、はい。

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

次回は更新遅れます、すいません。

第十三話、お館。竜と鬼。対決！？（前書き）

？？？
「天知る、神知る、我知る、子知る！」
？？？
「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」
？？？
「朱華蝶！」
？？？
「……？」
朱華蝶
「と、恋華蝶！」
？？？
「星華蝶！」
朱華蝶
「かよわき華を護るため！」
星華蝶
「華蝶の連者、三人揃って」
恋華蝶
「……ただいま」

三人
「参上！」
「参上！」
「……さんじょう」

新番組、恋姫戦隊、華蝶連者！
始まる！

愛紗
「始まるなぁぁぁぁぁぁぁ！！（怒）」

※始まりません

翠
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、見てくれよな！」

第十三話、お館。竜と鬼。対決!?

～あらすじ～

焔耶の心を照らした家康は“天下統一”に向かう。

～とある道～

家康
「もう大丈夫か、焔耶？」

焔耶
「はい……もう吹っ切れました、お館」

家康は焔耶をクラス会の場所まで一緒に移動している。
何故、焔耶が家康の事を“お館”と呼ぶのか？

それは先程の屋上で……

～回想～

焔耶
「……／／／」

家康
「大丈夫か？」

焔耶が泣き止み自分が恥ずかしいことをしていると気づくと顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。

焔耶
（恥ずかしい／／／）

と思っていると……

家康
「魏殿」

焔耶
「なんだ／／／」

家康が焔耶を呼んだ。
焔耶は家康に呼ばれ顔は向けないが返事をする。

家康
「先程も言ったがワシは絶対に“絆”を裏切らん。信じてくれるか？」

焔耶
「……」

家康の言葉に焔耶は少し悩んだ。

焔耶
「……本当に」

家康
「？」

しばらくして焔耶は口を開いた。

焔耶
「本当に裏切らないか？」

家康
「ああ！」

焔耶
「お前の全てを誓えるか？」

家康
「ワシの全てなど、どうでもいい……魏殿、お前との“友”に誓う！」

焔耶
「！！」

焔耶は今まで失礼な事をしたのにそれでも自分を友と呼んでくれた家康を見た。

そして……

焔耶
「……焔耶」

家康
「ん？」

焔耶
「焔耶とお呼びください……“お館”」

家康
「お、お館！？」

家康は急ににお館と呼ばれ驚いた。

焔耶
「ダメですか……」

焔耶は少し落ち込んだ。
だが家康は……

家康
「構わん」

焔耶
「え？」

家康
「すまん。はじめてそう呼ばれたから少し驚いただけだ。これからよろしく頼む“焔耶”」

焔耶
「！　は、はい！／／／」

焔耶は家康名前で呼ばれ頬を赤くしながらも大きな返事をした。
そして家康と焔耶はクラス会が行われている天下統一に向かった。

～回想終了～

～とある道～

家康
「ほ～、今は桔梗先生の家に一緒に住んどるのか」

焔耶
「はい、私の親の知り合いで交流がありまして……私がこの学園に入学が決まると快く家を貸して頂きました」

家康と焔耶は話しをしていると目的地に到着した。

～天下統一～

家康
「此処か！？　いや～デカいな！」

家康ははじめて見る天下統一にはしゃいだ。

焔耶
（かわいい／／／）

そんな家康を見て焔耶は心の中でそう思った。

家康

「では、入るとするか！」

焔耶
「はい」

そう言って2人は中に入った。

その中では……

～天下統一・ボーリング場～

ガキィィィン！！

元親
「オウリヤャャャ！」

政宗
「Ｈａッ！！」

政宗と元親が闘っていた。

桃香
「ど、どうしょう愛紗ちゃん（汗）」

愛紗
「どうすると言われましても……」

桃香と愛紗は焦っていた。

華琳
（政宗と闘っているの誰かしら？　欲しいわね……）

それに対し、華琳は元親を欲しがっていた。

何故政宗と元親が闘っているのか。

それは……

～回想～

元親
「よし、着いたな！」

星
「そうだな」

元親たちは天下統一に到着していた。

翠
「最初は何するんだ？」

愛紗
「そうですね、ボーリングなどどうですか？」

風魔
『問題ない』

どうやらボーリングに行くようだ。

桃香
（……家康君…）

そんな中、桃香は家康を心配していた。

すると……

トンッ

桃香
「え？」

誰かに肩を叩かれた。

肩を叩かれ振り向くと……

元親

「心配すんな。信じてやれ」

元親が桃香を励ました。

桃香

「元親君……そうだね！」

それを聞いて桃香は元気になった。

一行はボーリング場に行った。

一行移動中……

ボーリング場に着いた元親たち。

だがそれと同時に……

政宗

「ここでいいのか？」

華琳
「ええ」

政宗たちもボーリング場に到着していた。

政宗
「んじゃとっとと始めようぜ」

そう言って政宗たちも移動した。

そして……

元親
「ん？」

政宗
「アン？」

対面した。

元親
（コイツは確か朝の……）

政宗
（何だコイツは？）

元親
（まぁなんにしったって……）

政宗
（ドーデもいいがコイツ……）

元親・政宗
（気に食わねぇ！！）

そう思った2人はお互いの獲物を取り……

ガキィン！！

激突したッ！

～回想終了～

原因：中学生みたいな喧嘩

元親

「お前さんなかなかやるじゃあねぇか！」

政宗
「そういうアンタもなッ！　こいつはとんだｓｕｒｐｒｉｓｅだぜ！」

互いを褒めるが獲物をしまわない２人。

元親
「ハッ！！」

ヒュン！！

元親の碇槍の碇部分がとれ政宗を目掛けた。

政宗
「フッ……Ｈａッ！！」

ドコォォォォン！！

政宗はジャンプして避け、碇部分が地面をえぐった。

ビュゥオン！

そのまま政宗は刀を3本に持ち元親に振り下ろした。

元親
「チッ！」

ガキィン！！

元親は槍部分でガードした。

元親
「ダッハハハ！　やっぱし強いな！」

そう言って元親は獲物をしまった。

政宗
「もっと暴れたかったが……しょーがねーか」

政宗も獲物をしまった。

元親
「俺は長曾我部元親、お前さんは?」

政宗
「伊達政宗だ」

元親と政宗は近づき握手をした。

その時……

家康
「みんなすまない!」

家康到着!!

桃香
「あ!　家康君!」

桃香は家康に駆け寄った。

桃香
「あ、焔…魏さんも来てくれたんだ!」

桃香は焔耶も来てくれた事に気づいた。

焔耶
「ああ……先程はすまなかった」

桃香
「あれは私が悪かったから全然いいよ」

焔耶
「それと、私の事は焔耶で構わない」

桃香
「ホントに!?　ありがとう焔耶ちゃん!」

桃香と焔耶、和解!

家康
「桃香、この状況は一体?　それにあれは朝の……」

桃香
「あ、それはね……」

桃香説明中……

家康

「アッハハハ！　なんだそういうことか！」

家康は説明を聞き元親らしい行動に笑った。
そして家康は政宗に近づいた。

家康
「ワシは徳川家康！　よろしく頼む！」

政宗
「ＯＫ、オレは伊達政宗」

家康と政宗は握手した。

華琳
「もういいかしら？」

政宗
「ああ、すまねーな」

華琳
「構わないわ、面白いものが見れたし」

元親
「？」

華琳は元親を見て元親は首を傾げた。

華琳
「まぁいいわ、私たちも名乗るわよ」

全員自己紹介中……

家康
「そうだ！　お前たちも一緒に遊ばないか？」

華琳
「いいわよ」

華琳、即答。

政宗
（ま～た勝手に決めやがった……）

政宗は心の中で呆れていた。

華琳
「でも、普通に遊ぶだけじゃつまらないわ」

桃香
「と言うと？」

華琳
「そうね……負けた方が罰ゲームと言うのはどうかしら？」

家康
「なるほど！　みんなはどうだ？」

家康はみんなに聞いた。

桃香
「私はいいよ♪」

愛紗
「私は構いません」

元親
「ダッハハハ！　いいぜ、やってやるよ！」

星
「フッ…面白いではないか」

焔耶
「私はお館に任せます」

翠
「おっしゃー！！　燃えてきた！」

風魔
『承知』

その他全員も賛成してくれた。

華琳
「決まりね、それじゃあちょっと待ってて」

そう言って華琳は携帯を出した。

政宗
「なにすんだ？」

華琳
「人数が足りないからクラスのみんなを呼ぶのよ」

政宗
「全員知っているのか？」

華琳
「私の携帯は欲しい情報があったらなんでも手に入れる事ができるのよ」

政宗
（プライバシーもなにもねぇな……）

政宗の意見は最もである。
そして5分後、政宗たちのクラス全員到着した。

華琳
「揃ったわ、それじゃあやりましょう」

家康
「よし、ワシらは負けんぞ！」

こうしてクラス対抗戦が始まった！

第十三話、お館。竜と鬼。対決！？（後書き）

フハハハハ、ヴァカめ！常識とは壊すものだ！

……すいません、調子に乗りました。

次回はクラス対抗戦！お楽しみに！

質問、評価、応援の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・壱、慶次の日常（前書き）

麗羽
「さぁ始まるでザマス！」

島津
「いくでガンス！」

信長
「ぶるぅぅあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

佐助
「最後、コワッ！」

猪々子
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まんぜ！！」

外伝・壱、慶次の日常

～通学路～

慶次
「あ～あ、なんか面白い事でも降ってこないかね～」

そんなことを言っている今日の主人公、前田　慶次。
彼はいつも通り恋ＢＡＲＡ学園に登校していた。

……遅刻だが

～２－Ｂ～

慶次
「オハヨー！　みんな元気か！？」

慶次は１時間目の授業が終わる寸前に教室に入った。

？？？
「慶次！　また遅刻してきて！」

慶次

「げっまつ姉ちゃん！？」

慶次はタイミングが悪くちょうど“まつ”の授業だった。

まつの容姿は

緑色の帽子を被り

温厚だが怒らせたら怖い

面倒見のいいお母さんみたいな女性。

まつ

「今日こそは反省して貰いますよ！」

慶次

「あちゃー……参ったな～（汗）」

まつは慶次の服を掴み職員室まで連れて行った。

まつ説教中……

1時間後…

慶次
「いたたた……全くまつ姉ちゃんの説教は長いな～」

慶次は説教中ずっと正座をしていたため足が痺れて痛がっていた。

慶次
「さて、教室に行きますかな！」

それでも慶次は反省の色を見せず教室に戻っていった。

～2－B～

慶次は再びみんなに挨拶をして自分の机に座った。

？？？
「お前さんも災難だったな……」

慶次
「アンタ程じゃないよ、官兵衛（かんべえ）」

慶次に話しかけて来た男性は

髪を2本たらし目が見えない状態

何故か手枷をはめその手枷に鉄球を付いている

そしてなにをしても裏目に出てしまう男性。

名を黒田（くろだ）　官兵衛。

官兵衛
「確かに小生以上ではないな」

果たしてそれは自慢なのかわからないが。

慶次
「そういえば次の授業は？」

官兵衛
「確か……」

？？？

「謙信さまの授業だ！　覚えとけ馬鹿者！」

慶次を罵倒した女性は

金髪でスタイルが良く

厳しい態度と男勝りな言動
そして謙信を崇拝している女性。

慶次
「おっ！　オハヨー、かすがちゃん」

名をかすが。

かすが
「貴様ッ！　謙信さまの授業を何だと思っている！」

慶次
「謙信は友達だけど……」

かすが
「そういう事ではない！」

官兵衛
「まあ落ち着け」

かすが、暴走。

そんなことしていると……

謙信
「みなさん、じゅぎょうをはじめますよ」

謙信がやってきた。

かすが
「はい、謙信さま」

かすがは先程慶次たちの場所にいたのに謙信が来ると自分の机についていた。

2人
「早っ！」

そんなこんなで昼休み……

慶次
「さて！　飯でも食べますかな！」

官兵衛
「相変わらずお前さんの弁当はうまそうだな」

慶次の弁当はまつの手作りである。
すると扉が開き……

雪蓮
「やっほー♪　慶次いる？」

雪蓮登場！

慶次
「おっ、雪蓮ちゃん！　此処だよ～！」

雪蓮
「あっいたいた！」

雪蓮は慶次たちの場所に駆け寄る。

雪蓮
「慶次、また遅刻したでしょ？」

慶次
「いいのいいの、気にしてたら切りがないって」

雪蓮
「アハハ♪　確かに」

???
「アニキー！」

慶次たちが話していると2人の女性がこちらに向かってきた。

1人の容姿は

髪が緑色で

お気楽でポジティブな性格

慶次の事を“アニキ”と呼ぶ女性。

もう1人の容姿は

ボブカットの青い髪

基本的におっとりして

かなり苦労人の雰囲気を出している女性。

慶次
「猪々子（いいしぇ）ちゃんに斗詩（とし）ちゃん！　いらっしゃい」

名を文（ぶん）　猪々子。
顔（がん）　斗詩。

猪々子
「アニキ！　あたいたちも一緒に食べていいか？」

慶次
「ああ！みんなで食べれば楽しいしな！」

斗詩
「ありがとうございます」

そして5人で食事をすることになった。

慶次
「そういえば冥琳は？」

雪蓮
「元就（もとなり）のところよ」

慶次
「かぁ～、アイツも恋してるな～」

元就とは名前は毛利（もうり）　元就

雪蓮たちと同じクラスで容姿は

緑色の被り物を被り
性格は冷酷
人と関わるのが好きではない人物。

雪蓮
「ホントにアイツのどこがいいのかしら?」

官兵衛
「人それぞれってこったな」

慶次
「いいな~俺も恋したいもんだな~」

キラーン

慶次の言葉に雪蓮と猪々子の目が光った。

雪蓮
「は~い!　私が慶次の恋人になるわ!」

猪々子
「あっ!　ズリィ、あたいが恋人になる!」

2人は慶次の恋人になると言い出した。

慶次
「アッハハハ、俺なんかよりもっといい人は見つけなよ！」

2人
「「……」」

官兵衛
（相変わらず鈍感な奴だな……）

官兵衛は慶次の鈍感さに呆れていた。

斗詩
「あ、あの…官兵衛さん」

官兵衛
「ん？」

斗詩
「何で慶次さんは気付かないでしょうか？」

官兵衛
「さぁな……こればっかりは小生にもわからん」

斗詩

「はぁ……」

そして昼休みが過ぎていった……

～放課後～

慶次
「やっと授業が終わったなぁ！」

官兵衛
「といってもお前さんは寝ていたけどな…」

慶次と官兵衛は帰る支度をしていた。

ガララッ！

雪蓮
「慶次～一緒に帰りましょう♪」

雪蓮がやってきた。

慶次

「ああ、いいよ！　官兵衛はどうする？」

官兵衛
「悪いが小生が用事があるんでね・・・先に帰らせていただくよ」

そう言って官兵衛は足を進める。
雪蓮は横を通った時小声で会話した。

雪蓮
（ありがと♪　官兵衛）

官兵衛
（ま、頑張れよ）

官兵衛はそういい残し帰っていった。

慶次
「そんじゃあ帰りますか！」

雪蓮
「そうね♪」

こうして慶次の1日が終わるのであった。

外伝・壱、慶次の日常（後書き）

いや～なんかこういうものを作っちゃいました……テヘ♪

今回はおまけです！

これからこういうのも作りたいと思います！

次回こそ本編を進めます！

質問、評価、応援の方もよろしくお願いします！

それではまた、次回！

第十四話、対抗戦！　決着（前書き）

幸村
「お館様ぁぁぁ！」

信玄
「幸村ぁぁぁ！」

幸村
「うお館様ぁぁぁぁぁぁ！！」

信玄
「幸村ぁぁぁぁぁぁ！」

蓮華
「……私もあーすれば幸村と」

思春
「やめてください、死にますから」

佐助
「旦那～恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるよ～」

第十四話、対抗戦！　決着

～あらすじ～

政宗と家康のクラスが激突！

～天下統一・ボーリング場～

華琳
「それじゃあルールはこれでいいわね？」

家康
「ああ！　構わない！」

華琳と家康が決めたルールがこちら。

・人数が多い為ストライクとスペアのみ点数が入る

・ストライクは2点、スペアは1点、ガーターは一回－1点

・原則として普通にゲームを行う

華琳
「こんなものね……それじゃあ始めましょう」

家康
「よかろう！」

クラス対抗ボーリング戦・・・開幕！
第一球、華琳・桃香。

華琳
「まずは私からね」

そう言って華琳はレーンの前に立つ。
華琳、第一投。

華琳
「フッ」

ヒュッ　バコーーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

華琳
「当然ね」

桃香
「すごーい！　……って次私じゃん！？　すごいプレッシャーだよ～（焦）」

桃香はレーンの前に立つ。
桃香、第一投。

桃香
「う～……えい！」

ヒュッ　ガコン！

ｇｕｔｔｅｒ

桃香
「う……（汗）」

桃香
（どうしよ～もうマイナスだよ～（涙目））

桃香が心の中で泣いていると家康が声をかけた。

家康
「桃香！」

桃香
（家康君？）

家康
「焦ることはない、自分を信じて投げればいい」

桃香
「家康君……うん、わかった！」

第二投。

桃香
「えい！」

ヒュッ！　バコーーン！

ｓｐａｒｅ！

桃香
「あ、危なかった～（汗）」

家康

「よくやった！　桃香！」

第二球、小十郎・愛紗。
小十郎、第一投。

小十郎
「オラッ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

政宗
「ｎｉｃｅだ！　小十郎！」

小十郎
「はっ」

愛紗、第一投。

愛紗
（ここで外せば後がキツい……）

愛紗
「ハッ！」

ヒュッ！　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

家康
「スゴいな！　愛紗！」

桃香
「愛紗ちゃん！　スゴーい！」

愛紗
「ありがとうございます」

第三球、春蘭・元親。
春蘭、第一投。

春蘭
「見ててください華琳様！」

春蘭は華琳に良いところ見せようと思いっきり投げる。

春蘭
「ハァッ！」

ヒュッ　ガコン！

ｇｕｔｔｅｒ

春蘭
「あ……」

だが、勢い余ってｇｕｔｔｅｒしてしまった。

桂花
「なにやってるのよ！　この脳筋！」

春蘭
「う、うるさい！　次は決める！」

第二投。

春蘭
「ハァァッ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｐａｒｅ！

春蘭
「どうですか、華琳様！」

華琳
「春蘭……しばらく私と喋るの禁止」

春蘭
「か、かりんさま～（泣）」

元親、第一投。

元親はレーンの前に立ち……

元親
「しゃらくせぇ！」

ブオォン！　ドカーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

直接投げた。

元親
「おっしゃー！」

愛紗
「おっしゃー！　……じゃねぇぇぇぇぇ！」

ドコォン！

愛紗は元親にボディーブローをかました。

元親
「ぐはぁ！？」

愛紗
「普通にボーリングができないのですか！？」

翠
「お、落ち着け愛紗！」

翠は愛紗を羽交い締めをして落ち着かせる。

元親
「フッ……普通で終わらないのが俺の生き様よ！」

愛紗
「ならばその脳みそをかち割ってくれるぅぅ！（怒）」

翠
「誰か一緒に止めてくれぇぇ！」

第四球、星・秋蘭。
秋蘭、第一投。

秋蘭
「フッ」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

華琳
「さすがね」

秋蘭

「ハッありがとうございます」

星、第一投。

星
「フッ」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

家康
「よし！　良いぞ、星！」

星
「ハッありがとうございます」

桃香
（真似してる……）

第五球、翠・風。
風、第一投。

風
「風は運動が苦手なんですけど・・・仕方ないですね～。よっ」

ヒュッ　バコーン！

7本！

風
「・・・・・・・・・」

政宗
「なかなかじゃねーか」

風
「ぐぅ～」

政宗
「って寝るな！」

風
「おぉ！」

第二投。

風

「よっ」

ヒュッ　ガコン！

ｇｕｔｔｅｒ

風
「すいません・・・外しちゃいました」

政宗
「ま、気にすんな」

翠、第一投。

翠
「オリャア！」

ヒュッ　バコーン！

９本！

翠

「チクショー！　だったらｓｐａｒｅ狙いだ！」

桃香
「頑張れー！」

第二投。

翠
「ハァァ！」

ヒュッ　バコーーン！

ｓｐａｒｅ！

翠
「しゃー！」

桃香
「やったー！」

第六球、焔耶・凪。
凪、第一投。

凪
「ハァァ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

真桜
「さっすが凪やな！」

沙和
「男より男らしいの！」

凪
（素直に喜べない……）

焔耶、第一投。

焔耶
「こんなもの！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

家康
「スゴいじゃないか！　焔耶ッ！」

家康は焔耶の肩を叩いて喜んだ。

焔耶
「あ、ありがとうございます／／／」

桃香
（もしかして焔耶ちゃんも……）

第七球、風魔・桂花。
桂花、第一投。

桂花
（ここでｓｔｒｉｋｅを取れば華琳さまに褒められる！）

桂花
「えい！」

ヒュッ　ガコン！

gutter

春蘭
「オイ！　人の事言えないではないか！」

桂花
「しょーがないじゃない！　私は運動が苦手なんだから！」

桂花、第二投。

桂花
「えい！」

ヒュッ　ガコン！

gutter

華琳
「あなたもしばらく私と喋るの禁止」

桂花
「かりんさま～（泣）」

風魔、第・・・

風魔
「・・・・・・・・・・・・」

ｓｔｒｉｋｅ！

一同
「「「「早ッ！？」」」」

その後、政宗のクラスは稟がｓｐａｒｅ、沙和、真桜がｓｔｒｉｋｅを出した。
家康のクラスは何人かがｓｐａｒｅとｓｔｒｉｋｅを出した。

～おまけ～

無敵
「俺は無敵の主人公ッ！」

ｇｕｔｔｅｒ

無敵
「見たか！　知ったか！　俺は無敵ッ！」

ｇｕｔｔｅｒ

無敵
「ｇｕｔｔｅｒでも俺は無敵ッ！」

※この後スタッフ（クラス）がボコボコにしました。
そしてラスト戦。

家康クラス１８点

政宗クラス１９点

ラスト、家康・政宗。

政宗
「ここでｓｔｒｉｋｅを連続で出せばｆｉｎｉｓｈだな」

政宗、第一投。

政宗
「Ｈａッ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

政宗
「ＯＫ！」

第二投。

政宗
「Ｈｅｙ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

小十郎
「お見事です！　政宗様！」

そして第三投。

政宗
「これで……ｌａｓｔだ！」

ヒュッ　バコーン！

９本！

政宗
「！？　……Ｈｕｍ～まぁいいか」

華琳
「これでアナタは全てｓｔｒｉｋｅを出さないと勝てないわよ」

華琳は家康に言った。

家康
「……よし！」

家康はレーンの前に立つ。

桃香
「家康君、頑張れー！」

愛紗
「落ち着いて投げれば大丈夫です！」

元親
「やってやれ！　家康！」

星
「頑張って頂きたい、家康殿」

焔耶
「頑張ってください！　お館！」

翠
「家康ー！　やったれー！」

風魔
『応援』

クラス
「「「「ヒャッハー！」」」」

クラスのみんなが家康を応援した。

家康
「ありがとう、みんな！　ワシは負けん！」

家康、第一投。

家康
「ハッ！」

ヒュッ　バコーーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

家康
「まずは一本」

第二投。

家康
「タァ！」

ヒュッ　バコーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

桃香
「後、一本だよ！」

華琳
（この状況でｓｔｒｉｋｅを取るなんて……やるわね）

政宗
（Ｈｕｍ～やるね……だがｌａｓｔは次元がちげー）

政宗の言うとおり家康はプレッシャーに襲われていた。

家康
（これが皆のプレッシャーか！？　なんて重いんだ……だが！
ワシは皆の気持ちを裏切る事はできん！）

そう思った家康は何故かボールを持たずにレーンの前に立つ。

政宗
（Ａｈ？　なんのつもりだ、アイツ？）

政宗がそう思っていると……

家康
「ハァァァ……」

家康は気を溜めはじめた。

家康
「某、徳川　家康！　武器を棄ててお前に挑もう！」

そして……

家康
「天道突きッ！」

バシュウゥゥゥン！

家康が放った拳は風を纏っていた。

バコーーン！

ｓｔｒｉｋｅ！

一同
「「「「「……（呆然）」」」」」

その場にいた全員が唖然としていた。

家康
「よし、ｓｔｒｉｋｅだ！」

愛紗
「よし……じゃねぇぇぇぇぇぇ！」

家康
「グハァ！？」

愛紗はドロップキックをかました。

愛紗
「ＤＡ☆ＫＡ☆ＲＡ！　ボーリングをしてください！」

家康
「あたた……だが、ｓｔｒｉｋｅは取ったぞ！」

春蘭
「そんなものは無効に決まっているだろ！」

家康
「なんと！？」

翠
「なんで驚いてんの！？　当たり前じゃねーか！」

いろいろと話していると……

華琳
「静まりなさい！」

華琳がその場を静まらせた。

華琳
「確かにさっきのはどうかと思うわ……だけど、私たちが負けたのは事実よ。そうでしょ、政宗？」

華琳は政宗に振った。

政宗
「まぁな……オレらが点を取れば良かっただけの話だしな」

華琳
「その通りよ。だから、この勝負は私たちの負けよ！」

家康のクラス……勝利！

桃香
「やったー！」

元親
「やっぱ勝負に勝つのはいいもんだな！」

家康のクラスは皆で喜んでいた。

華琳
「さて、敗者は素直に罰ゲームを受けましょう」

そう言って華琳は家康に寄っていった。

華琳
「それで、罰ゲームは何かしら？」

家康
「うむ、罰ゲームは……」

家康は罰ゲーム華琳に言った。

家康
「ワシらと友達になってくれないか？」

華琳
「……は？」

華琳は家康を物珍しい目で見た。

華琳
「それがアナタが決めた罰ゲーム？」

家康
「ああ！」

華琳
「それは罰ゲームとは言わないわよ」

家康
「そうか？　でも、これだけは譲れんよ」

華琳
「何故かしら？」

家康
「ワシはこの“絆”をこのままにしたくないからだ！」

家康はハッキリと言った。

華琳
「……ふふっ面白いわねアナタ。私はいいわよ、政宗は？」

政宗
「オレもＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍだ」

華琳
「なら決まりね、いいわよその罰ゲームを受けるわ」

家康
「おぉ！　感謝する！」

こうして家康たちは新たな“絆”を結んだ。

～おまけ・弐～

政宗
「そういや華琳」

華琳

「何かしら?」

政宗
「オメェが考えてた罰ゲームは何なんだ?」

華琳
「私の?　それはもちろん……アナタが私のモノになることよ」

政宗
「ち・ょ・っ・と・ま・て」

華琳
「何?」

政宗
「何でオレなんだよ!?」

華琳
「あら、私は別に自分のクラスに罰ゲームをしてはいけないとは言ってないわよ」

政宗
(……負けて良かった)

政宗は心からそう思った。

第十四話、対抗戦！　決着（後書き）

久々の世紀末ダァー！

なんとか終わったな……

次回は未定です！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十五話、委員会、部活動、元親の決断！（前書き）

～あらすじ～

一九九Ｘ年、世界は核の炎に包まれた！

桃香
「包まれてないよ！？」

愛紗
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まります」

第十五話、委員会、部活動、元親の決断！

～あらすじ～

クラス対抗戦が終わりみんなで騒ぎ1日が終わった翌日……

～1－B～

紫苑
「それではこれより委員会を決めたいと思います」

家康たちのクラスはこれから委員会決めのようだ。

紫苑
「では、まずはクラス委員長から決めましょう。誰か立候補者はいるかしら？」

家康
「ワシがやろう！」

家康は勢いよく手を上げた。

紫苑
「うふふっ、それじゃあ家康君でいいかしら？」

紫苑はみんなに聞いた。

一同
「「「「大丈夫でーす！」」」」

家康なら問題ないみたいだ。

紫苑
「じゃあ家康君、よろしく頼むわね」

家康
「わかりました！」

紫苑
「後は女子の方は……」

桃香
「わ、私がやります！」

此処で桃香が手を上げた。

紫苑
「桃香ちゃんが……みんなどうかしら？」

一同
「「「「大丈夫でーす！」」」」

クラスのみんなは面倒くさいことは嫌だからなんでもいいらしい。

紫苑
「早く決まって良かったわ。じゃあこれから家康君と桃香ちゃんが進行をお願いしてもいいかしら？」

家康
「構わない！　桃香は？」

桃香
「私も大丈夫だよ♪」

こうして委員会決めはスムーズに行われた。

～昼休み～

現在、家康・桃香・愛紗・元親・星・翠・焔耶・風魔で食事をしていた。

家康
「これからはクラス代表として頑張るか！」

桃香
「一緒に頑張ろうね♪」

家康
「ああ！」

家康と桃香はクラスの代表になって意気込んでいた。

愛紗
「私も風紀委員として2人を支えていきます」

家康
「ありがたいな、愛紗！」

愛紗は風紀委員のようだ。

愛紗
「ところで、皆さんは何か部活動をやられるのですか？」

この学園では委員会か部活動に入らなければならない（生徒会は免除される）

星
「私は“風流部”にそそられたな……それに入部するつもりだ」

風流部は基本的に何もしないが体育祭や文化祭などの学校行事に手伝いをする部活動。
因みに部長は前田慶次。

翠
「アタシは“馬術部”に入るよ！」

馬術部は馬を扱い様々な競技を行う部活動。

焔耶
「私はまだ決まってないが桔梗先生の部活動に入るよ」

桔梗の部活動は“麻雀部”……とんでもない部活動である。

風魔
『まだ決めていない』

家康
「元親は？」

元親
「俺か？　俺はな……」

元親は紙を取り出した。

元親
「“工学部”を作るぜ！」

その紙には部活申請の文字が書かれていた。

愛紗
「部を作るのですか？」

元親
「ああ！　何故かこの部活が無かったからな」

家康
「アハハハ！　面白そうだな、ワシも協力したいがな……クラス委員長だから難しいな～」

桃香
「だね～」

元親
「まぁ気にすんな！」

そう言って昼休みが過ぎた……

～生徒会室～

元親は生徒会室に行き部活申請の紙を出した。

???

「それじゃあ君にはあと4人と顧問1人を一週間以内で集めてきてくれないか？」

元親に言った男性は

銀髪で仮面を付け

穏やかな口調と優雅な態度

名を竹中（たけなか）　半兵衛（はんべえ）

生徒会副会長である。

元親

「わかったぜ！」

こうして元親の部活作りが始まった。

～帰り道～

元親
（と言ってもな～人数集まっかなぁ……）

元親はまだこの学園に入学したばっかりなので友達がまだ少ない。

元親
（蓮華たちはクラス委員長になるみてぇだし、思春はその補佐で風紀委員をやるくせぇな～……幸村は問題外だな）

そんな事を思っていた元親。

元親
「ん？」

ふと元親が目線をずらすと……

チンピラ

「今日こそは勝たせて貰うぜ！」

？？？

「……」

チンピラ１０人が１人の女性を囲んでいた。

元親

（オイオイ……１人の女相手に何やってんだよ）

元親はチンピラたちを情けないと思って見ていた。

元親

（まぁ、見て見ぬ振りはできねーしな……）

そう思った元親は現場に足を進める。

元親

「オイ！　テメーら！」

チンピラ１

「あ～ん、何だテメーは！？」

元親

「1人の女を取り囲んで……恥ずかしくねぇのか！？」

チンピラ2
「テメーは関係ねぇだろ！」

元親
「確かに関係ねぇ……だが！　黙って見逃す事もできねぇんだよ！」

チンピラ3
「チッ！　だったらテメーから片付けてやるよ。やっちまえ！」

それをきっかけにチンピラ10人が元親に襲ってきた。

元親
「六限ッ！！」

ブォンブォンブォンブォン！！

それに対し、元親は碇槍を左右に振り回した。

チンピラ
「「「「ギャーーッ！！」」」」

チンピラたちはあっという間にやられた。

元親
「こんなものか？」

元親はあっという間にやられたチンピラたちに呆れていた。

チンピラ３
「オ、オイアンタ！」

元親
「アン？」

チンピラ３に呼ばれて振り向く元親。

チンピラ３
「そんなに強いならその女もやってくれ！」

？？？
「……」

チンピラ３は女性を指を指した。

元親
「・・・アンタ、今すごく情けねぇぜ」

元親は心底呆れていた。

チンピラ3
「アンタはコイツの怖さを知らないから言えるんだ！　・・・・・コイツはオレらチームを一瞬で壊滅させたんだ！　正真正銘の化け物なんだよ！」

？？？
「・・・・・・・・・・・」

女性は化け物と言われ少し悲しい顔をした。

元親
「オイ」

チンピラ3
「ガッ！」

元親はチンピラ3の髪を掴んだ。

元親

「テメー今、何つった？」

チンピラ３
「！？」

チンピラ３は元親の出す殺気に脅えた。

元親
「訂正しろ、そして嬢ちゃんに謝んな」

チンピラ３
「は、は、はいぃぃぃ！」

そしてチンピラ３は去っていった。

元親
「さて……大丈夫か、嬢ちゃん？」

？？？
「……何で」

元親
「ん？」

？？？

「……恋、助けた？」

女性の正体は恋だった。

元親
「理由はねぇよ」

恋
「……？」

元親
「俺は俺のやりてぇようにやっただけだ」

恋
「……でも恋、化け物」

恋は先程言われた言葉が気になっているようだ。

だが……

ポンッ

恋
「……？」

ワシャワシャッ

元親は恋の頭に手を置き思いっきり撫でた。

元親
「さっきの事なんか気にすんな……嬢ちゃんは嬢ちゃんだ。それでいいじゃねぇか」

元親は恋に笑顔でそう言った。

恋
「……恋」

元親
「ん？」

恋
「恋の、名前」

元親
「そうかい、俺は元親。よろしくな」

恋

「……元親」

こうして元親は恋と知り合った。

元親
「これから飯でも食いに行くか？」

恋
「……！！（コクコクッ）」

……元親の財布が泣いた！

第十五話、委員会、部活動、元親の決断！（後書き）

なんか書いちゃった！

次回は元親が奮闘します！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十六話、元親仲間探し！（前書き）

～あらすじ～

元親は西を目指し様々な困難に立ち向かう！
元親の大冒険が今始まる！

佐助
「何これっ？　どこのガンダーラ！？」

風魔
『恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、開始』

第十六話、元親仲間探し！

～あらすじ～

恋を助けた元親の部活作りが今始まった！

～レストラン・蜀卓～

恋
「モグモグ……」

元親
「……」

元親と恋はレストランに入り食事をしているのだが、只今恋が尋常じゃないほど食べている。

元親
（良く食う嬢ちゃんだなぁ）

元親は恋の食事を物珍しい気持ちで見ていた。

恋
「モグモグ……？」

恋は元親に見られて首を傾げた。

元親
「どうした？」

恋
「……食べない？」

元親もご飯は来ていたが恋の食事を見ていて手をつけていない。

元親
「……欲しいのか？」

恋
「……（コク）」

恋は頷いた。

元親
「なら、やるよ」

元親は自分の料理を差し出した。

恋
「……ありがと」

恋は礼を言い元親の料理を食べた。

元親
（……金、足りっかなぁ）

元親は自分の財布を心配した。

???
「おかわりなのだー！」

元親
「ん？」

元親は元気な声が聞こえた方へ振り向く。

そこでは恋と同じ位料理を食べている少女の姿があった。

少女の容姿は

赤色の髪をして

小柄な体格

いつも元気いっぱいな少女。

元親

（あの嬢ちゃんもすげー食べんなぁ）

元親はあの体格でどこに料理が入るのか不思議に見ていた。

そんな事を思っていると……

クイックイッ

元親は服を引っ張られたので元親は目線を戻す。

恋

「……終わった」

恋が料理を食べ終えていた。

元親
「おぉ、そうか！　腹一杯食ったか？」

恋
「……腹三分目」

元親
（まだ食えんのか！？）

元親は心の中で驚いていた。

恋
「……でも、帰る」

元親
「そうかい……じゃ、行きますか」

元親と恋は立ち上がったと同時に……

？？？
「あぁーーー！！」

先程の少女が叫んだ。

？？？

「ど、どうしよう・・・お金が足りないのだ」

どうやら手持ちのお金では足りない位食べてしまったらしい。

？？？

「これじゃ、またお姉ちゃんに怒られてしまうのだ」

少女がシュンと落ち込んでしまった。

元親

「・・・・・・・・・」

元親は黙って見ていた後、少女に近づいて行き・・・・・

ポンッ

？？？

「にゃ？」

少女の頭に手を置いた。

元親
「どうした、嬢ちゃん?」

???
「お兄ちゃんは誰なのだ?」

元親
「俺か?　俺は元親、嬢ちゃんは?」

???
「鈴々（りんりん）なのだ!」

元気良く名前を言った少女の名は張（ちょう）　鈴々

元親
「で、どうしたんだ?」

鈴々
「鈴々はお腹一杯食べたけどお金が足りなくなったのだ」

再びシュンと落ち込んでしてしまう。

元親

「そうか……なら、払ってやるよ」

鈴々
「ホントッ!?」

鈴々は元親を見た。

元親
「ああ、嘘はつかねーよ」

鈴々
「でも、何で鈴々を助けてくれるのだ?」

鈴々は素朴な疑問を元親に聞いた。

元親
「理由なんざねぇよ。ただ、困ってる奴をほっとけねーお調子もんってだけだ」

鈴々
「お兄ちゃん……ありがとーなのだ!」

元親は恋と鈴々の支払いをした。

その時元親は……

元親
（バイトでも始めっか……）

と、心に誓った。

～翌日・休み時間～

元親は部を発足のため気になる人物に話をした。

元親
「風魔」

風魔
『どうした？　元親』

元親は風魔が部活をまだ決めていないと昨日聞いたので声をかけてみた。

元親
「もう部活を決めたか？」

風魔

『いや、まだ決まっていない』

元親
「そうか！　じゃあ、工学部に入ってくれねーか？」

元親は風魔を誘った。

風魔
『構わない』

元親
「ホントかっ！？」

風魔
『元親には恩がある、だから協力がてきる事なら協力しよう』

元親
「ありがてぇ！　よろしくな、風魔！」

風魔、入部！

～昼休み～

元親
「風魔、早速で悪いんだがこの紙を半分配ってくれねーか？」

元親と風魔は昼休みに部活勧誘の紙を配る事にした。

風魔
『承知』

シュン

そう言って風魔は消えた。

元親
「さて、俺もやっか！」

元親も紙を配り始めた。

～放課後・１－Ｂ～

元親と風魔は自分の教室で待機していた。
だが、まだ１人も来ていない。

元親

「来ねーな」

風魔
『まだ時間はある』

元親
「確かに、焦る必要はねぇな」

元親と風魔が話していると……

ガララッ！

？？？
「此処か！　工学部を作るんっちゅーのは！？」

1人の女性が入って来た。

元親
「アンタは確か……」

風魔
『李真桜だな』

入って来たのは隣のクラスの真桜だった。

真桜
「ウチ、この部に入るで！」

元親
「ホントか！？」

真桜
「ホンマや！　ウチもこの部活を探したんやけどないんやもん。そん時にこの紙を見てコレや！　と思うて来たんや！」

真桜も機械いじりが好きなようだ。

元親
「そうか！　それじゃあ、これからよろしくな！」

風魔
『よろしく』

真桜
「よろしゅーな！」

真桜、入部！

元親

「あと、2人だな！」

風魔
『案外早く終わるかもしれんな』

風魔の予想は当たった。

ガララッ！

???

「……元親」

元親
「お、恋じゃねぇか……どうした？」

次に恋が入って来た。

風魔
『知り合いか？』

元親
「ああ、昨日知り合ってな……」

などと話していると恋がある事を言い出した。

恋
「……恋も、入る」

元親
「ッ！？　いいのか？」

恋
「……恋、元親に、協力する」

元親
「ありがてぇ！」

恋、入部！

元親
「よし！　あと、1人だ！」

？？？
「そうか、ならば入部してやろう」

元親
「おわ！？　……って思春じゃねぇか！」

元親はいきなり声をかけられ驚いたがすぐに声の主がわかった。

思春
「あと、1人なんだろ？　ならば入ってやる」

元親
「いいのか、蓮華は？」

思春
「蓮華様は幸村がいる……それに」

元親
「それに？」

思春
「……いや、なんでもない」

元親
「？　……まぁいいか！　これで5人揃ったぜ！」

思春、入部！

風魔
『あとは顧問だけだな』

真桜
「せやけど、やってくれる先公はいるんか？」

恋

「……？」

思春
「……1人いる」

思春の言葉に全員見た。

元親
「本当か？」

思春
「ああ……だが、やってくれるかわからん」

元親
「とりあえず頼むだけ頼んでくるか！」

元親たちは職員室に行った。

～職員室～

思春
「あの先生だ」

思春は指を指しある先生を指した。

その先生の容姿は

凛々しい顔に

自分の事を誇っている性格

だが、仕事はこなすビジネスウーマンみたいな女性

元親
「あれは……」

風魔
『知っているのか？』

元親
「ああ…だが確信はねぇ」

思春
「名前は雑賀（さいか）　孫市（まごいち）先生だ」

元親
（名前がちげーな…だが）

元親は孫市の場所へ行き声をかけてみた。

元親
「さやか？」

孫市
「……」

ゴンッ！

元親
「あたっ！」

孫市
「今は孫市だ。この鴉め」

孫市は元親の頭を殴った

元親
「あたたっ……やっぱさやかか！　久しぶりじゃねーか！」

孫市
「だから孫市だ」

元親
「なんで先公なんてやってんだ？」

孫市
「人の話を聞け……この学園の校長に頼まれたのだ」

思春
「知り合いだったのか？」

元親
「ああ、さやかは俺の親と昔馴染みでな……」

孫市
「そんな昔話はどうでもいい。私に何か用か？」

元親
「おっとそうだった！　さやか、頼み事があんだけど……」

孫市
「……頼み？」

元親は孫市に説明した。

孫市
「それで私に顧問をやれと？」

元親
「駄目か？」

孫市は少し悩んだが……

孫市
「よかろう、顧問になってやる」

元親
「ホントかッ!?　助かるぜさやか!」

ゴンッ!

元親
「あたっ!」

孫市
「だから孫市だ、この鴉め」

孫市、顧問決定!

元親
「これで部活が出来るぜ!」

こうして元親は生徒会室に行った。

～生徒会室～

半兵衛
「確かに全部揃っているね」

元親
「じゃあ！」

半兵衛
「ああ、工学部を認めるよ……頑張ってくれ」

元親
「おっしゃー！」

そう叫んで元親は生徒会室を出て行った。

半兵衛
「（……あの孫市先生が顧問とは。正直驚いたよ）これから楽しみだね……」

半兵衛はそう呟いて生徒会室を後にした。

～校門～

元親
「よし！　これからみんなで飯でも行くか！」

元親は工学部誕生を記念してみんなを飯に誘う。

風魔
『問題ない』

真桜
「ウチもえぇーで！」

恋
「……（コク）」

思春
「構わん」

孫市
「……それは私もか？」

元親
「当たり前だろーが！」

孫市
「強引な奴だな」

こうして元親は工学部を発足させた。

～おまけ～

元親たちは屋上に集まり工学部を発足して最初の活動を始めた。

元親
「まず最初の活動は……家康、頼む」

家康
「心得た！　忠勝ッ！！　出撃！！！」

家康がそう言ってまもなく……

ゴオォォォォォッ！

忠勝
「！！！」

忠勝が空からやって来た。

元親

「この忠勝の謎に迫るぜ！」

真桜
「凄い、凄いで！　ウチこんなん初めて見たで！」

風魔
『これは凄いな』

思春
「長曾我部から聞いていたがここまでとは……」

各々が忠勝を見て感想を言っていると……

恋
「……」

忠勝
「……」

恋と忠勝は互いを見続けた。

そして……

恋
「……よろしく」

忠勝
「！！！！」

ブシュウゥゥゥゥ！

何かを共感したのか握手をした。

第十六話、元親仲間探し！（後書き）

こんなところで“最強”が出会うなんて……

あと、元親の話はいい！

次回は未定です…

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・弐、とある女子の悩み（前書き）

天和
「みんな大好きーー！」

ファン
「てんほーちゃーーーーん！」

地和
「みんなの妹！」

ファン
「ちーほーちゃーーーーん！」

人和
「とっても可愛い」

ファン
「れんほーちゃーーーーん！」

いつき
「米を大事に！」

親衛隊
「い・つ・き・ちゃーーーーん！」

月
「い、違和感ないね（汗）」

音々音
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりますぞー！」

外伝・弐、とある女子の悩み

元親たちは工学部を発足していた頃……

～1－D～

？？？

「ハァ～……」

ため息を吐く女性

髪は赤色で

顔はしっかりと整っており

真面目な性格

名は公孫（こうそん）　白蓮（ぱいれん）

彼女には悩みがあった。

それは……

白蓮

（なんで私には個性がないんだろう……）

白蓮は“普通”なのである。
普通と言うのは悪い事ではない。
だが、決して良い事でもないのだ。

白蓮
「というより周りの個性が強いんじゃないか？」

確かに白蓮の言うことも最もである。
だが、それでも白蓮は普通である。

白蓮
（クソ…どうしたらいいんだ）

白蓮はかなり悩んでいた。

そこへ……

ポンッ

白蓮
「え？」

白蓮は肩を叩かれそちらを振り向いた。

詠
「アンタの気持ちはわかるわ」

そこには同じクラスの詠がいた。

白蓮
「詠？　気持ちがわかるって……」

詠
「白蓮は今の立場に悩んでいるんでしょ？」

白蓮
「！！」

白蓮は図星を言われ驚いていた。

詠
「けどね……そんな小さな悩みは気にしないことよ」

白蓮
「小さいって……私にとっては十分な悩みだ！」

白蓮は少し怒りながら言った。

詠
「確かにアンタにとっては十分な悩みよ……だけど私が知ってる先輩にとってはとても小さな悩みよ」

白蓮
「先輩？」

詠
「ええ……今からその先輩のところに会いに行くけど一緒に行く？」

詠は今からその先輩のところに行くと言って白蓮を誘った。

白蓮
「……よし、一緒に行こう」

詠
「わかったわ」

こうして詠と白蓮はある先輩のところに移動した。

詠達移動中……

～用具室～

そこは学園にある用具室の本棚。

白蓮
「何もないぞ？」

詠
「まぁ見てなさい」

そう言った詠は本棚にある本を抜いた。

詠
「“機略重鈍”」

詠は抜いた本の場所で何かを唱えた。

そしたら……

ゴゴゴゴゴゴッ！！

本棚が横にずれて地下に続く階段が出てきた

白蓮
「な・・・何だ、これは！？」

詠
「この地下にいるから行きましょう」

白蓮は驚いていたが詠は何事もなく地下に入って行った。

～地下室～

白蓮と詠がしばらく歩いていると一つの扉に到達した。

詠
「ココよ」

コンッコンッ

？？？
「入っていいぞ」

ガチャッ

詠がノックしたら扉から声がした。

そして詠が開けると……

官兵衛

「お前さんも物好きだな…こんな穴蔵に何か用か？」

斗詩

「官兵衛さん…それは失礼ですよ」

官兵衛と斗詩の姿があった。

詠

「ボクです、官兵衛先輩に斗詩先輩」

官兵衛

「詠か？　懲りずに良く来るな」

詠

「今日は1人ではありません」

斗詩

「詠ちゃんの後ろにいる人？」

詠
「ハイ」

白蓮
「は、初めまして・・・」

白蓮は一礼をして自己紹介をした。

官兵衛
「で・・・お前さんは何しに来たんだ?」

詠
「今日はこの白蓮の悩みを聞いて欲しいんです」

斗詩
「悩み?」

白蓮
「はい、実は・・・・・」

白蓮は官兵衛たちに悩みを打ち明けた。

官兵衛
「なるほど・・・つまり、今のお前さんは個性がなくて普通の自分に悩んでいると?」

白蓮
「はい……」

官兵衛はしばらく考え、白蓮に答えた。

官兵衛
「お前さんはまず個性と言うものを間違っている」

白蓮
「どういうことですか？」

白蓮は今一つわかっていなかった。

官兵衛
「個性がない……それはこういう事だ！」

官兵衛は白蓮を指さした。

女子
「？　何を言って……ハッ！　私の名前が“女子”になっている！？」

官兵衛

「これが個性がない事だ！」

女子
「な！？」

官兵衛
「本当に個性がないのは名前すらない……だが、お前さんにはしっかりと名前がある！　だから……お前さんにとっては“普通”と言うことが個性なんだよ！」

白蓮
「！」

白蓮は地面に膝をつけた。

白蓮
「そうだったのか……私はなんて小さな事を悩んでいたんだ」

白蓮は自分の悩みがどれほど小さいものかわかった。

ポンッ

詠
「わかったでしょ……アンタの悩みが小さいって事が」

白蓮
「ああ・・・こんな事で悩んでいた自分が恥ずかしいよ」

斗詩
「良かったです・・・・・それで一つ相談があるんですが」

白蓮
「はい、私にできることなら何でもやります」

白蓮は悩みを解決してくれた官兵衛たちの相談を聞いた。

斗詩
「実は・・・・・」

官兵衛
「小生たちは野望がある・・・それに協力してほしい」

白蓮
「野望ですか？」

詠
「ええ・・・それは」

白蓮
「それは？」

3人
「「「生徒会をギャフンと言わせる事ダァー！」」」

3人は一斉に叫んだ。

白蓮
「……は？」

白蓮は呆気にとられていた。

官兵衛
「小生は昔は生徒会に所属していたのだが……半兵衛に“君、名前が被るから辞めてくれないか？”と言われクビになったのだ……こんな事あってたまるか！」

斗詩
「私は今も生徒会にいるのですが……姫の我が儘には限界なんです！」

姫とは袁（えん）　麗羽（れいは）

金髪で縦巻きロール

我が儘で高飛車

だが運だけは非常に高い女性。

詠
「私は同じクラスの大谷にいろいろと迷惑をかけられてね……アイツが生徒会に入ったからこれを機に復讐をしてやるのよ！」

3人は形は違うが生徒会に復讐心があるようだ。

白蓮
「あの……一ついいですか？（汗）」

白蓮は戸惑いながら質問をした。

官兵衛
「何だ？」

斗詩
「何ですか？」

詠
「何よ？」

白蓮
「それだったら，ギャフン，じゃなくて，潰す，とかじゃないんですか？」

3人

「「「いや、そうしたらみんな困るじゃん」」」

案外、常識はあるようだ。

白蓮
「そ、そうですか・・・（汗）」

白蓮
（とは言っても私の悩みを解決してくれたし・・・）

白蓮
「わかりました、協力します」

官兵衛
「そうか！　では、これからよろしく頼む！」

とある女子の‘普通’の悩みでした。

外伝・弐、とある女子の悩み（後書き）

普通は個性だーー！

今回は白蓮にスポットを当てて見ました。

さてネタがなくなったな……

次回は転校生が来ます！

感想などが増えて作者は嬉しいです

これからもよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十八話、転校生現る！（前書き）

半兵衛
「キ●ァァァァァァ！」

幸村
「アス●ァァァァン！」

蓮華
「何やっているの！？」

信玄
「幸村ァァ！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語を始めるぞ！」

第十八話、転校生現る！

～あらすじ～

元親が工学部を始めて一週間が過ぎた……

～通学路～

家康
「さて！　今日も頑張るか！」

家康いつも通り登校していた。

その道で……

家康
「ん？」

家康がふと視線を向けた。

？？？
「はわわ…道に迷っちゃいました」

？？？

「あわわ・・・どうしよう？　朱里ちゃ～ん」

そこでは2人の少女が困っていた。

1人の少女は

頭にベレー帽をかぶり

小柄な体

引っ込み思案な性格。

もう1人は

トンガリ帽子をかぶり

こちらも小柄な体で

内気でいつもオドオドしている少女。

家康

（あれは・・・・困っているのか？　ならば、助けなくてはな！）

家康は困っている人がいるとほっとけない性格のようだ。
家康は2人に近づき声をかけた。

家康
「どうした?」

家康が声をかけた瞬間・・・・・

???
「はわーーー!?」

???
「あわーーー!?」

家康
「おわっ!?」

悲鳴を上げた。

家康説得中・・・・・

しばらくして家康はどうにかして落ち着かせた。

2人
「「す、すいませんでした・・・」」

家康
「いや気にしなくていい、落ち着いたか?」

ベレー帽
「は、はい」

トンガリ帽子
「もう・・・大丈夫です」

2人は知らない人に話しかけられて少し緊張していた。

家康
「そうか、ワシの名は徳川家康!　お主たちは?」

ベレー帽
「はわわ・・・・諸葛(しょかつ)　朱里(しゅり)でしゅ・・・でしゅ」

家康
(言い直したのに噛んだ・・・)

トンガリ帽子
「あわわ・・・・鳳(ほう)　雛里(ひなり)でし・・・です?」

家康
(今度は疑問形!?)

家康は戸惑ったがあることを質問した。

家康
「ところで、お主たちは何か困っていたのでは？」

朱里
「は、はい。実は……」

朱里たちは家康に説明をした。

家康
「なるほど。お主たちは転校生なのか！」

朱里
「はい、それで学園に向かってたのですが……」

雛里
「途中で道に迷ってしまいました」

家康
「アッハハハ！　そうか、そうか……では、ワシが道案内をしよう！」

家康は朱里たちに協力すると言った。

朱里
「で、でも‥‥」

雛里
「あわわ‥‥朱里ちゃん」

2人は知らない人に会ったばっかりで戸惑っていた。

そこへ家康が‥‥‥

ポンッ

2人
「「へっ?」」

スリスリッ

2人の頭を撫でた。

朱里
(なんか‥‥)

雛里
（暖かい・・・）

2人は家康の温もりを感じた。

家康
「いきなりで戸惑うのもわかる・・・しかし、ワシはお主たちに協力がしたい。信じてはくれぬか？」

家康は真っ直ぐな目で見た。

朱里
「・・・・・はい、わかりました」

雛里
「・・・・・よ、よろしくお願いします」

家康
「ああ、心得た！」

こうして家康たちは学園に向かうのであった。

家康達移動中・・・・・

～学園・職員室～

家康
「ここで良いか？」

朱里
「はい、大丈夫です」

雛里
「ありがとうございましゅ……あわわ」

家康
「アッハハハ！　では、ワシは行くとするか」

2人
「「本当にありがとうございます」」

家康
「なに気にすることではない……では、また会える日まで！」

そう言って家康は立ち去った。

～1－B～

家康
「……ということがあったのだ」

家康は今朝の事をみんなに話した。

桃香
「へぇ～……（やっぱり優しいよ家康君／／／）」

愛紗
「やはり家康殿は優しいですね」

元親
「ダッハハハ！　やっぱ変わんねーな家康は！」

星
「フッ……やはり面白いな家康は」

焔耶
「お館……／／／」

翠
「何赤くしてんだ焔耶？」

風魔
『優しい』

各々は家康の性格がわかっていた。

愛紗
「でも珍しいですね、この時期に転校してくるとは」

桃香
「ホントだね～」

家康
「あの感じは多分中学生かもな」

家康たちが話していると・・・・・

キーン　コーン　カーン　コーン　ガララッ

紫苑
「皆さん、席についてください」

チャイムがなり紫苑が入ってきた。

紫苑
「皆さん、おはようございます。実は今日からこのクラスに新しい仲間が増えます」

ざわ・・・・ざわ・ざわ・・・ざわ

家康
（転校生？　ということは……）

紫苑
「それじゃあ入ってきて」

ガララッ

朱里
「はわわ……（焦）」

転校生は家康が今朝会った朱里だった。

家康
「やはり朱里だったか！」

朱里
「はわ！　家康さん！？」

紫苑
「あら、知り合い？」

家康
「はい。今朝、知り合ったばっかりですが」

紫苑
「そうなの……でも、まずは自己紹介からね」

朱里
「はい……は、はじめまして……諸葛　朱里と申します。これからよろしくお願いしましゅ！」

ガリッ！

朱里は思いっきり噛んだ。

朱里
「ん～～～～！？（泣）」

一同
「「「かわいい……」」」

クラスは一つになった。

紫苑
「それじゃあ朱里ちゃんは家康君の隣に座ってね」

朱里
「ひゃい」

朱里はまだ舌が痛かった。
そして朱里は家康の隣の席についた。

家康
「これからよろしく頼む！」

朱里
「はわわ！　よ、よろしくお願いします」

家康と朱里が挨拶をして授業が始まった。

一方の雛里は……

～中学・３－Ｂ～

雛里
「よ…よろしくお願いしましゅ」

こちらも噛んでいた。

鈴々
「よろしくなのだー！」

？？？
「よろしくお願いします☆」
？？？
「よろしく～♪」

すると3人の女子が挨拶をした。

1人は張　鈴々。

もう1人は
初々しい顔立ち
世間をあまり知らない
純真だが、騙されやすい性格
名を鶴姫（つるひめ）
最後の1人は
サイドポニー気味に髪をまとめており
ませた性格

かなり悪戯好きな人物

名を馬　蒲公英（たんぽぽ）

翠の妹である

鶴姫

「では！　わたしの隣りへどうぞ☆」

雛里は言われた通りに鶴姫と蒲公英の隣りに行く。

蒲公英

「たんぽぽの教科書を見せてあげるね！」

雛里

「あ・・・ありがとうございます」

蒲公英

「敬語なんてしなくていいよ～」

鈴々

「鈴々たちは友達だから気にしなくていいのだ！」

雛里

「あわわ・・・ありがとう／／／」

鶴姫
「はい☆」

朱里と雛里は転校初日で友達ができた。

第十八話、転校生現る！（後書き）

今回は短めです

そういえば最近みっちゃん見てないな～

けどまだ出ないけどね☆

次回は未定です

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十九話・A、幸村のはじめてのバイト～前編～（前書き）

～あらすじ～

侍の国・・・僕らの国がそう呼ばれていたのは今は昔の話

政宗
「いや、作品ちげーから！」

半兵衛
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、桂じゃない半兵衛だ」

第十九話・A、幸村のはじめてのバイト～前編～

～あらすじ～

朱里と雛里が転校してきた初日の幸村の教室では……

～1－C～

幸村
「佐助！」

佐助
「どうした？　旦那」

ある日の昼下がり。
幸村は急に佐助を呼んだ。

幸村
「佐助に協力してほしいことがある！」

佐助
「……まぁ～た、珍しいことがあるもんだ」

幸村は基本的に佐助にはあまり頼りにしない為、佐助は少し驚いていた。

佐助
「まぁいいぜ。旦那からのお願いだ‥‥俺様ができる事なら何でもやるぜ」

幸村
「すまぬ佐助‥‥して頼み事は」

幸村は真っ直ぐな目で佐助にお願い事を言った。

幸村
「俺に‥‥‥バイトを紹介してくれ！」

佐助
「‥‥‥‥‥‥は？」

佐助は何を言っているのか最初は理解できなかった。

佐助
「どうしたんだ、旦那？　急にバイトがしたいなんて」

幸村

「うむ、実は……」

～回想～

それは今朝の事であった。

雪蓮
「幸村～♪」

幸村
「雪蓮殿？」

幸村が一人で登校していると後ろから雪蓮が現れ、幸村に声を掛けた。

幸村
「どうしたでござるか？」

雪蓮
「ちょっと聞きたい事があってね～」

幸村
「聞きたい事？」

雪蓮

「そうそう♪」

雪蓮は不意に幸村に質問した。

雪蓮
「蓮華の事どう思ってる？」

幸村
「蓮華殿でござるか？」

そう聞かれて幸村はすぐに答えた。

幸村
「もちろん大切な人でござる！」（友達的感覚で）

雪蓮
「そうなの？　良かったわ♪　大切な人で」（恋愛的感覚で）

2人の会話はかみ合っているようでかみ合っていない。

雪蓮
「なら、もっと仲良くなりたいと思わない？」

幸村
「おぉ！　できるのでござるか！？」

雪蓮
「ええ」

そして雪蓮はその方法を教えた。

雪蓮
「プレゼントよ」

幸村
「プレゼント？」

雪蓮
「そうよ。プレゼントを上げれば蓮華ともっと仲良くなれるわよ」

幸村
「なるほど！　……しかしながら、某にはお金が」

？？？
「馬鹿者ッ！」

幸村が金銭的に困っているとどこからともなく声がした。

幸村
「その声はもしや！？」

幸村はバっと屋上を見た。

幸村
「お館様！！」

屋上には信玄の姿があった。
ちなみに幸村は中学時代から“武田道場”という塾に通っており、
そこの教師も務めていたのが信玄である。
それ故に‘お館様’と呼んでいる。

信玄
「トオォォウ！！」

信玄は屋上からこちらに向かって飛び降りた。

そして……

信玄
「ドゥリヤヤヤ！」

幸村

「グハァァァ！！」

ドガァァァァァン！

幸村を殴り飛ばした。

雪蓮
「……（汗）」

雪蓮はいきなりの事で付いてこれていないようだ。

信玄
「幸村よ、今動かないでいつ動くのだ……今こそ！　侵略すること火の如く！」

幸村
「お館様ァァァ！」

信玄
「幸村ァァ！」

幸村
「うお館様ァァァァ！」

信玄

「幸村ァァ！」

幸村と信玄は殴り合いを始めた。

雪蓮
「……そ、それじゃあ頑張ってね（汗）」

雪蓮はこれ以上はついていけないと判断して去っていった。
幸村と信玄の殴り合いは5分間に渡った。

～回想終了～

幸村
「ということだ！」

佐助
（いや、途中で変な方法にいってるから）

佐助は心の中でツッコミをいれた。

佐助
「まぁいろいろと探して明日の放課後に渡すから」

幸村
「おぉ！　すまぬ佐助！」

佐助
「いいの、いいの」

そして佐助は姿を消した。

～翌日・放課後～

佐助
「ざっと探してきたぜ、旦那」

そこにはかなりの量のバイト紙があった。

幸村
「おぉ！　かたじけない佐助！」

佐助
「喜ぶのは後だ。まずは旦那の合うバイトを探すぞ」

幸村
「おぅ！」

幸村と佐助はバイト紙に手に取り探し始めた。

幸村&佐助物色中……

そして1時間が経過した。

幸村
「むぅ～……」

佐助
「なかなか旦那に合ったバイトがないね～」

幸村と佐助は半分以上の紙を見たがなかなか見つからないでいた。

そこへ……

???
「何を～しているのですかぁ～？」

1人のクラスメイトが声をかけてきた。

女性の容姿は

髪は緑色で

のんびりとした口調と思考
しかし頭が切れる人物
名を陸（りく）　穏（のん）

幸村
「の、穏殿か……（汗）」

幸村は顔を引きつかせながら挨拶をした。
実は幸村、穏が苦手なのである。
なぜなら……

穏
「あらぁ～どうしたんですかぁ～幸村さ～ん？」

バイーーン

穏はとてつもない巨乳なのである。
幸村も男なので視線がそちらの方に向いてしまう。
さらに……

穏
「あららぁ～・・・えいっ」

ギュッ

幸村
「な！？／／／　な、ななにを！？／／／」

穏
「私はぁ～幸村さんのことがぁ好きですからぁ～♪」

穏は幸村に好意を寄せていて積極的な行動をしてくるのである。

幸村
「ははははれはれ、破廉恥でござるぞ！／／／」

幸村はかなり動揺していた。

佐助
「やれやれ・・・穏ちゃん、旦那が気絶しちゃうからそろそろやめてやれ」

穏

「はぁ～い♪」

そう言って穏は幸村から離れた。

穏
「それでどうしたんですかぁ～？」

佐助
「ああ、実はな……」

佐助説明中……

穏
「そうなんですかぁ～……わかりましたぁ。私も協力します～」

佐助
「助かるぜ」

幸村
「かたじけない、穏殿」

穏も協力してバイト探しを再開した。

すると……

穏
「こんなのはぁ～どうですかぁ～？」

穏はある紙を幸村に渡した。

そこには・・・・・

【体力がある人大募集！　アイドルにも会える☆　この機会に是非来てください！】

と書かれていた。

佐助
「へぇ～これはいいぜ旦那・・・バイト料がかなりある」

穏
「しかも～人気の‘数え役満☆姉妹’のボディーガードですからねぇ～」

数え役満☆姉妹とは最近人気が出てきたアイドルユニット。
彼女たちは路上ライブから始めて、あるプロデューサーの目にとまりデビューしてたちまち人気になった。
歌はもちろん、彼女がＣＭに出てる商品はたちまち即完売するとも言われている

幸村
「今一つわからないが体力なら某は自信があるでござる！」

佐助
「ならこれで決まりだな。でも、審査があるって書いてあるな」

穏
「幸村さんなら大丈夫ですよ～」

幸村
「おぅ！　どんな困難でも立ち向かってみせるぞ！」

こうして幸村のはじめてのバイトは数え役満☆姉妹のボディーガードに決まった。

～事務所・ＫＯＫＩＮＴＯ～

翌日審査会場に姿を現した幸村。

幸村
「むぅ・・・審査とは何をするのでござるか？」

しかし審査内容を見ていなかった。

幸村
「ともかく、やるからには精進せねばなるまい！」

幸村の気合いは十分にあった。

そこへ……

???
「ん？　幸村じゃねぇか！」

幸村は名前を呼ばれて振り向いた。

幸村
「おぉ！　元親殿！」

そこには元親と風魔の姿があった。

風魔
『知り合いか？』

元親
「っと風魔は知らなかったな……コイツは真田幸村、中学のダチ

だ。そんでこっちは風魔小太郎、俺の新しいダチだ」

風魔
『よろしく』

幸村
「おぅ！　よろしく頼む！」

風魔と幸村は握手した。

元親
「で、なにしてんだ？」

幸村
「うむ、実は……」

幸村説明中……

元親
「なるほどな、それでここにいるってわけか」

幸村
「して、元親殿は何故ここに？」

元親

「こっちは新しい部を発足したんだけど何分なんもねぇ。だからバイトして部費にするわけよ！」

風魔
『その手伝い』

元親
「別に俺1人でも構わないんだけどな」

風魔
『我も部員だ、協力する』

元親
「わりぃな」

幸村
「なるほど！　では共に行動してくれぬか！？」

元親
「ああ！　構わねぇぜ！」

幸村
「感謝する！」

幸村は仲間がいて助かったと思っている。

元親
「にしても人が多いな」

元親は周りを見た。
そこには１００人以上の人だかりがあった。

風魔
『アイドルの警備だからな』

幸村
「これでは受かるかわからんでござる」

元親
「まぁやるだけやるか！」

そう言って幸村たちは人だかりの中に入っていった。

～面接室～

男
「絶対守ってみせます！　だから、サインください！」

？？？
「悪いけど、私情を持ち込む人には頼まないわ」

？？？
「だから、不合格！」

???
「じゃあね～」

男
「そ、そんな～」

男は下を向きながら去っていった。
部屋には3人の女性が椅子に座っていた。

左に座っている女性は

メガネをかけ

ショートカットでクール

名を張（ちょう）　人和（れんほー）

右に座っているのは

サイドポニーで

小悪魔な性格

名を張　地和（ちーほー）

真ん中に座っているのは

ボケーッとして

ポヤーッとしてる

名を張　天和（てんほー）

彼女たちが‘数え役満☆姉妹’なのである。

彼女たちは路上からやっているので基本的な事は自分たちで行っている。

しかし、本当の理由は……

地和

「なんでカッコいい人が来ないのよ！？」

天和

「ホントだねー」

イケメン探しであった。

人和

「2人ともしっかりやって……カッコいいだけじゃダメよ。私たちを守ってくれなかったら元も子もないのよ」

天和
「でも、ゴツい人はヤだなー」

地和
「そうよ！　ちぃはワイルドな人がいいのよ！」

天和
「お姉ちゃんはしっかり守ってくれるカッコいい人がいいなー」

人和
「……ハァ」

人和はかなり苦労しているようだ。

人和
「わかったから次にいくわよ」

天和
「はいはーい」

地和
「次の人どうぞ！」

地和がそう言うと……

ガチャ

幸村
「失礼する！」

幸村が入ってきた。

ピキャァァァン！

その瞬間、天和の後ろに稲妻みたいなものが走った。

天和
「合格！　合格だよ！」

幸村
「本当でござるか！？」

人和
「落ち着いて天和姉さん」

人和は天和に落ち着かせる。

天和
「だってカッコいいよー決まりだよ！」

地和
「えーお姉ちゃんこんなのがいいのー？」

天和
「いいのーお姉ちゃん命令で採用だよー」

人和
「でもこの人バイトはじめてみたいよ」

天和
「そうなの？　でもいいよー」

どうしても天和は幸村を採用したいようだ。

人和
「ハァ…わかったわ、採用で」

幸村
「おぉ！　かたじけない！」

幸村、採用！

人和
「それじゃあ後で内容は教えるから待合室で待っててください」

幸村
「心得た！」

そう言って幸村は面接室から出て行った。

地和
「全く天和姉さんは我が儘なんだから……まぁいいわ、次の方どうぞ！」

地和は次の人を呼ぶ。

ガチャ

元親
「邪魔するぜぇ」

次は元親の番だった。

ドカァァァァン！

元親を見た瞬間、地和に稲妻が落ちた（実際に落ちました）

地和
「いい！　ちぃはこの人がいい！」

人和
「だから落ち着いて」

地和
「なんでよ！　天和姉さんが我が儘言ったからちぃだっていいじゃない！」

人和
「だからって……」

天和
「まぁまぁ人和ちゃん。この人強そうだから大丈夫だよー」

人和
「……ハァ」

人和は本当に苦労しているようだ。

人和
「わかったわ。それじゃあ待合室で待ってもらえますか？」

元親
「ああ、いいぜ（大丈夫かコイツら？）」

元親は採用されたがここで良かったが疑問になった。
元親、採用！

人和
「それじゃあ次の人入ってきてください」

人和は次の人を呼ぶ。

ガチャ

風魔
「……」

すると風魔が入ってきた。

天和
「……えーと（汗）」

風魔
『よろしく頼む』

地和

「……あの～（汗）」

天和と地和は無口でプラカードで会話する風魔に少し焦った。

だが人和は……

人和
「少しいいかしら？」

風魔
『構わん』

人和
「この履歴書は本当かしら？」

風魔
『ああ』

人和
「……そう」

風魔の履歴書が本当かどうか聞いた。

そして人和は少し考えて……

人和

「いいわ、採用で」

採用した。

風魔
『感謝』

人和
「それじゃあ待合室で待っててください」

風魔
『承知』

そう言って風魔は去っていった。

天和
「人和ちゃん、なんで採用したの？」

地和
「明らかに怪しいでしょ！」

天和と地和は風魔の採用に疑問を持った。

人和

「別に問題ないわ」

地和
「なんでそんな事言えるのよ？」

人和
「彼、元‘北条建設’のボディーガードよ」

天和
「え！？」

地和
「嘘でしょ！？」

北条建設……日本が誇る建設会社。
恋ＢＡＲＡ学園も北条建設が手掛けている。
そこの当時の社長、北条（ほうじょう）　氏政（うじまさ）はよく命を狙われる事で有名だった。
しかしながら当時そこに雇われていたボディーガードが数々の危機を救い出した。
氏政が辞めたと同時にそのボディーガードは風のように消えた。
そのボディーガードは‘風の悪魔’という名で伝説となっている。

人和
「何故‘風の悪魔’がここにいるのかわからないけど彼なら心強いわ」

天和
「ふーん……なら、もうボディーガードはいらないね」

地和
「確かに！　……じゃあこのあとの人には帰ってもらおうよ！」

人和
「ハァ……もう勝手なんだから」

と言いつつ人和もこれ以上採用しない気でいた。
こうして幸村ははじめてのバイトに挑戦するのであった。

第十九話・A、幸村のはじめてのバイト～前編～（後書き）

数え役満☆姉妹難しいな～

天和とか地和とか人和とか……

次回は後編です！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第十九話・B、幸村のはじめてのバイト～後編～（前書き）

卑弥呼
「ガン●ムファイト！レディー……」

三成
「ゴォオオオオ！」

月
「みっちゃん！？」

詠
「ちょっと！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まるわよ！」

第十九話・B、幸村のはじめてのバイト～後編～

～あらすじ～

幸村はバイトの審査に合格した！

～待合室～

幸村達が採用されて数分が経過した頃。
皆は雑談していた。

幸村
「皆が採用されて良かったでござる！」

元親
「まぁな！　やっぱ知ってるヤツと同じバイトだと居心地が良いもんだ！」

風魔
『確かに』

幸村
「しかしながら他の者たちはどうなったでござるか？」

元親

「ここに来ねぇってことは落とされたんだろ」

待合室には幸村たちしかいなかった。

しばらく雑談していると……

ガチャ

人和
「お待たせしました」

先ほどの天和たちが入ってきた。

天和
「合格おめでとうー」

地和
「これから仕事を発表するわ！」

幸村
「おぅ！」

元親
「やるからにはやってやるか」

風魔
『ああ』

幸村達ははやる気を出した。

人和
「仕事は今日のコンサート終了までの護衛です」

天和
「わたしたちは人気だからーしっかり守ってね！」

地和
「あともう一つあるわよ！」

ドンッ！

そう言って天和たちの後ろに大量の紙が出てきた。

人和
「この宣伝の紙を配ってください」

風魔
『承知』

シュン

そう言って風魔は紙と共に一瞬で消え……

スパッ

風魔
『完了』

仕事を終えてきた。

地和
「早ッ！？」

人和
「さすがね」

地和はかなり驚いていたが人和は実力通りの働きに感心した。

人和
「それじゃあ私たちのこれからの護衛ですが……」

天和

「お姉ちゃんはこの人がいい！」

天和は幸村を指した。

幸村
「某か？」

天和
「うん！　名前は？」

幸村
「某、真田幸村と申す！」

天和
「幸村かー・・・それじゃ、ユッキーだね！」

幸村
「ユ、ユッキーでござるか？（汗）」

人和
「まぁ天和姉さんが決めた人だからいいわ」

天和
「やったー！　わたし天和、よろしくねユッキー♪」

幸村
「う、うむ」

幸村は戸惑いながらも天和の護衛についた。

地和
「それじゃあちぃはこの人がいい！」

地和は元親に抱きついた。

元親
「俺はアンタかい？」

地和
「そうよ！」

元親
「名前は？」

地和
「地和だよ」

元親
「俺は元親。よろしくな」

地和
「よろしく！」

地和には元親がついた。

人和
「……となると必然的に風魔さんが私の護衛になりますね」

風魔
『よろしく頼む』

人和には風魔がついた。

人和
「コンサートまでまだ時間がありますから自由時間にしますのでそこも護衛をしてください。それじゃあコンサートまでの時間までよろしくお願いします」

幸村
「心得た！」

幸村のはじめてのバイト開始！

～ショッピングモール・曹魏～

そこには幸村と天和の姿があった。

天和
「ねぇユッキー？」

幸村
「な、何でござるか！？／／／」

天和
「どれが似合うかなー？」

どうやら天和は服を選んでいるようだ。
しかし、幸村は何故か顔を真っ赤にしていた。
その理由は……

幸村
「て、天和殿！／／／」

天和
「なぁに、ユッキー？」

幸村
「そそそっその……もう少し離れて歩いたらどうでござるか？／／／」

天和は幸村に抱きついて行動している為。

天和
「えー、なんでー？」

幸村
「ははは破廉恥でござる！／／／」

天和
「ぶーぶー」

けど天和は離れようとはしない。

幸村
（耐えろ幸村、これも修行と思えば火もまた涼しくなるのだ！）

幸村ショート寸前。

天和
「ねぇユッキー」

幸村
「な、何でござるか！？／／／」

幸村は天和に呼ばれて返事をする。

天和
「ユッキーって彼女いるー?」

幸村
「……そ、その前に離れてくれぬか!?／／／」

天和
「ぶー……わかったよー」

天和は嫌々ながらも幸村から離れた。

幸村
「すまぬ…某、こういう事には慣れていない故に許していただきたい」

天和
「いいよー♪……で、ユッキーって彼女いるの?」

幸村
「彼女でござるか?」

幸村はすこし考えてから天和に答えた。

幸村
「彼女とはどういうものなのだ？」

天和
「え？」

天和は時間が止まった。

そして……

天和
「えーーーー！？」

壮大に驚いた。

幸村
「ど、どうしたでござるか？（汗）」

天和
「ユッキー彼女知らないの！？」

幸村
「う、うむ（汗）」

幸村は幼い頃から修行をしてきたのでこういう話は皆無なのである。

天和
（彼女も知らないなんて……あれ？　ということはまだ彼女はいないはず……なら、わたしが彼女になればユッキーも彼女というものがわかる！　正に一石二鳥だよ！）

この間の時間1秒。

天和
「じゃあわたしが彼女を教えてあげる！」

幸村
「？　……ともかくよろしく頼む！」

幸村は何もわからずに頼んでしまった。

天和
「じゃあまずは……」

ギュッ

幸村
「な！？／／／」

天和
「これに慣れる事だよー」

天和はまた幸村に抱きついた。

幸村
「ぐぐぐ～……／／／」

天和
「～♪」

護衛というかデートである。
これはコンサートが始まるまで続いた。

一方の元親は……

～レストラン・蜀卓～

地和
「ねぇねぇチカにぃ？」

元親

「なんだ、ちぃ坊？」

地和と元親は互いをあだ名で呼ぶようにしてるくらいに仲良くなっていた。

地和
「チカにぃはちぃたちの事知ってたの？」

地和は元親が自分たちの事を知っているのか気になっていた。

元親
「悪いな、俺はこういうのはちと苦手でね」

地和
「そうなんだ・・・」

それを聞いて地和は少し落ち込む。

地和
「でも！　コンサートを見れるから今日で覚えてね！」

元親
「ああ、いいぜ！」

地和
「そ、それと・・・／／／」

地和は顔を赤くしながらある事を聞いた。

元親
「ん、どうした？」

地和
「チ、チカにぃは・・・彼女いるの？／／／」

地和は案外こういうのにはウブみたいだ。

元親
「彼女？　いねぇぜ」

地和
「ホントッ！？」

元親
「ああ」

地和
（じゃあもしちぃが彼女になったら・・・お互いを意識していろんな場所をデートをしてそして最後は・・・キャー！／／／）

地和は腰を振りながら自分の妄想に入った。

元親
「？」

元親はいきなり地和が腰を振り始めたので何が起きたのかわからずに黙って見ていた。

その頃風魔たちは……

～天下統一・屋上～

人和
「それはアソコにお願いします」

スタッフ
「はい、わかりました」

風魔
「……」

人和はコンサート会場の準備をしていた。

人和
「今回は何人警備員が来てくれましたか？」

スタッフ
「だいたい８０人くらい集まりました」

人和
「いつもより少ないですね……」

スタッフ
「会場自体があまり大きくないのでこの人数が限界みたいです」

人和
「そうですか、わかりました」

そう言ってスタッフは去っていった。

人和
「ふぅ」

風魔
『休まないのか？』

風魔は人和の心配した。

人和

「ええ、私は元々マネージャーの仕事もしていたからこういうのは自分の目で確認したいの」

風魔
『だが、働き過ぎだ』

人和
「……私はこんな人気になって怖いの。この人気がなくなって何もなくなったら……悲しむのは姉さんたちなの。だから……」

トンッ

人和
「え？」

人和は自分の気持ちを話している途中で風魔に肩を叩かれた。

風魔
『家族思いだな』

人和
「そ、そんなことは……／／／」

風魔
『だが、貴殿が働き過ぎて倒れてしまったら悲しむのはその家族だ』

人和
「ッ！」

風魔の言葉に人和は自分の事を心配している人がいることに気づいた。

人和
「……私は」

風魔
『だから、休め』

人和
「え？　でも」

風魔
『後は我がやる』

人和
「……ハァ、わかったわ」

そう言って人和はある紙を渡した。

人和
「このあとの流れはこの紙に書いてあるわ……わからない事があれば私に聞いて」

風魔
『承知』

シュン

風魔は確認して消えた。

人和
（……心配してくれたの、はじめてかも）

人和
「／／／」

人和は風魔の事を考えたら顔を赤くした。
そしてコンサートの時間になった。

～楽屋～

人和
「このあとのコンサートは舞台裏で見ていてください」

天和
「ちゃんと見ててくださいねー」

地和
「でも邪魔はしないでよ！」

そう言って天和たちは楽屋を出て行った。

元親
「さて、アイドルのコンサートは初めて見るな」

風魔
『同じく』

元親
「ところで……」

元親は幸村を見た。

幸村
「しゅ……修行で……ござ……る」

シュ～ッ

幸村の頭から湯気が出てた。

元親
「どうしたんだ？　アイツ」

風魔
『さあ』

～ライブ～

ワアァァァァァァ！！

天和
「みんな大好きーー！」

ファン
「てんほーちゃーーーーん！」

地和
「みんなの妹！」

ファン
「ちーほーちゃーーーーん！」

人和
「とっても可愛い」

ファン

「れんほーちゃーーーーん！」

ワアァァァァァァ！！

天和
「みんなー来てくれてありがとーー！　天和とっても嬉しい♪」

地和
「今日は最初っからクライマックスでいくぜぇー！」

人和
「楽しんでいってください」

ワアァァァァァァ！！

天和
「ミュージック、スタート！！」

♪～♪～♪

～舞台裏～

元親

「こりゃあすげーな」

風魔
『ああ』

幸村
「これは……まことにすごいでござる！」

幸村たちは初めて見るコンサートライブに興奮していた。

風魔
『彼女らは相当苦労したらしいからな』

元親
「熱心になるのもわかるぜ」

幸村
「……」

元親
「どうした？　幸村」

幸村
「いや、先ほどまでは普通の女性となにも変わらないと思っていたがこうして見るとまるで別人。これほどまでに全力で行っている事に……純粋に感動した」

元親
「……確かにな」

幸村たちはコンサート見続けた。

そして終盤……

天和
「みんなー！　コレが最後の曲だよー！」

ワアァァァァァ！！

天和が言って最後の曲に移ろうとした。
その時に事件は起きた。

ファン１
「天ちゃーーーん！」

ファン２
「ちーちゃーーん！」

ファン３
「レンたぁーーん！」

突如ファンが舞台場に上がってきた。
警備員の少なさが原因と見られる。

天和
「え！？」

天和達は急な事で驚いた。

ファン１
「ハァ、ハァ…好きだよーー！　天ちゃーん！」

ファン２
「ちーちゃーん！　僕が抱きしめてあげるー！」

ファン３
「ぶるあぁぁぁぁ！　レンたぁーーん！」

そしてファンたちが襲ってきた。

だが……

幸村
「オラオラオラァァァ！　烈火ァァァァ！！」

ババババッ！

ファン
「「「ギャーーー！」」」

幸村が会場に上がりファンたちを吹き飛ばした。

天和
「ユッキー！？」

天和は幸村の登場に動揺していた。

幸村
「オイ！　そこの者たち！」

ファン
「「「！？」」」

幸村
「貴殿等は彼女らのファンではないのか！？　何故彼女らに迷惑をかける！　何故彼女らが一生懸命歌っているのに邪魔をする！　貴殿等の行動に恥を知れ！！」

シーーーン……

幸村の言葉に会場は静寂に包まれた。

その中、幸村は天和たちの前に行き……

幸村
「すまぬ！」

頭を下げた。

天和
「な、何でユッキーが頭を下げるの！？」

天和は戸惑っていた。

幸村
「どんな形であれ某がこの場を邪魔したことには変わらない……
これは完全にバイトとは全く関係ない事。故にこのバイトは不成立
……だからお金もいらぬ」

人和

「でもこれは護衛の職務を果たせているわ」

幸村
「たとえそうだったとしても某が全力で頑張っているところに邪魔していいとは限らん」

地和
「だ、だからって」

元親
「やめときな」

今度は元親と風魔も舞台場に上がってきた。

元親
「ソイツは頭がかてーから言い出したらやめねーぞ」

人和
「……」

元親
「ということはこの場にいる“俺たち”もクビってことだな」

風魔
『確かに』

幸村
「な!?　それは関係ない！　クビなら某だけで」

元親
「オイオイ、何言ってんだ…俺たちもこの場に立った時点で邪魔しちまったじゃねーか」

風魔
『故に我らもクビ』

幸村
「……すまぬ」

元親
「いいって事よ……それじゃあな」

風魔
『代わりの者は用意した、安心してくれ』

そう言って元親と風魔は舞台場から降りた。

幸村
「……天和殿」

天和
「は、はい」

幸村
「そなたたちの全力で頑張っている姿に純粋に感動したでござる。だからぜひ、これからも変わらずに生き方で頑張って頂きたい…

…それでは失礼する」

そして幸村も舞台場から降りた。

3人

「「「……」」」

こうして幸村のはじめてのバイトは失敗に終わった。

～後日・1－C～

幸村

「むぅ～……結局蓮華殿のプレゼントを買えなかったでござる。どうしたものか」

幸村は蓮華に上げる予定であったプレゼントを買えなかったのでどうすればいいか考えていると……

佐助

「ちょっとちょっと、旦那ー！」

穏

「幸村さぁ～ん！」

幸村
「どうした穏殿に佐助？」

佐助と穏は慌てながら幸村に駆け寄ってきた。

佐助
「どうしたじゃないよ……まずはこれを見てくれ」

佐助が幸村に渡した紙にはこう書かれていた。

【数え役満☆姉妹、休業！？　普通の女の子に戻ります。】

穏
「幸村さんがバイトが終わった後に休業したみたいですよ～」

佐助
「旦那、バイト先で何やらかしたの！？」

幸村
「そ、それは……（汗）」

幸村が言おうとした瞬間……

キーンコーンカーンコーン　ガララッ！

信玄
「皆の者！　席につけ！」

チャイムが鳴り信玄が入ってきた。
みんなは席についた。

信玄
「まずは皆に報告する事がある。このクラスに新しい仲間が増える！」

ざわ…ざわ……ざわ

クラスにざわめきが起きた。

信玄
「それでは入ってきてくれ」

？？？

「はーい」

ガララッ！

クラス
「「「「……え？」」」」

幸村
「な！？」

クラスは唖然として幸村は驚いた。

信玄
「では今日からこのクラスの仲間になる」

天和
「天和でーす。よろしくねー♪」

転校生は天和だった。

幸村
「天和殿ッ！？」

天和
「え？　……アーーッ！　ユッキーだー！」

そう言って天和は幸村のところまで行き……

ギュッ

抱きついた。

クラス
「「「「な！？」」」」

その行動に一同は驚いた。

幸村
「どどどどうしてここに！？／／／」

幸村は抱きついてきた天和に耐えながら質問した。

天和

「わたし決めたの！　ユッキーと結婚する！」

クラス
「「「「えーー！？」」」」

一同は驚愕した。

蓮華
「ゆ～き～む～ら～……（怒）」

穏
「ゆ～き～む～ら～さぁ～ん……（怒）」

ゴゴゴゴゴゴッ！！

蓮華は殺気を出しながら幸村に近づいた。

幸村
「れ、蓮華殿に穏殿……（汗）」

蓮華
「これは一体どういう事よ！（怒）」

穏

「納得する説明をしてくださぁ～い（怒）」

蓮華と穏が問いただそうとしたら……

天和
「ダメーーー！」

天和が庇ってきた。

天和
「ユッキーはわたしの夫だから取っちゃダメ！」

蓮華
「いきなり現れて何言ってんのよ！」

穏
「そうですよ～幸村さんは私の旦那さまなんですからね～」

蓮華
「アナタもよ！」

ギャーギャー！

蓮華たちは幸村争奪戦に突入した。

幸村
「さ、佐助！　助けてくれ！！」

佐助
「悪いが今回ばかりは無理だ、旦那」

幸村
「お、お館様！？」

信玄
「これも修行だ！　幸村！」

また一段と騒がしくなる１－Ｃでした。

第十九話・B、幸村のはじめてのバイト～後編～（後書き）

ちょっと遅くなってしまったな。

ちなみに地和と人和は一つ下でお願いします。

次回はいつも通り未定です。

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十話、三成の世話！？（前書き）

信玄
「あいるびーばっくじゃ！」

佐助
「英語喋れないなら無茶しないでくれない！？」

幸村
「お館様！恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まりますぞー！」

第二十話、三成の世話！？

～あらすじ～

天和たちが恋姫ＢＡＲＡ学園に転校してきた！

～廊下～

三成
「……」

月
「……」

三成と月はあるところへ向かっていた。
しかし、その間会話はなく月は少し困っていた。

月
「み、みっちゃん」

勇気を振り絞り月は三成に声をかけた。

三成
「何だ?」

月
「どこに向かっているの?」

月はどこに行くのかわかっていないようだ。

三成
「生徒会室だ」

月
「生徒会室?」

三成
「ああ」

三成と月は生徒会ではない。

三成は生徒会に入るつもりでいたがその時に半兵衛に……

半兵衛
「君にはクラス委員長に参加して貰いたい」

三成
「クラス委員長ですか?」

半兵衛
「そしたら秀吉も僕も嬉しい限りだよ」

三成
「わかりました！」

こうして三成はクラス委員長に立候補した。
月は三成がクラス委員長に立候補すると慌てながら自分も立候補した。

月
「な、なんか悪い事したのかな」

三成
「私に限ってそれはないッ！」

三成は月に怒鳴りつけた。

月
「へぅ……」

三成
「……行くぞ」

月

「ま、待ってよ～」

そして生徒会室に着いた三成と月。

～生徒会室～

三成
「失礼します」

月
「し、失礼します」

三成と月は生徒会室に入った。
そこには半兵衛と麗羽がいた。

半兵衛
「いやーすまないね三成に月君、急に呼び出したりして」

麗羽
「おーっほっほっほ！　来ましたわね」

三成
「いえ問題ありません、半兵衛様」

麗羽

「……わたくしは？」

三成
「……いたのか？　貴様」

麗羽
「ムキーーッ！」

月
「お、落ち着いてください」

月は麗羽を落ち着かせる。

三成
「それでご用件は何ですか？」

半兵衛
「今回は僕じゃなくて麗羽君のお願いなんだよ」

三成
「コイツの？」

麗羽
「コイツではありません！　……その通り！」

ババァーンという効果音が聞こえた気がした。

麗羽
「詳しい事は……七乃(ななの)！」
???
「はーい」

麗羽に呼ばれ1人の女性が現れた。

女性の容姿は

青色の髪をして

かなりのクセ者

自覚はないが毒舌を吐く悪人のような性格

名を張(ちょう)　七乃

三成と同じクラスで生徒会に所属している。

七乃
「実は今週の日曜日に麗羽さまの妹、美羽(みう)お嬢さまがこちらの学園に転校してくるのですが…三成さんには日曜日にお嬢さまの相手をして頂きたいんです」

美羽とは

名を袁（えん）　美羽

金髪でストレート

高飛車なお嬢様

麗羽の妹である。

三成

「何故私がそんな事をしなければならん！」

三成は七乃に怒鳴りつけた。

半兵衛

「まぁまぁ三成、これは僕のお願いでもあるんだ」

三成

「半兵衛様ッ！？」

半兵衛

「実は生徒会は今週の日曜日に用事が入っていてね……どうしても抜けられないんだ。だから、今回は三成君にお願いしたんだけど引き受けてくれないか？」

三成

「……わかりました、半兵衛様の命とならば」

半兵衛
「ありがとう、助かるよ」

三成は引き受けた。

半兵衛
「用件は以上だよ。それから、月君はこのあと話したいことがあるからちょっと残っててくれないか？」

月
「わ、わかりました」

三成
「それでは失礼します」

三成は生徒会室を後にした。

半兵衛
「さて……実は月君にも頼みたい事があってね」

月
「私にですか？」

半兵衛

「そう君にね……」

月

「な、なんですか？」

月はオドオドしていた。

半兵衛

「大丈夫だよそんなに怯えなくて。君に頼みたい事、それは……」

月

「それは？」

半兵衛

「三成の尾行だよ」

月

「……えーー！？」

月は驚いた。

半兵衛

「三成は良くやってくれている。しかし、三成は自分の事に興味が

なさすぎる。それだと、この先生きていく中でいろいろと苦労してしまう。だから、今回のこの件については三成に少しでも自分の事に興味を持ってもらおうという意味でも彼に託したんだ。君にはそれを見届けてほしいんだ、頼む」

半兵衛は月にお願いをした。

そして月は……

月
「……わかりました」

引き受けた。
半兵衛は少し笑って感謝の言葉を言った。

半兵衛
「フフッ……ありがとう、一応七乃君にもついてもらうから一緒に行動してくれ」

月
「え？　でも、生徒会の用事は……」

麗羽
「おーっほっほっほ！　問題ありませんわ！　生徒会の皆さんは優秀ですから！」

七乃
「それに、わたしもお嬢さまが心配ですからねー」

月
「わ、わかりました」

こうして三成の尾行が決まった。

～日曜日・校門前～

三成は待ち合わせ場所に既に来ていた。
だが一向に美羽が来る気配がない。

三成
「……（イライラ）」

そのため三成はイライラしていた。

３０分後……

七乃
「すいません遅れてしまいましたぁ」

三成

「何をしているのだッ！　貴様ッ！」

七乃と小柄な少女が三成の前にやってきた。
三成は悪びれた様子のない七乃にキレていた。

七乃
「だってお嬢さまの寝顔が可愛かったですもん」

三成
「そこに直れ！　今すぐ斬首してやる！」

七乃
「まぁまぁまぁ」

???
「七乃や、こ奴か？　妾のために働いてくれるのは？」

七乃
「はい、お嬢さま」

どうやらこの少女が美羽のようだ。

美羽
「うむ、妾が美羽じゃ！　よろしく頼むの！」

三成

「……フン」

美羽
「なッ！　コラ、妾が挨拶をしたなら主も挨拶せんか！」

三成
「何だと？」

美羽
「全く常識がなっとらんの」

三成
「貴様ッ！」

三成は美羽に飛びかかろうとしたが……

七乃
「はい、ダメですよ」

七乃に止められたら。

三成
「退け！　貴様も斬滅するぞ！」

七乃
「みっともないですよ三成さん、お嬢さまは何も悪くないですし。

しっかりと自己紹介してください」

三成
「クッ……石田三成だ」

美羽
「うむ、良いぞ！」

三成が美羽に自己紹介した後に七乃が……

七乃
「それではしっかり相手をお願いしますね」

と言って学園に向かっていった。

美羽
「三成よ！　妾は天下統一に行ってみたいのじゃ！」

美羽は目をキラキラさせながら三成に言った。

三成
「……好きにしろ」

美羽

「うむ、では出発なのじゃ！」

三成と美羽は天下統一に向かった。

三成と美羽が去っていった後の校門前には……

月

「大丈夫でしょうか？」

七乃

「それを確認するために尾行するんじゃないですかぁ」

隠れていた月と先ほど学園から戻ってきた七乃が尾行していた。

更に……

霞

「なんやおもろい事になっとるやないかい」

何故か霞もいた。

霞は月から話を聞き自分も行くと言い出して今に至る。

七乃

「では追いかけましょうか」

霞
「がってんや！」

月
「は、はい」

こうして三成尾行作戦は実行された。

～天下統一・ゲームセンター～

美羽
「おぉ！　スゴいのじゃ！」

美羽ははじめてこんな大きなゲームセンターに興奮していた。

三成
「はしゃぐな」

美羽
「無理じゃ！　時代が妾を呼んでいるのじゃ！」

三成
「意味がわからん」

美羽
「ともかく遊ぶのじゃ！」

そう言って美羽は三成の服を引っ張り中へと消えた。

霞
「なぁ月っち」

月
「はい、何ですか？」

霞
「みっちゃんってゲーセンに行った事あるんか？」

七乃
「あ、それ私も気になります」

霞と七乃は気になることを質問した。

月
「……幼い頃に一回だけ……」

2人
「「あー……」」

2人は納得した。

美羽
「まずはこれで遊ぶのじゃ！」

美羽が指したのはゾンビを銃で撃つガンシューティングゲーム。

三成
「では始めるかの三成！」

三成
「何故私がやらんといけないのだ」

美羽
「いいからやるのじゃ！」

美羽はコインを入れてゲームを始めた。

美羽
「この！　この！」

バンバンッ！

三成
「……」

ババババババンッ！

美羽
「おぉ！　スゴいの！」

三成
「いいから前を見ていろ」

三成はスゴい勢いでゾンビを撃ち殺していた
それを影で見ていた月たちは……

霞
「なんやねん！　あれ！」

霞は三成の動きを疑った。

月
「みっちゃんは大抵の事はすぐに出来るんです」

七乃
「それにしてもあれはスゴいですよ」

ちなみに三成はワンコインでクリアした。
この後三成と美羽は様々なゲームで遊んだ。

美羽
「楽しめたのじゃ！」

美羽はいろんなゲームを堪能した。

三成
「なら、もう行くぞ」

三成はとっとと終わらせたいようだ。

美羽
「うむ！　……ん？」

美羽は進めていた足を止め、あるゲームを見た。

三成

「何をしている？」

三成は急に止まった美羽を見て同じ方向を向いた。
そこにはＵＦＯキャッチャーがあった。
中の景品はクマのぬいぐるみである。

クイックイッ

三成は服を引っ張れたのでそちらに振り向くと美羽が上目遣いをしてお願い事をしていた。

美羽
「と、取ってくれんかの？」

三成
「……」

三成はこの行動に覚えがあった。

三成
（……昔の月と同じ事をしている……）

幼い頃一回だけ月と行った時の思い出であった。

美羽
「ダ、ダメかの（涙目）」

美羽は返事をしないので断れたと思った。

だが三成は……

三成
「……待っていろ」

そう言ってＵＦＯキャッチャーに向かっていった。

そして……

三成
「……フン」

ポイッ

すぐ景品を取り美羽にクマのぬいぐるみを上げた。

美羽
「おぉ！　感謝するのじゃ！」

美羽はクマのぬいぐるみを抱きかかえながら三成に礼をした。
そしてゲームセンターを後にした。

霞
「なんやかんや優しいやないかい、みっちゃん！」

七乃
「私もはじめて見ましたよー」

霞と七乃は三成の行動に少し三成の人間性に触れた気がした。

月
（……みっちゃん）

月は昔の事と重なって見えた。
三成と美羽はこのあと様々なところを回った。
そして美羽の帰りの時間になり校門前で七乃を待っていた。

美羽
「今日は楽しかったのじゃ！」

三成
「……フン」

美羽
「む～。相変わらず無愛想な奴じゃの」

美羽は三成の無愛想ぶりに少し困っていた。

美羽
「む～……そうじゃ！」

美羽は何か閃いた。

美羽
「三成よ！　妾が主の妻になってやるのじゃ！」

美羽はとんでもない事を言い出した。

三成
「何故そうなる」

三成は意味が分からない感じであった。

美羽
「主はいろいろと興味が無さ過ぎるのじゃ！　だから妾がいろいろと教えてあげるのじゃ！」

そう言って美羽は三成に近付いて行き抱きつこうとしたが……

月
「ダ、ダメです！」

月が乱入してきて三成と美羽の間に入った。

三成
「月ッ！？　何故此処にいる！？」

月
「今はそれどころじゃありません！」

大いにそれどころである。

美羽
「ぬ！？　何をするのじゃ！」

月

「みっちゃんは渡しません！」

美羽
「主は関係ないのじゃ！」

月
「関係なくありません！　みっちゃんは私の……ごにょごにょ／／／」

月の乱入で騒がしくなった。

霞
「あちゃー耐えられんかったか」

七乃
「遂にお嬢さまが恋を……明日は赤飯ですかねー」

半兵衛
「フフ、これを機に自分に興味を持ってくれたら有り難いんだけどね」

いつの間にか半兵衛が来ていた。

三成
「……」

三成は黙って月と美羽の喧嘩を見ていた。

第二十話、三成の世話！？（後書き）

書いている途中で全消しをしてしまったため遅れました

申し訳ありません

次回はいつも通り未定です！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十一話、風魔の休日（前書き）

幸村
「落ち着け！　Ｋｏｏｌになれ！」

家康
「富●フラッシュ！」

桃香
「どこのひぐらし！？」

朱里
「はわわ：恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりましゅ！」

第二十一話、風魔の休日

〜あらすじ〜

三成が美羽の世話をしている時の風魔の話……

〜商店街〜

此処は学園から少し離れた商店街。
そこで1人の青年が住んでいた。

スパッ

風魔
『完了』

風魔小太郎である。

オバチャン
「ありがとね小太郎ちゃん」

どうやらこの人のバイトをしていたみたいだ。

風魔
『気にしないでくれ』

オバチャン
「本当に助かるよ・・・はい、これ」

そう言ってオバチャンが渡したのはお金が入った封筒。

風魔
『感謝』

オバチャン
「いいんだよ、これぐらいしかあげられないからこっちが感謝したいくらいだよ」

風魔
『気にしないでくれ、では』

シュン

そう言って風魔は風のように消えた。

風魔
「……」

風魔はこのあとの目的地に向かっている。

その最中……

???
「ちょっと！　やめてよ！」
???
「そうです！　やめてください！」

人通りの少ない道で2人の少女がチンピラたちに絡まれていた。

1人は鶴姫

もう1人は

褐色した肌

天真爛漫でお転婆だが

人懐っこく憎めない人物

名を孫　小蓮（しゃおれん）

蓮華の妹である

チンピラ１
「いいじゃんよー少しぐらい付き合ってくれたってよー」

チンピラ２
「そうそう！」

チンピラ３
「俺たちが君たちを天国に連れてってあげんぜ！」

チンピラ４
「激流に身を任せな！」

チンピラたちは全然引き下がらない。

鶴姫
「いい加減にしてください！」

小蓮
「全くこういう奴らはどこでもいるのよねー」

チンピラ１
「だから俺たちに付き合ってよー」

小蓮
「もう……あっちに行って！」

コキーン！

痺れをきらした小蓮は思いっきりチンピラ1の股間を蹴った。

チンピラ1
「ひでぶ！」

まともに喰らったチンピラ1はそのままうずくまった。

チンピラ2
「オイ、何てことするんだ！」

チンピラ3
「コイツのクララが立たなくなったらどーすんだよ、テメー！」

チンピラ3
「俺らはいつもここに世界名作劇場があんだよ！」

チンピラたちは小蓮の行動に激怒した。

小蓮
「シャオは知らないもーん。アンタ達が悪いんだから」

鶴姫
「自業自得です！」

小蓮たちも悪びれる様子はない。

チンピラ２
「クソ！　もう我慢できねー！」

チンピラ３
「構うことねー！」

チンピラ４
「やっちまおーぜ！」

チンピラ達
「「「「ヒャッハー！」」」」

チンピラ達が二人に襲いかかってきた。

小蓮
「クッ！」

鶴姫

「キャッ！」

二人は身構える。

その時……

ヒュウウウウウッ

一陣の風が二人の場所に吹き始め、チンピラ達を横切る。

すると……

スパァァァン！

チンピラ達

「「「「ギャーーッ！？」」」」

チンピラたちは、何かに吹き飛ばされた。

小蓮

「な、何？」

鶴姫

「え？　え？」

二人は何が起きたかわからず困惑していた。

そこへ……

風魔

「……」

風魔が現れた。

小蓮

「え？　あの人が助けてくれたの？」

鶴姫

「た、多分……」

2人は急に現れた風魔が助けてくれたのか聞いてみた。

小蓮

「アナタが助けてくれたの？」

小蓮は聞くが……

風魔
「……」

シュン

返事もせずに去っていった。

小蓮
「な、何だったんだろ……」

鶴姫
「わかりません……ですが」

2人
「「カッコよかったねー！（ですねー☆）」」

そんな風魔の姿に二人の乙女心に恋の火がついた。

～北条宅～

スパッ

風魔
「……」

風魔は北条宅に到着した。

???
「おぉー！　来たか！　さ、上がっとくれ」

すると玄関先で待っていた老人がいた。
この老人は北条　氏政。
元北条建設の社長である。

風魔
『承知』

風魔は氏政に誘われ北条宅に入った。

氏政
「いやーすまんの！　忙しいのにワシの相手をしてくれて」

風魔
『構わない』

風魔は毎週日曜日はこの北条宅にお邪魔している。

氏政
「風魔よ、学校で友達と仲良くやっとるか？」

風魔
『問題ない』

氏政
「そうかそうか、それは良かったわい！」

氏政は風魔を実の孫のように可愛いがっていた。

氏政
「やっぱりお主をあの学校に推薦しといて良かったわい！」

どうやら氏政が恋ＢＡＲＡ学園を推薦してくれたらしい。

風魔
『その件については感謝している』

氏政
「よいよい、お主は中学に行かず学生らしい事をしとらんのじゃからな」

風魔は幼い頃から訓練をされており小学校と中学校には行っていなかった。
勉学は全て訓練時代に学んだ。

氏政
「じゃからこれはワシの恩返しと思っとくれ」

風魔
『感謝』

そう言って氏政と風魔はまた雑談を始めた。
しばらく雑談して風魔が帰る時間になった。

氏政
「ではな風魔！　今度は友達も連れてくるのじゃぞ！」

風魔
『前向きに検討する』

シュン

そして風魔は風のように消えた。

風魔
「……」

スパッ

風魔は自分の家に帰っていたがある人物を見かけ足を止めた。

～公園～

翠
「ハァ……」

公園には翠がため息を吐きながらベンチに座っていた。

翠
（やっぱりこのままじゃ無理だな……先生と相談してどうにかしないと）

翠は何か悩んでいた。

すると……

トントン

翠
「ん？」

翠は肩を叩かれて振り向いた。

風魔
『どうした？』

そこには風魔がいた。

翠
「風魔か？　何でここに」

風魔
『帰りの途中で貴殿を見かけた』

翠
「……そうなんだ」

風魔
『それでどうした?』

翠
「な、なんでもないよ」

風魔
『その割には元気がないぞ』

翠
「そそそんなことないぜ!」

翠は明らかな空元気で返事をした。

風魔
『無理をするな』

だが風魔は一瞬で見抜いた。

翠
「あ、あはは～……ハァ」

翠は渇いた笑い声の後にため息を吐いた。

翠
「やっぱしアタシには嘘は無理だな・・・」

そう言って翠は理由を話し始めた。

翠
「アタシの家族は母上とたんぽぽって言う妹の3人家族なんだ・・・・父上は幼い頃に亡くして母上が1人でアタシとたんぽぽを育ててくれたんだ。今の今までずっと汗水たらして頑張ってくれて、この学園にいるのも母上のおかげなんだ。けど・・・その母上が倒れちまってな。医者に働き過ぎと言われちまったよ」

風魔
「・・・・・・・・・・・・」

翠
「けどたんぽぽには学園にずっと通って欲しいから・・・・・だからアタシが学園をやめてどっかに働こうかと決心したんだ。それを明日先生と相談しようかと思ってね。みんなとは短い期間だったけど楽しかったよ」

翠はお別れの言葉を風魔に言った。

しかし風魔は・・・・・

風魔

『貴殿はそれでいいのか？』

翠
「え？」

風魔
『本当にそれでいいのかと聞いている』

翠のささやかな悲しみに気付いていた。

風魔の問いかけに翠は……

翠
「……そんなの…そんなのいいわけないだろッ！！」

体を震えさせ涙目になりながら風魔に怒鳴った。

翠
「アタシだってみんなと別れるのはイヤだよ！　けど……しかたないんだよ！」

風魔に怒鳴りながら本音を言う翠。
その瞳からは一滴の涙が零れ落ちていた。

風魔
「・・・・・・・・・・・・」

翠
「・・・うっ・・・うぅっ・・」

風魔は泣いている翠に近づき・・・・・

ポン

肩に手を置いた。

翠
「え？」

風魔
『協力する』

翠
「ど、どういう事だよ？」

翠はまだ涙目だが風魔に聞いた。

風魔
『ついてきてくれ』

そう言って風魔は歩き始めた。

翠
「……？」

翠はまだ理解が出来ていないが風魔の後を追った。

～北条宅～

風魔は再び北条宅に訪れて先ほどの翠の話をした。

氏政
「なるほどの～…悲しい話よの。よし！　この北条氏政に任せるのぢゃあ！」

そう言って氏政は携帯電話を取り出して電話をかけた。

氏政
「もしもしワシじゃ…いや、ワシワシ詐欺じゃないわい！　氏政

じゃ！」

そしてしばらく電話で会話をして電話を切った。

氏政
「安心せい！　お主たちの学費はワシが全て持つぞ！」

翠
「ほ、ホントですか！？」

氏政
「うむ！　ついでにお主たちの母親の医療費も払ってやるわい」

翠
「う、嘘！？　そ、そこまでしなくても」

氏政
「何を言っている！　それではお主たちが可哀想じゃ！」

翠
「ですが・・・」

氏政
「それに、これはワシの我が儘でもあるんじゃ・・・・・この老いぼれの我が儘に付き合っておくれ」

翠
「あ、ありがとうございます！」

翠は氏政に頭を下げた。

風魔
『感謝する』

風魔も礼をした。

氏政
「お主のはじめてのお願いじゃ、構わんぞよ！」

そう言って風魔と翠は北条宅を後にした。

翠
「なぁ風魔」

風魔
『何だ？』

翠
「あたしとそんなに仲良くないのに何でここまでしてくれるんだ？」

翠はなぜここまでしてくれたのか質問した。

風魔
『友だからだ』

風魔はすぐに答えた。

翠
「そ、そうか……ありがと／／／」

風魔
『気にするな』

翠は風魔にもお礼を言った。

その時の心の中では……

翠
（風魔って友達想いだったんだ…ちょっとカッコいいかも…って何を考えているんだアタシは！／／／）

などと思って風魔をチラチラと見ていた。

風魔
『どうした、顔が赤いぞ』
翠
「×＊■◇●○※／／／」
風魔は急に黙り込んだ翠を心配したが翠は慌てて何を言っているのかわからない言葉を言った。
こうして風魔の休日は過ぎていった。

第二十一話、風魔の休日（後書き）

風魔はキャラがわからないのでこうしました！

……ダメだったかな？

次回は相変わらず未定です！

質問、評価、感想の方もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十二話、秋蘭の相談（前書き）

～ＣＭ～

ナレーション
「バト●ドォォォム！　相手のゴールへシュウウウウウッ！　超エキサイティィィング！　ツク・・・」

愛紗
「何でＣＭ!?　しかも懐かしいなオイ!」

鈴々
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるのだ!」

第二十二話、秋蘭の相談

～あらすじ～

風魔の休日が終わった次の日の学園にて……

～昼休み・１－Ａ～

秋蘭
「政宗よ協力してくれ」

政宗
「いきなりだなオイ」

政宗は小十郎と昼食をとってる最中に秋蘭に協力を頼まれた。

政宗
「まずは用件を言え」

秋蘭
「すまん、今は言えん……しかし、政宗にしか頼めない用件なのだ」

政宗
「……」

政宗は真剣な秋蘭の頼みに少し戸惑った。

そこへ……

華琳
「秋蘭」

華琳がやってきた。

秋蘭
「華琳様」

華琳
「どうしたの？　いつも私の近くにいるアナタが何も言わずにいなくなったりして」

秋蘭
「申し訳ありません。急用だったもので」

華琳
「珍しいわね、アナタがこんなに慌てているのは……」

秋蘭
「はい、自分でもはじめてかもしれません」

華琳

「そう・・・ところでその用件は私にも言えないこと？」

秋蘭
「・・・・・申し訳ありません」

華琳はそれを聞いて政宗にこう言った。

華琳
「政宗、私からもお願い・・・秋蘭に協力してちょうだい」

華琳は頭を下げた。

政宗
「・・・・・小十郎、お前はどう思う？」

小十郎
「はっ・・・この小十郎、政宗様についていくのみです」

政宗
「そうか・・・・・ＯＫ、引き受けてやるよ」

秋蘭
「感謝する、政宗」

華琳
「私も協力するわ」

小十郎
「俺も行こう」

秋蘭
「華琳様‥‥小十郎‥‥感謝します」

政宗
「それでどうすればいいんだ？」

秋蘭
「放課後に天下統一にきてくれ」

政宗
「ＯＫ！」

政宗は秋蘭に協力するために放課後、天下統一に待ち合わせをした。

～天下統一・入り口～

入り口前には１人の少女が待ち合わせをしていた。

少女の容姿は

緑色の髪に青いリボンを付け

小柄な体
いつも振り回されていそうな少女
名を典（てん）　流琉（るる）
恋ＢＡＲＡ学園の中学に通う少女である。
流琉は誰かを待っていた。
しばらくすると……

イケメン
「流琉ちゃん」

流琉
「あ、先輩！」

1人のイケメンが現れた。

イケメン
「ゴメンゴメン、待った？」

流琉
「大丈夫です！　私も今来たばっかりだし」

イケメン
「え、そうなの？　奇遇だねー。いやー実はさー……」

流琉とイケメンが話しをしているちょっと離れた場所では……

秋蘭
「何が奇遇だ…流琉は貴様が来る３０分前から来ていたのだ…」

秋蘭が弓を構えてイケメンを狙っていた。

秋蘭
「すまん政宗、少し土台になってくれ」

政宗
「ちょっと待てェェェェ！！」

政宗は壮大なツッコミを入れた。

政宗
「用件ってこれかよ！？」

秋蘭
「ああ…あの少女の名は流琉。幼い頃から面倒を見ていた私の妹のようなものだ」

政宗

「その流琉って奴のデートを邪魔しろってことかよ！」

秋蘭
「誰が邪魔しろと言った……私はあの男を抹殺しろと頼んでいる」

政宗
「もっとできるか！　こんなもんテメーの姉貴に頼めばいいじゃねーか！」

秋蘭
「そんな事姉者に頼めるものか」

政宗
「華琳はいいのかよ!?　何だ、お前は！　頭ん中ｈｅａｖｅｎかよ！」

政宗、ご乱心。

政宗
「そもそも何でテメーの妹分の彼氏を邪魔しないといけないんだよ!?　てゆうかこれ銀●のパクリじゃねーか！」

秋蘭
「私はアイツを彼氏と認めてないぞ！」

政宗
「やかましい！　俺はテメェが冷静キャラってのを認めねーよ！」

華琳
「政宗、私はアナタが私に仕えない事を認めないわ」

政宗
「テメェは入ってくんじゃねー！」

政宗は凄い勢いでツッコミを入れてため息を吐いた。

政宗
「Ｈａ～……馬鹿馬鹿しい……だいたいその流琉って奴はここから見ても幸せそうな顔してるじゃねーか」

政宗は指を指し流琉の顔を見ると流琉は笑顔であった。

秋蘭
「私だって流琉の好きになった奴を認めたい……しかし、あのイケメンの面をした奴はだいたいヤリチ●だ。私はいろいろと考えた。考えた結果、抹殺を」

政宗
「考え過ぎだろ！　てゆうかテメー堂々とヤ●チンって言ってんじゃねー！」

そう言って政宗はクルっと回り……

政宗
「付き合ってられるか・・・小十郎、帰るぞ」

小十郎と共に帰ろうとした。

だが・・・・・

小十郎
「残念ながら政宗様・・・俺は小十郎ではありません」

政宗
「Ｈａ？」

小十郎
「俺は殺し屋、ミギメ１３」

小十郎はサングラスをかけライフルでイケメンを狙っていた。

政宗
「・・・・・何してんだ？　つーか１３って何だ？」

小十郎
「俺が右目を抉ろうとした回数です・・・秋蘭、俺も協力するぜ」

秋蘭

「小十郎……」

小十郎
「秋蘭の気持ちはわかるぜ……俺も政宗様に何かあったら黙ってらんねーからな」

秋蘭
「よくぞ言った！　行くぞ同士よ！」

秋蘭と小十郎は天下統一に向かった。

政宗
「おっ……おい！　ヤベーなアイツらならやりかねねーぞ。華琳、お前は秋蘭を頼む」

華琳
「誰が華琳よ」

政宗
「Ｈａ？」

華琳
「私は殺し屋、カリン１３」

華琳はサングラスをかけてライフルを持っていた。

政宗
「テメェもかよ！？」

華琳
「面白そうだから行ってくるわ」

こうして殺し屋達は流琉を追いかけていった。

～ゲームセンター・レーシングゲーム～

イケメンと流琉はレーシングゲームで遊んでいた。

流琉
「うわー・・・先輩うまいですね！」

イケメン
「ハハ、そんな事ないよ」

そんな楽しい雰囲気を出しているイケメンと流琉の隣では・・・・・

秋蘭
「クッ、何て速さなんだ・・・」

小十郎

「クッ、奴の車は化け物か！？」

華琳
「クッ、この私が遅れをとるなんて……」

殺し屋達が普通にゲームを楽しんでいた。

政宗
「何がクッ、だよ！　何で普通にゲームしてんだよ！？」

政宗のツッコミは最もである。

秋蘭
「フッ…このレースで私達が圧勝してカッコ悪い姿を見せてからアイツの額にドスンと」

政宗
「鬼かテメェは！？」

華琳
「ところで政宗は何でいるの？　あなたも殺し屋同盟に入りたいの？」

小十郎
「それなら言ってくれればいつでも」

政宗
「テメェらが血迷った事しねーか見てんだよ！」

このあと秋蘭達はイケメンに完敗した。
流琉とイケメンはゲームを楽しんでから次の場所に移動した。

～映画館～

流琉とイケメンは映画館でどの映画を観ようか迷っていた。

政宗
「要は流琉って奴を傷付けずにあのイケメンと別れさせればいいんだろ？」

秋蘭
「できるのか？」

政宗
「ああ……小十郎、頼むぜ」

小十郎
「はっ」

小十郎は返事をしてイケメンに近付いていった。

流琉
「私、この映画が観たいです！」

流琉が指したのはホラー映画だった。

イケメン
「え～これはちょっとな」

流琉
「先輩、恐いんですか？」

イケメン
「いや、恐いわけじゃないんだけどねー・・・他の映画を観ない？」

流琉
「とか言って実は恐いんですよね？」

イケメン
「だから怖くないって。それより、この恋愛・・・」

小十郎
「オイ」

イケメン
「え？」

イケメンは首だけ振り向いた。

小十郎
「ホラー映画に入れ……さもなくば」

チャキン

小十郎
「斬る」

イケメン
「ヒッ！」

流琉
「先輩？　……どうしたんですか？」

イケメン
「い、いや……やっぱりホラー映画を観ようか」

流琉
「ホントですか！？」

イケメン
「う、うん……それじゃあ中に入ろう」

そう言って中へ入っていった。

～館内～

流琉とイケメンは座席に座り小十郎はその後ろに座った。

小十郎
「オイ」

イケメン
「は、はい」

小十郎
「小便を漏らせ」

イケメン
「え！？　そ、それは・・・」

流琉
「先輩さっきからどうしたんですか？　やっぱり出ますか？」

小十郎
「出たら斬る」

イケメン
「だ、大丈夫だから！」

流琉

「？　……あ！　始まりますよ！」

そして映画が始まった。

映画、終了後……

流琉
「面白かったですね！」

イケメン
「あ、ああ……」

流琉
「先輩？　どうしたんですか？」

イケメン
「じ、実はな……ちょっとチビっちゃったんだ」

流琉
「え！？」

流琉はあり得ないという顔をした。

それをすべて見ていた政宗は……

政宗
（すまねえなイケメン・・・こんな事はしたくなかったが）
と心の中で謝った。
しかし・・・・・

流琉
「じ、実は私も・・・少し・・・」

一同
「「「「ヴぇぇぇぇぇぇ！！」」」」

政宗達は驚愕した。

イケメン
「マジ！？　おそろいじゃん！　奇跡じゃん！！」

流琉
「良かったです・・・私だけかと思って」

それを見ていた政宗達は各々困惑していた。

秋蘭
「オイぃぃぃ！　どーゆー事だ！　ますます仲良くなっているではないか！？」

政宗
「アイツこそどーなってんだ！　普通漏らすか！？」

政宗と秋蘭が話していると流琉とイケメンは次の場所に移動しようとしていた。

政宗
「オイ、アイツら移動するぞ！　華琳！」

政宗は華琳を呼んだが……

華琳
「……」

華琳は下を向いたまま黙っていた。

政宗
（何してんだ？　アイツ）

そう思って華琳に近付くと……

華琳
「うぅ……ひっく……」

泣いていた。

政宗
「何で泣いてんだよ！？」

華琳
「だって恐かったんだもん！　私だって女の子だもん！（泣）」

政宗
「オイぃぃ！　キャラが変わってんだけどぉぉ！？」

政宗はどうにかして華琳を慰めて後を追った。

～休憩所～

流琉とイケメンは休憩所で休んでいたので政宗達も休みをとった。

秋蘭
「なんて事だ…あれで引かないとは…流琉、恐ろしい子だ」

政宗
「ああ、ホントにｔｅｒｒｉｂｌｅな奴だ」

秋蘭
「政宗よ、この事を話したら貴様の額に穴を空けるぞ」

政宗
「安心しな、アイツは漏らしてはねー…見な」

見てみるとイケメンは着替えていたのに流琉は着替えていなかった。

政宗
「アイツはイケメンを庇って嘘をついたんだよ…これは本物のｌｏｖｅだよ」

秋蘭
「……しかし」

小十郎
「オイ！　奴らが動くぞ！」

見ると流琉とイケメンはエレベーターに乗り上に上に上がった。

華琳
「マズイわね……これは屋上で告白をするパターンよ」

小十郎
「屋上といえば告白したら９９％成功すると噂がある」

秋蘭
「クッ、やはり認めん！」

華琳
「追うわよみんな、私についてきなさい」

そう言って秋蘭達は後を追った。

政宗
「……」

政宗はそれを黙って見ていた。

～屋上～

流琉
「綺麗ですね……」

イケメン
「ホントだね……」

流琉とイケメンは屋上で景色を見ていた。

イケメン
「流琉ちゃん……」

流琉
「はい……」

イケメン
「俺は君の事が……す……」

流琉
「す？」

イケメン
「す……」

イケメンは今にも告白えおしようとしていた。

その時……

バタバタバタバタ！

目の前にヘリコプターが現れた。

流琉
「きゃあぁぁぁぁぁ！？」

イケメン
「な、何だこりゃぁぁぁ！？」

流琉とイケメンは驚愕していた。
するとヘリコプターの中から秋蘭達が現れた。

３人
「「「我らは殺し屋１３・・・お命頂戴！」」」

秋蘭は弓を、華琳と小十郎はライフルを構えた。

イケメン
「うわあぁぁぁぁ！！」

イケメンは流琉を置いて一目散に逃げた。

流琉

「え！？　ま、待っ……」

流琉は置いてかれた事にビックリしていた。

すると……

ドンッ

イケメン
「うわっ！？」

イケメンは何かとぶつかって尻もちをついた。

イケメンがぶつかったのは……

政宗
「どきな……」

政宗だった。

小十郎
「政宗様！？」

政宗
「政宗？　誰だ、ソイツは」

政宗は刀を構えた。

政宗
「俺は愛の戦士、独眼１３」

政宗はそう言って刀に力を入れ始めた。

政宗
「人の恋を邪魔する馬鹿は・・・消えな！」

そして・・・・・

政宗
「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！！！」

ピキャァァァァァン！！

政宗の放った青い雷はヘリコプター目掛け・・・・・

ドカァァァァァン！！

プロペラに当たった

3人

「「「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！」」」

そのままヘリコプターは落ちていった。

政宗

「少しは反省しな……ほら、テメェも行ってやんな」

そう言って政宗はイケメンを立たせ、背中を押した。

イケメン

「流琉ちゃん！」

イケメンは流琉に向かっていった。

流琉

「先輩！」

流琉もこちらに向かって走ってきた。

２人の距離が近付いてゆき、そのまま抱き付いて……

流琉
「どっせぇぇぇぇぇい！！」

イケメンを力いっぱい放り投げた。

イケメン
「ぬのわぁぁぁぁぁぁ……」

政宗
「な！？」

イケメンは天高く飛び星になった。
流琉は政宗に近付いて挨拶をした。

流琉
「あの！／／／／　私、流琉って言います！　さっきは助けて頂いてありがとうございます／／／／」

政宗
「あ、ああ・・・そうか（汗）」

政宗は先程の出来事があり少し戸惑っていた。

政宗
「と、ところであのイケメンはいいのか？（汗）」

流琉
「あんな女の子を置いていく小便野郎なんてどーでもいいです！」

結構な毒舌である。

流琉
「そ、それより！　この後、お礼がしたいのですが／／／」

政宗
「いや、気にすんな・・・・・それじゃあな（汗）」

政宗は急ぐように立ち去っていった。

流琉
「あ！　……独眼１３様／／／」

こうして政宗は秋蘭の頼みを形は違うが解決した。

第二十二話、秋蘭の相談（後書き）

何て事だ……投稿と間違えて消去してしまうなんて……鬱だ…死のう

今回は書き方を変えてみました！

なのでそちらにも評価をお願いします

次回も未定です！

あとリクエストがあれば受け付けます

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・参、あの人の気持ちは？（前書き）

～おまけ～

しん●すけ
「とぉーちゃん！　んもーこんなところで醤油を売ってる場合じゃないゾ！」

久秀
「……人違いではないのかね？」

しん●すけ
「何言ってんの？　早く帰んないとまたかぁーちゃんに怒られちゃうゾ！」

久秀
「……わかった、卿について行くとしよう」

佐助
「ついて行くのかよッ！？」

蓮華
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるわ」

外伝・参、あの人の気持ちは？

政宗が秋蘭の協力を受ける前の２－Ａでは……

～朝・２－Ａ～

？？？

「それでは、みなさん…今日も元気良く殺(や)って逝きましょう」

とんでもない発言をしている人物

容姿は銀色の長髪

目が細くいつも不気味な笑みを見せている

性格はかなりの変態

名を明智(あけち)　光秀(みつひで)

２－Ａの担任である。

光秀は朝のＨＲを終えクラスを後にした。

？？？

「よし！　今日も平和を守ってゆくぞ！」

？？？

「はい……」

光秀が出たと同時に元気良く声を上げた男性

頭に白と赤の色が入った兜を被り

いつも正義感に満ちている性格

名を浅井（あざい）　長政（ながまさ）

風紀委員でもある男性。

それとは対照的に暗い感じで返事をした女性

長い長髪で

かなりの美女だが

内向的で自虐的な性格の女性

名をお市（いち）

長政と同じ風紀委員である。

長政
「市よ！　もっと声を出さぬか！」

お市
「ごめんなさい・・・長政様・・・」

長政
「全く・・・・・」

そう言って長政は教室を出ていった。
このように真逆の2人だが恋人関係である。

さて、今回の主人公は・・・・・

お市
（長政様・・・・・）

ただいま怒られたお市である。
実はお市には悩み事があった。

お市
（長政様は・・・市の事・・・嫌いなのかな？）

長政が自分の事をどう思っているのか気になっていた。
だが、お市は内向な性格な為直接聞くことはできないでいた。

さらに、自虐な性格もある為にお市はいつもマイナスな方向に考えてしまう。

お市
（やっぱり・・・市は邪魔なのかな・・・・・死んだ方がいいのかな・・・）

どんだけ追い詰められているのかわからないが相当考えているようだ。

そこへ・・・・・

猪々子
「市～～！！」

猪々子が現れた。
猪々子もこのクラスのようだ。

お市
「猪々子さん・・・・・どうしたんですか？」

猪々子
「聞いてくれよ～市～・・・最近アタイの斗詩がさ、冷たいんだよ！」

お市
「・・・・・どうでもいい・・・・」

猪々子
「？　どうしたんだ、市？　今日は一段と暗いな」

お市
「……なんでもない……」

猪々子
「そんな事言うなよ～、アタイと市は身体を許した仲だろ～」

お市
「……許してない……」

猪々子
「まぁまぁいいじゃんいいじゃん！　それでどうしたんだ？」

お市
「……」

お市は避けられないと思い自分の悩みを猪々子に言った。

猪々子
「なるほどなぁ～……よし！　アタイに任せな！」

猪々子は貧相な胸を叩いてそう言った。

お市
（……大丈夫……じゃない）

お市は決して信用していなかった。

猪々子
「とりあえず放課後に校門に来てくれよな！」

お市
「……」

猪々子
「約束だぞ！」

一切約束を口にしていないがお市は放課後に校門に向かうのであった。

～放課後・校門～

お市は校門に到着した。

猪々子
「お！　来たな！」

そこには猪々子と……

雪蓮
「やっほ～♪　市ちゃん、元気～？」

鶴姫
「あなたがお市さんですか？　はじめまして！　わたしは鶴姫と言います☆」

小連
「シャオは小連ってって言いま～す！　シャオって呼んでね♪」

何故か雪蓮とお市が知らない鶴姫と小連がいた。

お市
「雪蓮さん？　……どうしてここに？　……それにそちらは……」

お市は初めて会う鶴姫と小連に戸惑っていた。

猪々子
「アタイが呼んだんだ！　話をしたら協力をしてくれるってさ！」

雪蓮

「そしてこの子達にも協力してもらう為にわたしが呼んだの」

お市
「‥‥そう‥‥ですか‥」

お市は一応納得した。

雪蓮
「それでね市ちゃん‥‥‥今回、アナタにやって貰うのは‥‥」

一同
「「「「大・変・身よ！！！」」」」

お市
「‥‥‥‥‥‥‥‥」

お市はやはり任せなければ良かったと激しく後悔した。

猪々子
「そもそも市はいろいろと暗いんだよ～」

雪蓮
「そんなんだから性格も暗くなるのよ」

鶴姫

「それで、わたし達が相談しまして」

小連
「いろいろと明るくしてその長政って人の本音を聞いちゃえばいいんだのよ♪」

このように説明をしているが本心は……

一同
（（（（（こんな面白い事は滅多にない！！！））））

自分達の暇潰しであった。

お市
「……でも」

お市は戸惑っていたが……

雪蓮
「市ちゃん、長政の気持ちが知りたいんでしょう?」

お市

「……はい…」

雪蓮
「ならまずは自分から変わらないとダメよ」

お市
「……わかりました……よろしく……お願いします」

こうしてお市改造計画は開始された。

～翌日・２－Ａ～

長政
「市ー！　……此処にもいないか……朝も家にはいなかったな……全く何処に行ったのだ市は！？」

長政はお市を捜していたが見つからずにいた。

そこへ……

猪々子
「長政～～！」

猪々子が長政を呼んだ。

長政
「猪々子殿？　ちょうど良かった！　貴殿は市を見なかったか？」

猪々子
「その事なんだけど市は今日は休むってよ～」

長政
「休むだと？　それなら私に連絡がくる筈だが……」

猪々子
「そんな固い事言うなよ～」

長政
「……まぁよかろう、後で注意しておくか。それで市は何処にいる？」

猪々子
「アタイもさっき会って“放課後に屋上に来て”って言ってどっかいっちまったよ」

長政
「屋上に？　……わかった感謝する」

猪々子
「気にすんなよ！」

キーンコーンカーンコーン　ガララッ！

光秀
「ンフフ～・・・みなさん、席についてください」

猪々子が伝えたと同時にチャイムがなり光秀が入って来た。

～放課後・屋上～

長政は猪々子に言われた通りに屋上に姿を現した。

長政
（市は・・・・・いたぞ！）

長政は屋上を見渡してお市を見つけるとお市に近付いていった。

長政
「市！　休むなら私に連絡しろと言ったであろう！」

お市
「・・・・・・・・・・・」

長政はお市に話しかけたがお市は返事をしなかった。

長政
「……市？」

長政も返事をしないお市が心配になり今度は優しく声をかけた。

すると……

お市
「…ヤ、ヤッホー！　アナタのエンジェルアイドル、O☆I☆CHIダゾ！　キラッ☆」

長政
「……（呆然）」

お市はアイドル風に長政に挨拶をして、長政は驚愕をしていた。

離れた場所では……

猪々子・雪蓮
「「アッハハハハ！！（笑）」」

鶴姫
「わ、笑ったらダメですよ・・・プッ」

小蓮
「でも・・あれは・・・アッハハハ！（笑）」

お市を変身させた犯人達が笑っていた。

長政
「お、お市殿・・・・・まだ体調が悪いのか？（汗）」

Ｏ☆Ｉ☆ＣＨＩ
「ぜ、全然平気ダゾ！　てゆーか、気分爽快？」

長政はまだついてこれていないようだ。
するとＯ☆Ｉ☆ＣＨＩはある質問をした。

Ｏ☆Ｉ☆ＣＨＩ
「き、今日は長政様・・・じゃなくて長政に聞きたいことがあるんダゾ！　てゆーか、疑心暗鬼？」

長政
「いや、その四字熟語は違うが・・・何だ？」

Ｏ☆Ｉ☆ＣＨＩ
「な、長政にとってＯ☆Ｉ☆ＣＨＩの事をどー思ってる？」

長政
「市の事だと？　・・・そんなもの聞くまでもない」

そう言って長政はお市を抱きしめ・・・・・

長政
「大切な人に決まっているだろ」

お市
「・・・長政・・・様」

長政
「市よ」

お市も長政をゆっくりと抱きしめ返した。

それを離れた場所から見ていた４人は・・・・・

鶴姫
「２人とも、素敵です☆」

小蓮
「なんか見せつけられているみたいでムズムズしてきちゃった」

雪蓮

「こーら、そんな事言わないの。それにしても長政の奴やっるー」

猪々子
「いいなーいいなーアタイもあんな事言われたいなー」

長政の行動に各々が羨ましいと思っていた。

雪蓮
「まぁ、これにて一件落着ね！　わたし達もいい暇潰しになったしね！」」

3人
「「「うん、うん」」」

雪蓮達は一件落着したのといい暇潰しになったことに満足していた。

しかし……

???
「……暇潰し……だったんですか？」

4人
「「「「！！」」」」

ギギギギッ

４人は声のした方へゆっくりと振り向いた。
そこには……

お市
「…暇潰シ……ダッタンデスカ？」

目の光りを失っているお市が立っていた。

雪蓮
「い、市ちゃん…落ち着いて（汗）」

猪々子
「は、話せばわかるよ…な？（汗）」

２人
「「ガタガタブルブル」」

４人はかなり焦っていた。

お市
「……是非モナシ！」
４人

「ヒィ！」

お市

「来タレ、集エ、夢ヲ見ヨ！」

４人

「ギャアアア！」

４人は大魔の手に飲み込まれた。

こうしてお市は長政の気持ちを知ることができた。

外伝・参、あの人の気持ちは？（後書き）

お市の変身でした。

さて、ネタがなくなったな・・・マジでどうしょう・・・・・

次回も未定です！

あと、すいませんがこれから更新スピードが落ちると思うのでご了解ください

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

では！

第二十三話、闖入者？　告白！？（前書き）

慶次
「卍解！！」

秀吉
「ば、馬鹿な！？」

斗詩
「作品が違うからやめてください！」

麗羽
「おーっほっほっほ！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりますわよ！」

第二十三話、闖入者？　告白！？

～あらすじ～

政宗が秋蘭を協力した次の日の朝……

～朝・通学路～

家康
「ふあぁ～～」

あくびをしながら登場した家康。

そこへ……

桃香
「家康く～ん！」

後ろから桃香が走ってきた。

家康
「桃香、おはよう！」

桃香
「ハァ、ハァ……お、おはよう、家康・君」

桃香は運動が苦手だが1秒でも家康と一緒にいたいので走ってきたのだ。

家康
「おいおい、そんな無理はしなくてよいぞ」

桃香
「ハァ、……だ、大丈夫……だから……」

家康
（そうは見えんが……（苦笑））

家康は心の中で苦笑いをしていた。

桃香
「ハァ～……ところで家康君」

やっと息が整った桃香。

家康

「ん？」

桃香
「学園には慣れた？」

家康
「ああ！　皆が優しいからすぐにとけ込める事ができた！」

桃香
「それは良かった♪」

家康
「桃香は？」

桃香
「私は中学校から此処にいるから大丈夫だよ」

家康
「そういえばそうだったな！」

家康と桃香は会話を弾ませていた。

すると・・・・・

ヴォォォォォォ！！！！！

家康

「ッ！！　な、何だ！？」

桃香
「う、うるさいよ～！？」

いきなり爆音が鳴り響き家康と桃香は耳を塞いだ。
爆音の方を振り向くとアメリカンバイクが向かって来ていた。
そしてアメリカンバイクは家康達の横に止まって一人の男が降りてきた。

2人
「「・・・・・・・・・・」」

2人は何が起きているのかわからずにいた。
そんな家康達を尻目に男はヘルメットを外しこちらに向かってきた。

男の容姿は

水色の髪に整った顔

全身を黒で統一して

所々に銃器が見える

そして男は家康達の前まで来て・・・・・

？？？
「アリス！　こんなところにいたのか！」
と桃香に向かって言った。
桃香
「へ？　私ですか？」
？？？
「お前以外に誰がいんだよ」
どうやら男は誰かと勘違いしているようだ。
？？？
「たくッあんま手間掛けんじゃねーぞ・・・ほら、行くぞ」
そう言って男は桃香の手を引っ張った。
桃香
「あ、あの！」
？？？

「ん？」

桃香
「私、アリスって人じゃないんですけど……」

？？？
「は？　何言ってんだ、アリス？」

桃香
「だからアリスじゃありませんってば！　私は桃香って名前です！」

？？？
「何だと？」

男は桃香をマジマジと見た。

その後に……

ムニュッ

桃香
「へ？」

家康
「な！？」

？？？

「……ふむ」

桃香の胸を揉んだ。

桃香
「キャアァァァァ！！！」

家康
「な、何をしとるのだ！　お主は！？」

？？？

「この質感は……アリスじゃない！？」

家康
「話を…聞かぬかッ！」

ブオォンッ！

家康は痺れを切らしてつい男に殴りかかってしまった。

しかし……

パシッ！

家康
「!?」

カチャッ

男は簡単に家康のパンチを止め、家康にコルト・パイソンを向けていた。

???
「喧嘩売るのはいいが……相手を選びな」

家康
「ッ!?（汗）」

そう言って男はコルト・パイソンをしまった。
家康はこの男から放たれる殺気にゾッとしていた。

???
「どうやら違うみてーだな…悪かったな触ったりして」

男は人違いとわかると胸を触ったことを謝った。

桃香
「い、いえ大丈夫です・・・／／／」

桃香はまだ顔を赤くしていた。

家康
「ところでお主は何者なんだ？」

零斗
「俺は北郷　零斗、ＢＡＳＳの隊員だ」

桃香
「？　何ですか？　それ？」

零斗
「ああ、それはな・・・・・」

零斗は説明をしようとしたら・・・・・

？？？
「零斗さーーん！！」

誰かに呼ばれて、零斗が振り向くと・・・・・

無敵
「や、やっと見つけました～」

無敵がいた。

家康
「無敵殿？　なぜお主が？」

無敵
「あ、その事なんですが今は無敵ではありません」

桃香
「どういう事ですか？」

無敵
「ちょっと今体を借りてまして・・・私の名前は世紀末雑魚です！」

作者登場！

雑魚
「そんな事より、零斗さん！　小説を間違えていますよ！」

零斗
「な、何だと！？」

その言葉に零斗は驚いた。

零斗
「何故それを早く言わねぇー！」

雑魚
「いや、バイクに追い付くのは無理でしょう！」

零斗
「ウルセーッ！！」

ガガガガガガッ！

雑魚
「ギャアアアア！！」

零斗は雑魚にＭ１６を乱射した。
雑魚はそのまま気絶した。

零斗
「チッ！　こうしちゃいらんねー！」

零斗はバイクに跨りエンジンをかけた。

ヴォォォォォォ！！！！

そして零斗は颯爽と走り去っていった。

家康
「な、何だったんだ……（汗）」

桃香
「アハハ……（汗）」

家康と桃香は呆然としていたがしばらくして学園に足を進めた。

その頃、無敵は……

無敵
「……ハ！　此処は何処だ！？　俺は無敵ッ！！」

復活をしていた。

～学園・正面入口～

家康

「さっきのアイツは何しに来たんだ？」

桃香
「さぁ？」

話しをしたまま家康は自分の下駄箱を開けた。

すると……

ヒラッ

家康
「お？」

一枚の手紙が落ちた。

家康
「何だ？　これは？」

家康は手紙を拾って中身を見た。

手紙の内容は……

“急な手紙をお許しください
アナタに伝えたい事があります
よろしければ放課後に屋上にお越しください”

と書かれていた。

家康
「ワシに伝えたい事？　何の事だろう？」

家康は何の事か見当がつかないでいた。

一方の桃香は……

桃香
「こ、これは！？」

驚愕の声を上げていた。

家康
「桃香？　この手紙がわかるのか？」

家康は鈍感な為、この手紙の意味がわからなかった。

桃香
「わ、私もわからないなぁ～（汗）」

と家康に答えるが……

桃香
（これは……間違いなく……羅武恋他（ラブレタ）ーーーッ！！！）

内心はかなり焦っていた。

桃香
（こうしてはいられない！）

そう言って桃香は教室へとダッシュした。

家康
「何だろうなぁ～？　桃香は……桃香？」

家康は桃香が消えた事に気付かなかった。

〜1－B〜

桃香
「……というわけです！」

桃香は愛紗・元親・星・朱里・焔耶・翠・風魔に報告をした。

星
「そうか、めでたい事ではないか」

愛紗
「何を言っている！　これは重大なことだぞッ！」

元親
「愛紗、とりあえず得物はしまえ」

朱里
「はわわ…大変です！」

焔耶
「お館に害虫がお館に害虫がお館に害虫が……」

翠
「焔耶が壊れたぞ！？　風魔、どうにかしてくれ！」

風魔
『無理』

現場はスゴい事になっていた。

元親
「桃香、まだ家康は相手がわからねぇーんだよな？」

桃香
「う、うん・・・」

元親
「ならば慌てることはねぇーよ・・・まだ顔もわからん奴に家康もすぐには惚れねぇーさ」

愛紗
「・・・・それはそうだが・・・」

星
「そうとも限らんぞ」

愛紗
「星？　どういう事た？」

星
「もし・・・手紙主が家康殿のタイプであれば・・・意気投合した両者はお互いをもっと知りたいと思い・・・そのままホテルへＧｏ！」

朱里
「はわわーーーッ！！／／／」

翠
「考え過ぎだろ！？」

桃香
「いや、あながち間違っていない！」

愛紗
「やはり、早めに対処をせねばなるまい！」

翠
「愛紗ァァァ！？　お前はツッコミだろ！　頼むからボケないでくれよ！」

焔耶
「オヤカタニガイチュウガオヤカタニガイチュウガオヤカタニガイチュウガ……」

翠
「誰か焔耶を止めてくれぇぇぇぇぇ！！」

風魔
『制御不能』

現場は混沌になってきた。

元親
「……星」

星
「何ですかな？」

元親
「楽しんでるだろ？」

星
「フッ……何のことやら」

元親
「……ハァ」

この騒動は家康が来るまで行われた。

～放課後・屋上～

？？？
「……」

屋上には1人の女性が誰かを待っていた様子だった。

そこへ……

ガチャッ

家康
「確か‥‥此処だったな」

家康が現れた。
すると女性は家康に近付いて行き声をかけた。

???
「‥‥‥来てくれましたか‥‥徳川殿」

家康
「ん？　お主は確か‥‥‥」

家康はその女性に見覚えがあった。

家康
「楽殿か？」

凪
「はい‥‥‥」

女性の正体は凪だった。

凪
「手紙を読んで頂けましたか？」

家康
「ああ、ワシに何か頼みたいのだろ？」

凪
「はい」

そんなやり取りを物陰で見ている団体があった。

桃香
「手紙主は凪ちゃんだったんだ」

愛紗
「彼女が何故家康殿に？」

朱里
「あの人は誰ですか？」

翠
「アイツは隣の楽凪って奴だよ」

焔耶
「ガイチュウガガイチュウガガイチュウガガイチュウガガイチュウガ・・・」

風魔

『ガタガタブルブル』

星
「やはり面白くなったな」

元親
「……」

桃香達であった。
桃香達はタイミングを見計らって邪魔するつもりだが元親や風魔、翠によって止められていた。

家康
「それでワシに伝えたい事とは？」

凪
「はい……わ、私の／／／」

家康
「私の？」

凪
「私の……／／／」

桃香
「みんな、行くよ！」

凪が告白をすると思った桃香達は風魔と翠を振り解いて突撃をした。

しかし……

元親
「四縛ッ！」

バシュゥゥンッ！

元親が桃香達を捕まえた。

桃香
「キャアアア！」

愛紗
「元親殿！？　裏切るつもりですか！？」

朱里
「はわわーーーッ！？」

焔耶
「ガイチュウガーーッ！」

元親
「落ち着いて見てな…邪魔するのはヤボだぜ」

星
「そうだな、最後まで見てみますかな」

元親
「……お前が原因だろが」

そう言って元親達は家康と凪の結果を見守った。

家康
「……」

凪
「……よし！」

凪は覚悟を決めて家康を見た。

凪
「私のッ！／／／　私の師匠になってください！／／／」

家康
「し、師匠！？」

家康は凪の師匠発言に驚いた。

家康
「……理由を聞いてもいいか？」

凪
「はい。私は幼い頃から修行をしてきました……ですが、私は一向に自分に自信が出てきません。そんな時にボーリング場で徳川殿の拳を見たのです。私は驚いたと同時に尊敬をしました……私はあの時から徳川殿の拳が忘れられませんでした。だから、私は徳川殿の拳を学びたいのです！」

家康
「……」

凪
「お願いします！」

凪は頭を下げた。
理由を聞いていた家康は静かに凪にこう言った。

家康
「楽殿。　頭を上げてくれ」

凪
「はい」

家康

「ワシもまだ武力を学んでいる身……人に教えられるほどの人間ではない」

凪
「……はい」

家康
「しかし」

凪
「？」

家康
「それでもワシに頼みたいのならワシは喜んでお主の師匠となろう」

凪
「！　ホ、ホントですか！？」

家康
「ああ」

凪
「ありがとうございます！」

凪は再び頭を下げた。

それを見ていた桃香達は……

元親
「納得したかい？」

桃香
「……うん」

愛紗
「どうやら我らの早とちりみたいでしたね」

朱里
「はわわ……恥ずかしいです／／／」

焔耶
「面目ない」

翠
「全く迷惑な奴らだな！」

風魔
『一件落着』

元親
「わかったならとっとと帰ろーぜ」

自分達のはやとちりだった事を認めた。
元親がそう言って桃香達は屋上を後にした。

星
「おや？」

そんな時、星は再び家康と凪の方を見た。

凪
「そ、それと……／／／」

家康
「ん？」

凪
「私の事は……“凪”とお呼びください／／／」

家康
「うむ、心得たッ！　よろしく頼むぞ、凪よ！」

凪
「は……はい／／／」

星
（これは……フッ、どうなる事やら）

そう思い星は屋上を後にした。
こうして家康は弟子を持つことになった。

第二十三話、闖入者？　告白！？（後書き）

フハハハハ！　ヴァカめ！　我の策にハマったな！

……すんません、調子に乗りました

とりあえず書けたので乗せときました！

今回はゲスト出演で“龍の骨”さんの作品から北郷零斗を出させて頂けました！

失礼のないように書いたつもりですが……うまく書けませんね。

……後で謝ろう

次回も未定です！

様々アドバイスをありがとうございます！

引き続き質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十四話、出会いの前触れ（前書き）

ジャ●アン
「おいス●夫！　いいもん持ってるじゃねーか！」

三成
「……何を言っている？」

ジャ●アン
「うるせー！　お前のモノは俺のモノだ！」

三成
「違うッ！　私は秀吉様の左腕だッ！」

霞
「てゆうか、気づけやジャ●アン！」

月
「へぅ～……恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まります」

第二十四話、出会いの前触れ

～あらすじ～

家康は凪の師匠になった！

～昼休み・１－Ｂ～

家康
「旅行？」

桃香
「うん！　これからゴールデンウイークに入るからみんなで旅行はどうかなと思ってね♪」

桃香は明日から5日間連休になる世間で言う“ゴールデンウイーク”に入るので皆で旅行をする案を出した。

家康
「確かに楽しそうだな！　ワシは構わんぞ！」

桃香
「よかった♪　それじゃあみんなにも聞いてみよう♪」

家康
「ああ！」

家康と桃香はみんなに聞いてまわった。

家康
「元親よ！」

元親
「どした？　家康」

家康
「皆で旅行に行かぬか！？」

元親
「旅行に？　……確かに面白そうだな！　俺はいいぜ！」

家康
「よし！」

元親、参加！

桃香
「愛紗ちゃ～ん！　星ちゃ～ん！」

愛紗

「桃香様？　どうかしましたか？」

星
「何かな？」

桃香
「あのね、家康君とさっき話しをしていたんだけど、ゴールデンウイークにみんなで旅行に行かない？」

愛紗
「旅行ですか？」

桃香
「うん！」

星
「それは面白そうですな・・・私は参加してもよいが愛紗はどうする？」

愛紗
「私も構いません」

桃香
「ありがとー二人とも！」

愛紗・星、参加！

家康

「焔耶！」

焔耶
「お呼びですか、お館！」

家康
「ゴールデンウイークにりょk」

焔耶
「行かせて頂きます！」

家康
「そ、そうか（汗）」

焔耶、参加！

桃香
「朱里ちゃん♪」

朱里
「何でしょう？」

桃香
「みんなで旅行に行かない？」

朱里
「旅行……ですか？」

桃香
「うん！」

朱里
「はわわ……そ、それじゃあ一つお願いしていいでしゅか？」

桃香
「（噛んだ……）お願い？」

朱里
「はい……私のお友達を連れていってもいいでしか？」

桃香
「（また噛んだ……）もちろんいいよ！」

朱里
「はわわッ！　ありがとうございます！　ヒャッハー！」

桃香
「朱里ちゃん！？」

朱里、参加！

家康
「翠！　風魔！」

翠
「どうしたんだ、家康？」

風魔
『？』

家康
「今度のゴールデンウイーク中に旅行に行かないか？」

翠
「旅行に～？」

家康
「ああ！」

風魔
『元親は何と言っている？』

家康
「参加するぞ！」

風魔
『ならば問題ない』

家康
「ありがたい！　翠は？」

翠
「アタシは部活次第だな～・・・」

家康
「そうか・・・では、参加するなら遠慮せずにワシに言ってくれ！」

翠
「わかった！」

風魔、参加！
こうして家康と桃香はみんなに旅行を誘った。

家康
「桃香、そちらはどうだ？」

桃香
「えっとね・・・愛紗ちゃんに星ちゃん、あと朱里ちゃんが来るよ！
家康君は？」

家康
「元親、焔耶、風魔が参加するぞ！　翠は部活次第と言っていたな」

桃香
「そっかぁ～・・・翠ちゃん、参加出来るといいね」

家康
「ああ・・・ところで、旅行先は決めたのか？」

桃香
「まだ決めてないよ。これからみんなで決めない？」

家康
「そうだな。では、皆を呼ぶとしよう」

こうして家康達は行き先を決めることにした。

～1－A～

華琳
「参加しなさい」

政宗
「何にだよ」

1－Aでは華琳が政宗を誘っていた。

華琳
「だから今回、ゴールデンウイーク中の私の旅行に参加しなさいと言ったのよ」

政宗
「いや、言ってねーよ」

政宗はツッコミを入れた。

政宗

「ったく、お前は唐突に言ってくるな」

華琳
「あら、ありがとう」

政宗
「褒めてねーよ」

華琳の冷静なボケに政宗は再度ツッコミを入れた。

華琳
「それで、どうかしら？」

政宗
「別に構わねーが……」

華琳
「そう……なら小十郎にも言ってくれるかしら？」

政宗
「ＯＫ」

華琳
「場所は後で言うわ……それじゃあ」

そう言って華琳は去っていった。
政宗は華琳の旅行に参加することになった。

～1－C～

その頃幸村のクラスでは……

幸村
「おや・かた・さまッ！！」

幸村がスクワットをしていた。
これが幸村の昼休みである。

そこへ……

蓮華
「幸村、少しいいかしら？」

蓮華がやってきた。

幸村
「おお！・どう・なさ・れた・蓮・華・殿！」

幸村は蓮華に返事をするがスクワットはやめなかった。

蓮華
「……とりあえず、スクワットをやめて」

幸村
「3・2・1……よし！　千回スクワット終了ッ！」

幸村はいい汗をかいていた。

幸村
「それで蓮華殿ッ！　某に何用でござるか？」

蓮華
「幸村……ゴールデンウイークは何をするの？」

幸村
「ごーるでんういーくでござるか？」

そう言って幸村は少し考えた後で……

幸村
「特にないので修行するでござる！」

幸村らしい答えが返ってきた。

蓮華
「そう……ね、ねえ幸村／／／」

蓮華は顔を赤くしていた。

幸村
「何でござるか？」

蓮華
「それなら……わ、私と旅行へ行かない？／／／」

幸村
「旅行でござるか？」

蓮華
「え、ええ……／／／」

幸村
「う～む……それは修行になるでござるか？」

蓮華
「……は？」

蓮華は何を言っているのかわからない顔をした。
しかし、蓮華はとっさの判断で幸村に答えた。

蓮華
「な、なるわよ！　しかもかなりの修行になるわよ！」

幸村
「誠にござるか！？」

蓮華
「ええ！」

幸村
「うぅおぉおぉおぉ！　みぃなぁぎぃるぅうぅうぅう！」

蓮華の言葉に幸村は何故か元気になっていた。

幸村
「蓮華殿ッ！　某は旅行に行くでござるッ！」

蓮華
「ホントッ！？」

幸村
「うむ！」

幸村は旅行への参加を決めた。

蓮華
（よし！　これで幸村との距離が近くなるきっかけが出来たわ！）

蓮華は心の中で喜んでいた。
たがこの喜びは一瞬で砕け散った。

天和
「ユッキ～」

ギュッ

幸村
「なッ！？／／／」

天和が現れ幸村に抱きついた。

幸村
「てて天和殿ッ！？／／／」

天和
「なーにーユッキー？」

幸村

「はななはな離れるでござるッ！／／／」

天和
「何でー？」

幸村
「ははは破廉恥でござるッ！／／／」

天和
「そんな事ないよー」

天和は幸村から離れようとしない。

蓮華
「天和ッ！　いい加減にしなさい！（怒）」

すると痺れを切らした蓮華が天和に注意した。

蓮華
「そんな羨ま……じゃなくて羨ましい事をするな！　……って結局羨ましいって言ってるじゃないの！／／／」

蓮華は焦りから自爆していた。

天和
「羨ましいの？」

蓮華
「違うわよッ！／／／　とりあえず幸村から離れなさい！」

天和
「ぶー……わかったよー」

そう言って天和は幸村から離れた。

天和
「ところでユッキー、さっき何を話してたのー？」

幸村
「ああ、実は」

蓮華
（！　マズい！）

だが、時すでに遅く……

幸村
「ごーるでんういーくで旅行に行く話しをいていたでござる！」

幸村は天和に旅行の話をしてしまった。

天和
「旅行？」

蓮華
（しまったぁぁぁぁ！）

幸村は蓮華にとって言ってはならない人物に言ってしまった。

天和
「ふぅ～ん……ねえ、ユッキー」

幸村
「何でござるか？」

天和
「その旅行私も行っていいかなー？」

幸村
「おお！　もちろんでござる！」

蓮華
「え！？」

幸村
「ん？　不味かったでござるか、蓮華殿？」

蓮華
「い、いや何も……」

天和
「やったー♪」

天和は幸村達の旅行に参加する事になった。

さらに……

穏
「あら～それじゃあ～私も参加してもいいですよね～？」

穏、登場！

幸村
「穏殿！？　いつからそこに？」

穏
「実は～最初から聞いていました～」

穏はこの機会を狙っていたのだ。

蓮華
「（クッこれ以上増やすわけには……）穏……実はね」

幸村
「おぅ！　皆で行けば楽しい事この上ない！」

蓮華
（幸村の馬鹿ぁぁぁぁぁ！）

蓮華は心の中で幸村にツッコミを入れた。

穏
「ありがとございます～♪」

幸村
「うむ！　そうと決まれば佐助にも伝えなければ！」

幸村は猛スピードで教室を出て行った

蓮華
「（こうなったら幸村を止める事は出来ないわね……）ハァ」

穏
「あの～蓮華さ～ん」

蓮華がため息を吐いていると穏から声をかけられた。

蓮華
「……何かしら？」

穏
「実は～頼みたい事がありまして～」

蓮華
「頼みたい事？」

穏
「この旅行に～私の友達も連れていっても大丈夫ですか～？」

天和
「あ、それならわたしもちぃちゃん達を連れて行きたいなー」

蓮華
「……別に構わないわよ」

穏
「アハ♪　ありがと～ございます～」

天和
「ありがとー♪」

そう言って穏と天和は去っていった。

蓮華
「（今更人数が増えても変わりないわ……なら、せめて旅行を楽しまないとね）……私も思春に声をかけようかしら」

蓮華は思春を誘うため教室を出た。

～1－D～

三成のクラスでは……

月
（……どうしよう）

月が悩んでいた。

月
（みっちゃんは連休はきっと生徒会の手伝いに行くから旅行になんか行けないよね……）

月は三成と一緒に旅行へ行きたいのだが、三成は先程生徒会に行き、生徒会の手伝いなどで連休中も暇がないと思っていた。

月
「へぅ……」

そんな鳴き声（？）をした月だが、予想外な事が起きた。

ガララッ

三成
「月」

生徒会から戻ってきた三成に月は声をかけられた。

月
「みっちゃん？」

三成
「……連休は暇を作っておけ」

月
「え？」

三成
「用件は以上だ」

そう言って三成は立ち去った。
すると次に大谷と詠が現れた。

詠
「全く・・・あれじゃわかんないじゃないの！」

大谷
「そう言うな・・・三成は恥ずかしいのだろう」

月
「詠ちゃん、刑部君・・・どういう事？」

月はまだ三成が言った事が理解できないでいた。

詠
「月・・・・さっき三成が言った事は旅行への誘いよ」

月
「へ？」

大谷
「先程三成が連休中、生徒会の手伝いをすると言うたが、我ら1年

は連休中は来なくてよいと言われての…三成は納得していなかったが半兵衛様がそれなら皆で旅行へ行けと申された」

詠
「ボクはさっきその話を聞いてね……だから三成は月にも言ったのよ」

２人の話を聞き月は理解した。

月
（みっちゃんと……旅行…）

すると月の顔はみるみるうちに赤くなってきた。

月
「へぅ／／／」

詠
「はいはい、顔を赤くしてるのはいいけど他にも誘っておいてよね」

月
「わ、わかったよ／／／」

そう言ったが月はまだ顔が赤かった。
様々なクラスが旅行へ行くことになっていた。

これが巡り会う運命だとはまだ誰も知らない……

～おまけ～

放課後、工学部は１－Ｂに集合していた。

元親
「工学部は連休中、休みで頼むぜ」

真桜
「ホンマか！？　助かるでー！」

思春
「私も用事があってな…正直助かる」

恋
「……ん」

風魔
『承知』

孫市
「また勝手に決めて……まぁいい」

元親
「つーわけで今日は解散！」

工学部は連休が決まった。

第二十四話、出会いの前触れ（後書き）

さて、次回から旅行編に入ります！

旅行先で皆を混沌に誘うぜ！

あと、リクエストで生徒会の話がありましたので旅行編が終わり次第書きたいと思います。

次回は旅行先で皆が遭遇します。

質問、評価、感想、リクエストもよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十五話・A、出発～家康・政宗編～（前書き）

～ある場面を恋ＢＡＲＡメンバーでやったら～

月
「もう……ゴールしていいよね……」

三成
「逝くなッ！　私の下から去るなーー！！」

詠
「これ……告白じゃないの？」

七乃
「お嬢さま、恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まりますよ～♪」

第二十五話・A、出発～家康・政宗編～

～あらすじ～

各々が旅行への準備をしていた。

～旅行当日・校門～

家康
「よし！　到着したな！」

家康は集合場所に到着していた。

家康
「少し早かったかな？　まぁよかろう！」

みんなよりも早く集合する辺り家康らしさが見える。

だが、一つ問題が……

家康
「まだ時間があるな……それまでゆっくりと待つとしよう」

集合時間・・・ａｍ０８：００
現在・・・・・・ａｍ０３：００

・・・・・・・・家康らしさが見える。

４時間後・・・・・・

桃香
「家康く～ん！」

集合場所に桃香と愛紗、それに赤髪の少女が現れた。

家康
「来たか！　・・・ん？　お主は？」

愛紗
「そういえば、まだ会った事ありませんでしたね・・・・・紹介します、私達の義妹の」

鈴々
「鈴々なのだー！」

家康
「アッハハハ！　元気がいいな！　ワシは家康！　よろしく頼む！」

鈴々
「よろしくなのだ！」

家康は鈴々と自己紹介をした。

桃香
「それにしても随分早いねー……何時から此処に？」

家康
「確か……朝の3時だったかな」

2人
「「は？」」

2人は何を言っているのかわからないでいた。

愛紗
「あ、朝の3時からですか！？」

家康
「ああ……何か変か？」

桃香
「早すぎだよ！　今まで何をしていたの！？」

家康
「待っていた！」

桃香
「……あははー（苦笑）」

愛紗
「……ハァ」

鈴々
「聞いてた通りの人なのだ！」

2人は家康らしい行動に言葉が返せず、鈴々は桃香達から聞いた通りの人間だと知った。

星
「おや、皆早いですな」

朱里
「お、お待たせしました！」

雛里
「あわわ……」

そんな事をしていたら星達が到着した。

桃香
「あ！　星ちゃんおはよう♪」

星
「ああ、おはよう」

愛紗
「朱里殿、そちらの少女は？」

朱里
「はい！　紹介します、私の友達の雛里ちゃんです！」

雛里
「よ、よろしくお願いしましゅ」

桃香
（噛んだね）

愛紗
（噛みましたね）

星
（噛んだな）

桃香達は朱里の友達とすぐ理解した。

家康
「雛里殿！　久しぶりだなー！　元気にしてたか？」

雛里
「あわわッ、家康さんお久しぶりです」

家康は前に学園案内をしたので雛里は知っていた。

星達が到着して１０分後……

焔耶
「お館ー！」

焔耶が向かってきた。

焔耶
「おはようございます！　お館！」

家康
「ああ、おはよう！　焔耶！」

朝から元気な焔耶。

焔耶
（あ、挨拶をされた……この上ない喜びだ！）

……一途な焔耶
焔耶が到着してすぐに……

翠
「おはよー！」

蒲公英
「おはよーございまーす♪」

翠達が現れた。
どうやら部活の方は大丈夫みたいだった。

家康
「翠よ！　よく来てくれた！」

鈴々
「たんぽぽも来たのだー！」

翠
「ああ！　顧問の先生がわかってくれる人でよかったぜ！」

蒲公英
「みなさんはじめまして！　いつもお姉ちゃんがお世話になっていまーす♪」

翠
「こらッ！　たんぽぽ！」

家康
「アッハハハ！　こちらも元気だな！」

そして、最後に……

元親
「ふあ～……」

風魔
『おはよう』

元親達が到着した。

家康
「眠そうだな、元親」

元親
「まぁな……昨日は遅くまでバイトだったからな……」

風魔
『寝不足』

元親と風魔は相変わらずバイト三昧のようだ。

鈴々
「ああー！　元親お兄ちゃんだ！」

鈴々は元親に走り寄って抱きついた。

元親
「おっと……元気にしてたか、鈴坊？」

鈴々
「うん！」

愛紗
「鈴々を知っているのですか？」

元親
「ああ……前にちょっとな」

詳しい事は鈴々のために言わない元親。
アニキである。

蒲公英
「アナタが風魔さんですか？」

風魔
『ああ』

蒲公英
「へー……ふーん……ほー……」

蒲公英は風魔を舐めまわすように見た。

蒲公英
「うん！　問題ないね！　お姉ちゃんをよろしくお願いします！」

翠
「たんぽぽ！／／／　余計な事を言うな！／／／」

翠は顔を真っ赤にしていた。

風魔
『何の事だ？』

翠
「知らなくていいから！／／／」

翠は半ば暴走している。

家康
「みんな揃ったか？」

桃香
「うん！」

家康
「では向かうとするか……“呉の郷”へ」

呉の郷……家康達が住んでいる所から離れた場所にある温泉が有名なホテルである。
家康達は呉の郷へと向かって行った。

～華琳宅～

政宗と小十郎は集合場所である華琳宅に来たのだが……

政宗
「……なぁ小十郎」

小十郎
「……はっ」

政宗
「ｅｘｐｅｃｔａｔｉｏｎはしていたが……デカいな」

小十郎
「確かに……学園の半分くらいはありますな」

目の前の豪邸に圧巻していた。

政宗
「とりあえず入るか」

そう言って政宗はデカい門の横にあるベルを鳴らした。

ピンポーン♪

華琳
《どなたかしら?》

政宗
「政宗だ」

華琳
《あら、ちょっと待ってて》

しばらくすると……

ガチャッ

華琳
「いらっしゃい」

デカい門の一カ所が開き、華琳が現れた。

政宗
「何でだよ!?」

華琳
「何かしら?」

政宗
「この門の意味はなんだよ!」

華琳
「……飾りよ?」

政宗
「何で疑問形!?」

小十郎
「政宗様、落ち着いてください」

華琳

「そうよ、落ち着きなさい」

政宗
「テメーのせいだろーがぁぁぁ！！」

政宗、ブチギレ中。

政宗
「ハァ、ハァ……」

華琳
「落ち着いたかしら？」

政宗
「だ、誰のせいだ……ったく、テメーの相手は疲れるわ」

華琳
「ありがと」

政宗
「褒めてねーよ……Ｈｕｍ～それで、今は誰が来てんだ？」

華琳
「アナタ達以外来てるわよ」

政宗
「そうか。……ならもう行くのか？」

華琳
「ええ。・・・それじゃあ、みんなを呼ぶわ」

そう言って華琳は携帯を取り出し・・・・・

華琳
「春蘭、みんなを門のところまで連れて来なさい」

と伝えた

しばらくすると・・・・・

春蘭
「伊達ッ！！　来るのが遅いぞ！」

桂花
「そうよ！　死ねばいいのよ！」

秋蘭
「姉者、桂花、まだ集合時間になっていないぞ」

沙和
「そうなの～、落ち着くの～」

真桜
「とゆーても無駄やけどな」

凪
「……」

風
「ぐぅ～……」

稟
「寝るな！」

風
「おぉ！」

政宗
「……いつものｍｅｍｂｅｒだな」

１－Ａのメンバーが出てきた

さらに……

流琉
「独眼１３様！／／／」

政宗
「……よ、よう（汗）」

流琉が現れた。

その後ろには流琉の友達が3人いた。

???

「流琉～、この人が独眼13さん?」

流琉

「そうだよ、季衣(きい)！」

流琉の後ろにいた少女

容姿は桃色の髪に三つ編みにして、おでこを出している

流琉と同じくらいの背丈

活発そうな少女

名を許(きょ)　季衣

流琉と同じクラスである。

季衣

「はじめまして！　ボクは季衣っていいます。よろしくお願いします、独眼13さん！」

政宗

「悪いんだが俺は独眼１３じゃねー。俺は伊達政宗っていう名前だ」

流琉
「そうなんですか！？」

政宗
「ああ・・・騙して悪かったな」

流琉
「だ、大丈夫です！／／／」

季衣
「流琉、顔赤いよ？」

流琉
「き、季衣！／／／」

流琉はたじたじである。

？？？
「おらはいつきって言うだ！　よろしくだ！」

次に挨拶したのは

季衣と同じ三つ編みで銀髪

方言訛りが強い少女

名をいつき。

???

「森（もり）　蘭丸（らんまる）だ！　よく覚えておけ！」

最後に生意気な挨拶をした少年

黒髪で短髪

無邪気だが善悪に対する意識が薄い少年

名を森　蘭丸。

政宗

（……どうしてこんな奴らばっかりなんだ？）

政宗は華琳に集まってくる人々はまともな人が少ないと思った。

華琳

「来たようね、それじゃあ行きましょう……“呉の郷”へ」

そう言って華琳がパチンと指を鳴らすと……

ブッブー！

バスが到着した。

小十郎
「準備がいいな」

秋蘭
「華琳様にとって毎年恒例だからな」

華琳
「みんな、乗るわよ」

華琳の一言でみんなバスに乗車した。
家康と政宗は呉の郷へと向かう。

～おまけ～

華琳
「流琉、政宗の隣は私よ・・・譲りなさい」

流琉
「こればっかりは譲れません！」

風
「では～あいだをとって風が座ります～」

2人
「それはダメよ」
「それはダメです！」

風
「おぉ！」

春蘭
「斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る……」

桂花
「死ねばいいのに死ねばいいのに死ねばいいの死ねばいいのに……
……」

秋蘭
「姉者は可愛いな～」

政宗
「…………Ha～」

政宗の悩みは続く……

第二十五話・A、出発～家康・政宗編～（後書き）

更新が間に合わないなぁ～……

クオリティが下がっているし、ここは一回修行に出るか？

次回は幸村・三成編です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

リクエストも受け付けます。

それでは、また次回！

第二十五話・B、出発～幸村・三成編～（前書き）

佐助
「絶ッ好調であぁぁぁるッ！！」

幸村
「マズい！　佐助が壊れた！」

蓮華
「クッ、無茶しやがって……」

思春
「私がツッコミをしなければならんのか？」

穏
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語～、始まります～♪」

第二十五話・B、出発～幸村・三成編～

～あらすじ～

家康と政宗が出発した同時刻に幸村と三成は……

～集合場所・公園前～

幸村達の集合場所である公園前には……

幸村
「ふん！　ふん！　ふん！」

幸村が槍で素振りをしていた。

佐助
「旦那～・・・今、朝だからもう少し静かにした方がいいんじゃない？」

佐助は近くの木の枝に座っており幸村に注意をした。

幸村
「何を言っている佐助！　俺は常に修行しなければ強くなれん！」

佐助
「いや、誰もやめろって言ってないっしょ（汗）」

そして、再び素振りを始める幸村。
佐助はこれ以上は言っても無駄と思い黙って幸村の修行をしていた。
幸村が素振りをし３０分後・・・・・

蓮華
「幸村……何をやってるの？」

思春
「……」

蓮華達がやってきた。

佐助
「旦那の悪い癖だよ、蓮華ちゃん」

蓮華
「まぁ……今に始まった事じゃないしね」

思春
「ただ近所迷惑だがな」

佐助
「俺様は言ったんだけど……無駄だった」

蓮華
「そう……その内やめるでしょう」

蓮華達も幸村に言っても無駄なのはわかっていたため何も言わなかった。
蓮華達が到着して5分後……

穏
「お待たせしました～」

穏がやってきた。

その後ろには2人の少女がいた

1人の容姿は

茶髪に片眼鏡をかけ

メガネの度があっていないのか鋭い眼光の顔立ち

しかし、おどおどしている姿が愛くるしい少女

もう1人の容姿は

黒髪で長髪

ビシッとした姿勢

だが、どこか幼さが残る少女

穏

「紹介しますね、連休明けに恋ＢＡＲＡ学園に転校してきます・・・」

？？？

「り、呂（りょ）　亞莎（あーしぇ）です！」

？？？
「周（しゅう）　明命（みんめい）です！」

亞莎と明命が元気よく挨拶をした。

蓮華
「私は蓮華。よろしく頼むわね」

佐助
「俺様は猿飛　佐助」

思春
「……甘　思春だ」

幸村
「某は真田　幸村と申す！」

佐助

「いつの間にいたの！？」

幸村
「ちょうど一万回振り終えた」

いつの間にか戻ってきた幸村が挨拶をしてすぐに……

天和
「やっほー♪」

地和
「来てやったわよ」

人和
「ちぃ姉さんダメ、私たちは招待されている身だから」

天和達がやってきた。

亞莎
「か、数え役満☆姉妹!?　な、何でこんなところに!?」

穏
「彼女達は、とある事情があって恋ＢＡＲＡ学園にやって来たんですよー」

明命
「そうだったのですか！」

亞莎と明命は数え役満☆姉妹の登場に少し驚いていた。

蓮華
「しかし不思議ね……数え役満☆姉妹とこうやって一緒に旅行するなんてね……」

人和
「私も驚いています…私たちが普通の学生生活を送っているなん

て」

天和
「これもユッキーのおかげだよー♪」

天和達が到着して5分後……

雪蓮
「おっまたせー♪」

雪蓮達がやってきた。
雪蓮の後ろには……

慶次
「みんなー元気にしてるかい？」

官兵衛
「小生は初めて会うな・・・小生は黒田　官兵衛だ。よろしくな」

小蓮
「やっほー！　蓮華お姉ちゃん元気ー？」

鶴姫
「よろしくお願いします☆」

慶次や小蓮などいろいろなメンバーがいた。
さらに・・・・・・

？？？
「何故、我がこんなくだらない事に参加せねばならぬ」

冥琳
「そう言うな元就」

冥琳と話している男性、毛利　元就は愚痴を言っていた。

元就
「我はこんな事をしているほど暇ではない」

冥琳
「なら断ればよかったろ？」

元就
「無理やり連れて来たのは貴様であろう」

冥琳
「フッ……さぁな」

元就は冥琳を睨みつけたが冥琳は軽く流した。

蓮華
「姉様と小蓮が来たわね……これで全員ね」

思春
「それでは参りますか？」

蓮華
「そうね」

天和
「ところでー・・・どこに行くのー？」

幸村
「某も聞いてないでござる」

幸村達はまだ場所を聞かされていないようだ。

蓮華
「そういえば言っていなかったね・・・・・」

思春
「今回の旅行は蓮華様にとっては里帰りみたいなものだ」

佐助
「里帰り？」

蓮華
「ええ。私が行くのは小学校以来ね」

慶次
「俺らは雪蓮に毎回誘われているからな～」

地和
「で、結局どこに行くのよ？」

人和
「ちぃ姉さん・・・」

地和は場所がわからないため少しイライラしていた。

蓮華

「ふふっごめんなさい。今回の旅行先は……“呉の郷”よ」

そう言って蓮華達は足を進めた。

～天下統一～

三成
「遅いッ！！（怒）」

此処は三成達が集合場所にしている天下統一の入り口前。
そこでは三成がいきなり怒鳴り散らしていた。
その原因は……

三成
「七乃と美羽はまだ来ないのかッ！（怒）」

美羽と七乃の遅刻である。

月
「へぅ～……お、落ち着いてみっちゃん（怒）」

三成
「これが落ち着いていられるか！　一体いつまで待たせる気だ！（怒）」

詠
「今回ばかりは三成に賛成ね……いくらなんでも遅すぎよ」

大谷
「奴らに不幸を……」

三成の他に詠と大谷も怒りをあらわにしていた。

???

「……み、三成先輩、少し落ち着い……（汗）」

三成

「金吾ッ！　貴様は喋るな！」

大谷

「金吾ォオ！！　わが生涯をかけた呪いを受けェエ！！」

???

「何でそんなに怒るんですかぁぁぁ！？（泣）」

金吾と呼ばれた少年

頭はカブトムシみたいな帽子を被り

少しぽっちゃりとした体型

多少汗っかきでパシりみたいな人物

名を小早川（こばやかわ）　秀秋（ひであき）

恋ＢＡＲＡ学園の中学に通う少年である

秀秋
「ひ、ひどいよ三成先輩～（泣）」

？？？
「だらしねぇーなー。おれさまみたいに強くなればいいじゃん！」

秀秋
「武蔵（むさし）君は強すぎるんだよ！」

武蔵と呼ばれた少年は名を宮本（みやもと）　武蔵

頭にハチマキを巻き

自分の武は最強と思っている

かなりのいたずら好きな少年

？？？
「お前たち！　さっきから五月蝿いのです！　恋殿が起きたらどーするのですか！」

恋
「ＺＺＺ」

恋はベンチの上で気持ちよさそうに寝ていた。

その恋の近くにいる少女
薄緑色した髪に小柄な体型
恋の事を最優先にしている少女
名を陳（ちん）　音々音（ねねね）

三成
「貴様……斬滅を望むのか？」

音々音
「お前ごとき怖くないのです！」

三成
「いいだろう……なら望み通りに斬滅してやる！」

月
「み、みっちゃん落ち着いて！（焦）」

三成はかなり苛立っていたので音々音の言葉に我慢できずにいた。

霞
「朝っぱから元気やな～」

霞はそれを眠そうに見ていた。

どうにか落ち着いた三成と同じ位に……

七乃
「すいませーん。遅れました」

七乃と未だに寝ている美羽が到着した。

三成
「首を出せ。斬首する」

大谷
「隠蔽は任せよ」

七乃
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！　これには山よりも高く、海よりも深い訳が……」

詠

「美羽の寝顔が可愛いのはなしよ」

七乃
「……（汗）」

詠
「三成」

三成
「刃に咎を！　鞘に贖いを！」

七乃
「いやぁぁぁ！　ごめんなさぁぁぁい！（泣）」

三成斬滅中……

三成
「これが貴様の罪だッ！」

七乃
「ご、ごめんなさい（泣）」

七乃は反省したようだ。

月
「みんな来たみたいだよ、みっちゃん」

霞
「やって、みっちゃん」

詠
「どうするの？　みっちゃん」

音々音
「早くするのです、みっちゃん」

恋
「……みっちゃん……ＺＺＺ」

三成
「みっちゃんみっちゃんと五月蝿い！　というか恋は起きていないのか!?（怒）」

みっちゃんブチギレ

大谷
「まぁ落ち着けみっち・・・三成よ」

三成
「刑部、今みっちゃんと言おうとしなかったか？」

大谷
「気のせいよ」

三成
「・・・・・・まぁいい、なら行くぞ」

そう言って三成は足を進めた。
その後ろについて行く一同。

霞
「なぁみっちゃん、結局どこに行くん？」

どうやら旅行先はまだ言われていないようだ。

三成
「……“呉の郷”だ」

こうして三成達も呉の郷へと向かうのであった。

～おまけ～

美羽
「主様～♪」

美羽はさっき起きて三成に抱きついていた。

三成
「離れろ」

美羽
「いやなのじゃ！」

美羽は一向に離れようとはしない。
その後ろでは……

月
「……」

ゴゴゴゴゴゴッ！

詠
「ゆ、月？（汗）」

月
「何かな？　詠ちゃん」

月が笑顔で殺気を出し、皆に恐怖を与えていた。

詠
「と、とりあえず落ち着いて…そうしないと小早川が」

秀秋
「ブクブク……」

秀秋は口から泡を吹きながら気絶をしていた。

月
「大丈夫だよ。そんなゴミ死んでも」

詠
（これは月じゃないこれは月じゃないこれは月じゃない……）

詠は目の前の月は月じゃないと言い聞かせた。
知らないところでとんでもない事が起きている三成だった。

第二十五話・B、出発～幸村・三成編～（後書き）

やっと出発しましたね……

これからどうしようかな……まぁ気楽にやっていきますか！

次回は遭遇します！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十六話、集いし、恋姫とＢＡＳＡＲＡ（前書き）

秀秋
「小早川　秀秋が命ずる！」

武蔵
「何言ってんだ秀秋？」

孫市
「……他人事とは思えないのは何故だ？」

鶴姫
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まります☆」

第二十六話、集いし、恋姫とＢＡＳＡＲＡ

～あらすじ～

皆が呉の郷へと向かう。

～呉の郷～

此処は“呉の郷”……温泉が有名なホテルである。
ホテルの他に周りには様々なショッピングモールや商店街がある。
さて、そんな呉の郷の目の前に立っている団体があった。

家康
「到着したか！」

家康達だった。

元親
「いいところじゃねーか！」

家康
「全くだ！」

家康と元親は到着して早々興奮していた。

愛紗
「落ち着いてください2人とも」

桃香
「でも気持ちはわかるな♪」

朱里
「確かに興奮しますよね」

蒲公英
「たんぽぽも興奮してるよ！」

家康達は初めて来るホテルに興奮していた。

星
「ではとっとと手続きを終わらせて街でも行きましょうぞ」

翠
「そうだな！」

家康
「わかった！　では入るとしよう！」

そう言って家康達は中へと入っていった。

一方のホテルの中では……

秋蘭
「華琳様、手続きが終わりました」

華琳
「ありがと、秋蘭」

政宗達が先に手続きをしていた。

政宗
「この後のｐｌａｎは？」

華琳
「特にないわ。好きにしてていいわよ」

政宗
「ＯＫ、それじゃあ俺は部屋で寝かせてもらうか」

そう言って政宗は部屋に行こうとした。

ガシッ！

が、止められた。

政宗
「……どうした、流琉？」

そこには服を掴んでいた流琉がいた。

流琉
「あ、あの！　……この後暇なら一緒に出掛けませんか？／／／」

流琉は顔を赤らめながら政宗を誘った。

しかし……

華琳
「ダメよ流琉、この後政宗は私と出掛るのだから」

華琳がそれを阻止した。

流琉
「そ、そんなのまだ決まってないじゃないですか！」

華琳
「いえこれは決定事項よ」

流琉
「誰が決めたんですか！？」

華琳
「私よ」

流琉
「横暴です！」

華琳と流琉、口論中。

春蘭
「やはり伊達を斬る！」

桂花
「やっちゃいなさい、春蘭！」

政宗
（……俺の意思は？）

政宗がそう思っていると……

家康

「政宗？　政宗じゃないか！？」

家康達がやってきた。

政宗
「ん？　家康か……何してんだ？」

家康
「ワシらは旅行に来たのだ！」

政宗
「オイオイ…俺らと一緒じゃねーかよ」

家康
「何と！？　そうなのか！」

桃香
「奇遇ですね！」

元親
「こんな事あるもんだな」

政宗と家康達が話していると……

凪
「師匠！」

華琳達も気付き凪が家康に近付いてきた。

家康
「凪じゃないか！　お主も来ていたのか」

凪
「はい！」

焔耶
（クッ……お館と喋りおって！）

真桜
「なんや大将に風魔も来てたんか」

元親
「そういう真桜も此処に来てたのか」

風魔
『奇遇』

星
「久しぶりだな、風に稟よ」

風
「はい～そうですね～……ぐぅ～」

稟
「挨拶をしながら寝るな！」

風
「おぉ！」

華琳
「アナタたちも此処にしたの？」

愛紗
「はい」

そんな雑談をしていると……

蓮華
「あれは……家康達か？」

幸村団体、到着。
蓮華はそう言って近付いて家康に声をかけた。

蓮華
「家康」

家康

「ん？　おぉ！　お主達も来たのか！」

幸村
「うむ！　これも修行のため！」

佐助
「はい旦那は黙っとこ～か」

華琳
「知り合い？」

愛紗
「はい、彼らは１－Ｃクラスの人たちです」

華琳
「そう」

雪蓮
「蓮華達の知り合いようね……ならまずは自己紹介をしましょうか！」

そう言って皆、自己紹介をした。

自己紹介中……

地和
「チカにぃ！」

元親
「ちぃ坊も来たんか」

地和
「うん！」

鈴々
「お兄ちゃん知り合い？」

元親
「まぁな」

思春
（……要注意だな）

鶴姫
「アナタは！？」

小蓮
「もしかして！？」

2人
「宵闇の羽の方！？」
「漆黒の翼さん！？」

風魔
『？』

人和
「お久しぶりです、風魔さん」

翠
「風魔、知り合いか？」

星
「慶次先輩も此処に来たのですね」

慶次
「その通りだよ！　星ちゃん」

沙和
「数え役満☆姉妹！？　サインちょうだいなの！」

天和
「いいよー」

沙和
「ありがとーなの！」

ところどころで会話が弾んでいた

桃香
「蓮華さんはどうして此処に？」

蓮華
「私は里帰りよ」

桃香
「里帰り？」

蓮華
「此処は私の実家よ」

一同
「「「「「……えぇぇぇぇ！？」」」」」

一同は驚愕した。

愛紗
「こ、このホテルが蓮華殿の実家なのですか！？」

雪蓮
「正確にはわたし達だけどね♪」

小蓮
「そうよ～スゴいでしょ！」

小蓮はエッヘンと貧層な胸を出した。

小蓮

「何ですって！（怒）」

雪蓮
「どうしたの、シャオ？」

小蓮
「あれ～……なんかバカにされた気がしたんだけど……」

そんな事をしてる家康達にまた違う団体が現れた。

霞
「なんや騒いどるやないかい」

詠
「あれは……官兵衛先輩！？」

三成達だった。

幸村
「ん？　お主達は……」

政宗
「石田……三成……」

三成
「……」

三成達の登場で周りの雰囲気はガラリと変わり静寂に包まれた。

大谷
「……」

小十郎
「……」

佐助
「……」

恋
「……」

朱里
「はわわ……（焦）」

雛里
「あわわ……（焦）」

月
「へぅ～……（焦）」

そんな雰囲気を変えたのは……

白蓮
「お～い、手続きをして……な、なんだこの雰囲気は！？」

白蓮だった。
……てか、いたのか白蓮。

白蓮
「何かあったのか？」

月
「白蓮さん！　ありがとうございます！」

白蓮
「どういう事だ？」

官兵衛
「いやお前さんはよくやってくれた」

白蓮
「官兵衛先輩！　どうして此処に？」

白蓮の登場によりさっきの雰囲気はなくなり和やかなムードに包まれた。

政宗
「アンタらも旅行か？」

三成
「……フンッ」

政宗
「相変わらず無愛想な奴だな」

美羽
「全くじゃ！」

七乃
「そうですね、お嬢さま♪」

大谷
「まさか主が来ているとは……愉快、愉快」

元就
「大谷、貴様には関係のない事だ」

大谷
「さしずめ、周に誘われたと見える」

冥琳
「先輩をつけろ、大谷」

恋
「……元親」

元親
「よぉ恋、お前も一緒か？」

恋
「……一緒」

音々音
「お前！　恋殿に近付くなです！」

恋
「ねね……ウルサい」

音々音
「何ですとーー！？」

蘭丸
「お前は！？」

武蔵
「誰かと思ったらおれさまに負けた蘭丸じゃねーか！」

蘭丸
「うるせー！　あんなの勝ちにならねーよ！」

武蔵
「あんだと！？」

蘭丸
「やんのか！？」

秀秋
「お、落ち着いてよ武蔵君（汗）」

いつき
「蘭丸もやめるべ！」

こちらも先程と同じように会話が弾んでいた。

雪蓮
「はいはい注も～く！」

雪蓮の言葉に皆は一度会話を止め雪蓮に注目した。

雪蓮
「さっき此処のお偉いさんと話し合ってみんなを招待する事にしたから♪」

つまりこの人数を奢る事だ。

政宗
「Ｈａッ！　粋なことしてくれるじゃねーか！」

穏

「あら～」

亞莎
「ほ、本当にいいんでしか！？」

明命
「凄いです！」

他にも様々な反応だった。

雪蓮
「ホントよ。お友達が来て何もしないのは失礼じゃない」

蓮華
「だから気にしないでください」

小蓮
「これも孫家の優しさだね！」

孫家の優しさが見えた。

家康
「ありがとう！　蓮華殿！」

慶次
「優しいな～雪蓮ちゃんは！」

鶴姫
「ありがとうございます☆」

皆は感謝の言葉を孫家に言った。

家康
「それでは、荷物を置いて街に行くとするか！」

桃香
「うん！」

そして皆はこれから街に行く為に部屋に荷物を置きに行った。

第二十六話、集いし、恋姫とＢＡＳＡＲＡ（後書き）

今回はみんな遭遇しました。

キャラ多すぎ！

白蓮存在感無さ過ぎ！

疲れるよ～・・・・

次回は街に行きます。

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十七話・A、お出掛け～前編～（前書き）

大谷
「人類補完計画……それが」

詠
「それ以上言うなぁー！」

月
「え、詠ちゃん落ち着いて」（汗）

白蓮
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぞ！」

第二十七話・A、お出掛け～前編～

～あらすじ～

荷物を置きに行った一同は出掛ける準備をしていた。

～呉の郷・入り口前～

家康
「さて、ワシらはどこに行こうか？」

元親
「俺は別にどこでもいいぜ」

風魔
『同じく』

準備が出来た家康は元親と風魔を誘って一緒に出掛けるようだ。

家康達ははどこに行こうか悩んでいると……

桃香
「あ！　見つけた！」

家康
「ん？」

家康は声のした方へ振り向くと桃香を筆頭に愛紗、朱里、雛里、焔耶、凪が向かってきた。

桃香
「探したよ～家康君」

家康
「桃香達じゃないか。どうした？」

愛紗
「私達も家康殿と一緒に出掛けようと思いまして先程部屋に行ったのですが既にいませんでしたので探していました」

朱里
「そしたら入り口前に家康さん達がいました」

家康
「なるほど」

家康は納得した。

焔耶
「ヒドいですよお館！　出掛ける時はこの私をお呼びください！」

家康
「アッハハハ！　すまん、すまん」

凪
「できれば……自分も……／／／」

家康
「わかった、これからはちゃんと誘うとするよ」

桃香
「お願いね♪」

雛里
「ところで家康さん、今からどこに出掛けるつもりだったんですか？」

家康
「それを今考えていたのだが……まだ決めていないのだ」

愛紗
「そうなのですか」

桃香
「じゃあ私たちも一緒に行っていい？」

家康
「もちろん！」

家康は心よく承諾した。
それを聞いていた元親と風魔は……

元親
「なら、俺らは他のところにでも行くとするか」

風魔
『承知』

家康達の邪魔しない為に別行動すると言い出した。

家康
「一緒に来ないのか？」

元親
「悪いな家康…ちょっくら寄りてーところもあるしな」

風魔
『さらば』

そう言って元親と風魔は歩き出し行ってしまった。

桃香
（元親君・風魔君……ありがと♪）

愛紗
（元親殿、風魔殿・・・感謝します）

桃香と愛紗は心の中で感謝をした。

家康
「残念だな・・・なら！　ワシらは元親達の分まで楽しむとするか！」

愛紗
「はい」

桃香
「じゃあ行ってみたいところがあるんだけど大丈夫？」

家康
「ワシは構わん、皆は？」

愛紗
「問題ありません」

朱里
「わ、私もです」

雛里
「だ、大丈夫です」

焔耶

「お館に任せます！」

凪
「私も師匠に託します」

家康
「ならば桃香、案内を頼む」

桃香
「任せて！」

桃香はそう言って皆を誘導した。

～洋服屋～

桃香
「此処だよ！」

家康
「此処は……服屋か？」

愛紗
「ですね」

桃香が誘導してくれたのは一見何の変てつもない只の洋服屋だった。

朱里
「桃香さん、どうして此処に？」

桃香
「実はね、此処は雑誌や広告なんかで紹介されている有名な店なんだよ！」

雛里
「そうなのですか？」

此処は雑誌やコマーシャルなどで有名らしい。

桃香
「だから、一度来てみたいと思ったんだ！」

家康
「そうか……ならば中へ入るとするか！」

そして家康達は中へ入っていった。
有名な店だけあって中は大量の洋服があった。

愛紗
「これは……スゴいですね」

雛里

「は、初めて見ました」

家康
「確かにスゴいな」

桃香
（みんな、ちょっといい）

桃香は家康に聞こえないくらいの声で女性陣を呼んだ。

愛紗
（どうかしました？）

桃香
（実は此処に連れてきた理由は只有名なだけじゃないの）

焔耶
（どういう事だ？）

桃香
（これを見て）

桃香は一枚の紙を見せた。

そこに書かれていたのは……

《これで気になるあの人がメロメロ！？　モテ服発売中！》

と書かれていた。

朱里
（はわッ！　こ、これは！？）

桃香
（言いたい事…わかるよね？）

愛紗
（なるほど…これで家康殿を魅了するのですね）

桃香
（そういう事♪）

凪
（…これで……／／／）

家康
「ん？　どうした？　お前達」

家康は集まっている桃香達に声をかけた。

桃香
「な、何でもないよ！」

桃香は慌てて家康に答えた。

家康
「？　まぁよかろう」

愛紗
「では、皆さんで服を選びましょう」

家康
「心得た！」

そう言って皆は服を選び始めた。

しかし、女性陣の心の中では……

桃香
（これで家康君とくっ付くのは……）

女性陣
（（（（私だッ！！））））

家康
「？」

女性陣の戦いが始まった。

一方の元親と風魔は……

～レストラン～

恋
「モグモグ」

鈴々
「おかわりなのだー！」

地和
「ちぃも！」

音々音
「恋殿ー！　慌てなくても料理は逃げたりはしないですぞ！」

元親
「……」

思春
「……長曾我部よ」

真桜
「思春はん……今は声をかけん方がええーで」

元親は風魔ではなく工学部の女性陣に鈴々、地和、音々音と一緒にいて、もの凄い勢いで料理を平らげていた。

何故こんな事になっているかというと……

～回想～

元親
「アイツらは上手くやってるかね」

風魔
『そう思いたい』

元親と風魔は桃香達の事を思い別行動をしていた。

元親
「さて…俺らはどうする？」

風魔
『元親に任せる』

元親
「そうか……それなら」

元親が場所を言おうとしたら……

思春
「こんなところにいたのか」

鈴々
「やっと見つけたのだー！」

恋
「……元親」

音々音
「恋殿ー！　こんな奴のどこがいいのですかー！？」

工学部の女性陣と鈴々、地和、音々音が現れた。

元親
「ん？　どうしたお前ら？」

真桜
「どうしたって、大将を探しとったのや！」

地和
「チカにぃヒドいよ！　ちぃを置いてくなんて！」

こちらも家康と同じ理由のようだ。

元親
「そうか、ワリィな」

元親は軽く謝った。

元親
「なら一緒に行くか。風魔はそれで……あん？」

元親は風魔に声をかけようとしたが既に風魔はいなかった。

元親
（どこいったんだ？　…アイツ）

鈴々
「どうしたのだ、元親お兄ちゃん？」

元親
「いや、風魔がいなくなってな…」

音々音
「何を言っているですか。ねね達が来た時にはお前1人だったのです」

元親
「そんなこたぁ…ん？　何だこれ？」

元親が風魔がいたはずと言おうとしたら胸から紙が落ちてきた。

元親はその紙を見ると……

《頑張れ》

と書かれていた。

元親
（……何を頑張んだ？）

真桜
「どないしたん、大将？」

元親
「……何でもねぇーぜ」

元親は風魔がいなくなった事がわかり思春達に声をかけた。

元親
「とりあえず飯でも食いに行くか」

鈴々
「御飯!?　行くのだー!」

恋
「……（コクっコクっ）」

地和
「いくいくー!」

そう言って元親達はレストランに行く事になった。

～回想終了～

元親
「忘れてた…コイツらがとてつもなく食う事を…」

元親は恋と鈴々がかなり食う事を忘れていてさらに地和はデザート全般をかなり食べていた。

思春
「長曾我部…少し出そう」

真桜
「大将……なんやらウチも出すで」

思春と真桜は恋達の食事を見て元親が可哀想になってきて食事代を少し出すと言ったが……

元親
「大丈夫だ……少しバイトを増やせばいい事よ」

音々音
「当たり前なのです！」

元親は男としてそれだけは譲れなかった。

元親
（風魔……お前さんが言いたかったのはこの事だったのか？）

絶対に違うと思うが今はその言葉が似合ってしまう。
そして会計の時にとんでもない額が表示され元親の財布は一瞬で軽くなった。

～おまけ～

風魔
「……」

先程元親と別れた風魔だが……

翠
「だからアタシと風魔は同じクラスなだけだ！」

小蓮
「とか言って実は漆黒の翼さんと付き合ってるんでしょう！　ズルーい！」

鶴姫
「本当の事を言ってください！　宵闇の羽のお方とはどういう関係何ですか！」

翠
「何度も言わせるなよ！　別にアタシと風魔はそういう……関係じゃ／／／」

人和
「此処で顔を赤くするなんて……怪しいわね」

蒲公英
「お姉ちゃん実際はどうなの？　ちょっと待ってて、今カツ丼を出すから」

翠
「だぁ～もう！」

元親と別れた後すぐに翠と会って一緒に行動していたが、それを小蓮達に見つかり尋問を受けていた。
こうして乙女達は思いの人と行動する事が出来た。

風魔
『めでたし、めでたし』

翠
「めでたくねぇーよ！！」

第二十七話・A、お出掛け～前編～（後書き）

なんか書いてみたけど……これ何処のギャルゲーだよ！

そんな事思ってしまう今日この頃。

次回は中編です！　３部作です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十七話・B、お出掛け～中編～（前書き）

慶次
「かすがちゃん、ほら笑って笑って」

かすが
「うん、それ無理」

謙信
「どうなさいました？　わたくしのうつくしいつるぎ」

無敵
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語！　無敵の開始！」

第二十七話・B、お出掛け～中編～

～あらすじ～

家康達が街中でお出掛けしてる頃……

～洋服屋・入口～

華琳
「何をしてるの政宗？　早く入りましょう」

政宗
「無理だ」

華琳
「あら、何故かしら？」

政宗
「何故ってテメェ……」

そう言って政宗は店を見た。

そこに書かれていたのは……

“キラッ☆　貴方の下着がありますよ！！”

政宗
「此処・・・女専用の洋服屋じゃねぇか」

華琳
「そうよ」

政宗
「そうよ、じゃねーよ！」

政宗は華琳にツッコミを入れた。

華琳
「何がイヤなの？」

政宗
「俺は男だ！」

華琳
「そんなの知っているわ」

春蘭
「馬鹿だなぁ！　お前は！」

政宗
「テメェは黙ってろ！」

桂花
「何よアンタ！　華琳様の言うことが聞けないと」

政宗
「テメェも入ってくんじゃねぇ！」

政宗は一向に入ろうとしなかった。

政宗
「Ｈａ～……だいたい俺じゃなくてもいいだろ」

流琉
「ダメです！」

政宗
「即答かよ！？」

風
「まぁまぁいいじゃないですか～」

いつき
「そうだべ！」

政宗の問いに流琉が即答して風がゆるく、いつきが元気よく答えた。

さらに……

星
「皆の言う通り、人間諦めが肝心ですぞ」
政宗
「……何でテメーがいんだよ……」
何故か星が加担をしていた。
星
「おや、此処に居てはマズいですかな？」
政宗
「テメェは家康のところに行かなくていいのか？」
星
「私が行かなくとも既に家康殿には女子がいる……それに私は伊達殿に興味を持っておってな」
政宗
「俺に？　……それはまたｒａｒｅな理由だな」
星の理由に政宗は呆れていた。
政宗

「そんな事はどーでもいい……俺は此処には入んねーぞ」

華琳
「……仕方ないわね」

政宗
（やっと諦めてくれたか……）

政宗は諦めてくれたとホッとした。

だが……

華琳
「春蘭！　流琉！」

2人
「「ハッ！」」

ガシッ！

政宗
「Ｗｈａｔッ！？」

その期待は大きく裏切られた。
華琳の掛け声とともに春蘭が肩を、流琉が腰を掴んだ。

華琳
「これでよし」

政宗
「よくねぇだろ！　どういう事だこれは！？」

華琳
「私は諦めるのは嫌いなの」

桂花
「さすが、華琳さま！」

華琳
「だから政宗、嫌でも入って貰うわ」

政宗
「ふざけんじゃねぇ！　ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

春蘭
「いい加減に諦めろ！」

流琉
「政宗様の身体……／／／」

星
「フッ…やはり、面白い御方だな」

華琳達は嫌がる政宗を無視して中へ入って行った。
それを遠くで見ていた人たちがいた。

～街中～

小十郎
「政宗様……」

秋蘭
「心配なら行けばよかろうに……」

小十郎と秋蘭だった。

さらに……

稟
「まさか星までもが……不思議なものですね」

季衣
「いつきちゃんも政宗さんの事好きなのかな？」

稟と季衣もいた。

小十郎

「いや、これも政宗様のため……俺は心を鬼にして見守るとしよう」

秋蘭
「わからん奴だな」

小十郎
「そういう秋蘭はどーなんだ？　華琳と流琉が心配じゃないのか？」

秋蘭
「心配だ……しかし、華琳様には姉者がいる」

小十郎
「流琉は？」

秋蘭
「私は政宗を認めている……だから今回は大丈夫だろう」

小十郎
「……フッ」

秋蘭の真意を聞き小十郎は少し笑った。

小十郎
「なら、俺も政宗様を信じなければな」

秋蘭
「小十郎……」

小十郎
「秋蘭、稟、季衣、これから飯でも食いに行くか？」

季衣
「ホントッ！？　行きたい！」

稟
「もうよろしいのですか？」

小十郎
「ああ、大丈夫だ」

稟
「なら、付き合いましょう」

小十郎
「よし、なら行くか」

そう言って小十郎達は歩き始めた。

その最中、秋蘭は……

秋蘭
（小十郎、か……フッ、良いかもしれんな）

小十郎に何か特別な感情を入れるのであった。

一方の幸村は……

～喫茶店～

蓮華
「……」

穏
「……」

天和
「……」

幸村
「ど、どうされたのでござるか？（汗）」

喫茶店に来た幸村達だが蓮華達の無言のプレッシャーに幸村はタジタジだった。
何故このような事になったのか。

それは……

沙和
「な、なんかみんな怖いの（汗）」

亞莎
「ガタガタブルブル（汗）」

この2人が幸村の横に座っていたからだ。
沙和は天和と先程仲良くなり、亞莎は明命と行動していたが明命が猫を見た途端いなくなり穏と共に行動していた。
そして休憩がてら喫茶店に入り6人席のテーブルに座る時に、幸村の横に誰が座るかで揉め事になり、くじ引きをした。
結果、沙和と亞莎が座る事になった。
最初2人は断ったが蓮華達は大丈夫だと言って2人を座らせた。

幸村
「で、ではそろそろ休憩を終わりにするでござるか？」

幸村は耐えられなくなり一刻も早く此処から出ようとしたが……

蓮華
「何を言ってるの幸村…まだ注文した物がきていないわよ（怒）」

穏
「どうしたんですか～？　そんなに慌てて（怒）」

天和
「変なユッキー（怒）」

ゴゴゴゴゴッ！

蓮華達は普通に会話しているつもりだが負のプレッシャーが幸村達を恐怖に陥れていた。

幸村
（ふ、震えが止まらん！？）

幸村は原因がわからずに蓮華達に恐怖していた。

この後、２０分後に喫茶店から出た幸村達が向かったのは……

～コスプレショップ～

幸村
「蓮華殿……此処は一体？」

蓮華
「私も詳しくはわからないけど天和達が来たいと言っていたから」

幸村達はコスプレショップに来ていた。

蓮華はわからないと言ったが内心は……

蓮華
（此処で少しでも幸村の気を引かないと！）

幸村の事を考えていた。
天和や穏も同じ気持ちのようだ。

天和
「ユッキー、ちょっと待っててね♪」

穏
「私たちは着替えて来ますからそれを見てくださいね♪」

幸村
「？　よくわからんが心得た！」

そう言って蓮華達は着替えに行った。

5分後……

沙和
「着替えて来たのー！」

亞莎
「や、やっぱり恥じゅかしいでし／／／」

ノリノリの沙和とカミカミの亞莎が一番に出てきた。
沙和は軍服で亞莎は巫女装束だ。

幸村
「おお！　２人とも似合ってるでござる！」

沙和
「ホントッ！？　ありがとーなの！」

亞莎
「あ、ありがとうございましゅ／／／」

幸村は純粋に沙和と亞莎を褒めた。

次に現れたのは……

蓮華
「ゆ、幸村……／／／」

メイド服を着た蓮華だった。

幸村
「蓮華殿！　とても可愛いでござるな！」

蓮華
「か、可愛いなんて、そんな／／／／（ならこの服を買って幸村の家で私が“お帰りなさい、ご主人様”と言う事も・・・あ、ダメ幸村／／／／）」

蓮華は妄想しながらも着て良かったと思っていたら・・・・・

穏
「着替えてきました～」

天和
「ジャジャーン！」

幸村
「なッ！？／／／／」

最後に現れた穏と天和が着て来たのは穏がバニー服で天和がレースクイーンであった。

穏
「どうですか～？　幸村さん」

天和
「どうユッキー！　似合ってる？」

蓮華

「ば、馬鹿！　そんな格好したら・・・」

蓮華は妄想から脱出して穏と天和の服装に注意をしようとしたら・・・・

幸村
「は、は、破廉恥でござるーーー！！／／／／」

ダダダダダダッ！

幸村はもの凄いスピードで店から出ていった。

蓮華
「・・・・・遅かったか」

こうして蓮華達は元の服に着替えて幸村捜しを始めた・・・・・

～おまけ～

佐助
「さて、余りモノの俺様たちは何をする？」

詠
「ちょっと！　そんな言い方しないでよ！」

白蓮
「でもホントの事だから仕方がないな」

こちらはまた奇妙な組み合わせが出来ていた。
佐助は元から1人で行動をしていたが先程、詠と白蓮に出会いともに行動した。

佐助
「ところで、アンタらは好きな官兵衛先輩と一緒じゃないのか？」

詠
「官兵衛先輩は捜してもいなかったのよ」

白蓮
「それに私と詠は別に惚れているわけではないぞ」

佐助
「そうなのか？」

詠
「そうよ、ボク達は尊敬はしているけど惚れていないわよ」

佐助
「ふぅ～ん、そんなもんか……ん？　あれは」

佐助がふと視線をずらすとそこにいたのは……

子猫
「ニャア～」

明命
「待ってくださぁ～い！　お猫様～！」

子猫を追いかける明命がいた。

佐助
「……何してんだ？」

詠
「子猫を追いかけてるわね」

白蓮
「オイオイ、大丈夫なのか？」

白蓮はこのままだと危ないと思っていた。
その白蓮の予想は当たってしまった。

子猫
「ニャア～」

ヒョイッ

明命
「あ！　お猫様！」

追いかけてる最中、子猫は車道に出てしまった。

すると……

ブップーーー！！

一台のトラックが子猫に迫ってきた。

明命
「危ない！」

明命は子猫を守るために車道に出て子猫を抱えた。

詠
「えッ！？」

白蓮
「嘘だろ！？」

詠と白蓮は驚愕していたが佐助は……

佐助
「チッ！」

シュン

明命を助けるために車道に出た。

明命
（間に合わない！？）

明命は迫りくるトラックに間に合わないと思い目を瞑った。

明命
（……あれ？）

しかし、いつまでたってもトラックの衝撃が来ないのでゆっくりと目を開けた。

するとそこには……

佐助
「大丈夫かい？　子猫ちゃん」

佐助がいた。
そこは既に歩道の上であった。

明命
「え？　佐助さん、どうして此処に？」

詠
「アンタを助けたのよ」

白蓮
「全く、無茶をして……」

明命
「す、すいません……そ、そうだ！　お猫様はッ！？」

佐助
「心配すんな、此処にいるから」

子猫
「ニャア～」

子猫は佐助の肩の上に乗っかっていた。

明命
「よかった～・・・あの、先程はありがとうございます！」

佐助
「いいのいいの、気にすんな。この子猫ちゃんは明命ちゃんのか？」

明命
「いえ・・・・・私も先程見つけまして追いかけていただけです」

佐助
「そっか・・・でも、一応明命ちゃんに預けるわ」

そう言って子猫を渡そうとするが・・・・・

ガシッ

佐助
「・・・・・あら？」

子猫は佐助の肩から離れようとはしなかった。

詠
「どうやらその子猫、そこが気に入ったみたいよ」

白蓮
「よかったじゃないか、佐助」

佐助
「いや、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

佐助の肩から離れようとしない子猫を見て明命は……

明命
（このようなお猫様は見た事がない！？　もしかしてこの御方は……）

明命
「猫神様！」

佐助
「……は？」

明命
「アナタは猫神様なのですね！」

佐助
「いや、違うからね！」

明命

「これから私も猫神様と一緒に行動してよろしいでしょうか？」

佐助
「聞いてねーよこの人！？」

詠
「いいわよ」

明命
「ありがとうございます！」

佐助
「しかも勝手に話を進めてるし！？」

白蓮
「諦めろ、猫神様」

佐助
「……なんでこうなるかなぁ～」

佐助は猫神様になった。

第二十七話・B、お出掛け～中編～（後書き）

なんとか書いたが、遅いな……今度はもっと早く書くか

次回は後編です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十七話・C、お出掛け～後編～（前書き）

慶次
「夢吉、これを持ってきてくれないか？」

夢吉
「うん、それ無理」

雪蓮
「喋った！？」

冥琳
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始めるか」

第二十七話・C、お出掛け～後編～

～あらすじ～

政宗と幸村達が苦労してる頃……

～ゲームセンター～

三成
「……」

三成達は今、ゲームセンターに来ていた。

その理由は……

美羽
「主様！　今日も遊ぶのじゃ！」

美羽にあった。

三成は大谷を探していたが見つからず部屋に戻ろうとしたら美羽に見つかり此処まで連れて来させられていた。

ただ、美羽だけではない。

七乃
「やっと来てくれましたね」

霞
「大変やったで～」

この2人も関与していた。

三成
「何故私がこのような事を……」

月
「お、落ち着こうよみっちゃん（汗）」

そんな三成は苛立ちを覚えたが月が宥めていた。

霞
「そないな事気にしたらアカンでぇ～」

美羽
「そうじゃ！　妾が遊びたいと思ったら主様も思っておるのじゃ！」

七乃
「人の気持ちも考えずに自分の都合に合わせるなんてさすがお嬢さま！　憎いね！　この！」

美羽
「ワハハハ！　もっと褒めてたも～」

月
「……褒めてませんよね、それ（汗）」

七乃の言葉に美羽は喜んだ。

七乃
「しかし、ただ遊ぶだけなのはつまんないですね～」

霞
「せやな～」

美羽
「そこで！　妾にいい考えがあるのじゃ！」

月
「いい考えですか？」

美羽
「うむ！」

そして美羽は三成の前までいきビシッと三成を指を差した。

美羽
「主様！　妾達と勝負するのじゃ！」

三成
「……何を言っている？」

三成は美羽の言葉の意味がわからないでいた。

美羽
「主様はゲームが強いのじゃ！　じゃから妾達で勝負するのじゃ！」

三成
「そんな戯れ言に付き合っていられるか」

そう言って三成は立ち去ろうとしたが……

七乃
「とか言って実は負けるのが怖いんですよね」

三成
「……何？」

七乃の言葉に足を止めた。

霞
「ウチらと闘って負けるのが怖いんやろ」

七乃
「やーい、弱虫」

三成
「黙って聞いていれば好きな事を……いいだろう！　勝負してやる！」

2人の言葉に我慢ができなくなって勝負を挑んだ三成。

そんな様子を見て2人は……

2人
（（計画通り……ニヤリ））

と思っていた。

美羽
「ならばこれで勝負じゃ！」

美羽が指したのはエアーホッケー。

七乃
「では、ルールはこれでいいですか？」

ルール

・三成1人と女性チームで対戦する

・12点を制した方の勝ち

・女性チームは2点入れられたら交代する

美羽
「うむ！」

三成
「よかろう」

こうしてエアーホッケー頂上戦が開始された。

～エアーホッケー～

美羽
「まずは妾からじゃ！」

三成

「早くしろ」

最初に美羽からの攻撃。

美羽
「うりゃ！」

カン！

打たれたパックは三成のゴール目掛け真っ直ぐ放たれた。

しかし……

三成
「ハァッ！」

カアァァン！！

美羽
「ぴぃ！？」

ガコン！

三成はそのパックを思いっきり打ち返して美羽のゴールにパックを決めた。

霞
「大人げないで！？」

七乃
「ぶーぶー」

三成
「フンっ、勝負に手を抜くほど私は甘くない！」

その後、霞、七乃、月も応戦したが三成の強さに手も足も出ないでいた。
あっという間に１１点を取った三成。

女性チーム最後は……

月
「へぅ……」

月だった。

月
（無理だよ～……みっちゃんに勝つなんて）

三成
「どうした月、さっさと始めろ」

月
「わ、わかったよ……」

そう言って始めようとした月だが……

霞
（このままやったら負けてまう！？　そないなことだけは避けなあかん！　……そうや！）

勝負ごとには勝ちたい霞はある秘策を思いついた。

霞
「月っち～！」

月
「霞ちゃん？」

霞
「もしこの勝負に勝ったらみっちゃんを好きにしてえーで！」

ピクッ

三成
「貴様ッ！　私はそんなの許可していない！」

霞
「えぇやないかい！　それともなんや、この点差で負けるのが怖いんか？」

三成
「何だと？」

霞
「だったらウチらが負けたらウチらの事も好きにしてえーから！」

美羽
「何じゃと！？」

七乃
「そんなの聞いてませんよ！？」

霞
「うっさい！　死ぬ時は一緒や！」

三成
「……よかろう」

霞

「おっしゃ！　やったれ月っち！」

月
「……」

霞の言葉に月は無言のまま構えてパックを放った。

カアァァン！！

三成
「！？　クッ！」

三成はいきなり月のパックが早くなった事に驚いたが何とか打ち返した。

だが……

カンッカンッ！　ガコン！

三成
「なんだこのプレッシャーは！？」

三成が返したパックは既に三成のゴールに入っていた。

七乃
「……あれ～（汗）」

美羽
「は、はじめて入ったのじゃ！」

美羽と七乃は驚愕していたが霞だけは確信をした。

霞
（やっぱりや！　月っちはみっちゃんに関わると強くなるんや！）

月
「……みっちゃん」

三成
「何だ？」

月
「私は……負けないッ！」

パアァァァン！

その時何か種が砕けるような音がして月の目の色は変化していた。
月、覚醒！

三成
「ふざけるなッ！　私は秀吉様の左腕だ！」

カンッカンッカンッ！

三成はパックをジグザグに放った。

月（覚醒）
「ヤァ！」

カアァァァンッ！　ガコン

だが、月はいとも簡単に打ち返してゴールを決めた。

三成
「クソッ！」

この後、月は怒涛の勢いにより同点まで持ち込んだ。

美羽

「スゴいのじゃ！」

七乃
「頑張ってください月さん♪」

霞
「もうちょいやで！」

美羽達は覚醒した月を応援した。

三成
「認めるか！　こんな結果など認可しない！」

月（覚醒）
「それでも！　守りたい世界があるの！」

三成
「偽善の色によがり狂うな！」

霞
「つーか、守りたい世界ってなんやねん！？」

そんな霞のツッコミを無視して最終ゲームが始まった。

三成
「ハァ！」

月（覚醒）
「ヤァ！」

三成
「甘いわ！」

月（覚醒）
「まだです！」

三成
「粛正する！」

月（覚醒）
「伊達じゃない！」

両者激しい打ち合い。
その時、三成が動いた。

三成
「そこだァァ！」

カンッカンッカンッ！

三成は月の隙を突きジグザグシュートを放った。

月
「クッ！」

月はどうにか返したがパックは少しスピードが遅く、真っ直ぐ三成に打たれた。

三成
「終わりだッ！」

カアァァンッ！！

それを狙っていた三成は思いっきり月のゴール目掛け放った。

しかし……

キュピィィン！

月（覚醒）
「……そこです！」

カアァァンッ！！

月は勢いそのままに打ち返した。

三成
「なん…だと……!?」

三成は打ち返しす事が出来ず……

ガコン！

ゴールに入った。
女性チーム、勝利！

美羽
「やったのじゃ！」

七乃
「スゴいじゃないですか！」

霞
「ようやった！　月っち！」

月
「へぅ……／／／」

月は覚醒が終わり、恥ずかしくなってきていた。

美羽
「では月よ！　主様に罰を与えるのじゃ！」

七乃
「でも、ホントにいいんですか？」

三成
「私は嘘は嫌いだ」

霞
「よっしゃ！　言ったれ月っち！」

月
「じゃ、じゃあ／／／」

月は顔をまだ恥ずかしいのか赤くしながら言った。

月
「プリクラを撮りませんか？」

霞
「……は？」

霞は間抜けな顔で返事をした。

霞
「そんなんでえーのか？」

月
「はい。みんなで撮るなんて滅多にありませんから」

七乃
「と言うわけでいいですか三成さん？」

三成
「……好きにしろ」

美羽
「では！　撮るとするかの！」

霞
「……まぁえーか」

そう言って三成達はプリクラを撮るのであった。

～喫茶店～

ところ変わって此処は先程、幸村達が休憩していた喫茶店。
此処にある４人組のグループがあった。

慶次
「相変わらず此処のケーキはおいしいね～！」

雪蓮
「ホントよね～♪」

元就
「……」

冥琳
「どうした、元就？」

慶次達だった。
幸村達が去ったあとすれ違うようにこの喫茶店にやってきた慶次達。
しかし、元就はつまらなそうにしていた。

元就
「こんな座興に付き合っていられるか」

冥琳
「そう言うな元就」

慶次
「そんな暗い顔すんなよ。ほら、笑った笑った！」

元就

「するか馬鹿者」

雪蓮
「ホント愛想悪いわね～」

元就はこの環境が嫌いのようだ。

冥琳
「そう言うな雪蓮。元就、これでも食べるか？」

元就
「周、何故我に付きまとう？」

冥琳
「フッ・・・さぁな」

慶次
「ほ～・・・さすが、冥琳！　クールだな」

雪蓮
「こういう時ってＫｏｏｌと言えばいいのかしら？」

冥琳
「発狂したいのか、雪蓮」

元就
「くだらん」

そんな事言いながら一緒にいる元就。

慶次
「よっしゃあ！　んじゃまぁこれから何処に行こうかね？」

雪蓮
「この先なら、釣り堀があるわよ」

慶次
「釣り堀か・・・いいじゃないか！　それじゃあみんなで釣り堀大会でも洒落込みましょうか！」

雪蓮
「賛成！」

冥琳
「だそうだぞ元就」

元就
「我は帰る」

冥琳
「しかし、元就の部屋のカギは此処にあるのだが？」

元就
「・・・・・謀ったな冥琳」

冥琳

「さて、何の事やら」

そして慶次達は釣り堀に行くのであった。
ちなみに一番デカい魚を釣ったのは元就である。

～おまけ～

此処は呉の郷の何処かにある地下室。

そこでは……

大谷
「官兵衛、計画はどうなっている？」

官兵衛
「先輩をつけろ刑部…安心しろ、順調に進んでいる」

大谷
「それはメデタキな」

大谷と官兵衛がある計画を立てていた。

さらに……

武蔵
「んで、おれさま達は何をすんだ？」

蘭丸
「オイ！　協力するからわかってるだろーな！」

秀秋
「だ、大丈夫かなぁ～（汗）」

蘭丸達の姿もあった。

大谷
「主達にはこの計画を書いてある人物に伝えてきてくれ」

蘭丸
「蘭丸の質問は！？」

官兵衛
「安心しろ、終わったら金平糖を買ってやるから」

蘭丸
「約束だぞ！」

武蔵
「おっしゃ！　そんじゃみんなに伝えてくるか！」

秀秋
「ま、待ってよ～武蔵君！」

蘭丸
「アイツには負けないぞ！」

蘭丸達はものすごいスピードで去っていった。

官兵衛
「刑部、何でお前さんがこんな計画に協力するんだ？」

大谷
「いやなに、我は皆の絶望する姿が見たいだけよ……ヒヒヒッ！」

官兵衛
「……相変わらず悪趣味だなぁ、刑部」

そう言って大谷と官兵衛も去っていった。
大谷と官兵衛の計画とは！？
まて、次回！

第二十七話・C、お出掛け～後編～（後書き）

つ、辛い……

早く投稿しようとしたら深夜のバイトが長引いて４時帰り……その後すぐに引っ越しのバイト。

死ぬな自分……

そんなこんなでこの小説は１ヶ月経ちました。

皆様の応援があった為にやり続ける事が出来ました！

これからもよろしくお願いします！

次回はある計画が実行されます。

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十八話、漢の決戦！（前書き）

官兵衛
「これは慶次達が帰ってきてある計画の準備をしていた夜の８時３４分５０秒から始まる」

２０：３４：５０
２０：３４：５１
２０：３４：５２

官兵衛
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語はリアルタイムで進行する」

第二十八話、漢の決戦！

～あらすじ～

三成と慶次達がお出掛けした後、ある計画が実行されようとした。

～呉の郷・？？？～

官兵衛
「今回の計画に参加したことを感謝する」

官兵衛がとある計画の為様々な人物に協力を求めた。

すると……

政宗
「まぁ気にすんな」

元親
「今回の計画には俺たちの夢でもある」

慶次
「ここで引いたら男じゃないよ！」

佐助
「そういう事～」

大谷
「しかし主らも参加するとはな・・・愉快、愉快」

小十郎
「俺は政宗様について行くのみ」

風魔
『友の為』

そこには声をかけた政宗、元親、慶次、佐助、大谷、小十郎、風魔がいた。

官兵衛
「お前さんらは同じ志を持った同士だ。だからこの計画は必ずや成功する」

元親
「ならとっととやろーぜ。俺たちの浪漫の為に」

政宗
「ｒｏｍａｎか・・・・Ｈａ！　なら、何としてでもこれは成功させなきゃな。小十郎！　俺の背中は頼んだぜ！」

小十郎
「お任せあれ」

慶次
「罷り通るとするかね！」

佐助
「さて、頑張るとしますか」

風魔
「……」

大谷
「ヒヒヒッ！　愉快なり」

そう言って男性陣はとある場所に入っていった。

そこの看板に書かれていたのは……

～男湯～

計画
“漢たちの浪漫を求め……集え、勇者たちよ！”

別名……女湯覗き！（犯罪ですので良い子の皆さんはやらないでください）

～男湯・露天風呂～

官兵衛
「やはり……いつ見てもデカいな。この壁は」

男性陣は露天風呂の男湯と女湯に立ちはだかるバカデカい壁にぶち当たった。

佐助
「オイオイ……軽く５ｍはあるぞ」

風魔
『しかもこの壁は北条建設の壁だ』

政宗
「なるほど……ｔｒｏｕｂｌｅｓｏｍｅなわけだ」

慶次
「だけど官兵衛、策はあんだろ？」

官兵衛
「小生を舐めるな。そんな対策はいくらでもある」

元親
「ほぅ～……ならその策とやらに期待するかね」

男性陣はこの壁の先にある浪漫を求め奮闘する。

小十郎
「……オイ」

大谷
「なんだ？」

小十郎
「俺ら以外の奴には声を掛けたのか？」

大谷
「……まぁ声を賭けたがそれぞれこういう理由で断られた」

～理由～

・家康の場合、興味はあるが凪との修行の為

・三成の場合、興味がない為

・幸村の場合、破廉恥と叫んで何処かに走り去った為

・元就の場合、下衆の考える事はわからんと言って去っていった為

・後輩達の場合、それどころではない（武蔵と蘭丸が決闘するのを秀秋が審判しなければならない）為

大谷

「……との事よ」

小十郎
「……そうか」

再び官兵衛達に視線に戻す小十郎。

官兵衛
「第一の策は……風魔、佐助！」

佐助
「了解した！」

風魔
『承知』

第一の策は忍者の力で壁を登りきること。

官兵衛
「お前さんらにはこれを渡す」

そう言って官兵衛が渡したのはロープ。

佐助

「なるほど……これで上に到達したら降ろせばいいのか」

風魔
『納得』

官兵衛
「理解が早くて助かる……では、頼んだぞ」

佐助
「御意」

風魔
『御意』

そう言って佐助と風魔は高く飛んだ。

小十郎
「さすが……忍者だな」

慶次
「コイツは楽々クリアかな！」

そう言ってる間に佐助と風魔は壁の頂上に到達しようとしていた。

だが……

ゴチィィン！

佐助
「ふげッ！？」

風魔
『！？』

一同
「「「「なッ！？」」」」

突如現れたブロックにより佐助と風魔は頭をぶつけ、落ちてきた。

慶次
「佐助ッ！　大丈夫か！？」

佐助
「早く新しい影を見つけなよ・・・ガクッ」

元親
「風魔ッ！　しっかりしやがれ！」

風魔
『任務・・・失敗・・・ガクッ』

そう言って佐助と風魔は気絶した。

政宗
「チッ！　こんなにもｓｐｅｅｄｙにやられるとは！」

小十郎
「しかし、何故あのような場所にブロックが？」

大谷
「やれ、まさかと思っていたが……」

官兵衛
「敵さんもかなりの切れ者がいるみたいだな……」

慶次
「官兵衛！　まさか！？」

官兵衛
「察しの通り……“孔明の罠”だ！」

～女湯・露天風呂～

朱里
「くっしゅん！」

雛里
「朱里ちゃん……風邪？」

朱里
「わかんないけど・・・悪い気はしませんでした♪」

雛里
「？　・・・・・変な朱里ちゃん」

此処は男性陣が頑張って見ようとしてる隣の女湯の露天風呂。

華琳
「しかし、此処はいい場所ね」

蓮華
「そう言われると恥ずかしいわね」

桃香
「でも本当の事だし仕方がないよ～ふにゃ～」

愛紗
「桃香様、だらしないですよ」

雪蓮
「まぁまぁいいじゃない♪」

春蘭
そこでは女性陣が露天風呂に揃っていた。

「か、華琳さまの裸……ハァハァ／／／」

桂花
「いつ見ても美しい……ハァハァ／／／」

秋蘭
「落ち着け。２人とも」

風
「皆さん元気ですね～」

宝慧
「風よ……この目隠しを取ってくんねーか？」

風
「……ぐぅ～」

小蓮
「クッ……巨乳の人口率が高すぎね」

鶴姫
「頑張りましょう！　シャオちゃん！」

真桜
「まだ凪は修行してん？」

沙和
「まだやってるの～」

女性陣は露天風呂に満喫していた。

～男湯～

政宗
「ハァ……ハァ……」

元親
「なんてデッケー壁だ」

慶次
「毎回毎回……コイツに悩まされたからな」

男性陣はこの後様々な策をしたが越えられる事はなかった。

官兵衛
「なら、次は小生たちの出番だな」

大谷
「我は望むは平等の世……ヒヒヒッ！」

その時、軍師が動いた！

小十郎

「遂に動くか」

政宗
「コイツはかなりｅｘｐｅｃｔａｔｉｏｎできるな」

慶次
「頼んだぜ！　２人とも！」

そして２人は壁の前までやってきた。

官兵衛
「今までは常識内での策・・・」

大谷
「ゆえに敵にも常識内・・・」

官兵衛
「ならば！　その常識をぶち壊してしまえばいいだけの話だ！　刑部！」

大谷
「不幸よ、さんざめく降り注げ！」

大谷は後ろにあった数珠で地面を叩いた。

元親

「何してんだ？」

小十郎
「さぁな」

大谷が地面に攻撃をして数分後……

大谷
「官兵衛」

大谷は攻撃をやめ官兵衛に任せた。

官兵衛
「行くぞ！！」

官兵衛はジャンプし……

ギュルルルルッ！

大谷が攻撃をしていた地面を鉄球で抉っていた。

慶次

「な、何してんだよ、官兵衛!?」

政宗
「そんな事して意味あんのか?」

官兵衛
「大アリだァ!　女湯を覗くためにわざわざ下から行く奴はいない!　だから小生はこの策を思いついたんだよ!」

大谷
「正に常識を壊す……普通なら考えもしない策よ」

小十郎
「無茶苦茶だな。だが、これならいけるかもしれん」

元親
「ならやってやんな!　官兵衛さんよ!」

そして遂に地面の壁がない深さまでやってきた官兵衛。

官兵衛
「壁はなくなった……ならば!」

官兵衛は鉄球で横に通ずる為に掘りまくった。

慶次

「もう少しだ、官兵衛！」

官兵衛
「うおォォォォォ！！」

もう少しで壁を越そうとしていた

しかし……

カチッ

官兵衛
「……え？」

ドカァァァァン！！

突如大爆発が起きて官兵衛は吹き飛ばされた。

官兵衛
「なぜじゃーーー！？」

キラーン

そしてそのまま官兵衛は星になった。

～女湯～

ドカァァァァン！！

流琉
「ひゃあ！？」

月
「へぅ！？」

白蓮
「な、何だ今の爆発は！？」

詠
「隣から聞こえたわね」

冥琳
「どーせ男どもがくだらん事でもしてるのだろう」

翠
「そんなんで爆発するかぁ！？」

星
「するだろう。フィクションだし」

蒲公英
「そうそう♪」

～男湯～

大谷
「……失敗か」

元親
「爆発は無視か！？」

政宗
「つーかなんで爆発すんだよ！？」

風魔
『北条建設は完璧に作る』

佐助
「それと爆発関係ある！？」

風魔、佐助、復活！

大谷
「やはり官兵衛は使えんか…やれ、アレをやるか」

そう言って大谷は壁の前で呪文を唱えた。

佐助
「な、何をする気だ……（汗）」

小十郎
「アイツの周りが黒くなってきやがった」

そして……

大谷
「キエェェェ！！」

大谷の周りを浮かんでいた黒い気が丸い塊になり壁にぶつけた。

すると……

ジュウゥゥゥゥ……

政宗
「壁が……」

元親

「溶けてやがる！？」

壁が溶け始めた。

佐助
「コイツならいけるぜ！」

慶次
「頑張れ、大谷ッ！」

それを見た一同は希望があると思い大谷を応援した。

だが……

大谷
「……ゴハッ！」

風魔
『！？』

既に大谷は限界を越えていた。

大谷
「我は死ぬのか…残して…逝くのか…」

大谷はそう言って力尽きた。

元親
「大谷！　……クソッ、軍師がいなくなっちまった！」

政宗
「コイツはｐｉｎｃｈだな……」

慶次
「また……見れないのかよ……」

男性陣はガックリとして諦めかけていた。
その時！

???
「ならば！　我が貴様らの望みを叶えてやろう！」

小十郎
「誰だッ！？」

突如声がしてそちらに振り向くと……

全身オレンジ色の服を着て（風呂場ですので良い子・以下略）

顔は目元以外隠れており
レインボーの輪刀を持った人物がそこにいた

???

「我が名はサンデー毛利！　日輪の申し子なりィ！」

風魔
『サンデー・・・毛利？』

慶次
「毛利？　アンタ、元就の知り合いか？」

サンデー毛利
「あやつとは昔ながらの知り合いよ。我は愛の使者だがな」

元親
「そんな事よりアンタ、この壁をどうにかしてくれるのか！？」

サンデー毛利
「我にかかればこのようなモノ一瞬よ」

小十郎
「大した自信だな・・・」

慶次
「ならやってくれるかい？」

サンデー毛利
「もとよりそのつもりよ」

サンデー毛利の登場により光が見えた男性陣。
だが困惑している人物もいた。

佐助
（何で気付かないの!?　どう見たって毛利先輩じゃん!　もしかして俺様だけなのか!?）

政宗
（安心しろ猿飛・・・俺も気付いている）

佐助
（伊達の旦那!?）

政宗
（だが、俺らの計画を協力してくれんだ・・・黙って見てやろうぜ）

佐助
（・・・・・ハァ）

そうしてる内にサンデー毛利が壁の前までやってきた。

サンデー毛利
「今こそ、愛と日輪の力を見るがいい!」

サンデー毛利は輪刀を上に投げた。

サンデー毛利
「終の手“照”！」

ピカァァァァァ！

元親
「クッ眩しい！」

慶次
「目が、目がァァァ！」

政宗
「コイツは！？」

すると上空に投げた輪刀が照射され溶けていた壁に攻撃をした。
男性陣は眩しすぎて目を瞑った。
しばらくして照射が終わり男性陣が目を開けると壁に穴が開いていた。

サンデー毛利
「これが我の力なり！」

慶次
「おぉ！　遂に境界線を越えた！」

元親
「なんかスゲー事してるけどやったぜ！」

風魔
『達成』

佐助
「やったなサンデー・・・あれ？」

佐助は声をかけようとしたが既にサンデー毛利はいなかった。

小十郎
「サンデー毛利・・・何者なんだ？」

政宗
「まぁ愛の使者って事にしようぜ・・・それよりも」

慶次
「念願の女湯を見ますかね！」

？？？
「へぇ・・・・・そんな事してたんだ、慶次」

男性陣

「「「「……え？」」」」

男性陣は声のした方へゆっくり振り向くと……

雪蓮
「やっほ～♪」

華琳
「望みは叶ったかしら？」

蓮華
「不潔よ！」

服を着ていた女性陣が武器を持ちながら立っていた。

慶次
「よ、よう皆さんお揃いで……どうかしたか？（汗）」

雪蓮
「どうかしたかってあんだけ騒がしければ嫌でも気付くわよ」

秋蘭
「そういう事だ…覚悟はいいな？」

政宗
「……弁解の余地は？」

政宗の言葉に華琳はニッコリと笑い……

華琳
「あるわけないでしょ♪」

雪蓮
「みんな～やっちゃえ～」

雪蓮の号令に女性陣は男性陣に向かっていった。

男性陣
「「「「ギャアァァァ！！」」」」

男性陣は完膚なきまでにやられるのであった。

～男湯・脱衣所～

大谷
「ヒヒヒッ！　不幸が転がり落ちてきたわ！」

脱衣所にはいち早く逃げた大谷が愉快そうに見ていた。

大谷

（しかし、あのサンデー毛利とやら……一体何者だ？）

大谷もサンデー毛利の正体がわからないでいた。

こうして漢たちの浪漫は失敗に終わった。

第二十八話、漢の決戦！（後書き）

新しいキャラのサンデー毛利でした。

最近上手く書けんな……だが、やるしかない！

次回は雪蓮があるゲームを言い出して皆さんで遊びます。

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第二十九話、第二次対抗戦、開幕！

～あらすじ～

官兵衛達の計画が失敗した次の朝……

～元親の部屋～

元親
「がぁ～ｚｚｚ……んあ？」

此処は呉の郷、元親の部屋。
元親は気持ちよく寝ていたが日の光により重い瞼を開けた。

元親
「朝…か……ふぁ～」

まだ眠い元親だがどうにか起きようとしたがある事に気付く。

元親
「……体が動かねー」

何故か体が動かないでいた。

元親は首だけ動かし左右を見ると……

恋

「くぅ～ｚｚｚ」

鈴々

「にゃ～ｚｚｚ」

恋と鈴々が抱きついて寝ていた。

さらに……

地和

「くかぁ～ｚｚｚ」

地和が元親の胸の上で寝ていた。

元親

「……何でいんだよ」

そう思った元親はともかく恋達を起こす事にした。

元親
「恋」

恋
「くぅ～……ん？」

元親
「起きろ、恋」

恋
「……もうちょっと」

元親
「いや、頼むから起きてくれ」

恋
「……わかった」

恋は眠そうに身体を起こした。

元親
「恋、ちぃ坊をどかしてくれ」

恋
「……（コクっ）」

ヒョイッ

恋は眠いながらも地和を持ち上げて……

ドスン！

地和
「うげッ！？」

地面に落とした。

地和
「いったぁ～い！」

恋
「……起きた」

元親
「あ、ありがとな（汗）」

元親は恋の起こし方に少しビックリしたが今は鈴々を起こす事にした。

元親
「鈴坊、起きろ」

鈴々
「にゃ～」

元親
「オイ」

鈴々
「うにゃ～・・・おいしそうなお肉なのだ～」

元親
「・・・・・・まさか（汗）」

鈴々
「いただきま～す・・・ガブッ」

元親
「いでで!?」

鈴々は寝ぼけて元親の腕を噛み始めた。

鈴々
「アムアム・・・」

元親

「鈴坊ッ！　起きやがれ！」

鈴々
「おいひ～のら～」

恋
「……ジュルリッ」

元親
「恋ッ！　何で涎を垂らす！？　そんな事より助け……あだだだッ！」

恋
「……わかった」

元親救出中……

元親
「んで、オメーらはなにしてんだよ？」

どうにか鈴々が起き、噛むのを止めて元親は恋達に何故いるのか聞いてみた。

鈴々
「鈴々達は元親お兄ちゃんを起こしに来たのだ！」

地和
「そしたらチカにぃが気持ちよ～く寝てたから」

恋
「……気付いたら寝てた」

元親
「そうかい、でも鍵を締めてたんだが」

地和
「あ、それなら恋先輩が簡単に壊したよ」

元親
「……恋」

恋
「……ゴメンナサイ」

恋はシュンとして反省した。

元親
「反省してるか？」

恋
「……（コクン）」

元親
「ならいいか……で、用件はそんだけか？」

鈴々
「まだあるのだ！　この後、宴会場に来て欲しいって言ってたのだ！」

元親
「宴会場に？　……まぁいってみっか」

地和
「ちぃも行くよ！」

鈴々
「鈴々も！」

恋
「……恋も」

元親
「なら、みんなでいくとすっか」

元親は支度をして恋達と一緒に宴会場に向かうのであった。

～宴会場～

家康
「遅いぞ、元親！」

元親
「ワリィ、ワリィ」

元親達が到着すると宴会場には全員揃っていた。

元親
「で……なにすんだ？」

家康
「いや、ワシもわからん」

桃香
「私達も急に呼ばれて……」

風魔
『謎』

元親
「あん？　…んじゃあ誰が呼んだんだ？」

蓮華
「姉様よ」

愛紗
「蓮華殿？」

蓮華
「何やら楽しい事をやりたいと言って昨日準備をしていたわ」

家康
「楽しい事か……」

家康が何か考えていたら……

雪蓮
「お待たせー♪」

雪蓮がやってきた。

華琳
「雪蓮先輩、みんなを呼んで何をする気ですか？」

雪蓮
「もちろん、楽しい事よ♪」

官兵衛
「説明になっとらんぞ」

三成
「そんな事はどうでもいい……何故、私が参加しなければならん」

元就
「我もそれには同意見だ」

月
「そ、そんな事言っちゃダメだよみっちゃん（汗）」

冥琳
「お前もだぞ元就、私達は無料で提供して貰っているのだからな」

雪蓮
「そこは気にしなくていいけどね」

大谷
「まぁ良いではないか、たまには座興に付き合っても損はないぞ」

三成
「……フンッ」

元就
「くだらん」

詠
「素直になりなさいよ」

白蓮
「お前が言えるのか？」

三成と元就はその場に残った。
そして雪蓮は集まった理由を述べた。

雪蓮

「みんなに来て貰った理由はね……コレよ！」

そう言って雪蓮はパチンと指を鳴らす。

ゴゴゴゴゴッ！

すると宴会場の舞台の下からあるものが出てきた。

幸村
「これは……」

穏
「双六……ですか？」

雪蓮
「これからみんなにはこの双六で競い合って貰うわよ！」

慶次
「てことは勝負ってことかい？」

雪蓮
「そうよ、名付けて！　“人生楽ありゃ苦もあるさ大会”よ！」

バババァーンと効果音が聞こえた。

蓮華
「……ハァ」

雪蓮
「ちょッ！　何で溜め息!?」

思春
「相変わらずですね、雪蓮様は」

佐助
「初めて会った時から全く変わんねーなぁこの人」

蓮華や思春、佐助などは呆れていたが燃えている人々もいた。

家康
「うむ！　面白そうだな！」

幸村
「勝負なら負けはせぬぞ！」

政宗
「コイツはいいｐａｒｔｙになりそうだな」

霞
「おっしゃ！　負けへんで！」

星

「フッ…楽しみですな」

雪蓮

「みんな乗りがよくて助かるわ♪」

みんなが乗ってくれた事に喜ぶ雪蓮。

雪蓮

「それじゃあルールはこれでよろしくね♪」

～ルール～

・この双六は代表者5名のチーム戦で行う。

・双六はポイント制でより多くポイントを取ってゴールしたチームの勝ち。

・同じマスに2つ以上チームがいる場合はゲームを行い勝ったチームに2ポイント、負けたチームは－1ポイントとする。

・優勝したチームには賞金が出る。

・最下位のチームには罰ゲームがある

～ルール終了～

雪蓮

「それじゃあ代表者を決めてね～」

代表者選択中……

しばらくして各チームの代表者が決まった。

～１－Ａチーム～

政宗
「Ｈａ！　せっかくのｐａｒｔｙだ、楽しもうぜ！」

小十郎
「背中はお任せください」

華琳
「フフッ……やるからには勝つわよ」

春蘭
「お任せください、華琳さま！」

風
「ぐぅ～」

～１－Ｂチーム～

家康
「よし、皆で団結して優勝しよう！」

桃香
「うん♪」

朱里
「はわわ…頑張りましゅ」

元親
「やってやんか！」

星
「フッ…燃えますな」

～1－Cチーム～

幸村
「お守りくださいお館様！！」

蓮華
「熱いわね、幸村（汗）」

思春
「いつもの事かと」

佐助
「確かにな…」

亞莎
「な、なんで私が此処に？（焦）」

〜1ーDチーム〜

三成
「……」

月
「が、頑張ろうねみっちゃん！」

大谷
「やれ、大変よのう月は」

霞
「やるからには勝つで！」

恋
「……ん」

〜先輩チーム〜

慶次
「いいね〜こういうのは好きだよ雪蓮！」

雪蓮
「あら、それって告白？」

元就
「またくだらん事を……」

冥琳
「そう言うな元就」

官兵衛
「……小生は蚊帳の外か」

～後輩チーム～

蘭丸
「蘭丸の優勝で決まりだな！」

人和
「私たちもいる事、忘れないでね」

武蔵
「おれさまが入れば楽勝だな！」

小蓮
「その意気よ！」

蒲公英
「たんぽぽも頑張ろー♪」

以上、６チームで争う。

いざ、決戦の時！

第二十九話、第二次対抗戦、開幕！（後書き）

始まりましたね対抗戦……

どうなるかは次回のお楽しみに！

あと、此処でアンケートを取りたいと思います！

この旅行編が終わったら外伝を載せようと候補が二つあるのですが……皆さんはどちらがいいですかね？

1、連休中、生徒会が仕事をしていたら信長と貂蝉が激突して迷惑をかけられる

2、先生達の休みで酒を飲みながら誰が好きなのか暴露していく

この二つです、お願いします！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第三十話、双六走力戦！（前書き）

桃香
「じぃ～～……」

三成
「……何だ？」

桃香
「ほ、宝剣は渡しませんからね！」

三成
「……意味がわからん」

雛里
「あわわ…恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まりましゅ」

第三十話、双六走力戦！

～あらすじ～

双六の頂点を目指す！

～宴会場～

雪蓮
「それじゃあ最初は各チーム１０ポイントずつあげてスタートね」

ゲームスタート！

１番目、１－Ｂチーム

家康
「まずはワシらか！」

桃香
「うん♪」

愛紗
「皆さん、頑張ってください」

焔耶
「お館！　何かあったらお呼びください！」

家康
「ありがとう、では！」

家康はボタンを押してルーレットが回った。

ピッピッピッ！　【5】

するとルーレットが止まり数字が出た。

家康
「5か……“カメラを拾った。＋2pt”よし！」

星
「やりますな」

2番目、1－Aチーム

政宗
「次は俺らか……Ha！」

ピッピッピッ！　【3】

華琳
「“天然パーマに負ける。一回休み”……あら、残念ね」

春蘭
「伊達！　足を引っ張るな！」

桂花
「そうよそうよ！」

政宗
「Ａｈ～……ｓｏｒｒｙ」

３番目、先輩チーム。

雪蓮
「よっと」

ピッピッピッ！　【7】

官兵衛
「“記憶を取り戻す。＋２ｐｔ”……何の記憶だ？」

冥琳

「気にするな」

４番目、１－Ｃチーム

天和
「頑張れーユッキー」

穏
「頑張ってくださーい」

幸村
「うおぉぉぉ！」

ピッピッピッ！　【４】

蓮華
「“モノマネ。したら＋２ｐｔ”どうする幸村？」

幸村
「うむ……」

佐助
「旦那、これ呼んで」

そう言って佐助は幸村に紙を渡す。

幸村
「これをか？　“意地があんだろッ！　男の子にはッ！！”……これでよいでござるか？」

雪蓮
「問題ないわよ～♪」

５番目、後輩チーム

小蓮
「うりゃ！」

ピッピッピッ！　【１】

武蔵
「“スタントマンなしでアクション映画に挑み大怪我。二回休み”……いきなりかよ、ちぇ」

蒲公英
「ていうか何これ？」

６番目、１－Ｄチーム

美羽
「頑張るのじゃ！　主様！」

三成
「……フン」

ピッピッピッ！　【4】

月
「……モノマネですか（汗）」

霞
「頼むでみっちゃん！」

三成
「するか」

大谷
「待て三成」

三成
「刑部？」

大谷
「お主はこれを読め。それだけで良い」

三成

「……“俺のこの手が真っ赤に燃える！　お前を倒せと轟叫ぶ！”」

霞
「これでえぇか？」

慶次
「問題ないね！」

雪蓮
「それじゃあ幸村チームと三成チームはゲームね♪」

冥琳
「勝負は……“萌え萌え対決”だ」

冥琳は箱の中から紙を出し勝負を決めた。

冥琳
「ルールは簡単、あるセリフを言って貰いどちらが萌えるか……それだけだ」

蓮華
「頼んだわよ、亞莎」

亞莎
「わ、私ですか！？」

霞

「いったれ月っち！」

月
「へぅ／／／」

代表者が決まり二人に紙が渡された。

冥琳
「そこに書いてあるセリフを言って貰おう……始めッ！」

カァーン！

月
「え、えっと……“いらっしゃいませご主人様♪”……へぅ／／／」

亞莎
「あの、えと、その……“ご飯にする？　お風呂にする？　そ・れ・と・も・私？”……ってキャアーー！／／／」

雪蓮
「審議タイム！」

ざわ‥ざわ‥ざわ‥

雪蓮
「審議の結果…勝者、亞莎！」

明命
「やりましたね亞莎！」

亞莎
「うぅ～……／／／」

月
「す、すいません」

大谷
「いやなに、気にするな」

この後の双六大会は壮絶なものとなった。

“園児服に着替える。着たら2マス進む”

朱里
「はわわ！　は、恥ずかしいでしゅ！／／／」

桃香
（……似合ってる）

“特技を披露。したら＋２ｐｔ”

春蘭
「私の特技は華琳さまの人形づくりだ！」

そう言って春蘭はすぐに華琳そっくりな人形を作った。

稟
「確かに似てますね」

華琳
「なら、もう私の愛はいらないわね」

春蘭
「か、華琳さま～（泣）」

“好きな人に告白。できたら５マス進む”

雪蓮
「好きよ、慶次♪」

慶次
「ははっ、ありがとさん」

官兵衛

（絶対にわかっとらん、コイツ）

“秘密を暴露。したら＋３ｐｔ”

思春

「蓮華様は等身大幸村の抱き枕をいつも抱いて寝ている」

蓮華

「ちょっと思春!?／／／」

“恥ずかしい過去を言う。言ったら３マス進む”

蒲公英

「お姉ちゃんは中学までオネショしてたよ♪」

翠

「なんでアタシの過去を言うんだ!／／／」

“好きな人に抱きつく。したら＋５ｐｔ”

恋

「……ん」

ギュッ

元親
「……俺か？」

一同
「「「「な、なんだってーーー！？」」」」

勝負“ポーカー”

風
「ストレートフラッシュです～」

星
「やるな風……だが、私はそれにロイヤルがつくぞ」

風
「あれま～」

勝者、星！

勝負“２人麻雀”

官兵衛
「死ぬなら……強く打って死ぬ！」

小十郎
「それだ、ロン」

官兵衛
「なぜじゃーーー！？」

勝者、小十郎！

勝負“早食い”

霞
「ガツガツガツ！」

蘭丸
「も、もうダメだ～」

勝者、霞！

その後も激しい（？）戦いが繰り広げられた。
そして遂に決着がついた。

１－Ａチーム、２５ｐｔ

１－Ｂチーム、２７ｐｔ

１－Ｃチーム、２２ｐｔ

１－Ｄチーム、２１ｐｔ

先輩チーム、２４ｐｔ

後輩チーム、２６ｐｔ

優勝、１－Ｂチーム！

家康
「よし！」

桃香
「やったね家康君！」

朱里
「はわわ、勝っちゃいました」

焔耶
「お見事です、お館！」

風魔
『見事』

雪蓮

「おめでとー♪　ハイ賞金」

雪蓮は家康に賞金を渡した。

雪蓮
「それじゃあ最下位のチームは罰ゲームね。まずはこのクジを引いて赤い印がついてた人が罰を受ける事」

雪蓮は棒を出しクジを引かせた。

印がついていたのは……

三成
「何故だ！」

三成だった。

雪蓮
「もちろん罰は受けるわよね？」

三成
「ふざけるな！　私はやらん！」

冥琳

「ほう、逃げるのか？」

三成
「……なんだと？」

冥琳
「よもや豊臣の左腕が罰ゲームを受けるのが怖くて逃げ出す……そういう事か？」

三成
「貴様ァア！　私を侮辱する気か！？」

冥琳
「そう聞こえたならそうだろうな…それが嫌なら罰を受ける事だな」

三成
「よかろう！」

元就
（……思うがままか）

雪蓮
「みんなー、罰を考えるわよ！」

ざわ…ざわ…ざわ…

雪蓮

「決まったわ！」

皆が話し合い罰が決まった。

三成
「早くしろ」

雪蓮
「焦らない焦らない・・・アナタの罰ゲームは」

ビシッと三成に指差した。

雪蓮
「みんなの名前を呼ぶときに“君”または“ちゃん”を付けて呼ぶことよ！」

三成
「なッ！？」

三成は身体を動かすものだと思っていたが予想外の罰に驚いた。

慶次
「三成は少し愛想が足りないんだよな」

雪蓮
「だから今日から一週間“君、ちゃん”付けね♪」

三成
「クッ……」

冥琳
「ではまず、董を呼んでみるか？」

月
「みっちゃん」

三成
「…月……ちゃん」

月
「はい♪」

霞
「アッハハハ！　オモロい、オモロいでみっちゃん！」

詠
「プッ…ククッ……」

三成
「そこ、黙れッ！／／／」

美羽
「主様～！　妾も呼んで欲しいのじゃ！」

七乃
「なら私もお願いします♪」

三成
「クッ・・・美羽ちゃん・七乃ちゃん・・・クソッ！／／／」

美羽
「主様かわいいのじゃ！」

七乃
「これからそう呼んで貰っても構いませんよ」

三成
「呼ぶか！／／／」

顔を真っ赤にし、かなり恥ずかしがる三成。

政宗
「なるほど・・・アイツにはかなりｈａｒｄな罰ってワケか」

愛紗
「石田殿があんなに慌てふためいてる姿はじめて見ました」

家康
「ともかく罰は決まった・・・雪蓮公、この後の予定は？」

雪蓮
「このまま宴会にしちゃいましょうか♪」

幸村
「おぉ！　良いでござるな！」

慶次
「そんじゃあみんなで準備をしましょうか！」

一同
「「「「「応ッ！！」」」」」

そして一同は宴会の準備をした。

これが波乱を呼ぶとも知らずに……

第三十話、双六走力戦！（後書き）

いや～上手く書けんかった。

もう少し詳しく書きたかったのですが限界でした……すんません。

次回は宴会でカオスが起きます！

質問、評価、感想もお願いします！

それでは、また次回！

第三十一話、宴会乱舞！？（前書き）

～あらすじ～

海賊王
「俺の財宝か？　欲しけりゃくれてやる…探せッ！　この世の全てをそこに置いてきた」

佐助
「だから作品違うんだけど！？」

政宗
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、Ｌｅｔ' ｓ　ｐａｒｔｙ！」

第三十一話、宴会乱舞！？

～あらすじ～

双六大会が終わり宴会が始まった。

～宴会場～

佐助
（……どうしてこうなった、伊達の旦那？）

政宗
（さぁな……俺が聞きてぇよ）

政宗と佐助は目の前の現実から逃げたくなっていた。

今、目の前で起きていることは……

蓮華
「幸村ッ！／／／　どうしてアナタは私の気持ちにきづかないのよ！／／／」

穏
「そうれふそうれふ～／／／」

天和
「罰として～今日は～一緒に寝ること～／／／」

幸村
「め、目が回るでござる～・・・・」

愛紗
「うぅ～家康殿はどこですか～（涙目）」

元親
「がぁ～ｚｚｚ」

恋
「元親・・・」

思春
「恋ッ！　くっつきすぎだ！」

恋
「・・・・・思春も来る？」

思春
「なッ！？／／／　ば、バカな事を言うな！／／／」

恋
「・・・・・でも元親、寝てる」

思春
「うッ……私は酔っている私は酔っている私は酔っている……よし！」

ギュッ

思春
「……／／／」

真桜
「ニシシッ、ええもん撮れたわ」

沙和
「ねえねえ、亞莎って幸村さんの事好きなの」

亞莎
「な、何言ってるんですか！？／／／」

沙和
「えー違うの？」

亞莎
「ち、違ッ……くないです／／／」

楽しい宴会の筈がとんでもなく荒れた宴会になっていた。

その理由は……

雪蓮
「アハハハ！　大成功ね♪」

慶次
「やっぱり宴会ときたらコレに限るね～」

この二人である。
この二人は準備していた飲み物をお酒に変えていた。
その結果がコレである（未成年者の飲酒はご遠慮ください、ダメ、絶対）

冥琳
「ハァ……やると思ったわ」

元就
「何故このような事ばかり考える」

冥琳
「楽しいから以外見当がつかんな」

元就
「実に馬鹿らしい」

冥琳
「フッ……なら二人で飲むか？」

元就
「……くだらんな」

冥琳
「おや、その割にはすぐに答えなかったな」

元就
「あまり追求すると嫌われると忠告しとく」

冥琳
「よく言われる」

では、しばらく宴会の様子を御覧ください。

月
「だいたいみっちゃんは愛想がなさすぎです。それだと社会に出たら大変ですよ」

三成
「……飲みすぎだ、月」

月
「“ちゃん”はッ！！（怒）」

三成
「……ちゃん」

霞
「ええなあ、ウチもあんな恋愛、欲しいわ～」

大谷
「三成が押されているとは……愉快愉快」

小十郎
「誰だ？　飲み物に酒を入れたのは」

秋蘭
「まぁ良いではないか小十郎／／／」

稟
「そうれふよ～……ひっく／／／」

小十郎
「……酔ってるのか？」

稟
「酔ってないれふ！／／／」

秋蘭
「そうだぞ小十郎／／／」

小十郎
「……顔が赤いぞ」

秋蘭
「フッ……気のせいだ／／／」

焔耶
「前から思っていたが……私はお前が気に食わん！」

凪
「奇遇ですね……私もアナタが好きではありません」

焔耶
「やるか？（怒）」

凪
「やりますか？（怒）」

美羽
「すぴ～ｚｚｚ」

七乃
「あぁんもう、かわいい！」

桂花
「皆に問う、巨乳は好きか！？」

朱里・雛里
「「巨乳は死すべし！」」

桂花
「あの脂肪の塊は好きか！？」

小蓮
「嫌いよ！」

桂花
「では聞こう、貧乳は好きか！？」

いつき
「好っきだ！」

桂花
「希少価値の貧乳を好むか！？」

鶴姫
「希少価値はステータスです☆」

地和
「絶滅危惧種を大切にしろー！」

桂花
「よろしい、では此処に“貧乳党”を結成する！　貧乳党、万歳！」

貧乳党
「「「「貧乳党、万歳！」」」」

翠
「な、なぁ風魔／／／」

風魔

『どうした？』

翠
「風魔はさ／／／　……す、好きな人はいんのか？／／／」

風魔
『いない』

翠
「ホントか！？」

風魔
『嘘はつかん』

蒲公英
「いいこと聞いちゃった♪　ねー人和ちゃん」

人和
「え、ええそうね／／／（まだ好きな人がいない……か）」

鈴々
「鈴々の方が食べるのだ！　春巻き！」

季衣
「何だとッ！？　ボクの方が食べるもんね。ちびっ子」

鈴々
「春巻き！」

季衣
「ちびっ子！」

かなり宴会場は荒れていて他にも酔い潰れていたり暴れていたりしていた。
そんな中、政宗と佐助は酒をあまり飲まずにこの風景を見ていた。

政宗
「仕方ねえ、部屋に戻るか」

佐助
「もう寝るのか？」

政宗
「ああ、此処に居ても巻き込まれるのが目に見えてるからな」

だが、この判断は遅かった。

ガシッ

政宗
「ｗｈａｔ？」

帰ろうとした政宗の肩を掴まれそちらの方に振り向いた。

星
「何処に行かれるのですかな？」

そこには星がいた。

さらに……

華琳
「これからお風呂に行くから付き合いなさい、政宗」

華琳と後ろに春蘭、流琉、風がいた。

政宗
「……Ｈａ？」

風
「だからーお風呂に入ると言ったのですよー」

政宗
「それはわかってるが……何でだ？」

華琳
「私が入りたいと思ったからよ」

流琉
「わ、私もです！／／／」

政宗
「……流石にｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅだな」

華琳
「あら、でもアナタ覗こうとしたじゃない」

政宗
「あれは男の性だ。男だったらやらなきゃならねー」

華琳
「難しいわね。男って」

政宗
「そんなもんだ。だから断らせて貰うぜ」

華琳
「そう……春蘭！」

春蘭
「……」

政宗はまた力任せに来ると思い身構えた。

そして春蘭は目の前まで来て……

春蘭
「……うぅ」

政宗
「……？」

春蘭
「うわぁぁぁぁん！（泣）」

政宗
「なッ！？」

大泣きした。

政宗
「ど、どうしたんだ、いきなり！？」

星
「女を泣かせるとはヒドいですな政宗」

風
「女泣かせー最低ですー」

政宗
「外野は黙ってろ！　何で泣くんだ春蘭！？」

春蘭
「ひっく…だってぇ…華琳しゃまの言うことを聞かないきゃら～

（涙目）」

政宗
（コイツ…酔ってる！？）

政宗は華琳を見た。

華琳
「……（ニヤニヤ）」

華琳はニヤニヤしてこちらを見ていた。

政宗
（Ｄａｍｎ　ｉｔ！　春蘭が泣き上戸だったとは！）

春蘭
「ひっく…うぅ～（涙目）」

政宗
「Ｗａｉｔ　ａ　ｍｏｍｅｎｔ！　落ち着け！」

春蘭
「うぅ……じゃあ華琳しゃまのおひゅろにはいりゅか？（涙目）」

政宗
「そ、それは……（汗）」

春蘭
「やっぱり・・・ひっく（涙目）」

政宗
「ＯＫ！　入るから泣くな！」

春蘭
「ホントか！？」

政宗
「あ、ああ」

春蘭
「やりましゅた～華琳しゃま～！」

華琳
「よくやったわ、春蘭」

春蘭
「エへへ～／／／」

華琳
「では行くわよ」

星
「フッ・・・」

流琉
「政宗様の裸・・・／／／」

風
「ぐぅ～」

政宗
「……Ｈｕｍ～」

それを一部始終見ていた佐助。

佐助
（ご愁傷様……）

心の中で政宗の無事を祈っていた。

ポンッ

佐助
「ん？」

佐助は肩に何か乗っかってきたので振り向くと……

夢吉
「ウッキ～（まぁ飲みなよ兄ちゃん）」

夢吉が座っていた。

佐助
「夢吉ィィィィ!?　何かオッサンみたいなんすけどォォォ!?」

佐助は何故か夢吉の声が聞こえるみたいだ。

佐助
「ど、どうしたんだ夢吉?（汗）」

夢吉
「ウキ（兄ちゃん、お前さんもその内わかるようになるもんだ。人生いろんな事があって酒でごまかしたい時がな。だがな、それを乗り越えた時に初めてこの酒がまた違う酒になるんだ。だから俺は酒を飲んでるのかもな）」

佐助
「“ウキ”ってだけでどんだけ意味が詰まってんだよ!?　つーかこれ絶対オッサンだろ!?」

夢吉
「キキ（猿もオッサンも変わんねえよ）」

佐助
「いや違うから!」

などと夢吉と話していると……

明命
「あ！　いました！」

詠
「こんなところにいたの、佐助」

明命と詠がやってきた。

佐助
「お、明命ちゃんに詠ちゃん、どったの？」

明命
「はい！　猫神様と一緒にお話しがしたいと思いまして」

佐助
「ハハッ、あんがと。白蓮は？」

詠
「潰れたわ。ところでアンタ誰と話してたのよ？」

佐助
「ああ、夢吉とな」

明命
「え!?　猫神様はお猿さんと会話できるのですか!?」

佐助
「え?　もしかして聞こえるの俺様だけ?」

詠
「普通は動物とは喋れないわよ」

佐助
「……ハァ」

この後、佐助はしばらく明命と詠で話し合うのであった。

～宴会場・中庭～

此処は宴会場と繋がっている中庭。
そこに空を見ている人がいた。

家康
「……こんなに星を見たのは久しぶりだな」

家康だった。
家康は中庭に寝転んで空を見ながら今回の旅行の事を考えていた。

家康
（こんなに楽しい旅行になるとは……みんなに感謝しなければな）

そんな事を考えていると誰かが近付いてきて寝転んでいる家康の上から覗き込んだ。

桃香
「ふぁ～……こんなところにいたんだ。家康君」

それは眠そうな桃香であった。

家康
「桃香か？　眠そうだな、大丈夫か？」

桃香
「うん大丈夫だよ。家康君は何してるの？」

家康
「星を見ていた」

桃香
「星？」

家康
「うむ。上を見るといい」

そう言われた桃香は上を見た。

桃香
「うわぁ……綺麗」

家康
「一緒に見るか？」

桃香
「うん♪」

桃香は家康と一緒に寝転んで星を見た。

家康
「ホントに綺麗だな」

桃香
「私は初めて見るかも」

家康
「そうなのか？　もったいない事をしてたな」

桃香
「確かに……もったいなさすぎだね」

そして二人は無言になり、しばらく星を見ていた。
すると家康の口が開いた。

家康
「桃香、今回の旅行が楽しめたのは桃香が提案してくれたおかげだ・・・だから」

そう言って家康は横を振り向いたが・・・・・

桃香
「すぅ～すぅ～」

桃香は既に気持ちよさそうに寝ていた。

家康
「・・・寝てしまったか。やれやれ、こんな所で寝ていたら風邪を引くぞ・・・よっと」

家康は桃香をおんぶして桃香の部屋まで連れて行くのであった。

その最中・・・・・

家康
「……ありがとう。桃香」

家康はこの旅行を企画してくれた桃香に感謝の言葉を送った。
すると……

ギュッ

桃香
（……こちらこそありがとう♪）

桃香が心の中で同じく感謝の言葉を送り強く抱きついた。
実は先程、おんぶして貰った時に起きたがそのまま寝たふりをしていた。
なぜなら……

桃香
（家康君の背中……暖かい／／／）

家康の温もりが感じられるからだ。
一方の宴会は皆が騒ぎまくって疲れて寝るまで続いた。
だが、皆の寝顔は童心に帰ったような寝顔だった。

旅行編“完”

第三十一話、宴会乱舞！？（後書き）

という事で旅行編は終了です。

なんか無理矢理な感じがするのは否めないな……

ともかく次のステップにいかなければなるまい。

次回はアンケート結果で決まった話です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・肆、生徒会の日常（前書き）

～クイズ～

問題！　今から登場する人物の共通点は何？（ヒントはセリフ）

詠
「てっちゃん？　誰よそれ」

月
「ト、トカサに来る？」

風
「マイマザー……ぐぅ～」

シャム
「カニはおいしいのら♪」

小蓮
「姫だよ～♪」

佐助
「……大丈夫か、これ？」

信長
「漢とは常に己を磨くモノなり」

わかったかな！？

霞

「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まんで！」

外伝・肆、生徒会の日常

家康達が旅行に出かけていた時、学園では……

～学園・生徒会室～

半兵衛
「報告は以上だよ秀吉」

秀吉
「うむ、よくわかった半兵衛」

此処は生徒会室。
此処では連休中に生徒会の仕事があり生徒会役員が揃っていた。

猪々子
「あ～あ、いいよな～アニキ達は旅行を楽しんでるんだよな～」

斗詩
「ちょっと文ちゃん、やめなよ（汗）」

猪々子
「なんだよ、斗詩だって官兵衛と一緒に旅行したくないのかよ～」

斗詩

「な、何言ってるの文ちゃん!?／／／」

猪々子
「え？　斗詩は官兵衛が好きなんじゃなかったっけ？」

斗詩
「今は関係ないでしょう!／／／」

麗羽
「ちょっと!　ウルサいですわよ!」

猪々子と斗詩は会話が弾み大きな声になってしまい麗羽に注意された。

麗羽
「アナタ達、半兵衛様の前ですよ!　しっかりしなさい!」

猪々子
「ちぇ、姫はいいよな麗羽様は……半兵衛が近くにいるから」

麗羽
「猪々子!　“様”をつけなさい!（怒）」

斗詩
「れ、麗羽様、落ち着いてください（汗）」

半兵衛
「僕は気にしてないよ、麗羽君」

麗羽
「ああ・・・半兵衛様／／／」

秀吉
「・・・・・もう良いか？」

斗詩
「あ、すいません・・・どうぞ」

秀吉
「うむ・・・皆の者、この度は連休の中ご苦労だった」

半兵衛
「君らも僕達に協力してくれて感謝するよ」

長政
「これも正義の為だ」

お市
「長政様の為・・・・・」

？？？
「私は親愛なるザビー様の為！」

そこには生徒会役員以外に風紀委員の長政とお市、そしてもう一人いた。

容姿は金髪で帽子を被り
常に聖書を持ち
誰かに心酔している男性
名を大友（おおとも）　宗麟（そうりん）

彼はザビー教と言う部活に入っており、今日は部活終わりにこちらに来た。

半兵衛
「ところで宗麟君、君はどうして生徒会に協力してくれるのかな？」

宗麟
「決まっているじゃないですか、ザビー様の御告げです！」

先程から宗麟が言っているザビーとは
容姿は頭の後頭部には髪がなく髭面
外国人だがかなり日本語が話せる
ザビー教の創設者でもある愛の化身（？）

半兵衛
「（なに言ってんだコイツ？）まぁ、協力してくれるなら僕達もあ

りがたい」

秀吉
「協力、感謝する」

半兵衛は内心馬鹿にしているが一応感謝して、秀吉は純粋に感謝した。

宗麟
「感謝ならザビー様に！」

麗羽
「この方、大丈夫ですの？」

猪々子
「麗羽様以上じゃないから大丈夫ですって」

麗羽
「あら、わかってるじゃない。おーっほっほっほっほ！」

斗詩
「褒めてませんよ麗羽様～」

かなり賑やかな生徒会室である。

秀吉

「では、これから学園の巡回を頼む」

長政
「心得た！」

麗羽
「わかりましたわ」

そう言って皆が立ち上がり各場所に行こうとしたら……

ガラガラッ！

生徒会役員
「し、失礼します！」

一人の生徒会役員が慌てて入って来た。

半兵衛
「どうしたんだい？　そんなに慌てて」

生徒会役員
「は、はい！　校庭で喧嘩が起きました！」

秀吉
「喧嘩だと？　ならば止めればよかろう」

麗羽
「その通りですわ！」

生徒会役員
「そ、それが……（汗）」

斗詩
「？　何か問題でも？」

生徒会役員
「喧嘩をしているのは……校長なんです！」

～学園・校庭～

信長
「ブルァァアッ！！」

ドカァァァン！

信長は気を溜めた銃を相手に撃ち、相手はよけて校庭に穴を空けた。

？？？

「いやぁん、パンツが切れちゃうわん」

信長の目の前にいる漢女は
容姿はかなり筋肉質でもみ上げの部分が三つ編みになっていて
何故か服を着ておらず、紐パン一枚でいる
名を貂蝉（ちょうせん）

信長
「何しに来た？　うつけが」

貂蝉
「あら～昔の同級生が遊び来ちゃいけないのかしらん？」

信長
「貴様の顔など見たくはないわ」

貂蝉
「いやぁん、いけず～」

貂蝉は信長と同じくこの学園のＯＢである。
更には“天下統一”の創設者でもある。

信長
「早く消え去れい。さもなくば此処で滅してくれよう」

貂蝉
「もうせっかちなのねん。ならば昔の決着でもつけてやるわん♪」

信長
「是非もなし……フゥン！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

貂蝉
「信長……本気ね……ぬっふぅぅぅぅん！」

ドドドドドドドドッ！

互いに気を溜めはじめ大地が揺れた。

そして……

二人
「ブルァァァァアッ！！」
「ドゥルァァァァア！！」

ドォン！！！

信長の刀と貂蟬の拳がぶつかり……

ブアッ！！

周りに衝撃波が起こり校庭は所々抉れていた。

信長
「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

貂蟬
「やっぱり互角なのねん」

二人の実力は互角のようだ。

そして互いが戦闘態勢をとったその時……

秀吉
「そこまでだ！」

生徒会、登場！

お市
「兄様やめて……貂蟬姉様も」

貂蝉
「あんらお市ちゃん、久しぶりねん♪」

半兵衛
「校長、学園内で暴れるのはやめて頂きたい」

信長
「余に指図するな、うつけめ」

半兵衛
「これはアナタの為でもある。此処で暴れていたら幾らアナタでも校長の席を降ろされてしまうかもしれない」

斗詩
「それにこの校庭を直すのは大変なんですよ」

信長
「……フン」

貂蝉
「何処に行くのん、信長？」

信長
「興が冷めたわ」

そう言って信長は学園に戻っていった。

秀吉
「信長・・・やはり奴はこの学園にはいらぬ存在よ」

長政
「クッ、学園の悪め！」

お市
「長政様、あまり兄様を悪く言わないで」

貂蝉
「兄想いね、お市ちゃん」

麗羽
「ところでアナタ、なにしに来ましたの？」

貂蝉
「それはね～いつもアナタ達が頑張っているから御飯でも連れて行こうとしたら信長に会ってあの有様よん♪」

猪々子
「御飯！？　行く行く！」

半兵衛
「なら、まずは仕事を終えてからでもいいですかね？　貂蝉さん」

貂蝉
「問題ないわよん♪」

宗麟
「やはり、ザビー様の御告げは正しかった！」

秀吉
「では皆の者、各自持ち場についてくれ」

一同
「「「「「「応ッ！」」」」」」

これが生徒会の日常（？）である。

外伝・肆、生徒会の日常（後書き）

遅くなってすんません……

次回から早く書きたいと思います。

次回は未定です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第三十二話、霞、恋を知る！？（前書き）

小蓮
「ね、ねぇ……空鍋なんて作らないでね（汗）」

雛里
「な、何を言ってるんですか？」

思春
「き、きゃきゃきゃあ♪（汗）」

小十郎
「まー坊？　……誰だそれは？」

政宗
「……何処のＳＨ●ＦＦＬＥだよ……」

流琉
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まります！」

第三十二話、霞、恋を知る！？

～あらすじ～

旅行が終わって一週間が過ぎたある日の朝……

～通学路～

霞
「んー！　えぇ天気やわー！」

背筋を伸ばし快晴の空を見ながら登校する霞。
だが、彼女には一つ悩みがあった。

それは……

霞
（なんか出会いでもこーへんかな～）

霞は三成と月のやり取りを見て少し羨ましい部分があった。
ゆえに出会いが欲しいと思っている霞。

霞
（みっちゃんは月っちがいるし……大谷は論外やわ）

そんな事を思っていると……

チンピラ1
「お、姉ちゃん一人？」

チンピラ2
「なんなら俺らと遊ばない？」

チンピラが話しかけてきた。

霞
「……ハァ」

チンピラ1
「何、どうしたの？　溜め息なんかついて」

霞
「出会いは欲しい言うたけど……こんな出会いちゃうねん」

チンピラ2
「なになに、俺たちとの出会いを待ってたの？」

霞

「だからちゃうねんって」

チンピラ1
「どーでもいいから遊びに行こうぜ」

そう言ってチンピラ1は霞の手を掴んだ。

霞
「やめんか、この……アホー！」

ブォン！　ドサッ！

すると霞は掴んだ手でチンピラ1を投げ飛ばした。

チンピラ1
「グェ！？」

チンピラ2
「なッ！？」

霞
「ふぅ……さて、アンタもあーなりたいんか？」

チンピラ2
「うっ……（汗）」

チンピラ2は投げ飛ばされたチンピラ1を見て息を呑んだ。

しかしそこに……

チンピラ3
「おーいどうした」

チンピラ4
「おい、コイツ気絶してるぞ！」

チンピラ5
「なんだなんだ、喧嘩かぁ？」

チンピラ6
「ヒャッハー！」

チンピラの仲間がやってきた。

チンピラ2
「ちょうどいい！　オイ、そいつはこの女にやられたんだ！」

チンピラ3
「あンだと！？」

チンピラ4

「許せねー！」

チンピラ２
「気をつけろよ、その女ツエーからな」

チンピラ５
「へ、所詮女だ。この人数に勝てねーよ」

チンピラ６
「ヒャッハー！」

霞
「なんや、やる気か？」

霞は自分の獲物を取りチンピラ達を睨みつけた。

チンピラ３
「おい、コイツ俺たちと戦う気だぞ（笑）」

チンピラ４
「マジ？　受けるんだけど（笑）」

チンピラ
「「「「アッハハハ！」」」」

霞
「自分ら・・・人を馬鹿にすんのも対外にせいや（怒）」

チンピラ5
「おー怖い怖い」

チンピラ達は完全に霞を馬鹿にしていた。

そこへ……

？？？
「……オイ」

チンピラ2
「アァン？」

シュッ　ボゴォン！

チンピラ2
「ゴハァ！？」

霞
「！？」

ドサッ

チンピラ2はいきなり現れた男に腹を殴られ倒れた。

チンピラ３
「な、何んだテメーは！？」

？？？
「そんな事はどーでもいい……ただ俺はテメェらが今してる事に腹を立てているだけだ」

チンピラ４
「テメーには関係ねーだろ！」

？？？
「ほぅ……テメェら女一人に複数で相手して恥ずかしくないのか？　馬鹿らしくて呆れるぜ」

チンピラ５
「黙って聞いてりゃ馬鹿にしやがって……オイ、コイツからやっちまおうぜ！」

チンピラ６
「ヒャッハー！」

そう言ってチンピラ達は男に襲いかかった。

それに対し男は……

？？？

「霞断月ッ！」

ザシュゥウン！

チンピラ
「「「「「ピギャアアッ！！」」」」」

刀でチンピラ達を一閃し、チンピラ達を一瞬で片づけた。

霞
「……」

それを見ていた霞は……

霞
（か、かっこええ～／／／）

完全に男の姿に見惚れていた。

？？？
「オイ、大丈夫か？」

霞
「え？　……あ、ああ、ウチは平気や！」

？？？
「ん？　オメェ、石田んところの……張か？」

霞
「ウチを知っとるのか！？」

？？？
「知ってるも何もオメェ……旅行先で会ったばっかりじゃねぇか」

霞
「なんやて！？」

霞
（こんなかっこええ人、ウチが見落としてたっちゅうのか！？　ウチの阿呆！）

霞は過去の自分に激しく後悔していた。

？？？
「まぁ覚えていねぇのならそれでもいいが」

霞
「そんなのアカン！　頼む、名乗ってくれへん？」

？？？

「そうか……なら、名乗らせて貰うか」

そう言ってクルッと振り返り……

小十郎
「俺は片倉小十郎だ……じゃあな」

小十郎と自分の名前を名乗り学園に歩んでいった。

霞
「片倉……小十郎……／／／」

霞はしばらくその場で動かなかった。

～1－D～

霞
「ポーっ……／／／」

学園についた霞だが、ずーっと上の空状態だった。

詠
「どうしたの、あれ？」

三成
「知るか」

大谷
「我も知らん」

恋
「……恋も知らない」

月
「わかんない……けど、朝からあんな感じなんだよ」

七乃
「霞さんがあんな状態なんて珍しいですね」

白蓮
「あんな霞、初めて見るぞ」

そんな霞を見て月達はどうしたのか心配になっていた。

詠
「誰か聞きに行きなさいよ」

七乃
「頼みましたよ三成さん」

三成
「何故私なのだ！？」

大谷
「確かに三成に行かせても怪しまれる……ならば月よ」

月
「わ、私ですか！？」

七乃
「あ～、それなら怪しくないですね」

白蓮
「頼んだぞ、月！」

月
「へぅ～……わかったよ」

そして月は霞のところへいって話しかけた。

月
「し、霞さん」

霞
「ん～？　……なんや月か」

月

「（月っちじゃない……）ど、どうしたんですか？」

霞
「何がや？」

月
「今日は少し元気がないみたいなんですが……」

霞
「あ～……わかる？」

月
「はい」

霞
「……実はな月……ウチな」

月
「はい？」

霞
「……恋したんや」

月
「……えぇーッ！？」

霞の言葉に月は驚いた。

さらに……

詠
「ちょっと、どういう事よ!?」

白蓮
「そんなの初耳だぞ!?」

七乃
「それはホントですか!?」

恋
「……ん」

女性陣がやってきた。

霞
「なんや～聞いとったんか?」

詠
「うっ……い、今は関係ないでしょ!」

激しく関係しているが……

七乃
「それで相手は誰なんですか?」

恋
「……気になる」

珍しく恋の食いつきがいい。

霞
「……片倉……小十郎や」

白蓮
「小十郎って確か……」

月
「1－Aの人ですよね」

霞
「やっぱ知っとったかぁ」

七乃
「知らなかったんですか？」

霞
「そうなんや……あぁー！　ウチの馬鹿！」

霞は顔を机に突っ伏した。

月
「お、落ち着いて霞さん（汗）」

詠
「そんなに好きなら直接言えばいいじゃない」

霞
「阿呆！　そんなん恥ずかしゅうて言えんわ！」

霞は顔を上げ机を叩いて詠に抗議した。

詠
「ならどうしたいのよ？」

霞
「そ、それは……／／／」

白蓮
「その調子だど何もできないぞ」

霞
「そんなんウチが一番わかっとるけど……」

何も思いつかない霞に七乃が……

七乃

「なら、皆さんで協力しましょうよ」

と提案した。

詠
「それは名案ね」

霞
「ええのか？」

月
「はい、霞は大切な友達ですから」

白蓮
「確かにな」

恋
「……頑張る」

霞
「みんな……おおきにな！」

霞は皆に感謝した。

七乃
「ではまずはどうしたら近付きますか？」

月
「……お弁当なんてどうかな？」

詠
「お弁当ねぇ……霞、アンタお弁当作れるの？」

霞
「作れへんけど……」

七乃
「なら最適ですね！」

月
「へ、どういう事ですか？」

月は霞が作れないと言ったのにそれが最適と言った。

七乃
「始めて作るお弁当を自分の為に一生懸命作ってくれたら男の人なんてチョロいモノですよ♪」

霞
「そんなもんなんか？」

七乃
「はい♪」

霞
「なら、ウチ作るで！」

霞は弁当を作る事を決意した。

月
「でも、霞さん。小十郎さんの好きな食べ物や嫌い食べ物ってわかっているんですか？」

霞
「……あ（汗）」

詠
「全く、世話がやけるわね」

霞
「堪忍な」

七乃
「困りましたねー、私は１－Ａのクラスに知り合いはいないですよ」

白蓮
「私も知り合いはいないぞ」

月
「……ごめんなさい」

詠

「ボクもあんまり……」

霞
「いきなりピンチかいな!?」

早速問題が出て来た霞達だが……

恋
「……知ってる」

霞
「ホンマか!?」

恋
「……（コクッ）」

恋が助け舟となった。

七乃
「なら善は急げですね♪」

月
「恋さん、案内して貰ってもいいですか?」

恋
「……（コクッ）」

そして霞達は教室を出て行った。

大谷
「三成は行かんのか？」

三成
「知ったことか」

大谷
「左様か」

～1－A・廊下～

恋
「……連れて来た」

真桜
「なんやどないしたんや恋」

恋が連れて来たのは真桜だった。

月
「真桜さん、少し聞きたいがありまして……」

真桜
「聞きたい事？」

七乃
「小十郎さんの好きな食べ物、嫌いな食べ物を知っていますか？」

真桜
「小十郎の好き嫌い？　う～ん・・・ウチはちょっとわからへんな」

白蓮
「そうか・・・・・」

真桜
「ていうかそんなら本人に聞いた方がええんちゃうか？」

詠
「そうしたいのは山々なんだけど・・・・・」

霞
「・・・・・・・・・・無理／／／」

詠
「こういう事よ」

真桜
「なんやかんぺきな恋する乙女やな」

真桜は詳しい事はわからないが霞を見て何となく見当がついた。

真桜
「う～ん……あ、せや！」

詠
「何か思いついた？」

真桜
「まぁそんなもんや。ちょっと待ってな～」

そう言って真桜は教室に戻っていった。

数分後……

真桜
「連れて来たで！」

政宗
「コイツはどういう事だ？」

真桜が連れて来たのは政宗だった。

詠
「それは今から説明するわ」

説明中……

政宗
「だいたい把握した」

白蓮
「なら……」

政宗
「ＯＫ、小十郎の嫌いな食べ物は基本的にない。好きな食べ物は野菜だ」

恋
「……野菜？」

政宗
「ああ、小十郎はかなりのＶｅｇｅｔａｒｉａｎだからな」

七乃
「なるほど」

月
「ありがとうございます」

政宗
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ」

白蓮

「わかったか？　霞」

霞
「ああ！」

恋
「……頑張れ」

霞
「よっしゃぁぁぁあ！　燃えてきた～！」

こうして霞のお弁当作りは始まった。

～三日後・昼休み～

霞
「うぅ……／／／（汗）」

霞は何とかお弁当を作り小十郎に渡す為、１－Ａの扉の前までやって来たがある問題に直面する。

霞
（しもうた！　小十郎と話せんのに御飯なんか渡せへんよ！）

霞はまともに話す事もできないのにいきなり弁当を渡す事など無理に近かった。

霞
「アカン、緊張してきてもろた……此処は一旦帰って」

小十郎
「オイ」

霞
「ひあっ!!　こ、小十郎!?／／／」

霞が諦めかけたその時に小十郎から声をかけられた。

小十郎
「こんなところで何をしている？　張」

霞
「え、え～と……そ、そういう小十郎は？／／／」

小十郎
「俺か？　俺は政宗様に此処で待ってろと言われ何処かに行ってしまってな。全く、政宗様は何を考えてんだが」

政宗は先程から扉のところをウロチョロしてる霞を見つけて仕方なく小十郎を行かせた。

霞
（チャンスは・・・今しかない！）

霞は最初は戸惑っていたが此処でお弁当を渡ると決意した。

霞
「こ、小十郎！／／／」

小十郎
「ん？　どうした？」

霞
「こ、これ、たた食べてくれへんか？／／／」

霞は小十郎に弁当箱を渡した。

小十郎
「これを？　・・・・・開けていいのか？」

霞
「・・・・・え、ええで／／／」

小十郎は弁当箱を受け取り蓋を開けた。

小十郎
「ほぅ……サンドウィッチか」

中にはサンドウィッチが何個か入っていた。

小十郎
「なら有り難く貰うぜ」

そして小十郎はサンドウィッチの手に取って口まで運んだ。

小十郎
「モグモグ……」

霞
「じぃ～……」

小十郎
「これは……」

霞
「は、初めて作ったんやけど……口に合わんかったか？」

小十郎
「初めてだと？」

霞
「せ、せや／／／」

霞は初めて作ったお弁当に何を言われるかドキドキしていた。

小十郎の答えは……

小十郎
「大した腕だな。かなり美味かったぞ」

と霞を褒めた。

霞
「ホンマか！？」

小十郎
「ああ、パンと野菜のバランスがとれていてしっかり味もある。こんなの他でも食えないぜ」

霞
「やっったあああぁぁ！！」

そして小十郎はサンドウィッチを食べ終えた。

小十郎
「ご馳走さん、美味しかったぜ」

霞
「おおきに♪」

霞は先程の事で自身が付き何とかまともに話せるようになった。

小十郎
「さて……政宗様でも捜しに行くか。全く世話がやけるな」

小十郎はくるっと回り……

小十郎
「じゃあな張。弁当、ありがとよ」

感謝の言葉を言って立ち去ろうとしたが……

霞
「あ、ちょい待って！」

霞に呼び止められた。

小十郎
「ん？」

霞
「あ、あんな、これからウチの事を“霞”って呼んで欲しいんや！／／／」

小十郎
「……」

霞
「それとな……また弁当、作ってきてもええか？／／／」

霞はそう言って小十郎にお願いした。

それを聞いた小十郎振り返らずに……

小十郎
「フッ……楽しみにしてるぜ、“霞”」

と言って歩き始めた。

霞
「！？　うん！！／／／」

霞は名前を呼ばれた事によって恥ずかしさと嬉しさのある笑顔を見せた。
それを片隅から見ている人達があった。

政宗
「～♪　小十郎の奴、決まってるじゃねーか」

月
「霞さんも嬉しそうですね」

恋
「……良かった」

華琳
「これから大変ね、アナタ達」

秋蘭
「フッ……そうですね」

稟
「わ、私はそんなんじゃ……ぶはっ！／／／」

白蓮
「うおい！　もの凄い勢いで鼻血がでてるぞ！？」

風
「はい、稟ちゃん。とんとんしますよ、とんとん～」

１－Ａのメンバーと１－Ｄの女性陣だった。

恋に目覚めた霞の話・・・

第三十二話、霞、恋を知る！？（後書き）

霞、完全乙女化！

……すんません。なんかすんません

えー前回のクイズですが答えは“つよき●”です！

全員中の人繋がりです

わからなかったらＷｉｋｉｐｅｄｉａで検索だ！

さて、悪ふざけもここまでにしてと……

次回も未定です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

では！

第三十三話・A、正義の連者、見参！～前編～（前書き）

華琳
「そこのアナタ」

佐助
「俺様か？」

華琳
「太平要術の書を渡しなさい」

佐助
「……何の事？」

春蘭
「華琳さま！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まります！」

第三十三話・A、正義の連者、見参！～前編～

～あらすじ～

霞が恋に目覚めた次の日の朝……

～1－B～

家康
「おはよう、みんな！」

家康は元気よく皆に挨拶をして教室に入った。

桃香
「あ、おはよう家康君♪」

愛紗
「おはようございます家康殿」

焔耶
「おはようございます！　お館！」

家康
「ああ、おはようみんな」

家康は周りを見てある事に気付く。

家康
「今日はみんな遅いな」

桃香
「そうなんだよ。普段ならみんな来てる筈なのにね～」

１－Ｂのクラスはいつもより人が少なかった。
普段ならとっくに皆は席についている時間の筈。
だがその理由はすぐにわかる事になる……

ガララッ！

翠
「た、大変だ！」

ドアが開き、慌てて入ってきたのは翠だった。

愛紗
「翠？　どうしたのだそんなに慌てて」

翠
「ハァ‥ハァ‥こ、校庭でチンピラ達が暴れてるんだ!!」

家康
「なんだと!?」

焔耶
「お館!」

家康
「うむ!　皆の者、行くぞ!」

そう言って家康達は校庭に向かった。

～校庭～

チンピラ頭
「テメェら!　やっちまいな!」

チンピラ
「「「「「ヒャッハー!!」」」」」

現在、校庭では１００人以上のチンピラ達が暴れていた。

元親
「オゥリヤ！」

政宗
「ＭＡＧＮＵＭッ！」

ブォン！　ズサァア！

チンピラ
「「「「ギャアァァァ！！」」」」

春蘭
「クッ！　何だこの人数は！？」

霞
「知らんわ！　そないな事！」

半兵衛
「まずはこれをどうにかしないといけないね」

秀吉
「弱き者がつけあがるな！」

華雄
「ハァーーー！！」

島津
「チェェエスト！」

そのチンピラ達の対処をしている学生と先生達は人数の多さに苦戦していた。

さらに……

幸村
「佐助！　何故この者達は倒してもすぐ起きるのだ！？」

佐助
「そんなの知ったことかッ！　今は目の前の敵に集中するんだ、旦那！」

チンピラ達は倒しても倒してもすぐ立ち上がり襲って来るのだ。

秋蘭
「このままでは切りがないな」

慶次
「とりあえず今は倒すしかないよ！」

信玄
「侵略する事火の如く！！」

しばらく倒すしかない学生と先生達。

だが、その勢いも段々と弱くなっていた。
そこに……

家康
「遅くなってすまない！」

愛紗
「これより参戦いたします！」

翠
「よっしゃー！　燃えてきたー！」

焔耶
「私を倒せる者はいるかー！！」

紫苑
「家康君！　それに愛紗さんに翠さん！」

桔梗
「焔耶も来たか！」

家康、愛紗、翠、焔耶……参戦！
因みに桃香は離れた場所で応援している。

凪
「気をつけてください！　この者達は倒してもすぐに起き上がりま

す！」

愛紗
「なッ！　それは本当か！？」

蓮華
「ええ！　本当よ！」

家康
「ともかく、今は倒すしかないな！」

焔耶
「わかりました！」

家康達が参戦し、少し優勢になったが戦況は変わらずチンピラ達が有利だった。
倒しても倒してもすぐ立ち上がるチンピラ達に学園サイドは疲労が見えてきた。

明命
「ハァ、ハァ、ハァ」

白蓮
「さ、流石に疲れるぞ」

三成
「秀吉様の前で情けない姿を晒すわけにはいかないのだ！」

風魔
「……」

雪蓮
「アハハハ♪　ほらほら！　もっと来なさいよ！」

猪々子
「な、何で雪蓮は元気なんだよ（汗）」

家康
「だが……このままでは体力を消耗するだけだな……」

愛紗
「クッ……なんとかならんのか」

このままでは無駄に体力を消耗するだけと思っている為どうすれば良いか考えていると……

???
「はーっはっはっは！　はーっはっはっは！」

突如笑い声が周りに木霊した。

焔耶
「誰だッ！？」

小十郎
「何処にいやがる！？」

思春
「！　彼処だ！！」

思春の言葉に皆、後ろを見た
そこには蝶々型の仮面を付けた三人の女性がいた。

？？？
「天知る、神知る、我知る、子知る！」

？？？
「悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

？？？
「朱華蝶（あけかちょう）！」

？？？
「・・・・・・・・・・？」

朱華蝶
「と、恋華蝶（こいかちょう）！」

？？？
「星華蝶（ほしかちょう）！」

朱華蝶

「かよわき華を護るため！」

星華蝶
「華蝶の連者、三人揃って」

恋華蝶
「……ただいま」

三人
「参上！」
「参上！」
「……さんじょう」

ドカァァァン！！

三人がポーズをとった瞬間に学園の方から爆発音が聞こえた。

真桜
「今、学園から爆発せえへんかった！？」

沙和
「大丈夫なのッ！？」

久秀
「これで良いかな？」

どうやら久秀が爆発させたらしい。

朱華蝶
「あ、はい。ありがとうございます」

久秀
「そうか・・・では、頑張ってくれたまえ」

そう言って久秀は去っていった。

蓮華
「貴様等は何者だッ!?」

星華蝶
「なに、通りすがりの正義の華蝶仮面だ」

官兵衛
「華蝶仮面だぁ?」

長政
「貴殿も正義の為に働いているのか!」

星華蝶
「まぁそんなところだ」

華琳
「そんな華蝶仮面が何しに来たのかしら?」

星華蝶
「フッ……正義の名の下にこやつら蹴散らしてくれる」

恋華蝶
「……御飯」

星華蝶
「だから、後で食べさせてやるからって」

恋華蝶
「……わかった」

家康
「何にしても有り難い！　頼んだぞ！」

元親
「頼りにしてるぜ！」

星華蝶
「任された……朱華蝶、相手の分析を頼む！」

朱華蝶
「は、はい！」

チンピラ頭
「何処のどいつだが知らねーが構わねー！　テメェら！　ソイツらを片付けな！」

チンピラ

「「「「「ヒャッハー！」」」」」

そして星華蝶と恋華蝶はチンピラ達に向かっていった。
皆は突如現れた華蝶仮面に期待した。
しかし疑問を持った者もいた。

佐助
（何でわかんないの！？　あれ星ちゃん達じゃないの！？）

政宗
（無駄だ、猿飛……気付いているのは俺らしかいねー）

突っ込みに定評のある政宗と佐助だ。

政宗
（こうなったら仕方ねー…俺らも黙って見るしかねーな）

佐助
（ダメだコイツら…早くなんとかしないと）

佐助は心からそう思った。

星華蝶
「ハイハイハイー！」

ヒュヒュヒュッ！

恋華蝶
「……邪魔」

ブォン！

チンピラ
「「「「「ホゲェーーー！！」」」」」

華蝶仮面の活躍により戦況は一気に学園サイドの流れになっていた。
しかしどんなに倒してもまたすぐに立ち上がってくる事には変わりがない。

星華蝶
「朱華蝶！　相手の弱点はわかったか！？」

朱華蝶
「も、もう少しです！」

恋華蝶
「……早く」

朱華蝶
「……わかりました！　相手はあの壺によって復活をしています！」

朱華蝶が指差した先には赤い霧を出している壺を発見した。

星華蝶
「あれか！」

孫市
「任せろ……ハァア！」

ババババァン！

孫市は壺目掛けて銃を乱射し……

ガシャアァァァン！

壺は粉々に砕けた。

すると……

チンピラ1

「……ハ！　此処は一体？」

チンピラ２
「俺は何をしてたんだ？」

チンピラ３
「つーか体中が痛いんだけど！？」

チンピラ４
「あだだだだ！」

チンピラ頭
「な、何だってんだ！？」

チンピラ達は攻撃を止め、正気に戻ったようだ、

冥琳
「終わったか」

翠
「つ、疲れた～」

学生と先生達はやっと攻撃が収まり安心していた。

穏
「しかし、何故いきなりこんな大群が来たのでしょうかぁ？」

稟
「誰かの陰謀でしょうか？」

桂花
「何にしても迷惑には変わりないわ！」

風
「ぐぅ～」

詠
「アンタは寝るな！」

此方では何故このような事が起きたのか考えていた。
その時！

？？？
「おやおや……失敗しましたか」

星華蝶
「！　誰だッ！？」

突然、校庭に鉄のマスクを付けた白い服の男性が現れた。

？？？
「やはり此方は私が行かなくてはいけませんね」

恋
「……誰？」

？？？
「そういえばまだ名乗っていませんでしたね……」

すると男性は二つの鎌を前に出し、自らの名前を名乗った。

天海
「私は天海！　誰よりも命の価値を知る者！」

突如現れた天海。果たして彼の目的とは！？

続く！！

佐助
「続くの！？」

第三十三話・A、正義の連者、見参！～前編～（後書き）

やっと出ました華蝶仮面！

そして謎の敵、天海！

……これだけで小説作れそうだな……

次回は後編です！

質問、評価、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第三十三話・B、正義の連者、見参！～後編～（前書き）

天海
「私を愉しませてくれる人はいますか！？」

焔耶
「行け、たんぽぽ！」

蒲公英
「いや無理死んじゃう！」

長政
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語の悪は、私が削除する！」

第三十三話・B、正義の連者、見参！～後編～

～あらすじ～

華蝶仮面の前に現れた天海。果たして目的は……

～学園・校庭～

ざわ…ざわ…ざわ……

家康
「天…海？」

桃香
「な、なんか怖いよあの人（汗）」

愛紗
「桃香様、私達の後ろに！」

華琳
「これは……人間が出せる邪気ではないわね」

春蘭
「華琳さま！　大丈夫ですか！？」

現在、校庭では天海の出現によりざわめきが起きていた。

星華蝶
「天海よ、お主がこの事件の主犯か？」

天海
「……だとしたら？」

恋華蝶
「……殺す」

天海
「ンフフ～……怖いですね～」

口ではそう言っている天海だが、顔は愉快そうだ。

天海
「しかしこの人数では勝ち目はありませんね……」

？？？
「ならば我が協力しよう」

天海
「おや？　アナタも来たのですか？」

天海が後ろを見ると興に乗った全身真っ黒の男性が現れた。

???

「いやなに、ほんの興味よ」

天海

「相変わらずですね……マダオさん」

マダオ

「ヒヒヒッ！」

男性の名はマダオと言う。

朱華蝶

「ま、また現れました！」

翠

「しかもさっきの奴より不気味だぞ！」

マダオの登場により不気味さを増して学園サイドは動揺していた。

だが……

佐助

（オイィィィ！？　どう見てもアイツ大谷だろォォォォ！？　つー

かこれも銀●ネタじゃねーか！）

政宗
（しかも天海って奴、ウチの学園の明智って先公だろ！？）

政宗と佐助は心の中でツッコミを入れた。

佐助
（つーかみんなマジで気付いてないの！？　すぐわかるじゃん！）

政宗
（まさか……ホントに別人なのか？）

佐助
（伊達の旦那！？　惑わされるな！）

こちらもこちらで忙しそうだ。

三成
「オイッ！　貴様ッ！」

マダオ
「我か？」

佐助と政宗が自分と葛藤していると突然三成がマダオを呼んだ。

佐助
（！　そうか！　昔ながらの幼馴染だから流石に気付いたか！？）

政宗
（頼む！　そのまんま突っ込んでくれ！）

政宗と佐助は三成なら突っ込んでくれると期待した。

三成
「貴様は……何故…」

マダオ
「……」

三成
「……刑部と同じ輿に座っている！？」

佐助
（本人だからだァァァ！）

佐助は心の中で壮大にツッコんだ。

マダオ
「おおよそ予想はつかんか？」

三成
「何だと?」

マダオ
「そやつも此処にはおらぬ……即ち」

月
「まさか……刑部君を!?」

三成
「きーさーまーッ!!」

マダオ
「ヒヒヒッ!　そうだ!　もっと我に不幸を見せよ!」

佐助
（……それにしてもノリノリだな、オイ）

佐助はもうツッコむのをやめた。

天海
「策はありますか?　マダオさん」

マダオ
「まぁ見ておれ……フン!」

マダオは邪悪な気を地面に叩きつけた。

すると……

ゴゴゴゴゴゴゴッ！

？？？

「ヒヒィィン！！」

地面に穴が開きそこから馬車を牽引した馬が出てきた。

秀吉

「あれはッ！？」

半兵衛

「戦車天君（いくさぐるまてんくん）！？」

斗詩

「何であれが此処に！？」

三成

「秀吉様の力の象徴が！？」

慶次

「秀吉！　何なんだあれはッ！？」

生徒会役員は戦車天君を見て驚いてそれ以外の人たちは見たことない物が出てきて慌てていた。

秀吉
「あれは我のペットだ」

官兵衛
「ペット！？」

半兵衛
「ああ、いつもは秀吉の庭で自由に疾走せているんだけど……」

秀吉
「あれは我でも止めるのは困難だ」

愛紗
「ならどうすれば…」

秀吉でも止めるのは困難と言われどうすればいいかと考えていると……

星華蝶
「フッ……ならば私に任せてもらおう」

幸村
「あれを止められると申すのか！？」

星華蝶
「なに、やってみせましょう」

そう言って星華蝶は戦車天君の前に立つ。

戦車天君
「ヒヒィィン！！」

戦車天君は星華蝶目掛け疾走した。

ガラガラガラ！！

星華蝶
「甘い！」

その疾走に星華蝶はなんなく避けたが……

ギギィィィ！！

星華蝶
「！？　クッ！」

戦車天君は急カーブをしてきて星華蝶は腕をかすめた。

小十郎
「速い！？」

華琳
「走りは無茶苦茶ね」

翠
「でも乗ってみたいかも・・・」

佐助
「やめろ！　死ぬぞ！」

しかし、これだけで終わる事がなかった。

グググ・・・・ガシャアン！！

朱華蝶
「はわッ！？」

ゴオォォォオ！！

突如戦車天君の馬車部分が開き大砲らしき機械が出てきて火炎放射が発射された。

星華蝶
「チィ！」

星華蝶は素早く戦車天君から離れた。

雪蓮
「ちょッ！　何てモノつけてんのよ！？」

秀吉
「あれは我の趣味だ」

冥琳
「あんなモノつけてたらいつか誰か死ぬぞ」

家康
「待て！　落ち着くんだ元親！」

凪
「真桜もだ！」

元親
「離せ家康！　俺はアイツのからくりが知りたいんだ！」

真桜
「あんなん見せられたら血がたぎるに気まっとるやないか！」

此方ではからくりを見て暴走した元親と真桜を止めている家康と凪。

天海
「焦る貴方をじらす私・・・ああ、なんて愉しい！」

マダオ
「ぬしも気の毒な女よな、ヒヒッ！」

一方の天海とマダオは星華蝶が苦戦されている姿を見て愉しんでいた。

ところが・・・・・

星華蝶
「・・・・・フフッ」

星華蝶はいきなり笑いだした。

天海
「・・・・・何かおかしいですか？」

星華蝶
「ああ、全くもって愉快よ」

マダオ
「なに？」

星華蝶
「確かに其処の馬は強い・・・だがまだ足りない！　足ァりないぞォ！！」

星華蝶は戦車天君を指差した。

星華蝶
「其処の馬に足りないものは、それは！　情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！　そしてェなによりもーーーーー」

一同（政宗と佐助を除く）
「「「「「速さが足りない！！！」」」」」

佐助
「え？　なにこれ？　いつ合わせたの！？」

政宗
「・・・・・ホントにｈａｐｐｙな奴らだな、オイ」

息ピッタリのボケに政宗と佐助はついていけなかった。

天海
「ですが、貴方に何ができますかね？」

星華蝶
「知れた事……朱華蝶、恋華蝶！」

朱華蝶
「ひゃい！」

恋華蝶
「……ん」

そう言って星華蝶は他の華蝶仮面を呼びかけた。

星華蝶
「征くぞ！」

朱華蝶
「はわわ……」

恋華蝶
「……おなかすいた」

星華蝶
「だから、後で飯を買ってやるというに！」

恋華蝶

「……大盛り」

星華蝶
「分かったから！」

恋華蝶
「……卵も、いい？」

佐助
（ぐだぐだかよ）

戦車天君
「ヒヒィィィン！」

そうしてる間に戦車天君が近付いて来た。

朱華蝶
「もう来ちゃいましたよぅ！」

星華蝶
「何でも好きに頼め！」

恋華蝶
「……やった♪」

揉め事が収まり、突っ込んでくる戦車天君を目の前に、三人はポーズを取った。

星華蝶
「行くぞ必殺！　三位一体！」

そう叫び、星華蝶は戦車天君に向けて走り出す。

槍を構え、すれ違いざまに……

星華蝶
「華蝶！　風！　月！　斬ッ！」

ヒュゥオォン！　ザシュッ！

戦車天君の体を斬りつけた。

戦車天君
「ヒヒィィィン！？」

星華蝶
「……安心せい。急所は外した」

バタンッ

そして戦車天君は崩れ落ちた。

三人
「正義は、勝つ！」
「正義は、勝つ！」
「……正義は、勝つ」

ドカァァァン！

三人は勝利のポーズを決めた瞬間、また爆発音がした。

天和
「また爆発した！？」

久秀
「上手くいったかね？」

久秀、圧参！

朱華蝶
「あ、大丈夫です。本当にありがとうございます」

久秀

「そうか。ご苦労だったな」

そう言って久秀は再び学園に戻っていった。

政宗
（つーか何してんだ、あのオッサン？）

政宗は久秀の行動に疑問を持った。

天海
「ンフフフ……どうやら此処までのようですね」

マダオ
「やれ、まだアレが落ちぬか。それまでは逝くわけにはいかぬ……フン！」

そしてマダオは自分達の周りに珠を飛ばした。

星華蝶
「待てッ！　貴様らの目的は何だ！？」

天海
「私達の目的ですか……」

マダオ
「まぁ良かろう。事の次いでに教えてやる」

そして天海とマダオは自らの目的を言った。

天海
「私の目的はあの御方の復活です！」

マダオ
「我はこの世の不幸を見たいだけよ」

星華蝶
「あの御方？」

朱華蝶
「それに貴方の不幸とは何か関係しているんですか！？」

天海
「おっと、時間のようですね」

マダオ
「いずれまた不幸の下で会おう・・・ヒヒヒッ！」

シュン！

そして天海とマダオは消えた。

星華蝶
「天海……貴様の野望は華蝶仮面が打ち砕く！」

家康
「やったな、星華蝶！」

星華蝶は天海の野望を阻止する事を決意したら皆が集まってきた。

秀吉
「此度の戦、協力を感謝する」

星華蝶
「何、華蝶は正義の為にある」

蓮華
「それにしても貴方達は一体……」

星華蝶
「フッ……どうやらここまでのようだな。朱華蝶、恋華蝶、征くぞ！」

朱華蝶
「は、はい」

恋華蝶
「……わかった」

そう言って華蝶仮面は何処かに去っていった。

桃香
「……行っちゃったね」

家康
「ああ……いずれ感謝をしなければなるまい」

長政
「風紀委員よ！　我らも華蝶仮面に負けぬよう、この学園を守っていくぞ！」

愛紗
「はい！」

そして皆は教室に戻っていき、残ったのは政宗と佐助だけだった。

佐助
「……なぁ伊達の旦那」

政宗
「……なんだ？」

佐助
「もしかしてこれ…ヒーローショーみたいな奴なのかな？」

政宗
「……さぁな」

そう言って政宗と佐助も教室に戻っていった。

～おまけ～

・１－Ｂの場合

星
「ほぅ、そんな事がありましたか」

家康
「ああ、大変だったぞ！」

桃香
「その時に華蝶仮面が現れてね」

朱里
「は、はわわ……」

・１－Ｄの場合

恋
「モグモグ……」

詠
「恋、どうしたのそれ？」

大谷
「いやはや大変だった」

月
「でも、無事で良かったです」

三成
「あまり心配させるな、刑部」

大谷
「あい、わかった」

・２－Ａの場合

光秀
「皆さん、朝は大丈夫でしたか？」

長政
「安心してください光秀先生！　我らは勇敢に闘って勝利しましたから！」

光秀

「ンフフ～……それは良かった」

とある教室の風景……

第三十三話・B、正義の連者、見参！～後編～（後書き）

新しいキャラ、マダオ！

……流石にマズッたかな？

次回は未定です！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第三十四話、ある日の厄日（前書き）

小十郎
「分の悪い賭けは嫌いじゃない」

秀吉
「俺に出会った不幸を呪え」

宗茂
「トロンベよ！　今が駆け抜ける時！」

佐助
「……俺様はボケないぞ」

※今回はアンケートがあります。詳しくは後書きにて！

慶次
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、罷り通る！」

第三十四話、ある日の厄日

～あらすじ～

華蝶仮面の活躍で学園の平和が守れた次の日の放課後……

～通学路～

授業が終わり皆が下校をしてる学生達。
その中に今回、厄日の主人公はいた。

佐助
「やーっと終わった～」

佐助である。
佐助は一人、下校していた。

佐助
「（旦那は蓮華ちゃん達とどっか行っちゃうし、思春は部活だし、明命ちゃんは猫を見た瞬間にいなくなっちゃうし）……てか俺様あんま友達いなくない？」

そんな事を思いながら下校していると……

？？？

「うにゃ～……」

一人の少女が道端で倒れていた。

少女の容姿は

頭にネコミミと小さな像があり

小柄な体型

なにか猫を人間にした感じのような少女だ。

佐助

（……なんだアレ？）

佐助は倒れている少女を見た。

そしてしばらく考えた佐助は……

佐助

（……触らぬ神に祟りなし）

面倒な事になると思い少女をスルーしようとし。

たが……

ガシッ！

佐助

（……わかっていたさ、こうなる事くらいな）

少女は佐助の足にしがみついた。

???

「た、助けるのにゃ。みぃはもうダメにゃ……」

佐助

「……一応聞くが……どうしだんだ?」

???

「お腹が減って死にそうにゃ～……」

佐助

「……」

佐助はやはり面倒な事になったと思い断ろうとした。

佐助
「すまんが子猫ちゃん……生憎俺様も」

？？？
「お願いにゃ～（涙目）」

佐助
「……ハァ」

佐助は少女の涙目を見た瞬間に溜め息を吐き断るのを諦めた。

佐助
「とりあえずファミレスでも連れて行くか…よいしょっと」

？？？
「うにゃ～……」

佐助は限界なのかぐったりした少女をおんぶしてファミレスに連れて行った。

～レストラン・蜀卓～

？？？
「ハグハグッ！」

佐助
「少し落ち着きな。そんな急いで食べたら・・・」

佐助はレストランに来て少女に御飯をご馳走していた。

？？？
「ウッ！？　ん～～～！」

佐助
「あ～あ言わんこっちゃない。ほら」

少女は急いで食べていたら喉に詰まり苦しんで、佐助は少女に水を渡した。

？？？
「ゴクゴク・・・プハァ！　助かったじょ！」

佐助
「そいつは良かった・・・ところでアンタ、名前は？」

？？？
「みぃは孟（もう）　美以（みぃ）と言うにゃ！」

美以は佐助に自己紹介をした。

佐助
「俺様は猿飛佐助。よろしくな」

美以
「よろしくにゃ！」

佐助
「そんじゃ、まずは聞きたい事を聞きますかな」

美以
「なんにゃ？」

佐助
「何であんなところて倒れてたんだ？」

美以
「おぉ、そうだったにゃ！　兄（にぃ）、この辺に恋姫なんとか学園はあるかにゃ？」

佐助
「あるにはあるが……兄って（汗）」

美以
「兄は命の恩人にゃ！　だからそう呼ぶじょ！」

佐助

「（・・・まぁいいか）わかった。そんで、恋ＢＡＲＡ学園になんか用があるのか？」

美以
「あるにゃ！　美以は明日からその恋ばら学園の生徒になるにゃ！」

佐助
「へぇ～」

美以
「美以はその学園に下見に行こうとしたにゃ。そしたら・・・・・」

佐助
「迷子になったんだな」

美以
「なってないにゃ！　みぃは迷子になんかなってないじょ！」

佐助
「・・・・・・ハァ」

佐助は我の強い少女だと思い溜め息を吐いた。

佐助
「ならなんで倒れてたんだ？」

美以
「ウッ・・・そ、それは・・・（汗）」

佐助
「それは？」

美以
「……（汗）」

佐助
「……」

美以
「し、死体ごっこにゃ！」

佐助
「……帰っていい？」

美以
「嘘にゃ！　迷子になっていたにゃ！　だから帰っちゃダメじょ！」

佐助
「素直で結構～」

扱い方が上手い佐助。

美以
「ところで兄はその学園を知ってるにゃ？」

佐助

「知ってるも何も俺様はそこの生徒だからな」

美以
「ホントかにゃ！？」

佐助
「ホントホント～」

美以
「兄！　みぃをそこまで案内してくれにゃ！」

佐助
「（ん～…まぁいっか。どうせ暇だし）いいぜ、案内してやるよ」

美以
「ありがとうなのにゃ！　兄！」

そう言って佐助と美以はファミレスを出て学園に向かっていった。

～学園～

佐助
「此処が学園だ」

美以
「おぉ！　デカいじょ！」

佐助
「そんじゃ、俺様は帰るか」

美以
「兄！　案内ありがとうなのにゃ！　感謝するじょ！」

佐助
「こんなのお安いこった。そんじゃな～！」

美以
「またにゃ～！」

そう言って佐助は帰っていった。

～翌日・１－Ｃ～

佐助
「南蛮のお嬢さま？」

蓮華
「ええ」

美以と遭遇した翌日。
佐助は昼休みに幸村達と食事をしていたら蓮華が気になる事を言っていた。

幸村
「それは何でござるか？」

穏
「どうやら～南蛮王国と言うハワイ島にある国のお嬢さまがこの学園の生徒になったみたいですよ～」

亞莎
「南蛮王国って言ったらハワイ島でもかなりの人気スポットじゃないですか！？」

明命
「だ、大丈夫なんでしょうか？」

思春
「その為に護衛を何人か就けるらしい」

幸村
「ならば安心よ！」

天和
「一度会ってみたいねぇ」

佐助
「そのお嬢さまは何年生なんだ？」

蓮華
「小蓮が同じクラスになったと言っていたわ」

佐助
「なら近い内に会えるかもね～」

昼休みを満喫する幸村達。
そして時間が過ぎ、放課後になった。

～放課後～

幸村
「佐助ッ！　帰るぞ！」

佐助
「あいよ、旦那」

授業が終わり幸村は佐助を呼んで帰る準備をしていた。

佐助
「旦那、蓮華ちゃん達は？」

幸村
「先に校門で待っている筈だ」

佐助
「なら急ぐとするか、旦那」

幸村
「おぅ！」

幸村＆佐助、移動中……

幸村と佐助は校門に到着したら蓮華達と……

小蓮
「ヤッホー！」

小蓮がいた。

幸村
「小蓮殿！　どうされた？」

小蓮
「実は今日友達になった人達がいるから紹介しようと思ったんだけど……」

そう言って小蓮は後ろを振り向いた。

明命
「はうぅ～～～……モフモフです！／／／」

???
「うにゃ～！　離すにゃ～！」
???
「だいおーがピンチにゃ！」
???
「大王しゃまを助けるにょ～！」
???
「……だいおー様～大丈夫にゃん？」

そこでは明命が誰かを抱きかかえて暴走していた。

幸村
「蓮華殿、もしかしてあの者達は……」

蓮華
「ええ、南蛮王国のお嬢さまよ」

穏
「あんなに可愛いものだとはビックリしましたよ～」

幸村
「あれが……ん？　佐助、どうした？」

佐助

「な、何が？（汗）」

天和
「何か顔色悪いよぉ。それにスゴい汗だし」

佐助
「き、気にすんな（汗）」

佐助は南蛮王国のお嬢さまを見た瞬間焦り始めた。

何故なら……

佐助
（あれって……美以ちゃんだよな？）

明命が抱きかかえてる人物が美以だったからだ。

佐助
（マズい…俺様の直感が“パターン青、使徒です！”と言っている）

かなり焦っている佐助。

佐助

（落ち着け・・・まずは此処を静かに立ち去る事だ）

そう思い佐助は静かに立ち去ろうとしたが・・・・・

明命
「あ！　猫神様！」

明命に見つかった。

佐助
「・・・・・よ、よう（汗）」

明命
「見てください猫神様！　このお猫様のような耳！　本物そっくりの肉球！　そしてツンデレの性格！　間違いなくこれはお猫様です！」

美以
「にゃ！？　兄なのにゃ！」

美以は明命を振り解いて佐助に近付いた。

明命
「あぅ・・・・」

美以
「兄！　また会えたのにゃ！」

佐助
「あ、ああ」

幸村
「佐助？　この者とは知り合いか？」

佐助
「まぁな……」

美以
「お前たち！　兄に挨拶をするにゃ！」

美以は三人の少女を呼んだ。

？？？
「ミケにょ！　よろしくにょ、あにしゃま！」

虎の被り物を被った水色の髪をした少女がミケ

？？？
「トラにゃ！　にぃにぃ、よろしくにゃ！」

ミケとは少し違う虎を被った茶髪の少女がトラ

???

「シャムにゃん…よろしくにゃん、にい様～」

此方も二人とは少し違う虎を被った桃色の髪の少女がシャム

三人は佐助に挨拶をした。

佐助
「よろしくな」

美以
「兄！　みぃは決めたにゃ！」

佐助
「……何をだ？（汗）」

美以
「みぃは兄の妻になるじょ！」

佐助
「……は？」

一同
「「「「な、なんだってー！？」」」」

美以の発言によって一同は騒がしくなった。

蓮華
「佐助ッ！　これはどういう事だ！？」

佐助
「いや、知らないですって！」

亞莎
「つつつつ妻！？／／／」

明命
「流石猫神様です！」

小蓮
「うわ～大胆ね」

ミケ
「大王しゃまに春がきたにょ！」

トラ
「だいおー！　おめでとーにゃ！」

シャム
「にい様、だいおー様をよろしくにゃん」

天和

「いいな～」

佐助
「いや、良くないからねッ！」

佐助はやはり厄介な事になったと思った。

幸村
「佐助……」

佐助
「だ、旦那？（汗）」

幸村
「……破廉恥でござぁぁぁる！」

ブォン！　バキィ！

佐助
「グハァ！？」

勘違いした幸村は佐助の顎を殴り飛ばした。

そんな中、佐助は……

佐助
（俺様は……関係……な…い……ガクッ）

自分の無罪を唱えながら気絶した。
頑張れ佐助ッ！　いつかくる幸せのその日まで！

第三十四話、ある日の厄日（後書き）

佐助も官兵衛並みの不幸って感じでしたね（笑）

次回は……の前にアンケートです！

項目は二つです。

一つ目、次回の主役はどちらがいいですか？

A、元親

B、政宗

二つ目、次の外伝でどちれが見たいですか？

A、現在１－Ｄの担任、華雄がある事によって高校生をやり直す

B、璃々ちゃんが学園を探検して様々な人物に出会う

C、作者！　俺は上の二つ、どっちも見たいＺＥ☆

以上です。

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

第三十五話、風邪にはご注意！（前書き）

元親
「貴様らは正しいのか？」

元就
「俺に名前などない」

佐助
「ユニバァァァス！！」

幸村
「佐助！？」

地和
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始めるわよ！」

第三十五話、風邪にはご注意！

～あらすじ～

佐助の厄日から2日後……

～朝・1－B～

家康
「元親が風邪？」

風魔
『ああ』

家康は朝、元親が席にいない事が気になり皆に聞いたら風魔が答えた。

桃香
「へぇ～珍しいね～」

愛紗
「あんな元気な元親殿が……世の中わからないものですね」

家康

「確かにな……心配だな」

朱里
「だ、大丈夫なんでしょうか？」

風魔
『今は元親を慕っている者達が看病をしている』

家康
「ならば良いのだが……そうだ！」

事珍しい元親の風邪を心配する家康は何か思いついた。

家康
「放課後にみんなで元親のお見舞いに行こう！」

桃香
「あ！　それいいね！」

愛紗
「ですが家康殿、我らは放課後に委員会がありますよ」

二人
「「あ……」」

二人は完全に委員会の事を忘れていたらしい。

風魔
『ならば我が行こう』

家康
「そうか。お主なら部活がてら元親のお見舞いに行けるな」

桃香
「ならお願いしていい？」

風魔
『承知』

キーンコーンカーンコーン

予定が決まりチャイムが鳴ったので皆は席についた。

そして授業が終わり……

～アパート・元親宅～

元親
「ぶぇっくしょい！！」

子分1
「だ、大丈夫ですかい兄貴？」

元親
「あ～……何とかな」

此処は元親が住んでいるアパート。
元親宅には元親を慕っている子分、数人が世話をしていた。

子分１
「ですが、まさか兄貴が風邪を引くなんて…思ってもいませんでした」

元親
「俺もビックリしてるさ……風邪とは無縁の関係だと思っていたんだけどな（苦笑）」

子分１
「まぁ兄貴はゆっくり休んでください」

元親
「おぅ！　あとワリィな、俺の為にバイトを休んじまって」

子分１
「なに言ってんすか、自分らは兄貴が好きなんすからこんなの当たり前ですよ。なぁみんな！」

子分
「「「アニキィ！！」」」

元親
「ダッハハハ！　元気のいい野郎共だぜ！」

子分
「それじゃあ兄貴、自分らはもう帰りやすんで」

元親
「ああ！　そんじゃな、野郎共！」

子分
「「「アニキィ！！」」」

そして子分達は元親に一言挨拶をして帰っていった。

元親
（ハァ～、ガラにもなく風邪とはな……俺らしくもねぇぜ）

子分達が帰った後そんな事を思っている元親。

元親
「ぶぇっくしょん！　……ハァ～、まぁそんな事思っても仕方ねぇな。今日くらいはゆっくり休むとするか」

そして元親は寝る準備をした。

そこへ……

ピンポーン♪

いきなりチャイムが鳴る。

元親
「アン？」

元親
（野郎共か？）

そんな事を思いながら元親は玄関まで行きドアを開けた。

ガチャッ　ドォ―ン！

元親
「ゴファ！？」

開けた瞬間、元親の腹に何かが突っ込んできた。

その正体は……

鈴々
「お兄ちゃん！　お見舞いに来たのだ！」

恋
「……ん」

鈴々と恋だった。

地和
「ちょっと鈴々！　チカにぃから離れなさいよ！」

思春
「恋もだ！」

真桜
「やっぱこうなってもろたか」

風魔
『大丈夫か？』

さらにその後ろから工学部メンバーと地和もいた。

元親
「アタタッ…なんだお前らか、どうした？」

思春
「風魔からお前が風邪を引いたと聞いてな……」

真桜
「ほんで風魔がお見舞いに行くっちゅーことやからウチらも来たっちゅーわけや」

風魔
『その道中に鈴々と地和に出会った』

元親
「おお、そうかい。あんがとよ！」

地和
「チカにぃ、大丈夫？」

元親
「ああ、朝よりだいぶマシになってきたからな」

恋
「……よかった」

元親
「まぁ立ち話もなんだ、上がってくれ」

鈴々
「うん！」

一同は元親の部屋に上がる。

地和
「へぇー此処がチカにぃの部屋か～」

真桜
「なんやもっとカラクリだらけかと思ったんやけどな」

元親
「安心しな。カラクリは別の倉庫にあっからよ」

恋
「……」

皆は元親の部屋を見ていった。

風魔
『元親、これは今日のプリントだ』

元親
「おお、あんがとよ風魔」

風魔
『気にするな。それから家康達も心配していたぞ』

思春
「蓮華様や幸村達もな」

元親
「そうかい……ならとっとと風邪でも治すとするか」

鈴々
「お兄ちゃんが暇にならない為に鈴々達がお話し相手になるのだ！」

元親
「ダッハハハ！　そんじゃあ相手になって貰ってもいいか？」

鈴々
「お安い御用なのだ！」

恋
「……恋も」

元親
「ならみんなで話すとしますかい！」

そして元親達は雑談をはじめた。

雑談中……

そしてあっという間に時間が過ぎ、外は暗くなっていた。

地和

「うわッ！　もうこんな時間！？」

鈴々
「にゃ～、早く帰んないと愛紗に怒られちゃうのだ」

風魔
『では、そろそろ帰るか？』

真桜
「せやな。ウチも寮の門限が厳しいさかい」

元親
「お前達、今日はありがとよ」

真桜
「かまへんよ大将」

地和
「早く元気になってね！」

鈴々
「まったねー！　お兄ちゃん！」

元親
「おぅ！　またな！」

風魔達は帰っていった。

そして元親の部屋に残ったのは……

思春
「……」

恋
「……」

思春と恋だけになった。

元親
「ん？　お前ら、まだ帰んねえのか？」

思春
「ああ、私も一人暮らしだからな」

元親
「そうかい。恋は？」

恋
「……」

すると恋は……

恋
「……泊まる」

元親
「……は？」

恋
「……元親の世話をする」

思春
「なッ！？」

爆弾発言をした。

思春
「ま、待て恋！　貴様、家族は！？」

恋
「……家族はいる」

思春
「ならば、早く帰らんと心配するぞ！」

恋
「……心配ない」

思春
「何がだ！？」

恋

「……餌ならねねがやってる」

思春
「……は？」

元親
「恋……家族って」

恋
「……動物たち」

思春
「ま、紛らわしい言い方をするな！」

恋
「……ごめん」

恋はシュンとなって謝った。

思春
「ウッ……わ、わかればいい／／／」

そんな仕草を見て思春は心を打たれる。

恋
「……だから、泊まる」

元親
「気持ちはありがてぇが…俺と一緒だと風邪を引くかもしんねぇぞ？」

恋
「……それでも、泊まる」

元親
「……まぁそこまで言うなら」

恋
「……ありがと」

こうして恋は元親の部屋に泊まることになった。

思春
「ま、待て！」

そこへ思春が待ったをかけた。

元親
「あん？　どうした？」

恋
「……？」

思春
「……わ、私も泊まらせて貰うぞ！／／／」

思春は顔を赤くさせながら爆弾発言をした。
完全な乙女である。

元親
「……まぁ俺としちゃあ風邪がうつんなきゃなんでもいいが」

思春
「そ、それでも構わん／／／」

元親
「わかったぜ……なら、もう一つ部屋があっからその部屋で寝な」

元親は空いた部屋に指を差す。

しかし……

トコトコトコ……ギュッ

恋
「……一緒に寝る」

思春
「!?／／／」

恋は元親の布団に入り込んで寝て来た。

元親
「……ホントに風邪がうつるぞ?」

恋
「……大丈夫」

元親
(何が大丈夫なんだ?)

元親がそんな事を考えていると……

ガサゴソガサゴソ…ギュッ

元親
「……思春」

思春
「な、なんだ?／／／」

元親

「なんでお前まで入り込んでんだ？」

思春
「れ、恋が良くて、わわ私はダメなのか？／／／」

元親
「そんな事言ってねぇけど…無茶してねぇか？」

思春
「む、無茶などしとらん！／／／」

思春も入り込んで来た。

元親
（コイツらホントに大丈夫か？）

そんな事を思った元親は電気を消した。

恋
「……♪」

思春
「……／／／」

その暗闇の中、恋は嬉しそうに、思春は恥ずかしそうにする

そんな二人に囲まれた元親は……

元親
「がぁ～ｚｚｚ」

案外気持ちよさそうに寝ていた。
翌日、元親の他に二名風邪を引いたのは別の話である。

第三十五話、風邪にはご注意！（後書き）

はい、今回はアンケート結果により元親の話になりました！

アンケートご協力ありがとうございます！

にしても元親、全然動じないとは・・・兄貴だぜ

ちなみに政宗だった場合・・・・・

～政宗宅～

政宗
「なんでテメェらがいんだよ？」

星
「まぁ良いではないか」

風
「安心してください～、小十郎さんには許可を取っていますので～」

政宗
「Ｈａ～・・・・・」

てな感じで休日に星と風に振り回される一日を書くつもりでした。

あと、もう一つの項目は頑張って二つ書くつもりですのでよろしく

お願いします！

次回は華雄のお話です！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・伍、とある先生の不思議な出来事（前書き）

～あらすじ～

宇宙世紀００７９……

佐助
「いや今、二十一世紀だからね！」

明命
「猫神様！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まります！」

外伝・伍、とある先生の不思議な出来事

元親が風邪を引いている同じ頃……

～放課後・通学路～

華雄
「ハァ……」

溜め息を吐きながら帰宅している今回の主人公、華雄。
華雄は何か思い詰めた顔をしていた。

華雄
「恋……か…」

何やらとても悩んでいる様子。
何故こうなったのか？

それは学園内での出来事だった……

～回想・職員室～

華雄
「島津先生！　今日もよろしくお願いします！」

島津
「よかよか！」

授業が終わり先生達の仕事がなくなった放課後、華雄は島津の稽古を頼んでいた。

紫苑
「相変わらず熱心ね」

桔梗
「全くだな」

そこへ紫苑と桔梗がやってきた。

華雄
「ああ！　常に武を磨く事が私の生きがいなのだ！」

桔梗
「ほぅ・・・」

紫苑
「なら、華雄先生は高校時代は何をしていたのですか？」

華雄
「そんなの、己の武を極めていたに決まっている！」

紫苑
「では……恋とかはしなかったのですか？」

紫苑は高校時代の恋愛について聞いた。

華雄
「恋だと？　そんな馬鹿馬鹿しい事はしていないな」

紫苑
「あらあら……それはいけませんわ」

華雄
「なんだと？」

桔梗
「わしも余り人の事は言えんが、恋愛くらいはしといた方が良いぞ」

紫苑
「恋した女性に勝る者なし…恋に目覚めた女性はとても強くなりますよ」

桔梗
「現に焔耶も急に強くなりおった。聞いてみれば恋をしておったわ」

紫苑

「だからアナタも恋の一つくらいは覚えた方がいいわよ」

紫苑と桔梗は華雄に恋をした方がいいと言った。

しかし……

華雄

「くだらんな、そんな暇があったら私は自分自身を強くする。島津先生、稽古をお願いします」

島津

「よかね」

そう言って華雄と島津は職員室を出て行った。

紫苑

「あらあら……」

桔梗

「全く素直じゃないのぅ」

紫苑

「でも、効果はあったと思うわ」

桔梗

「うむ」

紫苑
「華雄先生は少しお堅い方ですからこのくらいが良いのでしょうね」

桔梗
「フン……そういう紫苑は恋しくないのか？」

紫苑
「あら？　どういう事かしら？」

桔梗
「いやなに、夫が先に亡くなり人一倍人肌が恋しいと思うたが？」

紫苑
「うふふ…確かに一人気になる人はいるわよ」

桔梗
「ほぅ」

紫苑
「桔梗の方こそどうなの？」

桔梗
「わしか？　わしも一人おるぞ」

紫苑
「あら、それじゃあお互い様ね」

桔梗
「アッハハハ！　そうだな！」

この後紫苑と桔梗はお互いの気になる人を言い合った。

～剣道場～

島津
「チェスト！」

華雄
「グハァ！」

此処は恋ＢＡＲＡ学園の剣道場。
現在、島津の一振りで吹き飛ばされた華雄。

華雄
「ハァ：ハァ：ハァ」

島津
「どげいしたね、華雄どん？」

華雄
「ハァ：：：な、何か？」

島津
「今日のおまはん、魂が籠もっとらんね。そげいな事じゃあやって

て怪我するだけねぇ」

華雄
「そ、そうですか……」

島津
「……今日はもう終いにするねぇ。自分の悩みが解決したらまた来んしゃい」

華雄
「……わかりました」

～回想終了～

実は華雄は紫苑達の言葉が気になっていた。
それが彼女の悩みとなっていた。

華雄
「（私は昔から己を鍛える事を優先してやってきた。だが、先ほど紫苑に言われた言葉がずっと私の胸を苦しめる）……私は一体どうすれば良いのだ？」

？？？
「ソノ悩み、ワタシが解決シマショー！」

華雄
「誰だッ！？」

華雄は声のした方へ振り向いた。
そこには後頭部に髪がない髭面の巨漢がいた。

華雄
「お前は……ザビー！？」

名をザビー。
恋ＢＡＲＡ学園の英語教師である。

ザビー
「アナタ、今愛に飢えていますネ？」

華雄
「……だとしたら？」

ザビー
「ワタシにイイアイデアがアリマス！」

華雄
「ホントか！？」

ザビー
「コレを飲めば幸せにナレルネ！」

そう言って華雄に飲み物が入った瓶を渡した。

華雄
「こ、これをか？（汗）」

ザビー
「ソレを飲めばアナタ愛を覚えるヨ」

華雄
「……」

華雄は明らかに怪しい飲み物に抵抗があったがこれを飲めば何か得られると思い……

華雄
「……ゴクッ！」

飲んだ。
そして一気に飲み干す華雄。

華雄
「ん？　案外ふつ……ゴファッ！？」

バタン

華雄は何か言っていたがその前に倒れてしまった。

ザビー
「……華雄サン？」

華雄
「……かゆ……うま……」

ザビー
「……愛に犠牲はツキモノネ！」

そう言ってザビーは華雄を置いて逃げて行った。

～病院～

華雄
「……ん、此処は？」

桔梗
「お、気付きおったか」

紫苑
「大丈夫ですか？」

華雄
「紫苑？　桔梗？　どうした？」

華雄が目覚めた場所は病院の病室。
そこには紫苑と桔梗が来ていた。

紫苑
「どうしたって、華雄先生が倒れたと聞いて駆けつけたんですよ」

桔梗
「全く心配させよって……何があったのだ？」

華雄
「……ダメだ、思いだせん」

紫苑
「そうですか……と、ところで華雄先生（汗）」

華雄
「ん？」

紫苑
「えーっと……やっぱり桔梗が言ってくれるかしら？（汗）」

桔梗
「いや、流石にわしもこればかりは……（汗）」

華雄

「？」

華雄は何かあったのかわからないでいた。

華雄
「ええいまどろっこしい！　言いたい事があるならハッキリ言ったらどうだ！」

紫苑
「……わかりました」

桔梗
「紫苑！　やはりまだ……」

紫苑
「いいえ、こういう事は早めに伝えた方がいいわ」

桔梗
「……なら、任せる」

紫苑
「ありがとう、桔梗」

華雄
「だからなんだと言うのだ！？」

紫苑
「あ、ごめんなさい華雄先生。……では聞きます」

そして紫苑はその重い口を開いた。

紫苑
「……どうして若返っているのですか？」

華雄
「……は？」

桔梗
「ほれ、鏡でも見てみよ」

桔梗は華雄に手鏡を渡し、その姿を見せた。
華雄の容姿は少し顔が幼くなり肌も初々しさがあった。

華雄
「な、なんだこれはァァァ！？」

華雄は自分の姿を見て驚愕した。

紫苑
「その反応だと、わからないみたいね」

華雄

「あ、当たり前だ！」

桔梗
「だとしたら、どうするのだ？」

華雄
「な、何がだ？」

桔梗
「よもやそれで学園に行くつもりか？」

華雄
「……あ」

華雄はこの姿では教師は出来ない事に気付く。

華雄
「ど、どうすればいい！？（汗）」

桔梗
「わしに言われてもな……」

華雄
「ではこのままこの醜態をさらせというのか！？」

紫苑
「いえ……一つ方法がありますわ」

華雄
「ホントか!?　紫苑!」

紫苑
「ええ……」

そして紫苑はその方法を華雄に伝えた。

～翌日・1－D～

島津
「今日からおまはんらと同じクラスになる……」

華雄
「華雄だ。よろしく頼む」

霞
「ってなんでやねん!?」

翌日、華雄は紫苑から言われて学生服を身にまとい1－Dのクラスになっていた。

紫苑曰わく……

紫苑

“この際だから学生に戻ってｅｎｊｏｙしてみればいかがですか♪”

霞
「いやいやいや、カンペキに紫苑先生遊んどるで！？」

詠
「その前に元教師が生徒になっていいの！？」

島津
「許可は取っておんねぇ、心配なかぁ」

霞
「そんなん心配してへんよ！」

詠
「みんなも何か言いなさいよ！」

霞と詠は元教師が生徒になる事を不思議に思わないか皆に聞いた。

三成
「どうでもいい」

大谷
「我は構わんぞ」

月
「私もです」

白蓮
「こんな事、日常茶飯事だろ？」

だが、皆はさほど疑問に思っていなかった。

島津
「まぁ仲良くやりんしゃい」

詠
「いや別に嫌だからこういう事してないんだけど（汗）」

霞
「ウチもそーやねんけど・・・（汗）」

華雄
「まぁこんな事になったがよろしく頼む」

霞
「・・・・・・・・まぁ、ええか」

詠
「・・・・・そうね」

島津
「ブァッハッハッハ！」

こうして華雄は１－Ｄの仲間になった。

華雄
（まずは己を鍛え直すか！　……そ、それからでも恋は遅くはない／／／）

しっかりと恋の事を考えている華雄であった。

外伝・伍、とある先生の不思議な出来事（後書き）

はい、無理やり華雄を学生にしました！

いや～実際は先生でも良かったのですが、あるランキングを見たら……

“学園で親友にしたい武将！　第一位、華雄”

と書かれていたので、ならば学生にするか！　と思ってしました

次回は連続で外伝です！　璃々ちゃんが活躍します！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

外伝・陸、小さな小さな大冒険！（前書き）

桃香
「さぁ～て、今週の恋ＢＡＲＡ物語は？」

大谷
「大谷の人類不幸計画」

白蓮
「白蓮の個性探し！？」

信長
「信長の魔王、降臨」

桃香
「の、三本です！」

愛紗
「どれもやりませんッ！！」

※やりません

凪
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まります」

外伝・陸、小さな小さな大冒険！

華雄が学生になった次の日の午後……

～学園・小学校～

？？？

「おわった～♪」

此処は恋ＢＡＲＡ学園付属の小学校。
授業が終わり周りが騒がしくなる中に今回の主人公がいた。

紫色の髪をした元気な女の子

名を璃々（りり）

恋ＢＡＲＡ学園の小学校に通っている紫苑の娘である

璃々
「今日は、なにしようかな～？」

璃々は授業が終わり今日は何をするか考えていた。

璃々
「う～ん……そうだ！　今日はお母さんをさがしに行こう！」

そう言って璃々はクラスの皆と別れて高等部の校舎に走っていった。

～学園・高等部～

璃々
「うわ～……おおきい！」

放課後、璃々は初めて高校の校舎に訪れて驚きを覚えていた。

璃々
「よ～し！　お母さんをみつけるぞ～！」

そう言って璃々の紫苑探しが始まった。

～校庭～

璃々
「う～ん……お母さんどこにいるのかな～」

入ったはいいもの、全く知らない場所なので何処へ行けばいいのかわからないでいた。

???

「おや？　卿は確か紫苑先生の……」

璃々

「ほぇ？　……おじさんだぁれ？」

急に後ろから声をかけられた璃々は振り向くと……

久秀

「おや、失敬。私はこの学園の教頭をやっている松永　久秀というものだ」

久秀が立っていた。

璃々

「はじめまして。璃々っていいます♪」

久秀

「これはご丁寧に。卿は何故、此処にいるのかね？」

璃々
「えっとね、お母さんをさがしてるの！」

久秀
「ほぅ・・・それは健気な事だ。だが、一人で大丈夫なのか？」

璃々
「だいじょーぶだよー。りりは子供じゃないもん！」

久秀
「そうか。大した娘だな」

璃々
「そうだ！　おじさん、このがっこうに詳しいの？」

久秀
「まぁ私も教頭の職についてはいるのでな」

璃々
「なら、お母さんどこにいるの？」

久秀
「・・・すまんがはっきりとした場所は把握はしていない。だが、卿の母なら１－Ｂの担任をしている」

璃々
「へぇ～・・・そうなんだ～」

久秀

「これがこの学園のパンフレットだ。よければ使ってくれ」

璃々
「わぁ～、ありがとー♪」

そう言って璃々は校舎に入っていった。

久秀
「……此処は止めるべきだったか？　いや、それではあの娘の欲望を邪魔してしまうな」

久秀の間違った心遣いだった。

～1－B～

璃々
「お母さーん！　……あれ？」

1－Bのクラスに訪れた璃々だが、其処には誰もいなかった。

璃々
「いなーい」

璃々はシュンとしてしまった。

そこへ……

ガラガラッ！

焔耶
「いかんいかん、忘れ物をしてしま……って璃々！？」

璃々
「あ！　焔耶お姉ちゃん！」

焔耶が現れ、璃々は焔耶に抱きついた。
ちなみに、焔耶は桔梗の関係で紫苑親子とは仲が良い。

焔耶
「どうしたんだ、こんな所に一人で？」

璃々
「お母さんをさがしてたの！」

焔耶
「紫苑先生に？　そういえばさっき廊下ですれ違ったな」

璃々

「ほんと!?　なら追いかけよ～!」

焔耶
「あっ!?　待てッ!」

だが、璃々既に走り去っていった。

焔耶
「全く、相変わらず元気だな。……わ、私もいつかお館と／／／」

その後、焔耶はしばらく妄想の世界に入っていった。

～廊下～

小十郎
「おいテメェら、これで懲りたか?」

不良
「も、申し訳ございません（泣）」

只今廊下では小十郎が不良達を懲らしめていた。
理由は不良の一人が小十郎と肩がぶつかりいちゃもんをつけてきた為。

小十郎
「喧嘩を売る時は相手を選びな。次はねぇぞ」

不良
「は、はいぃぃ！（泣）」

そう言って不良達は逃げていった。

小十郎
「やれやれ・・・真剣勝負はどこに転がってんだかな」

小十郎は不良達の不甲斐ない戦いに呆れていた。

ガタッ

小十郎
「誰だッ！？」

突然、物音が聞こえ小十郎は音のした方へ怒鳴りつけた。

そこにいたのは・・・・・

璃々
「・・・ふわっ！？」

璃々だった。

小十郎
「（・・・子供？）何をしている？」

璃々
「・・・っ、ひっく・・・」

小十郎
「？」

璃々
「うぅ～～～・・・・・うわぁぁ～～～～んっ！！」

小十郎
「なッ！？」

璃々は小十郎を見た瞬間大泣きしだした。

璃々
「ぐすっ・・・・・ひっく・・・うぅ～～・・・」

小十郎

「お、おい！　何故泣く！？（汗）」

璃々
「びぇ～～～～ん！！」

タッタッタッ

小十郎
「ま、待て！　おい！」

璃々は大泣きしながら走り去っていき小十郎は後を追いかけた。

政宗
「ったく、小十郎の奴何処で時間を潰してんだ？」

小十郎が璃々を追いかけている反対側から政宗がやってきた。

そして……

ドスンッ！

政宗
「おわッ！？」

政宗は何かが当たって来て転けそうになった。

政宗
「っと、何だいきなり？」

璃々
「ぐすっ……ひっく……」

当たってきたのは璃々だった。

政宗
「Ａｈ？　何でこんなところに子供が？　つーか何で泣いてんだ？」

いきなり現れた璃々に政宗は困惑していた。

そこへ……

小十郎
「待て！　小娘！」

政宗
「小十郎！？」

小十郎
「政宗様！？」

璃々を追って小十郎もやってきた。

璃々
「あっ！」

サッ

すると璃々は政宗の後ろに隠れた。

政宗
「……小十郎、コイツはどういう事だ？」

小十郎
「それはこの小十郎が聞きたいものですな。そこの小娘がいきなり泣きだして理由を聞きたかったところです」

政宗
「Ｈｕｍ～……嬢ちゃん、一体何があった？」

政宗はとりあえず璃々に質問してみた。

璃々
「ひっく……あの人……怖い（涙目）」

小十郎
「……は？（汗）」

政宗
「……クッ（笑）」

璃々は小十郎を見ながらそう答えた。

政宗
「Ｈａッ！　お前の強面もなかなかじゃねぇか！」

小十郎
「冗談ではありません！！　政宗様も一緒に説得してくだされ！」

璃々
「うわぁぁ～～～ん！！」

そして政宗と小十郎は璃々の説得に２０分かけた。

～生徒会室～

秀吉
「三成よ、今日もご苦労だった」

三成
「ああ、なんて嬉しき御言葉！」

半兵衛
「相変わらずだね、三成は」

此処は生徒会室。今日も学園の見回りを行い今さっき終わった。
現在、生徒会室にいるのは三人だけだった。

そこへ……

ガチャッ

璃々
「おじゃましま～す！」

璃々が入って来た。

三成
「貴様ッ！　何者だ！？」

璃々

「璃々は“璃々”っていいます♪」

三成
「そんな事はどうでもいい！　此処は秀吉様の」

半兵衛
「まぁ落ち着きなよ、三成」

三成
「半兵衛様！？　しかしッ！」

半兵衛
「とりあえず子供にいきなり怒鳴る事はないと思うよ」

三成
「も、申し訳ありません・・・」

半兵衛
「まぁ気にしないでくれ」

璃々
「じぃ～～・・・」

秀吉
「・・・・我に何かついてるか？」

璃々は秀吉の顔をずっと見ていた。

璃々
「……なんか、お猿さんみたい♪」

三成
「きッ、貴様ーッ！！」

三成は秀吉を侮辱されたと思いキレていた。

しかし、秀吉は……

秀吉
「我はどちらかと言うとゴリラに似ていると言われるぞ」

璃々
「へぇ～、そうなんだ！」

半兵衛
「……それで良いのかい、秀吉？」

この後、璃々は紫苑の事を聞いたが情報は得られなかった。

～廊下～

璃々
「お母さん見つからないな～」

その後、璃々は秀吉達と別れ紫苑を捜していた。
しかし璃々は一向に紫苑を見つけられないでいた。
そして、曲がり角に差し掛かった時……

ドスン！

璃々
「ひゃうッ！？」

バタン！

誰かとぶつかり璃々倒れてしまった。

璃々
「うぅ～～……っ！？」

璃々はお尻を擦りながらぶつかった相手を見た瞬間に言葉を失った。
それもその筈。

ぶつかった相手が……

信長
「……」

信長だったからだ。

璃々
「……ぅぅ～～……（涙目）」

璃々はせっかく泣きやんだのにまた泣きそうになっていた。

信長
「……」

スッ

それに対して信長は泣きそうになっている璃々に臆する様子は見せず、璃々に手を伸ばした。

璃々
「！」

璃々は怖くなり目を瞑った。

しかし……

ポンッ

璃々
「……ほぇ？」

信長
「これで許せ」

信長はしゃがみ、璃々の頭に手を乗せもう一方の手で袋を渡した。

信長
「……フン」

そして信長は去っていった。

璃々
（……こ、怖かったけど、やさしかった）

そんな事を思いながら信長から貰った袋を開けた。

璃々
「わぁ～！　金平糖だぁ！」

璃々は喜びながら歩き始めた。

～校庭～

璃々
「……お母さん、どこにいるの？」

再び校庭に戻ってきた璃々だが、結局紫苑とは会えなかった。

璃々
「お母さん…どこ？　…ひっく（涙目）」

流石に、心配になってきたのか瞳にはうっすらと涙が溜まっていた。

泣くのも時間の問題となってきた時……

ポンッ　ナデナデ

璃々
「？」

いきなり頭を撫でられた。

璃々は撫でられた方へ顔を向けるとそこには……

家康
「お主が璃々ちゃんかい？」

家康がいた。

璃々
「お兄ちゃん、だぁれ？」

家康
「ワシは家康。お主を捜していた」

璃々
「璃々を？」

家康
「ああ、紫苑先生が待っているぞ」

璃々

「お母さんが！？　璃々行く！」

家康
「うむ、ならば付いてきてくれ」

そう言って家康と璃々は紫苑のところに向かっていった。

～校門～

紫苑
「璃々ッ！！」

璃々
「お母さーん！！」

璃々は念願の母親に再会が出来た。

紫苑
「ダメじゃない、璃々。心配かけては」

璃々
「ごめんなさい……」

紫苑
「……わかれば良いのです」

家康
「良かったですね。紫苑先生」

紫苑
「ごめんなさい、家康君。迷惑をお掛けして」

家康
「いえ、困った時はお互い様です」

紫苑
「ほら、璃々も言いなさい」

璃々
「家康お兄ちゃん、ありがとー！」

家康
「アッハハハ！　気にするな、璃々ちゃん」

紫苑
「ホントにありがとうございます」

紫苑は深く頭を下げ感謝した。
家康は笑顔で対応していた。

璃々
「じぃ～～……」

そして璃々は家康の事を見つめていた。

家康
「ん？　ワシに何かついてるか、璃々ちゃん？」

家康は璃々の視線に気付いて璃々に聞いてみた。

璃々
「なんか家康お兄ちゃん、お父さんみたい♪」

家康
「お、お父さんッ！？」

紫苑
「あらあら……」

家康はいきなりの事でビックリしていた。

紫苑
「璃々、余り家康君に迷惑をかけちゃダメよ」

璃々
「家康お兄ちゃん、迷惑だった？」

家康
「いや、少しビックリしたが迷惑ではないぞ」

璃々
「なら、お父さんって呼んでいい？」

家康
「ああ、構わない」

璃々
「わーい！　お父さんだぁー！」

そう言って璃々は家康に抱きついた。

紫苑
「こら、璃々ったら…すいません」

家康
「ワシなら大丈夫です、紫苑先生」

紫苑
「そうですか……」

その後、紫苑親子と家康はそれぞれの家に帰っていった。

その最中紫苑親子は……

紫苑
「璃々」

璃々
「なぁに、お母さん？」

紫苑
「璃々は家康君がお父さんだったら嬉しい？」

璃々
「うん！」

紫苑
「あらあら……なら、頑張ってみるわね」

璃々
「どうしたの、お母さん？」

紫苑
「うふふっ、何でもないわよ」

そんな小さな大冒険は幕を閉じた。

外伝・陸、小さな小さな大冒険！（後書き）

今回はＢＡＳＡＲＡメンバーの絡みが多かったですね。

てか、信長と久秀優しくないかな？

……ま、いっか！　元々キャラ崩壊だし（笑）

次回は番外編で重要なアンケートをします！

この小説の未来がかかっていると言っても過言じゃありません！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

番外編？（前書き）

今回は前書きネタなしで！

さらに話は短いです。

番外編？

無敵（世紀末雑魚憑依）
「ヒャッハー！　元気かー！？　・・・あ、痛い！　ちょっと、石は勘弁して！」

家康
「世紀末殿、何をしておるのだ？」

世紀末
「あ、家康さん！　それに桃香さんに愛紗さん！」

桃香
「やっほー♪」

愛紗
「どうも」

ある日、家康達は作者に“ウチに来てくれ”と言われ、作者の家に呼ばれていた。

家康
「それで世紀末殿、ワシらに何か用事か？」

世紀末
「いやー用事って程ではないんですけど、今後について話しておきたいなーっと思いまして」

愛紗
「今後の事ですか？」

世紀末
「はい。この度……」

桃香
「この度？」

世紀末
「長編“夏休み編”の前にもう一つ長編モノを書く事にしました！」

三人
「……」

世紀末
「・・・あれ？（汗）　此処はもっと“おぉー！”とか“えぇー！？”とか“ヒャッハー！”とか言うところですよ？」

桃香
「えーっと（汗）」

家康
「いや、書くのはわかったが・・・・・」

愛紗
「書くのが決まったなら書けばよろしいのでは？」

世紀末
「うっ・・・・・それはそうなんですが（汗）」

愛紗の言うことは最もである。
しかし、これを言ったのには理由があった。

世紀末

「実は……候補が二つあってどっちを書けばいいか迷っているんですよ」愛紗
「……ハァ」

世紀末
「そこ！　ため息をつかない！」

愛紗
「いや、つきますよ。どれだけ優柔不断なんですか」

世紀末
「……すいません」

桃香
「まぁまぁ愛紗ちゃん」

家康
「仕方あるまい。作者はレンタルショップに行って何を見るかで二時間以上探す程の優柔不断だからな」

世紀末
「いや～、それほどでも～」

愛紗

「褒めておりません！」

世紀末
「す、すいません」

桃香
「あはは……（汗）　それで世紀末さん、一体何と迷っているんですか？」

世紀末
「おっと、そうでしたね！」

そして世紀末は紙を取り出した。

世紀末
「まず一つは“武道大会編”！　これは家康達が自分の武を競い合う長編です！」

家康
「ほぅ……それは面白そうだな！」

世紀末
「ですが、競い合うのは一年生だけです。さらに、自分はバトルモノは苦手ですので上手く書けるかわかりません」

愛紗
「なるほど」

世紀末
「もう一つは“テスト編”です！　これはテストに向けて勉強をしてテストを受ける長編モノです！」

桃香
「うぅ～…テストは苦手だなぁ～（汗）」

世紀末
「此方は完全にギャグですね！　さらにテストの答え合わせは“バカテ●風”にしたいと思います」

家康
「以上の二つか？」

世紀末
「はい！　ちなみに家康さん達はどちらがいいですか？」

家康
「ワシは武道大会がしたいな！」

愛紗
「私も武道大会で自分の武がどれだけ通用するか確かめたいですね」

桃香
「私は・・・戦えないから、ちょっと苦手だけどテストかなぁ～」

世紀末
「なるほど～・・・では此処で読者の皆様にアンケートをしてみましょう！」

家康
「それでは今上がった二つの長編モノのどちらが見たいか感想欄に書いてくれ！」

愛紗
「こんな優柔不断な作者で申し訳ありません。これ以外にもアンケートはありますのでご協力お願いお願いします」

桃香

「最後にこの作品を読んで感想も書いて貰っている読者の皆様には毎回、感謝しています！」

世紀末
「これからも“恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語”を・・・」

一同
「よろしくお願いしまーす！！」

～アンケート～

一つ目、これから入る長編モノはどちらがいいですか？

Ａ、武道大会編

Ｂ、テスト編

二つ目、次回の主役はどちらがいいですか？

A、小十郎

B、大谷

三つ目、“大谷”“秀吉”“武蔵”“蘭丸”“秀秋”のフラグは必要ですか？

A、面白そうだからＹＥＳで！

B、彼らはギャグで頑張って欲しいのでＮＯ！

四つ目、次回の外伝はどちらが良いですか？

A、久秀がとある女性とお出掛けする

B、宗茂が日頃の愚痴をネットに書き込む

C、せっかくだから俺は両方選ぶぜ！

以上です。
アンケートご協力お願いします！

番外編？（後書き）

やっては見たもののやはりキャラと喋るのは良くないですね。

今さら反省しても仕方がないですが……

こういうことは二度としないようにします。すんません

締め切りは明日いっぱいくらいですが、遅れても構いません

それでは、また次回！

第三十六話、彼の隣は……（前書き）

～おまけ～

恋
「……ねね」

音々音
「恋殿？　どうしたのです？」

恋
「……新しい家族……拾った」

利家
「よくわからんが、よろしく頼む」

音々音
「……恋殿、それは犬違いですぞ（汗）」

まつ
「犬千代さま、恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語が始まりまする」

第三十六話、彼の隣は……

～あらすじ～

元親の風邪が治った3日後の休日……

～天下統一～

小十郎
「……」

とある休日の天下統一。
小十郎は珍しく政宗と一緒ではなかった。

一緒にいたのは……

霞
「小十郎は今、ウチと一緒にいたいんや！」

秋蘭
「何を言うかと思えば……私と一緒にいたいに決まっている。なぁ小十郎？」

稟

「寝言は寝てからにしてください。小十郎さんは今私といたいに決まっています」

秋蘭、霞、稟の三人だった。
彼女らは小十郎を取り合い揉めている。

小十郎
「（コイツはとんだ貧乏くじを引いたな）・・・とりあえずテメェら、落ち着いたらどうだ？」

厄介な事になったと思った小十郎はとりあえず彼女らを落ち着かせようとしたが・・・・・

秋蘭
「小十郎・・・すまんが此処は引けんな」

霞
「こないな事で引いたら女が廃れるで！」

稟
「私達にも譲れない戦いがあります」

彼女らは聞く耳など持っていなかった。

小十郎
（どうしろってんだ……）

そんな事を思った小十郎。
何故小十郎達がこんな事になっているのか。

それはある日の昼休みであった……

～回想・１－Ａ～

此処は１－Ａの教室。
現在、昼休みになりある人物が１－Ａの教室の扉を開けた。

ガララッ！

霞
「チィッス！　今日も持ってきたで！」

霞が勢いよく入ってきた。

霞の目的は勿論……

小十郎

「オメェも飽きねーな」

小十郎であった。
霞は毎回小十郎の為にお弁当を持ってくるのが恒例となっていた。

霞
「あったり前やないかい！　ウチは小十郎と一緒にいたいんやから！」

小十郎
「そうか」

前より積極的になっている霞。
しかし、これを快く思わない人達もいた。

秋蘭
「……」

稟
「……」

ゴゴゴゴゴゴッ！

この二人であった。

二人の周りには何か黒い殺気なモノが浮かんでいた。

春蘭
「し、秋蘭？（汗）」

秋蘭
「なんだ、姉者？（怒）」

春蘭
「ど、どうして怒っているのだ？（汗）」

秋蘭
「何の事だ？　私はいつも通りだが（怒）」

春蘭
（嘘だ！　ぜ、絶対に怒ってる！）

風
「稟ちゃんも落ち着いたらどうで……」

稟
「……（ギロッ）」

風
「ぐぅ～」

完全に怒っていた二人。
そんなのはお構いなしに霞がある事を言い出した。

霞
「せや！　小十郎、次の休みにウチと遊ばへん？」

小十郎
「休みに？　生憎、俺は政宗様の……」

華琳
「それなら心配ないわ」

小十郎が断ろうとした瞬間、華琳が現れた。

小十郎
「アン？　どういう事だ？」

華琳
「政宗ならその日、私の家に来る予定だから」

政宗
「Ｈａ？　俺はそんな事聞いて……」

華琳
「春蘭！」

春蘭
「ハァァア！」

政宗
「！」

ガキィィィン！

政宗が答えようとしたら、春蘭が襲ってきた。

政宗
「なにしやがる！？」

華琳
（政宗、合わせなさい）

政宗
（Ａｈ？　どういう事だ？）

華琳
（これは小十郎の為でもあるのよ）

政宗
（……そういう事か）

小十郎
「政宗様？」

政宗
「ああ、何でもねぇぜ。確かに華琳の家に行く予定があっから小十

郎は自由にしな」

小十郎
「……はっ」

霞
「ならえぇよな！？」

小十郎
「まぁそういう事だ」

霞
「うし！」

小十郎の暇が出来て休みの日に遊ぶ事になった小十郎と霞。

しかし、そこへ……

秋蘭
「それは私達も参加しても構わないか？」

稟
「……」

秋蘭と稟がやってきた。

霞
「むッ！？」

小十郎
「秋蘭？　それに稟も・・・俺は別に構わねえが、霞は？」

霞
「・・・・・・ウチもかまへんよ」

秋蘭
「そうか・・・感謝する」

稟
「ありがとうございます」

と、言ったが内心は・・・・・

霞
（まさかウチと同じ感情を持っとる奴がおったとは・・・・・負けられへん！）

秋蘭
（そう易々と小十郎は渡さん！）

稟
（ふふっ・・・もはや貴女たちは、私の掌で踊るのみ）

小十郎は渡さない気持ちだった。

～回想終了～

という感じで休日は皆と一緒に過ご事になって天下統一に遊びにきた一行。
しかし先ほどから彼女らが一向に小十郎の隣を譲らない為、全然進んでいなかった。

稟
「しかし、いつまでもこんな感じでは話が進みませんね」

秋蘭
「ならば稟、諦めたらどうだ？」

稟
「まさか・・・それは出来ません」

霞
「こうなったらゲームで勝負や！」

秋蘭
「ほぅ・・・私は構わないぞ」

いい加減キリがない口論に霞が提案を出した。

稟
「ならば一度ゲームセンターに行きましょう」

霞
「絶対負けへん！」

そして秋蘭達は天下統一の中に入っていった。

小十郎
「……ったく、仕方ねぇ奴らだ」

そう言いながら小十郎は秋蘭達の後を追った。

～ゲームセンター～

秋蘭
「ルールはどうする？」

稟
「では最初に三本、勝利した人が小十郎さんと一緒に回れる事にしましょう」

霞
「よっしゃ！　負けへんで！」

その後行われた勝負は壮絶な物を極めた。
レースゲーム、クイズゲームでは同着一位。
ＵＦＯキャッチャーでは賞品がなくなり店員が泣きながら「勘弁してください（泣）」と言ってきた。
さらにリズムゲームでは全員フルコンボを決めるなど中々決着が決まらないでいた。

そしてその壮絶な戦いに勝利したのは……

～天下統一・レストラン～

小十郎
「オメェ、ゲーム得意なのか？」

稟
「そんな事はありませんけど……」

意外にも稟だった。
勝負に勝った稟はとりあえず食事をするためにレストランに来た。
その後ろでは霞と秋蘭が恨めしそうな目でこっちを見ていた。

小十郎
「とりあえず、どこに行くんだ？」

稟
「まぁ落ち着いてください。まだ料理が来てませんからそれからでも遅くはないですよ」

小十郎
「…確かにな」

そう言って料理を待つことにした小十郎と稟。
しばらくして料理が届いた。

小十郎
「……なぁ」

稟
「な、何ですか？／／／」

小十郎
「コイツは一体どういう事だ？」

しかし、その料理に問題があった。

その料理は……

“特大ラブラブチョコレートパフェ～そして、トシ子は今？～”

小十郎
「デケぇな・・・つか、トシ子ってなんだ?」

稟
「ま、まぁとりあえず食べましょう／／／」

小十郎は目の前のバカデカいパプェにツッコミを入れた。
しかし稟は気にせずに食べようと言ったがその顔は赤かった。
それを後ろで見ていた秋蘭と霞は・・・・・

霞
「な、なんやねんアレ?（汗）」

秋蘭
「知らないのか?　あれはカップル限定の特大パプェだぞ」

霞
「カップル限定やて!?」

秋蘭
「ああ」

霞
「な、なんて羨ましいんや・・・・・」

などと稟の行動を羨ましがっていた。

そして食べ終わり小十郎と稟は映画館やショッピングモールなど、様々なところを回った。
しばらくして辺りが暗くなり帰る事にした小十郎と稟（ついでに秋蘭と霞）。

稟
「今日はありがとうございます」

小十郎
「気にするな。こっちも随分と楽しめたからな」

稟
「それなら良かったです」

小十郎
「帰りはどうする？　なんなら送ってやるが？」

稟
「あ、それは大丈夫です。私の寮は近いですし、秋蘭さん達と同じ方向ですから」

小十郎
「そうか。なら、俺は此処で失礼するぜ」

小十郎は帰る方向に体を向け歩き始めた。

すると……

稟
「あ、あの！／／／」

小十郎
「ん？」

稟が呼び止め小十郎は足を止めた。

小十郎
「どうした？」

稟
「さ、最後に聞きたい事があるのですが／／／」

小十郎
「聞きたい事？」

稟
「わ・・・私の事、どう思いますか？／／／」

稟は顔を真っ赤にしながら小十郎に質問した。

小十郎
「・・・・・・・・そんなの決まってるだろ」

稟
「え？／／／」

小十郎
「俺にとって‥」

稟
「ま、まさか／／／」

小十郎
「オメェは‥」

稟
「‥‥‥／／／（ドキドキ）」

小十郎
「大事な‥」

稟
「も、もうダメです！／／／」

小十郎
「ん？」

稟
「‥‥‥ブハァ！／／／」

小十郎
「なッ！？」

小十郎は答えようとしたが突如、稟が壮大に鼻血を放出した。

小十郎
「おい！　しっかりしやがれ！」

稟
「フガフガ……／／／」

そのやりとりを見ていた秋蘭と霞は……

霞
「あ、危なかったで～」

秋蘭
「やはりこうなったか……」

霞
「……もしかして、知っとった？」

秋蘭
「フッ……さぁな」

霞
「……（汗）」

こうして小十郎達の休日は過ぎていった。

稟
「フガフガ／／／」

小十郎
「しっかりしろ！　おい！」

未だ妄想の世界にいる稟を置いて……

第三十六話、彼の隣は……（後書き）

今回は小十郎の主役にしてみました！

もう少し詳しく書きたいですね～……すんません（泣）

大谷の話はまた別の機会で載せたいと思います。

次回はアンケート結果による長編モノの始まりを書きたいと思います！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～開幕の余興～（前書き）

お市
「じぃ～……」

幸村
「ん？　どうされた、お市殿？」

お市
「……マスター？」

幸村
「……貴殿は違うぞ？（汗）」

美以
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるにゃ！」

～開幕の余興～

～あらすじ～

小十郎の休日が過ぎた翌日……

～昼休み・１－Ｂ～

家康
「新生ＢＡＳＡＲＡ大会？」

元親
「なんだそれは？」

昼休み、１－Ｂのクラスでは皆で食事をしていたら桃香が気になる事を言ってきた。

桃香
「そういえば知らない人達もいるんだった。新生ＢＡＳＡＲＡ大会はこの学園の恒例行事だよ♪」

愛紗
「テスト期間が終わって二週間後に開催される新入生の武闘大会です」

新生ＢＡＳＡＲＡ大会……それは毎年行われる新入生の武の頂点を決める大会。

家康
「おお！　なんとスゴい大会だ！」

元親
「武の頂点か……男なら一度なってみたいもんだ！」

それを聞いた家康と元親は心を躍らせた。

家康
「みんなも参加するのか？」

家康は皆に参加するのか聞いた。

愛紗
「はい。私も自分の武を試すいい機会ですから」

桃香
「あはは～……私は弱いから参加はしないなぁ」

朱里

「わ、私もです（汗）」

星
「私は参加するぞ。まぁやるからには優勝を目指すとしますかな」

翠
「アタシもやるぜ！」

焔耶
「私も参加します！」

風魔
『参加』

元親
「あったり前よ！」

大体の者が参加を決めている。

家康
（……武の頂点か。ならば負ける訳にはいかんな！）

愛紗
「家康殿も？」

家康
「ああ！　ワシもやるからには優勝を目指す！」

家康も参加を決めた。

その頃、他のクラスでは……

～1－A～

政宗
「新生ＢＡＳＡＲＡ大会？　何だそれは？」

政宗も大会の事は知らない様子だった。

華琳
「あら、知らないの？」

政宗
「ああ」

風
「要は一年生の中で誰が一番強いか決める大会ですー」

政宗
「……ソイツはかなり面白そーじゃねぇか」

華琳
「なら参加するの？」

政宗
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ」

華琳
「そう……アナタ達はどうするの？」

そう言って華琳は皆に聞いた。

春蘭
「もちろんですとも華琳さま！　そして必ずや優勝してみせます！」

秋蘭
「姉者は可愛いなぁ～……私も参加します」

桂花
「クッ……これぱかりは春蘭に譲らなければならないわね」

稟
「私も無理ですね」

風
「ぐぅ～」

稟
「寝るな！」

風

「おぉ！　風も参加しないのでついつい寝てしまいましたー」

真桜
「ウチもやめとくわ」

沙和
「沙和も～」

凪
「私は参加します」

政宗
「華琳、オメェはどうなんだ？」

華琳
「私は参加しないわ。観戦の方が面白そうだからね」

政宗
「Ｈｕｍ～……小十郎、お前はどうする？」

小十郎
「はっ、参加します。この機会に政宗様の実力を知るのもまたアリかと」

政宗
「上等だッ！」

此方でも大体の参加者が決まっていた。

その中、で政宗は……

政宗
（ようやく楽しめる機会が来たな……俺を熱くされろよ）

この大会に心を躍らせていた。

～１－Ｃ～

幸村
「うおォォォオ！！　滾る魂ッ！！！」

１－Ｃのクラスでは幸村が大会の事を聞いた後、吠えていた。

佐助
「あ～あ、まーた熱くなっちゃって……」

蓮華
「相変わらずね、幸村は……」

佐助
「まぁ旦那は参加するとして、みんなはどうすんの？」

蓮華

「私も参加してみようと思うわ」

思春
「蓮華様と同じだ」

穏
「私は遠慮しときます～」

天和
「私も無理だなぁ」

明命
「私は頑張って参加します！」

亞莎
「わ、私は遠慮します」

佐助
「なるほどねぇ」

蓮華
「佐助、アナタは？」

佐助
「俺様は……」

幸村
「何を言っている！」

佐助

「まだ何も言ってないよ！？」

幸村
「そのような気持ちでこのクラスの将が務まると思っているのか！？」

佐助
「いやいやいや、将とかないからね！」

幸村
「見ていてくだされお館様！　どうかこの幸村と佐助の活躍を！」

佐助
「人の話しを聞けェェェ！！！」

蓮華
「……ホント相変わらずね（汗）」

思春
「あれは一生治りません」

幸村が一段と燃えていた１－Ｃ。

一方の１－Ｄでは……

～１－Ｄ～

霞
「よっしゃあ！　燃えてきたで！」

此方も幸村程ではないがかなり燃えている霞の姿があった。

三成
「……」

月
「嬉しそうですね、霞さん」

霞
「あったり前や！　やっとウチの力を証明できる場所ができたんや！」

詠
「はいはい、わかったからいちいち大声ださないでよ」

大谷
「相も変わらず元気なことよ。ところで主らは出場するのか？」

白蓮
「やめとくよ。流石に早死にしたくないからな」

七乃
「私もお嬢さまの世話がありますし♪」

華雄

「私は出るぞ！　これもいい経験となるはずだ！」

恋
「……出る」

詠
「そういう大谷はどうなのよ？」

大谷
「我か？　我は参加せん」

霞
「誰が出てもウチが優勝したる！」

そう言って霞は意気込んだが……

三成
「そんなモノ認可しない」

今まで沈黙を保ってきた三成が喋り出した。

霞
「なんやてッ！　どうゆう事や！？」

三成
「同じ事を言わすな。貴様の優勝などあり得ない」

月
「み、みっちゃん（汗）」

霞
「そんなんまだわからへんやろ！（怒）」

詠
「し、霞も落ち着きなさいよ（汗）」

三成
「……フン」

そして三成は教室を出ていった。

霞
「なんやねんアイツ！」

白蓮
「まぁまぁ」

七乃
「でも今日の三成さん、雰囲気が違いましたよね？」

恋
「……いつもと違う」

教室を出た三成の様子がおかしいと思った一同。

そこへ大谷が……

大谷
「三成もまた譲れないのだ」

と、言った。

霞
「？　何がや？」

大谷
「月、詠、去年の優勝者は誰か覚えておるか？」

詠
「去年の？　確か……」

月
「秀吉先輩ですよね？」

大谷
「その通り。故に三成は優勝を意識しとる」

霞
「ふぅ～ん……でもやるからには勝ちに行くで！」

大谷が三成の心境を察し説明をしたが霞にとっては関係のない事であった。

そして教室を出ていった三成は……

三成
（秀吉様……私は必ず優勝してみせます）

大谷が察した通り秀吉の事を意識していた。

三成
「私の邪魔をする者は…全て斬滅するッ！！！」

そう言い残して三成は何処かに去っていった。

そして大会当日……

～天下大武闘館・会場～

恋ＢＡＲＡ学園から少し離れた場所にある多目的ホール。
別名“天下大武闘館”
此処では毎年、新生ＢＡＳＡＲＡ大会が行われている。
恒例行事とあって学生達は此処に集合させられる。

また一般客も入場可能な為毎年満席になる。

地和
「皆さん！　大変長らくお待たせしました！」

蒲公英
「これより！　毎年恒例、新生ＢＡＳＡＲＡ大会を始めたいと思います！」

観客
「「「「ワアァァァァァァア！！！」」」」

地和
「実況は元・数え☆役満姉妹の地和と」

蒲公英
「ここにいるぞ！　で、お馴染みの蒲公英が務めます！」

観客
「「「「「ワアァァァァァァア！！！」」」」」

地和
「まずは、校長からの挨拶！」

信長
「……」

コツッコツッコツッ

実況の紹介により信長が現れ、舞台の真ん中まで歩いた。
そして舞台上に立ち挨拶を述べた。

信長
「余はただ……強き者を欲するのみぞ」

カチャッ

信長は銃を天に向け……

バァアン！！

発射した。

観客
「「「「ワアァァァァアア！！！」」」」

信長
「これより新生ＢＡＳＡＲＡ大会を始めようぞ」

そう言って信長は舞台を後にした。

地和
「意味がわからないのに心を熱くさせる挨拶、ありがとうございました！」

蒲公英
「さぁ次は、選手の入場です！」

観客
「「「「ワアァァァァァア！！！」」」」

こうして新生ＢＡＳＡＲＡ大会は開幕された。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～開幕の余興～（後書き）

という事で今回から武道大会編が始まります！

前にも言いましたが自分はバトル展開が苦手なのでご了承ください（泣）

次回は選手紹介とルール説明ですです！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～選手紹介、規則説明～

～あらすじ～

新生ＢＡＳＡＲＡ大会、開幕！

～天下大武闘館・舞台～

蒲公英
「さぁ次は、選手の入場です！」

観客
「「「「ワアァァァァァア！！！」」」」

地和
「最初に入場したのは腰に六本の刀を差した蒼き竜！　六爪流で構えるその姿は正に“独眼竜”！　伊達　政宗！！」

政宗
「独眼竜、伊達　政宗……推して参る」

蒲公英
「その独眼竜が唯一背中を預けられる男、“竜の右目”！　彼の為なら右目を抉る覚悟！　片倉　小十郎も登場だぁ！」

小十郎

「テメェの右目に刻み込みな！」

地和
「続いての入場は頭の構造は５０％は華琳さま、４０％は闘う事、その他が１０％で出来ている猛者！　夏候　春蘭！」

蒲公英
「その姉を陰から支える実力者！　クールな視線で女の子もメロメロ！？　夏候　秋蘭！　姉妹揃っての入場です！」

春蘭
「我が剣の錆にしてくれる！」

秋蘭
「その前にツッコまないのか？」

蒲公英
「気にせず進めまーす。負った傷は数知れず、全ては己の為に！でも最近乙女になってきた楽　凪！」

凪
（乙女……／／／）

地和
「無敵！　無敵！　絶対無敵！　その名も直江（なおえ）　兼続（かねつぐ）！　無敵の登場！」

直江
「俺は無敵の主人公！」

政宗
（アイツ名前あったのか！？）

蒲公英
「どんどん行きましょう！　強くなる為に武器を捨てた！　そして絆を大切にした！　彼を表すなら“陽”！　徳川　家康の入場です！」

家康
「絆はみんなのモノだ！」

地和
「荒くれ者共を束ねてる兄貴！　その男気にみんなが憧れ！　鬼神、長曾我部　元親！」

元親
「鬼ヶ島の鬼ってなーこの俺よ！　長曾我部　元親よ！」

地和
「キャー！　チカにぃ愛してる！」

思春
「オイ！　実況が私情を持ち込むな！」

恋
「……ズルい」

地和
「いいじゃない！　最近チカにぃと会っていなかったんだから！」

蒲公英
「此方では喧嘩が起きていますが気にしません！　続いては忠実にして堅物！　決めた事は成し遂げるまで努力する“美髪公”！　関愛紗！」

愛紗
「堅物で悪かったな」

蒲公英
「失禁馬趙ここにあり！　未だにお漏らしに悩んでいる我が姉、馬翠の入場です！」

翠
「蒲公英！／／／　後で覚えてろよ！／／／（怒）」

地和
「続いては、その棍棒から降り出される力は計り知れない！　彼女もまた乙女系、魏　焔耶！」

焔耶
「我に勝てる者はおるかぁー！」

蒲公英
「ここにいるぞー！　さて、次の入場は槍裁きならお手の物！　またの名を“常山の趙子龍”！　趙　星です！」

星
「フッ……燃えますな」

地和

「一陣の風が吹く時、彼の姿あり！　伝説の“風の悪魔”！　風魔小太郎！」

風魔
「……」

蒲公英
「類を見ない熱血漢！　彼に近付くと火傷するぜ！　真田　幸村、見参！」

幸村
「熱き魂ッ！　この胸にありィィィ！！」

地和
「そんな熱血漢に雇われた苦労人！　その冷たい目はどうにかならないのか！？　猿飛　佐助の入場だぁ！」

佐助
「いやーこれ、生まれつきだからねぇ……」

蒲公英
「前回の大会で三位に入賞した孫　雪蓮の妹、孫　蓮華の入場！全ては孫家の誇りの為に！」

蓮華
「負けられない！　孫家の為にも！」

地和
「鈴の音が聞こえたら最後！　お前はもう死んでいる！　“鈴の甘寧”！　甘　思春！」

思春
「死の音色、聞かせてやろう」

蒲公英
「闇に潜む必殺処刑人！　しかし、その実態は猫が大好き周　明命！」

明命
「頑張ります！」

地和
「続いては前回の優勝者、豊臣　秀吉の左腕！　彼に斬られた傷は二度と治らないかも！？　“凶王三成”こと石田　三成ィ！」

三成
「私こそ、秀吉様の左腕に相応しい！」

蒲公英
「そのマイペースな性格とは裏腹に、とある不良チームを一瞬で潰した噂がある“飛将軍”！　呂　恋！」

恋
「……ん」

地和
「常に強さを求めた！　そして自分が一番と証明する為！“神速”張　霞、出陣！」

霞

「ウチの力、証明したる！」

蒲公英
「そして最後は元教師と言う異例の経歴を持つ生徒！　しかし武の誇りは未だ衰えない。華雄！」

華雄
「全て薙ぎ倒してくれる！」

地和
「以上、二十二名の選手が武の頂点を競い合って頂きます！」

蒲公英
「ルールは此方！」

～ルール～

・勝敗は相手が降参、又は気絶したら負けとみなす。

・場外に出た、武器が壊れた場合も、是、負けとみなす。

・相手を騙す、不意打ちをする、是、武略として許可をする。

・それ以外に質問がある場合、是、事務室に聞く。

蒲公英
「ルールは以上です！　解説には天下統一のオーナー、貂蝉さんに

恋ＢＡＲＡ学園の理事長、卑弥呼さんです！」

貂蝉
「よろしくねぇん♪」

卑弥呼
「うむ、久々に骨のある者達が集ったか！」

地和
「それでは早速、第一試合を始めたいと思います！」

観客
「「「「ワアァァァァァア！！！」」」」

そして選手が二名、舞台に立った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～選手紹介、規則説明～（後書き）

前の後書きにはトーナメント発表と言いましたがやっぱり誰が闘うのか楽しみして頂く為に無しにしました。

あと、この武道大会編は前書きネタも無しでよろしくお願いします。

次回は第一試合、第二試合を載せたいと思います！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～武弟一途・仁義錦槍～

～あらすじ～

選手紹介とルール説明が終わり第一試合が開始される。

～天下大武闘館・会場～

地和
「それでは第一試合を始めたいと思います。第一試合！　闘う乙女、楽　凪！」

凪
「行きます！」

真桜
「凪ー！　頑張りやー！」

沙和
「頑張るのー！」

蒲公英
「それに対するは脳筋乙女！　魏　焔耶！」

焔耶
「脳筋ではない！」

桔梗
「焔耶！　やるからには勝ってみせよ！」

地和
「この二人の想い人は一緒！　いきなり因縁の対決かぁ！？」

貂蝉
「なるほどねぇん・・・あの子達からビンビンと漢女センターが反応してるわぁん♪」

卑弥呼
「恋した乙女は何倍にも強さを増す。ゆえにどちらかの想いの強さが勝敗を決める」

地和
「それでは、卑弥呼さん！　開始の合図をお願いします！」

卑弥呼
「うむ。ＢＡＳＡＲＡファイト！　レディーー！・・・ゴー！」

カアァァン！

試合、開始！

焔耶
「先手を取らせて貰おう！」

凪
「ッ！」

焔耶
「おらァァァァァァ！！」

ブォン！

凪
「クッ！」

ヒュッ　ドガァァアン！

開始早々、焔耶は鈍砕骨を振り下ろして凪に攻撃をした。
凪は辛うじて避け、焔耶の攻撃は空振りした。
しかし凪のいた位置は抉れ、焔耶の力を物語っていた。

焔耶
「チッ！」

凪
「今度は私の番です！」

ザッ！

凪は強く踏み込み……

凪
「ハァア！」

バシュウゥゥゥゥン！

拳を放ち、その拳には氣を纏っていた。

焔耶
「！？」

ガキンッ！　ズサァァァ！

焔耶はその攻撃に驚いたがどうにか防御をした。
しかし、勢いまでは殺せずに押されてしまった。

焔耶
「その技は……天道突き！？」

凪が放った技は家康が得意とする“天道突き”であった。
家康との修行の末に習得した。

焔耶
「クッ…勝手にお館の技を！」

凪
「勝手ではありません。師匠から受け継いだ技です！」

焔耶
「……ならば私も行くぞ！」

バッ！

焔耶は高く飛び……

焔耶
「どっせぇぇぇい！」

ブォン！

振り下ろした。

凪
「そう何度も同じ技は通用しない！」

凪は紙一重で避け、反撃のタイミングを覗っていた。
しかし……

ドカァン！　バキバキバキィィィ！

凪
「なッ！？　クッ！」

ガキンッ！

焔耶の攻撃は先程と同じように抉れたが、周りの地面が盛り上がった。
凪は防御をして後退りした。

凪
「こ、この技は……（汗）」

焔耶
「何もお館から受け継いだのは貴様だけではない！」

焔耶の攻撃は家康の技“陽岩割り”であった
焔耶もまた家康から受け継いでいたのだ。

凪
「……やはり貴方とは気が合いませんね」

焔耶
「そんな事、今に始まった事ではない」

凪
「故にこの勝負……」

焔耶
「貴様だけには……」

二人
「負けられません！」
「負ける訳にはいかない！」

ダッ！

そう言って二人は駆け出した。

焔耶
「でぇぇぇやぁぁぁぁ！！」

ブォン！

鈍砕骨を横一閃に薙ぎ払った。

凪

「！　フッ！」

バッ！

凪は避ける為にジャンプをした。

焔耶

「貰ったァア！」

焔耶は凪目掛けて再び振り上げた。

しかし……

凪

「……ハ！」

シュン

焔耶
「何だと！？」

しかしそれは空振りに終わり凪の姿が無くなっていた。

焔耶
「クッ…．何処だッ！　何処にいる！」

凪
「此処だぁ！」

焔耶
「なにッ！？」

焔耶が辺りを探していたが凪は焔耶の懐から姿を現した。

そして……

凪
「ハァア！」

ボゴォン！！

焔耶
「ガハァ！」

ドサッ

凪は焔耶の腹に氣弾を放つ。
モロに喰らった焔耶はそのまま倒れてしまった。

蒲公英
「おぉーっと此処で焔耶選手、倒れたぁ！　よってこの勝負、凪選手の勝利です！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

貂蟬
「凪ちゃん、やるわねぇん」

卑弥呼
「相手の攻撃をギリギリまで誘い込み、上に氣を少し爆発させ一瞬に相手の懐に入り込む・・・楽　凪、あっぱれよ」

真桜
「よっしゃー！　凪、ナイスや！」

沙和
「やったのー！」

焔耶
「ゴホッゴホッ……」

桔梗
「全く焔耶の奴め……よっと」

桔梗は焔耶を担ぎ上げ、医務室と連れて行った。

地和
「さぁーて、次の試合にいきましょう！　第二試合、東からは“錦馬超”！　馬　翠！」

翠
「やってやるぜー！」

蒲公英
「お姉ちゃん頑張れー！」

地和
「西からは“竜の右目”！　片倉　小十郎！」

小十郎
「真剣勝負…楽しいもうじゃねぇか」

稟
「小十郎さん……頑張ってください」

蒲公英
「なお、舞台上の整備は園丁†無双の皆さんに協力して貰ってまーす！」

園丁†無双
「「「「せいや！　せいや！　せいや！　せいや！」」」」

卑弥呼
「それでは第二試合、レディー、ゴォー！」

カアァァン！

第二試合、開始！

翠
「タァア！」

小十郎
「ウォリヤ！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

試合の鐘が鳴り二人はお互いの武器の打ち合いが始まった。

ガキィン！　ギギギッ！

小十郎
「ほぅ……大した腕だな」

翠
「そういうアンタもな！」

両者の武器から火花が飛ぶ中、二人はお互いの腕を認め合った。
そして一旦距離を置いた両者。

翠
「うっしゃおらぁぁぁぁあ！」

小十郎
「クッ……」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

そして翠は一気に距離を詰め、小十郎に猛攻撃をし、小十郎は防戦一方であった。

翠
「まだまだだぁぁぁ！！」

小十郎
「……」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

政宗
「小十郎の勝ちだ」

桂花
「はぁ？　どう見たってあのヤクザの方が押されているじゃない！」

華琳
「ふふっ……まぁ見てなさい。桂花」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

翠
「さっきの勢いはどうした！？」

小十郎
「……」

翠
「そんなら……もう決めさせて貰うぜ！」

翠は決着をつける為、銀閃を大きく振りかぶった。

だが……

小十郎
「今だッ！！　穿月ッ！」

ピギャアァァァン！

この機会を待っていた小十郎は鋭い突きを放った。

翠
「なッ！？　……グハァァア！！」

翠は銀閃を振りかぶっていた為防御する事ができず、喰らう。

ズサァァッ！

そのまま翠は気絶した。

地和
「試合終了ッ！　勝者、小十郎選手！」

ワァァァアア！！！

貂蝉
「なぁんて美しい剣技なんでしょ～……思わず見惚れてしまったわぁん」

卑弥呼
「馬　翠の攻撃を耐え抜いて機会を狙ったか……並大抵で出来る事ではないわ」

政宗
「これが小十郎のｓｔｙｌｅだ」

桂花
「……（汗）」

華琳
（小十郎……やはり政宗と一緒に欲しいわね）

蒲公英
「風魔さぁーん！　お姉ちゃんをお願いしまーす！」

風魔

『承知』

シュン

そう言って風魔は翠を連れて消えた。

地和

「それでは第三試合を始めたいと思います！」

ワァァァアア！！！

こうして次の試合が始まるのであった。

～？？？～

直江

「無敵なのに……やら…れ……た……ガクッ」

？？？

「此処が次の大会か……」

そう言って直江を倒した男は天下大武闘館へと入っていった。

To be continued.....

～武弟一途・仁義錦槍～　（後書き）

凪ｖｓ焔耶、翠ｖｓ小十郎の対決でした。

うまく書けたかすごく心配です（汗）

そして無敵がやられ、謎の男が乱入してきました！

はっきり言います！　ギャグ成分です！

果たして誰なのか、お楽しみに！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～忠実堅将・猪竜独眼～

～あらすじ～

凪、小十郎……勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「さぁ第三試合を開始します！　東からは“美髪公”！　関愛紗！」

愛紗
「我が青竜刀に断てぬ物なし！」

桃香
「愛紗ちゃーん！　頑張ってー！」

鈴々
「やっつけちゃえー！　なのだ！」

地和
「西からは“鈴の甘寧”！　甘思春！」

思春
「……」

蓮華
「頑張ってね。思春」

蒲公英
「お互いに忠実にして堅将！　これはどちらも譲れない闘いだぁ！」

卑弥呼
「これも良き闘い……レディー、ゴォー！」

カアァァン！

第三試合、開始！

愛紗
「……」

思春
「……」

試合の鐘が鳴ったが両者一歩も動かない様子。

蒲公英
「試合が開始されても両者はお互いの力量を伺っているのか全く動きません！」

地和
「というか闘わないと実況が出来ないじゃない！」

貂蝉
「しょうがないわぁん。此処にも気迫がビリビリと伝わってくるもの」

卑弥呼
「動かないのではなく“動けない”・・・この勝負、そう長くはない」

貂蝉
「そうねぇん。わたし的には二人に勝利して欲しいけど・・・無理な話よねぇん」

卑弥呼
「勝負とは非情なり！　一方が勝てば、もう一方は敗者の席に着かねばならんのは必定。ゆけぇ！　凛々しく気高き乙女達よ！」

卑弥呼はカッと見開いて舞台を見た。

愛紗
「ハアァァァァァア！！」

ブォンブォン！

卑弥呼の声を皮切りに愛紗が猛撃を始めた。

堅将同士の熱き闘いが始まった。

そう思ったのも束の間……

思春

「それを……待っていたぁぁあーーー！」

チリーン

思春

「美髪公！　鈴の音と共に黄泉路へ先導仕る！」

シュウン！

思春はその猛撃を紙一重で避け、愛紗の喉元目掛け鈴音を繰り出した。

愛紗

「！？　何のッ！」

ガキィン！

思春
「なッ！？」

愛紗
「でぇぇぇぇやぁぁぁあ！！」

ブォン！　ピタッ

だが、愛紗はその攻撃を間一髪で防御し、すぐさま青龍偃月刀を思春と同じように喉元を狙い寸止めで止めた。

愛紗
「……私の勝ちだ」

思春
「……ああ、負けを認めよう」

地和
「なんという事でしょう！　一瞬とも言える勝負に勝利したのは愛紗選手！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

貂蝉
「流石ねぇ。思春ちゃんの攻撃も悪くなかったわ」

卑弥呼
「うむ。普通ならば勝っていたのは甘よ」

貂蝉
「しかぁし相手は堅将にして猛将……相手は悪かったわねぇん」

卑弥呼
「これもまた、勝負の世界よ」

桃香
「スゴい！　スゴいよ愛紗ちゃん！」

鈴々
「やったのだ！」

思春
「見事であった。愛紗よ」

愛紗
「思春もだ。正直、あの攻撃には冷や汗をかいたぞ」

思春
「勝たなければ意味がない……この後も頑張ってくれ」

愛紗
「ああ、心得た」

蒲公英
「さぁ舞台上では友情ドラマが繰り広げられていますが次が詰まっているので退いて貰ってもいいですかー？」

思春
「だ、そうだ」

愛紗
「わかりました」

そう言って愛紗と思春は舞台上を後にした。

蒲公英
「では次の試合に行きましょう！　東からは“曹魏の大剣”！　夏候春蘭！」

春蘭
「剣の錆にしてくれる！」

地和
「対するは“独眼竜”！　伊達政宗！」

政宗
「ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅだ！」

蒲公英
「此処は同じクラスでやや被りな独眼対決になりました！」

華琳
「どちらを応援すれば良いのかしら？」

秋蘭
「私は姉者を応援させて貰います」

桂花
「春蘭！　そんな男すぐに片付けちゃいなさい！」

風
「風はお兄さんを応援しまーす」

流琉
「政宗様ー頑張ってくださーい！」

貂蝉
「これも面白い闘いになりそうねぇ」

卑弥呼
「楽しみよ……レディー、ゴォー！」

カァァァン！

第四試合、開始！

春蘭
「行くぞォォォォ！」

政宗
「Ｃｏｍｅ　ｏｎ！」

ガキィィィン！　ギギギッ！

激しい打ち合いで始まった第四試合。
両者一歩も引かない攻防。

春蘭
「でぇぇぇぇい！」

政宗
「ハアァァア！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

春蘭
「まだまだァァァア！」

政宗
「チッ！」

春蘭の猛撃に政宗は少し押され気味であった。

華琳

「力勝負なら春蘭が優勢のようね」

小十郎
「ああ……だが」

華琳
「わかっているわ。政宗が本気ではない事くらいね」

ガキィン！　ギギギッ！

春蘭
「先ほどの勢いはどうした！？　よもや怖じ気づいたのではあるまいな！？」

政宗
「勘違いすんじゃねぇ！　ｐａｒｔｙは始まったばかりだぜ！」

ギギギッ！　ガキィン！

春蘭
「クッ！」

政宗は春蘭を押し返した

政宗
「オイ！　俺を倒したければ本気で来な！」

春蘭
「・・・よかろう！　ならば我が渾身の一撃を受けてみよ！」

ゴゴゴゴゴゴッ！

そう言うと春蘭は七星餓狼に氣を溜め始めた。

政宗
「Ｈａッ！　そうでなければ面白くねェ！」

ゴゴゴゴゴゴッ！

対する政宗も氣を溜め始め、周りには電撃が走っていた。

そして・・・・・

春蘭
「七星餓狼！　闘神圧砕！」

政宗
「ＴＥＳＴＡＭＥＮＴッ！！」

ガキャァァアン！！

お互いに渾身の一撃を振り下ろした。
辺りに砂埃が蔓延していた。

桂花
「ゴホッゴホッ……もう何なのよ！」

秋蘭
「それより勝敗は！？」

華琳
「……」

やがて砂埃が消え舞台が見えた。

春蘭
「……」

政宗
「……」

両者共に振り下ろした状態でおり、端から見れば決着はついていな

いように見えた。
しかし、決着はついていた。

春蘭
「……グハァ！」

ドサッ

政宗
「……アンタの本気、中々だったぜ」

ヒュッ　チャキン

春蘭が倒れ政宗は景秀をしまった。

蒲公英
「……ハ！　勝者、政宗選手！」

ワァァァアア！！！

蒲公英の判断と共に歓声が湧いた。

風
「お見事ですお兄さん」

流琉
「スゴいです！」

貂蝉
「あらやだぁ、カッコいいじゃない」

卑弥呼
「見事なオノコじゃな。剣筋ならば既に一流の域を超えておるわ」

秋蘭
「姉者ッ！」

秋蘭は春蘭に駆け寄ろうとした。

だが……

小十郎
「待ちな」

それを小十郎が秋蘭の肩を掴み、止めた。

秋蘭

「何故止めるッ!?」

小十郎
「よく見てみな」

そう言って小十郎は舞台に目をやる。

同じく秋蘭も舞台を見ると……

春蘭
「うぅ……」

政宗
「よっと」

ヒョイッ

政宗が春蘭を担いでいた。

政宗
「さて……医務室はどっちだ?」

そしてそのまま政宗は舞台上を後にした。

秋蘭
「……」

小十郎
「これでわかったろ？　行くなら自分の試合が終わってからにしな」

秋蘭
「……フッ、そうさせて貰うよ」

秋蘭が落ち着きを取り戻し、次の試合の準備が行われた。

地和
「それでは次の試合に移ります！　東から入場するのは絆の陽！徳川家康！」

家康
「やるからには全力で行くぞ！」

桃香
「家康くぅーん！　頑張ってねー！」

朱里・雛里
「「が、頑張ってくだしゃい！！」」

蒲公英

「そんな家康選手の対戦相手は、絶対無敵の……あれ？」

蒲公英は舞台上に直江がいない事に気付く。

蒲公英
「無敵さぁーん？　いらっしゃいますかー？」

地和
「いないと家康選手の不戦勝になっちゃいますよー？」

蒲公英と地和が声を掛ける。
しかし一向に直江は姿を見せなかった。

蒲公英
「……えぇーっと、無敵選手が現れないのでこの勝負は家康選手の不戦……」

？？？
「そんな事はさせないぞッ！！」

家康
「！？」

地和
「うわッ！　な、何？！」

蒲公英が家康の不戦勝にさせようとしたら突如、入場口から声がした。
会場の全員が入場口に見る。
すると……
???
「ふ～ふっふっふ、ふんふんふ～♪　ふふふ～ふ、ふふ～ふ♪」
何故かコロッケ題材にした歌を口ずさみながら入って来たのは
肩に黄色の突起物を付け
紳士肌着を着た
男性が現れた。
???
「に～ん～じゃハ・ア・ッ・ト・リーー♪」
地和
「最後違うし！？」
蒲公英
「というか誰！？」

突如現れた男性に会場は動揺していた。
その中で家康は男性を訪ねようとした。

家康
「……ところで、お主は」

？？？
「誰だね！？　君はコンチクショー！！」

蒲公英
「いや意味わからないし！　というかホント誰！？」

しかし男性は逆に家康を訪ねた。

家康
「おお！　ワシは徳川　家康だ」

愛紗
「いや普通に自己紹介しないでください！」

桃香
「明らかに怪しいでしょ！？」

家康は普通に自己紹介をした。

？？？
「なぁんだ、家康君って言うのか～。俺はてっきりめそ・・・あ、いや・・・ゲフッ！　ゲフン！！」

愛紗
（いま“めそ”って言った！？）

桃香
（“めそ”って何！？）

愛紗と桃香、困惑。

家康
「さて、次はお主の番だ。お主は何者だ？」

？？？
「俺か？　俺は・・・・・」

そう言って男性は名乗った。

マサル
「セクシーコマンドー部の花中島（はなかじま）　マサルだぁ！」

“魅魂漫堂”

花中島　マサル、混合！

To be continued……

～忠実堅将・猪竜独眼～（後書き）

まさかのマサルさん、登場ッ！

さぁてクレーム処理の準備でもするかぁ～……本当にすいません。

最近ギャグが足りないと思っていましてねぇ～……書いちゃいました。

あと、マサルさんを知らない人はオリジナルだと思っても構いませんから。

次回はマサルさん、暴走!?　で、お楽しみください。

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～混沌闘拳・鬼神隠刑～

～あらすじ～

愛紗、政宗‥‥勝利！
マサル、登場！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「さぁ突如現れた花中島　マサルとは何者なのかぁ！？」

ざわ‥‥ざわ‥ざわ‥‥

地和
「ともかく！　第五試合、開始！」

カアァァン！

第五試合、開始！

家康
「マサルとやら、少し聞きたいがあるのだが・・・良いか？」

マサル
「断る」

桃香
「断るの！？」

家康
「セクシーコマンドーとは何だのだ？」

愛紗
「しかも聞くのですか！？」

マサル
「フッ・・・・しょうがない。特別に教えてやろう」

マサルはセクシーコマンドーを説明した。

マサル
「セクシーコマンドーとは（以下略）」

詠
「略した！？」

家康
「中々難しい格闘技だな」

蓮華
「しかもわかってる!?」

佐助
(流石に今回はツッコミが多いな～)

一同はツッコミを入れ、佐助は楽をしていた。

マサル
「まぁ百聞は一見にしかず……俺にパンチしてみろ」

家康
「良いのか?」

マサル
「ああ。セクシーコマンドーは……無敵だ」

マサルは自信に満ちた目で家康に言った。

家康
「……ならば往くぞ!」

ザッ!

家康
「ハァ！」

シュウン！

家康は踏み込みマサルに拳を繰り出した。

マサル
「……」

一方のマサルは特に動く様子は見られない。

そして……

ガツッ！

マサル
「ふべら！！」

顔面にクリーンヒットした。

幸村
「なッ！　……喰らった！」

蓮華
「避けないだなんて……（汗）」

愛紗
「何かの策か？」

マサルの行動に会場はどよめき始めた。

マサル
「フッ……やるじゃないか」

そんなマサルは倒れる事なく口の血を拭き取った。

マサル
「お前のパンチを喰らって、倒れなかったのは…俺が初めてだぜ！」

家康
「……？」

一同
「「「「……？」」」」

意味不明な発言をしたマサル。

マサル
「ならばそろそろ本気でいかせてもらうぞ。……ハァァァア！」

ゴゴゴゴゴゴッ！

家康
（クッ！　なんという闘氣だ！？）

マサルは両手を上に挙げてから徐々に下に下ろしていった。

そして……

カチャカチャ　ジィィィ

ズボンを下ろした。

桃香
「キャアァァァ！！／／／／」

月
「へぅ……／／／／」

蓮華
「な、何故ズボンを下ろす！／／／」

会場の女性客は悲鳴を上げた。

家康
「……（汗）」

家康もこればかりは引いた。

マサル
「……好機！」

そう言ってマサルは……

マサル
「ぬあああああ！！」

ピョコピョコピョコッ！

なんか気色悪い歩き方で近付いてきた。

家康
「うわッ！　な、何だ!?」

愛紗
「き、気色悪い……（汗）」

詠
「もうやだ……」

などとマサルの歩き方を気持ちわるがっていた。
だが……

マサル
「今だッ！　必殺!」

家康
「ッ！」

マサル
「ラヴ・ミー・ドゥー!!」

ブォン!

マサルは目にも止まらぬ速度でパンチを繰り出した。

ガコォ！　ズサァァア！

家康は間一髪で防御した。

家康
「クッ……油断した」

ざわ……ざわ…ざわ…ざわ

会場もまた先ほどのマサルのパンチにどよめきが起きていた。

雪蓮
「今のパンチ…見えた？」

慶次
「辛うじて…」

秀吉
「中々良い拳を持っておる」

卑弥呼
「セクシーコマンドー……よもや実在していたとは…」

貂蝉
「あら～、知っているの卑弥呼？」

卑弥呼
「うむ」

卑弥呼はセクシーコマンドーについて説明を始める。

卑弥呼
「セクシーコマンドー・・・それは“油断”を最大限にいかした格闘技よ」

蒲公英
「油断？」

卑弥呼
「先ほどのヒヨコ歩きが実例よ」

地和
「えぇ！　あの気色悪いのが！？」

卑弥呼
「格闘技における“フェイント”を“技”として極めた格闘技。どのような強い相手にも油断させればそこに隙が生まれる・・・さすれば強い相手とていとも簡単に倒せるのだ」

貂蝉

「確かに、家康ちゃんも油断してたわねぇ」

卑弥呼
「セクシーコマンドー、恐るべし！！」

そして再び舞台上に視線を戻した。

家康
「なるほど・・・こういう闘い方か」

マサル
「“油断大敵”“弘法も筆の誤り”“ヒゲ長き小学生に勝る者なし”・・・ってね」

桃香
「・・・最後は意味がわかんないけど」

愛紗
「確かに油断させれば一瞬で片を付ける事も可能・・・スゴい格闘技だ（汗）」

家康
「だが、ワシはもう油断せんぞ！」

マサル
「青いな、家康君」

家康

「何？」

マサル
「油断しないのならば・・・油断させるのみ！」

家康
「ほぅ・・・・・ならば往くぞ！」

そう言って家康は駆け出した。

家康
「てやッ！」

バキッ！　ドシャアァァァ！

家康は再び拳を繰り出し、マサルは吹き飛ばされた。

しかし・・・・・

着ぐるみ
「・・・・・・・・・・」

家康
「何ッ！？」

家康が殴ったのは着ぐるみだった。

家康
「何処だ！？」

マサル
「セクシーコマンドー秘奥義……変わり身の術！」

家康
「ッ！」

そう言ってマサルが姿を現したのは……

マサル（着ぐるみ）
「フフフフフ」

着ぐるみの中からだった。

蒲公英
「いや変わってねぇー！！」

家康
「変わり身の術……なんと恐ろしい奥義よ！」

地和
「いやバカなだけだからね！」

佐助
（ボケとボケが絡み合うと大変だなぁ～）

佐助は本当に楽をしていた。

家康
「そろそろ決着としようか」

マサル
「ああ・・・俺は負けん！　ボサンナの分まで！」

愛紗
「ボサンナって誰ですか！？」

ゴゴゴゴゴゴッ！

両者は闘氣を出し、辺りは息をのんだ。

しかし・・・・・

マサル
「・・・・・あぁー！？」

家康
「ん？　どうした？」

突然マサルが声を荒げた。

マサル
「しまった！　この後“よろしく仮面握手会”があるんだった！
こうしちゃおれん！」

ダダダダダッ！

そう言ってマサルは舞台を後にした。

家康
「……えーっと（汗）」

地和
「相手がいなくなったのでこの勝負、家康選手の勝利！」

蒲公英
「というか何しに来たの？」

家康、勝利！

地和
「さぁいろいろありましたが第六試合といきましょう！　東からは鬼神！　長曾我部　元親！　キャー！　チカにぃ！」

元親
「やってやっか！」

蒲公英
「対するは必殺処刑人！　周　明命！」

明命
「頑張ります！」

亞莎
「頑張って！　明命！」

貂蝉
「この闘いはどちらが勝つかわからないわねぇ」

卑弥呼
「難しいところよ。さぁ気を取り直して……レディー、ゴォー！」

カアァァン！

第六試合、開始！

明命
「早速ですが取らせて頂きます！」

元親
「アン？」

明命
「せぇぇぇーーーいっ！」

シュウン！

明命は開始と同時に魂切で攻撃をした。

元親
「どわッ！？」

ガキィン！

明命
「まだです！」

シュシュシュッ！

元親は防御したがすぐさま明命は手裏剣を投げた。

元親
「チィッ！！」

ゴロン！

元親は転がって避けすぐ立ち上がった。

すると……

元親
「……消えた？」

明命の姿がなかった。

蒲公英
「なぁーんと明命選手、姿を消しましたぁー！」

卑弥呼
「さすが隠密に特化した選手よ。気配まで消せるとは」

貂蝉

「この局面をどうするのかしらん？　元親ちゃんは」

元親
「……」

そんな局面で元親は……

元親
「（気配がねぇ……どっからくる？　いや、そんなもん必要ねぇ！）六限ッ！」

ブォンブォンブォンブォン！

長槍八流を振り回した。

貂蝉
「なるほど～……武器を振り回せば敵は近付いてこれないわねぇ。しかし……」

卑弥呼
「隠密に特化した相手には無駄な行為。体力の消耗に過ぎない……血迷ったか？」

しかし元親は一向に止める雰囲気はない。

明命
（どういう事でしょう？　それだけで私は止まりませんけど・・・）

一方の明命は機会を伺っていた。

明命
（ですが今が好機です！）

そう思い明命は元親の背後に回り魂切を抜いた。
だが・・・・・

クルッ

元親
「そこかぁ！！」

明命
「！？」

元親は六限を止め後ろを振り向いた。

元親
「四縛ッ！」

バシュン！

明命
「はぅわ！？」

そのまま元親は四縛で明命を捕まえた。

元親
「さて嬢ちゃん、何か策はあるかい？」

明命
「はぅ～～……捕まったら時点で私の負けです……」

蒲公英
「此処で明命選手、降参しました！　よってこの勝負、元親選手の勝利です！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

貂蝉
「あら～、予想に反して元親ちゃんが勝っちゃったわん」

卑弥呼
「まさかあの攻撃は囮だというのか？　だとすれば儂もまだまだだよな、わッはッはッは！」

元親、勝利！

明命
「負けちゃいました・・・」

元親
「まぁそう言うな。これも勝負だ」

明命
「うぅ～～・・・ところで、どうして私の場所がわかったんですか？」

明命は何故自分の場所を把握出来たのか元親に聞いた。

元親
「いやわからねえよ」

明命
「へ？」

元親
「あんな風に振り回せば必ず背後を奇襲する事はわかったが・・・正

直、勘だけで判断した」

明命
「で、でもさっき“そこかぁ”って言ったじゃないですか！？」

元親
「あ～それか……振り向いた時にいたから言った言葉なんだが」

明命
「そ、そんなのアリですか～……」

明命はぐったりとした。

地和
「さぁ次は第七試合です！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～混沌闘拳・鬼神隠刑～（後書き）

家康ｖｓマサル、元親ｖｓ明命の闘いでした。

家康はあまり活躍できませんでしたけど次はちゃんと闘わせます。

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～風影外延・若王迅弓～

～あらすじ～

家康・元親、勝利！

～天下大武闘館・会場～

地和
「さぁ第七試合は忍者対決！　東からは“風の悪魔”！　風魔　小太郎！」

風魔
「……」

北条
「風魔ぁー！　頑張るのぢゃあ！」

小蓮・鶴姫
「「頑張ってー！（ください☆）」」

人和
「風魔さん、頑張ってください」

蒲公英
「対する西からは苦労人、猿飛　佐助！」

佐助
「あんま期待すんなよ」

幸村
「佐助ッ！　精進せよッ！！」

美以
「兄！　頑張るにゃ！」

貂蟬
「忍者対決ねぇ…中々見れたもんじゃないわよ」

卑弥呼
「うむ。儂もこの試合には期待しておるぞ！」

地和
「ではでは卑弥呼さん、合図をどうぞ」

卑弥呼
「レディー、ゴォー！」

カァァァン！

第七試合、開始！

佐助

「さて……どうする？　俺様もアンタも手の内は知り尽くしているぜ？」

風魔
「……」

佐助
「ハァ……なら悪いが先手を取らせて貰うぜ」

シュバッ！

そう言って佐助は甲賀手裏剣を投げた。

風魔
「……」

シュン

それに対し風魔は風のように消えた。

佐助
「お！　何々、そうくる？　なら付き合うぜ」

シュン

佐助も風魔と同じように姿を消した。

蒲公英
「なんと両者共に消えました！」

地和
「どうやって闘うというのでしょうか！」

卑弥呼
「これぞ、忍びとしての真骨頂！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

すると姿はないが打ち合いの音が聞こえた。

地和
「なんということでしょう！　姿がないのに何故か打ち合う音が聞こえます！」

蒲公英
「これが忍者というモノなのかぁ！？」

スタッ

そして再び姿を現した両者。

風魔
「……」

ガチャン

風魔は巨大な手裏剣を取り出し佐助に……

シュバッ！　ギュルルル！

投げつけた。

佐助
「チィ！　……なぁーんてね」

ガガガガッ！　シュオン

佐助は防御を行ったが途中で影の中に消えた。

ズハァァ！　ガキィンッ！

すると風魔の影から佐助が現れ風魔を斬りつけた。
風魔は間一髪で防御し距離を置いた。

佐助
「アンタもわかるだろ？　忍びのする事だ・・・何でもアリだぜ」

ズオォン　ズオォン

そう言って佐助は分身の術をした。

貂蝉
「あ～らやだ♪　イケメンが増えちゃったわん♪」

卑弥呼
「なんと！　一つお持ち帰りしても良いのか！？」

佐助
「ちょっ！　結構マジメにやってるからやめてくんない！？」

地和
「おぉーっと！　こんな時でもツッコミを忘れない佐助選手！　お

見事です！」

ＴＨＥツッコミ役、佐助。

風魔
「……」

佐助
「ったく……さぁて、俺様に勝てるかな？」

そう言って佐助とその分身は風魔に襲いかかった。

風魔
「……」

シュン　シュバババッ！

風魔は姿を消し、その辺りに手裏剣が飛び交った。

佐助
「チィ！」

佐助は一旦距離を置いたが……

ガシッ

佐助
「！？」

風魔
「……」

既に風魔が佐助の後ろで腰をガッチリ掴んだ。

ギュルゥン！

風魔はそのまま高く飛び……

ドカァァァン！

佐助を地面に叩きつけた。

佐助
「ガハァ！」

佐助は直に喰らったが……

シュン

その姿は影のように消えた。

佐助
「残念だな。ソイツは影だぜ」

そう言って佐助は風魔に甲賀手裏剣を投げつけた。

しかし……

風魔
「……」

ズバババババッ！

風魔はその場から消え、辺りには無数の斬撃が現れた。

佐助
「クッ……ちょこまかと」

シュタタタッ！

佐助
「！？」

佐助は後ろに下がり風魔を探したが自分の周りには何か術陣が現われていた。

そして……

タン　ゴオォォォ！

そこから強い斬風が吹き佐助はまともに喰らった。

だが……

シュン

それも先ほどと同じように姿を消した。

佐助
「あ～あ、台無し。これ結構疲れんだけどねぇ～」

二つの影が消えた途端、離れた場所に姿を現す佐助。
どうやらこれが本物のようだ。

佐助
「そんじゃまぁ決着つける？　そろそろアンタも疲れただろ？」

風魔
「……」

佐助
「……」

会場は両者の静かな殺気に息を呑んだ。

刹那……

キィィィィン！

尋常ではないスピードで両者は互いのいた場所の反対に立っていた。

風魔

「……」

佐助
「……」

風魔
「……」

佐助
「やっぱ無理か……グハァ！」

ドサッ

風魔
「……」

クルクルクル　シャキン

佐助は倒れ風魔は対刀“衝”をしまった。

地和
「勝者、小太郎選手！」

観客
「「「「ワアァァァァアア！！！」」」」

貂蝉
「流石は忍びねぇ～」

卑弥呼
「忍術のレベルは同じ…ならば決着をつけるのは一瞬。見事であったぞ！」

北条
「良くぞやった！　風魔よ！」

風魔
「……」

佐助
（やーっと終わった…これで楽にできるな。感謝するぜ、風の悪魔）

佐助はそう心の中で感謝し静かに影に消えた。
どうやら佐助はワザと負けたらしい。

蒲公英
「どんどんいきましょう！　東からの入場は孫家の次女、蓮華！」

雪蓮
「蓮華ー！　頑張りなさいよ！」

蓮華

「はい！」

地和
「対する西からは弓の名手、夏候　秋蘭！」

秋蘭
「フッ……やってみます」

華琳
「秋蘭、頑張りなさい」

卑弥呼
「ＢＡＳＡＲＡファイト！　レディー、ゴォー！」

カアァァン！

第八試合、開始！

蓮華
「遠距離になられては此方が不利！　ならば接近戦に……」

秋蘭
「一つ忠告しておく」

蓮華
「へ？」

秋蘭
「弓を接近戦が不利と考えているなら・・・まだまだだ！　孫　蓮華！」

シュシュシュッ！

蓮華
「クッ！」

秋蘭の餓狼爪で始まった第八試合。

蓮華
「でぇぇやぁぁ！」

シュオン！

秋蘭
「甘い！」

ガキィン！

蓮華

「まだだ！」

シュオン！　シュオン！

秋蘭
「やるな！」

ガキィン！　ガキィン！

蓮華は秋蘭に攻撃させまいと連撃をした。

華琳
「この勝負、秋蘭の勝ちね」

政宗
「ああ」

桂花
「え？　どういう事ですか？」

華琳
「既に蓮華は秋蘭の術中に嵌ったのよ」

シュシュシュッ！

蓮華
「グッ！」

タンッ

蓮華は無数の矢が飛んできて蓮華は距離を置いてしまった。

秋蘭
「貰った！」

そう言って秋蘭は手に１０本の矢を持ち……

シュシュシュシュシュシュッ！

蓮華に放った。

蓮華
「なッ！？　クッ！」

ゴロンッ

蓮華は防御が不可能と察し転がって避けた。

蓮華
（いくらなんでも多すぎる！　やはり距離を置くのは……）

そう考えた蓮華だが……

チャキッ

蓮華
「！？」

秋蘭
「大手だ。蓮華」

既に秋蘭は蓮華の後ろに周っており餓狼爪を構えていた。

蓮華
「……完敗ね」

秋蘭

「……そうか」

その言葉を聞いた秋蘭は餓狼爪を下げた。

地和
「おぉーっと、決着がついたようです！　勝者、秋蘭選手！」

観客
「「「「ワアァァァァアア！！！」」」」

貂蝉
「これは経験の差ね」

卑弥呼
「決して孫　蓮華は悪くはない……されど、まだ成長過程。精進せよ！」

蓮華
「お姉様……ごめんなさい」

雪蓮
「ま、気にしないでね。蓮華」

蓮華
「しかし……」

雪蓮
「諄いわよ蓮華……今は負けた事を認めなさい。それから学ぶ事

もあるわよ」

蓮華
「……はい」

自分の未熟さを知った蓮華。

蒲公英
「さぁ次の試合へと行きましょう！」

観客
「「「「ワアァァァァァア！！！」」」」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～風影外延・若王迅弓～　（後書き）

そろそろ一回戦が終わりますね。

二回戦はボケなしでいきたいと思います。

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～絶槍龍星・神速武神・凶王猛猪～

～あらすじ～

風魔・秋蘭、勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「さぁ第九試合を始めます！　東は熱血漢、真田　幸村！」

幸村
「うおぉぉぉぉ！！」

天和
「ユッキー頑張れー！」

穏
「頑張ってくださぁ～い」

地和
「西からは、“常山の趙子龍”！　趙　星！」

星
「いきますかな」

朱里
「が、頑張ってください！」

風
「星さーん、頑張ってくださーい」

貂蝉
「あ～らお互い槍の使い手ねぇ」

卑弥呼
「だが、対照的ゆえに全く違った闘いになろうぞ」

地和
「なるほど。ではたまにはちぃが合図を出します！　レディー、ゴォー！」

カァァァン！

第九試合、開始！

星
「ではやりますかな」

幸村
「勇んで参られよ！！」

星

「ハイハイハイィ！」

幸村
「烈火ァ！」

ガガガガッ！

両者、目にも止まらぬスピードの突きの連打。

星
「やりますな」

幸村
「貴殿こそ！」

ガガガガッ！

お互いに会話はしているが手は止めていなかった。

幸村
「うおォォォ！　紅蓮脚！」

星
「チィ！」

ガキィン！　スタッ

幸村の紅蓮脚で星はガードし後ろに下がった。

星
「今度は此方から往くぞ！　ハァァァア！」

ヒュウン！

幸村
「グッ！」

ガキィン！

対する星も鋭い突きを幸村に放ち幸村もまた後ろに下がる。

幸村
「見事でござる、星殿」

星
「そういうお主もな」

蒲公英
「なんという技の応酬！　互いに譲らない闘いです」

卑弥呼
「技は互いに同等……しかし、力は真田、速さは趙が上回っておる」

地和
「どちらが勝つのか全くわかりません！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

星
「さぁどうなさる？　幸村殿よ」

幸村
「もとよりこの幸村ッ！　槍を奮う以外芸なき男！　故に、槍を持って星殿を越えるのみ！」

星
「フッ……熱き漢よな。ならば私も槍を持って幸村殿を越えてみせよう」

幸村
「……いざ！」

星
「……参らん！」

ダッ！

幸村
「うおォォォォ！」

星
「ハァアァァア！」

ガキィィィィン！

両者、足で地を強く蹴り槍を奮った。

幸村
「……」

星
「……」

パキッ

すると星の龍牙に罅が入った。

星
「……フゥ、これでは闘えぬな。私の負けよ」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

蒲公英
「決着がつきました！　勝者は幸村選手！」

貂蝉
「幸村ちゃんやるわねぇ」

卑弥呼
「正に日本一の兵よ！」

信玄
「良くやった、幸村よ！」

幸村
「お館様！」

信玄
「幸村ァ！！」

幸村
「うお館様ァァァ！！」

地和
「そろそろ熱さがウザくなってきたので次にいきましょう！」

蒲公英
「続いては“飛将軍”呂　恋！」

恋
「……ん」

音々音
「恋殿ォー！」

地和
「その相手は神速、張　霞！」

霞
「やったるで！」

白蓮
「頑張れよー！」

卑弥呼
「早速始めるぞ。レディー、ゴォー！」

カァァァン！

第十試合、開始！

霞
「早速行かしてもらうで！」

恋
「……いい」

霞
「おぅらァァァ！」

シュッ　シュッ　ブォン！

霞は神速とも言える鋭い突きと薙ぎ払いで恋に連撃を開始した。

恋
「……」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

しかし恋はいとも簡単に受け止めてしまった。

霞
「なんやて！？」

恋
「……今度はこっちから」

ブォオン！！

霞
「ッ！！」

ガキィィン！　ズサァァァ！

恋の一振りは霞の一振りより速く、力もあった。

霞
（なんちゅう攻撃やねん！？　手が痺れてもろた！）

霞は恋の攻撃に驚きを隠しきれなかった。

さらに……

恋
「……まだ」

ブォオン！！　ブォオン！！

霞
「ちょッ！？」

ガキィィン！　ガキィィン！

恋の猛撃が始まった。

霞は耐え切れず……

ガシャアン！

飛龍偃月刀を離してしまった。

霞
「～～った！　めっさ痛いわ！」

恋
「……まだ、やる？」

霞
「得物がないのにどー闘えっちゅーねん。ウチの負けや」

恋
「……」

霞
「はぁ～、こないな近くに強い奴がいたなんて……聞いてへんわ」

地和
「勝者、恋選手！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

音々音
「流石ですぞー！　恋殿ー！」

霞
（まぁウチの目標はなくなってもろたけど、倒すべき奴が現れたからそれでええーか）

恋
「……？」

霞は新たな目標を持った。

蒲公英
「さぁ一回戦最後の試合です！　東からは“凶王三成”！　石田三成！」

三成
「……斬滅してやる」

大谷
「三成よ、あまりやり過ぎるな」

地和
「対する西からは元教師、華雄！」

華雄
「フン！　我が武勇、見せてくれるわ！」

島津
「華雄どん！　頑張りんしゃい！」

蒲公英
「さぁ最後の試合はどういった展開になるのでしょうか！？」

卑弥呼
「ＢＡＳＡＲＡファイト！　レディー、ゴォー！」

カァァァン！

最終試合、開始！

華雄
「ハァァァア！」

三成
「フン！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

華雄
「往くぞォ！」

ブォン！

華雄と三成は開始早々激しい打ち合いが始まった。
華雄は素早く大斧を薙ぎ払いした。

三成
「甘い！」

シュン

それに対し、三成は“刹那”を使い姿を消した。

華雄
「何だとッ！？」

三成

「遅い……慙悔ッ！」

シュバババババッ！

華雄は突然消えた三成に驚いていたが、三成は華雄の後ろに回り“慙悔”を放った。

華雄
「グハァ！？」

ドサァァァ！

その攻撃により華雄は吹き飛ばされてしまった。

三成
「……もう終わりだ」

華雄
「グッ……まだだ！」

華雄は立ち上がり三成に向かっていった。

三成
「断罪ッ！」

シュパァン！

華雄
「ガッ！？」

ドサッ

しかし三成の居合になす術がなく華雄はまた倒されてしまった。

華雄
「ま、まだ……だ！」

華雄は再び立ち上がった。

三成
「くどい！　斬滅ッ！」

ザシュッ！　ズバァァァァン！

華雄
「ガハァァァ！」

三成は華雄に斬風を繰り出した。

だが……

華雄
「ハァ…ハァ…ハァ」

華雄は片膝を付きながらも大斧で体を支え立ち上がろうとしていた。

三成
「……何故だ？」

華雄
「ハァ…ハァ…」

三成
「何故勝てぬ相手に何度も挑もうとする？」

華雄
「ハァ…ハァ…だ、誰が…勝てない相手と決めた？」

三成

「何？」

華雄
「私は‥‥ま、まだ負けていない。だから‥‥諦める必要、がない」

三成
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」

華雄
「さぁ‥‥かかっ‥て‥‥‥‥こ‥‥‥い」

ドサッ

華雄は立ち上がろうとしたがその前に限界が訪れ倒れてしまった。

地和
「勝者、三成選手！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

貂蝉
「流石は三成ちゃんねぇ」

卑弥呼
「だが華雄もまた最後まで諦めずに闘った。あっぱれよ！」

三成
「……」

試合後、三成は華雄に近付き……

華雄
「うぅ……」

三成
「……フン」

華雄を担ぎ医務室へと去っていった。

大谷
（これは……珍しい。華雄の言葉に心を打たれたか？）

そんな三成を見て大谷はそう思っていた。

蒲公英
「先程の試合が終わり今日のスケジュールは以上です！　明日からは二回戦です！」

地和
「因みに二回戦はランダムで対戦相手が決まりますので残った十一

名の中にシード権を手にする選手も現れます！」

蒲公英
「それではみなさん！　また明日会いましょう！」

観客
「「「「ワァァァアア！！！」」」」

こうして一回戦は幕を閉じた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～絶槍龍星・神速武神・凶王猛猪～　（後書き）

さぁ一回戦が終わりました。

二回戦もまた波乱の展開にしたいと思います！

次回は二回戦、開始です！

質問、評価、指摘、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～蒼竜大鬼・忠将権現～（前書き）

此処で唐突なんですがとある質問で今現在、女性キャラが誰に好意を寄せているか表で書きたいと思います。

“家康”
桃香・愛紗・朱里・雛里・焔耶・凪・紫苑

“政宗”
華琳・流琉・風・星

“幸村”
蓮華・天和・穏・亞莎

“三成”
月・美羽

“元親”
思春・恋・鈴々・地和

“小十郎”
霞・秋蘭・稟

“風魔”
翠・人和・小蓮・鶴姫

“佐助”
明命・美以
（ミケ、トラ、シャム）

です。

これは完全に好意を寄せている人だけ書いたのでまだまだ増える予定です。

次回は上記以外のキャラを書きます。

それでは本編をどうぞ！

～蒼竜大鬼・忠将権現～

～あらすじ～

二回戦、開始！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「みなさぁーん！　やってきました二回戦！　今回も灼熱した試合が繰り広げる事でしょー！」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

地和
「昨日も言いましたが今回から対戦相手はランダムで決まります！　ちぃ達の目の前にある箱の中に選手の名前が入った紙を二回引きその人達で対戦してもらいます！」

観客
「「「「オォォォォォオオ！」」」」

地和
「因みに、前回の解説の二人は今日は忙しいので今回の解説者は此方の二人です！」

秀吉
「よろしく頼む」

島津
「よろしか」

蒲公英
「それでは第一試合を始めたいと思います！」

ガサガサッ

蒲公英は早速箱の中に手を突っ込み紙を選んで取り出した。

蒲公英
「一番最初はっと……政宗選手！　舞台に上がりください！」

政宗
「俺か？　……ＯＫ、今いくぜ」

小十郎
「政宗様、お気をつけください」

舎弟
「筆頭！　頑張ってくだせぇ！」

政宗

「ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

そう言って政宗は舞台に足を運んだ。

地和
「そんな政宗選手の相手は……」

ガサガサッ

地和
「この人、……元親選手！　キャー！　チカにぃ！　頑張ってー！」

元親
「お！　俺かい？」

家康
「元親、頑張れよ！」

子分
「アニキ！　俺達、全力で応援するッスよ！」

元親
「あんがとよ！　そんじゃあ行きますか」

元親も舞台に足を運んだ。

地和
「さぁ今回の勝負は兄貴対決となりました！」

蒲公英
「どちらも荒くれ者達を束ねる兄貴分！　真の兄貴が決まる決戦です！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

地和
「ＢＡＳＡＲＡファイト！　レディー、ゴォー！」

カアァァン！

第一試合、開始！

元親
「そういやぁアンタとはまだ決着が付いていなかったな」

政宗
「確かにな……なら此処で付けるのも悪くねぇーな」

元親
「ならやるか？」

政宗
「その為にこのｓｔａｇｅに立ってんだろ？」

元親
「そうだったな・・・そんじゃあいくぜッ！」

政宗
「Ｃｏｍｅ　ｏｎ！」

そう言って元親は強く踏み込み・・・・・

元親
「十飛ッ！」

ビュゥオォン

政宗
「ＭＡＧＮＵＭッ！」

バギャァァアン！

互いに技を繰り出し、ぶつかり合った。

ガキャァァアン！

元親
「チィ！」

政宗
「Ｈａッ！」

ズサァァァア！

力は互角だった為両者の技は届かずにいた。

元親
「オゥリャア！」

政宗
「ドゥリヤ！」

ブォン！　ブォン！　ガキィン！

政宗
「相変わらずｓｔｒａｎｇｅな闘い方だな！」

元親
「アンタが言えた義理かい！」

政宗
「だなッ！　ＣＲＡＺＹ　ＳＴＯＲＭッ！」

元親
「六限ッ！」

ガガガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

激しい打ち合いに会場は……

地和
「な、なんという闘いでしょう！」

蒲公英
「この闘いに言葉はありません！　ただただ圧巻されています！」

流琉
「ス、スゴい闘いです！」

季衣
「衝撃が此処まで来るよ！？」

桂花
「……（汗）」

華琳
（うふふ……こうでなくては私は求めないわ）

鈴々
「スゴいのだ！　お兄ちゃん達！」

桃香
「ホントだよ！」

焔耶
「……スゴい（汗）」

と、今の闘いに圧倒されていた。

ギギギギッ！

政宗
「いいぜアンタ！　昨日の奴といい俺の目に狂いはなかった！」

元親
「そうかい！　なら、もっとスゲェのを見せてやる……ぜ！」

ガキャァァアン！

政宗
「ッ！」

元親
「コイツが鬼の本気よ！」

ブォンブォン！

元親は政宗を吹き飛ばし、長槍八流を振り回し始めた。

子分
「あれはッ！　野郎共！　いつものいくぜ！」

子分達
「「「「アニキ！　アニキ！アニキ！　アニキ！」」」」

すると元親の行動を察した子分達はアニキコールを始めた。

政宗
「ならコッチもｆｕｌｌでいくぜ！」

ドドドドドドッ！

対する政宗も景秀に力を溜め雷の球体を作り出した。

舎弟
「オイ！　筆頭がアレを出すぜ！　俺達も負けんじゃねぇぞ！」

舎弟達
「「「「筆ッ頭！　筆ッ頭！　筆ッ頭！」」」」

これに政宗の舎弟達は負けじと筆頭コールを始めた。

政宗
「随分と下に慕われてんじゃねぇか！」

元親
「そういうアンタも出来た野郎共だな！」

政宗
「オメェとなら馬が合いそうだ！」

元親
「ならこれが終わったら飯でも食うか？」

政宗
「それも悪くねぇな！　だが……」

元親
「その前に決着をつけるとするか！」

お互いに部下から慕われているので会場が弾んだ。

そして両者、強く踏み込み……

政宗
「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮッ！！」

元親
「撃零ッ！！」

バギャァァァアン！

互いの大技が激突し、舞台に爆発が起きた。

小蓮
「キャァァア！？」

美以
「な、なんにゃァア！？」

秀秋
「飛ばされるーー！？」

会場も爆発の衝撃に驚いていた。

地和
「結果は！？」

そして舞台を見ると……

元親
「……」

政宗
「……ｃｈｅｃｋ　ｍａｔｅだ」

政宗が元親の喉元に景秀を突き立てていた。

元親
「そのようだな。降参するぜ」

蒲公英
「此処で元親選手、降参です！　よって勝者は政宗選手です！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

秀吉

「大技の後に両者はすぐに動いたな」

島津
「だげねぇ、政宗どんの方が一歩速かったっちゅーわけねぇ」

元親
「ダッハハハ！　負けは負けだ。そんじゃあ次も頑張れよ、独眼竜」

政宗
「ああ」

そう言って両者は舞台を降りた。

地和
「初戦から熱い闘いが見れました！　果たして次はどのような闘いが繰り広げられるのでしょうか！？」

蒲公英
「それでは次の対戦に行きましょう！」

ガサガサッ

蒲公英
「……家康選手！　舞台に上がりください！」

家康

「お、ワシか！」

焔耶
「お館！　頑張ってください！」

家康
「ああ！」

家康は舞台に上がった。

地和
「さぁその家康選手の対戦相手は……愛紗選手です！」

愛紗
「私…ですか？」

桃香
「嘘ッ！？　どっちを応援するればいいの！？（汗）」

星
「まぁ愛紗、頑張るのだぞ」

愛紗
「……ああ」

そして愛紗も舞台上に上がった。

蒲公英
「これは同じクラス対決です！　さらに愛紗選手は家康選手に好意を寄せているようです！」

地和
「なんという残酷な闘い！」

愛紗
「オイ！／／／　ななな何を言っている！／／／」

蒲公英
「え？　違うの？」

愛紗
「そ、それは……／／／」

地和
「はい、好きって事がわかりましたので試合、開始！」

カアァァァン！

第二試合、開始！

愛紗
「クッ……いきなり恥をかかせおって／／／」

家康
「アッハハハ！　元気があっていいじゃないか」

愛紗
「……まぁ家康殿がそうおっしゃるなら」

家康
「愛紗よ、良い勝負をしよう」

愛紗
「はい……では」

チャキン

愛紗
「参ります」

家康
「ああ、来い！」

グッ

愛紗は青龍偃月刀を構え、家康もまた福禄手甲に力を入れ……

愛紗

「でぇぇやぁぁぁ！」

家康
「ハァア！」

ガキィィイン！

両者相俟った。

愛紗
「ハァァアアア！」

ブォンブォン！

家康
「やるな！」

ヒュンヒュン

愛紗は鋭い一閃を何度も繰り出したが家康はギリギリのところで避ける。

家康
「今度は此方からだ！」

ブォン！

愛紗
「クッ、やりますね！」

ガキィン！

家康もまた力強いパンチを放ち、愛紗は間一髪で防御した。

愛紗
「やはり家康殿はお強いですね」

家康
「愛紗もな・・・見事なまでの闘争心だ」

愛紗
「それはアナタにも言えた事・・・長引いたら此方が不利になりますので決めさせて頂きます」

家康
「ほぅ・・・だが、勝つのはワシだ！」

愛紗
「……いきます！」

ダッ！

愛紗は強く踏み込み……

愛紗
「青龍！　逆鱗ッ斬！！」

ブゥゥオオォン！

渾身の一撃を家康に繰り出した。

家康
「クッ……！」

ドガァァアン！

愛紗の一撃は地面が抉れ、家康を巻き込んでいた。

愛紗
（……やったか？）

愛紗は先程の一撃で砂埃が発生し、そのせいで家康の姿は確認できないでいた。
やがて砂埃が消え、辺りが晴れてきた。

家康
「見事だ愛紗。流石といったところか」

愛紗
「！？」

そこには拳に氣を溜めた家康がいた。

家康
「ならばワシの渾身の一撃を受けてみよ！」

ザッ！

家康は先程より強く踏み込み……

家康

「天道突きッ！！」

バシュゥゥゥウン！

溜めた氣を全力で放った。

愛紗
「しまッ！？」

ガキャァン！　ザクッ

愛紗は防御を行おうとしたが間に合わず、青龍偃月刀を手放してしまった。

家康
「……どうする、愛紗よ？」

愛紗
「……お見事です、家康殿。私の負けです」

蒲公英
「あぁーっと此処で愛紗選手降参です！　よってこの試合、家康選手の勝利です！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

島津
「家康どんは愛紗どんの一撃を一瞬、拳で軌道をずしたんばい」

秀吉
「さらにその後自身に氣を溜め、すぐに反撃を繰り出した訳か……
面白い戦法だ」

家康
「しかしあの一撃にはヒヤッとしたぞ」

愛紗
「ありがとうございます。では家康殿、これからの試合、頑張ってください」

家康
「ああ、心得た！」

そして家康と愛紗は舞台から降りた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～蒼竜大鬼・忠将権現～（後書き）

さぁ二回戦が始まりました！

元親、愛紗・・・残念です。

自分はこの二人は結構好きなキャラなんですが・・・残念です。

まぁ勝負ですから仕方ないです。

それでは、また次回！

～仁侠深紅～　（前書き）

今回も女性キャラが誰に好意を寄せているか表で書きたいと思います。

“慶次”
雪蓮・猪々子

“官兵衛”
斗詩

“長政”
お市

“半兵衛”
麗羽

です。

秀吉や後輩はまだ秘密という事で。

では、本編をどうぞ！

～仁侠深紅～

～あらすじ～

政宗・家康、勝利！

～天下大武闘館・会場～

小十郎
「ハァ…ハァ…ハァ……クッ」

現在、既に第三試合が開始されており小十郎が舞台に立っていた。
しかし小十郎は息切れをしており、更に至る所に傷を負っていた。

そんな小十郎の目の前に立っていたのは……

恋
「……」

武神だった。

小十郎

（何だコイツは……デタラメな攻撃をしてくる割にはしっかり急所を狙ってやがる）

小十郎は恋の動きの読めない攻撃に苦戦していた。

恋
「……いく」

小十郎
「……ッ！？」

ブォン！　ガキィン！

恋
「……まだ」

シュウン！　ザシュ！

小十郎
「グハッ！」

恋の攻撃に一度は耐えた小十郎だがすぐさま軌道をずらし薙払いで攻撃をした。

そんな闘いに会場は……

華琳
「……大丈夫かしら？　小十郎」

政宗
「……さぁな」

春蘭
「オ、オイ！　そんな言い方はないだろ！」

政宗
「……」

桂花
「そうよ！　アンタを慕ってるのにそんな」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！」

桂花
「ッ！？」

政宗
「どんな結果であれ俺が背中を預けんのは小十郎、唯一人だけだ」

華琳
「……信頼してるのね」

政宗
「……ああ」

再び舞台に目を向けた政宗達。

小十郎
「チィ……クソ！」

恋
「……まだ、やる？」

小十郎
「……生憎、俺は諦めんのが嫌いでな」

恋
「……ん」

小十郎
「今度は俺からだッ！！」

小十郎は恋に近付き……

小十郎
「乱れ十六夜ッ！」

ズバババババッ！

連撃を繰り出した。

恋
「……」

それに対し恋は避ける事なく……

ガガガガガキィンッ！

全て防いだ。

小十郎
「何ッ！？」

恋
「……」

ブォン！　バキッ！

小十郎
「ガッ！」

恋は刃のない部分で小十郎を吹き飛ばした。

小十郎
「ゴホッゴホッ‥‥ク‥ソ！」

恋
「‥‥‥‥お前」

小十郎
「ハァ‥ハァ‥‥‥アン？」

恋
「強い‥‥‥けど、恋ほどじゃない」

小十郎
「！　‥‥‥‥‥そうか」

そう言って静かに立ち上がった小十郎。

そして‥‥‥

小十郎
「‥‥‥‥オラッ！！」

バギャァァアアン！

恋
「ッ？！」

怒鳴りつけた後、黒龍を地面に突き刺した。
その瞬間、小十郎に雷が落ちた。

小十郎
「はっきり聞こえたぜ……堪忍袋の緒が切れる音がな」

恋
「……さっきと違う」

小十郎
「気をつけろよ…今の俺は加減を知らねえぜ」

ダッ！

小十郎
「セェァア！」

ブォオン！

恋
「……甘い」

ガキィン！

小十郎は先程とは違い荒々しく黒龍を振り下ろしたが恋は難なく防御した。

だが……

ガシッ！

恋
「！？」

小十郎
「おらよッ！」

ドカッ！　ズサァァア！

恋

「グッ！？」

小十郎は恋の腕を掴み、そのまま蹴りを喰らわせ、吹き飛ばした。

小十郎
「まだだ！　穿月ッ！！」

ズバァァァアン！

恋
「！　クッ！？」

ガキィイン！

小十郎は吹き飛ばした恋をすぐさま追撃した。
それに対し恋は間一髪で防御に間に合わせた。

恋
「まだ……！」

小十郎
「おもしれぇ！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

その後両者は激突し、相俟っていた。

政宗
「久々に見たぜ……あんな小十郎を」

華琳
「政宗……アレは何なの？」

政宗
「アレか？　キレた小十郎だが？」

秋蘭
「……アレが小十郎なのか？（汗）」

霞
「めっさ怖いんやけど（汗）」

政宗
「ああ、小十郎は滅多にキレる事はねぇが……ああなった小十郎はそう簡単には止まらねぇぜ」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

恋
（‥さっきより‥‥強い！？）

小十郎
「オラオラッ！！　さっきの勢いはどした！？」

ガキィイン！　ギギギギッ！

小十郎の猛撃により押され気味な恋。

恋
「‥‥‥邪魔ッ！」

ガキャァン！

小十郎
「チィ！」

ズサァァァ！

恋は何とか小十郎を吹き飛ばし、距離を置いた。

恋
「……強い」

小十郎
「ワリィな譲ちゃん、そろそろ決めさせて貰うぜ」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！

小十郎は黒龍に力を溜め……

小十郎
「唸れ！　鳴神ッ！！」

ピギャァァァン！

恋
「……！？」

ドガァァァアン！

青い雷撃が恋を襲いその場所は爆発した。

小十郎
「……やったか？」

音々音
「れ、恋殿ォー！？」

音々音が叫ぶが返事がなく、小十郎は恋のいた場所に近付いた。
しかし、其処に恋の姿はなかった。

小十郎
「……何処にいきやがった？」

辺りを見るが恋の姿が見付からない。

すると……

ゴォオ！

小十郎
「……！　上かッ！？」

恋
「……遅い」

いきなりの殺気を感じた小十郎は上を向く。

そこには恋が急接近していた。

小十郎
「クッ！？」

小十郎はすぐさま黒龍を構えた。

ガキィィイン！

両者の獲物がぶつかり合った。
恋はそのまま地面に着地し、小十郎も一旦距離を置いた。

小十郎
「……」

恋
「……」

互いに獲物を構えながら睨み合いが続いた。

刹那……

ピキピキピキ……　パキィィイン！

小十郎の持つ黒龍が砕け散った。

小十郎
「……テメェ、これを狙ったのか？」

恋
「……（コクッ）」

小十郎
「……そうか」

そう言って小十郎は手を挙げて……

小十郎
「降参だ」

と、審判に言った。

地和
「小十郎選手、降参です！　よってこの試合、恋選手の勝利です！」

観客

「「「「ワァァアア！！！」」」」

恋
「……何で？」

小十郎
「アン？」

恋
「……さっき……諦めるの、嫌いって言ってた」

小十郎
「ああ、言ったな」

恋
「……なら」

小十郎
「だが」

恋
「……？」

小十郎
「コイツが砕けた……つまり俺の魂がテメェの魂に負けた事を意味する。だから降参した」

恋
「……もう一本、ある」

小十郎
「コレにはまた違う魂がある。この試合で俺の魂が籠っていたのは間違いなくこの刀だ」

恋
「……難しい」

小十郎
「そう難しく考えんな。次の試合、頑張んな」

恋
「……（コクッ）」

そして両者は舞台から降りていった。

～天下大武闘館・廊下～

此処は舞台に繋がっている廊下。
小十郎は今、観客席に向かっていた。
すると……

小十郎
「……ん？」

目の前に人影が見え、近付いてきた。

その正体は……

小十郎
「……政宗様」

政宗
「よぅ」

政宗であった。

小十郎
「……申し訳ありません」

政宗
「そんな事はいい。それより聞きたい事がある」

小十郎
「……何なりと」

政宗
「小十郎、オメェが言ってた“違う魂”ってのはなんだ？」

小十郎
「……それはもちろん」

小十郎は政宗をしっかり見つめ……

小十郎
「“竜の魂”でございます」

と、政宗に答えた。

政宗
「……そうか」

そう言って政宗は前を向いて歩き始めた。

その最中……

政宗
「これからもこの背中、頼んだぜ」

小十郎
「……はっ」

政宗は振り返らずに小十郎に言った。
小十郎もまたその背中を眺めながら答えた。

政宗
（見せて貰ったぜ……竜の右目の“覚悟”を）

政宗は小十郎の“覚悟”を改めて知った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～仁侠深紅～　（後書き）

……小十郎、カッコいいなぁ～

ゲームでも、アニメでも異常なほどカッコいいからなぁ～

今回から一試合だけにしました！

次回も熱き試合を展開します！

ご意見、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～尊武拳槍～

～あらすじ～

恋、勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「さぁ！　前回全くっていいほど出番がなかった実況の蒲公英と」

地和
「一応セリフはあった地和です！　さぁ白熱してきた二回戦！　次の試合はどうなるのでしょうか！？」

ガサガサッ

地和
「よっと……幸村選手！　どうぞお上がりください！」

幸村
「某か！？」

佐助

「旦那～頑張れよ～」

蓮華
「頑張ってね、幸村」

幸村
「うおぉぉぉぉ！！　唸れ魂ィイ！」

そう言って幸村は全力で舞台に上がった。

蒲公英
「さて、この熱血漢に立ち向かうのは！？」

ガサガサッ

蒲公英
「この方……凪選手です！」

凪
「わ、私ですか！？」

真桜
「お、凪かいな！」

沙和
「頑張るの～！」

凪
「あ、ああ」

対する凪はガチガチに緊張して舞台に上がった。

地和
「この試合は師匠を敬愛してる弟子対決になりました！」

秀吉
「うむ・・・普通ならばリーチの長い真田が優勢か」

島津
「じゃけん、それを覆しての戦人ねぇ！」

蒲公英
「それでは、試合開始！」

カァァアン！

第三試合、開始！

幸村
「さぁ勇んで参られよ！」

凪
「……いきます！」

ダッ！

凪
「タァア！」

ビュウンッ！

幸村の掛け声を皮切りに凪は一気に駆け出し、蹴りを繰り出した。

幸村
「フッ！」

ガキィン！

幸村
「見事な蹴りだ！　しかしまだ威力が足らん！」

凪
「そんなもの百も承知です！　ハァ！」

バシュゥン！

幸村
「何と！？」

蹴りを止めた幸村だが、凪は予測しており至近距離で氣弾を発射した。

幸村
「クッ！」

ガキィン！

幸村は驚いたが何とか防御した。

幸村
「今度は某から往くぞ！」

ダッ！

幸村

「烈火ァァア！！」

ズバババババッ！

凪

「クッ……早い！？」

幸村

「まだまだァ！　大烈火ァァア」

ガガガガガガッ！！

次に幸村が朱羅を連続突きを繰り出し、凪は辛くも防御をしていた。
しかし、幸村はさらに連続突きが速くなっていた。

凪

「なッ！？　…グハァァッ！」

凪は耐えきれず、その連続突きを喰らってしまった。

凪

「クッ…まだやれる！」

凪はすぐさま立ち上がるが……

幸村
「おらおらァァ！　火焔車ァァ！」

ブォンブォンブォンブォン！！

凪
「！？　……ガハァァァ！」

ズサァァアッ！

幸村の回転攻撃に凪は成す術がなく再び倒させてしまった。

凪
「ハァ、ハァ……まだ…だ！」

ググッ……

ダメージは大きいがどうにか立ち上がる凪。

凪
「（もはや…後がない！）　ハァア！」

バシュゥン！　バシュゥン！

そして氣弾を複数発射する。

幸村
「同じ技は通用せぬぞ！」

ガキィン！　ガキィン！

しかし幸村は、その氣弾を難なく弾き返す。

凪
（クッ、やはりダメか…ならば！）

ダッ！

幸村
「むッ！　来るか！？」

凪は幸村へと駆け出した。

それに対し幸村も駆け出し朱羅を構え……

幸村
「火走ッ！」

ブォン！

全力で朱羅を振りかぶった。

一方の凪は……

凪
「……今だッ！」

シュン

朱羅が当たる寸前に姿を消した。

幸村

「何ッ！？　……上か！」

消えた事に少し唖然とした幸村。
しかし、上からの殺気を感じ取った。

凪
「せぇぇぇやぁぁぁぁ！」

シュウオン！

凪は上空からそのまま落下する勢いで拳を振り下ろした。

幸村
「負けるか！　千両花火ッ！」

ズオォォン！

対する幸村も朱羅を構え、振り上げた。

ガキャァァン！

凪「まだです！」

スタッ　ゴォオ！

拳と槍がぶつかり合い衝撃が発生した。
その後、凪は素早く着地し脚部を氣で爆発させて幸村の懐に一気に駆け寄った。

幸村
「なッ！？　しまっ」

凪
「天道突きッ！」

バシュウゥゥゥゥン！

幸村
「ゴハァァァァ！！」

ズサァァアッ！

そして凪は天道突きを放ち幸村を吹き飛ばした。

凪
「ハァ…ハァ……クッ」

ガクッ

しかし凪もまた限界だった。
幸村を見届けると自分も同じように倒れてしまった。

地和
「おぉーっと！　両者共に倒れてしまったぁ！」

蒲公英
「この場合は先に立ち上がった方の勝利です！」

真桜
「凪ィー！　頑張れー！」

沙和
「頑張って立つのー！」

蓮華
「幸村ッ！　頑張って！」

佐助
「旦那ァ！　アンタならまだやれる筈だ！」

会場は幸村と凪の応援に包まれた。

幸村
「ゴホッゴホッ……まだ」

凪
「ハァ…ハァ……やれる」

ググッ……

そして両者は片膝をつきながらも立ち上がろうとする。

そこへ……

家康
「凪ッ！　頑張るのだ！」

凪
「…師匠？」

信玄
「幸村ァァ！　立ち上がるのだ！！」

幸村
「…お館様？」

両者に聞こえてきたのは自分が敬愛する人物の応援だった。

それを聞いた両者は……

凪
（そうだ……私は……）

幸村
（一人で…闘っているのではない……）

凪
（皆の期待を裏切らない為……）

幸村
（そしてなりよりも……）

二人
（師匠の為にもッ！）
（お館様の為にもッ！）

ググッ……

二人
「「此処で、負けられん！」」

そう叫び両者は同時に立ち上がった。

地和
「何とぉ！　両者同時に立ち上がりましたぁ！」

蒲公英
「ならば！　試合続行です！」

観客
「「「「ワァァァアア！！」」」」

凪
（……どうやらこれが）

幸村
（……最後の一撃になる）

凪
「……いざ！」

幸村
「……参る！」

ダッ！

二人
「「ハァァアア！！」」

そう言って同時に駆け出した両者。

そして……

ガキャァァアン！！

互いの渾身の一撃を振るう。

凪
「……」

幸村
「……」

凪
「……御見事……です」

ドサッ

幸村
「この試合！　真田幸村が勝ち取ったりィィ！！」

蒲公英
「勝者！　幸村選手！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

幸村の勝利に会場は盛り上がった。

～天下大武闘館・医務室～

凪
「……ん、此処は？」

凪が目覚めるとベットの上で寝ていた。

？？？
「お！　気付いたか！」

そう言って奥から一人の男性が近付いてきた。

容姿は赤い髪に二枚目な顔立ち

更に暑苦しいほどの熱血漢

名は華陀（かだ）
恋ＢＡＲＡ学園の保健の先生である。

凪
「華陀先生？　という事は此処は」

華陀
「ああ、医務室だ。君はあの後すぐに運ばれたんだ」

凪
「……そうですか」

華陀
「まぁ特に大きい怪我はない。安心してくれ」

凪
「はい、ありがとうございます。……一つ、いいですか？」

華陀
「ん？　どうした？」

凪
「私を運んでくれたのは華陀先生ですか？」

華陀
「いや、違う。君を運んでくれたのはあの人だよ」

そう言って華陀はある方向を指差した。

そこにいたのは……

焔耶
「……」

焔耶だった。

凪
「貴方は……」

華陀
「それじゃあ、ゆっくり休んでくれ」

そして華陀は去っていった。

凪
「……」

焔耶
「……」

華陀が居なくなりその場が静寂に包まれた。
しばらくして沈黙を先に破ったのは凪だった。

凪
「……どうして私を運んでくれたのですか？」

焔耶とは犬猿の中なので今回の行動には理解が出来なかった。

焔耶
「……理由なんてない」

凪
「……そうですか」

焔耶
「……ただ」

凪
「……？」

焔耶
「お前とは敵でもあるが……仲間でもある」

凪
「……」

焔耶

「それにお館も“絆”を大切にしているからな……これも一つの“絆”と言われたんだ」

凪
「……ふふッ」

焔耶
「な、何が可笑しい！」

焔耶はいきなり笑われて少し怒鳴った。

凪
「すまない、貴方がそんな言うとは思わなかった」

焔耶
「……フン、やはりお前は気に食わん」

凪
「いや、ホントにすまなかった……“焔耶”」

焔耶
「……！」

焔耶はいきなり名前を呼ばれて驚いたが……

焔耶

「フン！　…早く治すんだな……“凪”」

と、名前を呼んで医務室から出ていった。

凪
「……ああ」

その後すぐに……

真桜
「凪ィー！　大丈夫かいな？」

沙和
「お見舞いに来たの！」

凪
「ああ、私は大丈夫だ」

真桜と沙和がやってきてしばらく雑談するのであった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～尊武拳槍～　（後書き）

いやぁ～絶対に凪と焔耶、キャラ変わってるよ。

こんなキャラじゃない筈と思って書いてました。

あと……ギャグ成分が足らない！

流石にこういう長編で入れるのはマズいからな……

しかし手抜きはせんぞぉーー！

しっかり書いてから暴走するぞぉー！

ご意見、感想もよろしくお願いします！

それでは、また次回！

～凶斬軋弓・次戦確定～

～あらすじ～

幸村、勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「皆さん！　二回戦も残すは一試合だけとなりました！」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

地和
「果たして、最後の組み合わせはどうなるのでしょうか！」

ガサガサッ

地和
「……三成選手！　舞台にお上がりください！」

三成
「……私か」

美羽
「主様、頑張るのじゃ！」

七乃
「頑張ってくださぁーい」

三成
「……フン」

そして舞台に上がる三成。

蒲公英
「さぁ三成選手の対戦相手はッ！？」

ガサガサッ

蒲公英
「……秋蘭選手です！」

秋蘭
「ほぅ……」

春蘭
「秋蘭ッ！　必ず勝利するのだぞ！」

秋蘭
「フッ……頑張らせてもらうよ、姉者」

そう言って秋蘭も舞台に上がる。

島津
「この試合、弓の秋蘭どんが圧倒的に有利じゃが……」

秀吉
「相手は三成……実力は確かなモノだ」

蒲公英
「因みにこの時点で風魔選手はシード権を獲得しました！」

風魔
「……」

地和
「それでは、試合開始！」

カァァアン！

最終試合、開始！

秋蘭

「先手を取らせて貰おう」

三成
「御託はいい……さっさと来い」

秋蘭
「余裕だな……ハァ！」

ヒュヒュヒュッ！

三成
「ぐだらん」

スパァァァン！

秋蘭は三本、矢を放つがいとも簡単に斬りおとす三成。

だが……

秋蘭
「……甘いな」

三成
「何？　……！　刹那ッ！」

シュン　カカカカッ！

三成は何かを察して刹那を使った。
その瞬間、上から矢が降ってきた。

三成
「小賢しい真似をッ！」

秋蘭
「喋る暇はあるようだな」

ヒュヒュヒュッ！

三成
「チィ！」

秋蘭は三成に攻撃の隙を与えない為、素早く矢を放つ。

それを見ていた会場は……

月
「み、みっちゃん……大丈夫かな？」

大谷
「何、案ずる事はない」

月
「え？　…どういう事ですか？」

大谷
「三成は機会を窺っておるのよ」

月
「機会？」

大谷
「ああ…奴を斬首する機会を」

月
（……みっちゃん）

そう思い月は舞台に目を向けた。

三成
「……」

ガキィン！　ガキィン！

秋蘭

（先程よりスピードが速くなっているな…何か狙っているのか？）

秋蘭は先程より三成の攻撃が速くなっている事を気にしていた。

秋蘭
「（……ならば仕留めるのは今か）　フッ！」

ヒュヒュヒュッ！

三成
「……」

ガガガキィン！

秋蘭の弓の攻撃を容易く防ぐ三成。
しかし秋蘭はコレを狙っていた。

グググ……

秋蘭
「悪いが終止符を打たせて貰おう」

既に秋蘭は手に十本の矢を持ちながら餓狼爪を構えていた。

そして……

秋蘭
「ハァア！」

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュゥン！！

矢を放った。

だが……

三成
「……鬱屈ッ！」

シュン　スパァァァアン！

秋蘭
「なッ！？　クッ！」

ガキャァァアン！

三成は一瞬消え、秋蘭に目で追えないスピードの斬撃を喰らわせた。
秋蘭は間一髪で防御し、反撃をしようとしたが既に三成の姿はなかった。

秋蘭
（まさか……コレを狙っていたのか!?）

秋蘭は自分の詰めの攻撃を狙われていた事に冷や汗をかいた。

秋蘭
（このままではやられるな…ならば）

三成
「遅い」

秋蘭
「ッ!?」

ドカッ!

秋蘭
「グフッ!」

三成
「終わりだ……」

秋蘭の背後から現れた三成。
そのまま秋蘭を倒し、首に鞘を当てる。

そして……

三成
「斬首ッ！」

ヒュォン！

秋蘭
「クッ！？」

三成は秋蘭の首目掛、刀を振り下ろした。
秋蘭は目を瞑りやられるのを覚悟した。

秋蘭
「……？」

しかしいくら待っても来る気配がない。

そして秋蘭が目を開けると……

三成
「……貴様の負けだ、降参しろ」

秋蘭の首には一寸まで刀が来ており、三成はわざと斬首しなかった。
そして秋蘭に降参させようとしていた。

秋蘭
「……何故斬らない？」

三成
「……貴様を斬ったところで、秀吉様は喜ばん」

秋蘭
「それだけか？」

三成
「それだけだ」

秋蘭
「……そうか」

そして秋蘭は……

秋蘭
「降参だ」

降参した。

地和
「秋蘭選手、降参！　よってこの試合、三成選手の勝利です！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

秀吉
「流石は三成よ」

そして三成は刀をしまい、舞台から降りようとした。

そこへ……

秋蘭
「石田よ」

秋蘭に声を掛けられた。

三成
「・・・何だ?」

秋蘭
「もう少し自分に正直になったらどうだ?」

三成
「私はいつでも正直だ」

秋蘭
「・・・・・となると素か」

三成
「さっきから何を言っている?」

秋蘭
「気にするな。次の試合、頑張ってくれ」

三成
「・・・・・フン」

そして両者は舞台から降りた。

地和
「両選手、素晴らしい試合でした！　さぁ皆さん、二回戦が終わりました！　続いては三回戦です！」

蒲公英

「三回戦は二試合行われ、二名がシード権を獲得することができます！」

地和
「風魔選手は二回戦でシード権を獲得しておりますのでシード権はなしです！」

蒲公英
「それでは此処で一旦休憩に入りますので勝ち上がった選手の皆さんは一旦、事務室に来てください！」

地和
「それ以外の皆さんは、食事などを楽しんでください」

観客
「「「「ワァァァアア！！」」」」

～事務室～

此処は天下大武闘館の事務室。
既にそこには勝ち上がった選手が揃っていた。

？？？
「皆の者、まずはおめでとう」

そう言って皆を祝福した一人の女性。

銀髪で豪毅な気性

酒好きで天真爛漫な性格の女性

名を黄　祭（こう　さい）

恋ＢＡＲＡ学園の２－Ｃの担任である。

祭

「お主らには今からクジを引いて貰おう。紙には？・？・？、と書いてある番号が入っておる。同じ番号になった者が次の対戦相手だ」

そして箱を取り出した祭。

祭

「因みに？は一試合目、？は二試合目じゃ。そして？はシード権の番号だ。風魔、まずは？が入っていない時点で紙を取るがよい」

風魔

『承知』

ガサガサッ　ヒョイッ

祭

「まだ見るでないぞ。ならば主らも取るがよい」

ガサガサッ　ヒョイッ

全員、紙を取り出した。

祭
「よし、見ても良いぞ」

祭の言葉で一斉に中身を見た。

政宗
「？だ」

家康
「ワシは？だ」

恋
「……？」

風魔
『？』

幸村

「？でござる」

三成
「……？だ」

祭
「ふむ、一試合目は徳川と呂、二試合目は石田と風魔、そしてシードが伊達と真田か」

対戦カードが決まった。

祭
「ならば徳川と呂は華佗のところで行って回復でもしておけ」

家康
「心得た」

恋
「……（コク）」

祭
「では解散だ」

そして皆は事務室を出ていった。

祭

（さてこの組み合わせ……どうなるか儂も楽しみよ）

祭は歩きながらそう思っていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～凶斬軋弓・次戦確定～（後書き）

少し対戦が短いですね……すいません。

次回からは長めに書きますので。

さぁ次回は家康ｖｓ恋です！

楽しみにしててください！

それでは、また次回！

～絆葵武高～

～あらすじ～

三成、勝利！
三回戦、開始！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「会場の皆さん！　これより三回戦を始めたいと思います！」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

地和
「それでは選手、入場！」

地和の掛け声と共に家康と恋が入って来た。

地和
「一試合目は家康選手と恋選手の対決です！」

蒲公英

「一体どんな闘いが展開されるのでしょうか！」

島津
「恋どんは武力以外も、野性的な勘もあるんしゃい」

秀吉
「だが徳川とやらも拳一つで勝ち残った猛者……その拳に何を託すかが勝負の分け目よ」

蒲公英
「なるほど、解説ありがとうございます。それでは、第一試合目、開始！」

カァァアン！

第一試合、開始！

家康
「恋殿、良い試合にしよう」

恋
「……ん」

両者は握手をし、一旦距離を置いた。

家康
「では往くぞ！」

恋
「……こい」

家康
「ハァア！」

ブォン！

そして家康は一気に駆け出し、拳を思いっきり振りかぶった。

恋
「……」

ガキィン！

対する恋は簡単に受け止める。

家康
「やはりダメか……ならば！」

グッ

家康
「東風の乱舞ッ！」

シュバババババッ！

次に家康は嵐のような拳の連打を繰り出した。

だが……

恋
「……甘い」

ガガガガキィンッ！

恋は難なく全てを防いだ。

家康
「何とッ！？」

恋
「……いく」

ブォオン！

家康
「クッ……！」

ガキィイン！

恋
「……まだ」

ブォオン！　ブォオン！

家康は防ぐので精一杯だが、恋はそんなのお構いなしに猛撃を開始する。

家康
（これが恋殿の一撃か……重く、鋭い攻撃だな）

家康は防ぎながらそう思っていた。

家康
（今は耐えよ……必ず機会は訪れる筈だッ！）

恋
「……何もしないと、負ける」

ガキィイン！　ガキィイン！

恋の猛撃に家康は耐える。
いつか訪れる好機を信じながら。

恋
「……そろそろ、終わりにする」

グッ

痺れを切らした恋は終わらせる為、方天画戟を強く握り……

ビュオォォォン！！

渾身の一撃を繰り出した。
その一撃は風を切り裂く威力であった。

だが……

家康
「（……今だ！）　ハッ！」

バウッ

家康はその一撃を待っていた。
そして家康は高く飛んで回避した。

恋
「ッ！」

恋も驚きを隠し切れていない様子。

そこへ……

家康
「せやッ！」

ブォン！

飛んでいた家康が両手でハンマーの様に振り下ろす。

恋
「……まだ」

ガキィン！

恋も辛うじてコレを防ぐ。

家康
「まだだ！　一気に往くぞッ！」

素早く着地し、恋に向かって駆け出す家康。

家康
「虎牙玄天ッ！」

ドカッ！

恋
「……ッ！？」

家康
「ハァア！」

シュウン！

一発喰らった恋は片膝をつき、家康はもう一度拳を繰り出した。

恋
「……喰らわない」

バウッ！

コレをジャンプして避ける恋。

家康
「そうきたか…ならば！」

バウッ！

家康も恋と同じくジャンプした。

家康
「往くぞッ！」

恋
「……負けない」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

そして空中での激しい打ち合いが始まった。

地和
「何という事でしょう！　そのまま空中戦に持ち込んだ両者！」

蒲公英
「どういう原理で飛んでいるの？　というツッコミはなしで！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

この空中戦に会場は盛り上がっていた。

家康
「フッ！」

恋

「……！」

ガキィン！　ガキィン！　ガキィン！

互いに一歩も引かないぶつかり合い。

恋
「……」

ブォンブォンブォン！

此処で恋は攻撃スピードを上げた。

家康
「クッ……ダメかッ！？」

恋
「……終わり」

ガキャァアン！

家康

「しまっ……」

恋
「……ん」

ブォオン！　バキィ！

家康
「グハッ！」

ドカァァアン！！

家康のガードを崩し、その隙を恋は思いっきり振り下ろした。
家康はまともに喰らい、そのまま叩き落とされる。

恋
「……終わった」

シュタッ

そう言って恋も降りてきて、家康の落ちた場所まで近付いた。

恋
「……！」

カチャッ

しかし恋は何かを感じ取り方天画戟を構える。

恋
「……くる」

そう言って辺りの砂埃が消えると……

家康
「忠勝よ……お前の力を借りるぞッ！」

家康が自分の身長を遥かに上回る先端がドリル状の槍を持っていた。

そして……

家康
「絆一願ッ！！」

バシュゥゥゥウッ！

恋目掛け投げ出された。

恋
「……ッ？！」

ガガガガガガッ！

恋はその槍を防御した。

だが、その攻撃に耐えきれず……

ガキャァアアン！

方天画戟を手放されてしまった。

恋
「……負けた」

地和
「此処で恋選手、降参ですッ！　よってこの試合、家康選手の勝利です！」

観客
「「「「ワァァアア！！」」」」

家康
「いや～恋殿の攻撃には冷や冷やしたぞ」

恋
「……でも、負けた」

家康
「すまない。これも闘いなのでな」

恋
「……仕方ない」

家康
「ならばまた闘おう。恋殿」

恋
「……（コクッ）」

そして両者は舞台を降りていった。

～天下大武闘館・廊下～

音々音
「恋殿～ッ！」

恋
「……ねね」

恋が廊下を歩いていると音々音が走り寄ってきた。

さらに……

元親
「惜しかったな、恋」

元親もやってきた。

恋
「……元親も」

音々音
「ムッ！　どうしてお前が此処にいやがるのですか！？」

元親
「俺が恋の心配しちゃいけねぇか？」

音々音

「お前は徳川とやらの所に行けなのですッ！」

元親
「そう言うなって」

恋
「ねね、ウルサい」

音々音
「れ、恋殿～」

音々音は恋に注意され落ち込んだ。

元親
「にしても面白れぇー試合だったぞ」

恋
「……でも、勝ちたかった」

元親
「……そうかい」

そう言って元親は恋の頭に手を乗せ……

元親
「なら次に家康と闘う時は勝てるといいな」

と、撫でながら恋に言った。

恋
「……元親」

元親
「ん？」

恋
「元親は家康とどっちが強い？」

恋は素朴な疑問を聞いた。

元親
「家康と？　それは……」

元親は答えようとしたが……

元親
「（そういえば家康と闘ったことねぇな）　……すまねぇがまだわかんねぇな」

恋

「……わかった」

元親はその質問に答えられなかった。

元親
「そんじゃあ戻るとすっか」

恋
「……（コクッ）」

音々音
「恋殿～ッ！　ねねもいきますぞー！」

そして元親達は観客席に戻っていった。

その中で元親は……

元親
（家康と……か）

と、元親は恋の言葉を胸にしまい、戻るのであった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～絆葵武高～（後書き）

最近更新の遅い作者です……すいません。

家康の勝利で始まった三回戦。

やっと家康が活躍しました！

次回は二試合目を書きたいと思います。

次回はもう少し早く載せたいと思います。

それでは、また次回！

～瞬斬凶風～

～あらすじ～

家康、勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「さぁ皆さん！　熱い一試合目を繰り広げた三回戦！　これは次の試合も期待できます！」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

地和
「次の試合は風魔選手と三成選手の対決！　果たして人間の目に追いつけない闘いはどうなるのでしょうか！？」

島津
「これは良かな試合が見れっど！」

秀吉
「どちらも速さに特化した攻撃。同じような選手だな・・・三成よ、奮起せよ」

三成
「お任せください秀吉様！」

蒲公英
「流石は秀吉の左腕！　こんな三成選手は初めて見ました！」

地和
「それでは二試合目、開始！」

カァァアアン！

二試合目、開始！

三成
「秀吉様の前で醜態は晒せぬ……すぐに斬首してやる！」

風魔
「……」

そして両者、得物を構えて……

ガキィイン！

相俟った。

三成
「死ねェェエ！」

風魔
「……」

ガガキィン！　ガガキィン！　ガガキィン！

更に打ち合いが激しくなる両者。
神速とも言える斬撃の応酬。

風魔
「……」

スパァァアン！

此処で風魔は一旦離れたと思った瞬間、すぐさま真空の突進をした。

三成
「号哭ッ！」

スパァァアン！

だが三成も刀で突撃し、再び相俟っていた。

三成
「なめるなッ！　慙悔ッ！」

シュバババババッ！

無数の斬撃を繰り出す三成。

風魔
「……」

シュン　シュバババババッ！

対する風魔はその瞬間に消え、辺りに斬撃を繰り出した。

ガガガガキィンッ！

斬撃の刻み合う音色とも言える斬り合いが続く試合。
この闘いに会場は驚愕していた。

翠
「す、すげー…（汗）」

愛紗
「これが…二人の実力か」

鈴々
「速くてシュバーンなのだ！」

星
「それではわからんぞ、鈴々よ」

蓮華
「だがあの“凶王三成”と互角の闘いをしている。まさに“風の悪魔”」

幸村
「見事な闘いよ…佐助、お前はこの闘いを見てどう思う？」

佐助
「いや～俺様には未知の領域だね～」

思春
「お前も相変わらずだな」

佐助

「無理なもんは無理だからな」

幸村
「……そうか」

佐助
「……」

佐助は口ではそんな事を言うが何か思い詰めた目をしていた。

三成
「これで終わりだァ！」

風魔
「……」

シュン

一歩も引かない両者の斬撃。
だが此処で風魔は再び姿を消す。

三成
「チィッ！　ちょこまかと！」

シュウン！

三成
「ッ！」

ガキィン！

姿のない斬風・・・コレが風魔の真骨頂である。
だが三成もまだ負けた訳ではない。

三成
（まだだ・・・奴の首にはまだ届かん）

ガキィン！

そう思いながら斬風を防ぐ三成。

そして・・・・・

三成
「（・・・今だッ！）　斬滅ッ！」

ズバァァアン！

三成は風魔の気配を感じ取り、そこに強烈な斬撃を放った。

しかし……

風魔
「……」

風魔は斬滅の放った方とは逆から現れ、三成目掛け突進した。

三成
「……かかったな」

風魔
「……」

だがこれは風魔を誘い込む罠であった。

三成
「断罪ッ！」

スパァァアン！

三成は風魔の突進を身を翻しながら避け、居合と同時に斬り裂いた。
風魔はそのまま断罪の勢いで吹き飛ばされてしまった。

風魔
「……」

ザッ……　ザッ……

その後風魔は辛うじて立ち上がり、フラフラしながら三成のところまで進む。

三成
「……」

それを黙って見る三成。

そして……

風魔
「……」

ドサッ

三成の目の前で力尽きた。

蒲公英
「此処で風魔選手、力尽きたぁー！！　この試合、勝者は三成選手です！」

観客
「「「「ワァァァアア！！」」」」

地和
「其れと同時に今日の試合は以上です！　明日は準決勝！」

蒲公英
「様々な試合に勝ち上がってきた猛者達！　果たして“優勝”という頂点に立つのは誰なのでしょうか！？」

地和
「期待して明日も来てください！」

感客
「「「「ワァァァアア！！」」」」

月
「よ、良かったです～」

大谷

「是で三成は準決勝進出か……メデタキな」

白蓮
「それじゃあ対戦相手は……」

詠
「徳川ね」

～天下大武闘館・廊下～

三成
「……」

試合が終わり三成は一人、月達がいる観客席に戻っていた。

そこへ……

家康
「おめでとう、三成よ」

三成
「……誰だ貴様は？」

家康が現れ、三成に声を掛けた。

家康
「おっとすまない、ワシは家康。次の試合の対戦相手だ」

三成
「・・・何の用だ？」

家康
「いや、特に用事はないが・・・・・お主とは一度話してみたかったのでな」

三成
「私は話す気はない・・・失せろ」

家康
「直球に言うな～・・・・・・なら」

スッと手を差し出す家康。

三成
「・・・・・何だこれは？」

家康
「握手だ」

三成
「何の為に？」

家康
「次に闘う礼儀としてだ」

三成
「くだらん」

そう言って三成は家康の手を払い除けて立ち去ろうとした。

家康
「待ってくれ、三成」

だが家康は三成の肩を掴んだ。

三成
「さっきから何だ!?　いい加減にしないと斬滅するぞ!」

そんな家康に苛立ちを覚える三成。

家康
「そう怖い顔をするでない。最後に聞きたい事がある」

三成
「……ならば早く言え」

家康
「三成よ、お主は何の為に闘う？」

三成
「何の為に・・・だと？」

家康
「ああ」

三成
「そんなもの秀吉様の為に決まっている」

家康
「秀吉先輩の？」

三成
「私は秀吉様の為に生きている・・・そして私が勝つ事で秀吉様が喜びになる。それだけだ」

家康
「それではダメだ、三成」

三成
「・・・・何だと？」

家康
「お前はお前の為に生きなくては・・・いつか自分を見失ってしまうぞ」

三成

「貴様に何がわかるッ！」

家康の発言が気に食わなかった三成は怒鳴りつけた。

三成
「今の発言を撤回しろ！」

家康
「……だが、これは三成の為に言っているのだ。わかってくれ」

三成
「私の為だと？　ふざけるなッ！」

そして三成は家康に背を向け……

三成
「私は貴様を許さない……死んで後悔するのだな」

と、言い残し去っていった。

家康
「三成……」

家康は三成の背中を見続けるのであった。

To be continued……

～瞬斬凶風～　（後書き）

やっと家康と三成の会話シーンが書けました。

この作品では秀吉が健在なので三成は家康に興味を持っていませんでした。

だが、家康を憎まない三成は三成とは言えませんので形は違いますがそれはしっかり書くつもりです。

次回はＢＡＳＡＲＡには外せない二人の闘いです！

それでは、また次回！

～蒼紅激闘～

～あらすじ～

三成、勝利！

～天下大武闘館・会場～

地和
「会場の皆さん・・・遂に！　この時がやってきました！」

蒲公英
「様々な闘いのドラマがありました・・・その中で勝ち残った猛者達の闘いが今、始まります！」

地和
「新生ＢＡＳＡＲＡ大会、準決勝・・・開幕です！」

ワァァアア！！

地和
「長居は無用！　早速、選手の入場です！」

地和の掛け声により二名が入場された。

蒲公英
「第一試合、東から入場は蒼き独眼竜！　伊達　政宗！」

華琳
「頑張りなさい、政宗」

政宗
「ＯＫ」

地和
「対する西からは、紅き虎の若子！　真田　幸村！」

蓮華
「頑張ってね、幸村」

幸村
「おぅ！」

蒲公英
「そして解説はこの方！」

信玄
「よろしく頼む」

地和
「一体この闘いはどうなってしまうのでしょうか！？」

蒲公英
「準決勝、第一試合……開始です！」

カァァアン！

準決勝、開始！

幸村
「政宗殿」

政宗
「アン？」

幸村
「一つお願いがある」

政宗
「……言ってみな」

幸村
「某は政宗殿の本気を見たい…故にこの試合、全力でぶつかり合おうぞ」

政宗
「……そいつはちげーな」

幸村
「違う？」

政宗
「俺が本気を出すんじゃねー……お前が本気にさせるんだ。」

幸村
「……ならば！　我が魂を政宗殿にぶつけるのみッ！」

政宗
「Ｈａッ！　随分と燃えてるじゃねーか！　嫌いじゃないぜ」

幸村
「うぅぅおぉぉぉぉ！！　往くぞッ！」

政宗
「Ｃｏｍｅ　ｏｎッ！！」

ガキィイン！

両者がぶつかり合った瞬間、地面に亀裂が走った。

幸村
「烈火ァァァア！！」

政宗
「ＣＲＡＺＹ　ＳＴＯＲＭッ！！」

ガガガガガガッ！

更に両者は怯む時間もなく猛撃を繰り出す。

幸村
（これが政宗殿の攻撃か！？　一撃の重さが違いすぎる！）

政宗
（コイツ……スピードの割にパワーもありやがる）

幸村
「だがッ！」

政宗
「そんならッ！」

二人
「「それを超えるだけだッ！！（のみッ！！）」」

ガキャァアン！

両者は互いに弾き飛ばした。

幸村
「火走！」

政宗
「ＭＡＧＮＵＭッ！」

ガキィィイイン！！

と思いきやすぐさま距離を詰め、刃を交えた。

幸村
「鳳凰落！」

政宗
「ＤＥＡＴＨ　ＦＡＮＧ！」

ガキィイン！　ギギギギッ！

政宗
「Ｈａッ！　中々やるじゃねーか！」

幸村
「貴殿こそ！　必ずや本気にしてみせようぞ！」

政宗
「上等だ！　やってみせな！」

幸村
「千両花火ィィイ！」

ブォオン！

幸村は自分の最大限の力を朱羅に籠め、政宗に振りかぶった。

政宗
「アメェな！」

ガキィン！

だが、コレを軽く受け止めた政宗。

幸村
「何と?!」

政宗
「今度はコッチの番だ！」

そう言って政宗は景秀に力を溜め……

政宗
「ＴＥＳＴＡＭＥＮＴッ！！」

ズシャァァァアン！

絶大な一撃を繰り出した。

幸村
「グハァアッ！！」

ドカァァアン！

その一撃は直撃し、幸村を吹き飛ばした。
政宗は決着がついたと思い景秀をしまった。

政宗
「Ｇａｍｅ　ｏｖｅｒ・・・だな」

蒲公英
「おぉーっと此処で決着がついたか！？」

信玄
「いや、まだよ」

地和
「へ？　それってどういう・・・・・」

幸村
「ぬううおおォォォオッ！」

政宗
「ッ？！」

政宗が叫び声の方に振り向くと、そこには幸村が立ち上がっていた。

幸村
「み、な、ぎ、るあァァァア！！！！」

政宗
（コイツは……）

幸村
「虎炎ッ！」

ゴォオ！

政宗
「ガッ！？」

ドカァァアアン！

幸村は炎を纏った拳を政宗にぶつけ、先程の幸村と同じように吹き飛ばした。

地和
「な、なんという事でしょう！？　先程決着がついたかと思われましたが、幸村選手が立ち上がり政宗選手をふきとばしました！！」

信玄
「それでこそ幸村よ」

蒲公英
「今度こそ決着が……」

信玄
「甘い、よく見てみよ」

政宗
「ＷＡＲ　ＤＡＮＣＥッ！！」

砂埃が晴れると、政宗が六本の景秀を構えていた。

政宗
「真田…アンタは今までで一番の相手かもしんねぇーな」

幸村
「それが、政宗殿の本気か？」

政宗

「そうだ……これで満足か？」

幸村
「……否！　それを越えてこそ、この幸村の心は満たされる！！」

政宗
「……Ｈａ！　なら、俺に傷の一つでもつけてみろよなぁ！」

幸村
「ウオオオオオッ！！　熱血ゥゥゥ大噴火ァァァア！！！」

叫び声と共に幸村は気合いを溜め、爆発させた。

幸村
「参るぞ！」

政宗
「ＯＫ！　壮大なｐａｒｔｙなしようぜ！」

二人
「「うおおぉぉお！！」」

ガシャァァアン！！

激突した瞬間、会場は大きく揺れた。

政宗
「Ｘ－ＢＯＬＴ！！」

幸村
「大車輪ッ！！」

ガキャァアン！

最早二人の闘いは異常なモノであった。

幸村
「だ・て・ま・さ・む・ねぇぇぇえ！！」

政宗
「真田・・・幸村アァア！！」

だが、それ以上に熱い闘いでもあった。

政宗
「ハァアア！！」

幸村
「でぇぇぇやぁぁぁぁあ！！」

激突する度に衝撃が会場全体に響き渡る。

政宗
「さぁ！　そろそろｆｉｎａｌｅとしようじゃあねぇーか！」

幸村
「ならば！　我が魂の一撃を受けてみよ！」

政宗
「Ｃｏｍｅ　ｏｎッ！　最後に立つのは…俺か、アンタか！」

幸村
「うおおおおッ！！」

政宗
「ハァァアア！！」

ダッ！

政宗
「Ｉｔ' ｓ　ｏｎｅ　ｅｙｅｓ　Ｄｒａｇｏｎ!!!」

幸村
「巡れ焔魂、螺旋の如く!!!」

ドガァァァアン!!

互いの渾身の一撃がぶつかり合った瞬間、衝撃波が爆発へと変わり、
地面を抉り、辺りは砂埃に覆われた。

地和
「ゴホッゴホ……」

蒲公英
「け、結果は!?」

信玄
「……」

やがて砂埃が晴れて、視界が良好になった。

政宗
「ハァ…ハァ…」

幸村
「ハァ…ハァ…」

すると舞台では両者は膝をつき、息切れをしながら、睨み合っていた。

幸村

「やはり‥‥政宗殿の魂は、強いでござる」

政宗
「Ｈａ‥‥アンタの魂も熱いじゃねぇーか」

幸村
「これほどまで‥‥我が魂が燃えたのは、初めてでござる」

政宗
「俺もだ」

幸村
「そう‥‥か‥」

政宗
「‥‥‥‥‥‥‥‥」

幸村
「だが、この‥‥幸村‥まだまだ‥‥‥熱い気持ちが足りなかった‥」

ドサッ

そう言って幸村は倒れた。

政宗は辛うじて立ち上がり……

政宗
「Ｒｅｓｔ　ｉｎ　ｐｅａｃｅ…ゆっくり休みな」

と倒れた幸村に言い、景秀を仕舞った。

地和
「……（汗）」

信玄
「勝敗は？」

地和
「：ハ！　し、勝者、政宗選手です！！」

ワァァアア！！！

勝者、政宗！

佐助
「旦那ッ！！」

佐助は幸村の処へと駆け寄った。

幸村
「うぅ・・・・」

佐助
「あ～あ、無理しちゃって・・・そんじゃ運びましょうか」

そして佐助は幸村を医務室に連れていった。

～天下大武闘館・廊下～

政宗
「・・・・・クッ！」

政宗は廊下で歩いている途中で壁に手を付け、辛苦の顔をした。

政宗

（やっぱダメージは大きいか……実際、俺が倒れていてもおかしくなかったぜ）

どうやら先程、幸村との闘いでダメージを負っていた。

政宗
「真田幸村……か」

だが、その顔には何処か満足していた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～蒼紅激闘～　（後書き）

ＢＡＳＡＲＡと言ったらこの二人の闘いですね。

次はどういった感じになるのかはお楽しみに！

それでは、また次回！

～陰陽月日～

～あらすじ～

政宗、勝利！

～天下大武闘館・会場～

蒲公英
「なんという準決勝でしょう！！　いきなり熱い闘いが繰り広げられました！」

地和
「果たして次はどのような闘いになるのでしょう！？　選手、入場！」

地和の掛け声と共に、家康と三成が入場する。

蒲公英
「東からは絆の将！　徳川　家康！」

桃香
「家康くーん！　頑張ってー！」

家康
「ああ！」

地和
「それに対するは凶王三成！　石田　三成！」

月
（みっちゃん……）

三成
「……」

蒲公英
「一体どのような試合展開になるのでしょうか！？」

地和
「注目です！」

信玄
「速さなら石田が有利。しかし、相手は拳一つで勝利する兵。この試合もまた、楽しみよ」

蒲公英
「それでは…レディー、ゴォー！」

カァァアン！

第二試合、開始！

三成
「貴様だけは……許しはしない！」

ダッ！

三成
「号哭ッ！」

スパァァァアン！

家康
「虎牙玄天！」

ガキィィイン！

拳と刀がぶつかり合い、試合は開始された。

三成
「私を侮辱した罪…断じて許さない！」

家康

「三成、まずは話を‥‥」

三成
「黙れ！　貴様の言葉など耳障りだ！」

ギギギギッ！

家康
「クッ‥‥‥せやッ！」

ガキィン！

家康は三成を押し返し、一旦距離を置く。

三成
「チィッ！」

家康
「天道突き！」

バシュゥゥゥウン！

三成

「なめるな！　鬱屈！」

シュン　スパァァアン！

家康
「グッ！」

ガキィィイン！

互いに一歩も引かない攻防。
両者の強さは同じのようだ。

家康
「三成…何故、人と関わろうとしない？」

三成
「またか……貴様には関係ない」

家康
「確かに関係ないかもしれない。だが、このままだとお前が…」

三成
「諄い！　私は、秀吉様と半兵衛様の為に生きている！　それ以外など知るか！」

家康
「……では、言い方を変えよう」

家康は真っ直ぐな目で三成に……

家康
「何故、自分に嘘をつく？」

心の中で思っていた事を告げる。

三成
「……何だと？」

家康
「本当に秀吉先輩や半兵衛先輩だけで良いのなら決して人を受け入れない。だが、三成…お前は違う」

三成
「黙れ……」

家康
「お前の周りにも絆はある……お前を支えてくれる絆が！」

三成
「黙れと言っている！！」

三成は家康に怒鳴りつけ、再び刀を構えた。

家康
「やはりそうか……お前は不器用なのだな」

そんな中、家康も拳を構え……

家康
「さぁ来い三成！　お前の全てをぶつけよ！」

三成にそう言って駆け出した。

三成
「貴様は必ず……殺す！」

対する三成も駆け出した。

家康
「ハァア！」

三成
「フン！」

ガキィイン！　ガキィイン！　ガキィイン！

激しい打ち合いに会場は……

桃香
「スゴイ……（汗）」

愛紗
「やはり家康殿はお強いですね」

元親
「ダッハハハ！　これでこそ家康よ！」

焔耶
「お館ーー！　頑張れー！！」

凪
「師匠……」

朱里
「はわわ…頑張ってください！」

雛里
「あわわ……」

月
「みっちゃん‥‥」

詠
「何してるのよ、月」

月
「詠ちゃん？」

詠
「応援してあげないと、思いも伝わらないわよ」

月
「‥‥‥うん！」

美羽
「主様ーー！　頑張るのじゃー！」

七乃
「頑張ってくださぁーい！」

月
「みっちゃん！　頑張って！」

秀吉
「半兵衛よ、この闘いをどう見る？」

半兵衛
「僕はあまり武芸はわからないけど‥‥少なからず三成は動揺して

いるね」

秀吉
「……やはりな」

半兵衛
「でも、僕としては嬉しい事でもあるかも…秀吉は？」

秀吉
「我も同じよ……だが、この闘いには勝利して貰いたい」

そして、再び舞台へと視線を戻す。

家康
「東風の乱舞ッ！」

三成
「慙愧！」

ガガガガガッ！

家康
「やるな！」

三成
「貴様だけは…貴様だけはぁー！！」

ダッ！

三成
「断罪！」

スパァァァアン！

家康
「クッ……！」

ガキィイン！

三成
「終わりだ…斬滅ッ！！」

ズバァァアン！

家康
「グハァ！？」

家康は三成の斬撃に吹き飛ばされた。

三成
「これが貴様の罪だ！」

そう言って三成は勝利を確信していた。

だが……

家康
「油断はしない方が良いぞ」

三成
「ッ？！」

そう聞こえた時には既に家康は三成の懐まできていた。

家康
「セヤァ！」

ボゴォ！

三成

「ゴフッ！」

家康
「天道突きッ！」

バシュゥゥウン！

三成
「ガハッ！？」

家康の至近距離からの攻撃をまともに喰らった三成。
そのままの勢いで吹き飛ばされ、意識が朦朧とする。

三成
（私が…負けるだと…秀吉様の目の前で醜態を晒すだと…認めん！　そんな事、断じて認可しない！）

グググ……

三成
「コロス…コロシテヤルゾォォオォォオォォオォォオォォオォォオォォオォォオォォオォォオォ！！」

ゴォォオ！

家康
「ッ！　何だこれは?！」

三成は立ち上がった瞬間、辺りに殺気が充満する。
その姿は殺気で黒くなり、目も紅く光っていた。

三成
「ガァァア！」

シュウン！

家康
「（速い！?）　クッ！」

ガキィイン！

三成
「デェェヤァァァア！！」

ザシュ！

家康
「ガッ！？」

三成の予測不可能な攻撃に家康は受け続けていた。

家康
「ハァ…ハァ…」

ガクッ

防ぎれない攻撃に家康は朦朧としながら地面に膝をつく。

三成
「シネェェェエ！」

家康
「ッ！」

ガキィイン！

三成

「チッ！」

家康
（まだ・・・勝機はある）

しかしながら、家康はこの状況でも諦めていなかった。

家康
（この技は一度しかできない・・・・・勝負は一回だ！）

そう思った家康は・・・・・

家康
「ハァァア」

全身に氣を溜め始めた。

しかし・・・・・

三成
「オワリダァァア！」

その最中に三成が襲ってきた。

家康
「三成‥‥これがワシの全てだ！」

三成
「‥‥‥‥！」

だが家康も氣を溜め終えていた。

そして‥‥‥

家康
「葵の極み！！」

バシュウウウウウウン！！

三成
「グハァァァ！！」

家康の周りに三つ葉葵が発生し、そこから広大な氣が放たれる。
三成はその攻撃を喰らい、吹き飛ばされてしまった。

家康

「……グッ！」

技を終えた家康は片膝をつき、辛苦の顔をしていた。

家康
「ハァ‥ハァ……三成は?」

家康は三成がどうなったか気になり顔を上げた。

すると……

三成
「認めるか……」

家康
「!?」

そこにはボロボロの三成が立っていた。

三成
「貴様が‥‥勝つ事など‥断じて」

フラフラながらも家康に近付く三成。

家康は身体が限界に達しており立ち上がる事が出来ないでいた。

家康
「此処までか……」

三成
「さぁ……私に……斬滅……され……ろ」

ドサッ

家康の目の前に到着した瞬間、三成は気絶した。

家康
「…勝った……か」

ドサッ

だが、間もなくして家康の視界が真っ暗になった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

～陰陽月日～（後書き）

……こんな展開ですいません。

まさかの引き分けです。

あまり納得できない方もいますが今回の武闘大会編は幕を下ろします。

次回は後日談を載せて、武闘大会編を終わらせたいと思います。

それでは、また次回！

～後日談～

～？？？～

家康
「……ん？　此処は？」

家康が目を覚ますと全く知らない部屋であった。

家康
「ワシは確か……三成と闘っていた筈だが」

家康は困惑していると……

ガチャッ

桃香
「……あ！　家康君！」

家康
「桃香？」

突然扉が開き、桃香が入ってきた。

桃香
「大丈夫？」

家康
「ああ、何とかな。ところで此処は何処だ？　それに試合は？」

桃香
「あ、そうか！　家康君は何も知らないのか」

家康
「何も？」

桃香
「うん・・・此処は病院だよ」

家康
「病院？」

桃香
「そうだよ・・・家康君はあの試合の後、気絶しちゃってすぐに病院に運ばれたんだよ」

家康
「そうだったのか・・・・・結果は？」

桃香
「二人共、気絶しちゃったから引き分けで、優勝は政宗君になった

よ」

家康
「……そうか」

桃香
「……家康君」

桃香は家康が落ち込んでしまったと思い、励ましの言葉を考える。

しかし……

家康
「アッハハハッ！　そうかそうか、ワシもまだまだだな！」

桃香
「……へ？」

家康
「ん？　どうした、桃香？」

桃香
「あ、いや……こんな結果で悔しくないのかなって」

家康
「ああ、その事か。確かに悔しい……だが、落ち込みはしない。
それがワシの決意だ」

桃香
「家康君……」

ガチャッ

家康と桃香が会話をしていると突然扉が開き、誰かが入ってきた。

入ってきたのは……

政宗
「……よぅ」

家康
「……政宗」

政宗であった。

政宗
「……」

家康
「……」

政宗が入ってきた事により、重たい空気が流れ、静寂な時間が訪れ

ていた。

桃香
「えぇーっと・・・と、とりあえずみんなに知らせてくるね（汗）」

桃香はその雰囲気に耐えきれず、部屋から出ていく。

しばらくして・・・・・

家康
「政宗、まずは優勝おめでとう」

家康が沈黙を破った。

政宗
「・・・・・嫌みか？」

家康
「そんなんではない・・・ワシは純粋な気持ちを言ったまでだ」

政宗
「・・・・・確かに俺は優勝した。だが」

家康
「ん？」

政宗
「これが望んだ優勝か？」

家康
「……」

政宗
「答えはＮＯだ。この優勝には何も意味がない。俺が言いたい事がわかるか？」

家康
「本当の決着をつけたい……という事か？」

政宗
「そうだ」

家康
「……ならば一つ聞きたい事がある」

政宗
「Ａｈ？」

家康
「何故、三成ではなくワシに言うのだ？　結果だと引き分けの筈だが」

政宗
「……そんな事はアイツが一番知っている。あの闘いの敗者くらいな」

家康
「……そうか」

政宗
「とりあえずは体調を戻すんだな。それからでも決着は遅くねぇーからな」

家康
「心得た」

政宗
「そんじゃあな……ゆっくり休みな」

そう言って政宗は部屋から出ていった。

家康
「感謝する、政宗よ」

家康がいなくなった政宗に感謝する。

そして間もなくして……

桃香
「家康くーん！　みんな連れてきたよー！」

愛紗
「家康殿！　大丈夫ですか！？」

朱里
「はわわ！」

雛里
「あわわ……」

焔耶
「お館ァーー！」

凪
「師匠ッ！！」

桃香達が一斉に入ってきた。

家康
「おお！　ワシは大丈夫だぞ！」

その後、家康達は雑談を始めるのであった。

～翌日・武田道場～

幸村

「うおぉぉぉお！！」

蓮華
「ハァア！！」

武闘大会が終わり、学園は二日間の休日が出た。
その休日に幸村と蓮華は武田邸の道場“武田道場”で修行しており、
只今、模擬戦を行っていた。

幸村
「おりゃあッ！！」

蓮華
「しまった！？」

蓮華の剣が飛ばされ、幸村との模擬戦は終了した。

信玄
「両者、それまで！！」

蓮華
「ふぅ……やはり、幸村にはまだ勝てないか」

幸村
「そんな事はないでござる」

信玄
「その通りよ、少しながらも幸村に近付いておる」

蓮華
「ありがとうございます」

信玄
「焦る必要などない。修行とは自分の目では見えない・・・だが、他の者ならばその努力はわかるモノよ」

蓮華
「はい、わかりました」

信玄
「うむ・・・」

幸村
「お館様！　この幸村、全力で修行を」

信玄
「馬鹿者ォォォォォオオオオオ！！」

幸村
「ごふぁあ！？」

信玄は幸村を殴り飛ばした。

信玄

「その傲慢な心こそ敗北となる原因と知れ！　幸村！」

幸村
「も、申し訳ございませぬ！　お館様！」

信玄
「幸村ァア！」

幸村
「お館さぬわァァア！」

信玄
「幸村ァア！！」

そして殴り合いが始まった。

蓮華
「相変わらずね（汗）」

思春
「次は私なのだが・・・」

穏
「大丈夫ですよ～、幸村さんは強いお方ですから～」

天和
「ユッキー、頑張ってー」

亞莎
「だだだ大丈夫でしょうか？（汗）」

明命
「……（キョロキョロ）」

蓮華
「どうしたの明命？　そんなに周りを見て」

明命
「あ、いや、先程から猫神様がいらっしゃらないのが気になりまして……」

蓮華
「佐助が？　そういえばさっきから見ていないわね」

思春
「模擬戦の前はいらっしゃってましたが…何処へ行ったんだ？」

穏
「トイレじゃないんですか？」

蓮華
「……まぁその内に戻って来るだろう」

そして蓮華達は幸村と信玄の殴り合いを止めるのであった。

～華琳邸～

華琳
「桂花」

桂花
「はっ」

華琳
「政宗は？」

桂花
「只今、徳川の見舞いに行っております」

華琳は今、部屋で紅茶を飲みながら寛いでいた。

華琳
「そう・・・なら私は一足先に楽しませて貰おうかしら」

そう言って華琳は部屋の窓から中庭を眺める。

中庭で行われていたのは・・・・・

秋蘭
「フッ！」

霞
「おらぁぁあ！」

秋蘭ｖｓ霞と……

春蘭
「ハァァア！」

恋
「……ん」

春蘭ｖｓ恋の試合が行われていた。
この試合は華琳が提案をして、恋と霞が賛同してくれた事により実現する事が出来た。

更に……

元親
「ダッハハハ！　ウチの嬢ちゃん達は血気盛んだな！」

小十郎
「全くだな」

元親と小十郎の姿があった。

元親
「そろそろやるかい？　竜の右目さんよ」

小十郎
「やる前に一つ聞く……何故この話に乗った？」

元親
「……闘うのに理由なんかねぇさ」

小十郎
「……それもそうか」

小十郎は木刀を構えた。

小十郎
「来い。生半可な気持ちで勝てると思うな」

元親
「そんな気持ちはさらさらねぇ！　悪鬼が喰らうか、竜に喰われるか……そんだけだ！」

そして鬼と竜の闘いが始まった。

それを見ていた華琳は……

華琳
（ふふふっ……こうでなくては面白くないわ）

かなり楽しんでいた。

～学園・剣道場～

華琳が様々な闘いを観戦している時、学園では……

華雄
「ゼェ…ゼェ…」

剣道場で華雄が息切れをしていた。

華雄
（コイツら……人間か！？）

華雄は目の前の光景に驚愕する。

目の前で行われていたのは……

島津

「チェストォォォ！」

三成
「フン！」

島津と三成が試合だった。

月
「だ、大丈夫かなぁ……（汗）」

詠
「心配しすぎよ、月」

美羽
「主様ー！　頑張るのじゃあ！」

七乃
「頑張れー！」

白蓮
「……スゴいな（汗）」

その試合を見守っている月達もかなり驚いていた。

島津
「ブァッハッハ！　おまはんの太刀筋、良かねぇ！」

三成
「御託はいい……次だ」

島津
「まぁ落ち着きんしゃい。次は華雄どん、おまはんの番ねぇ」

華雄
「……わかった」

三成
「お前が？　ふざけるな、私は鬼島津と闘いに来たのだ」

島津
「三成どん、若き魂のぶつかり合いはお互いを強くする。だげねぇ、華雄どんとの闘いも悪くなかぁ」

三成
「……」

華雄
「三成、確かに今の私は弱い……それを踏まえてお願いしたい、頼む」

華雄は三成に頭を下げた。

三成
「……ならば早くしろ」

華雄
「感謝する」

そして三成と華雄は闘いの準備をした。

島津
「これで良か‥‥頑張りんしゃい」

島津はその闘いを温かい視線で見守る。

華雄
「三成、一つ聞きたい」

三成
「何だ?」

華雄
「お前は何の為に闘うのだ?」

三成
「‥‥‥そんな事など決まっている。家康を斬滅するためだ」

華雄
「家康?」

三成
「私は秀吉様の目の前で醜態を晒してしまった…その原因を作った家康を許す事など出来るかッ！！」

三成は怒りを抑えきれずに怒鳴り散らした。

三成
「だが、今の私ではまだ斬滅するのは不可能だ…だから私は鬼島津を倒し、家康を完膚無きまでに斬滅し、私の心を満たす！」

華雄
「そうだったのか…三成」

華雄は大斧を構え……

華雄
「今の私ではどこまで出来るかわからんが……三成に迷惑を掛けないように全力で闘おう！」

三成
「フン、貴様などに私の心など満たされるか！」

華雄
「やってみないとわからん…ハァア！」

三成

「なめるなッ！！」

そして闘いが始まるのであった。

大谷
（ほぅ、この大会で少なからず三成の心に変化があったか……これもまたメデタイ事よ）

大谷は三成の心境の変化に友として少しだが喜びを覚えていた。

～学園・校長室～

？？？
「今年の大会は大変に盛り上がりを見せました」

校長室には信長と一人の黒髪の和服美人が座っていた。

女性の名は濃姫（のうひめ）

信長の秘書にして妻である。

信長
「……」

濃姫
「しかし、こうして終わってみると寂しいモノがありますね」

信長
「終わり？　否、始まりよ」

濃姫
「え？」

信長
「此処から始まる宴こそ……余が欲する闘いよ」

濃姫
「……確かに、その通りかも知れません」

信長は立ち上がり学園を見渡せる窓に近付き、学園全体を見渡す。

信長
「弱き者よ、この信長を楽しませてみよ……フハハハハ！！」

そう言って信長と濃姫は校長室を出て行った。

終わる闘い、そして始まる闘い。
だが……今は一時の時間を休む者、楽しむ者、そして強さを求める者として過ごす。

そして新生ＢＡＳＡＲＡ大会は幕を閉じた。

武闘大会編“完”

～深夜・屋上～

此処は真夜中の学園。
普通ならば使われない屋上である二人が立っていた。

佐助
「すまないね～こんな真夜中に呼んじゃって～」

風魔
『構わない』

佐助と風魔であった。

佐助
「今回呼んだのは他でもねぇ……アンタに再戦を申し込む」

風魔
「……」

佐助
「悪いな。俺様もこんなキャラじゃないんだが……旦那の影響も少しはあるのかもしんねぇな」

風魔
「……」

風魔は黙って忍刀を構える。

佐助
「話がわかってくれて助かる……さぁて、俺様も今回は本気でいかせて貰おうか」

そう言って佐助も大手裏剣を構えた。

佐助
「猿飛佐助……参る！！」

風魔
「……」

そして、闇の闘いが始まった。

この勝敗を知る者は風と影以外、知る者は誰もいない……

～後日談～　（後書き）

終わりました武闘大会編！

長かったような短かった様な……

まぁ終わった事は良しとしましょか！

次回は外伝を載せたいと思います。

それでは、また次回！

外伝・？、苦労人の楽しみ？（前書き）

華陀
「……うむ」

政宗
「Ａｈ？　何か用か？」

風魔
『？』

華陀
「いや…君たちを見ていると他人とは思えなくてな……」

政宗
「……意味わからん」

風魔
『謎』

最上
「恋姫†！　ＢＡＳＡＲＡ！　学園！　物語！　始まるよ～！」

外伝・？、苦労人の楽しみ？

武闘大会が終わった次の日の夕方……

～学園・情報室～

？？？

「はぁ～……我が君の相手はいつもながら疲れて仕方ない」

此処は学園内の中のパソコンが置いてある教室“情報室”
その教室に一人の男性が入ってきた。

その男性は

長身で無精髭

実直な性格で質実剛健な雰囲気

だが、何処か苦労人の匂いを漂わせている男性

名は立花（たちばな）　宗茂（むねしげ）

恋ＢＡＲＡ学園の教師であり、大友宗麟の執事でもある。

宗茂

「全く……我が君がザビー先生の訳分かんない宗教に入ってからもっと我が儘になって……はぁ～」

どうやら本当に苦労人のようだ。
何故宗茂が情報室に現れたのか？

それは……

宗茂
「さて……今日もやりますか」

宗茂は情報室のパソコンの電源をつけた。
そしてとあるサイトにたどり着いた。

“トロンベの！　一つ言わせて貰います！”

……これのようだ。

宗茂
「【今日も我が君の我が儘に振り回されてしまった。トホホ（泣）……この気持ちをどうしたら良いでしょうか？】っと、これで良し」

最近、自分のサイトを立ち上げた宗茂は自分の周りに起きた出来事

をサイトの日記に書き込み、人との交流を楽しみとしている。
自宅でやらないのは家にパソコンがない為。
因みに、ユーザー名は“トロンベ”

宗茂
「……お！　早速書き込みがありますな。えーっと、どれどれ……」

村長
【相変わらず大変ですな。私は直接何か出来る訳ではないです。しかし、いつか卿に幸が来るよう、お祈りしよう】

宗茂
「クッ、相変わらず村長殿は手前の味方をしてくれる。自然と涙が……
【いつもありがとうございます。その言葉だけで手前は幸せになります】」

村長
【そうですか。そう言って頂けると私も安心します】

宗茂
「こ、こんなに優しい人が世の中にいるとは……いつか、お会いしたいですな」

宗茂は村長の言葉に感動していた。

宗茂
「おや、また書き込みが……」

ラハール
【トロンベさん、いつもながらご苦労様です。最近は振り回されていますが、疲れは溜まっていますか？】

宗茂
「おお！　ラハール殿か。最近書き込みをしてくれる人だな
【そうですね。最近は疲れが溜まり、少し辛い感じがありますね】」

ラハール
【では、部屋に備長炭を置いてみたらどうでしょうか？　調べていたら備長炭には浄化作用、湿度調整作用、防腐作用、磁気調整作用、マイナスイオンを発生、遠赤外線を発生などがあると書いてありましたので】

宗茂
「なるほど……これは良い事を聞いたな
【わかりました。わざわざご助言ありがとうございます。今度、試してみます】」

ラハール
【力添えが出来て嬉しいです♪】

宗茂
「いやぁ～ラハール殿のコメントは癒されますな～……絶対この子、良い子だよ。奥より可憐たよ。手前が保障しよう」

現在、妻とは別居中の宗茂。

宗茂
「ん？　またまた書き込みが・・・Ｊ・バウアー殿か」

Ｊ・バウアー
【まだまだ青いな。小生は今日の電車帰りに痴漢の疑いで職務質問をされた。今回で五回目だ】

宗茂
「・・・・相変わらずこの人運がないな～。ていうかこの人、官兵衛殿だろ・・・・・
【確かにそれに比べたらまだまだ青いですね（汗）】」

Ｊ・バウアー
【だから、そんな事で悩む必要はないぞ】

宗茂
「確かにどーでも良くなってきている。　凄い人だな～かんｂ・・・じゃなくて、Ｊ・バウアー殿は」

そう言っていると次の書き込みが書かれていた。

無敵
【俺は無敵の主人公！】

宗茂

「……」

とりあえず、宗茂はスルーした。
すると再び書き込みが追加されている。

宗茂
「今回はいっぱい書き込みがくるな～」

なごみ
【ぐぅ～ｚｚｚ】

宗茂
「……なんで書き込みで寝ているんだ？　というか書き込んでいるから起きているのか？」

宗茂は今一つ分からなかったので触れなかった。

宗茂
「ん？　また新しい書き込みが……」

カズキ
【何このサイト？　みんな乙なんだけどｗｗｗ】

宗茂
「……これは明らかに荒らしですね。注意しておかなくては……

【カズキ殿、此処は皆で楽しく書き込みをし合い、交流を深める場所です。そのような書き込みは抑えて貰いたい】」

すると、すぐに書き込みがきた。

カズキ
【何お前？　偽善者？　なら今すぐに戦争を止めてきなｗｗｗ】

宗茂
「う～む、全然わかっていないようですな・・・
【もう一度言います。此処は皆さんが楽しく書き込みをする場所です。それを守れない場合は即刻退出を願いたいですね】」

カズキ
【おーこわいこわい】

宗茂
「・・・・・・・・・（怒）」

宗茂のストレスが着々と溜まってきていると・・・・・

J・バウアー
【オイ！　此処は不幸を話す場所だぞ！　わざわざ不幸にしてどうする（怒）】

宗茂

「おお！　良いぞ、官兵衛殿！」

宗茂のフォローをするＪ・バウアー。
完全に官兵衛と呼んでいるが応援する宗茂。

その書き込みにカズキは……

カズキ
【今、とても幸せになれる壺があるんですけど……】

宗茂
「……こんな、明らかに怪しい物に引っ掛かる訳ないだろ（汗）」

カズキのあからさまな詐欺行為に呆れていた。

だが……

Ｊ・バウアー
【小生を馬鹿にするな！（欲）】

Ｊ・バウアーはいとも簡単に騙されていた。

宗茂
「オイィィィ！　（欲）って何だ!?　完全に欲しがってるよ、こ

の人！」

カズキ
【今ならもっと幸せになれる花をセットで４０万円で売ります】

Ｊ・バウアー
【ちょっと待ってろ、今ＡＴＭに行ってくる】

宗茂
「行くなァァァ！！」

Ｊ・バウアーはあえなく退出した。

宗茂
「クソ、これ以上好き勝手には……ん？」

宗茂はどうにかならないかと考えていると、カズキが書き込みをしていた。

カズキ
【申し訳ありません、少し度が過ぎました。こういった行為は皆さんを傷つけてしまいます。なので、二度とアクセスを致しません】

宗茂
「カズキ殿……やっとわかってくれましたか
【いえいえ、此方こそ言い過ぎましたね。わかってくれたならば、

手前も嬉しい限りです】」

カズキ
【本当に申し訳ありません。最後に一言……】

宗茂
「一言？」

カズキ
【嘘だ、ヴァーカｗｗｗ】

この瞬間、何かがブチ切れる音が響く。

宗茂
「ぬおァァァア！！（怒）」

最後の一言でブチギレした宗茂。
彼の怒りは何処かにぶつける事はなかった。

因みに、このカズキの正体は……

～秀秋宅～

秀秋
「ふふふ……相変わらず甘っちょろい奴ばっかで困っちまうな」

秀秋であった。

秀秋
「いや～、パソコンの世界なら好き放題出来るから悪口言い放題だぜ……アハハ！」

秀秋は笑いながら次のターゲットを探した。
彼に不幸が訪れる事など知らずに……

～翌日・商店街～

秀秋
「ん～！　いや～、やり切った後の朝は最高だね！」

あの後、さらに問題行為を起こした秀秋は朝から商店街で買い物をしていた。

秀秋

「さぁ～て、今日はパソコンの新商品が出たがらそれを探して・・・・っと」

すると、誰かとぶつかってしまう秀秋。

秀秋
「あ、すいませ・・・・・」

宗茂
「フンッ！！」

秀秋
「ふべらッ！？」

ぶつかった相手は宗茂であった。
宗茂は昨日の事が不機嫌で抑えきれない怒りがあった為、秀秋を殴り倒した。
教師として、あるまじき行為である。

秀秋
「ぼ、僕が何をしたの・・・・・ガクッ」

秀秋はそのまま気絶した。

～宗茂宅・自室～

宗茂
「一体どうしたらいいのだ……」

宗茂はどうやったら解決できるのか頭を抱えて悩みこんでしまった。

宗茂の苦悩は続く……

外伝・？、苦労人の楽しみ？（後書き）

久々のギャグでした。

なんか温度差半端ないけど気にしない！

今回は宗茂の話でした。

それと、今回の村長、ラハール、Ｊ・バウアー、なごみが一体誰か知りたい方は感想でお答えします。

次回は未定です！

それでは、また次回！

忙しい人のための小話・その？（前書き）

注意・今回の話は完全に本編とは関係ありません。
読まなくても何も支障は出ません。

気軽にギャグを楽しんで貰うためだけに書きました。

“私は一向に構わん！”
と言う人は読んで下さい。
それでは、どうぞ！

忙しい人のための小話・その？

～授業風景・体育編～

１－Ａと１－Ｂの男子は只今、体育の授業により校庭に集まっていた。

利家
「今から授業を始める！」

褌一丁でほぼ裸で全身傷だらけの体育教師、前田（まえだ）　利家（としいえ）の授業が始まった。

利家
「まずはお前達、服を脱げ！」

元親
「いや、何でだよ」

利家
「服を着たまま体育が出来るか！」

政宗
「出来るわ！！」

～授業風景・家庭科編～

まつ
「ではこれより、家庭科を始めます」

男子達が体育の時は女子は家庭科をやる事になっている（しっかりと、体育の授業もある）。

まつ
「まずは……そぉ～れ！」

まつは突然、某美少女戦士バリの着替えシーンを彷彿とさせる様な着替え方をした。

まつ
「このように、変身の一つは出来るようになりましょう」

桃香
「家庭科……奥が深けぇ～」

愛紗
「その前に疑いましょう」

～授業風景・地理編～

謙信
「では、ここのちけいはおわかりですか？」

かすが
「そこはパプアニューギニアです、謙信さま！」

謙信
「ふふふ……おみごとです、うつくしいつるぎ」

かすが
「ああ……謙信さま！」

秋蘭
「かすが先輩……此処は一年のクラスなんですが（汗）」

かすが
「愛の前にそんな壁は通用しない！！」

桂花
「本格的にダメ人間ね」

政宗
「人の事言えんのか？」

～保健室で……～

幸村
「華陀殿！　今日も治療を頼むでござる！」

華陀
「なんだ、また来たのか」

幸村
「華陀殿の治療は凄いでござる！　針を使った五斗米道は！」

華陀
「違ぁぁぁぁあぁあああああぁぁぁぁう！！」

幸村
「何と！？」

華陀
「五斗米道ではない！　ゴットヴェイドォォォ！」

幸村
「ご、ゴトベイドー？」

華陀
「違う！　ゴットヴェイドォォォ！　だ！」

幸村
「ゴト・・・ゴッドベイ」

信玄
「幸村よ！　ゴットヴェイドォォォ！　だぞ！」

幸村
「お館様！？」

華陀
「おお！　正しい発音だ！」

信玄
「腹の底から声を上げよ！！」

幸村
「うぉぉおお！！　ゴッドヴェイドォォォ！」

華陀
「そうだ！　それで良いぞ！」

信玄
「ゴッドヴェイドォォォ！」

幸村
「ゴッドヴェイドォォォ！」

華陀
「ゴッドヴェイドォォォ！」

三人
「「「ゴッドヴェイドォォォ！！」」」

佐助
「うるせぇぇえ！！！」

～しりとり～

華琳
「政宗、しりとりをしましょう」

政宗
「いきなりだな、オイ」

華琳
「まずは私からね」

政宗
「スゲーよこの人、話しすら聞かないよ」

華琳
「リンゴ」

政宗
「……ゴリラ」

華琳
「ラクダ」

政宗
「ダイエット」

華琳

「痩せたいわよ！（怒）」

政宗
「何が！？」

～しりとりｐａｒｔ２～

桃香
「家康君！　しりとりしよう！」

家康
「いきなりだな・・・まぁ良かろう」

桃香
「私からね！　えーっと・・・・・ゴハン！」

家康
「・・・・・・終わってしまったが（汗）」

桃香
「・・・・・・ごめんなさい」

家康
「なら、ワシからもう一度やろう・・・・・砂糖」

桃香
「うどん！」

家康
「……（汗）」

～おやつ～

秀吉
「これより、会議を始める」

今日は生徒会会議である。

三成
「その前に秀吉様、少し宜しいでしょうか？」

秀吉
「良かろう、許可する」

三成
「有り難きお言葉……今日の茶菓子を出したのは誰だ！！」

猪々子
「んあ？　あたいだけど？」

三成
「これは何だ！？」

猪々子

「何って‥‥ハッピーターンだけど?」

三成
「このような幼稚な茶菓子、秀吉様の口に合うわけがなかろう!!(怒)」

猪々子
「えぇー美味しいじゃん、ハッピーターン」

三成
「まだ言うか!(怒)」

秀吉
「我は好きだぞ、ハッピーターン」

三成
「良くやってくれたぁぁあ!!!」

大谷
「相変わらず、落ち着きのないヤツよ」

斗詩
「というか三成君、生徒会役員じゃないんだけど‥‥‥(汗)」

~どっちの兄貴がいいでしょう?~

子分
「元親のアニキは最高だぞ!」

子分達
「「「「アニキ！　アニキ！　アニキ！　アニキ！」」」」

舎弟
「なに言ってやがる…筆頭こそ最高のアニキだぜ！」

舎弟達
「「「「筆ッ頭！　筆ッ頭！　筆ッ頭！　筆ッ頭！」」」」

子分
「あんだと…俺達のアニキは恋さんの上目遣いを笑って軽く流す程の鈍感さを持ってやがるぜ！！」

舎弟
「甘いな…俺らの筆頭は流琉お嬢の上目遣い（涙目）を溜め息混じりで流すんだよ！」

子分
「普段の格好は上半身裸に近い服装だが、実は結構寒がりなんだよ！！」

舎弟
「普段は英語混じりに喋っているけど、実は英文は苦手だぞ！！」

子分
「……」

舎弟
「……」

子分
「なんか俺達……」

舎弟
「似た者同士だな……」

子分
「……飲むか？」

舎弟
「……ああ」

その後、兄貴自慢に盛り上がる子分と舎弟であった。

～風流部の活動～

慶次
「んじゃ、始めるとするかい」

雪蓮
「はぁ～い」

風
「了解しました～」

星

「やりますかな」

祭
「仕方あるまい」

官兵衛
「……」

慶次
「風流部、活動開始！」

一同
「「「「ぐぅ～ｚｚｚ」」」」

官兵衛
「顧問に至っては問題だぞ、この部活」

～策略～

璃々
「家康さぁ～ん！」

家康
「お！　璃々ちゃん、元気か？」

璃々
「うん！」

桃香
「家康君、知り合い？」

愛紗
「可愛らしいですね」

家康
「ああ、この子は璃々ちゃん。紫苑さんの娘さんだ」

朱里
「はわわ～、可愛いですね～」

雛里
「和みます～」

璃々
「あ！　焔耶お姉ちゃんだ！」

焔耶
「やぁ、いつも元気だな」

凪
（可愛い／／／）

家康
「ところで、今日はどうしたんだい璃々ちゃん？」

璃々
「えっとね……向こうでお母さんが呼んでたよ、お父さん♪」

女性陣
「「「「……なッ?!」」」」

それを一部始終見ていた者がいた。

紫苑
「うふふ……計画通り（ニヤリ）」

～今川の日常～

興味がないので飛ばします。

今川
「ヒドいでおじゃる?!」

～T暴走～

穏
「幸村さぁ～ん」

天和
「ユッキー♪」

蓮華
「あなた達！　少し離れなさい」

幸村
「ははははは破廉恥でござござござ……」

佐助
「あ～あ、見てらんないね……ん？」

幸村
「アガガガガガガ……！！」

佐助
「マズい！　オイ、今すぐ離れるんだ！」

蓮華
「へ？」

天和
「何を言って……」

ドカァァァアン！！

穏
「キャア！？」

佐助の発言の後、幸村が爆発した。

幸村
「巨乳は正義！！」

佐助
「クソ、手遅れか！」

蓮華
「ちょっと、どうしたのよ？！」

佐助
「旦那は破廉恥の限界を突破するとT（トモ●）暴走しちまうんだ」

天和
「T暴走って、聞いたことないよ～」

佐助
「要は旦那が変態になっちまんだよ！」

穏
「えぇ～？！」

幸村
「俺の股間がジャスタウェイ！！」

佐助
「とめろォォォオ！　この小説が終わってしまう前に！！」

三人

「「「おぅ！！」」」

その後、三時間を費やして暴走を止めた佐助達であった。

～終わり～

忙しい人のための小話・その？（後書き）

今回はギャグのリハビリがてら、忙しい人がサクッと読める話をかきました。

好評ならまた書きたいと思います。

次回はしっかり、本編を進めます。

次回はまたしても長編に入ります。

それでは、また次回！

第三十七話、あの季節です

～あらすじ～

武闘大会が終わり、一週間が過ぎた……

～１－Ｂ～

紫苑「皆さん、明日から夏休みですが」

紫苑が生徒に署注意をしているが、恋ＢＡＲＡ学園は明日から夏休みに入る。
先ほど終業式も終わり、生徒は皆浮かれていた。

因みに、終業式の様子は……

～校庭・終業式～

久秀
「これより、終業式に入ります。校長の言葉」

信長
「鳴かぬなら、滅してくれよう、下天の世」

久秀
「これにて終業式を終わりにします」

～終業式・終了～

とても短い終業式であった。

紫苑
「……以上が私からの注意事項です。それでは、また二学期に会いましょう」

紫苑の署注意が終わり、騒がしくなった教室。

家康
「明日から夏休みか……何をしようか」

桃香
「家康君！」

家康
「どうした、桃香？」

家康は明日から何をしようか考えていると、桃香に声を掛けられる。

桃香
「家康君は何か夏休みの予定ある？」

家康
「いや、今考えていたんだが……何もないぞ」

桃香
「良かった！　なら旅行に行かない？」

家康
「旅行に？」

桃香
「うん、実は……」

～回想・廊下～

桃香
「う～ん……終業式って何処もあーなのかな？（汗）」

終業式に疑問を持っていた桃香に……

蓮華
「桃香」

蓮華が話しかけてきた。

桃香
「ほえ？　蓮華さん、どうしたの？」

蓮華
「桃香は夏休みの予定は何かある？」

桃香
「夏休みの？　特には考えていないよ」

蓮華
「なら良かったわ。それじゃあ一緒に旅行しない？」

桃香
「あ！　良いね！　場所とかは決まってるの？」

蓮華
「ええ。実は美以が場所を提供してくれてね……美以がたくさん呼んでって言っていたから大丈夫な筈だ」

桃香
「美以？」

蓮華
「あ、そういえば知らなかったわね。前にこの学園に転校してきた南蛮王国のお嬢様よ」

桃香
「ええ?!　南蛮王国って言ったら、夏になったら予約でいっぱいになるハワイ島でも一番人気の場所じゃないですか!?」

蓮華
「読者に説明、ありがとう」

桃香
「読者?」

蓮華
「何でもないわ。後、その事を桃香のクラスに話してきれくれないか?」

桃香
「わかった!」

蓮華
「それじゃあ、よろしくね」

そう言って蓮華は自分のクラスに戻っていった。

〜回想終了〜

桃香
「……という感じで話しがあったの」

家康
「なるほど」

桃香
「どう？」

家康
「どうも何もワシは喜んで参加するよ」

桃香
「なら、みんなにも話そう！」

家康
「ああ！」

そして家康と桃香は皆に話しをした。

～1－A～

華琳
「そうだ、旅行へ行こう」

政宗
「いや、何で京都へ行くみたいに行ってんだ？」

華琳

「気にしないで。それより旅行へ行くわよ」

政宗
「その事なんだがな、さっき真田からも誘われてみんなもどうかって言われたんだが、どうだ?」

華琳
「あら、面白そうね。良いわよ」

政宗
「なら、連れて来たい奴らに言ってきてくれ」

華琳
「私を使うなんて……高くつくわよ」

政宗
「Ｈｕｍ～……言ってろ」

～１－Ｄ～

思春
「……との事を伝えてきてくれ」

恋
「……わかった」

思春
「頼んだぞ」

そして思春は自分のクラス戻っていった。

恋
「……」

月
「恋さん、どうしたんですか？」

恋
「……旅行」

月
「……へ？」

恋
「……旅行に行く」

月
「えーっと……誰と行くんですか？（汗）」

恋
「……みんな」

月
「……（汗）」

今一つ言葉が足りない恋であった。

～生徒会室～

秀吉
「以上で生徒会の仕事を終了する」

半兵衛
「今度の集合は登校日になるからそれまでは休みだよ」

猪々子
「よっしゃあ～！！」

麗羽
「ちょっと！　半兵衛様の前で恥ずかしい行為はお止めなさい！」

半兵衛
「僕は気にしないよ」

麗羽
「ああ……半兵衛様／／／」

秀吉
「三成も良くやってくれた。感謝する」

三成
「いえ、私は当然の仕事をしたまでです」

七乃
「相変わらず堅いですね～」

大谷
「しかしこれでなくては三成ではないぞ」

仕事が終わり、生徒会も夏休みに入る予定のようだ。

そこへ……

ガチャッ

慶次
「お！　いたいた！」

雪蓮
「やっほ～」

慶次と雪蓮が入ってきた。

半兵衛
「おや、慶次君に雪蓮君じゃないか」

秀吉
「何か用か？」

慶次
「まぁ、用っちゃ用だな」

雪蓮
「生徒会って登校日まで何もないわよね？」

猪々子
「ああ！　今から何しようか考えてたところだぜ！」

慶次
「なら、みんなで旅行はどうだい？」

半兵衛
「旅行？」

雪蓮
「実はさっき私の妹が来てね、みんなで旅行しないかって言われたのよ」

慶次
「何でも、大人数で呼んでも問題ないらしい。だったら秀吉達もどうかなと思ったんだが」

猪々子
「はい！　あたいは行くぜ！」

麗羽
「待ちなさい！　まだ半兵衛様がお許しになって……」

半兵衛
「面白そうだね。僕は構わないよ」

麗羽
「わたくしも行きますわ！　おーっほっほっほっほ！」

半兵衛
「秀吉、君はどうする？」

秀吉
「我も構わん」

三成
「私も参ります！」

半兵衛
「なら、月君達も呼んでくるといいよ」

大谷
「その配慮は我がやります」

七乃
「なら、私は美羽さまを呼びかけしましょう♪」

斗詩
（あの……）

雪蓮
（ん、何？）

斗詩
（それに・・・官兵衛さんはいますか？／／／）

雪蓮
（ふふっ、もちろんいるわよ♪）

斗詩
（そうですか・・・／／／）

慶次
「それじゃあ、また日程が決まったら連絡するよ」

秀吉
「うむ」

こうして皆は旅行への準備を始めるのであった。

第三十七話、あの季節です（後書き）

今回から夏休み編に突入です。

少し短いですが、始まりという事で（汗）

前書きはネタがない為、しばらくなしでお願いします。

次回は旅行の準備を書きたいと思います。

それでは、また次回！

第三十八話、乙女達の準備

～あらすじ～

旅行への準備が始まった。

～商店街・水着ショップ～

桃香
「ねぇ愛紗ちゃん、どれがいいかな～？」

現在、旅行へ向けて準備が行われている。
桃香達もまた海に入る事を聞いて水着を買いに来ていた。

愛紗
「私はあまり露出した水着は……」

桃香
「えぇ～！！　ダメだよそれじゃあ、みんなに置いてかれるよ！」

愛紗
「し、しかし……／／／」

桃香
「なら、これなんてどうかな？」

そう言って桃香が手にしたのは生地の少ない水着だった。

愛紗
「だ、ダメです！！／／／　そんな水着など！／／／」

桃香
「そうかな？　可愛いと思うんだけどな～」

愛紗
「それに……私なんかが着ても無駄になるだけですし……」

桃香
「……愛紗ちゃん」

愛紗
「はい？」

桃香
「えいっ」

愛紗
「ひゃい？！」

愛紗は桃香にほっぺを軽く引っ張られる。

桃香
「愛紗ちゃんのほっぺ、柔らか～い」

愛紗
「ひ、ひょうひゃしゃま！　いっひゃいにゃにを？！」

桃香
「愛紗ちゃんは可愛いのに、そんな事言ったからお仕置き～♪」

愛紗
「ひゃめてくだひゃい！」

桃香
「愛紗ちゃんが悪いんだよ。いつもそんな事言ってたら、家康君に呆れちゃうよ？」

愛紗
「……」

そして桃香は手を離した。

桃香
「もっと積極的になろ♪」

愛紗

「桃香様……わかりました」

そう言った愛紗の顔には笑みがこぼれる。

桃香
「そうそう、その方が可愛いよ」

愛紗
「言っときますが桃香様、私は誰にも負けませんよ」

桃香
「望むところだよ♪」

愛紗
「ふふっ」

そして桃香と愛紗は再び水着選びを開始するのであった。

～華琳宅～

秋蘭
「華琳さま、全ての準備が終わりました」

華琳
「そう、ありがと」

華琳達は自宅で支度していた。

華琳
「さて、支度は出来たから皆で食事でもしましょうかしら」

桂花
「華琳さまの手料理!?　ああ……幸せ／／／」

華琳
「ふふっ、なら私は準備をするわね」

そう言って華琳は立ち上がり、調理場へ向かおうとした。

そこへ……

春蘭
「か、華琳さま!」

春蘭が引き止める。

華琳
「春蘭?　何かしら?」

春蘭
「あの……私にお料理を教えて貰えないでしょうか？」

華琳
「料理を？　どういう風の吹き回しかしら？」

桂花
「ちょっと！　そういって華琳さまに近付くつもりでしょう！」

春蘭
「違うわ！　確かにそれも少しあるのは本音だが……」

桂花
「あるじゃない！」

春蘭
「ウルサい！」

春蘭と桂花が騒いでいると……

華琳
「二人とも、そこまでよ」

華琳が止めに入った。
その言葉に二人はピタッと止める。

華琳
「春蘭、とりあえずアナタは調理場へ行って、準備をしてなさい」

春蘭
「は、はい！」

そして春蘭はもの凄い速さで走っていった。

秋蘭
「よろしいのですか？」

華琳
「ええ、だいたいの理由は見当が付くわ」

秋蘭
「ならば尚更……」

華琳
「いずれは私のモノになるわ。だから好きにさせてやりなさい」

秋蘭
「……はっ」

桂花
「華琳さま？　一体どういう事ですか？」

華琳
「ふふっ、自分で考えなさい」

桂花
「？」

桂花は全く解らず、ずっと悩んでいたのはまた別の話……

～レストラン・蜀卓～

蓮華
「思春、この後はどうしようかしら？」

思春
「私は蓮華様に任せます」

蓮華と思春は旅行への準備で買い物をしており、昼食を取りながら次の予定を考えていた。

蓮華
「そんな事言わないで。思春は今何か欲しい物はないの？」

思春
「ありません」

蓮華

「……悩んだりとかしないのね（汗）」

思春
「自分、不器用ですから」

蓮華
「それ、アナタの台詞じゃないわよね（汗）」

思春
「すいません、事実ですので」

蓮華
「またそんな事を……なら元親に好かれるような洋服を買いましょう」

思春
「なッ！？／／／　そ、そんな物いりません！／／／」

思春はいきなりの不意打ちに珍しく顔を真っ赤にし、慌てだす。

蓮華
「ダメよ。今、思春は私が行きたい場所に行くと言ったわよね」

思春
「クッ！」

蓮華
「ふふっ」

思春
「そ、そういう蓮華様はどうなのですか？」

蓮華
「へ？」

思春
「幸村の抱き枕だけでは飽きたらず、幸村の等身大ポスターや肉声の目覚まし時計などを作りになされましたね」

蓮華
「ちょっ！　どうしてそれをッ！？／／／」

思春
「蓮華様・・・それは好意的というよりファンがやりそうな行為です」

蓮華
「ウルサい！／／／」

この後、秘密がバレた蓮華はやけくそになりながら買い物を続けるのであった。

～ショッピングモール・曹魏～

月
「これなんてどうでしょうか？」

詠
「こっちの方がいいんじゃない？」

霞
「こっちもええんちゃう？」

月達は旅行の為に洋服を選んでいた。

華雄
「やめろ馬鹿者！／／／」

華雄のであるが……

霞
「しゃーないやろ。華雄ちんは服装がダサいんやから」

華雄
「別にいいだろ！／／／　私の服なんだから／／／」

月
「それだと勿体無いですよ」

詠
「だからボク達がコーディネートしてんじゃない」

華雄
「いらんわ！」

華雄はかなり嫌がっていた。

華雄
「全く……だいたい、私はこのような趣味は一切ない」

霞
「……華雄ちん」

華雄
「何だ？」

霞
「みっちゃん」

華雄
「～～～！？／／／」

霞
「脈アリやね……」

詠
「まぁだいたいわかっていたけどね」

華雄
「わ、私は三成の事など一切」

霞
「いや、バレバレやで」

詠
「アンタ、三成の顔を見た瞬間に真っ赤になるじゃない。そんな事してたら嫌でもわかるわよ」

華雄
「……／／／」

華雄は顔を赤くし、下を向いて黙り込んでしまった。

そこへ……

月
「華雄さん」

月が話しかけてきた。

華雄
「月？　どうした？」

月
「みっちゃんは……ワタシマセンヨ」

華雄
「ッ！？（ビクッ）」

月のとてつもない殺気に華雄はおろか、詠と霞も脅えていた。

詠
「……月？（汗）」

月
「何？　詠ちゃん」

霞
「……いつも通りの月っちやな」

月
「？」

華雄
「……（汗）」

こうして乙女達は旅行への準備を楽しんで（？）いった。

そして出発日、当日……

第三十八話、乙女達の準備（後書き）

月が完全にヤンデレ化になりましたね（汗）

そして次回なんですが、少し更新が遅れます。すいません。

次回は出発して南蛮王国に到着します。

それでは、また次回！

第三十九話、南蛮ＦＥＶＥＲ！！

～あらすじ～

準備が終わり、出発を迎えた当日……

～空港～

いよいよ、出発を迎えた恋ＢＡＲＡメンバー。
現在、空港では点呼が行われていた。

家康
「ワシらは全員いるぞ！」

政宗
「同じく俺たちもいるぜ」

幸村
「某たちも揃ったでござる！」

三成
「家康ゥゥ……！」

月
「ぜ、全員揃いました！（汗）」

雪蓮
「私達も揃ったわよ」

武蔵
「おれさま達も揃ったぜ！」

美以
「にゃら、飛行機に移動するじょ！」

全員が揃い、美以の掛け声と共に一斉に移動を開始した。

だが、その道中は険しい道のりであった……

～金属探知機～

乗務員
「えぇーっと……（汗）」

官兵衛
「だから！　小生のこの鉄球は安全だ！」

乗務員
「なら、外して貰ってもよろしいでしょうか？」

官兵衛
「それだけは譲れん」

乗務員
「何故ですか！？」

官兵衛
「コレを外してしまうと小生が小生でなくなってしまう」

乗務員
「意味がわかりません！」

乗務員との話し合いは２０分にも続いた。

～お土産コーナー～

美以
「ガツガツッ！！」

恋
「モグモグ……」

佐助
「オィィィ！　それ試食じゃないから！」

元親
「ダッハハハ！　恋は相変わらずよく食うな！」

佐助

「なんで笑ってるの?!　お金はどうすんの!?」

元親
「……あ」

この後の佐助と元親の財布はとても軽くなった。

～ＶＩＰルーム～

斗詩
「麗羽様！　そこはＶＩＰルームです！」

麗羽
「わかっていますわ！　ですから、私にふさわしいのです！」

猪々子
「ＶＩＰなのは麗羽さまの頭の中だけですって！」

斗詩
「文ちゃんは黙ってて！（怒）」

この後も様々な問題が発生したが、何とか飛行機に乗ることができた一同。

家康

「やっと飛行機に乗れたか」

桃香
「大変だったね～」

愛紗
「というより飛行機に乗るだけでこれほど体力を使いますか（汗）」

翠
「まぁいいんじゃねぇの？　楽しけりゃあ」

星
「それには一理あるな」

そう言っていると……

美以
《そろそろ出発するにゃ！　みんなはシートベルトをするにゃ！》

美以のアナウンスが聞こえ皆はシートベルトを締めた。

美以
《シートベルトはしたかにゃ？　答えは聞いてないじょ！》

政宗
「いや聞けよ」

美以
《それでは出発にゃ！》

そして飛行機は旅立った。

～南蛮島～

慶次
「おぉ！　暑いねぇ！」

幸村
「ぬぅぅぅぅぅぉぉぉぉ！！」

思春
「こっちは暑苦しい」

南蛮島に到着し、皆のテンションは上がっていた。

ミケ
「みんなはとりあえず王国に招待するにょ！」

トラ
「ついてくるにゃ！」

シャム
「ゴーにゃん♪」

そして一同は美以達について行く。

～南蛮王国～

美以
「此処にゃ！」

季衣
「うわぁ～～……デカいね！」

南蛮王国は恋ＢＡＲＡ学園の二倍くらいであった。

真桜
「王国やからデカいのは覚悟してやけど……（汗）」

沙和
「予想以上なの～」

華雄
「……スゴいな（汗）」

秀吉

「うむ……見事なモノよ」

各々は驚愕していたところに使用人が現れた。

使用人1
「あ！　客人にょ！」

使用人2
「いらっしゃいにゃ！」

使用人3
「こちらですにゃん」

霞
「いやいやいや！　さっきの三人娘やないか！？」

現れたのはミケ、トラ、シャム、そっくりな使用人だった。

美以
「失礼にゃ！　全くちがうじょ！」

詠
「何処が違うのよ！？」

美以
「他にもいっぱいいるにゃ！」

使用人
「「「「にゃー！！！」」」」

明命
「お、お猫様がいっぱい！？　ヒャッハー！！」

蓮華
「マズい！？　明命が暴徒化した！！」

亞莎
「落ち着いて！！」

美以
「とりあえずみんな荷物を置くにゃ。そしたら海に連れて行くじょ！」

家康
「心得た！」

一同は各々の荷物を置き、海に行く準備をした。

～南蛮ビーチ～

家康
「おぉ！　なんと綺麗な海なんだ！」

元親
「よっしゃあ！　一番海は頂いたぜ！　行くぜ風魔！！」

風魔
『承知』

荷物を置き、海に到着した男性陣。
女性陣は水着に着替えている為、遅れている。
海を見た瞬間、家康達は海へと駆け込んだ。

政宗
「海を見ただけではしゃぎやがって……子供かアイツらは。なぁ、小十郎」

小十郎
「……」

政宗
「小十郎？」

返事をしない小十郎に政宗は再び声をかけた。
すると……

小十郎

「……！（カッ）」

小十郎は目を見開き……

小十郎
「うぅ～～～みぃ～～～～！！」

心の底から叫んだ。

政宗
「……何してんだ？」

小十郎
「いえ、コレをやらなければいけないと思いまして」

政宗
「疲れてんのか？」

小十郎
「大丈夫です、政宗様」

小十郎の心配をする政宗であった。

幸村

「夏だッ！　修行だッ！！　熱血だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

佐助
「おぉ！　旦那の熱血で生卵が一瞬でゆで卵になっちゃったよ」

幸村
「佐助！　まずは向こうの岩場まで泳ぐぞ！」

指差したのは数十?まである岩場であった。

佐助
「いや、俺様は荷物番しとくから旦那は先に行っててくれ」

幸村
「そうか！　ならばこの幸村！　全身全霊をもって泳ぐぞ！　うおぉぉぉぉ！！」

そして幸村は猛スピードで岩場まで泳いでいった。

佐助
「うひょ～、危なかったぜ。絶対俺様、途中で死ぬわな」

佐助は一緒に泳がなくて良かったと思っていた。

大谷
「三成、お主は泳がんのか？」

三成
「私は秀吉様と半兵衛様の荷物を見なければならない」

大谷
「……そうか」

三成は海より秀吉であった。

蘭丸
「オイ！　今日こそ蘭丸が勝つからな！」

武蔵
「ヘッ！　何回やっても同じだよ！」

秀秋
「じゃあ、今日の勝負はどちらが大きな砂の城を作るかでいい？」

武蔵
「よーし！　それでいいぜ！」

蘭丸
「いっくぞーッ！！」

後輩達は砂遊びでとても楽しんでいた。

慶次
「秀吉！　ビーチバレーでもしようぜ！」

秀吉
「フン、返り討ちにしてくれる！」

官兵衛
「小生もやるぞ！　今日こそ生徒会をギャフンと言わせてやる！」

半兵衛
「君では勝てないよ、暗の官兵衛君」

長政
「ならば私が審判をしよう！」

此方はビーチバレーをやるつもりだ。

そこへ……

？？？
「おぉーい！！」

家康
「お！　来たようだな！」

女性陣が着替え終わったようだ。

その姿は……

待て、次回！

～おまけ～

美以
「兄！　ちょっと来るにゃ！」

佐助
「ん、どした？」

佐助は美以に呼ばれたので向かった。

美以
「お前たち！　この兄こそ、みぃの夫にゃ！　挨拶をするにゃ！」

佐助
「……は？」

使用人
「「「「よろしくにゃー！！」」」」

佐助
「……嘘だろ？（汗）」

美以
「嘘じゃないじょ！」

佐助
「（……どうやって逃げるか、考えておくか）……ハァ～」

明命
「さ、流石は猫神様！」

佐助の苦労は続く……

第三十九話、南蛮ＦＥＶＥＲ！！（後書き）

海です！　熱い海です！

いや～、季節外れの夏は何か調子が狂いますね～。

でも、頑張ります！

次回は女性陣の登場でもっと白熱する海！　です！

それでは、また次回！

第四十話、海でＳＵＰＥＲ　ＦＥＶＥＲ！！！

～あらすじ～

南蛮到着！　ビーチでＦＥＶＥＲ！

～南蛮ビーチ～

桃香
「家康く～ん！」

桃香の声が聞こえ、男性陣が振り向く。
そこには水着に着替えた女性陣がいた。

慶次
「おっほ～！　可愛い～ね！」

官兵衛
「確かにな」

佐助
「いや～眼福眼福」

その光景に男性陣はテンションを上げていた。

桃香
「家康君、どうかな？」

家康
「ああ、可愛いらしいぞ」

桃香
「やった！　でも、私だけじゃないんだよ。お～い！」

そう言って桃香は皆を呼んだ。

愛紗
「と、桃香様／／／　やはり恥ずかしい／／／」

桃香
「大丈夫だって♪」

朱里
「やっぱりスク水はマズいでしゅ／／／」

雛里
「あわわ／／／」

焔耶
「お館ー！！」

凪
「／／／」

家康
「おぉ！　皆、個性的で可愛いな」

家康は皆の水着を見て素直な感想を述べた。

桃香
「家康君は何してたの？」

家康
「ワシは今、元親達と……」

元親
「弩九！」

風魔
「……」

ザバァァァン！

家康
「サーフィンをしていた」

愛紗
「……サーフィンですか？　あれは（汗）」

元親
「家康ゥー！　何してん……お、嬢ちゃん達も来たのか！」

桃香
「あ！　そういえばさっき、思春さん達が探してたよ」

愛紗
「風魔殿も翠達が探しておりました」

元親
「あん、思春達が？　何か用事か？」

風魔
『ともかく往こう』

元親
「それもそうだな。んじゃな、家康！」

家康
「ああ！」

そう言って元親と風魔は去っていった。

家康
「……さて、ワシらは何をしようか？」

桃香
「とりあえずはスイカ割りなんてどう？」

焔耶
「スイカなら此処にあるぞ」

家康
「ならばやるとしよう！！」

愛紗
「わかりました」

そして家康達はスイカ割りの準備をした。

一方の政宗達は……

～政宗ｓｉｄｅ～

華琳
「政宗、私はかき氷が食べたいわ」

政宗
「知るか」

華琳
「冷たいわね」

華琳と合流していた。

華琳
「それよりこの水着はどうかしら？」

政宗
「Ａｈ？　可愛いと思うぜ」

華琳
「……もっとマシな褒め言葉はないのかしら？」

政宗
「悪かったな、マシな褒め言葉じゃなくてな」

春蘭
「華琳さまー！！」

流琉
「政宗様！　此方にいましたか！」

いつき
「やっと見つかったべ！」

風

「探しましたよ～」

星

「全く困ったお方だ」

政宗と華琳が雑談をしていると春蘭達が合流してきた。

華琳

「あら、来たのね」

春蘭

「もちろんです！　華琳さまのためなら例え火の中、水の中にも私は参ります！」

華琳

「ふふ・・・頼りにしてるわ」

春蘭

「ありがとうございます！」

春蘭がはしゃいでいると・・・・・

華琳

「・・・・・・・そうだわ」

華琳が何か考えており政宗に質問をした。

華琳
「政宗、春蘭の水着はどうかしら？」

春蘭
「か、華琳さま！？／／／」

春蘭は不意な質問に顔を赤らめていた。

政宗
「……ｇｏｏｄだな」

華琳
「……まぁさっきよりはマシね」

政宗
「ほっとけ」

春蘭
「ききき貴様などに褒められても嬉しくないぞ！／／／」

星
「だが、顔は真っ赤だぞ」

風
「説得力がありませんね～」

いつき
「んだ」

春蘭
「そこ、ウルサいぞ！／／／」

流琉
（もしかして春蘭さんも……負けません！）

密かに春蘭にライバル意識をする流琉。
その後、政宗達は海の家に行き、かき氷を頼んでいた。

小十郎
「政宗様……この小十郎、心を鬼にして陰ながら見守っています」

秋蘭
「やはり姉者は可愛い～な」

霞
「あんさん、かなりのSやな」

稟
「小十郎さんの裸／／／　……ブハァ！／／／」

霞
「……こっちは変態やな（汗）」

政宗達の行動を陰ながら見守る小十郎達であった。

～幸村ｓｉｄｅ～

佐助
「……ま～だ帰ってこないの？　旦那は」

蓮華
「私達が合流してかなり経ったわね」

此方は幸村の帰りを待つ佐助と蓮華達。
かれこれ1時間が経過していた。

天和
「ユッキーどこいったの？」

佐助
「あそこの岩場」

穏
「……見た感じかなりの距離がありそうですね（汗）」

佐助
「まぁ旦那は死ぬ事はないと思うぜ。もしかしたら、今鮫と闘ってるかもよ？」

亞莎
「……それを否定できない自分が怖いです（汗）」

とりあえずは幸村の帰りを待ちながら雑談していると……

美以
「兄！　見つけたにゃ！」

ミケ・トラ・シャム
「「「にゃー！！」」」

佐助
「お、美以ちゃん達。どうしたの？」

美以達と合流する。

美以
「とりあえず兄！　みぃ達を助けて欲しいにゃ！」

佐助
「……どういうこと？」

美以
「今はそんな時間は……」

ミケ

「来たにょ！」

トラ
「怖いにゃー！」

シャム
「助けてにゃん（泣）」

美以達は佐助の後ろに隠れた。

そして姿を現したのは……

明命（暴徒）
「ヒャッハー！　お猫様ダァー！」

暴徒化した明命だった。

佐助
「オイィィィ！　さっきので止まったんじゃないの?!」

亞莎
「此処は猫（?）が多いからすぐに暴徒化してしまいます！」

佐助
「どうやったら止まるんだよ、あれは!?」

亞莎
「マタタビを投げれば落ち着く筈です！」

穏
「わかりました！」

佐助
「え！　持ってんの？！」

穏
「このような事態に備えて持ってきています！」

佐助
「いやいやいや！　こんな事態、普通ないからね！」

蓮華
「そんな事より、早く投げて！」

穏
「そぉ～れ～！」

穏は力の限り、振り投げた。

明命
「……はっ！　私は一体何を？」

すると明命は自分を取り戻した。

美以達
「「「「にゃ～……ｚｚｚ」」」」

だが、美以達も反応してその場で寝てしまった。

明命
「はわっ！　お猫様が寝ている！」

佐助
「……もういいや」

佐助はとりあえず明命を正気に戻して疲れていたら……

幸村
「佐助ッ！　今戻ったぞ！」

幸村が戻ってきた。

幸村
「これを見よ！　先ほど仕留めた鮫だッ！」

本当に鮫と闘っていたようだ。

佐助
「……旦那」

幸村
「どうした？」

佐助
「右」

幸村
「右？」

佐助に言われ右を見た幸村。

蓮華
「……幸村／／／」

天和
「やっほ～♪」

穏
「どうも～♪」

亞莎

「……／／／」

そこには蓮華達がいた。
もちろん水着姿で。

幸村
「……ゴファ！」

それを見た瞬間、幸村は吐血した。

蓮華
「ゆ、幸村ッ？！」

幸村
「は、破廉恥で……ガクッ」

佐助
「あ～あ、やっぱ無理か」

佐助は呆れながらも幸村を日陰に休ませるのであった。

～三成ｓｉｄｅ～

月
「……／／／」

三成
「月、どうした？」

月
「な、何でもないよ！／／／」

現在、三成は秀吉達の荷物番をやっている最中である。
そこに月が現れ、一緒に荷物番をしていた。

美羽
「華雄！　もっと、大きな城を作るのじゃ！」

華雄
「オイ！　先輩をつけんか！」

七乃
「まぁまぁ華雄さん、落ち着いてくださいよ」

三成の目の前では美羽達が砂の城作りで盛り上がっていた。

月
「みっちゃんは遊ばないの？」

三成
「私は秀吉様の荷物番をやっているのだ。そんな暇はない」

月
「……へぅ」

月は一緒に遊べない事で落ち込んでいると……

官兵衛
「三成、交代だ」

官兵衛が現れた。

三成
「交代？　貴様なんぞに任せられるか」

官兵衛
「小生だってこんな事をやりたくはないんだよ。だがな、さっきビーチバレーで負けて小生の罰ゲームが荷物番になっちまったんだ」

三成
「……」

官兵衛
「それに向こうで秀吉が呼んでいたぞ。何でも人数が欲しいと言っていたな」

三成
「何だと!?　それを早く言わんか!」

その言葉を聞いた瞬間、三成はビーチバレー場に向かった。

官兵衛
「ほれ、お前さんも行ってきな」

月
「へ？　で、ですが……」

官兵衛
「こんな不運な男といるより、三成といた方がお前さんも幸せになれる筈だ」

月
「へぅ……／／／」

官兵衛
「オーイ!　お前さんらも向こうでビーチバレーをやってきな!」

美羽
「なんと!　ビーチバレーとな!?　妾は行きたいのじゃ!」

七乃

「それでは参りましょう♪」

華雄
「体が鈍っていたところだ、ちょうどいい」

月
「官兵衛先輩、ありがとうございます」

官兵衛
「あいよ」

そして月達もビーチバレー場に向かった。

官兵衛
「さて、小生は一眠りするか」

残った官兵衛は一眠りしようと体を横にした。

そこへ……

斗詩
「隣、いいですか？」

斗詩が官兵衛の目の前にやってきた。

官兵衛
「あん？　お前さんも物好きだな」

斗詩
「はい……そうかもしれませんね」

官兵衛
「ま、寝ているよりマシか。少し話し相手になってくれるか？」

斗詩
「喜んで……／／／」

そう言って斗詩は横に座り、官兵衛との時間を過ごす。
いろんな場所で海を満喫する恋ＢＡＲＡメンバーであった。

～岩場～

此処は海から少し離れた場所にある岩場。
此処にとある一人の女性がいた。

桂花
「クソ……華琳さまからあの男から引き離す方法はないかしら」

桂花であった。
桂花は華琳と政宗が仲良くなっているのが気に食わないでいた。

桂花
「最近はあの脳筋も気になっているけど……それは好都合ね。だけどこのままだと」

一人でぶつぶつ言っており何か近寄り難い雰囲気になっている桂花。

桂花
「あぁんもう！　どうしたらいいのよ！」

いい考えが浮かばず、イライラしてきている桂花。

そこへ……

大谷
「ヒヒ……何か悩んでいるようだな」

空から大谷が現れた。

桂花
「……何よ、気持ち悪いわね。近寄らないで」

大谷
「いやなに、此処から何か不幸の匂いがしてきたのでな……」

桂花
「はぁ？　意味が分からないわよ」

大谷
「主は今、誰かの絶望を望んでおるな？」

桂花
「……」

大谷
「図星か？」

桂花
「だったら何よ？」

大谷
「簡単な事よ。我が協力しよう」

桂花
「…何でアンタが関わってくるのよ？　アンタは無関係じゃない」

大谷
「なに……我は不幸が見れれば良いのだ」

桂花
「……」

大谷の言葉に桂花は考え込んだ。

桂花
（こんな奴と組みたくないけど……あの男と華琳さまがくっつくのはもっといや！）

大谷
「考えは決まったか？」

桂花
「……わかったわ、協力しようじゃない」

大谷
「そうかそうか……これで一つの不幸を呼び出せる」

桂花
「だけど勘違いしないでよ！　私は華琳さまの為にやっている事を！」

大谷
「あい、わかった」

こうして桂花は大谷と手を組み、政宗を不幸にさせるべく計画を立てるのであった。

次回に続く……

第四十話、海でＳＵＰＥＲ　ＦＥＶＥＲ！！！（後書き）

水着は各自想像にお任せします。

あと、何人かは出ていませんでしたが、しっかりと話は作ります。

次回は、大谷と桂花が協力し合い、政宗を苦しめます。

それでは、また次回！

第四十一話、不幸計画

～あらすじ～

桂花と大谷が協力！

～南蛮の森～

政宗
「あの猫娘はどこにいんだよ？」

政宗は桂花に呼ばれ、南蛮の森に来ていた。
しかし桂花の姿はなく、政宗はとりあえず探していた。

一方の桂花は……

桂花
「協力するからにはちゃんとした作戦があるんでしょうね？」

大谷
「安心せい、準備は出来ておる」

桂花と大谷は政宗を不幸にさせる為、準備をしている。

大谷
「まずは第一の策・・・落とし穴よ」

桂花
「・・・・・・まぁ妥当な策ね。でも、このくらいなら私でも思いつくわよ」

大谷
「甘い・・・・・落とし穴の中に鰻（ウナギ）やら鯰（ナマズ）などを入れておいたわ」

桂花
「・・・嫌ね、それは（汗）」

そう言っている間に政宗がやってきた。

大谷
「され来たぞ」

桂花
「隠れるわよ」

ガサガサッ

政宗

「Ｈｕｍ～……アイツの相手は疲れるな」

桂花
「落とし穴には気付いていないわね」

大谷
「ヒヒヒ……愉快愉快」

政宗は落とし穴に気付かず、歩いていった。
そのまま落とし穴まであと数歩まで近づく政宗。

桂花
（ふふふ……落ちなさい！）

そしてあと一歩のところまで近付いていた。

その時……

春蘭
「オイ！　何をやっている！」

政宗
「Ａｈ？」

春蘭がやってきた。

桂花
（チッ！　後少しだったのに……）

春蘭
「あっちで華琳さまが呼んでいたぞ！　早く行かんか！」

政宗
「んな事言っても、コッチだって猫娘にｃａｌｌがかかってるんだよ」

春蘭
「そんな事より早く華琳さまあぁぁぁぁ！！？」

政宗
「ｗｈａｔ？！」

春蘭が近寄り、政宗の横に並んだ瞬間、落とし穴に落ちた。
政宗は何が起きたのか分からないがとりあえず、春蘭が落ちた穴の中を見る。

政宗
「オイ！　無事か？！」

春蘭
「な、何だ？　何が起きたのだ？？　……って、うわぁぁぁぁあ！！」

政宗
「どうした！？」

春蘭
「な、何かヌメヌメしているぞ！？　気持ち悪い！」

政宗
「とりあえず引っ張り出す物を探してくるからな！」

春蘭
「た、助けてくれぇぇぇ！！」

政宗と春蘭のやり取りを物陰から見ていた桂花と大谷は……

大谷
「……失敗か」

桂花
「でも問題ないわ。ちょうどいい気分転換ができたから」

大谷
「左様か……ならば次の企てに移行するか」

桂花
「ええ」

少しだが満足をして、次の作戦に移るのであった。

～海の家～

桂花
「何処に行っていたのよ？」

政宗
「オメェを探してたんだよ」

桂花
「私は森の入り口にいたわよ」

桂花は政宗と合流し、海の家で休暇していた。

大谷
（ヒヒ・・・第二の策、激辛水。政宗のコップの中にハバネロのエキスを入れてある。後は、飲むだけよ）

桂花
（さぁ、飲みなさい！）

政宗
「んで、ｂｕｓｉｎｅｓｓは何だ？」

桂花

「私じゃないわ。華琳さまがアンタを呼んでいたのよ」

政宗
「そうかい」

そう言って政宗はコップを手に取る。

桂花
（ふふふ・・・そのまま苦しみなさい！）

政宗は何も気付かないまま水を・・・・・

季衣
「流琉～！　早く御飯食べようよ～！」

流琉
「もぅ落ち着いてよ」

政宗
「Ａｈ？」

飲まなかった。

桂花

（またしても！）

季衣
「あ！　政宗兄ちゃん！」

流琉
「政宗様！？」

政宗
「よぅ。オメェら飯か？」

季衣
「そうだよ！　兄ちゃん達は？」

政宗
「俺らは少し休んでいただけだ」

季衣
「ふ～ん」

流琉
「ま、政宗様！／／／　一緒に御飯でも食べませんか！？」

政宗
「ああ、問題ないぜ」

流琉
「本当ですか！？」

政宗

「ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ」

季衣
「それじゃあ失礼しま～す」

そして流琉と季衣は政宗と桂花の隣に座った。

桂花
（余計な事を……）

季衣
「兄ちゃん兄ちゃん、水飲んでもいい？」

政宗
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ」

季衣
「……？」

政宗
「問題ないって事だ」

季衣
「わ～い！　ありがと！」

そして季衣はコップを手に取り……

桂花
「ちょっ！？」

季衣
「ゴクゴク……」

水を飲んでしまった。

流琉
（季衣……うらやましい／／／）

桂花
「……（汗）」

季衣
「プハァ！　……ギャアアアア！？」

政宗
「ｗｈａｔ！？」

流琉
「季衣？！　どうしたの！？」

季衣
「か、からひ～…からひ～よ～（泣）」

政宗

「辛いだと？　ただの水だぞ、これは」

流琉
「クンクン‥‥少しですけどハバネロの匂いがします」

季衣
「ひぃ～ひぃ～（泣）」

またしても失敗に終わった大谷は‥‥‥

大谷
（こうも企てが失敗するとは‥‥いやはやメデタキ事よ。ヒヒヒィ！）

何故か喜んでいた。

この後も二人の計画は失敗の連続だった‥‥‥

～第三の策・盥を落とす～

大谷
「フン！」

官兵衛
「ふぎゃあ？！」

桂花
「……失敗ね」

～第四の策・再び落とし穴に落とす～

官兵衛
「ギャアアアア！？」

大谷
「また失敗か」

桂花
「……」

～第五の策・爆発させる～

ドカァァァン！！

官兵衛
「何故じゃあああ！！？」

大谷
「ヒヒヒ……失敗失敗」

桂花
「ちょっと！　さっきからアイツしか引っかかっていないわよ！？」

大谷
「気のせいよ」

桂花
「気のせいじゃないわよ！」

その後も様々な策を試みるが、何故か引っかかるのは官兵衛だった。
そして全ての策が失敗に終わってしまった。

桂花
「どうすんのよ？！　全部失敗に終わったじゃかない！」

大谷
「いやはや・・・どうすれば良いか」

桂花
「クッ・・・やっぱアンタとなんか組まなければ」

？？？
「オイ」

桂花
「！？」

桂花が振り向くと・・・・・

小十郎
「テメェらだな。政宗様を嵌めようとしたヤツらは」

ブチギレ状態の小十郎が立っていた。

小十郎
「覚悟しな。政宗様に害をなす者は…タダじゃおかねぇぜ」

桂花
「ち、ちょっと!?　待ちなさいよ!」

大谷
「……」

小十郎
「生憎、今は…聞く耳は持ってねぇんだよ!」

小十郎は刀を構え……

小十郎
「唸れ!　鳴神ッ!」

鳴神を放った。

桂花
「キャアアア！」

桂花は喰らうと思い、ギュッと目を瞑った。

だが……

ドンッ

桂花
「えっ？」

ピギャァァァン！

大谷
「グハァァァア！！」

大谷は桂花を突き飛ばし、鳴神を喰らった。

大谷
「ゲハ、ゲハ……」

小十郎
「……今回はこのくらいにしとく」

小十郎は刀をしまい、去っていった。

桂花
「……ちょっと」

大谷
「……な、何だ？」

桂花
「何で私を突き飛ばしたのよ？」

大谷
「……我にもわからん」

桂花
「意味がわかんないわよ」

大谷
「だが、これは我の不幸。主には関係ない……故に」

桂花
「…感謝なんてしないわよ」

大谷

「ヒヒヒ、いらぬ」

桂花と大谷が話しをしていると……

華琳
「桂花」

華琳がやってきた。

桂花
「華琳さま?!」

華琳
「少し、聞きたい事があるの」

桂花
「はっ！　何なりと！」

華琳
「アナタ…政宗に何かしようとしていたらしいわね」

桂花
「?!　ど、どうしてそれを!?」

華琳
「本当のようね」

桂花
「うっ……（汗）」

華琳
「桂花。アナタはしばらく私との行動を禁止するわ」

桂花
「そ、そんな！？」

華琳
「それで反省しなさい。それじゃあ」

そう言って華琳は去っていった。

桂花
「か、華琳さま～～（泣）」

桂花は泣きながら華琳の名前を叫び続けた。

大谷
（ヒヒヒ……やはり主の不幸が来たか。愉快愉快）

大谷はそのやり取りに満足しながら見ていた。

大谷の目的……桂花の不幸を見る事。
その為なら自らをも不幸にする。

～南蛮街～

此処は南蛮王国にある商店街。

元就
「……何故ついてくるのだ？」

元就は一人で買い物をするつもりでいたが……

冥琳
「別に構わないだろ？」

冥琳がついてきた。

元就
「我は一人で来たのだ。ついてくるな」

冥琳
「だが、此処の道などわかるのか？」

元就
「……」

冥琳
「因みに私の手元には此処の道案内のパンフレットがあるのだが？」

元就
「ならば渡せ」

冥琳
「そう言うな。私もちょうど買い物がしたかったのでな」

元就
「……好きにしろ」

冥琳
「ああ、好きにするさ」

次回！　元就、冥琳とデートする？

第四十一話、不幸計画（後書き）

今回の不幸計画は失敗に終わりましたね。

にしてもこの二人、少し気が合いそうですね。……気のせいか

次回は元就メインです！

それでは、また次回！

第四十二話、元就、冥琳とデートする？

～あらすじ～

元就と冥琳のデート？

～南蛮街～

現在、元就と冥琳は南蛮街にて買い物をしていた。

元就
「あまり近寄るな」

冥琳
「そう言うな」

俗に言うデート（？）である。

そのデート（？）を陰から見てる者がいた……

慶次
「やるね～冥琳」

雪蓮
「元就にあそこまで近寄るとは……」

猪々子
「あたいは絶対に無理だぜ」

この三人である。
元就を見つけた慶次は何か面白い事があると思い、尾行していた。
雪蓮と猪々子は先程、慶次と合流し、一緒に尾行をしている。

冥琳
「最初は何処に行くのだ？」

元就
「貴様が知る必要はない」

冥琳
「……パンフレット」

元就
「……此処の皿に興味がある。その店だ」

冥琳
「ならば……あっちだな」

そう言って二人は歩き始めた。

慶次
「お、動いたぞ」

雪蓮
「追いましょう」

猪々子
「よっしゃ」

慶次達は二人の後を追った。

～南蛮デパート～

元就
「……ふむ」

冥琳
「元就、この皿はどうだ？」

元就
「少し派手だ。我はこの皿の方がよい」

冥琳
「確かにシンプルだが捻りがないな。むしろこっちの……」

元就

「ならば……」

冥琳
「だったら……」

互いに皿を選ぶ元就と冥琳。

慶次
「おいおい（汗）」

雪蓮
「どっちでもいいじゃない、そんなの」

猪々子
「でも案外お似合いじゃねぇ？」

慶次
「まぁな。似た者同士ってところだな！」

慶次達は呆れながらもお似合いのカップルを見ているような感じだった。
その後、元就と冥琳は食事をする為にレストランに向かう。

～レストラン・王国のお皿～

元就
「我は此処の野菜料理を食べると言っている。貴様に選択権などない」

冥琳
「此処の名物は魚料理だ。それを食べないでどうする？」

元就
「知ったことか。貴様は我の親か？」

冥琳
「ならば元就は父さんだな」

元就
「ほざくな」

レストランに入った元就と冥琳だが、全然決まらずにいた。

店員
「……あの～（汗）」

女性店員もかなり困っている様子。
因みにこの店員、日本人である。

元就
「工場長、此処の野菜料理は素晴らしい物と言え」

店員
「命令?!　ていうか工場長って何ですか!?」

冥琳
「それは卑怯だぞ元就、なぁ工場長?」

工場長
「だから工場長って……ああ!　私の名前変わってるし!?」

元就
「早く野菜料理を持ってこい、工場長」

冥琳
「魚料理も頼む、工場長」

工場長
「帰れぇぇぇ!!!（怒）」

工場長は力一杯叫んだ。

慶次
「あれま、大変だねぇ～」

雪蓮
「全く、仲が良いのか悪いのか……」

猪々子

「いいんじゃねぇ？　それより飯でも食べようぜ！」

そう言って慶次達は料理を食べ始めた。
料理が届き、食べ終えた元就と冥琳はこの後、様々な所を周った。
そして休憩場で少し休む事にした二人。

元就
「もう我の用事は終わった。帰らせて貰うぞ」

冥琳
「まぁ落ち着け、飲み物を買ってくるから待っていてくれ」

元就
「それを待つ義理などない」

冥琳
「ふっ……約束だ」

そう言って冥琳は飲み物を買いに行った。

元就
「……くだらん」

元就は冥琳の言葉を無視して、その場から去って行った。

猪々子
「元就の奴、帰っちゃうぜ？」

雪蓮
「それってマズいじゃない！？　早く止めましょう！」

猪々子と雪蓮は元就を追いかけようとしたが……

慶次
「大丈夫だよ」

慶次が二人の肩を掴んで止めた。

雪蓮
「慶次！？」

猪々子
「だけどこのままじゃ行っちゃうぜ？」

慶次
「な～に心配ないよ」

雪蓮
「……どういう事？」

慶次
「まぁとりあえず見てみようか！」

慶次はそう言って元就の後を追った。
雪蓮と猪々子も慶次に続いた。

～冥琳ｓｉｄｅ・自販機～

冥琳
「さて、元就は水でいいかな」

一方の冥琳は元就の飲み物を選び、買っていた。
そして飲み物を持ち、先程の休憩場に戻ろうとしていた。

だが……

チンピラ１
「うひょ～！　此処に来て同じ日本人に会ったぜ！」

チンピラ２
「ラッキーだぜ！」

チンピラ３
「ヒャッハー！　水だぁー！！」

冥琳
「……」

何故か日本人のチンピラに出会ってしまった。

チンピラ1
「姉ちゃん、ちょっくら俺らに付き合ってくんねぇか？」

チンピラ2
「断ったら……わかってんだろうな？」

チンピラ3
「ウホホ～！」

とてつもなく下品なチンピラ達である。

それに対し冥琳は……

冥琳
「ふふふ……」

怯える事もなく、笑っていた。

チンピラ1

「あん？　何がおかしいんだ？」

冥琳
「いや・・・余りにも惨めだったものでな、つい」

チンピラ２
「み、惨めだと！？」

冥琳
「ああ、惨めだな」

チンピラ１
「んだと？　ふさけんじゃねぇ！」

冥琳
「ふざけてはいないぞ。本当の事だからな」

チンピラ２
「ば、馬鹿しやがって！」

チンピラ３
「汚物は消毒ダァ～！！」

散々馬鹿にされ我慢の限界に達したチンピラ３は冥琳に襲いかかった。

冥琳
「・・・・・・・・・・」

しかし冥琳は避けようともせず、その場から動こうとしなかった。

チンピラ3
「ヒャッハー！」

冥琳
「……来たか」

冥琳がボソッとそんな事を言うと……

チンピラ3
「ふべら?！」

冥琳の目の前に光る壁が現れ、チンピラ3を吹き飛ばした。

元就
「何をしている?」

それと同時に元就も現れる。

冥琳

「元就こそ何をしてるのだ？」

元就
「我は喉が渇いて飲み物を買いにきたのだ」

冥琳
「それなら私が買ってくると言ったろう？」

元就
「貴様などに頼らん」

チンピラ１
「な、何なんだテメーは？！」

元就の登場に慌てふためいているチンピラ。

元就
「貴様らには関係ない。早く消え去れ」

チンピラ１
「ふさけんじゃね！」

チンピラ２
「テメーが消えろ！」

元就の言葉でチンピラ達は完全にキレて、今度は元就に襲いかかった。

それに対し元就は……

元就
「フン、下郎共が……返し手“転”」

シュウン！

チンピラ
「「あぎゃあああ！！」」

手に持っていた輪刀を展開し、回転斬りでチンピラを吹き飛ばした。

元就
「……駒以前の問題だな」

冥琳
「ふふふっ」

元就
「……何を笑っている？」

冥琳
「なに、必ず元就が助けにくると思っていたのでな……」

元就
「我は貴様など助けた覚えはない」

冥琳
「なら、私の事など無視すれば良かったのでは？」

元就
「……」

元就は少し考えて……

元就
「我は貴様の持っている飲み物が欲しかっただけよ」

そう言って元就は冥琳から飲み物を奪い取るのであった。

冥琳
「ふっ……ならばそういう事にしておくか」

冥琳は深く追求はせず、隣に歩き始めた。

慶次
「な？　大丈夫だったろ？」

雪蓮
「……そのようね」

猪々子
「だな」

それを全部見ていた慶次達は安心していた。

慶次
「さて！　俺達もどっかに行くかい？」

雪蓮
「そうね私達もデートをしましょうか♪」

猪々子
「兄貴とあたいのラブラブデートだな！」

雪蓮
「勝手に決めるんじゃないわよ！　私と慶次がデートするのよ！」

猪々子
「いんや、アタイだ！」

慶次
「はいはい、喧嘩はしない。みんなで行けばいいじゃんか！」

二人
「「（……鈍感）ハァ～……」」

そして慶次達は自分達の買い物に行くのであった。

～南蛮王国・ロビー～

政宗
「んで、話しって何だ？」

いつき
「おらの用件じゃないべ」

元就と冥琳がデート（？）を楽しんでいる時、政宗は南蛮王国に戻って休憩している最中にいつきに話しかけられた。

政宗
「Ａｈ？　じゃあ誰の用件だ？」

いつき
「今呼ぶべ！　お～い！　来ても大丈夫だよ！」

いつきが呼んだのは……

蘭丸
「……」

蘭丸だった。

政宗
「オメェは……蘭丸か？」

いつき
「んだ。実は蘭丸がお願い事があるらしいべよ！」

政宗
「お願い事？」

蘭丸
「あ、あの！」

蘭丸は大きな声でそのお願い事を言った。

蘭丸
「蘭丸に……デートの仕方を教えてください！／／／」

政宗
「……Ｈａ？（汗）」

次回に続く……

第四十二話、元就、冥琳とデートする？（後書き）

最近、更新がかなり遅い作者です。

更新が遅れて申し訳ありません。

まぁ何を言っても言い訳にしかならないので今は謝罪をします。

さて、次回は蘭丸君がメインです！　お楽しみに！

それでは、また次回！

第四十三話、蘭丸、初めてのデート

～あらすじ～

蘭丸がデートを習う。

～南蛮王国・ロビー～

政宗
「とりあえず、訳を聞かせてくれ」

現在政宗はロビーにて何故デートを教えて欲しいか、蘭丸に質問をしていた。

蘭丸
「う……／／／」

しかし蘭丸は恥ずかしいのか顔を真っ赤にし、下を向いたままだった。

政宗
「黙ってちゃあわかんねえだろ」

蘭丸
「わ、わかってるよ、そんくらい……」

いつき
「蘭丸は季衣ちゃんが好きなんだべ」

蘭丸
「ちょっ！？／／／」

政宗
「Ｒｅａｌｌｙ？」

蘭丸が答えないのに痺れを切らせたいつきが代わりに答えた。

いつき
「お前さが、全然答えないから代わりに答えてやったべ！」

蘭丸
「余計なお世話だよ！」

いつき
「何をー！」

政宗
「ＯＫ、落ち着け。……蘭丸、オメェはあの大食い娘にａｃｔｉｏｎはしたのか？」

蘭丸
「とりあえずはデートに誘ったけど……」

～回想・海の家～

季衣
「ん～……うまい！」

流琉
「海の家では食事はマズくなければならないのに……おいしいです」

海の家では季衣と流琉が食事をしていた。

そこへ……

蘭丸
「きき季衣ちゃん！／／／」

季衣
「ん？　何、蘭丸君？」

蘭丸が現れた。

流琉
（あれは……退散です！）

流琉は何かを察し、すぐさま立ち去った。

蘭丸
「こ、この後暇かな？／／／」

季衣
「この後？　暇だよ～」

蘭丸
「な、なら！」

季衣
「ん？」

蘭丸
「でででデートしない！？／／／」

季衣
「……デート？」

蘭丸
「……うん／／／」

季衣
「ん～……」

季衣は何かを考えていた。

そして……

季衣
「デートって……何？」

蘭丸
「……へ？」

考えていた事は“デート”そのものであった。

～回想終了～

蘭丸
「……って事があったんだ」

政宗
「ＯＫ、だいたいは把握した」

いつき
「その場で教えてやったら良かったんでねーか？」

蘭丸

「そうしようとしたけど・・・蘭丸もデートした事ないから答えられなかった」

政宗
「ウブだな」

いつき
「ウブだべ」

蘭丸
「ウルサい！／／／」

蘭丸は政宗といつきに怒鳴った。

政宗
「まぁ協力してーがなぁ・・・・・俺もデートはした事が」

？？？
「話しは聞かせて貰ったわ」

政宗
「Ａｈ？」

政宗は突然後ろから聞こえてきた声に反応して振り返った。

そこにいたのは・・・・・

華琳
「蘭丸、私が協力してあげるわ」

華琳であった。

蘭丸
「ホントッ?!」

華琳
「ええ」

蘭丸
「ヤッター!!」

蘭丸はかなり喜んでいた。

政宗
（オイ）

華琳
（何かしら?）

政宗
（オメェはデートした事あんのか?）

華琳
（ないわ）

政宗
（……Ｈａ？）

華琳
（私の考えは蘭丸と季衣のデートに私達も一緒にデートする事よ）

政宗
（……Ｐｌａｎは？）

華琳
（大丈夫よ。任せておきなさい）

政宗
（……信用できねー）

こうして蘭丸と季衣、華琳と政宗のＷデートは決行された。

～南蛮街～

季衣
「あ、兄ちゃんに華琳さま」

政宗
「よぅ」

華琳
「季衣、元気かしら？」

季衣
「うん！」

蘭丸
「……／／／」

華琳はとりあえず、季衣を南蛮街に呼んでくるように蘭丸に言った。
そして、季衣を連れてきた蘭丸。
顔が真っ赤である。

季衣
「兄ちゃん達も一緒にデート？」

政宗
「まぁそんなところだな」

華琳
「季衣、アナタにデートっていう物を教えてあげるわ」

季衣
「ありがとうございま～す！」

政宗
（大丈夫か？）

政宗は激しく心配した。

華琳
「それじゃあ行くわよ」

そんな心配を尻目に華琳は出発した。
政宗達も華琳に続いた。

しばらく歩いて……

華琳
「着いたわ」

目的地に到着した。

その目的地とは……

“ＨＯＴＥＬ・皇帝の寝床”

華琳
「入るわよ」

政宗
「ちょっと待てェェエ！！」

ラブホであった。

華琳
「何かしら？」

政宗
「何じゃねぇーよ！　テメェ何てとこ教えてんだよ！」

華琳
「デートとは……先手必勝。やられる前にヤル！」

政宗
「黙ってくんない！　この小説、一応健全な小説だから！　Ｒ－１８じゃないから！」

華琳
「でも私達、元々エロゲー出身よ」

政宗
「ｓｈｕｔ　ｕｐ！」

華琳、暴走中。

季衣
「ねぇ蘭丸君、此処って何するところ？」

蘭丸
「蘭丸もわかんない」

政宗
「わからんでいい！」

政宗はやはり、華琳に任せたのが失敗だったと思うのであった。

～レストラン・王国のお皿～

政宗
「お前に任せたのが間違えだったな」

華琳
「反省しなさい」

政宗
「何で強気なんだよ」

政宗は華琳に任せるのを止め、レストランにきていた。

季衣

「兄ちゃん、御飯食べてもいい？」

政宗
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ」

季衣
「ヤッター！　すいませ～ん！」

食べていいと言われ季衣は店員を呼んだ。

工場長
「は～い……」

しかし、来たのは工場長であった。

政宗
「何で工場長なんだ？」

工場長
「それは聞かないでください……」

政宗
「……ＯＫ」

季衣
「注文していいですか？」

工場長
「はい、大丈夫ですよ」

季衣
「えっとね～……」

季衣はメニューを見て……

季衣
「全部ください！」

とんでもない事を言い出した。

工場長
「……え？（汗）」

季衣
「だから、全部！」

蘭丸
「季衣ちゃん、さっきいっぱい食べたよね？（汗）」

季衣
「全然足りないよ！」

蘭丸
「で、でも……」

蘭丸が何か言おうとしたが……

政宗
「諦めろ、蘭丸」

政宗が蘭丸の肩を叩いてそう言った。

蘭丸
「な、何でだよ!?　このままじゃ……」

政宗
「一つ教えてやる」

蘭丸
「？」

政宗は目の前にある膨大な料理を見た。

政宗
「これが……」

季衣
「おいし～！」

政宗
「俺達、男にとっての……」

華琳
「あら、此処のアイス、おいしいわね」

政宗
「宿命だッ！」

蘭丸
「ッ！？　……そ、そうだったのか」

蘭丸は間違った知識を身につけた。

政宗
「今回は俺が払う。次からは気をつけるんだな」

蘭丸
「わかりました！　師匠！」

政宗
「師匠言うな」

この後、政宗の財布は氷河期を迎えるのであった。

レストランを出た後、政宗達は買い物をし、楽しい時間を過ごした。

季衣
「楽しかった～！」

蘭丸
「そ、そうだね……」

季衣は満足していたが、蘭丸はいろいろと振り回されていた為、かなり疲れていた。

蘭丸
（でも……季衣ちゃんと過ごせたし、楽しかったな～）

蘭丸がそんな事を思っていると……

季衣
「蘭丸君！　今日のデート、楽しかったね！」

蘭丸
「う、うん……」

季衣
「またやろうよ！　デート！」

蘭丸
「え?!　い、いいの!?」

季衣
「うん！　ボクはいいよ！」

蘭丸
「ヤ……ヤッター！！」

蘭丸は次のデートを約束できた事にスゴく喜んだ。

華琳
「良かったじゃない、成功して」

政宗
「まぁ、次が本番だ。ｓｕｃｃｅｓｓする事を祈るぜ」

華琳
「ふふふ……そうね」

政宗と華琳は今回の作戦が成功した事を密かに喜ぶのであった。

～夜・南蛮の森～

美以

「みんな来たかにゃ？」

辺りが真っ暗になり、みんなは休息をとろうとしていた時、美以が“南蛮の森に集合にゃ！”と言って集合させられた。

桃香
「美以ちゃん、一体何するの？」

美以
「よくぞ聞いてくれたにゃ！」

美以は待ってました的なテンションで答えた。

美以
「これより！　南蛮名物、肝試し大会を始めるじょ！」

次回、肝試し大会……開始！

第四十三話、蘭丸、初めてのデート（後書き）

ウブですね～蘭丸君。

こんなキャラじゃないけど……ま、いっか！

次回は肝試し大会です！

それでは、また次回！

第四十四話・A、肝試し大会～序編～

～あらすじ～

肝試し大会が開始される……

～夜・南蛮の森～

美以
「肝試し大会を始めるにゃ！」

美以は高らかに宣言した。

朱里
「き、肝試し？！」

雛里
「あわわ……（汗）」

音々音
「ふ、ふん！　全然怖くないですね！」

美羽
「ガタガタブルブル……（泣）」

七乃
「あ～ん、可愛い！」

その宣言に様々な反応を見せる一同。

三成
「フン、ぐだらんな。私は忙しいのだ」

半兵衛
「まぁまぁ三成君、たまにはいいじゃないか」

三成
「は、半兵衛様……」

秀吉
「我も参加する。三成も参加せよ」

三成
「わかりました」

月
（怖いけど……みっちゃんと一緒なら／／／）

月は三成と一緒にいられると思っていたが……

美以
「まずはくじ引きをするにゃ！　それで同じ番号の人がパートナーにゃ！」

月
「……へぅ」

世の中、上手くいかないものである。

くじ引き中……

桃香
「家康君、何番だった!?」

桃香は家康の番号をいち早く聞いた。
その後ろには愛紗達もいる。

家康
「うむ……Bの6だな」

桃香
「……私じゃない」

愛紗
「私も違いますね」

朱里
「わ、私もです」

雛里
「私も……」

焔耶
「違うだと!?」

凪
「……残念です」

しかしながら全員番号が違った。

家康
「ならば、ワシのパートナーは?」

三成
「家康ゥゥウ!!」

家康
「うおッ！　三成、どうした?」

家康がパートナーを探していると、三成が叫びながら家康の前に現れた。

三成
「……何故」

家康
「ん？」

三成
「何故だ……何故貴様と私がパートナーなのだ！」

家康
「おぉ！　三成がワシのパートナーか！？」

家康・三成ペア、決定！

桃香
「それじゃあ私のパートナーは……」

月
「わ、私です……」

桃香・月ペア、決定！

愛紗
「では、私は……」

白蓮

「私だぞ」

愛紗・白蓮ペア、決定！

この後も面白い組み合わせになった。

華琳
「やはりアナタとはこうなる運命のようね」

政宗
「此処までくると不気味に思うぜ」

幸村
「よろしく頼む！」

沙和
「よろしくなの～♪」

蓮華
「……」

思春
「蓮華様、落ち着いてください」

佐助
「んじゃあ、よろしく～」

詠
「はいはい、わかったわよ」

明命
「猫神様～……」

亞莎
「幸村さん……」

慶次
「そんじゃ、よろしくな！」

猪々子
「おぅ！」

元就
「くだらんお遊戯だな」

半兵衛
「僕は楽しみだけどね」

雪蓮
「ま、しょーがないわね」

冥琳
「ああ」

元親
「肝試しなんて久々だな」

地和
「へぇ～……（ヤッター！　チカにぃと一緒だ！！）」

恋
「……むぅ～」

真桜
「ま、しゃーないな」

風魔
『よろしく頼む』

鶴姫
「はい☆」

翠
「くっそ～……」

小蓮

「次はシャオが……」

小十郎
「ま、よろしく頼むぜ」

秋蘭
「ああ……／／／」

風
「あれま～」

稟
「……」

霞
「つーかアンタ誰やねん!?　何で此処におるねん?!」

工場長
「私が知りたいですよ！」

様々な組み合わせである。

美以
「組み合わせはこの通りにゃ！」

～組み合わせ～

家康・三成

政宗・華琳

小十郎・秋蘭

幸村・沙和

佐助・詠

元親・地和

風魔・鶴姫

慶次・猪々子

官兵衛・斗詩

元就・半兵衛

秀吉・雛里

長政・麗羽

桃香・月

愛紗・白蓮

朱里・星

翠・小蓮

焔耶・凪

春蘭・流琉

風・稟

真桜・恋

蓮華・思春

天和・穏

亞莎・明命

華雄・人和

霞・工場長

蘭丸・季衣

秀秋・音々音

美羽・七乃

～以上～

家康
「スゴい多いな……」

美以
「にゃ～……　そうにゃ！　パートナーが決まった今、４人一組になって貰うにゃ！」

桃香
（という事は……）

蓮華
（まだチャンスはある！？）

美以
「だからもう一度くじ引きをするにゃ！　決まったら行く順番を決めるにゃ！」

幸村
「心得た！」

美以
「後、先にルールを言っておくにゃ！　ルールは森の奥にある紙を持ってくるだけにゃ！」

政宗
「ＯＫ」

美以
「それじゃあ、みぃも準備をしてくるじょ！」

慶次
「頑張りなよ！」

美以
「にゃ～！！」

そう言って美以は森の中に消えた。

秀吉
「まずは何組かに絞るか」

半兵衛
「そうだね、秀吉」

官兵衛
「ならさっさとやるか」

一同は再びくじを引くのであった。

～森の中～

美以
「お前たち！　準備はいいかにゃ！？」

美以は森の中で肝試しの最終確認をしていた。

ミケ
「大丈夫にょ！」

トラ
「問題はないにゃ！」

シャム
「にゃ～ｚｚｚ」

武蔵
「おれさまはいつでもいけるぜ！」

蒲公英
「タンポポも！」

いつき
「蘭丸と季衣ちゃんをくっつけさせるいいチャンスだべ！」

大谷
「ヒヒ……我が望む顔を見せよ」

桂花
「この肝試しで……あの男を！！」

お市
「これも……長政さまの為」

美以
「大丈夫そうだにゃ……お前もいけるにゃ？」

美以は振り向き、一人の眼帯をしている老人に話しかけた。

？？？
「その扉は亡者を欲する……罪も深きな」

名は南部（なんぶ）　晴政（はるまさ）
この為だけに呼んだ、日本の“南部霊園”のオーナーである。

美以
「毎年来て貰って悪いにゃ」

南部
「ホゥ：ホゥ：」

美以
「相変わらずわからない奴にゃ（汗）」

美以達も準備ができたようだ。
果たしてどのような肝試しになるのか……

次回に続く！！

第四十四話・A、肝試し大会～序編～（後書き）

今回は説明みたいなモノです。

人数がとてつもなく多いな……

果たして全員出せるのか心配です（汗）

次回は肝試しを開始します。

それでは、また次回！

第四十四話・B、肝試し大会～前編～

～あらすじ～

肝試し大会、スタート！

～南蛮の森～

家康
「うむ、雰囲気があるな！」

三成
「家康ゥゥ……！！」

桃香
「その雰囲気って三成君から出ていると思うだけど……（汗）」

月
「お、落ち着いて、みっちゃん（汗）」

先ほどのくじ引きにより、家康・三成ペアは桃香・月ペアと一緒になった。

家康

「しかし先ほどから雰囲気だけで一切、幽霊が出てこないな」

三成
「黙れ！　貴様の戯言など聞きたくない！」

桃香
「ひぃ！　あ、あんまり大きな声を出さないでよ……」

月
「み、みっちゃん……（汗）」

最早、肝試しどころではないようだ……

ガサガサッ

桃香
「キャア！」

突然怯えた桃香は家康に抱きついた。

家康
「おっと、どうした？」

桃香
「あっちで物音が聞こえて……」

家康
「物音？」

桃香
「うん……」

月
「……」

桃香は何か物音が聞こえたようだ。
月は桃香の行動を見ていた。

月
（私もみっちゃんと……よし！）

月は決心し、次のチャンスを待つ事にした。

そして……

ガサガサッ

そのチャンスは来た。

月
（キタッ！）

月はものスゴいスピードで三成に近付いていった。

だが……

ドコォン！

月
「キャアアアア！？」

家康
「なッ！？」

桃香
「ゆ、月ちゃん？！」

三成にくっつく前に落とし穴に落ちてしまった。

桃香
「お～い！　月ちゃ～ん！」

家康
「大丈夫か！？」

月
「へぅ～……」

家康と桃香は声を掛けるが月は目を回していた。

家康
「とりあえず引き上げるぞ！」

桃香
「うん！」

そしてどうにか引き上げる事に成功した家康と桃香。

月
（し、失敗しました……へぅ～）

三成
「……」

失敗した事に落ち込んでいた月。

そこへ……

スッ

三成
「この先、荒れた道になる。手を繋げ」

月
「へ？」

なんと三成が手を差し出してきた。
手を差し出してきた！
大事な事などで二回言いました。

月
「ッ！？」

三成
「どうした？　嫌か？」

月
「い、嫌じゃありません！」

三成
「ならば早くしろ」

月
「は、はい／／／」

ギュッ

月
「／／／」

三成
「……フン」

顔が真っ赤な月に対し、三成は特に気にもせずに歩き始めた。

桃香
「三成君、何だかんだ優しいね」

家康
「いや、三成は元々優しいのだ。ただ、それが表に出せないだけだ」

桃香
「そっか♪」

家康
「よし、ワシらも行くか！」

桃香
「うん！」

そうして家康達は奥へと進んでいった。

その背後には……

大谷
（うむ……これで我の思惑は成功した）

大谷がいた。

大谷
（三成と月は互いに遠慮がち故に距離感がある。我はそれを無くす事。これも三成の為よ……我も甘くなりおったな、ヒヒ！）

そして大谷は闇の中へと消えていった。

～政宗ｓｉｄｅ～

華琳
「全く……くだらない事を考えたモノね。いくら皆で遊びをするからって、肝試しはありがちすぎてつまらないわ」

春蘭
「おっしゃる通りです！　華琳さま」

流琉
「あはは……（汗）」

政宗
「……」

此方は政宗・華琳ペアと春蘭・流琉ペアが一緒のようだ。

華琳
「さて、こんなお遊戯はさっさと終わらせましょう」

春蘭
「はい！」

政宗
「……オイ」

華琳
「何かしら？」

政宗
「一つ聞きたい事があるんだが……」

華琳
「別に構わないけど早めにしなさい」

政宗
「ＯＫ。んじゃあ聞くが……」

政宗は自分の手に視線を送り……

政宗
「何でテメェは思いっきり俺の手を握ってんだ？」

華琳が政宗の手を握ってる事を聞いた。

華琳
「これ？　これはアナタが迷子にならない為に握ってるのよ」

政宗
「ガキか俺は」

春蘭
「き、貴様～！　なんてうらやましい事を！」

政宗
「いや、俺からじゃねぇから」

流琉
（いいなぁ……）

華琳
「感謝しなさい。この私が直々に案内する事を」

政宗
「ていうかテメェ、お化けとかそういうの苦手だよな？」

華琳
「苦手ではないわ。ただ、そういった事が人より優れていないだけよ」

流琉
（それを苦手って言うと思うんですが……）

実は華琳はお化けが大の苦手である。（参考：第二十二話、秋蘭の相談）

華琳
「それより早く行くわよ。こんな場所で、もたもた……」

華琳は早く進もうとした。

そこへ……

ミケ
「バァーにょ！！」

お化け役のミケが現れた。

華琳
「キャアアアア！！」

ブォン！

政宗
「おわッ！？」

ミケ
「にょ？！」

バコォオン！

その瞬間、華琳は政宗を投げ飛ばし、ミケに当てた。

華琳
「ハァ…ハァ……は！」

春蘭
「か、華琳さま？（汗）」

流琉
「……（汗）」

華琳は政宗を投げ飛ばした後、正気に戻り、春蘭と流琉を見た。
春蘭は戸惑い、流琉は黙って華琳を見つめる。

華琳
「……ゴホン」

そんな華琳は一回咳き込んで……

華琳
「これが秘技、政宗投げよ！」

意味がわからない言い訳をした。

政宗
「まず、謝らんかい！」

ミケ
「にょ～……」

それにキレる政宗であった。

～幸村ｓｉｄｅ～

幸村
「さぁ！　どっからでも来るがよい！」

沙和
「不謹慎な事、言わないで欲しいの！」

蓮華
「ふふ、相変わらずね」

思春
「アレは一生変わりませんね」

幸村・沙和ペアは蓮華・思春ペアと一緒に行動をしていた。

幸村
「この幸村！　我が魂を持って悪霊を倒してみせようぞ！」

沙和
「そういう事、言っちゃダメなの。幽霊さんだって悪い人だけじゃないの！」

幸村
「そ、そうか……すまぬ」

沙和
「わかれば良いの～♪」

蓮華
「……」

蓮華は幸村と沙和の会話を見てふとこう思った。

蓮華
（もしかしたら沙和も……）

そして蓮華は沙和に聞いてみた。

蓮華
「沙和」

沙和
「何？　蓮華ちゃん」

蓮華
「一つ聞きたい事があるの。良いかしら？」

沙和
「良いの～♪」

蓮華
「ありがとう」

沙和
「問題ないの～。沙和に聞きたいって何なの？」

蓮華
「……沙和は」

沙和
「うんうん」

蓮華
「幸村の事をどう思ってるの？」

沙和
「ユッキーを？」

蓮華
「……ええ」

沙和
「う～ん……ねぇ蓮華ちゃん」

蓮華
「何かしら？」

沙和
「蓮華ちゃんはどう思ってるの？」

蓮華
「私？　私は……」

蓮華は真剣な目で……

蓮華
「大切な人よ」

ハッキリと言った。

沙和
「……蓮華ちゃん」

蓮華
「ん？」

沙和
「負けないの♪」

蓮華
「ッ！！　……私もよ」

沙和
「アハハ♪」

蓮華
「ふふっ」

蓮華は沙和の気持ちを聞き、新しい恋敵が出来た事に複雑ながらも笑っていた。

その想い人の幸村は……

トラ
「にゃ～！！」

幸村
「おぉ！　お初にお目にかかる！」

トラ
「に、にゃ？（汗）」

幸村
「某、真田幸村と申す！」

お化け役のトラに自己紹介をしていた。

～？？？～

南部
「その扉が開く時、地獄の門も開かれる……ホゥ・ホゥ」

此処は森奥深くにある祭壇。

その祭壇で南部は何かを唱え、呼び出そうとしていた。

美以
（にゃ～……相変わらず、凝ってるにゃ。少し引くにゃ）

それを見ていた美以は引いていた。

南部
「今こそその扉を開こうぞ」

そんな事はお構いなしに南部は唱え続けた……

第四十四話・B、肝試し大会～前編～（後書き）

今回は主人公勢のお話でした。

次回は工場長の正体が明らかになります。

それでは、また次回！

第四十四話・C、肝試し大会～中編～

～あらすじ～

家康達は肝試しを楽しんでいた。

～森の中～

元親
「とっとと終わらせようぜ。眠くてしょうがねぇ」

地和
「えぇ～、もっと楽しもうよ、チカにぃ」

半兵衛
「しかし、この肝試しはかなり凝ってるみたいだね」

元就
「……」

元親・地和ペアは半兵衛・元就ペアと一緒のようだ。

半兵衛
「おや、元就君は楽しくないのかい？」

元就
「当たり前だ。貴様らと一緒にするな」

半兵衛
「相変わらず厳しいね」

半兵衛はヤレヤレと肩をすくめる。

元親
「オイオイ、少し言い過ぎじゃねぇーのか？」

元就の言葉に元親が注意をした。

元就
「誰だ貴様は？　我に反抗するのか？」

元親
「反抗なんかしてねぇだろうが。ただ、そっちの先輩はお前さんの友達だろ？」

元就
「友達？　ふざけるな。我はそんな馴れ合いは好きではない」

元親
「……んだと？」

元就
「そんな馴れ合いをするから人は弱くなる。ならば、作る必要はない」

元親
「テメェ！」

元親は元就の胸ぐらを掴んだ。

地和
「チ、チカにぃ？！」

元就
「何をする、離せ」

元親
「馴れ合いだと？　ふざけてるのはテメェだ！」

元就
「我はふざけてなどいない」

元親
「減らず口をペラペラと……！！」

元就
「事実だ、仕方あるまい」

二人の口論は激しくなっていた。

半兵衛
「落ち着きなよ、二人とも」

此処で半兵衛が止めに入る。

元親
「止めんじゃあねぇ！　コイツだけは許さねぇ！」

元就
「別に我は許せなど言ってはない」

元親
「テメェ！」

地和
「チチチチカにぃ！」

元親
「んだよ！　邪魔すんなって……」

半兵衛
「二人とも、後ろを見てみなよ」

二人

「「後ろ？」」

そう言われ二人は後ろに振り向いた。

そこには……

鬼兵
「グォオオオ！」

棍棒を持った巨漢の鬼兵が立っていた。

元親
「……オイ」

元就
「……わかっておる」

クルッ

元親
「逃げるぞ！」

元就
「退散！」

鬼兵を見た瞬間、二人は駆け出した。

地和
「うえぇ！　戦わないの？！」

元親
「戦いてぇけど武器がねぇんだ！　仕方ねぇーだろ！」

半兵衛
「何か策はないかい？　元就君？」

元就
「あるにはある。だが、場所が悪い」

鬼兵
「グォオオオ！」

元親達の本当の“鬼ごっこ”が始まった。

～風魔ｓｉｄｅ～

グォオオオ！

美羽
「ピィ！」

七乃
「今、何か叫んでいましたね」

鶴姫
「こ、怖すぎです（汗）」

風魔
「……」

風魔・鶴姫ペアと美羽・七乃ペアは遠くから聞こえた叫び声に少し驚いていた。

美羽
「ガタガタブルブル……」

七乃
「とりあえず紙の場所をハッキリさせない事には意味がありませんね」

鶴姫
「そうですね……」

風魔
『木に印をつければ道に迷う事はなく、同じ場所だとわかる』

七乃
「そうですね……なら、その作戦で行きましょう♪」

鶴姫
「わかりました☆」

美羽
「ガタガタブルブル……（泣）」

七乃
「あん、もう可愛い♪」

鶴姫
（お、鬼ですね……（汗））

怖がる美羽を連れ、歩き始めた風魔達。

しばらく歩いて……

風魔
『待て』

風魔が皆を止めた。

七乃
「どうしたんですか？」

風魔
『何かいる』

美羽
「ピィ！　ななな何がいるのじゃ！？」

風魔
『わからない』

鶴姫
「こ、怖いです……（汗）」

風魔達は何かいると思い、それを待っていた。

そして現れたのは……

人和
「……」

人和だった。

鶴姫
「ほっ……人和さんでしたか～」

美羽

「お、脅かすでないぞ！」

七乃
「さすがに驚きましたよ～」

人和
「……」

風魔
「……」

美羽
「コラッ！　黙ってないで何か言ったらどうなのじゃ！」

人和
「……」

鶴姫
「人和さん？」

何も言わない人和に鶴姫が近付いていく。

風魔
『待て、様子がおかしい』

だが、そこに風魔が鶴姫の肩を叩き、待ったをかけた。

鶴姫
「へ？」

ボトンッ

鶴姫は一度止まったその瞬間、人和から何か落ちた音がした。

七乃
「何か落ちましたよ」

七乃は落ちた物を拾い上げる。

落ちていた物は……

人和（生首）
「……」

人和の生首だった。

一同
「「「「……」」」」

それを見た一同は、その周りが少し時間が止まった雰囲気になっていた。

そして……

七乃
「な、なななななまなまな生首!!?」

美羽
「ピギャアアアア!!（泣）」

鶴姫
「人和さぁ～～～ん!?」

壮大に焦り出した。

七乃
「どどどどうしましょう!!?　これッ!?（汗）」

風魔
『落ち着け。とりあえずはタイムマシーンを探そう』

七乃
「アナタが一番落ち着いてください!!」

鶴姫
「何で……こんな事に……」

かなり焦っている一同。

？？？
「……さい」

美羽
「およ？」

七乃
「お嬢さま？　どうかしました？」

美羽
「七乃や、今何か言ったか？」

七乃
「い～え、私はお嬢さまには何も言ってませんよ」

？？？
「……ください」

美羽
「ほら、また聞こえたぞよ」

鶴姫
「私も聞こえました」

風魔
『同じく』

どうやら七乃辺りから声が聞こえるようだ。

七乃
「だから私じゃあないですって」

鶴姫
「じゃあ……」

一同は七乃が持っている生首に注目した。

すると……

人和（生首）
「責任……とってください」

人和の生首が喋り出した。

一同
「「「「……」」」」

ザ・ワールド！

しばらくして……

七乃

「喋ったぁぁあぁぁあ！！？」

七乃は驚きの余り、生首を放り投げた。

そこには……

ガシッ！

一同

「「「「ッ？！」」」」

人和

「私をこんな目にした罪……許さない」

右手に鉈、左手に自分の首を持った人和が歩いてきた。

人和

「責任‥‥とってください」

風魔
『撤退!!』

鶴姫
「出たぁぁあああ!!（泣）」

美羽
「ホギャアアアア!!（泣）」

七乃
「いやぁぁぁあ!!（泣）」

その姿を見た瞬間、風魔達は凄まじい勢いで逃げていった。

人和
「‥‥‥ふぅ、終ったわ」

人和は疲れたように一言つぶやく。

人和
「それにしてもあの南部って人の妖術、凄いわ。本当に首がとれているみたいね」

パチンと指を鳴らすと人和の首は元通りになった。

人和
「さて、私の仕事は終わったから給料を貰わないと」

そして人和は森の中に消えた。

～小十郎ｓｉｄｅ～

小十郎
「全く……この森はややこしくて仕方がねぇな」

秋蘭
「確かに……この道はさっき来たような気がするな」

風
「これでは同じ事の繰り返しですね～」

小十郎・秋蘭ペアは風・稟ペアと一緒に森を探索していた。

稟
「あぁ……こんな所でなんて…ダメです／／／」

小十郎

「……コイツは何してんだ？」

風

「気にしないでくださぁ～い。持病みたいな物ですから～」

秋蘭

（本当に大丈夫か？）

稟の持病はほっといて着々と進む小十郎達。

その道中で……

小十郎

「ん？」

小十郎がある物を見つけた。

それは……

“この先危険！　ほ、本当に危ないんだからねッ！！／／／”

と書かれた看板だった。

秋蘭

「……どうする？　行くか？」

風
「看板は無視ですか～？」

秋蘭
「意味がわからないからな」

看板のボケは無視をしてこの先を行くかどうか小十郎に聞いた。

小十郎
「これ以外に道がねぇんだ。行くしかねぇな」

稟
「なら、早く行きましょう」

そう言って復活した稟がそそくさと歩み始めた。

小十郎
「おい、待て」

そんな稟を追いかける小十郎。

すると……

バコォン！

稟
「キャア！？」

小十郎
「ッ！？」

落とし穴に落ちた。

秋蘭
「小十郎？！」

風
「あやや～、大丈夫ですか？」

秋蘭と風は落とし穴の中を見た。

小十郎
「くッ……大丈夫か？」

稟
「いたた、大丈夫で……」

小十郎は稟の心配をして声を掛けた。
稟は大丈夫と言おうとしたが……

小十郎
「……とりあえずどいてくれねぇか？」

稟のいた位置は小十郎の胸の上であった。

稟
「……」

小十郎
「……おい」

稟
「……プハァ！／／／」

小十郎
「なッ？！」

風
状況を理解した瞬間、稟は鼻血を噴射した。

「あやや～……小十郎さぁ～ん、稟ちゃんにとんとんをお願いしまぁ～す」

小十郎
「とんとんって何だ！？　オイ！」

秋蘭
「とりあえず何故かここにある紐で引き上げるぞ！」

稟
「フガフガ……／／／」

小十郎
「なるべく早めに頼む！」

そして小十郎と稟を地上に引き上げた。

小十郎
「クソ……ひでぇー目にあったな」

秋蘭
「あの看板はホントの忠告だったのか」

風
「では～これからは気をつけて進みましょうか～」

稟
「……プハァ！／／／」

風
「はい稟ちゃん、とんとんしますよ～、とんとん～」

こうして小十郎達は警戒しながら進むのであった。

～佐助ｓｉｄｅ～

佐助
「さて、これからどうする？」

詠
「どうもこうも、進むしかないでしょう」

霞
「ま、しゃーないやろ」

工場長
「まだ私の名前が……ぐすん（泣）」

此方は佐助・詠ペアと霞・工場長ペアのようだ。

佐助
「まぁ泣くなって。その内聞くから」

工場長
「今じゃダメなんですか?!」

佐助
「今聞いたら読者がつまらないだろ」

工場長
「読者って何なんですか！　怒りますよ！」

佐助
「そーんなに怒るなって、冗談冗談」

工場長
「冗談じゃないですよ。いいですか、私の名前は……」

霞
「ぶえっくしょん!!」

工場長
「何で今くしゃみをするんですか!!（怒）」

霞
「いや～すまんすまん」

工場長
「全く……私の名前は」

詠
「何してるのよ、早く行きましょう」

工場長
「うがぁぁぁああ！！（怒）」

詠
「ひぃ！　な、何なのよ」

工場長
「い・わ・せ・て・く・だ・さ・い！（怒）」

詠
「わ、わかったから怒らないでよ（汗）」

工場長
「他に用事があれば言ってください！」

一同
「「「ありません……」」」

工場長
「やっと言える……コホン、私の名前は」

工場長が名前を言おうとしたが……

鬼兵
「グォオオオ！」

鬼兵が現れ、佐助達に襲いかかってきた。

詠
「で、出たぁぁぁああ！？」

霞
「うおっ？！　鬼や！」

鬼兵か現れた瞬間、慌て出す一同。

しかし工場長は……

工場長
「……何で邪魔するんですかぁぁぁああ！！（怒）」

激怒していた。
工場長は何かカードを取り出し……

工場長
「秘法“九字刺し”！」

と工場長は叫ぶ。

すると……

シュバァァアア！！

鬼兵
「グォオオオ！？」

レーザーが飛び出し、鬼兵に当てた。
鬼兵はレーザーを喰らい、そのまま倒れた。

詠
「い、一撃で倒した！？」

霞
「やるやないかい」

佐助
「ほ～、凄い凄い」

それを見ていた佐助達は様々な反応をした。

工場長
「いいですか！　私の名前は……」

工場長はビシッと佐助達を指差した。

早苗
「東風谷（こちや）　早苗（さなえ）です！！」

“人神巫女”
東風谷　早苗、参戦！

次回に続く……

第四十四話・C、肝試し大会～中編～（後書き）

……やっちまった。

まただよ、自分の悪い癖。

まぁ元々壊れているからいいか！

次回は慶次や蘭丸達の書きたいと思います。

それでは、また次回！

第四十四話・D、肝試し大会～後編～（前書き）

※今回、かなり恐怖場面があります。

注意してご覧ください。

第四十四話・D、肝試し大会～後編～

～あらすじ～

早苗、参戦！

～森の奥～

慶次
「結構雰囲気があって楽しいねぇ～」

猪々子
「確かに！」

官兵衛
「嫌な予感しかしない……小生の勘がそう告げている」

斗詩
「い、嫌な事言わないでくださいよ～」

慶次・猪々子ペアと官兵衛・斗詩ペアはかなり奥深く入っているようだ。

慶次

「こんな時、恋人同士が熱くなるのがお約束だね～」

猪々子
（……誘っているのかな？　チャンスは今！）

猪々子は何か勘違いし、凄まじい勢いで慶次に近付いっていく。

だが……

ポチッ

猪々子
「へ？」

猪々子は何かボタンらしきモノを踏んだ。

バコォン！

官兵衛
「ぬわぁぁあ！？」

斗詩
「官兵衛さん？！」

その瞬間、官兵衛の地面が抉れ、そのまま落下した。

慶次
「あ～あ、綺麗に落ちたな」

猪々子
（あちゃ～……）

斗詩
「だ、大丈夫ですか？」

官兵衛
「な、何故じゃ～……」

何故か自分に不幸が訪れる官兵衛。

だが、これは前触れに過ぎなかった……

猪々子
「ん？　何だこの紐？」

クイッ　ヒュン

官兵衛

「ふげッ？！」

盥を受ける官兵衛。

カチッ

慶次
「お？　何か踏んだか？」

ドコォン！

官兵衛
「ふぎゃッ？！」

後ろから来た丸太に吹き飛ばされる官兵衛。

斗詩
「あれ？　何か落ちてますよ」

ヒョイッ　ドカァァアン！！

官兵衛
「何故じゃあ～～～！！？」

ヒュウゥゥ……キラァン

最後は官兵衛の足元が爆発し、星になった官兵衛。

斗詩
「か、官兵衛さぁ～ん！？」

猪々子
「何か……爆発ネタで終わってるな、官兵衛って」

慶次
「だな」

斗詩
「もうちょっと心配してくださいよ！」

斗詩は大慌てしたが、慶次と猪々子はいつも通りだった。

その慶次達の近くには……

桂花
（何で全部やる事がアイツに引っかかるのよ！？）

桂花が見ていた。

桂花
（しかもあの片目変態も此処にいないし！）

片目変態は政宗の事です。

桂花
（まぁいいわ……必ずあの片目変態を亡き者にしてやるんだから！！）

そう言って桂花は森の中に消えた。

～長政ｓｉｄｅ～

麗羽
「何故！　私が！　半兵衛様と！　一緒ではありませんの！！」

白蓮
「いちいちウルサい先輩だなぁ～……（ボソッ）」

麗羽

「そこ！　何か言いまして！？」

白蓮
「言ってないです……」

長政
「相変わらず落ち着きのない奴だ」

愛紗
「全くですね」

此方は長政・麗羽ペアと愛紗・白蓮ペアの一組のようだ。

主に麗羽が叫んで、長政達は一切進めていないが……

長政
「ともかく先に往くぞ。このままだとかなり危険だぞ」

麗羽
「嫌ですわ！　わたくしは半兵衛様と一緒出なければ歩きませんわ！」

愛紗
「な、なんという我が儘（汗）」

白蓮
「何か意地でも動かなそうだな（汗）」

長政
「……仕方あるまい。麗羽殿」

麗羽
「何ですの？」

長政
「半兵衛殿は行動力のある女子は好きだと言っていたぞ」

麗羽
「おーっほっほっほ！　早く行きますわよ！！」

愛紗・白蓮
（（手慣れてる……））

やっと動いてくれた麗羽により前に進む事ができた長政達。

しばらく進んでいると……

愛紗
「……ッ！」

白蓮
「愛紗？　どうした？」

長政
「……やはり愛紗殿も気付いたか」

麗羽
「何ですの？」

長政と愛紗は何かを感じとり身構える。
一方の白蓮と麗羽は何が起きているのかサッパリだった。

愛紗
「注意してください、何かいます」

白蓮
「な、何だと？！」

長政
「しかもこの気配……ただ者ではないぞ」

麗羽
「……何が来ますの？（汗）」

愛紗
「わかりません」

段々と近付いて来る気配に長政達は警戒心を高めた。

そして現れたのは……

お市

「……長政さま」

長政
「おぉ！　市ではないか！」

お市であった。
長政達は警戒心が高かった為、ドッと緊張がとれた。

長政
「全く……脅かすな、市」

お市
「ごめんなさい、長政さま」

白蓮
「ふぅ～……緊張したぁ～」

愛紗
「確かに緊張しましたね」

麗羽
「冗談ではありませんわ！」

長政
「まぁまぁ、あまり市を責めないでくれ」

麗羽
「フン！」

長政
「やれやれ……」

お市
「……長政さま」

長政が肩をすくめているとお市が声を掛けてきた。

長政
「ん？　どうした、市？」

お市
「長政さまに聞きたい事があるの」

長政
「聞きたい事？　何だ？」

お市
「そこにいる女の人は……ダレデスカ？」

ゴォオ！

女性陣
「「「ッ！？」」」

長政に質問した瞬間、女性陣は莫大な殺気を感じとった。
長政はその殺気に一切、気付いていない。

長政
「おいおい……誰とは失礼だぞ市。いつも学校に会っているだろ？」
お市
「………長政サマはオボエテいるノ？」
長政
「当たり前だろ、市」
お市
「……長政さまはいつもヤサシイのね」
長政
「市？」

お市
「そう、いつも………………………
…いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつ
もいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつ
もいつもイツモいつもいつもいつもいつもいつもイツモいつもいつ
もいつもいつもイツモいつもいつもイツモいつもいつもいつもいつ
もいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつ
もいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつ
もいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもイツモいつもいつ
もいつもいつもいつもいつもイツモイツモイツモイツモイツモイツ

モいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもイツモいつもイツモいつもいつもいつも」

長政
「い、市？（汗）」

お市は目の光りがなくなりずっと同じ事を言っていた。
その途中に何かのノイズ音も聞こえてくる。

長政
「い、市よ……ち、調子でも悪いのか？（汗）」

お市
「市ハいつも通りデス……長政サマ」

長政
「いや、いつも通りでは……ん？　どうしたのだ、みんな」

長政が不意に後ろを見ると女性陣が後退りしていた。

愛紗
「な、長政先輩……あああ危ないですよ（汗）」

長政
「危ない？　何が危ないのだ？」

白蓮
「おおおお市さんがぁあ！！」

長政
「お市がどうしたのだ？」

麗羽
「う、後ろぉーーー！！」

長政
「後ろ？」

そう言われ振り向く長政。

お市
「イッペン・・・死んでみる？」

ザァザァ、ザァァァア・・・・・・・・プツン

※テレビの砂嵐をイメージしてください。

～蘭丸ｓｉｄｅ～

秀秋
「こここ怖いよぅ～（泣）」

音々音
「オイ！　あまりネネに引っ付くなです！」

秀秋
「無理だよ～（泣）」

季衣
「だっらしないな～」

蘭丸
「う、うん……／／／」

此方は蘭丸・季衣ペアと秀秋・音々音ペアのようだ。
秀秋は音々音にくっ付いたままで離れようとはしない。
季衣はその光景を見て、呆れていて、蘭丸は季衣の隣になり顔を真っ赤になっていた。

季衣
「ん？　蘭丸君、大丈夫？」

蘭丸
「だ、大丈夫だよ！／／／」

季衣
「？　変なの」

そんなこんなで歩き始めた蘭丸達。
しばらく歩いていると……
“この先危険！　アナタと合体したい……”
と書かれた看板が置いてあった。

音々音
「とりあえず進むです」

秀秋
「か、看板は無視なんだ（汗）」

音々音
「意味が分からないですから」

季衣
「とりあえず進もうよ！」

蘭丸
「あ、危ないよ！　季衣ちゃん！」

季衣は一足先に走り出し、蘭丸は急いで後を追った。

すると……

カチッ

季衣
「ん？」

蘭丸
「へ？」

バシュウン！

二人
「「ぬわぁぁぁぁあ！？」」

何かのボタンを踏んだ瞬間に足元から網が出てきて、二人を捕まえた。

武蔵
「よっしゃー！　作戦大成功！」

蒲公英
「やったね、むさっち！」

いつき
「やったべ！」

それと同時に武蔵達が現れる。

蘭丸
「武蔵！　お前！」

季衣
「いつきちゃん！　早く降ろしてよー！」

武蔵
「ざまぁーみろ！　ヴァーガ！」

いつき
「ごめんな季衣ちゃん、これも季衣ちゃんの為なんだべ」

音々音
「成功したですか？」

蒲公英
「うん！　成功したよ！」

秀秋
「よ、良かった～」

どうやら皆、共犯らしい。

蘭丸
「とりあえず早く降ろせよ！」

武蔵
「へ！　悔しかったら自分の力でやってみろよ！」

蒲公英
「というか、気付いてないの？」

蘭丸
「何がだよ！（怒）」

いつき
「蘭丸、今季衣ちゃんとべったりだ！」

蘭丸
「へ？　……！？／／／」

音々音
「やっと気付いたですか。鈍感な奴です」

季衣
「とりあえず降ろして～！！」

こうして他に比べ、平和な時間が訪れていた後輩達であった。

～秀吉ｓｉｄｅ～

秀吉
「……」

雛里
「……あわわ（汗）」

恋
「……」

真桜
（き、気まずすぎやろ！？）

此方は秀吉・雛里ペアと恋・真桜ペアの一組。だが、皆は積極的に喋ろうとはせず、森の中を歩いていた。

真桜
（マズい……このまんまじゃ読者が“何これ？　コイツらの話、つまんねーｗｗｗ”ってな感じになってまう！　それだけは避けねば！！）

そう思った真桜は行動に移す。

真桜
「いや～、ぎょーさんお化けが出てきて怖いな～（汗）」

秀吉
「まだ出てきておらんぞ」

真桜
「……け、けどまぁ～まだまだ先が長いさかいいつ出てくるかもしれん（汗）」

雛里
「いえ、此処の森の道はだいたい把握していますのでもう少しで紙のところに到着します」

真桜
「……いやいや、もしかしたらすぐそこにお化けがいるかも」

恋
「……気配がない。お化けも人もいない」

真桜
（あほんだらァァァア！！）

行動が全て裏目に出た真桜。

真桜
（少しは乗ってくれてもえぇーやないかい！　何でそないに否定すんねん！）

真桜の努力は無駄に終わった。

と、そこに……

恋

「……待って」

恋が皆を止めた。

雛里

「ど、どうしたんですか？（汗）」

恋

「……気配がある」

真桜

「何やて！？　だけどさっきはないゆーたやないかい」

秀吉

「正確には現れたと言った方が良いな」

雛里

「あわ！」

真桜

「ちょっ！　それって、もしかしなくても……（汗）」

恋
「……人じゃない」

雛里
「あわわー！！」

秀吉
「来るぞ！」

秀吉と恋が身構えて、雛里と真桜はその後ろに回った。

そして現れたのは……

一般人
「……」

普通の一般人だった。

真桜
「……何や人やないかい」

雛里
「あ、焦りました……（汗）」

雛里と真桜はただの一般人にホッとしていた。

だが……

恋
「……違う」

真桜
「へ？　何がちゃうねん？」

恋と秀吉は身構えた状態でいた。

秀吉
「まだわからぬか。我とそこの小娘は“現れた”と言った筈だ」

雛里
「……どういう事ですか？」

恋
「……普通の人なら気配が“来る”。けどアレは“現れた”」

真桜
「……それってつまり（汗）」

一般人？

「……グァアアア！！」

真桜が目の前を見た瞬間、一般人は凄まじい勢いで襲ってきた。

雛里
「あわわぁーーー！！？」

真桜
「いやぁ～～～！！（泣）」

雛里と真桜はその姿に驚愕したが……

秀吉
「フン！！」

一般人？
「がッ？！」

秀吉は冷静に一般人を殴り飛ばした。

一般人？
「ギギ……グォ……」

真桜

「な、何や?!　何が起こっておるねん!?」

雛里
「あわわわわわ（汗）！」

真桜と雛里が抱き合いながら驚いている。

恋
「……気をつけて」

真桜
「次は何やねん!?」

秀吉
「……数が増えたな」

恋
「……（コクっ）」

雛里
「ヒィ!?」

そう言った瞬間……

死霊1
「ア～……」

死霊2
「ウゥ～……」

次々と死霊らしき人が現れ始めた。

真桜
「で、出たぁぁぁあ！！？」

雛里
「キュ～……」

真桜はかなり驚愕し、雛里は恐怖の限界に達し、気絶した。

秀吉
「フン！　我が拳の前に平伏せ！」

恋
「……行く」

一方の秀吉と恋は戦う気であった。

真桜
「……もう嫌やぁぁぁぁぁあ！！！！」

真桜は心の底から叫ぶのであった。

～森の奥～

南部
「地獄の道は六道にいざなう……ホゥ」

ゴゴゴゴゴゴ！

美以
「にゃ、にゃんか危ない雰囲気になってきたじょ！」

南部の呪文により辺りは危ない雰囲気になってきた。

南部
「（ブツブツ）……フン！」

ゴォ！

美以

「にゃにゃ！？」

そして南部が手から碧い魂を出した瞬間……

死霊
「アァァ！」

鬼兵
「グォオオオ！」

様々な妖怪が現れた。

美以
「す、凄いにゃ！　これならみんなも喜んでくれるにゃ！」

南部
「ホゥ……ホゥ……」

南部はひたすら妖怪を出し続けるのであった。

次回、完結！

第四十四話・D、肝試し大会～後編～（後書き）

肝試し、長いな～……。

ですが次回で完結します！

それでは、また次回！

第四十四話・E、肝試し大会～完結編～（前書き）

※今回は後書きにアンケートがあります。

第四十四話・E、肝試し大会～完結編～

～あらすじ～

妖怪、出現！？

～南蛮の森～

鬼兵
「グォオオオ！」

死霊
「グガァアア！」

南部の呪文により妖怪達が現れ、大変な事態になっている肝試し大会。

ミケ
「な、何が起きてるにょ？！」

トラ
「トラは知らないにゃ！」

シャム

「にゃ～ん……怖いにゃん（泣）」

脅かし役のミケ、トラ、シャムは何が起きているのか理解できず、木の陰に隠れていた。

ミケ
「どどどどうするにょ！？（汗）」

トラ
「とりあえずだいおーのところに行くにゃ！」

シャム
「だいおー様にゃら何かしら知ってるにゃん」

美以の家来達はこの状況を知る為に美以のところに向かおうとした。

そこへ……

？？？
「へぇ～……なら俺様達も連れてってくれない？」

家来達
「「「？！」」」

突如として背後から声がした。

急いで振り向くと……

佐助
「やっほ～元気かい、子猫ちゃん？」

詠
「そんな呑気な事言っている場合じゃないでしょう」

早苗
「そうですよ、一刻も早くこの怪奇現象を止めなくては……」

霞
「ホンマ、アンタら堅いな」

佐助達がいた。

ミケ
（ヤバいにょ！　見つかったにょ！）

トラ
（どうにかしないとだいおーに怒られるにゃ！）

シャム
（にゃ～ん……）

佐助

「変な事考えんなよ。もし、考えてたら……」

佐助は大手手裏剣を構えて……

佐助
「俺様……怒っちゃうから」

冷たい目で家来達を睨んだ。

ミケ
「や、やめてにょ！　そんな目で見たらダメにょ！」

トラ
「うわぁぁあん！　こわいにゃ～！！（泣）」

シャム
「だいおー様～（泣）」

家来達はその目に耐えられず、美以のいる場所に向かった。

佐助
「ふぅ……これで元凶の場所に行けるぜ。さて、俺様達も追いかけ……」

サッ

佐助
「……何で顔を逸らすんだ？」

詠
「いや、アンタの目を見ると立ち直れない気がして……」

早苗
「わ、私もです……（汗）」

霞
「すまん……悪気はないんや」

佐助
「（そんなに怖いか？）……ハァ」

佐助は少しだが、落ち込みながらも……

佐助
「とりあえず、追いかけようぜ」

詠
「そうね」

妥当な判断をし、家来達を追いかけるのであった。

～桂花ｓｉｄｅ～

桂花
「もう！　何が起きてるのよ！？」

桂花も家来達と同じように状況を判断する事が出来ず、木の物陰に隠れていた。

桂花
「いきなり妖怪みたいな化け物達が現れたり、それに追いかけられたり……あぁ！　何なのよ！」

意味が分からない状況に苛立ちを覚え、知らず知らずの内大きな声を出していた。

そこに……

死霊
「ガァアア！」

桂花
「ッ！？　見つかった？！」

死霊が声に反応して桂花を襲いかかる。
桂花は驚いた分、反応が遅れてしまった。
そして死霊があと数センチまで近付いたが……

大谷
「フン！」

死霊
「ぎゃは?!」

突如大谷が現れ、死霊を吹き飛ばした。

大谷
「何をしておる、まだ余興は始まったばっかりぞ」

桂花
「何が余興よ！　一体何が起きてるのよ!?」

大谷
「おそらくあの南部とやらの術によるモノであろう……やりおるわ」

桂花
「何言ってるのよ！　はた迷惑じゃない！」

大谷
「そうか？　我は愉快で仕方ないぞ……ヒヒ！」

桂花
「ハァ？　アンタバカァ？」

大谷
「それは主のセリフではないぞ」

桂花
「うっさい！」

大谷
「……まぁよい。我は行くぞ」

桂花
「ち、ちょっと、どこに行くのよ？」

大谷
「もう少しでこの余興は終わる……ならば我の居場所はなくなる」

桂花
「……つまり先に帰るって事？」

大谷
「そうだ……」

そう言って大谷は進み始めた。

桂花
「（私は華琳さまを待たない……ダメだわ、私は今罰を受けているんだった）……待ちなさい！　私も行くわよ！」

桂花は自分の立場を理解して大谷と一緒に行動した。

～焔耶ｓｉｄｅ～

鬼兵
「グォオオオ！」

星華蝶
「悪・即・斬！」

朱華蝶
「はわわ！　それは止めてください！」

焔耶
「タァァア！！」

凪
「ハア！！」

此方は何故か星華蝶と朱華蝶がおり、焔耶・凪ペアと一緒に妖怪退

治を行っていた。

焔耶
「星と朱里は何をしている！」

凪
「先ほど向こうに行ったきりだな」

星華蝶
「そう言うな、彼女たちも向こうで頑張っているのだろう」

朱華蝶
「そ、そうですね……」

焔耶
「……何故わかる？」

星華蝶
「……勘だ」

凪
「お喋りはそこまでです。来ます！」

死霊
「きしゃーー！！」

朱華蝶
「はわわーー！？」

焔耶
「くそ！　倒しても倒してもきりがない！」

華蝶達と焔耶達は終わりのない妖怪退治に向かうのであった。

～翠ｓｉｄｅ～

翠
「タァァアア！」

死霊
「ゴファ！？」

小蓮
「もー！　一体どうなってるのよ！」

雪蓮
「はいはい、文句を言う前に目の前の化け物を倒しなさい」

冥琳
「だが、これだときりがないな」

翠・小蓮ペアと雪蓮・冥琳ペアも例の如く、妖怪退治を行っていた。

雪蓮

「ホント、倒しても倒してもどんどん増えちゃって……」

翠
「ああ、面倒だな」

雪蓮
「……楽しいじゃない♪」

翠
「……は？」

雪蓮
「アハハ♪　ほらほら、私をもっと狂わせなさい！」

小蓮
「あ～……また、始まっちゃった」

冥琳
「はぁ～……やれやれ」

鬼兵
「グォオオオ！」

雪蓮
「さぁ！　私にもっと地獄を見せてちょうだい！」

翠
「……これだとどっちが化け物かわかんねーよ（汗）」

雪蓮が暴走している同じ頃……

～森の奥・祭壇～

南部
「戻りてたまわぬ……ホゥ‥ホゥ」

鬼兵
「グォオオオ！」

死霊
「ヒャッハー！」

美以
「スゴいにゃ！　これならみんなも喜ぶにゃ！」

南部はさらに妖怪を呼び出し、森の中は妖怪だらけになっていた。

南部
「人の地獄は……」

南部が再び妖怪を呼び出そうとしたところに……

ミケ

「だいおーしゃま～（泣）」

トラ
「助けてにゃあ～！（泣）」

シャム
「怖いにゃん（泣）」

美以
「にゃ？　何してるのにゃ？」

美以の家来達がやってきた。

さらに……

？？？
「そこまでです！」

美以
「にゃにゃ！　誰にゃ！？」

早苗
「アナタ達の悪行、許しません！」

霞
「此処で終わらしてもらうで」

佐助

「悪いけど……これ以上、化け物を出すわけにはいかないんでね」

詠
「そういう事よ、諦めなさい」

佐助達も現れた。

美以
「にゃ！？　何でお前達かいるのにゃ！？」

早苗
「これ以上、人に迷惑を掛ける行為をすると私が許しません！」

美以
「フン！　みぃたちは人の為にやっているのにゃ。迷惑なんてかけてないじょ！　ていうかお前誰にゃ！？」

早苗
「聞く耳なしですか……」

美以
「答えろにゃ！（怒）」

南部
「その扉を開くか……」

早苗
「！　アナタが原因ですか！？　その術を封印します！」

早苗はカードを取り出し……

早苗
「秘法！」

自らの技を繰り出そうとした。

だが……

美以
「させないにゃ！　者共、かかるのにゃ！」

死霊
「キシャー！」

鬼兵
「グォオオオ！」

早苗
「クッ！　邪魔です！」

佐助
「だぁ～くそ！　化け物が多すぎて援護できねー！」

霞

「どうしたらえぇーんや！？」

詠

「絶体絶命ね……」

多数の妖怪が現れ、早苗の秘法を妨害し始めた。
佐助達は援護に向かおうとしたが余りの多さ故に援護が出来ずにいた。
詠は何か策を考え始めた。

詠

（……ダメ、このままじゃ）

だが、この状況にあった策が思いつかず、追い込まれていた。
最早、空前の灯火……だが！

ドカァァァン！

詠

「キャア！？」

霞

「な、何や？！　爆発したで！」

早苗

「て、敵ですか?!」

突如爆発音が聞こえ、早苗達は慌て出す。

美以
「今のもお前の術にゃのか!?」

南部
「いやはや……知らぬ」

しかしながら美以達の仕業ではないようだ。

早苗
「では一体誰が?」

佐助
「いや~……此処にきて協力な助っ人だな」

詠
「え?　知ってんの?」

佐助
「今にわかるよ」

詠
「ちょっと!　早く言いなさいよ!」

どうやら佐助は知っているようだが、詳しい事は言わなかった。

詠は再び聞き出したその時……

???

「Ｙａ――――――Ｈａ――――――！！」

???

「うぉぉぉおおお！！」

早苗

「ッ！？」

詠

「こ、今度は一体何よ？！」

どこからともなく叫び声が木霊した。

佐助

「はい、二名様が上から来ま～す。ご注意くださ～い」

美以

「上から……にゃにゃ！！？」

美以は佐助の言葉を聞き、上を見た。

そこには……

政宗

「Ｌｅｔ's　ｐａｒｔｙ!!」

幸村

「我が魂!　烈火の如く燃えておるわぁぁあ!!」

ドカァァアン!

政宗と幸村が空から降りてきていた。

そしてそのまま着地して、戦闘態勢をとる。

さらに……

バキバキバキィィ!!

ミケ

「にょ?!」

トラ

「今度はなんにゃ!?」

シャム
「もう帰りたいにゃぁ〜ん……（泣）」

今度は森の方から木をなぎ倒す音が聞こえ、家来達は脅えた。

そして森の奥から……

家康
「三成！　ワシは妖怪ではないぞ！！」

三成
「黙れ！　私にとって貴様など妖の類と変わりない！　号哭ッ！」

家康
「おわッ！？」

何故か喧嘩をしながらやってきた家康と三成。

詠
「また来た！」

霞
「てゆうか何で喧嘩しとるんや？！」

佐助
「だが、これで反撃できるな」

早苗
「でも、協力してくれますかね？（汗）」

佐助
「大丈夫、大丈夫、まぁ見てなって」

そう言って佐助は主人公勢にある事を言った。

佐助
「徳川～向こうのおっさんが“う○こたれの泣き虫狸”って言ってたぞ～」

家康
「何！？　ワシはうん○たれでも泣き虫狸でもない！（怒）」

佐助
「伊達の旦那は“インチキマヨラー伊達男”だって」

政宗
「……」

佐助
「あ、そういえばさっき、武田の大将と豊臣先輩の悪口を言っていたような」

幸村
「お館様の悪口を！　何たる悪行！」

三成
「秀吉様の悪口だと！？　許さぬ！」

そして主人公勢は南部の方を一斉に向いた。

美以
「にゃにゃ？！」

家康
「ワシは大抵の事は許すが……今のは許す訳にはいかない！（怒）」

政宗
「どいつもこいつも俺の事をあのマヨラー侍と思いやがって……そろそろｐａｔｉｅｎｃｅの限界だ（怒）」

幸村
「我が師であるお館様を侮辱するとは言語道断！（怒）」

三成
「秀吉様の陰口は・・・万死に値する！（怒）」

ゴゴゴゴゴゴ！

各々は怒りに燃え上がっていた。

そして……

家康
「天道突きッ！！」

政宗
「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！！」

幸村
「虎炎ッ！！」

三成
「斬首ッ！！」

各々の必殺技を同時に繰り出した。

美以
「にゃぁぁぁぁぁ！！？」

家来達
「「「ふぎゃあああああ！！」」」

南部
「逝かぬ……まだ開かぬ内には……！？」

ドカァァァン！

まともに喰らった美以と南部、そして何故か家来達は爆発に飲み込まれてしまった。

早苗
「……（汗）」

佐助
「な？」

詠
「まぁ……普通ね」

霞
「普通やな」

早苗
「いや、普通じゃないですから？！」

佐助
（お！　いいツッコミだね～）

詠と霞はいつも見てる風景だったので理解が早かった。
しかし、早苗は今一つ理解が出来ないでいる。
なんやかんやで南部の術は封印する事が出来た一同。

しかし今までの肝試しを陰で見ていた人物がいた。

天海
「おやおや……南部さんは失敗しましたか」

天海である。

天海
「しかしながら第一の策は成功しました。これで良しとしましょう……ンフフ～」

そう言い残し、天海は姿を闇に消すのであった。

～南蛮の森・入り口～

桃香
「あ！　家康君！」

華琳
「帰ってきたようね」

蓮華
「幸村！　大丈夫！？」

家康達は怪奇を解決し、森の入り口に到着した。
そこには今回の肝試しの参加者が待機している。

天和
「ユッキ～怖かったよ～（泣）」

穏
「私もです～（泣）」

ギュッ

幸村
「なッ？！　ははは破廉恥な！／／／」

元親
「家康！　大丈夫か！？」

家康
「ああ、ワシは問題ないぞ」

風魔
『安心』

小十郎
「無事のようで」

政宗
「Ｈａ！　当たり前だろ！」

秀吉
「無事でなりよりだ、三成」

三成
「これも全て、秀吉様のお陰でございます」

元就
「ところで貴様は誰だ？」

早苗
「覚えていないんですか？！」

それぞれ話していると、今回の主催者の美以がボロボロの状態で姿を現した。

美以
「に、にゃ～……これにて肝試し大会を終了するにゃ～」

そう言って美以は森の片付けをする為に森の中へと消えた。

慶次
「さて、帰って寝るとしますか！」

家康
「では、行くか！」

恋ＢＡＲＡメンバーも、大変疲れているので宮殿に戻ろうとした。
しかし、此処で桃香がある事に気付く。

桃香
「あれ、愛紗ちゃんは？」

朱里
「いませんでしたっけ？」

雛里
「私は見てないよ～」

気付いた事は愛紗がいない事だった。

さらに・・・・・

猪々子
「そういえば姫も見てないな～」

月

「白蓮さんもいません」

半兵衛

「浅井君もいないよ」

次々と行方不明者が現れ、皆は心配し始めた。

そして此処で、大谷が一言……

大谷

「……此処にお市とやらの姿もあらぬぞ」

一同

「「「「……」」」」

しばらく間が空き……

一同

「「「「ま、まさか！？」」」」

一斉に森を見た。

～森の中～

お市
「か～ごメかごめ～、籠のな～かのと～りハ～」

森の中ではお市が一人歌を歌っていた。

その周りには……

愛紗
「……た……すけ……」

白蓮
「誰……か……」

麗羽
「……」

長政
「や……めてく…れ、市……」

長政達が意識ギリギリで助けを求めていた。
しかし、彼らの願いも悲しく、未だに誰一人として彼らを見つけられずにいた。

お市
「ツ～るとか～メがす～べ～た」

歌っていりお市の周りに黒い手が現れ始め、お市と長政達を飲み込もうとしていた。

そして……

お市

「後ろの正面……ダーアーレ？」

歌いきったと同時にお市達は闇へと消えた。

その後、恋ＢＡＲＡメンバーの懸命な捜索の末、お市達を見つけ出すことが出来た。

しかし、長政達の班だけは肝試しの記憶が一切なかったという……

肝試し大会、終了。

第四十四話・E、肝試し大会～完結編～（後書き）

はい、今回で肝試し大会は終了です。

最後まで怖かったお市さんは如何でしたか？

自分は一回だけ夢に出てきて、かなり汗だくでおきました。

さて、そんな話よりアンケートです！

今回のアンケートはこちら！

・次回の主役はどちらがいいですか？

A・家康

B・政宗

・次の外伝ならどちらいいですか？

A・ザビーがザビー教の布教活動。

B・久秀と信長の学園会議

C・出来ない・・・二つを選ぶなんて出来ない！！

以上二つです。

次回は来年に載せますのでよろしくお願いします。

では、また来年！

第四十五話、独眼竜と華蝶と眠り姫と……

～あらすじ～

肝試し大会が終了した次の日の朝……

～南蛮王国・政宗の部屋～

？？？

「お兄ちゃ～ん、朝だよ～」

政宗

「ｚｚｚ……」

？？？

「もう…起きてよ～お兄ちゃん」

南蛮の朝、政宗の部屋では誰かが起こしにきたようだ。

？？？

「朝だよ～お兄ちゃ～ん」

政宗

（ん？　朝か……つか誰だ？）

ようやく目が覚めた政宗だが、一体誰が起こしにきたのかはわからなかった。

？？？

「も～……起きないならこうしちゃうんだから……はむっ！」

政宗

「ッ！　な、なにしやがんだ！？」

政宗は突然耳を噛まれてベッドから飛び上がる。

そこにいたのは……

星

「おや、ようやく起きられたか」

星であった。

政宗

「……Ａｈ？」

星

「どうなされた？　政宗殿」

政宗
「いや……此処にいたのはテメェだけか？」

星
「まぁ見た通りですな」

政宗
「そうか……つーかテメェは何してんだ？」

星
「いやなに、暇だったので少し不法侵入を」

政宗
「オイ！　何“ちょっとコンビニに行ってくる”みたいなテンションで犯罪を犯してんだよ！？」

星
「安心しなされ、証拠は残さん！」

政宗
「そういう問題じゃねーよ！！」

起きて早々、忙しい人物である。

政宗
「Ｈａ～……で、何だ？」

星
「何だとは？」

政宗
「テメェ、用件もなしに不法侵入をしたのか？」

星
「おお！　そうだった！」

政宗
（……）

政宗は少し哀れな目で星を見た。

星
「政宗殿、今日は何をなされる？」

政宗
「今日？」

星
「はい」

政宗
「……特にｐｌａｎはねぇーな」

星
「それは都合が良いですな」

星は少し安心したような顔をした。

政宗
「んで？　予定を聞いてどうすんだ？」

星
「いや、これにはしっかりと理由はありますぞ」

政宗
「理由？」

星
「政宗殿、今から一緒に買い物をしないか？」

政宗
「Ａｈ？　買い物？」

星
「まぁ俗に言う“デート”ですな」

政宗
「……何を考えてやがる」

星
「おや、政宗殿は私が何か企んでいると言いたいのですか？」

政宗

「ｂｉｎｇｏ」

星

「……少し、悲しいですな」

星は落ち込むフリをする。

政宗

「冗談はそこまでにしとけ」

星

「つれないですな」

星はつまらなさそうにため息をついた。

星

「安心しなされ、今回は純粋なデートですぞ」

政宗

「……嘘じゃあねぇーだろうな？」

星

「此処まできて嘘はつきませぬ」

政宗

「……まぁいいか」

そう短く返事をして、星のデートを呑んだ。

政宗
「まずは何処に行くんだ？」

星
「そうですな……おっと、その前に」

星は何かを思い出したようにベッドの上に紙を置く。

政宗
「何だそれ？」

星
「いや、メッセージみたいな物ですぞ」

政宗
「ｍｅｓｓａｇｅ？　何で俺のベッドの上に置くんだ？」

星
「ふっ……後にわかる」

政宗
「……Ｈａ～」

政宗は深いため息つき、星と一緒に部屋を後にした。

その中で政宗は一つ思う事があった……

政宗

（結局……朝の声は誰だったんだ？）

政宗はそう思っていたが、あまり気にせずに歩くのであった。

数十分後……

華琳

「政宗、入るわよ」

華琳が政宗の部屋に入ってきた。

華琳

「……いないみたいね」

辺りを見渡し、政宗がいない事を確認する。

華琳

「何処に行ったのかしら？　……あら？」

華琳はベッドの上の紙に気付き、それを拾い上げる。

華琳
「何かしら？」

そして紙を開き、中身を確認した。

そこには……

【すまんが政宗殿を借りていく。サラバダー！！　ｂｙ星】

と、書かれていた。

華琳
「……」

クシャ！

華琳
「春蘭！！」

春蘭
「此処に！」

華琳が春蘭を呼ぶと風のようにやってきた。

華琳
「我が華琳隊を早急に集め、星を探し出せ！」

春蘭
「御意！」

そして春蘭は風のように消えた。

華琳
「星、私を敵に回すとは……愚かな」

そう言って、華琳は政宗の部屋を後にする。

～南蛮街～

風
「まずは何処に行きましょうか？」

星
「そうだな、此処の服がどんな物か見てみたい」

風
「では洋服屋さんに行きましょ～」

政宗
「……」

星
「おや、どうなされた？」

政宗
「テメェ……いついた？」

風
「……」

政宗
「……オイ」

風
「ぐぅ～……」

政宗
「寝るな！」

風
「おお！　風の事だったのですか～」

政宗
「テメェ以外誰がいんだよ」

風
「いや～失敬失敬……では、説明しましょう」

～回想～

？？？
「俺は、海賊王になる！！」

～回想終了～

風
「……という感じです～」

政宗
「いやいやいや、一切わかんねえから！」

星
「いや、お主が一番わかるだろ？」

政宗
「うるせえ！」

風
「冗談ですよ～。実はこういう事です」

・政宗と星は南蛮街に到着。
・風と遭遇。
・風が仲間になりたそうにこちらを見ている。

仲間にしますか？
・はい
・ＹＥＳ

風
「こういう事です～」

政宗
「選択肢に拒否がねえ……」

星
「まぁ良いではないか」

政宗
「別に俺は嫌だとは言ってねえぞ」

風
「なら～行きましょう～か」

政宗
「ＯＫ」

そして政宗達は移動した。

～南蛮街・洋服屋～

星
「やはり、向こうのとは違うな」

風
「でも可愛いですね～」

星と風は南蛮街の服を見て、向こうのとは違う可愛いさがあり、いろいろと服を見ていた。

政宗
（俺……必要か？）

そんな星と風を見た政宗は自分が必要なのか考えた。

星
「政宗殿、どちらの方がよろしいかな？」

政宗

「Ａｈ？　何で俺に言うんだ？」

星
「……それがデートと言うものですぞ」

政宗
「そんなもんか？」

風
「そんなもんです～」

政宗
「……そうか」

そう言って政宗は２つの服を見た。
一つは紅色の花柄模様のワンピース。
もう一つは蒼色の蝶々模様のチャイナドレス。

政宗
「……そっちの蒼色の方がいいと思うぜ」

星
「ほう……何故かな？」

政宗
「特に意味はねえ」

星

「面白くありませんな」

政宗
「ほっとけ」

星
「まぁ政宗殿が決められた物だから、買うとしましょう」

風
「じゃあ風はどの服がいいですか～？」

政宗
「……」

政宗は少し考えて……

政宗
「あまり強い色は似合わないと思うぜ、少し涼しい空みたいな色がいいと思うぜ」

風
「ほ～」

政宗
「ダメか？」

風
「いえ～、ごもっともな事を言われてビックリしました～」

政宗
「そうか、それは良かった」

星
「……」

政宗と風が会話をしていると、星が睨みつけてきた。

政宗
「Ａｈ？　どうした、そんな目をして？」

星
「政宗殿、私も服を選んでくださらぬか」

政宗
「Ａｈ？　て、オイ！　服を引っ張るな！」

風
「あらら～」

その後、政宗は星の服選びに数十分かかった。

～レストラン・王国のお皿～

政宗
「Ｈｕｍ～……疲れた」

星
「全く、だらしないですな」

政宗
「テメェのせいだろうが」

洋服屋を出た政宗達は昼時という事もあり、レストランにきており、メニューを見ていた。

政宗
「決まったか？」

星
「決まりましたぞ」

風
「風も決まりました～」

政宗
「ＯＫ、なら呼ぶか」

そして政宗はボタンを押して店員を呼す。

早苗
「いらっしゃいませ～」

政宗
「Ａｈ？　テメェは確か……」

やってきたのは早苗だった。

早苗
「早苗です。あの時はお世話になりました」

政宗
「ああ、やっぱあん時の……何してんだ？」

早苗
「私、今此処でバイトをしているんです」

政宗
「Ｈｕｍ～……」

早苗
「そういうアナタ達は？」

政宗
「俺らは、買い物をしてたんだ」

早苗
「へ～、デートですか？」

政宗
「ま、あながち間違いじゃねぇな」

星
「……むぅ」

政宗は早苗と少し会話をしていたが、星は何か不満そうに見ていた。

星
「政宗殿、早く頼んでくれぬか？」

政宗
「おっとすまねえ、そうだな……」

星
「……ハァ」

風
「……やれやれ」

そんな鈍感な政宗に星と風は呆れていた。

～南蛮街～

星
「さて……どうする？」

政宗
「いや、オメェが決めろよ」

宝慧
「兄ちゃん、こういう時は兄ちゃんが決めんのがデートってもんだぜ」

風
「お、珍しく宝慧が良いこと言いましたね～」

宝慧
「まぁな」

政宗
（……ま、いいか）

政宗はいきなり人形が喋りだした事に驚いたがすぐに慣れた。

そして宝慧に言われたので何処に行こうか考えていたら……

？？？
「見つけたわよ、星」

星
「ん？」

政宗
「Ａｈ？」

誰かが後ろから声をかけてきた。

政宗達は振り向いたら……

華琳
「さぁ、懺悔の時間よ」

華琳が鎌を構えながら星を睨みつけていた。

さらに……

春蘭
「貴様ァー！！　なんてうらやまし……じゃなくて、なんと淫らな行為を！／／／」

流琉
「抜け駆けは……許しません！！」

いつき
「コラァー！　おらたちに内緒でなにしてんだべ！」

ぞくぞくと華琳隊がやってきた。

星
「ふっ……もう少し早く現れるかと思っていたが……遅かったな」

華琳
「ええ、何分此方も此処を完全に把握していなくてね……だけど、これでお終いよ」

星
「ほぅ……か弱き乙女に対し、大勢で向かってくるのか？」

華琳
「私は目的の為なら何でもするタイプよ……者共、かかれ！！」

そう言って春蘭達は星に向かっていった。

星
「ならば仕方あるまい……我が槍にて返り討ちにしてくれる！！」

対する星も、何気にノリノリで臨戦態勢をとっていた。

政宗
「……何してんだ、アイツら？」

風
「風にもわかりません」

それを呆れながら見ていた政宗と風。

政宗
「Ｈａ～……アホらしい、先に帰るわ」

風
「じゃあ風もご一緒していいですか～？」

政宗
「ああ」

風
（計画通りです～）

風はそんな事を思いながら政宗と一緒に部屋に戻るのであった。

因みに、華琳達の決着は途中で政宗がいなくなった事に気付き、中断した……

～南蛮王国・ロビー～

翠
「うぅ～／／／」

蒲公英
「お姉ちゃん、何してんの？」

翠
「うわ！　……た、たんぽぽか／／／」

政宗達がデートをしている時、ロビーには翠と蒲公英がいた。

蒲公英
「うわって、たんぽぽずっと、お姉ちゃんの後ろにいたよ。気付かなかったの？」

翠
「う、うるせえな／／／」

蒲公英
「……あ、風魔さん」

翠
「ッ！／／／」

翠は思いっきり振り向く。
しかしそこには誰もいなかった。

蒲公英
「嘘だよ、お姉ちゃん」

翠
「た、たんぽぽ！　テメェ！／／／」

蒲公英
「アハハ～♪　ごめんごめん、お姉ちゃん」

一切反省していない蒲公英。

蒲公英
「でも、そんなんだといつまで経っても関係が変わんないよ」

翠
「わ、わかってるよ／／／」

蒲公英
「まぁ、わかってるならいいや。じゃあたんぽぽは行くね」

翠
「ん？　何処に行くんだ？」

蒲公英
「デート♪」

翠

「……ハァ！？」

次回、蒲公英奮闘記！

お楽しみに！

第四十五話、独眼竜と華蝶と眠り姫と……（後書き）

明けましておめでとうございます。

少し更新が遅くなりました、作者です。

次回からは普通通りにしますので安心してください。

今回はアンケート結果により、政宗の話を書きました。

家康の話もしっかり書きたいと思いますのでお楽しみに！

次回は蒲公英のデートです。

相手は……見当はついていると思います。

それでは、また次回！

第四十六話、蒲公英奮闘記！

～あらすじ～

政宗のデートが終わった同時刻……

～南蛮王国・玄関前～

蒲公英
「ふんふんふん♪」

玄関前には蒲公英が鼻歌を吹きながら誰かを待っていた。

蒲公英
「さて、お姉ちゃんに負けないようにたんぽぽも頑張りますか！」

蒲公英はそう意気込む。

そして……

蒲公英
「あ！　来た！」

待ち合わせしていた人物がやってきた。

その人物は……

武蔵
「よっ！」

武蔵であった。

蒲公英
「むさっち！」

武蔵
「どうしたんだ？　急に呼び出して？」

蒲公英
「うん、今日はむさっちと一緒にデートしようと思ってね♪」

武蔵
「デート？　デートって何だ？」

武蔵も例の如く、デートを知らない。

蒲公英
「デートは、一緒に買い物したり、御飯したりする事だよ」

武蔵
「ふ～ん……そんなものか～」

蒲公英
（好きな人限定だけど♪）

武蔵
「ならいいぜ！　おれさまもちょうど腹が減っていたところだし」

蒲公英
「よし！　ならまずは御飯を食べよう！」

武蔵
「よっしゃあ！」

そして武蔵と蒲公英はレストランに向かっていった。

～レストラン・王国のお皿～

武蔵
「ガツガツ！」

蒲公英
「そんなに慌てて食べなくても……（汗）」

レストランに到着した武蔵と蒲公英。
注文して料理が運ばれた瞬間、武蔵はがっつき始めた。

武蔵
「ふめ～！（うめ～！）」

蒲公英
「（……花より団子か）ハァ～……」

武蔵
「ふ？　どふひた？（ん？　どうした？）」

蒲公英
「なんでもないよ～だ」

武蔵
「？」

武蔵は何故蒲公英が不機嫌になったのかわからなかったが、あまり気にしないで食事を再開した。
それを見ていた蒲公英は再び溜め息をつくのであった。

～ゲームセンター・ｅｎｊｏｙｐａｒｋ～

此処は南蛮街の中にある大型ゲームセンター。
ゲームの種類は豊富で、日本のゲームも数多くある。

武蔵
「よっしゃあ～！！　いろんなゲームを制覇しようぜ！」

蒲公英
「了解♪」

武蔵は入るなりテンションを上げていた。

武蔵
「えっと、まずは……」

武蔵・???
「「このシューティングゲームからだ（ね）！！」」

武蔵・???
「「ん？」」

武蔵がシューティングゲームを選んだ瞬間、同じように声を上げた少女がいた。

少女の容姿は頭がお団子ヘアーに小柄な体格。
少し気が強そうな性格の少女。

???
「ちょっと！　今あたしの方が早かったじゃない！　どきなさい！」

武蔵
「いんや！　これはおれさまの方が早いに決まってる！　お前こそどけ！」

???
「それがレディーに言う言葉！？」

武蔵
「うるせ～！　ヴァーカ！」

???
「なッ！　バカって言う方がバカなのよ！　バーカ！」

武蔵
「ヴァーカ！　ヴァーカ！」

???
「バーカ！　バーカ！」

武蔵と少女の口論（口喧嘩？）は終わらない。

そんな様子を見ていた蒲公英は……

蒲公英

（……似た者同士だな～）

と、思っていた。

そこへ……

？？？

「小喬ちゃ～ん！」

？？？

「あ！　お姉ちゃん！」

武蔵と口喧嘩していた少女と瓜二つの少女が現れた。

どうやら、先ほどの少女とは双子のようだ。

？？？

「小喬ちゃん、勝手に行動したら怒られるよ」

？？？

「いいのいいの、すぐに戻ればいいんだから」

？？？

「もう～」

蒲公英

「ちょっといい？」

双子が何か話し合っていると蒲公英が双子に話しかける。

???
「何？」

蒲公英
「とりあえず、自己紹介しない？　これも何かの縁という事で」

???
「あ、そうですね」

蒲公英
「たんぽぽは蒲公英だよ♪」

武蔵
「おれさまは宮本武蔵だ！」

???
「あたしは美人姉妹の妹、小喬よ」

???
「もう、小喬ちゃんったら……わたしは大喬です」

蒲公英
（あれ？　どっかで聞いた事あるような……）

武蔵

「そんじゃあ、おれさまと勝負だ！！」

小喬
「望むところよ！　お姉ちゃん、やるわよ！」

大喬
「えぇ～！　わ、わたしも？！」

武蔵
「たんぽぽ！　おれさま達の力をみせようぜ！！」

蒲公英
「うん♪」

こうして、何故か武蔵・蒲公英ペアと美人二喬の勝負が始まった。

数時間後……

～南蛮街～

武蔵
「どうだ！　おれさま達の勝利だ！」

小喬
「きぃ～！　くやしい！」

ゲーム勝負は武蔵・蒲公英ペアの勝利で終わり、現在は南蛮街に戻ってきていた。

大喬
「しょうがないよ、小喬ちゃん」

蒲公英
「そうそう、潔く諦めなよ」

小喬
「うっさい！」

諦めが悪い小喬。

大喬
「とりあえず、もう戻ろうよ～」

小喬
「そうね、そろそろ戻らないと……」

そろそろ戻ろうとした二人だが……

大喬
「どうしたの？」

小喬
「あたし達って……どっから来たっけ？」

大喬
「……（汗）」

自分達が何処から来たか忘れてしまったようだ。

つまり……

武蔵
「何だ？　お前ら、迷子か？」

迷子です。

小喬
「ま、迷子じゃないわよ！　ちょっと道がわかんないだけで……」

蒲公英
「いや、それを迷子って言うんじゃない？」

小喬
「うっ……（汗）」

大喬
「どどどうしよう！？（汗）」

小喬
「だ、大丈夫だよ……多分」

迷子とわかった瞬間、慌てふためいた。
そんな様子を見ていた武蔵が一言。

武蔵
「なら、おれさま達が手伝ってやるよ！」

二人
「「え？」」

いきなり手伝うと言い出した武蔵。
二人はいきなりの事で少し戸惑う。

小喬
「な、何で関係ないアンタが手伝うのよ！？」

武蔵
「何でって言われてもな～……わかんねーや！」

大喬
「わ、わかんないって（汗）」

蒲公英

「あ～……こうなったむさっちは止まらないからね～」

大喬
（どうする、小喬ちゃん？）

小喬
（……しょうがないわよ、あたし達はこの街を把握できていないし）

二人は相談し合い、どうするか決めていた。

そして……

大喬
「そ、それじゃあお願いします」

武蔵にお願いした。

武蔵
「よっしゃあ！　そんじゃ、探すとすっかぁ！」

小喬
「ち、ちょっと待って！　アンタ、この街を把握できてんじゃないの？！」

武蔵

「あん？　わかる訳ねぇじゃん！」

蒲公英
「たんぽぽ達も此処にきて間もないしね」

小喬
「……（汗）」

大喬
「……（汗）」

武蔵、後先考えないで行動する人物。
そして、武蔵達の冒険が始まった！

蒲公英
（ホントはたんぽぽとのデートだったんだけどな～……ま、いっか）

そんな事を思う蒲公英だった。

数時間後……

武蔵
「見つかったか？」

小喬

「ぜ、全然見つからない」

大喬
「ダ、ダメです」

蒲公英
「たんぽぽもダメ～」

大喬・小喬の情報の元、保護者的な人物を探していた。
だが、数時間探していたが、そのような人物はいなかった。

小喬
「もう、一体どこにいるのよ……」

大喬
「……小喬ちゃん」

小喬
「何、お姉ちゃん？」

大喬
「わたし達、このまま迷子のままなのかな……」

小喬
「ち、ちょっと！　何言ってるの！？」

大喬
「だ、だってこんなに探してもいないんだよ？」

小喬
「そ、それは……」

これだけ探しても見つからない事に不安し始めた大喬。
小喬も最初は大喬を励まそうとしたが、次第に自分も不安になってきていた。

励ましの言葉も見つからなくなり、二人が黙っている中……

武蔵
「……ダァ～!!　めんどくせぇ～!!」

突如、武蔵が叫び出した。

大喬
「キャア!?」

小喬
「な、何いきなり大声を出してんのよ!?」

武蔵
「お前らがそんなくよくよしてたってどうにもならないじゃねーか!」

小喬

「そ、そんな事言ったって仕方ないじゃない！」

大喬
「それに一体どうしたらいいかわかんないし……」

武蔵
「だからお前らはヴァカなんだよ！」

小喬
「な、何ですって！？」

武蔵
「おれさまが解決してやる！　よく見とけ！」

蒲公英
（……嫌な予感）

そう思っている蒲公英を尻目に武蔵は次のように叫んだ。

武蔵
「おい！　おれさま達は今、この双子のちびっ子をいじめている！」

蒲公英
「ちょっ？！」

小喬
「ア、アンタ何言ってんのよ！？」

武蔵
「保護者だったらこの双子のちびっ子を守ってみろ！　ヴァーカ！」

武蔵はいきなり、二人のいじめ発言を言い出した。

武蔵
「どうした!?　そんなにおれさま達が怖いのか！」

蒲公英や二喬の心配を尻目に武蔵はひたすら叫び続けた。
その叫び声により、武蔵達の周りには徐々にギャラリーが増えてきた。

武蔵
「ほらほらほら！　早く助けねーと大変な……」

武蔵が叫ぼうとした瞬間……

ヒュヒュン！　ブスッ！

武蔵・蒲公英
「「ギャアアア!!」」

矢が飛んできて、二人の額に刺さった。

それと同時に……

祭

「大喬殿！　小喬殿！　大丈夫か！？」

二喬

「「さ、祭さま！！」」

祭が現れた。

祭

「どこにおられたのですか！？　心配しましたぞ！」

大喬

「ご、ごめんなさい……」

祭

「全く……このような事は今回限りにして頂きたい」

小喬

「はい……」

祭

「さて……お主ら、覚悟はできておるな？」

祭は武蔵と蒲公英を見て、殺気を飛ばした。

だが……

蒲公英
「さ、祭先生?!」

祭
「ん？　主らは確かウチの生徒の……」

大喬
「さ、祭さま！　この人達はわたし達を助けてくれたんです！」

祭
「何と！　どういう事ですか!?」

大喬・小喬、説明中……

祭
「……そういう事だったのですか」

大喬
「はい。だから、この人達はわたし達の恩人です」

祭
「そうか……お主ら、すまなかった」

武蔵
「気にすんな！」

蒲公英
「困った時はお互い様だよ！」

祭
「そう言ってくれると助かる」

武蔵
「ところで、何でこの二人の保護者が祭先生なんだよ？」

祭
「うむ、実はこの二人は昔から儂の家に住んでおっての……小学5年位から、少し海外の方に行かせていたのだ。」

武蔵
「へぇ～」

祭
「後、二学期から、ウチの生徒になる。学年的にいったら、主らと同い年よ」

蒲公英
「あ！　思い出した！　シャオちゃんが海外に友達がいるって話にでてきた名前だ！」

大喬
「シャオさんの知り合いだったんですか！」

そして、しばらく雑談をしていると……

紫苑
「祭、見つかったの？」

結梗
「全く、世話が焼ける」

孫市
「……」

璃々
「みつかった～？」

紫苑率いる、教師陣がやってきた。

祭
「おお！　すまぬすまぬ。無事に見つかったぞ」

紫苑
「そう、それは良かったわ」

結梗

「お主ら、あまり迷惑をかけるでない」

二喬
「「は、はい……」」

孫市
「……ところで、お前達は何をしている？」

蒲公英
「それはコッチが聞きたいんですけど……（汗）」

紫苑
「わたくし達は毎年、この南蛮島に旅行に来ています」

結梗
「そういうお主らは？」

蒲公英
「たんぽぽ達は……」

蒲公英、説明中……

紫苑
「なるほど、皆さんで旅行をしていたんですか」

璃々
「りり、家康お父さんに会いたい♪」

紫苑
「ダメよ璃々。わたくし達が行くと皆さんが迷惑するでしょう」

璃々
「えぇ～！」

蒲公英
「そんな事ないですよ、紫苑先生」

紫苑
「そうかしら？」

孫市
「だが、我らが行くと皆が気まずい雰囲気になるだろう」

蒲公英
「全然♪　むしろ、先生達がいると楽しくなると思いますよ♪」

紫苑
「でも……」

結梗
「まぁ良いではないか、紫苑」

紫苑
「結梗……」

祭
「此処は学校ではないぞ。ならば、儂らがどうこう言わなければ問題ないわ」

紫苑
「祭まで……しょうがないわね」

璃々
「わぁ～い！　家康お父さんに会える～♪」

こうして教師陣の参加が決まった。

蒲公英
「それじゃあたんぽぽ達が案内するね。いいでしょう、むさっち？」

武蔵
「おう！　問題ないぜ！」

紫苑
「そう？　なら、お願いしていいかしら？」

蒲公英
「了解♪」

そして蒲公英と武蔵は教師陣を南蛮王国に案内した。

～南蛮王国・ロビー～

美以
「みぃは構わないにゃ！」

美以は事情を聞き、すぐに承諾した。

紫苑
「ありがとうございます」

美以
「気にする事じゃないじょ！」

そして教師陣は南蛮王国の部屋を借りて、各部屋に向かった。

そんな中、蒲公英は……

蒲公英
（勢い任せに先生達を案内したけど……結局、むさっちとのデートはできなかったなぁ～）

武蔵とのデートはあまりうまくできていない事に内心、落ち込んでいた。

そこへ……

武蔵
「なぁ、たんぽぽ」

武蔵が話しかけてきた。

蒲公英
「何、むさっち？」

武蔵
「結局、でーとって何だったんだ？」

蒲公英
「あ～……今日はちょっといろいろとあって、デートになってないかも……」

武蔵
「そうなのか？　なら、違う日にやろうぜ！」

蒲公英
「ッ！？　いいの？！」

武蔵
「おう！　おれさまもデートってもんが知りてーし！」

蒲公英
「わ、わかった！　じゃあ予定が決まったら、連絡するからね！」

武蔵

「おう！　わかったぜ！」

蒲公英
（やったね♪）

大喬
「……」

蒲公英は再び、武蔵とのデートを約束する事ができた。

～蒲公英の部屋～

蒲公英
「今日は残念だけど、またデートできるからいいや！」

蒲公英はあの後、武蔵と別れて、部屋に戻ってきていた。
そして、今日の事を振り返っていたが、次のデートの事も考えていた。

そこへ……

コンコン

蒲公英

「ん？　お客さんかな？」

ドアのノックする音が聞こえ、ドアの方に向かった。

そして、ドアを開けると……

大喬

「ど、どうも……」

大喬がいた。

蒲公英

「大喬ちゃん？　どうしたの？」

大喬

「じ、実は聞きたい事がありまして……」

蒲公英

「聞きたい事？」

大喬

「た、たんぽぽさんは……武蔵さんの事好きですか？／／／」

蒲公英

「……へ？」

蒲公英はいきなりの事で、あっけにとられていた。

大喬
「も、もしかしてもう、つつつ付き合っている仲ですか?!／／／」

蒲公英
「ち、違うよ!／／／　まだ、そんなんじゃ」

大喬
「まだって事は……」

蒲公英
「……うん、好きだよ」

蒲公英は普段はあまり見せない、真剣な目で大喬を見た。

大喬
「……やっぱりですか」

蒲公英
「そういう事を話に来た大喬ちゃんも?」

大喬
「……／／／（コクッ）」

大喬は返事はしなかったが、首を縦に振り、肯定した。

蒲公英
「大喬ちゃん！」

大喬
「は、はい！」

蒲公英
「恨みっこなしだよ！！」

大喬
「……はい！」

蒲公英は大喬を恋敵として認め、大喬は言いたい事を言えたので、部屋に戻っていった。

蒲公英
「そっか～大喬ちゃんもか～……」

蒲公英は少し考えて……

蒲公英
「……ニシシ～、面白くなってきたかも～」

その状況を楽しんでいた。

次回に続く……

第四十六話、蒲公英奮闘記！　（後書き）

う～ん……蒲公英ってこんなんだっけ？

ま、いっか！

今回はギャグはなかったですね～……ま、いっか！

さて、此処から参戦します、教師陣！

彼女達もまた、乙女チックにしちゃいます！

次回は未定です。

それでは、また次回！

第四十七話、鬼は誰のモノ？

～あらすじ～

武蔵と蒲公英のデート（？）が終わった翌日……

～南蛮街～

武蔵と蒲公英のデート（汗）が終わり、教師陣が参加を決めた。
教師陣の参加は後に、皆に伝わった。
皆は別に問題なく、すんなり受け入れ、教師陣を快く迎えた。

そんな日があった次の日……

元親
「お前さんは何処に行きたいんだ？」

元親は今、誰かと一緒に南蛮街に来ている。

その人物とは……

蓮華
「元親に任せるわ」

蓮華であった。

元親
「俺は特に行きたいとこはねぇぜ」

蓮華
「そうなの……まずは、ご飯でもどうかしら？」

元親
「おう、構わねぇ」

蓮華
「なら、行きましょう」

そして元親と蓮華はレストランに向かっていった。
ところで何故、元親と蓮華が一緒にいるのか？

それは昨日に遡る……

～回想・蓮華の部屋～

蓮華
「ふぅ……とりあえずは落ち着いたかしら」

蓮華は先生達の挨拶をし終えて、部屋に戻ってきていた。

蓮華
「もうこんな時間なのね……」

時間を確認したら夜遅くになっていた為、寝る準備をした。

その時……

コンコン

蓮華
「ん？　何かしら？　こんな時間に」

扉のノック音が聞こえ、蓮華は扉に向かう。
そして扉を開いて、誰かを確認した。

そこにいたのは……

思春
「蓮華様」

思春であった。

蓮華
「思春？」

思春
「はい。申し訳ありません、こんな夜遅くに」

蓮華
「いえ、大丈夫よ。それで、どうしたの？」

思春
「実は……蓮華様にお願いしたい事がありまして」

蓮華
「私に？」

思春
「はい。大変失礼なのはわかっています……」

蓮華
「別に問題ないわよ。ただ、思春が珍しくお願いしたから驚いただけよ」

思春
「ありがとうございます」

蓮華

「大丈夫よ。それでお願い事は何かしら？」

思春
「……まずは私について来てください」

蓮華
「わかったわ」

そう言って蓮華は思春について来ていった。

～思春の部屋～

ガチャッ

思春
「此方にどうぞ」

蓮華
「ありがとう、思春」

思春に連れられたら場所は思春自身の部屋であった。
蓮華は思春の部屋の中に入る。

そこには……

恋
「……」

鈴々
「あ！　来たのだ！」

地和
「遅いわよ！」

真桜
「まぁまぁ落ち着きや、ちぃ」

工学部メンバーと鈴々と地和がいた。

蓮華
「……これはどういう事？」

思春
「はい、私のお願いしたい事は皆のお願いしたい事でもあります」

蓮華
「みんなの？」

真桜
「ウチから説明するわ」

そして真桜は蓮華にこう言う。

真桜
「蓮華はん……明日大将、元親はんとデートしてくれへん？」

蓮華
「……る？」

蓮華は少し時間が止まり……

蓮華
「えええええぇぇぇ！？」

壮大に驚いた。

蓮華
「ちちちちょっと待って！？　私には幸村が……」

思春
「真桜！　言葉が足りないぞ！」

真桜
「あ、そうやった」

恋

「……紛らわしい」

地和
「何言ってんのよ!?」

真桜
「まぁそう言わんといてーな」

真桜は咳き込んで再び説明した。

真桜
「あのな蓮華はん、デートってゆーてもコッチはある事を聞ければいいんや」

蓮華
「……ある事？」

真桜
「大将が一体誰が一番、好みかや！」

蓮華
「……は？」

蓮華の頭は再び困惑状態となる。

真桜

「まぁ知っての通り、此処にいるウチ以外の人はみんな大将が好きやねん」

蓮華
「それはわかってるわ」

真桜
「そんでみんなは大将になんならかのアクションを起こしてんやけど、コレが一切……」

蓮華
「……まぁ大体わかるわ」

真桜
「ほんでな、えぇー加減痺れを切らしたみんなはこの際、大将が今いっちゃん好きなんはどなたはんか聞き出すん事をさいぜん決まったんやけど……」

蓮華
「けど？」

真桜
「一体どなたはんが聞き出すかで喧嘩になりそうになりよったんよ」

蓮華
「……（汗）」

真桜
「んなことがあってあんさんに頼んだっちゅーことや」

蓮華
「大体わかったわ」

真桜
「引き受けてくれはるか？」

蓮華
「いいけど……２つほど聞きたい事があるけどいいかしら？」

真桜
「なんや？」

蓮華
「真桜は好きではないんでしょ？　なら、アナタが聞くのはダメなの？」

真桜
「ああ、それもあったんやけど……」

思春
「何故か……貴様は信用できない」

恋
「……危ない」

鈴々
「ホントに好きじゃないかわからないのだ！」

地和
「そうよそうよ！」

真桜
「……みたいな感じや」

蓮華
「……そういう事ね（汗）」

そして蓮華はもう一つの質問をする。

蓮華
「もう一つは……もし、元親の好きな人がこの中にいなかったらどうするの？」

４人
「「「「……ソイツヲコロス」」」」

ゴゴゴゴゴゴゴ！

真桜
「れ、蓮華はん！　それだけはゆーてはあかん！」

蓮華
「ご、ごめんなさい！　だから落ち着いて！」

こうして蓮華は皆のお願いを引き受けた。

～回想終了・レストラン～

以上の事があり現在、元親と行動している蓮華。

蓮華
（受けたはいいけど……）

蓮華はチラッと後ろを振り向く。

そこには……

思春
「……」

恋
「じ～……」

鈴々
「む～……」

地和
「近すぎよ……」

真桜

「とりあえず、その殺気をしまわへん？（汗）」

しっかりと尾行している思春達の姿があった。

蓮華
（あんなに殺気が出てると聞きたくても感づかれるわよ）

蓮華は思春達から放たれる殺気に呆れていた。

元親
「なぁ、さっきから変な空気が流れていねぇーか？」

蓮華
「キノセイヨ」

元親
「……何で片言なんだ？」

蓮華
「キニシナイデ」

元親
「……ま、いっか。そろそろ注文するぜ」

蓮華
「いいわよ」

そして店員を呼ぶ元親。

早苗
「いらっしゃいませ～」

やはり現れたか早苗。

早苗
「うるさい」

元親
「あん？　肝試しで会った姉ちゃんか？」

早苗
「はい、そうです」

蓮華
「此処でバイトをしていたのね」

早苗
「はい。そちらは……デートですか？」

ブチィ！

思春
「……」

デートというフレーズが出た瞬間、思春は手に持っていたメニューの紙を破いた。

蓮華
「違います！」

元親
「ちげーのか？」

蓮華
「……ゑ？」

元親
「お前と会う前に祭の先公に会ってな……」

祭
“それはデートだな、男ならビシッと決めてこぬか！　……ヒック”

元親
「……てな感じで言ってたからてっきりそうだと思ってたぜ」

蓮華
（あの酔っ払いいいいい！！！）

パリィン！

恋
「……障害となる奴、殺す」

その話を聞いた恋はテーブルの上にあったコップを殺気だけで割った。
ちなみに彼女たちを宥めているのは真桜だけである。

蓮華
「と、とりあえず元親とはただのお買い物をしているだけよ（汗）」

早苗
「ふ～ん……」

早苗の目は疑っている目だった。

蓮華
「注文いいかしら！？」

早苗

「あ、はい、どうぞ」

しばらくして、料理が運ばれ、食事をした元親と蓮華。
こうして蓮華の命掛けの食事は終え、南蛮街を少しうろつき、帰る時間になった。

元親
「買いてぇ物は買えたか？」

蓮華
「ええ、大丈夫よ」

元親
「そいつは良かったぜ」

蓮華
「……ねぇ元親」

元親
「あん？」

蓮華
「聞きたい事があるの」

元親
「聞きてぇ事？」

蓮華

「ええ」

蓮華は本題に切り出した。

蓮華
「元親は気になる人っているの？」

元親
「気になる人？　どういう事だ？」

蓮華
「つまりは……女性で好きな人はいるかって話よ」

元親
「あん？　そんなの仲間は全員、好きだぜ」

蓮華
「……なら、質問を変えるわ」

元親
「？」

蓮華
「元親……アナタが女性といてワクワクやドキドキする人はいる？」

元親
「ワクワクや……ドキドキ？」

蓮華
「ええ」

元親
「……」

その言葉を聞いた瞬間、元親は考え始めた。

思春
「……」

恋
「……」

鈴々
「一体誰なのだ？」

地和
「スッゴく気になる……」

真桜
「まぁまぁ落ち着きや」

陰で見ていた思春達も息をのんで注目した。

元親
「そういう奴なら……」

元親の重い口が開く。
そしてこう言った。

元親
「……真桜だな」

蓮華
「……へ？」

元親から出た人物は意外にも真桜であった。

思春
「なッ？！」

恋
「！？」

鈴々
「にゃ！？」

地和
「嘘！？」

思春達は一斉に真桜を見た。

真桜
「……ウ、ウチィィ?!」

そんな真桜も驚愕していた。

蓮華
「り、理由を聞いてもいいかしら?」

元親
「いやな……俺もアイツも機械が好きだから、結構気が合うんでな」

蓮華
「……そうなの」

元親
「それに何回か出掛けた事も会ったしな……」

ゴォオ!!

真桜
「ヒィ!?」

思春
「……少し、話をしようか？　人通りの少ない場所で」

真桜
「話すんのに人通り少ない場所ってどーゆー事や？！」

恋
「……痛いのは、一瞬」

真桜
「話するだけなのに痛い！？　痛いって何するん！？」

鈴々
「ゴチャゴチャうるさいのだ！」

地和
「黙ってついて来なさい！」

ズルズル……

真桜
「い、嫌やぁぁぁあ！！！」

そう言って思春達は真桜を連れて何処かに消えて行った。

元親
「……何してんだ？　アイツら？」

蓮華
「……気にしなくていいわよ」

そんな叫び声に元親は思春達の姿を見て、そう言った。
蓮華は呆れてるだけであった。

～南蛮ビーチ～

半兵衛
「秀吉、かき氷はどっちがいい？」

秀吉
「……イチゴを貰おう」

元親と蓮華が出掛けている同時刻、秀吉と半兵衛はビーチに来ていた。

秀吉
「半兵衛、我に気にせずに誰かと出掛けても良いのだぞ」

半兵衛
「僕は好きで此処にいるんだよ、秀吉」

秀吉
「……そうか」

一歩間違えたら、告白にも聞こえる発言をする半兵衛。

しかしそこへ……

麗羽
「此方にいましたか！　半兵衛様！」

半兵衛
「麗羽君？　どうしたんだい？」

後ろの方からの麗羽がやってきた。

麗羽
「半兵衛様！　これからわたくしと一緒にお出掛けをして頂けませんか！？」

半兵衛
「僕とかい？　しかし……」

秀吉
「我の事は気にするな、我は先に戻っておるぞ」

そう言って秀吉は南蛮王国に戻っていった。

半兵衛
「……秀吉らしいね」

麗羽
「わたくし、何か悪い事をしてしまいましたか？」

半兵衛
「君は悪くないよ」

そう言って半兵衛は立ち上がり……

半兵衛
「とりあえず、このビーチで遊ぶかい？」

麗羽
「わかりましたわ！」

麗羽と一緒に遊ぶ事にした。

次回に続く……

第四十七話、鬼は誰のモノ？（後書き）

なんと元親の気になる人は真桜であった！

あの思春や恋を差し置いての真桜！

まぁ、好きっというより気が合う人って感じがしますね。

さて、それを聞いた真桜の行動もお楽しみに！

次回は半兵衛と麗羽の話。

麗羽がどのように半兵衛にアタックするのか！？

それでは、また次回！

第四十八話、高飛車の一途

～あらすじ～

元親の好きな人（？）がわかった前の時間……

～南蛮ビーチ～

半兵衛
「麗羽君は何をしたいかな？」

麗羽
「半兵衛様にお任せしますわ！」

半兵衛
「そうかい？　なら……」

麗羽
（遂に！　この時が！　やってきましたわ！）

麗羽は心の中でそう叫んでいた。

麗羽
（わたくしが半兵衛様を想い続けて一世紀……遂にデートまでた

どり着けましたわ！！）

かなり大袈裟に発言しているが、その位半兵衛に想いがあるのは事実。
実際にこれが初のデートである。

麗羽
（今こそ！　この“気になるあの人と付き合う為の五百の方法！著者・東方不敗”を使う時ですわ！）

果たしてその本は大丈夫なのか？
そんな事を気にせずに本を取り出し、すがる思いで本を読む麗羽。

麗羽
（気になる人とのビーチデートの場合……行きたい場所を彼に任す。さすれば、彼の趣味や好みがわかる！　……これは実証済みですわね）

半兵衛
「麗羽君？」

麗羽
「！　は、はい！」

半兵衛
「とりあえず今から釣りをしようかと思っているんだけど、君はそ

れでいいかな？」

麗羽
「問題ありませんわ！　おーっほっほっほっほ！」

半兵衛
「なら、釣り道具はあるからあそこの海岸沿いに行こう」

麗羽
「わかりましたわ！」

こうして半兵衛と麗羽は海岸沿いに移動した。

～南蛮ビーチ・海岸沿い～

半兵衛
「此処でいいかな？」

麗羽
「大丈夫ですわ！」

半兵衛
「それじゃあやろうか」

麗羽
「はい！」

こうして半兵衛と麗羽は釣りを開始した。

麗羽
（彼との釣りデートの場合……焦りは不吉の元凶、時を待てば見える筈よ！　水の一雫が！　……とりあえず待てばよろしいのですね）

麗羽は本の通りに待つ事にした。
しばらく静寂な時間を過ごしていた。

すると……

チョンチョン……

麗羽
「あら？」

ググッ！

麗羽
「キャア？！」

麗羽の竿にヒット！

麗羽
「どどどどうすれば?!」

半兵衛
「まずは落ち着くんだ、麗羽君」

麗羽
「は、はい！」

半兵衛
「ゆっくりでいいから引き上げてみてくれ」

半兵衛の指示に従ってゆっくり引き上げる麗羽。
だが、思っていた以上に大物のようで、なかなか引き上げられない様子。

麗羽
「クッ！　思った以上に重いですのね……」

半兵衛
「僕も手伝うよ、麗羽君」

ギュッ

麗羽
「ッ！！？／／／　は、半兵衛様？！／／／／」

半兵衛
「しっかり前を見てくれ、麗羽君」

半兵衛は麗羽の後ろに回り、麗羽と同じ竿を掴む。
端から見れば抱きついて見える。

麗羽
（は、半兵衛様がこんなに近くに！／／／　あぁ……幸せ／／／）

半兵衛
「気を抜いたらダメだよ麗羽君」

麗羽
「はぁい……／／／」

しっかり竿を引く半兵衛に対し、完全に妄想の世界に入っている麗羽。

半兵衛
「もう少しだね」

麗羽
「あぁ……ダメですわ／／／」

半兵衛
「大丈夫かい？　麗羽君」

麗羽
「だ、大丈夫……では／／／」

半兵衛
「そろそろだね、思いっきり引くよ！」

麗羽
「ッ！／／／」

ビシャァァアン！

半兵衛は思いっきり引き上げ、魚を釣り上げた。

それと同時に……

麗羽
「ハゥア！！／／／」

麗羽も理性の限界に達し、気絶した。

半兵衛
「いやぁ随分と大物を釣り上げたね、麗羽君。……麗羽君？」

半兵衛は大物を釣り上げた事を麗羽に言ったが麗羽からは返事が返ってこない。
半兵衛は不思議に思い、振り向いた。

そこには……

麗羽
「あぁ……半兵衛様／／／」

顔を真っ赤にしながら気絶している麗羽の姿があった。

半兵衛
「麗羽君？　……気絶しているみたいだね」

気絶している麗羽を見て半兵衛はとりあえず麗羽を担ぎ、南蛮王国に移動した。

～南蛮王国・半兵衛の部屋～

麗羽
「……う～ん。……此処は？」

半兵衛
「おや、気がついたみたいだね」

麗羽
「半兵衛様？　此処は一体……」

半兵衛
「此処は僕の部屋だよ、麗羽君」

麗羽
「半兵衛様の部屋……ですか」

半兵衛
「そう。君が何故か気絶していたからね、とりあえず此処に移動したんだ」

麗羽
「そうだったのですか…申し訳ありません」

半兵衛
「気にする事はないよ、それじゃあ僕は飲み物をを持ってくるから」

そう言って半兵衛は飲み物を取りにいった。

麗羽
（ハァ……半兵衛様に情けない姿を晒してしまいましたわ……）

先程の自分に対し、半兵衛の前で情けない姿を晒してしまい、落ち込む麗羽。

麗羽
「ハァ～……」

麗羽はベッドに倒れ込んだ。

そこには……

麗羽
（……半兵衛様の匂い／／／）

倒れ込んだベッドには半兵衛の枕があった。

麗羽
（ダメですわ！　それはいくら何でも人しての過ちを犯してしまいますわ！　……でも、少しなら／／／）

自分の欲に負けた麗羽は半兵衛の枕を手に取った。

麗羽
（も、もう少しで……／／／）

枕まであと数センチに顔を近付ける麗羽。

と、その時……

半兵衛
「何をしているんだい？」

麗羽
「キャア？！／／／／」

背後から半兵衛が現れた。

麗羽
「こ、これは違いますの！／／／　これは……その……／／／」

麗羽は何か言い訳を考えたが完全に動揺している。

だが……

半兵衛
「……麗羽君はそういうのが好みかい？」

麗羽
「……へ？」

半兵衛
「少し時間的に早いかもしれないけど……大丈夫かな？」

そう言って半兵衛は麗羽をそっと抱きしめた。

麗羽
「ははは半兵衛様？！／／／」

麗羽は予想外な展開に慌て始める。
そんな麗羽を差し置いて半兵衛はそのままベッドに倒れ込んだ。

半兵衛
「……麗羽君」

麗羽
「は、はぁい／／／」

半兵衛
「このまま……二人の世界に……」

半兵衛の顔は麗羽の鼻の先まできている。

麗羽
「遂に……わたくしと……／／／」

麗羽はそのまま身を半兵衛に任せ、目を閉じた。

～半兵衛ｓｉｄｅ～

麗羽
「半兵衛様……にへへ～／／／」

三成
「半兵衛様、この金髪クルクルパーの斬首を行いますか？」

半兵衛
「それはダメだよ、三成君」

勘のいい読者ならお気づきであるが、先程は麗羽の夢である。
半兵衛の部屋ではあるが、麗羽はあれから起きていない。
因みに三成は先程半兵衛が麗羽を担いでいる姿を見かけ、半兵衛の代わりに麗羽を担いで部屋まで運んだ。

半兵衛
「ご苦労だね、三成君。後は僕が面倒を見るよ」

三成
「了解しました」

そして三成は半兵衛の部屋を出た。

半兵衛
「……」

チラッ

麗羽
「う～ん……半兵衛様／／／」

半兵衛はチラッと麗羽の寝顔を見た。

半兵衛
「ふっ……彼女は面白いね」

そう言って半兵衛は麗羽が起きるまで麗羽の近くで面倒を見ているのであった。

～南蛮王国・ロビー～

秀吉
「ご苦労であった、三成」

三成
「いえ、これは私にとって当たり前の事です」

夕方、ロビーには秀吉と三成の姿があった。
三成は先程の事を秀吉に報告していた。

秀吉
「では、三成も休め」

三成
「しかし、それでは秀吉様がお一人に……」

秀吉
「我は大丈夫だ。三成は月達のところに行くがよい」

三成
「ひ、秀吉様！　何故、そこで月の名が？！／／／」

秀吉
「それは自分で考えるのだ、三成」

三成
「……わかりました、失礼します」

そして三成は部屋に戻っていった。

秀吉
「……我も戻るか」

???
「もう戻るのか？」

秀吉
「……誰だ？」

秀吉は自分の部屋に戻ろうとしたが、誰かに声を掛けられた。

秀吉が振り向くと……

祭
「先生に対し、誰だはないぞ、秀吉」

そこには祭の姿があった。

秀吉
「‥‥祭先生であったか。我に何か？」

祭
「うむ、どうせ戻るならこの老いぼれの我が儘に付き合ってくれぬかの？」

秀吉
「‥‥‥‥‥‥‥何故、我なのだ？」

祭
「理由は必要か？」

秀吉
「‥‥‥まぁ、良かろう」

祭
「よう言うた！　なら、行くぞ！」

こうして秀吉と祭の奇妙な組み合わせが出来た。

次回に続く‥‥‥

第四十八話、高飛車の一途（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

実は此処数日、風邪を引いておりまして、作品を書けないでいました。

まぁ言い訳でしかありませんが、此処で謝っておきます。すいませんでした。

さて、今回は半兵衛と麗羽の組み合わせでした。

完全に麗羽の妄想がありましたが……まぁいいか！

次回は奇妙な組み合わせ！　生徒会長、秀吉と学年主任の祭がデート（？）です。

初の先生がヒロインの話です！　いつものヒロインにはない大人の魅力があるに違いない！

それでは、また次回！

第四十九話、先生もまた乙女……

～あらすじ～

半兵衛が麗羽の看病をしている頃……

～夕方・南蛮街～

祭
「夕方の此処もまた、風流よな」

秀吉
「何処へ行くのだ？」

祭
「全く……風流がわからん奴よ」

夕方、南蛮街に姿を現した秀吉と祭。

秀吉
「風流などどうでもよい。用がないなら我は帰るぞ」

祭
「つれんのぅ……まぁよい、この先にＢＡＲがあった筈だ。そこ

に行くぞ」

秀吉
「……我は学生だ」

祭
「安心せい。お主は端から見れば世紀末覇者とか拳王とか北斗の長兄に見えるから気にするでない」

秀吉
「……全て同一人物だ」

祭
「つまり、学生には見えん。ほれ、行くぞ」

秀吉
「……まぁ良かろう」

秀吉は渋々、祭はウキウキしながらＢＡＲに向かった。

～ＢＡＲ・サザンクロス～

此処は南蛮街でも有名なＢＡＲ、サザンクロス。
心地よい空間と少し暗めな照明。
正に大人の時間を楽しめるＢＡＲである。

祭
「さぁ好きな物を頼むがよい」

秀吉
「……祭先生」

祭
「どうした？」

秀吉
「此処のメニュー……酒類しかないぞ」

祭
「そうだな」

秀吉
「貴様は先生だろ？」

祭
「そうだな」

秀吉
「……オイ」

祭
「そうだな」

秀吉
「……年増（ボソッ）」

ヒュン！

秀吉
「ッ！？」

祭
「おっとすまん、手が滑った」

秀吉
（それで何故矢が飛んでくる？！）

秀吉はこれ以上、刺激をするのは良くないと判断し、言うのをやめた。

祭
「さて、決まったか？」

秀吉
「我は水で良い」

祭
「そうか。お～い！」

祭は店員を呼んだ。

店員
「はい、ご注文はお決まりですか？」

祭
「とりあえず水とこの殉星のウォッカを貰おうかの」

店員
「わかりました。少々お待ちください」

数分後……

店員
「お待たせしました、殉星のウォッカです」

祭
「すまぬな」

因みに秀吉の水は既に手元にある。

祭
「まずは乾杯をするとしよう」

秀吉
「……よかろう」

祭
「では」

秀吉
「乾杯だ」

チィーン

祭
「……うむ、たまにはこういうお酒も風流よ」

秀吉
「……一つ聞きたい事がある」

祭
「む、何だ？　酒でも飲みたくなりおったか？」

秀吉
「……貴様は何故、生徒と一緒に食事ができる？」

祭
「……」

秀吉
「貴様もわかっている筈だ。これが公の場に知られたらタダではすまない事を……」

祭

「……固いのぅ」

秀吉
「……何だと？」

祭
「頭が固いのは主の後輩の三成だけだと思っていたが……主もなかなかだぞ」

秀吉
「……何が言いたい？」

秀吉は祭の言葉が理解できないでいた。

祭
「儂は単純に主と一緒に食事がしたかっただけぞ。世間が何を言おうと儂は構わん」

秀吉
「だが、世間がそれを許さないのだ」

祭
「それでも儂は意志を変えるつもりはないぞ」

秀吉
「……理解できぬ」

祭

「当たり前だ。儂は儂、主は主。一人一人が一緒の考え方を持つのは並大抵の事ではない」

秀吉
「……」

祭
「それに主の生徒会長としての考え方は儂ら先生からしても理解できぬしな」

秀吉
「ふん、我は必ずや学生主体にしてみせようぞ！」

祭
「儂らは学生主体にさせているつもりだが？」

秀吉
「否！　学園の元凶、信長がいる限り我の野望は叶わん！」

祭
「……フッ、相変わらず面白い男よ」

秀吉
「……ふん」

祭と秀吉が再び飲み物を飲もうとした時……

パリィーン！

グラスの割れる音が響いた。

二人はそちらの方に顔を向けると……

モヒカン
「何だこのマズい酒は！」

店長
「す、すいません」

モヒカン2
「テメー、なめてんのか！　あ～ん？」

店長
「そんなことはありません！」

どっかの世紀末にいそうなモヒカン集団と店長が揉めていた。
尤も、揉めているというよりはモヒカン集団が店長を脅しているみたいだが。

モヒカン3
「こんな不快な気分になったのははじめてだせ！　どうしてくれんだよ！」

店長

「と、とりあえずは飲んで頂いたお酒の料金は要りません……」

モヒカン
「そんな事当たり前だ！」

モヒカン２
「なら、今日の売り上げ分の金を貰おうか！」

店長
「そ、そればかりは！」

モヒカン３
「うるせー！　ヒャッハー！」

秀吉
「屑共が……」

そう言って秀吉は立ち上がった。

祭
「行くのか？」

秀吉
「あのような奴らに我と同じ空気を吸うのは気に食わん！」

そしてモヒカン集団のところに歩み始めた。

モヒカン
「早く有り金をだしやがれ！」

店長
「それだけは・・・それだけは・・！」

モヒカン２
「そうか・・・なら！　汚物は消毒しかないな！」

秀吉
「汚物は貴様らだ」

モヒカン３
「あ～ん？」

ブォン！　バキィ！

モヒカン３
「だわっ！？」

モヒカン
「な、何だテメー？！」

秀吉はモヒカン３を殴り飛ばし、モヒカン集団の前に現れた。

秀吉
「貴様らにチャンスをやろう、三秒以内にこの店から出て行け」

モヒカン2
「んだとテメー！！」

モヒカン2は秀吉に向かっていったが……

秀吉
「命知らずが！」

ガシッ！

モヒカン2
「ぬわっ？！」

秀吉はモヒカン2の頭を掴み……

秀吉
「フン！」

ゴキャ！

モヒカン2
「ぎゃばば！！」

鳴ってはいけない音と共に頭を握り潰した。

モヒカン
「ひぃぃ！！」

秀吉
「では数えるぞ。一つ……」

モヒカン
「ま、待ってくれ！　足が動かねーんだ！」

秀吉
「二つ……」

モヒカン
「悪かった！　いや、申し訳ありませんでした！　だから助けてください！」

秀吉
「三つ……」

モヒカン
「嫌だ！　死にたく……」

秀吉
「フン！」

バキィ！

モヒカン
「ねべべ！！」

秀吉
「……くだらない奴らに拳を汚したな」

店長
「ありがとうございます！！」

秀吉
「次からは貴様も力をつけるのだな……」

秀吉は短く言って祭のいる場所に戻った。

祭
「全く、いつ見ても凄い力よな」

秀吉
「……ふん、興が冷めたわ。我は帰る」

祭

「安心せい、儂も興が冷めていた。儂も帰るぞ」

そして秀吉と祭は南蛮王国に戻っていった。

～南蛮王国・紫苑の部屋～

ガチャ

祭

「お、まだやっとらんのか？」

紫苑

「あら、お帰りなさい」

桔梗

「ようやく戻ってきたか」

孫市

「……」

南蛮王国に戻ってきた祭は紫苑の部屋に出向いた。

祭

「まさか今日はやらんのか？」

桔梗
「何を言っておる、やるに決まっておろう」

孫市
「だが、今日が特別なだけだ」

祭
「特別？」

紫苑
「それは後にわかりますから今は内緒で」

祭
「つれんのぅ」

桔梗
「ところで祭よ、今日のデートはどうであった？」

祭
「ふっ……良かったぞ」

紫苑
「まぁ」

孫市
「……ふん」

祭
「だが、秀吉は少し固い男故に、ちと難しいかもしれんのぅ」

紫苑
「でも、それを含めて惚れたのでしょう？」

祭
「……それもそうか」

桔梗
「では、そろそろわしも動かねばな」

紫苑
「あら、そういえば桔梗の好きな人を聞いていないわね」

桔梗
「ふん、わしもまだ女を捨てた訳ではないぞ。ゆえに内緒だぞ」

祭
「ほぅ、儂らにも内緒とは……本気だな、桔梗」

桔梗
「わしは何事にも本気よ」

紫苑
「孫市さんは好きな人は見つかりましたか？」

孫市
「今は仕事が忙しいのでな、まだ見つからん」

紫苑
「そうなの……早くいい人が現れれば良いですね」

孫市
「私は今の生活に困っていないから大丈夫なのだが……」

紫苑
「それはダメですわ」

孫市
「……そうなのか？」

紫苑
「そうです」

紫苑の部屋で先生達が話をしていると……

ピンポンパンポン♪

美以
《皆の衆！　準備ができたじょ！　中庭に集まるにゃ！》

美以のアナウンスが入り、中庭に来てくれと言った。

紫苑
「あら、できたようね」

桔梗
「ならば、行くとするか！」

祭
「中庭で何かあるのか？」

まだ把握できていない祭に紫苑が一言。

紫苑
「宴会ですわ」

～南蛮王国・中庭～

深夜、中庭では様々な料理が置かれていた。
会場も設置されており、そこには美以の姿が確認できる。

美以
「よくぞ集まってくれたにゃ！」

家康
「こちらこそ、素晴らしい宴会に招いてくれて感謝する」

美以

「気にするでにゃい！　長話は無用にゃ！　政宗！」

政宗
「ＯＫ！」

美以に呼ばれた政宗は大きな声で返事をして、会場に上がった。

政宗
「いくぜ！　Ｌｅｔ' ｓ　ｐａｒｔｙ！！」

一同
「「「「Ｙｅａｈーーーー！！」」」」

政宗のかけ声と共に、宴会は開始された。

早苗
「わ、私が参加していいのでしょうか？」

佐助
「いいんじゃない？」

早苗
「はぁ～」

佐助
「溜め息なんてついてたら、幸せが逃げるよ」

早苗
「……そうですね、参加するからには楽しんでいきましょう」

佐助
「そゆこと～」

待て、次回！

第四十九話、先生もまた乙女……（後書き）

今回は秀吉と祭のお話でした。

互いに扱うのが難しいキャラでしたので上手くいったがわかりません。

後、今回はギャグが少なかったですね～。

その代わりに世紀末のネタが多くなりましたが（汗）

最後に出て来た早苗ですが、夏休み編が終わるまでは参加させます。

次回は宴会です！　作者が本気でふざけますので注意！

それでは、また次回！

第五十話・A、大！宴！会！～序編～

～あらすじ～

始まる宴会の余興……？

～南蛮王国・中庭～

政宗
「……よぅ」

佐助
「……ども」

政宗
「この組み合わせって事は……」

佐助
「まぁだいたい予想はつくでしょ？」

政宗
「……なら言う事は一つ」

佐助
「だね」

二人
「「どうしてこうなった？」」

二人が前を見ると……

慶次
「よっしゃあ！　祭りだ祭り！！」

雪蓮
「盛り上がるわよー！！」

一同
「「「「ヒャッハー！！」」」」

そこは正に世紀末であった。

政宗
「まぁだいたいはｅｘｐｅｃｔａｔｉｏｎは出来ていたが……」

佐助
「いざ目の前でやられるとスゴいもんだよ……」

政宗
「だが、こんな事して大丈夫か？　今回は先公が来ているぜ」

佐助

「……アレ、見てみん」

政宗は佐助が指差した方向に顔を向けると……

紫苑
「あら星さん、良い飲みっぷりですね」

星
「フッ……まだまだですぞ」

桔梗
「飲め！　飲むのだ！　焔耶よ！！」

焔耶
「フゴー！！？」

凪
「……（汗）」

桔梗
「おや？　凪よ、全然飲んでいないではないか。ほれ」

凪
「い、いえ、自分は……」

凪は桔梗のお酒を断ろうとしたが……

ガシッ！

凪
「ッ！？」

焔耶
「フフフ……道ずれだ、凪」

倒れて焔耶が凪の足を掴み逃がさないようにしていた。

凪
「離せ焔耶！」

焔耶
「自分だけ助かろうなど……お館が許すと思うか？」

凪
「何故そこで師匠が出てくる？！」

焔耶
「もう……諦めろ」

凪
「クッ！　かくなる上は！」

凪は手に氣を溜め始めたが……

桔梗
「ええい！　つべこべ言わずに飲むがよい」

ガボッ！

凪
「フガー！？」

桔梗の強行突破により、一升瓶のお酒が凪の口に入った。

焔耶
「これでいい……（ガクッ）」

焔耶はその姿を見て気絶した。

祭
「全く情けないのぅ」

大喬
「目が回る～」

小喬
「ふにゃ～」

孫市
「……」

鶴姫
「あれ～？　孫市姉さまが三人に見える～……」

そこも世紀末であった。

政宗
「……ＯＫ、把握した」

佐助
「世も末だねぇ～」

政宗
「ま、今に始まった事じゃねぇーしな」

佐助
「確かにな……ところで、竜の右目さんは何処？」

政宗
「……アイツなら」

政宗が後ろを向き、ある方向を向いた。
佐助もつられるように政宗と同じ方向に視線を向けると……

小十郎
「……オイ」

いつき
「んだ？」

小十郎
「これはオメェが……いや、アナタが作ったのか？」

そう言って小十郎は白菜を取り出した。

いつき
「そうだべ！　これはおらが家で懸命に作った白菜だべ！　前に美以に食べさせたら気に入ってくれて実家に食べさせたいって言ってたから送ったんだべ！」

小十郎
「……そうか」

小十郎は手に持っていた白菜を見た。

小十郎
「みずみずしい色に程よい重さ、それでいて殺されていない野菜本来の味……完璧だ」

いつき
「んだ？」

小十郎
「いつきよ！　俺を弟子にしてくれ！」

小十郎は渾身の土下座を披露した。

いつき
「ええべよ！」

小十郎
「本当か？！」

いつき
「その代わりおらの事はキングと呼ぶべ！」

小十郎
「わかりました！　よろしく頼みますキング！」

いつき
「んだ！」

いつきは小十郎の師匠になった。

政宗
「……ってな感じだ」

佐助
「いやいやいや、何で落ち着いているの?!　部下が大変な事になっているよ!」

政宗
「小十郎は野菜の事になったら止まんねぇかんなぁ」

佐助
「……（汗）」

政宗
「そういう真田はどこにいんだよ?」

佐助
「……旦那なら」

ドカァァァン!

幸村
「れれれ蓮華殿!?　落ち着くでござる!」

蓮華

「なぁに～？　聞こえんなぁ～」

幸村
（蓮華殿が壊れたでござる！？）

佐助がしゃべろうとした瞬間に、爆発音が聞こえた。
そちらに振り向くと、剣を持った蓮華に襲われている幸村の姿があった。

蓮華
「幸村……私はアナタの事を思っているの……だから」

チャキン

蓮華
「一緒に……イコウ？　ユキムラ？」

蓮華は完全に目の光を失っていた。

幸村
「（一体どうしたでござるか！？）　すまぬ！　蓮華殿ォォォオ！！」

蓮華

「逃がさないわ！！」

こうして幸村と蓮華のリアル鬼ごっこが始まった。

佐助
「……旦那は死にかけているね～」

政宗
「オメェも人の事言えるか！？」

佐助
「そうだね、てな訳で助けに行きま～す」

そう言って佐助は影の中に消えた。

政宗
「……Ｈａ～、俺も飲むか」

政宗は佐助が消えたので再び飲もうかと考えていたら……

家康
「お！　政宗殿ではないか！」

璃々

「こんばんは！！」

政宗
「Ａｈ？」

後ろから家康と璃々がやってきた。

政宗
「よぅ家康、そっちのｃｈｉｌｄｒｅｎは？」

璃々
「ちるどれん？」

家康
「子供って意味だよ、璃々ちゃん」

璃々
「む～！　璃々は子供じゃないもん！　りっぱな大人の女の子だもん！」

政宗
（大人の……女の子？）

家康
「アッハハハ！　そうだな、立派な女の子だな！」

璃々
「む～！！」

政宗
「すまん、次回から気をつける」

政宗は璃々の目線を合わせ、頭を下げた。

家康
「ところで政宗は今何しておったのだ？」

政宗
「俺か？　俺はこれから飲みに行こうかと思ってな……来るか？」

家康
「行きたいのは山々なんだが……流石に璃々ちゃんがいるのでな（汗）」

政宗
「確かにな……んじゃ俺は行くぜ」

家康
「ああ！」

そう言って政宗は会場の中に入っていった。

家康
「さて、璃々ちゃんはワシと一緒に遊ぶとするか！」

璃々
「うん！」

その場に残った家康は璃々と一緒に遊ぶのであった。

紫苑
「あらあら……良かったわ、家康君と一緒で」

祭
「あれが主が好きな男子か？」

紫苑
「そうですね、彼がわたくしの想い人ですわ」

祭
「うむ、元気があって良いではないか！」

紫苑
「うふふ……あら、そういえば桔梗は？」

祭
「……どうやら桔梗も乙女になったようだぞ」

祭がそう言って後ろを振り向くと……

桔梗
「アッハッハッハ！」

元親
「オイオイ……飲み過ぎじゃねーか？」

桔梗
「……！　長曾我部！／／／　いきなり声を掛けるでない！／／／」

元親
「アン？　ずっと近くにいたぜ、俺は」

桔梗
「ッ！／／／　そ、そうか……すまぬ／／／」

元親
「……何なんだ？」

そこには顔を赤くした桔梗と何もわかっていない元親の姿があった。

紫苑
「あらあら……うふふ」

祭
「アッハハハ！　あれでは普通の女子よ！」

孫市

（……それほど良いのか、恋とは）

宴会はまだ終わらない……

第五十話・A、大！宴！会！～序編～（後書き）

始まりました宴会！

まだまだ終わらない、終わらせない！

今回は短くなりました。

次回からは様々なキャラの行動を書きたいと思います。

それでは、また次回！

第五十話・B、大！宴！会！～政宗・小十郎編～

～あらすじ～

宴会中……

～南蛮王国・中庭～

政宗
「……Ｈｕｍ～」

政宗が短く溜め息をつき、少し疲れた様子でいる。
何故疲れているのか？

その原因は……

華琳
「……そこを退きなさい、下郎」

星
「ふっ……それはできぬ相談だな」

華琳
「あら、誰が“相談”したのかしら？　これは“命令”よ」

星
「ならば尚更よ」

この二人である。
政宗は家康と別れて一人で飲んでいると星が現れて政宗の隣に座り、一緒に飲み始めた。
その後にすぐ、華琳が現れて現在にいたる。

政宗
（静かに飲みてえんだが……無理か）

政宗は半ば諦め状態であった。

華琳
「……どうやら言葉で言っても無駄そうね」

星
「諦めてくださるのか？」

華琳
「まさか……華琳隊！」

華琳は大声で自分の部隊を呼んだ。

しかし……

華琳
「……あら？」

その部隊が来る気配は一切なかった。

星
「おや、どうなされた？」

華琳
「……やってくれたわね」

星
「何の事やら……」

一方の華琳隊は……

～会場内～

春蘭
「華琳しゃま～／／／　何処にいましゅか～／／／」

流琉

「政宗様～……／／／　くぅ～……／／／」

風
「ぐぅ～……」

いつき
「この野菜は時間との勝負べ！　焦らないで、尚且つ迅速にやるかで味が左右されるべ！」

小十郎
「なるほど、勉強になりますキング」

～政宗ｓｉｄｅ～

華琳
「よもや自分の味方までも裏切って政宗に近付くとは……堕ちたわね、星」

星
「ふっ……裏切りではない、これは知略だ。さらに言えば、風も一回裏切っているのでな」

華琳
「……ならば、この曹華琳が直々に相手をするわ、感謝しなさい」

星
「……この趙星の槍裁きに感服するがいい」

華琳
「笑止！」

華琳と星の闘いが今始まる！

政宗
「……何してんだよ」

そんな華琳と星の行動を一部始終見ていた政宗は呆れていた。

そこへ……

春蘭
「あ～……／／／　きしゃま～／／／」

政宗
（また面倒な奴がやってきた……）

酔っ払った春蘭が政宗の前に現れた。

春蘭
「きょきょであったが百年目～／／／　しょうびゅしろ～／／／」

政宗

「とりあえずテメェはｓｉｔ　ｄｏｗｎして、休め」

春蘭
「……うぅ～／／／」

政宗
「どした？」

春蘭
「にゃぜ、きしゃまは私のきょとを名前で呼ばにゃいのだ？／／／」

政宗
「……Ｈａ？」

春蘭
「いつもいつもきしゃまは私のきょとを“テメェ”や“オメェ”で呼びよって……私はかにゃしいぞ～／／／」

政宗
「……Ｈｕｍ～」

春蘭の主張を聞いた政宗は溜め息を一つ吐き……

政宗
「とりあえず部屋に戻るぞ……“春蘭”」

春蘭
「……えへへ～／／／」

政宗は春蘭の名前で呼んだ。

それを聞いた春蘭は少し嬉しそうに笑い……

トン

春蘭

「ぐぅ～……／／／」

政宗に倒れ込むように寝た。

政宗

「オイオイ、部屋に戻ってから寝ろよな……よっと」

政宗は倒れ込んだ春蘭をおんぶをして、部屋に戻るのであった。

～小十郎ｓｉｄｅ～

いつき

「今日はここまでにするべ！　また戻ったら教えるべ！」

小十郎
「色々と感謝する、キング」

いつき
「気にしなくていいべよ！　おらも野菜に興味がある人がいて嬉しいだ！」

小十郎
「では、俺は失礼する」

いつき
「まったね～！！」

小十郎は色々と教わり、満足したようだ。
いつきと別れた小十郎はとりあえず、政宗を探す。

小十郎
「さて、政宗様は何処にいられるのだ？」

辺りを見渡したが政宗の姿は見当たらない様子。

そこへ……

霞
「小十郎！　やっと見つけたで～！」

小十郎の目の前に霞が現れた。

小十郎
「霞か？　どうした？」

霞
「どうしたやないで、小十郎。今からウチらと飲まへん？」

小十郎
「……すまねえが、俺は今政宗様を探してるんだが」

霞
「政宗？　政宗ならさっき、春蘭を担ぎながら部屋に戻ってたで」

小十郎
「何？　それは本当か？」

霞
「ホンマやで。ウチ、さっき見たもん」

小十郎
「……なら、大丈夫か」

霞
「せやから、ウチらと飲まへん？」

小十郎
「それなら構わなねぇ」

霞
「うし！　ほんならウチについてきてーな」

小十郎
「わかった」

小十郎と霞は移動した。

～霞の部屋～

目的の場所である霞の部屋に到着した。

その場にいたのは……

秋蘭
「やぁ、小十郎」

稟
「どうも」

秋蘭と稟であった。

小十郎

「お前達もいたのか」

秋蘭
「ああ、少し静かに飲みたいと思ってな」

稟
「私も騒がしいのは少し……」

小十郎
「そうか」

霞
「まぁ立ち話もなんやし、一杯いっとこうやないかい！」

小十郎
「その発言はオヤジくさいが……まぁいいだろう」

小十郎と霞は秋蘭と稟の対面に座り片手にグラスを持った。

秋蘭
「それでは……」

小十郎
「乾杯だ」

カァァン

霞
「いや～、ウチは騒いで飲むのもええんやけど……こないな飲みもええな」

小十郎
「ああ、静かに飲むのもまた一興……」

秋蘭
「ふっ……小十郎もオヤジくさいぞ」

小十郎
「気にするな、年上に見られる事には慣れている」

稟
「あまり自虐的になるのは良くないですね」

秋蘭
「そうだぞ小十郎」

霞
「せやせや～」

小十郎
（自虐的に言ったつもりはないんだがな……）

静かな空間を楽しむ一同。
だが、小十郎は油断していた。

この後に起きる地獄が自分を苦しめる事を……

秋蘭
「何故か……いい気分だ／／／」

霞
「アヒャヒャヒャ！／／／」

稟
「ダ、ダメでふ小十郎ひゃん……／／／　皆ひゃんがみれる前で／／／」

小十郎
「……」

しばらく飲む内に女性陣は完全に酔っ払っていた。

小十郎
（こいつら酒に弱かったな……）

そんな女性陣を見て、小十郎は心の中で後悔していた。

秋蘭
「小十郎、もっと飲まぬか／／／」

小十郎
「いや、俺はもういい」

霞
「なんやて～／／／　ウチらの酒が飲めへんのか！？／／／　・・・・・ヒック／／／」

小十郎
「誰もそんな事は言ってねぇだろ」

稟
「小十郎ひゃん・・・・・／／／　一万年と二千年前から愛してる～♪／／／」

小十郎
「テメェはとりあえず寝てろ」

小十郎はとりあえずこの酔いどれ共をどうするか考えた。

小十郎
（どうするか・・・・・気絶させるか？　いや、仮にも腕が立つヤツらだ。稟には可能だが、それ以外が難しいな）

中々良い案がでずに悩んでいると・・・・・

ガシッ

小十郎
「ッ！？」

秋蘭
「どうした？／／／　もっと楽しもうではないか／／／」

背後から秋蘭が抱きついてきた。
小十郎は考え事をしていた為、反応出来なかった。

小十郎
「離せ秋蘭！」

秋蘭
「それは出来ぬ相談だな／／／」

小十郎
「何故だ！？」

秋蘭
「神は言っている……此処で離すべきではないと」

小十郎
「意味が分からねえ！！」

小十郎と秋蘭が一悶着をしていると……

霞
「なんや、小十郎はウチらといるのがヤなんか？／／／」

稟
「しょんな、ひどい／／／」

霞と稟が集まってきた。

小十郎
「だからそんな事は言ってねえ！！」

ベロン

霞
「これは嘘をついている味や、小十郎」

小十郎
「何の味だ！？　というよりいきなり舐めてんじゃねえ！」

稟
「ひゃあ小十郎ひゃん、私と一緒に……／／／」

小十郎
（聞く耳を持ってねえ！？　こうなったら力付くでも！！）

後がなくなった小十郎は力で秋蘭を振りほどこうした。

が……

バタン

女性陣

「「「ぐぅ～……／／／」」」

その前に女性陣が寝てしまった。

小十郎

「……何なんだ、こいつらは」

小十郎は呆れつつも一人一人ベッドの上に乗せる作業に入った。

その後、小十郎は再び飲むのであった。

～おまけ～

華琳

「これで私の勝ちね？」

星
「……そのようだな」

星の首には華琳の得物があった。

華琳
「ふふっ……さて、私は政宗と一緒に」

華琳はクルッと周り政宗がいた場所に振り向いたが……

桂花
「お許しください華琳さまぁ～／／／／（泣）」

そこには酔いつぶれている桂花の姿があり、政宗はいなかった。

華琳
「……何処に行ったァァァア！！？」

華琳は心から叫んだ。

次回予告！

此処は南蛮の森……
とある少年が何かから逃げていた……

幸村
「ハァハァ……落ち着くのだ幸村。Ｋｏｏｌになるのだ！」

ザッ……ザッ……

幸村
「ッ！！」

蓮華
「どうして逃げるの？　ネェ？」

幸村
「れ、蓮華殿、某は逃げてなど……」

蓮華
「嘘だッ！！！」

幸村
「ッ！？」

蓮華
「幸村……私ヲ受け入れてクレナイと…私、幸村を殺さないといけないノ」

幸村
「落ち着くでござる蓮華殿！　一体何があったのでござるか？！」

その頃、佐助は……

佐助
「旦那ァー！！　何処にいるんだァー！？」

幸村は無事でいられるのか！？
一体蓮華に何があったのか！？
佐助は幸村を助けだせるのか！？

次回、幸村・佐助編！

蓮華
「もう……ゴールしていいよね？」

幸村
「蓮華殿ォォオ！！？」

待て、次回！！

第五十話・B、大！宴！会！～政宗・小十郎編～（後書き）

いやはや、政宗が案外無事でしたね～

小十郎が一番の被害者になりました（笑）

さて、次回は幸村・佐助編！

蓮華の暴走に幸村はどう答える！？

それでは、また次回！

第五十話・C、大！宴！会！～幸村・佐助編～

～あらすじ～

宴会中、幸村は……

～南蛮の森～

幸村
「ハァ……ハァ……」

現在幸村は何かから逃げていた。

その何かとは……

蓮華
「ふはははは！　どこに行こうというのかね、幸村！」

そう、ムス○大佐……ではなく、蓮華である。

幸村
「落ち着くでござる蓮華殿！！　一体何があったのでござるか！？」

蓮華
「幸村がいけないノヨ……私の気持ちをわかろうともしないから」

幸村
「某が何か悪い事したでござるか?!」

蓮華
「ええ、したわよ……取り返しノツカナイ鈍感さが悪いのよ!!」

幸村
「（完全な殺気!）　目を覚ますでござぁぁるぅぅぅう!」

幸村は森の奥へと逃げ出した。

蓮華
「ニガサナイワ!!」

蓮華はそれを追いかけて行った。
しかし何故、蓮華がこのような事態になったのか?
その原因は宴会が始まってすぐの事であった……

～回想・会場～

蓮華
「……料理がおいしいわね」

蓮華は宴会の料理を堪能しいた。
因みにお酒は飲んでいない。

蓮華
「（此処に幸村が一緒にいれば嬉しいんだけど……）　ハァ～……」

その場にいない幸村の事を思い溜め息を吐く蓮華。
そこへ……

祭
「おや、蓮華殿ではないか」

蓮華
「祭？」

向こうで飲んでいた祭が蓮華のところにやってきた。
蓮華と祭は昔からの付き合いがある。
その為か、蓮華は祭の事は先生と言わなくて良いと祭から言われている。

祭
「どうなされた蓮華殿？　あまり元気がないと見受けられるが」

蓮華
「だ、大丈夫よ祭！　私はこの通り……」

祭
「あの真田の事ですかな？」

蓮華
「うっ……／／／」

蓮華は正直者故に、嘘が苦手である。

祭
「全く、蓮華殿の奥手な心は今も健在か……」

蓮華
「む、昔よりは奥手ではないわよ！」

祭
「だが、肝心な時に動かなければ何も変わりはしないですぞ」

蓮華
「それはそうだけど……」

祭

「やはり蓮華殿は変わりませんな」

蓮華
「私だって……変わりたいのよ」

祭
「やれやれ……なら」

そして祭は蓮華にある飲み物を渡した。

蓮華
「これは？」

祭
「なに、栄養ドリンクみたいな物ですな」

蓮華
「それを何で今渡すの？」

祭
「今の蓮華殿にちょうど良いかと思いましてな」

蓮華
「……大丈夫なの？（汗）」

祭
「儂を信用してくだされ」

祭は真剣な目で蓮華を見た。

蓮華
「……わかったわ祭、貴方を信じるわ」

祭
「アッハハハ！　流石、儂が認めた人材よ！　ほれ、飲むがよい」

蓮華
「……ん！」

そして蓮華は一気に飲み干した。

蓮華
「……！！」

飲み干したと同時に蓮華から膨大な殺気が放たれた。

祭
「れ、蓮華殿！？」

蓮華
「祭……アリガトウ」

祭
「ッ？！」

蓮華
「ソウヨネ……私が変わらなければ幸村も変わらないわよネェ」

祭
「……（汗）」

蓮華
「待っててねユキムラ……今、会いに行くわ！！」

そうして蓮華はもの凄いスピードで祭の前から消えていった。

祭
「……ちとやりすぎたかの？」

祭は渡した飲み物を拾い上げラベルを見た。

そこに書かれていたのは……

“天海印の栄養ドリンク！”

祭
「少しは役に立つかと思っていたが……ま、大丈夫だろう」

そして祭はまた飲み始めた。
原因・祭。

～回想終了・南蛮の森～

幸村
「ハァ……ハァ……」

幸村は先ほどより奥深くに逃げ込んでいて、息を整えていた。

幸村
「落ち着くのだ幸村！　Ｋｏｏｌになるのだ！」

その台詞は完全に大丈夫ではないが、落ち着こうとする幸村。

幸村
「蓮華殿に一体何があったのだ……う～む」

幸村は何故蓮華が暴走したのか考えた。
しかし原因が自分である事は一生気付かないであろう。

幸村
「ともかくこの場を何とかしなければなるまい……む？　声か？」

そんな事を思った幸村にある声が聞こえた。

？？？
「……ァア！　何処に……」

幸村
「この声はもしや！？」

？？？
「旦那ァア！　何処にいるんだ！？」

幸村
「佐助か！？　佐助ーー！！」

声の主が佐助とわかった瞬間、隠れていた場所が一気に飛び出した幸村。

その場にいたのは……

蓮華
「ミツケタワ、幸村」

蓮華だった。

幸村
「ぬわぁぁあぁぁぁぁぁあああぁ！！」

幸村は蓮華に見つかり、壮大にコケた。

ザッ・・・ザッ・・・

蓮華
「どうして逃げるの？　ネェ？」

幸村
「れ、蓮華殿、某は逃げてなど・・・・・」

蓮華
「嘘だッ！！！」

幸村
「ッ！？」

蓮華
「幸村・・・・私ヲ受け入れてクレナイと・・・私、幸村を殺さないといけないノ」

幸村
「落ち着くでござる蓮華殿！　一体何があったのでござるか?!」

蓮華
「何もナイワヨ幸村……ただ、貴方は少し鈍感なだけ……だから」

チャキン

蓮華
「全て一つになりましょう……幸村?」

幸村
「（目が本気でござるッ!?）　佐助ぇぇぇえ!!!」

一方の佐助は……

～南蛮の森～

佐助
「旦那ァア！　何処にいるんだ!?」

佐助は広い森の中を縦横無尽に走っていた。

佐助
（あの蓮華の感じからすると……少しマズいかもしれねぇな）

佐助は少し焦りながら幸村を探した。

すると……

???
「佐助ぇぇぇえ!!!」

佐助
「この声は!?　あっちか!」

突然木霊した声を頼りに佐助は幸村の場所へと急ぐ。

～幸村ｓｉｄｅ～

蓮華
「声を出してもムダヨ、さぁ幸村……」

蓮華は自分の得物を振り上げ……

蓮華
「もう……ゴールしましょう？」

ブォン！

一気に振り下ろした。

幸村
「蓮華殿ォォオ！！？」

幸村は蓮華を思い無闇に手が出せないので説得しようとしたがその前に剣が振り下ろされてしまった。
だが、その時！

ガキィン！

佐助
「旦那！　無事か！？」

佐助が到着し、剣を止めた。

幸村

「佐助!!　助かった!!」

佐助
「まだだ!」

蓮華
「何故邪魔をするの?!　ねぇ?」

佐助
「とりあえず、蓮華を止めるぞ!」

幸村
「出来るのか?!」

佐助
「可能性はある!　耳を貸せ、旦那」

幸村
「おぅ!」

佐助は小さな声で幸村に教えた。

蓮華
「佐助も私のジャマヲするのね……いいわ、まず佐助を斬ってあげるわ!」

蓮華は佐助の邪魔に苛立ち、佐助に襲いかかった。

佐助
「旦那！！」

幸村
「おぅ！」

だが、佐助も幸村に自分の策を言い終わり幸村に託した。

幸村
「蓮華殿！」

ガシッ！

蓮華
「！？」

すると幸村は蓮華の肩を掴んだ。

そして……

幸村
「某にとって蓮華殿は大切な人でござる！（友達として）」

と、蓮華に叫んだ。

カラン……

蓮華
「それ……本当なの？（恋人として）」

蓮華は手に持っていた剣を落とした。

幸村
「本当でござる！（友達）」

蓮華
「嘘じゃ……ないよね？（恋人）」

幸村
「うむ！（友）」

蓮華
「幸村！（恋）」

ギュッ！

幸村
「なッ！？／／／　れれれ蓮華殿！？／／／」

蓮華
「嬉しいわ……幸村」

互いの意味は違うがどうやらこの騒ぎは収まったようだ。

佐助
「うひょ～、あぶねぇあぶねぇ」

佐助は幸村と蓮華がいる木の上で二人の行動を見ていた。

佐助
「いや～旦那に“今、蓮華に対してどう思っているか素直に言え”って言ったら上手くいったな～」

佐助の策、恐るべし！

佐助
「さて、俺様は会場に戻るとしますか」

そう言って佐助はその場から消えた。

～佐助ｓｉｄｅ～

佐助
「よっと」

幸村と蓮華の騒ぎを止めた佐助は会場に姿を現した。

佐助
「ん～どうしよっかな～」

佐助はこの後何をするかは考えていなかった。

すると……

早苗
「あ！　佐助さん！」

佐助
「ん？　おお！　工場長！」

早苗
「工場長ではありません！　早苗です！」

佐助
「ハハハ～冗談だよ、冗談」

早苗
「もう……」

早苗がやってきて、佐助と雑談をした。

佐助
「早苗ちゃんはどうして此処でバイトなんかしてんの？」

早苗
「私はある人に此処で働いたらいい事があるよって言われたので」

佐助
「ある人？　占い師とか？」

早苗
「う～ん……それ以上に信頼できる……かな？」

佐助
「？」

早苗
「でも、本当にいい事がありましたので良かったです！」

佐助

「ふ～ん……ま、それでいいならいいんじゃない？」

早苗
「はい！」

パァァア

佐助
（グハッ！！　な、なんて眩しい笑顔だよ？！）

早苗の笑顔は佐助にとって大きなダメージだった。

早苗
「あ！　そういえばさっき明命さんが捜していましたよ」

佐助
「明命ちゃんが？　……まさか（汗）」

佐助は嫌な予感しかしなかった。
そしてその予感は的中した。

明命（暴徒）
「ヒャッハー！　見つけましたよ猫神様！」

佐助
「やっぱり暴徒になってるぅぅぅ！？」

佐助の前に現れたのは暴徒化した明命だった。

明命（暴徒）
「さぁ猫神様！　おとなしく子猫様と一緒にもふもふしましょう！」

美以
「にゃ～……ガクッ」

佐助
「いやいやいや！　子猫ちゃん死にそうだよ？！　今にも死にそうだよ？！」

明命（暴徒）
「愛の為なら仕方ありません！　よ～し、よしよしよしよしよしよしよしよしよし……」

美以
「にゃ……にゃにゃ……ニャンゴワザ……」

佐助
「やめろォォォオ！　もう美以のＬＩＦＥは０だ！」

明命（暴徒）
「ＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！！」

佐助
「誰かァァア！　救急車ァァア！　救急車を呼んでくれぇぇぇ！！」

早苗
（……やっぱり来て良かったです、こんなに楽しいですから♪）

そんな事を思う早苗だった。

次回に続く！！

第五十話・C、大！宴！会！～幸村・佐助編～（後書き）

蓮華の暴走がお市に似ていました（笑）

佐助の話は少し短い気がしましたね（汗）

次回は気を付けます。

それでは、また次回！

第五十話・D、大！宴！会！～三成・風魔編～

～あらすじ～

幸村と蓮華が森の中にいるとき会場では……

～南蛮王国・中庭～

三成
「秀吉様、半兵衛様、料理をお持ちしました」

秀吉
「うむ、ご苦労」

半兵衛
「いつもすまないね、三成君」

三成
「いえ、私にとっては当たり前の事です」

三成は秀吉と半兵衛の料理を持ってきていた。

秀吉
「三成よ」

三成
「はっ」

秀吉
「我らの事は充分だ、後は自分のしたいようにすれば良い」

三成
「いえ、秀吉様と半兵衛様に尽くす事が私の生き様です」

半兵衛
「相変わらずだね、三成君は」

三成
「私の命は常にお二人様のために……」

秀吉
「……三成よ」

三成
「はっ！」

秀吉
「命は誰のモノではない、自分自身のモノよ」

三成
「……」

半兵衛
「今夜は僕達の事はいいから、自分自身の事をしなよ」

三成
「半兵衛様……」

半兵衛
「自分自身の為に生きる……それが僕達の宿題だよ、三成君」

三成
「……わかりました、失礼します」

そして三成は秀吉達の前から去っていった。

秀吉
「……大丈夫だろうか？」

半兵衛
「大丈夫だよ、三成君にはたくさんの友達がいるからね」

秀吉
「……そうか」

秀吉と半兵衛は三成の成長を楽しんでいた。

一方の三成は……

～三成ｓｉｄｅ～

三成
（自分自身の為に生きる……家康にも言われた言葉だったな）

どうやら半兵衛の言葉の意味を考えていた。

三成
（私は秀吉様と半兵衛様の為に生きてきた。だから自分の事などどうでも良かった……しかし、先ほどの半兵衛様の言葉が私の何かに引っかかっている……これは一体何だ？）

“自分自身の為に生きる”
昔の三成にとっては必要ない事であった。
しかし、最近になっては何故かその言葉が心の何かに引っかかって仕方がない。
その原因は未だにわからない。

三成
「……とりあえず、刑部に聞いてみるか」

三成は引っかかっている何かを聞くために大谷を探すのであった。

数分後……

三成
「……刑部」

大谷
「む、三成か、どうした？」

ようやく大谷を見つけられたら三成。

桂花
「がびんざばぁ～……（泣）」

三成
「……何だコイツは？」

大谷
「なに、気にするでない」

三成
「……まぁよかろう」

三成は桂花を気にせずにある事を聞いた。

三成
「刑部、少し聞きたい事がある」

大谷
「……何ぞ？」

三成
「……刑部は自分自身をどう思っている？」

大谷
「……（唖然）」

三成
「刑部？」

大谷
「いやすまぬ、主からそのような言葉が出てくるとはな……何があったのだ？」

三成
「……実は」

三成説明中……

三成
「という事だ」

大谷
「あい、わかった」

三成

「それを踏まえてもう一度聞く。刑部、お前は自分自身の事をどう思っている？」

大谷
「……」

三成が質問したが大谷は何かを考えているようですぐには答えなかった。
しばらくして大谷は口を開いた。

大谷
「三成、すまぬが我はその問いには答えられぬ」

三成
「何？　どういう事だ？」

大谷の答えは答えになっておらず三成は理解出来なかった。

大谷
「我は主と同じある人物の為に生きている。そして、我は世界を平等にする為に……復讐の為に」

三成
「……」

大谷

「故に我はその問いには主の求める“自分自身”の部分には答えが出せぬ」

三成
「……いや、充分な答えだ。感謝する」

大谷
「これもギの為よ……ヒヒヒ！」

そう言って大谷は立ち去ろうとした。

だが……

三成
「待て、刑部」

三成が大谷に待ったを掛けた。

大谷
「どうした？」

三成
「……最後に一つ質問する」

大谷
「……何ぞ？」

三成
「刑部……お前は一体誰の為に生きている？」

大谷
「……少なくとも主には害がない人物よ」

三成
「……わかった」

大谷
「我は行くぞ」

そう言って大谷は立ち去った。

大谷
（我を皆と平等に扱ってくれた人物。主しかいないぞ……ヒヒッ！）

と思いながら……

三成
（刑部は私と同じ生き方だったか……）

残された三成は再び自分自身の事を考えていた。

三成
（一体何なのだ“自分自身の為に生きる”とは……）
しばらく悩んでいると……

美羽
「主様ァ～～！！」

三成
「……」

三成の前に美羽が現れた。

美羽
「主様！　一体何処に行っていたのじゃ！？　探したぞよ」

三成
「貴様には関係ない」

美羽
「ムッ！　また関係ないではないのじゃ！」

三成
「そもそも何故私に関わる？」

美羽
「妾は主様が好きだからじゃ！」

三成
「……くだらん」

美羽
「くだらなくないのじゃ！　くだらないかくだらなくないかは妾自身で決めるのじゃ！　馬鹿にするでない！」

三成
「ッ！　貴様自身だと？」

美羽
「うむ！」

三成
「……それが」

美羽
「およ？」

三成
「それが貴様自身の生き方か？」

美羽
「……生き方？」

三成

「そうだ」

美羽
「む～……」

美羽は少し考えて……

美羽
「わからんのじゃ！」

三成に答えた。

三成
「……何だと？」

美羽
「妾自身の生き方かどうかは関係ないのじゃ！　妾は妾自身が楽しければ大丈夫なのじゃ！」

三成
「……楽しければ」

美羽
「うむ！　それにの……」

三成

「それに？」

美羽
「主様は主様じゃ！　誰に言われようが主様自身は世界で一人だけなのじゃ！」

三成
「……」

美羽
「……およ？　わ、妾は何か変な事を言ったかの？（汗）」

美羽は三成が静かになったので何か悪い事したのか心配になってきた。

三成
「いや、何でもない」

美羽
「ほっ……良かったのじゃ～」

三成
「……貴様に教えられるとはな」

美羽
「？」

美羽が三成の言った意味を考えていると……

七乃
「お嬢さま～！」

七乃がやってきた。

美羽
「七乃や！　どうしたのじゃ？」

七乃
「お嬢さま、今からあの“数え役満☆姉妹”が中庭の舞台で特別に歌を披露するらしいですよ」

美羽
「何と!?　七乃！　急いで舞台に戻るのじゃ！」

七乃
「はい、お嬢さま」

そして美羽と七乃は風のように消えていった。

三成
「……私は私……か」

そう言って三成も何処かへと去っていった。

～風魔ｓｉｄｅ～

風魔
「……」

風魔は中庭で一人、飲んでいた。

いや、正確には……

小蓮
「すぅ～……／／／／」

鶴姫
「あはは～☆／／／　世界が回っています～☆／／／」

風魔の両脇には二人酔っ払っていた。
宴会が始まった瞬間に小蓮は風魔に近寄り一緒に飲んでいた。
しかし、突如として既に酔っ払っていた鶴姫が現れ、小蓮に強制飲酒させた。
そして現在に至る。

風魔
「……」

しかし、風魔は気にせずに飲んでいた。

そこへ……

蒲公英
「風魔さ～ん！」

蒲公英が風魔に声を掛けた。

風魔
『どうした？』

蒲公英
「あれ？　お姉ちゃんは？」

風魔
『翠なら最初からいなかったぞ？』

蒲公英
「あれれ～？　お姉ちゃんの事だから風魔さんと一緒かと思ってたんだけど……知りません？」

風魔

『すまないがわからん』

蒲公英
「風魔さんのところにいないとなると……部屋かな？」

風魔
『そうかもしれんな』

蒲公英
「（ふむふむ……なら）　風魔さん、悪いんですけどお姉ちゃんの部屋に見に行ってくれませんか？」

風魔
『部屋に？』

蒲公英
「きっとお姉ちゃんだからお酒を飲み過ぎていると思うから心配なんです」

風魔
『それは心配だな』

蒲公英
「本当はたんぽぽが行きたいんですけど、お姉ちゃんはきっと風魔さんに助けて貰いたい筈だと思うんで……頼んでもいいですか？」

風魔
『承知』

そう言った瞬間、風魔は姿を消した。

蒲公英
「……お姉ちゃんの部屋、わかるのかな？」

一つの問題を残して……

～南蛮王国・廊下～

翠
「うぅ……飲み過ぎた」

蒲公英の予感は当たり、翠は先ほど猪々子と飲み比べをしてたくさんのお酒を飲み干した。

翠
「先輩には勝ったけど……これじゃあ本末転倒だな」

そんな事を思いながら翠は自分の部屋に戻っていた。

翠

「風魔とも話したいのに……っと、早く部屋に戻んねえーと。トイレに行きたいの忘れてた」

少し急ぎ足で部屋に戻る翠。
そして自分の部屋の前に到着した。

翠
「到着したっと。さて……あれ？」

自分の部屋を開けようとしたが……

翠
「……鍵がねえ（汗）」

鍵がない事に気付く翠。

さらに……

翠
（ッ！／／／　ヤバい！／／／）

先ほどトイレに行きたいと思っていた為、かなり焦っていた。

翠
「こ、此処からトイレだと……ッ！／／／　ダメだ、歩くと漏れる」

どうやら自分の部屋に到着した拍子に緊張が抜けたようだ。

翠
「くぅ～……／／／　だ、誰かッ！！／／／」

翠は精一杯声を出したが、その声に反応してくれる人はいなかった。

翠
「あっ……もう／／／」

翠の限界が訪れようとした瞬間……

ヒュゥゥゥウ……

翠
「……風？」

一陣の風が吹き……

バタン！

翠
「へ？」

扉が開いた。

翠
「な、何だ？　って言ってる場合じゃね～！！／／／」

翠は突然扉が開いた事に唖然としたが、我に帰ってすぐさまトイレに直行した。

そしてトイレを済ませ再び扉の前に行くと……

風魔
「……」

翠
「ふ、風魔？！」

そこには風魔の姿があった。

翠
「もしかして部屋を開けたのって……風魔？」

風魔
『ああ』

翠
「どうやって？」

風魔
『それは……』

数分前……

風魔
「……」

風魔は翠の部屋に向かっていたが……

風魔
『部屋は何処だ？』

案の定、道に迷っていた。

風魔
『とりあえず捜すしかないか……』

仕方ないので一つ一つ部屋を確認しようとしたが……

風魔
『……これは』

足元に何かが落ちていた。

風魔はそれを拾って確認すると……

風魔
『……鍵？』

何処かの部屋の鍵であった。

それと同時に……

？？？

「……誰かッ！！／／／」

風魔
「……」

シュン！

何かの叫び声が聞こえ、それを頼りに風魔は風のように消えた。

風魔
『……という事だ』

翠
「そ、そうか……／／／」

風魔の説明が終わり大体把握出来た翠。
そして今、風魔と二人っきりだと気付く。

翠
（は、恥ずかしい場面を見せちまった／／／）

風魔
『ところで翠』

翠

「ん？」

風魔
『体調は大丈夫か？』

翠
「？　何の事だ？」

風魔
『妹が心配していたからな』

翠
「たんぽぽが？」

風魔
『ああ。お酒を飲み過ぎていないかと……』

翠
「うっ……」

図星であった。

風魔
『体調が優れないなら付き合おう』

翠
「！？／／／　ほ、ホントか？！／／／」

風魔
『ああ』

風魔の発言に声を荒げる翠。

翠
「じ、じゃあ……頼む／／／」

風魔
『承知』

こうして風魔と翠はいち早く宴会を抜けた。

次回に続く……

第五十話・D、大！宴！会！～三成・風魔編～（後書き）

今回はギャグなしで展開しました。

多分、次回もこんな感じになります。

あと、夏休み編はこの宴会編で終了します。

夏休み編が終わった後はリクエストを受け付けます。

何かありましたらよろしくお願いします。

それでは、また次回！

第五十話・E、大！宴！会！～家康・元親編～

～あらすじ～

皆が宴会で盛り上がっている中……

～南蛮ビーチ～

璃々
「わぁー！！　お星様いっぱい！」

家康
「スゴいな……前行った旅館よりキレイだな」

現在家康と璃々は南蛮ビーチに来ており、夜空を眺めていた。

璃々
「家康お父さん、スゴいね！」

家康
「ああ、こんなに星を見たのはあの旅館以来だな」

璃々
「ふわぁ～……」

璃々はしばらく夜空に光る星を眺めていた。

そこへ……

桃香
「あ！　家康君！」

愛紗
「此方に居られたのですか」

家康
「お、桃香に愛紗ではないか。どうした？」

桃香
「家康君を探していたの♪」

家康
「ワシを？」

愛紗
「はい。これから一緒に飲もうと思いましたので」

桃香
「お酒じゃあないけどね」

家康
「うむ、ワシは構わぬぞ」

璃々
「璃々も～♪」

桃香
「あはは♪　それじゃあ一緒に飲もうね」

璃々
「うん！」

そして家康達は南蛮ビーチでジュースを飲み始めた。

数十分後……

璃々
「すぅ…すぅ…」

桃香
「寝ちゃったね」

愛紗
「まぁ時間が時間ですし、仕方ないと思いますが……」

家康
「こんなところで寝ていては風邪を引いてしまうな」

桃香
「それじゃあ部屋に戻ろっか」

愛紗
「そうですね」

家康
「それでは璃々ちゃんはワシが連れて行こう」

そう言って家康達は南蛮王国に戻り始めた。

璃々
「家康……お父さん……すぅ」

桃香
「本当に好かれているね、家康君」

家康
「そうか？」

愛紗
「はい、本当の“親子”のようですね」

家康
「……親子か」

桃香
「？　家康君？」

家康

「ん？」

桃香
「どうしたの？　急に暗い顔になっちゃって」

桃香は家康の顔色を見たら、いつもより悲しい顔をしていた。

家康
「いや……少し昔を思い出していたのだ」

愛紗
「昔を？」

家康
「ああ……桃香、愛紗」

家康は不意に桃香と愛紗を呼んだ。

桃香
「うん？」

愛紗
「何ですか？」

家康

「少し聞きたいのだが……桃香達の親はどういう人物かな？」

桃香
「私達の親？」

家康
「ああ」

家康は真っ直ぐな目で桃香と愛紗を見た。

桃香
「う～ん……私のお父さんは福耳で少し江戸っ子口調っていうか田舎っぽいっていうか……一つ言えるのは裏表がない性格でみんなから愛されているよ」

愛紗
「私の父は少し頑固者で……あと、立派な髭を生やしております」

桃香
「愛紗ちゃんのお父さんは顔が真っ赤なんだよ♪　怒った時の愛紗みたいに」

愛紗
「……桃香様？（怒）」

桃香
「ご、ごめん愛紗ちゃん（汗）」

家康
「……母親は？」

桃香
「お母さんはとても綺麗な人だよ！　でも、私が悪い事したら家の中庭にある池に投げ飛ばすの（汗）」

愛紗
「私の母は穏やかな性格の人ですね」

家康
「……そうか」

家康は桃香と愛紗の言葉を聞き、少し羨ましく思えた。

桃香
「家康君は？」

家康
「……」

愛紗
「家康殿？」

家康
「……ワシの」

家康は重い口を開いた。

家康
「ワシの親は既にいない」

桃香
「……え？」

家康
「ワシが小学生の時に不慮の事故にあってな……」

愛紗
「す、すいません！　そんな辛い過去があったなんて」

家康
「良いのだ愛紗。元々ワシから切り出した話題だから」

桃香
「でも……」

家康
「それにな」

愛紗
「それに？」

家康
「だからこそワシは絆の大切さを知る事が出来た。だからこそワシ

は絆の重みを感じる事が出来たのだ」

桃香
「家康君……」

家康
「確かに悲しかった……今でも夢であって欲しいと思っている」

愛紗
「……」

家康
「その時に助けてくれたのは皆の絆だ。忠勝や周りの人々がワシを支えてくれた。悲しんでいたワシを精一杯愛してくれた。だからワシは立ち直れたのだ」

桃香
「……そうだったんだ」

家康の話を聞いた桃香と愛紗は家康の原動力はこの時に生まれたのかと感じた。

愛紗
「だからこそ家康殿は誰よりも絆を大切にしていたんですね」

家康
「ああ、自己満足なのはわかっているがな」

桃香
「そんな事ないよッ！！！」

家康が笑いながら愛紗に返事をすると、桃香が叫び声に近い声で家康に返した。

家康
「桃香？」

桃香
「私、今の話を聞いてスゴく感動したよ！　私だって共感したし・・・だから自己満足なんかじゃないよ！」

愛紗
「私も家康殿の話に共感を得ました」

家康
「・・・・・二人とも」

桃香
「私達も家康君に協力するよ！」

愛紗
「共に絆の力を広めていきましょう」

家康
「・・・・・・・感謝する、桃香、愛紗」

そして家康達は南蛮王国に戻っていった。

その最中……

家康
「……ん？」

家康がふとあるもの見つけた。

桃香
「どうしたの？　家康君」

家康
「すまぬ桃香、璃々ちゃんを頼む」

桃香
「え？　いいけど……」

家康
「それと、璃々ちゃんと一緒に先に帰っててくれ」

桃香
「ち、ちょっと、本当にどうしたの？！」

家康
「少し気になるのを見つけてな……それを見てくる」

愛紗
「大丈夫なのですか？　よろしければご一緒しますが……」

家康
「いや、決して危険な事ではない。信じてくれ」

家康は揺るがない目で桃香達を見た。

桃香
「……わかったよ、家康君」

愛紗
「そこまで言うのでしたら……」

家康
「感謝する」

家康は桃香達と別れ、気になるところへと足を進めた。

気になる場所にいたのは……

～元親ｓｉｄｅ～

元親

「……」

現在、元親は一人ビーチで夜空を見ていた。
それと同時にある事を思っていた。

元親
（家康……か）

考えている事は家康の事であった。
そんな事を思っていると……

家康
「やはり元親であったか」

元親
「……家康」

家康が元親の前にやってきた。

家康
「珍しいな、元親が一人だなんて」

元親

「ああ、少し考え事があってな……」

家康
「考え事？」

元親
「……家康」

元親は考えていた思いを家康に伝えた。

元親
「俺と家康は大事な親友（ダチ）だ。それはわかるだろ？」

家康
「そんな事、言われなくても心得ている。ワシと元親は大事な親友だ」

元親
「そう、大事な親友だ……だがな家康」

家康
「ん？」

元親
「俺らは一体どっちが強いんだ？」

家康
「……どういう事だ？」

家康はあまり理解できないでいた。

元親
「前にな、恋に家康とどっちが強いのか聞かれたんだ」

家康
「ほぅ……」

元親
「俺は家康とは親友だから闘う必要はないと思っていたから関係ねえと答えようとした……だがそん時にある事がよぎったんだ」

家康
「……」

元親
「親友だから闘う必要はねぇのか？　親友だからこそ闘う必要があるんじゃねぇのか？　……てな」

家康
「親友だからこそ……か」

元親
「……家康」

元親は手に持っていた槍を家康に向けた。

元親
「俺と……闘ってくれねーか？」

家康
「……」

元親
「親友として……男としてだ！　家康！」

家康
「……元親」

対する家康は拳に力を入れ……

家康
「ワシはこの闘いを待っていた……いや、恐れていたのかもしれん」

元親
「……」

家康
「友として、男としてこの闘い受けさせて貰おう！」

握っていた拳を高々と上げた。

家康
「ワシの全ての力を拳に変え、友に挑む!!」

元親
「それでこそ俺の親友だ！　テメーの拳を喰らうは悪鬼、長曾我部元親よ!!」

家康
「ゆくぞ!!」

元親
「かかってきな!!」

次回、決戦!!

第五十話・E、大！宴！会！～家康・元親編～（後書き）

今回桃香達が言った親の特徴ですが、“蒼天航路”を題材にしております。

そして此処でまさかの家康・元親の対戦です。

さらに一切ギャグなし……少し哀しいです。

だが、その分熱い展開にはしたいですね。

果たしてどちらが勝つのか？！

それでは、また次回！

～絆交拳鬼～

～あらすじ～

絆と悪鬼の決戦！！

～南蛮ビーチ～

現在、南蛮ビーチでは……

家康
「ハァァァア！！」

元親
「オゥリヤァァア！！」

激しいぶつかり合いが起こっている。
家康と元親が己の力をぶつけあっていた為、激しい衝撃音が木霊する。

家康
「虎牙玄天！！」

元親
「十飛！！」

互いに認める強者。
故に互いが全力を出し合わなければ敗北となる。
二人はそれを理解し、そして闘う。

家康
（クッ！　流石は元親だ！　純粋な力、技のキレ……油断したらワシの負けだ）

元親
（チィ！　家康の野郎……デカくなったのは体だけじゃあねえって事かい）

二人
（だからこそ……）
（だからなぁ……）

家康
「ワシはお主に勝ちたいのだ！　元親！！」

元親
「俺はテメェに勝ちてぇんだ！　家康！！」

拳と槍が相俟って火花を散らす。

家康
「元親よ」

元親
「闘いの途中で話すなんざ余裕じゃあねぇか？」

家康
「そんな事はない。ただ元親に伝えたい事があるのだ」

元親
「伝えてぇ事だと？」

家康
「元親……ワシはこの闘いに感謝している。元親の成長をこの体で感じられる事を」

元親
「……」

家康
「そして感じて欲しいのだ。ワシの成長を！　この強さを！」

元親
「安心しな！　家康の成長はこの闘いで感じているぜ！　だが足んねえ、まだやれるだろ！！　家康！！」

家康
「ああ！！」

そして再びぶつかり合う両者。

家康
「東風の乱舞ッ！！」

元親
「六限ッ！！」

鋭く、力強い連打を繰り出す。
どちらも一歩め譲らない攻撃の嵐。

と、此処で……

家康
「ハァ！！」

元親
「ッ！？　チィ！！」

家康が元親を突き放し、勝負に出た。

家康
「いくぞ！！」

家康は拳に力強く握り締め……

家康
「天道突きッ！！」

氣を纏った凄まじい殴打を喰らわした。

元親
「ガッ！！」

それを腹にまともに喰らった元親。

だが……

家康
「ッ！？」

元親
「……やるじゃねぇーか、家康」

元親はそのまま家康の腕を掴んでいた。

元親
「次は俺の番だ！」

そう言った元親は槍を構え……

元親
「三覇鬼ッ！！」

家康に向け、振り下ろした。

家康
「グハッ！！」

そして元親の攻撃を受けた家康はそのまま吹き飛ばされた。
その拍子に二人の周りには砂埃が舞っていた。

元親
「……グッ！」

元親もまたダメージを受けていた。
家康の天道突きを喰らった元親は地に膝を着いて苦しんでいた。
しかしあの一撃で家康は倒れた、そう元親は確信していた。

元親
「ハァ‥ハァ‥‥（クソ、かなりダメージが大きいぜ‥‥‥家康の野郎、やりやがる）」

だが‥‥‥

家康
「やはり強くなっていたな‥‥‥元親よ」

元親
「ッ！！　んだと！？」

元親は完全に油断していた。
砂埃のせいで家康の姿は見えずにいた。
それ故に元親は家康が倒れたか確認せずに倒したものだと思っていた。
しかし、その砂埃から家康の声が聞こえて元親は驚いた。

やがて砂埃が晴れ、視界が良好になると‥‥‥

家康
「しかし甘いぞ元親。ワシはまだやれるぞ！」

氣を溜め、既に攻撃態勢に入っていた家康が其処に立っていた。

元親
「しまっ……」

元親が家康の技に気付いたが時既に遅し……

家康
「葵の極み！！」

元親
「……ッ！！」

家康の奥義が放たれ、元親に繰り出した。
元親も対応が遅く、家康の奥義をまともに喰らってしまい、倒れてしまった。

家康
「ハァ……ハァ……」

家康の奥義により勝負は決まったかに見えた。
しかし家康は気を許す事なく、未だに構えを解かなかった。

何故なら……

元親
「ハァ……ハァ……家康……」

既に元親が立ち上がっていたからだ。

家康
「ハァ……お互い…限界が近いみたい……だな」

元親
「ハァ……ああ…すまねえ、家康」

家康
「何故…謝るのだ？」

元親
「俺は…友としてやっては……いけねえ事をしちまった」

家康
「……」

元親
「友に対して……油断をした…それはやっちゃいけねえ事だ……」

家康
「元親……」

元親
「……だからなぁ！」

元親は家康の元へと向かった。

家康
「……」

対して家康は冷静に元親の動きを見て、防御の判断をした。
そしてすぐさまカウンターをする準備も同時に行う。

しかし……

元親
「……今だッ！」

そう言った瞬間、元親は槍を地面に刺した。

家康
「なッ？！」

その行動に一瞬驚く家康。
だが元親はその一瞬を狙っていた。

元親
「オゥラ！」

家康
「ガハッ！！」

一瞬空いた防御に元親はすぐさまボディーブローを咬ます。
それを喰らった家康は地面に膝をつける。

元親
「これでいい……これでチャラだ、家康」

家康
「ゴホッゴホッ……なるほど、ワシを“油断”させたのか」

元親
「ああ……わりぃな家康。俺は善人じゃあねえんだ……だがなぁ！」

元親は地面に刺した槍を手に持ち……

元親
「そんな小細工をするのは俺のやり方じゃねえ！　次の一撃に全てを賭ける！」

勢いよく槍を振り回した。

家康
「良かろう！　ワシもこの拳に己の魂を賭ける！」

そう言って家康も拳に氣を溜め込む。
互いが互いに全身全霊で挑もうとする両者。
それがひしひしと伝わるように地面の砂が嵐のように舞っていた。

そして……

元親
「撃零ッ！！」

家康
「天道突きッ！！」

両者の全力がぶつかり合った。
それと同時に辺りが二人を包むように砂が散乱した。

やがて砂が晴れると……

家康

「ハァ‥ハァ‥ハァ‥‥‥」

元親
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥」

その場に立っていたのは家康だった。
元親は仰向け状態で寝転んでいた。

家康
「ハァ‥ハァ‥‥元親‥よ‥‥‥大丈夫‥か?」

元親
「‥‥‥安心しろ、意識はある‥‥‥」

家康
「‥‥‥そうか」

それを確認したら力がドッと抜け、その場に座り込んだ。

元親
「‥‥‥負け‥か」

家康
「‥‥‥‥‥‥‥‥」

元親

「……だが気分が良いぜ……何でだろうな……」

家康
「……互いが」

元親
「ん？」

家康
「互いが本気で勝負をするから……ではないか？」

元親
「……単純だな」

家康
「ああ……単純だ」

元親
「単純だが……尤もらしい答え……か」

家康
「……ああ」

元親
「……」

家康
「……」

元親

「家康」

家康
「ん？」

元親
「……あんがとよ」

家康
「……ああ」

元親の言葉で微笑みながら答える家康。
そしてそれを照らすかのように夜空の星が満遍なく光るのであった。

次回に続く……

～絆交拳鬼～（後書き）

家康・元親の対戦は家康の勝利でした。

あと、今回の対戦は擬音などを文字にせずに書いてみました。

それに関して指摘があればよろしくお願いします。

次回は夏休み編、最終回！

やっとギャグが書ける……

それでは、また次回！

第五十一話、終わりの“始まり”

～あらすじ～

家康の勝利で終わった決戦……

～南蛮王国・ロビー～

家康
「……（汗）」

元親
「……（汗）」

凄まじい対決を繰り広げた家康と元親。
現在二人はロビーで正座をしていた。

その理由は……

桃香
「むぅ～……（怒）」

愛紗

「……（怒）」

璃々
「大丈夫？」

思春
「……（怒）」

恋
「……ムゥ（怒）」

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！
先ほど家康と元親がロビーに帰ってきたらこの有り様さ！
な、何を言っているかわからねーと思うが自分もわからねーんだ！

……説明します。
先ほどの闘いによりボロボロになった家康と元親はお互いの肩を借りながら南蛮王国のロビーに到着した。
すると、ロビーの奥の方から璃々がやってきた。
そして必然的に桃香達もやってくる。
桃香達は二人のボロボロな姿を見て、すぐさま正座させた。
しばらく説教をしていると、元親を探していた思春と恋が現れ、現在に至る。

桃香
「……何か言う事は？（怒）」

家康
「……すいませんでした」

愛紗
「ハァ～……家康殿に何言っても無駄のような感じですね」

家康
「ありがとう！」

愛紗
「いや、褒めてません」

家康達は平和的に終わりそうだ。

対する元親達は……

思春
「恋、左半身は貴様にやる。だから右半身は貰うぞ」

恋
「……ん」

元親
「オイ！　何で話し合いで武器を持つ？！」

恋
「……痛いのは、一瞬」

元親
「その発言はおかしいだろ！」

……血を見そうになっていた。

愛紗
「……家康殿」

家康
「ん？」

愛紗
「何があったかまでは聞きません。ですがこのような事は今回限りにしてください」

家康
「……すまない」

桃香
「本当だよ。璃々ちゃんだって心配してくれたんだから」

璃々
「うん。璃々、スッゴく心配したよ～」

家康
「本当にすまなかった」

家康は深々と頭を下げた。

元親
「……俺も謝っとくか。すまねえ」

それを見た元親も頭を下げた。

思春
「……フン」

恋
「……ん」

桃香
「うん♪」

愛紗
「はい、わかりました」

璃々
「……？」

璃々以外はその謝罪を承諾した。

家康
「さて、ワシはもう寝るが……お主達はどうする？」

璃々
「璃々も一緒に寝る～♪」

桃香
「私はお風呂でゆっくりしてくるよ」

愛紗
「私も桃香様にお付き合いします」

元親
「まだ宴会が終わってねえみたいだから俺はそっちに参加するぜ」

思春
「……蓮華様を探す」

恋
「……元親と一緒」

家康
「そうか、では解散だな」

元親
「ああ、そうだな」

そう言った家康達はバラバラに行動した。

～南蛮王国・中庭～

慶次
「夜はまだまだ長いぜ！！」

雪蓮
「どんどん盛り上がっていくわよー！！」

一同
「「「「ヒャッハー！！」」」」

恋
「……元気」

元親
「つーか人数が増えてるぜ……」

宴会場に現れた元親と恋は絶句した。
中庭には数え切れないほどの人数がいたからだ。
先ほど、美以の部下達が王国で宴会をやっているから参加を呼びかけしていたのが理由。

元親
「ったく、此処の人間もお祭り好きが多いな」

恋
「……」

元親
「どうした？」

元親の言葉に反応しない恋に声を掛けると、恋はある机をじぃーっと見つめていた。

恋
「……ジュルリ」

正確には机の上に置いてあった料理を見つめていた。

元親
「……食っていいぞ」

恋
「……いただきます」

そう言って恋はフラフラと料理に向かっていった。

元親
「……大丈夫か？」

ちなみに元親の大丈夫は恋に対してではなく、此処の食料の在庫である。
そして一人になった元親は近くの木に座り、周りを見渡した。

月
「今日こそは……みっちゃんと一緒に／／／」

詠
「その前に三成を見つけなさいよ」

月
「へぅ……／／／」

華雄
「くっ……まさかお酒まで弱っているとは／／／」

祭
「ほれ、まだまだあるぞ」

桔梗
「どんどん飲まぬか！」

華雄
「ふごごー！！」

官兵衛
「小生の部屋の鍵は何処だ?!」

朱里
「やはり政宗さん×幸村さんが鉄板かと……」

雛里
「でも、幸村さん×佐助さんも捨てがたいよね」

二人
「「……（妄想中）」」

二人
「はわわー!!／／／」
「あわわー!!／／／」

一般人A
「俺……この宴会が終わったら結婚するんだ……」

一般人B
「馬鹿！　それは死亡フラグだ！」

一般人C
「俺の名を言ってみろ!!」

元親
「……ホント、元気な奴らだな」

元親は宴会を見てそう思った。

そこへ……

政宗
「よぅ」

元親
「……独眼竜か」

政宗が現れた。

政宗
「隣いいか？」

元親
「構わねえぜ」

政宗
「Ｔｈａｎｋｓ」

政宗は元親の隣に座り酒を取り出し、コップに注いだ。
そして注いだコップを元親に渡し、元親はそれを受け取る。

政宗
「まずは乾杯でもしようぜ」

元親
「……ああ」

そして乾杯をする二人。

政宗
「テメェとは一度、飲んでみたかったんでな」

元親
「まぁ、実際これを入れたら話すのは二回目だからな」

一回目は新生ＢＡＳＡＲＡ大会。

元親
「……で？」

政宗
「Ａｈ？」

元親
「俺に聞きてえ事があんじゃねえのか？」

政宗
「……」

元親
「違うか？」

政宗
「……Ｂｉｎｇｏだ」

元親
「そうかい……そんで？」

政宗
「……Ｓｔｒａｉｇｈｔに聞くぜ」

元親
「おぅよ」

政宗
「テメェは……さっき家康と闘っていただろ？」

元親
「……見てたのか？」

政宗
「ちょうどある奴を部屋運んでな……夜風に当たりたかったんで
Ｂｅａｃｈ沿いに歩いていたらたまたま見つけたんだ」

元親
「……情けねえとこ見せちまったぜ」

政宗
「そんな事はねえ。あの闘いなら誇ってもいいぜ」

元親
「……そうか」

政宗
「だが、聞きたい事はそこじゃねえ。……強かったか？」

元親
「……何処まで答えればいい？」

政宗
「どっちが強いか、までは言わなくていい。アイツはいずれ俺が倒す人間だ。だが、お前が闘ってみて純粋に強いかだけ聞きたい」

元親
「……ああ、強かった」

政宗
「……」

元親
「純粋な強さの他に……信念の強さがあった。そこに負けた」

政宗
「……信念の強さ？」

元親

「おっと、俺が言えんのは此処までだ。後は自分の目で確かめな」

政宗
「……Ｈａ、それもそうだな」

そして二人は再び乾杯した。

～舞台上～

蒲公英
「皆さん注目！！　今から限定のステージ、数え役満☆姉妹が今夜限りに復活します！」

沙和
「ホントなの？！」

亞莎
「すす凄いです！！」

蒲公英
「まずは本人登場！！」

そして舞台上に姿を現す張姉妹。

天和

「天和で～す♪」

地和
「地和で～す♪」

人和
「人和です」

三人
「「「三人揃って、Ｐ○ｒｆｕｍ●です！」」」

真桜
「何でやねん！！」

蒲公英
「素晴らしいツッコミありがとうございます！　さぁ、知っている人知っている！　知らない人は今日で覚えていってね！　それではどうぞ！」

～♪～♪～♪

中庭に響く音楽が皆の注目を浴びた。

その中で家康は……

～家康の部屋～

家康
「お、中庭では何かやっているようだな」

中庭の音楽が少しながら流れてくる家康の部屋。
家康は少し体を洗い流し、寝る準備をしていた。

璃々
「……」

家康
「ん？　どうしたんだい、璃々ちゃん？」

既にベッドの上にいた璃々が少し悲しい顔をしていた。

璃々
「お父さん……楽しい時間が終わっちゃうね」

家康
「ああ、終わっちゃうな」

璃々
「せっかくみんなと遊べるのに……つまんなーい」

家康
「……璃々ちゃん」

璃々
「ほえ？」

家康
「終わっちゃう事はつまんない事ではないぞ」

璃々
「……なんでー？」

璃々は理解出来ていないようだ。

家康
「確かに終わりはいずれくる……しかし、そこからまた新しい事が始まるのだ」

璃々
「終わっちゃうのに始まるの？」

家康
「ああ、終わりの始まり……これは必ずやってくる。璃々ちゃんだって新しい友達が増えたら嬉しく思わないかい？」

璃々
「うん！　友達増えたら嬉しい！」

家康
「それをする為に終わりがある。だからこそ新しい始まりが訪れる

んだ」

璃々
「……う～ん」

家康
「少し難しかったな。これはお父さんの宿題だ」

璃々
「……うん！　璃々、頑張る！」

家康
「ならまずはゆっくりお休みする事だ。おやすみ、璃々ちゃん」

璃々
「おやすみなさい、お父さん……」

家康は部屋の電気を消し、深い眠りについた。
こうしてまた一つ終わりが訪れ、新しい始まりがやってくる。
だが、それまで皆は思いのまま過ごす事であろう。

それが人の“人生”なのだから……

夏休み編、完！

～おまけ～

宴会が終わり、皆が帰宅する準備に取りかかっていた。

早苗
「今回はお世話になりました」

佐助
「いや～俺様は特にやっていないけどね～」

南蛮王国の入り口には早苗が別れの挨拶に来ており、佐助がその挨拶を受け取っていた。

佐助
「しかし、ホントにいいのかい？　みんなを呼ばなくて」

早苗
「はい、あまり皆さんに迷惑を掛けるのは失礼ですから」

佐助
「ふぅーん……」

早苗
「それにしっかりとお話したのは佐助さんくらいですから……」

佐助
「ま、そりゃそだな」

早苗
「だから皆さんには佐助さんから言っといてくださったら嬉しいです」

佐助
「ちゃんと言っとくよ」

早苗
「ありがとうございます」

佐助
「そういえば早苗ちゃんはまだ残るの？」

早苗
「いえ、私も今日帰ります」

佐助
「へぇ～……それじゃあもしかしたら空港で会うかもね～」

早苗
「あ、多分会わないと思います。今すぐ帰るんで」

佐助
「……へ？」

早苗
「よっと」

そう言った瞬間、早苗は空を浮遊していた。

佐助
「……（ポカーン）」

早苗
「それではお達者で～～……」

佐助が唖然としていたが、早苗は気にせずに手を振りながら消えていった。

佐助
「……」

幸村
「佐助！　こんな所にいたのか！」

佐助
「……旦那」

幸村
「ん？」

佐助
「人って……空を簡単に飛べるのかな？」

幸村
「……何を言っておるのだ？」

佐助
「……何でもない」

佐助はこの事を心の奥にしまった。

第五十一話、終わりの“始まり”（後書き）

夏休み編、終了です！

今回のこの長編、如何でしたか？

いろいろとありましだが、この夏休みでいろんな人が成長したと思います。

次回は番外編。

本編に関わる重大な発表があります！　後、アンケートもしかし、読まなくても大丈夫な内容ですので気になる人は読んでください。

それでは、また次回！

番外編？

どうも、世紀末雑魚です。

今回はお話系ではなく、ある報告に来ました。

この作品も半分くらいまで来ました。
長いような短いような……複雑な気持ちです。

そしてこのまま小説を書いていて思ったのは……絶対にネタが尽きるだろうな～という感じになりました。

小説を書くならしっかりと読者を楽しませたいモノなので、中途半端なモノなら小説を打ち切りにするつもりで書いております。

そこで……新たにキャラクターを増やす事にしました！

ＢＡＳＡＲＡや恋姫のメンバー以外の作品からです。

その作品は……
”戦国無双３”です！

……え？　既にＢＡＳＡＲＡがある？　はい、わかっております。

なので数名しか出しません。

恋愛関係はまだ決まっていませんがいろんなキャラと絡ませたいと思います。

それと、話のリクエストを受け付ける事にします。

リクエストする際は

・主役は誰か？

・どんな話か？

・方向性（ギャグ・シリアス・ラブラブなどなど……）

を書いてくださったら極力書かせて頂きます。

まだリクエストはやっておりませんがやるときになりましたら後書きに書きますのでよろしくお願いします。

そして最後にアンケートです。

?、次の長編はどちらが先に見たいですか?（キチンと両方やります）

・A、体育祭編

・B、学園祭編

?、久秀にフラグは必要ですか?

・A、はい

・B、いいえ

以上です。

アンケートご協力お願いします。

次回は信長と久秀の会議です！

今回は短くなりましたが御覧になられました読者様に感謝します。

それでは、また次回！

外伝・捌、恋ＢＡＲＡ会議

皆が夏休みを満喫している中、学園では……

～恋ＢＡＲＡ学園・校長室～

信長
「……」

久秀
「……」

夏真っ盛りな天気の中、校長室では信長と久秀がある事で対立していた。
校長と教頭……やはり二人の気迫は相当なモノでそこらにある壺やコップなどか揺れていた。

そしてその威厳を発しながら……

信長
「ペットにするならば犬に決まっておろう、うつけが」

久秀
「信長公……卿は何もわかっていないようですね。自由に生きるこそ欲望、これにより猫に決まりです」

どーでもいい話をしていた。

信長
「貴様とは話がつかぬな」

久秀
「卿が理解すれば宜しいかと」

信長
「ほざくなうつけ」

ホントどーでもいい事であった。

そこへ……

濃姫
「失礼します。お茶をお持ちしました」

校長室の扉が開き、お茶を持った濃姫が現れた。

信長
「お濃、このうつけにわからせてやれ」

濃姫
「……何の事ですか？」

久秀
「卿からも信長公の説得をお願いします」

濃姫
「だから何の事ですか？」

突然、意味がわかない事を言われて困る濃姫。

濃姫
「とりあえず、会議は何処まで進みましたか？」

信長
「……」

久秀
「……」

濃姫
「……ハァ～」

どうやら全く進んでいないようだ。

濃姫

「……では今から始めさせて頂きます。宜しいですか？」

信長
「構わぬ」

久秀
「構いません」

濃姫
「まずは今後の休日に関してです。今は土曜日は週二回登校させていますが……」

信長
「いらぬ」

濃姫
「宜しいのですか？」

久秀
「これは前から決まっておりました。生徒の欲望を邪魔させない為に……ですかな」

濃姫
「わかりました。それでは登校日の全体集会に発表、実行は新学期で構いませんか？」

信長
「構わぬ」

濃姫

「ありがとうございます。続いてですが、今年の学園祭の予算はどうされますか？」

久秀
「例年通りに上限なしでお願いしたいものだが……信長公は問題ないかね？」

信長
「……好きにせい」

濃姫
「わかりました。あと、今年も“天下統一”様、“本願寺金融”様、“北条建設”様が協力してくれます。それに関していくつか申し出がありますのですが……」

信長
「申してみろ」

濃姫
「まず“天下統一”様から……《いくつかお店を出したい。それに関しては此方が負担する》……との事です」

久秀
「相変わらず物好きな御方だ。昔から騒ぎ事に付き合うところが何も変わっていない」

濃姫
「それでも協力してくれるから有り難いものよ……いかが致しますか？」

信長
「是非もなし」

濃姫
「わかりました、受け付けます。次に“本願寺金融”様……《何人か此方に派遣して欲しい。それによって金額を上げる》……です」

久秀
「なるほど、上手いやり方だな。そうやって向こうの方が儲かるサイクルが出来る……どうやら向こうにもかなりの切れ者がいるみたいだな」

濃姫
「それでも金銭面では一番協力してくれるわ。これも受け付けますか？」

信長
「好きにやらせろ」

濃姫
「わかりました。最後に“北条建設”様……《建設に関して若手を使わせたい。勿論、しっかりとやらせる》……です」

久秀
「北条建設に関しては信頼が第一。此処で若手の教育に使うか……」

濃姫
「だからといって此方でミスをされても困るのよ。どうされますか

？」

信長
「……問題が起きた時の対処は向こうにやらせろ」

濃姫
「勿論でございます」

信長
「ならば構わぬ」

濃姫
「わかりました。それでは全て受け付けます。失礼します」

そう言って濃姫は校長室を後にした。

久秀
「……さて、以上で終わりですかな？」

信長
「……」

久秀
「では私も失礼させて頂く」

濃姫に続いて久秀も後にした。

信長
「……フン！」

久秀が出て、一人になった信長は何故かある方向に銃を発射させた。

すると……

卑弥呼
「やはりわかっておったか！」

卑弥呼が姿を現し、信長の攻撃をかわした。

信長
「その闘気を放っていたらうつけでもわかるわ」

卑弥呼
「じゃが、うつけならば既に気絶しておろう……小童」

信長
「下郎が……！」

卑弥呼
「落ち着け小童。お主に聞きたい事があるのだ」

信長

「……何ぞ？」

卑弥呼
「何故お主はあの久秀を教頭にしたのだ？　あ奴はお主が学生時代に唯一逆らっていた人物な筈……」

信長
「……」

卑弥呼の言葉に信長は少し黙り込んだ。

そして一言……

信長
「だからこそ……ぞ」

そう言って信長も校長室を後にした。

卑弥呼
「だからこそ我が手にしたい……難しい男ぞ」

残された卑弥呼は信長の一言に納得していた。
それと同時に不器用な男とも思う卑弥呼であった。

～恋ＢＡＲＡ学園・廊下～

久秀
「……」

久秀は廊下を歩いていた。
この後やる事もないので家に帰ろうとする途中であろう。

そこへ……

???
「もう会議は終わったのか、久秀？」

急に後ろから声を掛けられ振り向く久秀。
そこには銀髪でグラマラスな女性が立っていた。

久秀
「何か私に用かな？　……何進（かしん）よ」

名を何進。
恋ＢＡＲＡ学園・中等部の学年主任で、久秀とは学年時代の同級生にあたる。

何進
「いやなに……貴様が歩いているところを見えたのでな」

久秀
「卿も物好きだな」

何進
「そんなのは学生からぞ」

久秀
「……そうか」

何進
「……久秀よ」

久秀
「何かな？」

何進
「一体何を企んでおる？」

久秀
「……」

何進
「貴様ほどの人間が教頭の立場で素直に従うわけがなかろう」

久秀
「私も丸くなった……とでも言っておこう」

何進
「丸くなった？　ぬかせ、むしろ牙は鋭くなってきたように我は見えるぞ」

久秀
「……卿がどう捉えるかは自由だ」

何進
「……」

久秀
「……では卿にヒントをやろう」

何進
「ヒント？」

そして久秀は前を向き……

久秀
「……窮鼠猫を噛む」

何進
「ッ！？」

そう言った瞬間、久秀からとてつもない殺気が放たれた。
何進はその殺気に驚き、少し怯えた。

久秀
「……いつも私が心掛けている事だ」

そして久秀は歩き始めた。

何進
「……やはり面白い奴だ。いずれは我のモノにしてやろう」

何進は久秀とは逆の方を向き、歩き始めた。

それぞれの思想が交差し、実現させようとする者達。
いずれ答えが出されるその日まで……

外伝・捌、恋ＢＡＲＡ会議（後書き）

魔王と愚雄の会議でした。

この二人をギャグにするの、難しいです……

最初は頑張ってギャグを入れましたが途中でギャグなしでしたね～

……頑張ろう

次回はいよいよ新キャラ登場！

最初は自分が戦国無双一番好きなキャラです！

それでは、また次回！

2012

第五十二話、三成に過ぎたる者（前書き）

明命
「あ、あの！」

島津
「んあ、どげいしたね？」

明命
「も、もしかしたらお猫様ですか！？」

島津
「……何の事ねえ？」

雛里
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……き、禁則事項です！」

第五十二話、三成に過ぎたる者

～あらすじ～

皆が夏休みを楽しんでいる時、街中では……

～商店街～

？？？

「……」

ある日の昼、空に雲一つもない快晴の晴れである。
此処は恋ＢＡＲＡ学園から離れた場所にある商店街。
学校もない学生達が商店街に充満しており、商店街自体が盛り上がりを見せていた。
だがそれとは反して、ある一人の頬に傷がある青年はその盛り上がりを見せる商店街の隅のベンチで静かに座っていた。

？？？

「皆さん元気な事で……羨ましい限りだ」

青年は血気盛んな学生達を見てそんな事を思っていた。

???
「さて、こんなところに俺は釣り合わないな……とっとと退散しますか」

青年はベンチから立ち上がり、立ち去ろうとした。

そこへ……

???
「何処に行くのだ?」

ある人物が青年を止めた。
青年は足を止め、後ろを振り向いた。

そこに立っていたのは……

???
「これはこれは……いつぶりですかい、信玄公」

信玄
「三年……くらいかの」

信玄であった。

???
「それで……俺に何か用ですかい？」

信玄
「……主は今何をしている？」

???
「俺ですかい？　今はしがないフリーターみたいなもんですよ」

信玄
「……主はそれでいいのか？」

???
「元々、俺はこんなもんだったって事ですよ」

信玄
「……成る程、そう自分に言い聞かせているのか」

???
「……」

信玄
「主は儂の知略を学んだ。主も儂の魂を継いだ男だ」

???
「やめてくださいよ。信玄公の魂は幸村さんが継ぎました。俺は信玄公の知略を盗んだに過ぎないもんです」

信玄

「盗むのも学ぶ内。しかし盗むというのは学ぶより難しい」

???

「……」

信玄

「やはり主はまだ学ぶ必要があるようだな」

そう言って信玄は青年にある紙を渡した。

???

「……これは？」

信玄

「学園案内よ。今儂はこの学園で教師をやっている」

???

「……成る程、此処でもう一度学ぶ訳ですかい」

信玄

「そうだ。主の手続きは終わっておる」

???

「それはご苦労な事で、俺には拒否権が無いわけか」

信玄

「そういう事だ。期待しておるぞ……左近（さこん）よ」

信玄は青年、島（しま）　左近に期待の言葉を言って立ち去った。

左近は渡された紙を見て……

左近
「あまり過剰な期待は勘弁して貰いたいんですけどね……ま、やるからには全力でやらせて頂くとしましょう」

学園の手配をする準備に掛かった。

そして恋ＢＡＲＡ学園の登校日にて……

～恋ＢＡＲＡ学園・１－Ｃ～

幸村
「皆の者、おはよう！！」

蓮華
「相変わらず朝から元気ね（汗）」

佐助
「あーでもなきゃ旦那じゃないしな」

天和
「ユッキーおはよ～♪」

穏
「おはようございます～」

亞莎
「おはようございます」

明命
「おはようございます！　猫神様！」

恋ＢＡＲＡ学園の登校日。
久々の皆の顔が見れて喜ぶ幸村。
一同は変わっていない幸村を見て、いつも通りな学園生活と感じていた。

しばらくして……

信玄
「皆の者、席につくがよい」

教室の扉が開き、信玄が現れた。
皆は一瞬で静かになり、席についた。

信玄
「今日の日程はこの後、全体集会をやり、解散だ。あと、皆に新しい仲間が加わる」

ざわ…ざわ…ざわ

佐助
（……オイ、思春）

思春
（……何だ？）

佐助
（転校生の事、知ってたか？）

思春
（いや、今始めて聞いた）

佐助
（……）

思春
（貴様も知らないという事は……）

佐助
（かなり秘密に守られた人物……て事かな）

思春
（……まぁいい）

クラスA

「はい、先生！」

信玄
「どうした？」

クラスＡ
「その人は男ですか！？　美少女ですか！？」

蓮華
「美少女限定？（汗）」

信玄
「残念だが……男だ」

クラスＡ
「クソッ！！　神はこうも俺らをイジメたいのか！？」

幸村
「おお！　ならば一緒に修行をしなくては！」

佐助
「いやいや、いきなり修行はないでしょ（汗）」

信玄
「いや、そうでもないぞ」

佐助
「え？」

信玄

「入ってくるがよい」

そう言った瞬間、扉が開き青年が入ってきた。

幸村
「なッ！？」

佐助
「嘘ッ！？」

青年を見た瞬間、幸村と佐助は驚愕した。

信玄
「よし、これからこのクラスの仲間になる……」

左近
「島左近って言う者です。ま、仲良くしてください」

幸村
「左近殿ッ！！　久しいではないか！！」

左近
「やぁ幸村さん、それに佐助さんも」

佐助
「いやぁびっくらこいた～」

幸村
「何故貴殿が此処に？」

左近
「ま、流れというかなんというか……とりあえずはなんとなくですね」

佐助
「相変わらずの口調だね～」

左近
「そういう佐助さんもお変わりないみたいで」

佐助
「まぁね～」

幸村
「某は嬉しいぞぉぉぉ！！」

左近
「幸村さんもいつも通りで」

幸村と佐助は左近と久しく話をしていた。

蓮華
「佐助」

佐助
「ん？」

蓮華
「彼は一体何者なの？」

天和
「なんかユッキーと仲良くしているね」

蓮華達は左近の存在が気になっていた。

佐助
「おっと、説明してなかったね……アイツは島左近。旦那とは武田道場からの仲だよ」

穏
「はいぃぃぃ？！　あの人も幸村さんと一緒の道場出身なんですか？！」

佐助
「そうだけど……どったの？」

明命
「いえ……幸村さんと一緒の道場って考えたら、随分と冷静ですね（汗）」

佐助
「ああ、そういう事ね……アイツは旦那みたいに熱血キャラじゃ

ないからね」

蓮華
「そうなの？」

佐助
「……いや、心では熱血キャラなのかもしれない」

思春
「どういう事だ？」

佐助
「アイツには夢があんのよ」

天和
「夢？」

佐助
「ああ……確か“認めた主を見つけて命を捧げる”だったっけ」

思春
「……それはつまり」

佐助
「そう、アイツは認めた主の為なら命を惜しまない性格なんだ。今はあんな口調で話してるけど」

亞莎
「……深いですね」

その言葉を聞いた蓮華達は左近を見た。

幸村
「うぉぉぉお！！　みぃぃなぁぁあぎぃるぅあぁぁあ！！」

左近
「ハハハ、元気そうで」

そこでは幸村と左近が刃を交えていた。

信玄
「そろそろ全体集会が始まるぞ、席につくがよい」

今回の集会は学園放送でやるらしい。
そして時間が経ち、集会も無事終わった。
集会が終わり、皆は帰りの支度をしている。

幸村
「左近殿！　これから貴殿の歓迎会をやるでござる！」

左近
「ほぅ、それは有り難い事だ。喜んで参加しますよ」

幸村

「よし、では参るぞ！」

そして幸村の後をついて行く左近。

その道中……

左近
「ん？」

左近はある人物とすれ違った瞬間、足を止めた。

幸村
「左近殿、どうした？」

左近
「……幸村さん、すまないが先に行っててくれ」

幸村
「？　……わかった。では、校門で待っているぞ」

左近は足を止め、幸村に先に行ってくれと申し出た。
幸村は何かあると思い、深く追求する事なく場所だけ言って先に向かった。
残された左近はある方向に歩みを進めた。

左近
「ちょっといいかい？」

そしてすれ違った人物に声を掛けた。

その人物は……

三成
「……何だ？　私は忙しいのだ」

三成であった。

左近
「そいつはすまなかった。アンタに少し聞きたい事があるんでね」

三成
「……早くしろ」

左近
「あんがとさん。それじゃあ聞くが……アンタの目指している夢は何だ？」

三成
「夢だと？　秀吉様の夢を叶える事だ」

左近
「ほぅ……そんじゃあ、その人の夢が叶ったらアンタはどうする？」

三成
「秀吉様の夢が叶ったら私はそれでいい」

左近
「成る程……その夢を未来に繋げる事は考えていないのか？」

三成
「未来に……繋げるだと？」

左近
「アンタを見てると……そういう生き方っぽく思えてね」

三成
「ッ！？　私の生き方……だと」

左近
「その様子じゃあまだ自分の生き方を見つけられていない様子……だな」

三成
「……オイ」

左近
「何ですかい？」

三成

「教えろ。私らしく生きるとは……どういう事だ？」

左近
「……アンタはかなり不器用な生き方をしてたみたいだな」

三成
「何？」

左近
「そういうところは幸村さんと一緒か……」

三成
「戯れ言はいい！　早く教えろ！」

左近
「……これは俺から教える事なんて出来ませんよ」

三成
「……どういう事だ？」

左近
「その答えは自分で見つけるもんだ。俺は何も出来ないし、教える事も出来ない」

三成
「……」

左近
「わかりましたか？　止めてすいませんでしたね。俺は行かせて頂きますよ」

三成との話も終わり、校門に向かおうとした左近。

三成
「待て」

しかし、三成は左近を呼び止めた。

左近
「何でしょう？」

三成
「……名を名乗れ」

左近
「……島左近。アンタは？」

三成
「……石田三成」

左近
「覚えておきましょう……それでは」

そう言って左近は歩みを進めた。

三成
「……島……左近」

そんな事をぼやきながら三成も左近と逆の方向に歩いていった。
これが新たな主となる事を少しながら感じた左近。
左近はこの学園に来た事を感謝し、校門に向かった。

次回に続く……

～おまけ～

教室にて……

幸村
「お館様ァァア！！」

信玄
「幸村ァァア！！」

幸村
「お館様ァァア！！」

信玄
「幸村ァァア！！」

蓮華
「……左近もアレやるの？」

左近
「見せましょうか？」

一同
「「「「ゑ！！？」」」」

左近
「冗談ですよ」

冗談のレベルが高い教室でのやりとり。

第五十二話、三成に過ぎたる者（後書き）

はい、最初は左近でした！

自分の中では一番気に入っているキャラです。

わからない人の為にキャラ紹介！

《島　左近》
ＣＶ・山田真一

剛毅で口調は軽いが性格は真摯。
自分の信じた主の為なら命を惜しまない忠義を持つ。一人称は「俺」
幸村と佐助は武田道場時代からの旧友。
幸村は武を学び、左近は知を学んだ。
強さは幸村より下だが、本気を出せば幸村と互角の強さ。
三成の悩みを一瞬で判断するなど、見極める力は相当なモノ。

・・・・こんな感じでお願いします。

あと、今回から前書きネタを復活します！

次回も新キャラです！

それでは、また次回！

第五十三話、家康の影（前書き）

佐助
「……」

小十郎
「あん？　どうした？」

佐助
「……テッカ」

小十郎
「ブレェェェェェェェェェェェェェドォォォォォォォォォォ！！！！！！」

佐助
「マイクが壊れた！？」

貂蝉
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるわん♪」

第五十三話、家康の影

～あらすじ～

新学期突入！
島左近参戦！

～家康宅～

家康
「では行ってくるぞ！」

忠勝
「……！！」

恋ＢＡＲＡ学園も二学期が始まり、久々の制服姿になる家康。
支度が終わり、留守番を忠勝に任せて学園に向かった。
留守番を任された忠勝はリビングに戻り、中庭に向かった。

忠勝
「……」

そして中庭に座り込みいつも通りの留守番が始まる。

忠勝が座ると、肩に猫や兜に小鳥などが居座り、くつろぐ。
これが忠勝の留守番。
中々の癒し系である。

しばらくして……

忠勝
「……！？」

忠勝は立ち上がり、辺りを見回して警戒した。
立ち上がった事で忠勝に集まっていた動物達は驚き去っていった。

？？？
「……久しくだな」

忠勝
「……！！」

すると突然何処からともなく声が聞こえ、忠勝に話しかけた。
忠勝はその声に覚えがあり、警戒を解いた。

？？？
「主は無事か？」

忠勝

「！！！」

？？？

「そうか……感謝する」

忠勝

「……！」

？？？

「……この時期より拙者は主の影になる」

忠勝

「！！！」

？？？

「わかっている……では」

そして声は聞こえなくなり気配も消えた。

忠勝は気配が消えると、再び座り込んだ。

～恋ＢＡＲＡ学園・校門前～

桃香

「家康君、おはよう！」

愛紗

「家康殿、おはようございます」

焔耶
「おはようございます！　お館！」

凪
「おはようございます、師匠」

家康
「ああ、おはよう！」

校門前には続々と生徒が現れ、賑やかになっていた。
家康は桃香達と出会い、一緒に登校した。

元親
「ふぁ～……おはようさん」

風魔
『おはよう』

家康
「元親に風魔よ、おはよう」

途中、元親と風魔とも遭遇した。
そして一緒に登校し、話しが盛り上がっていた。
すると……

風魔
「……」

元親
「…ん？　どうした風魔？　そんなキョロキョロして」

風魔
『誰かに見られている』

元親
「あん？　……別に何も感じないぜ」

風魔は何かを察知し、辺りを見回した。
元親は風魔の言葉に辺りを見回すが気配を感じとる事が出来なかった。

風魔
『かなり手慣れた者だ。少し失礼する』

そう言って風魔は風のように消えた。

元親
「……大丈夫か？」

家康

「ん？　風魔は？」

元親
「ちょっくら用事があるらしいぜ」

家康
「……そうか。では少し待つか」

元親
「そうだな」

そして家康達は風魔を待つ事にした。

～屋上～

？？？
「……」

その頃、屋上ではある男性が何かを観察していた。
男性の容姿は目と口以外は顔が隠れている仮面を付け、後ろの髪を結んでいた。

すると……

風魔

「……」

？？？

「……来たか」

一陣の風と同時に姿を現した風魔。

だが、男性は驚く事なく冷静に対応した。

風魔

『何者だ？』

？？？

「……影」

風魔

『影？』

？？？

「長居は……無用」

男性は自らの武器、鎖鎌を取り出し、臨戦態勢をとった。

風魔

「……」

風魔も背中の忍刀を構えた。

そして……

風魔
「……」

???
「滅ッ!!」

互いの刃が交わった。

～グランド前～

元親
「……なぁ」

愛紗
「どうされました?」

元親
「アソコにいんの……風魔だよな」

元親は上を指差した。
そこにいたのは風魔と男性が闘っていた。

桃香
「……確かに風魔君だね（汗）」

焔耶
「どういう原理で飛んでんいるのだ？」

凪
「というか闘っている人も凄いですね（汗）」

愛紗達はその闘いを見て少し引いていた。

そんな中家康は……

家康
「あれは……まさか」

風魔ではなく、闘っている男性を気にしていた。

愛紗
「家康殿？」

桃香
「どうしたの？」

家康
「……すまんが先に行っててくれ！」

焔耶
「お館！？」

家康は桃香達を置いてグランドに向かった。

元親
「あの慌てよう……何かあんな」

凪
「どうされます？」

元親
「あのまんまってのも気になるだけだからな……追いかけるぜ」

愛紗
「わかりました」

元親達は家康を追いかける為、グランドに向かった。

～グランド前・上空～

風魔

「……」

？？？

「滅せよ！！」

風魔と男性は上空で相俟っていた。
彼らが交わるたびに金属音が恋ＢＡＲＡ学園に響く。
その金属音に皆は反応し、上を見上げて闘いを見守っていた。

？？？

「次で葬る……」

風魔

「……」

そして両者は氣を溜め始めて奥義を展開しようとした。

と、その時……

家康

「二人とも！　そこまでだ！」

？？？

「……」

風魔

「……」

グランドから家康が大声で二人を止めた。
二人は氣をしまい、グランドに降りてきた。

家康
「……やはり、お主であったか」

???
「……」

家康は男性に近付き、久しい気持ちになっていた。
一方の男性は家康の前で片膝を地につけ……

???
「……主よ、帰還しました」

と、家康に報告した。

家康
「頭を上げてくれ……半蔵（はんぞう）」

男性の名は服部（はっとり）　半蔵。
家康の為、命を賭ける忍びである。

元親
「家康、知り合いか？」

後ろから元親達が追いつき、家康に声を掛けた。

家康
「ああ、コイツは服部半蔵。ワシの昔からの仲だ」

元親
「昔から？　俺は会った事ねえが……」

家康
「それは半蔵の修行がかなり過酷だったので中々会えなかったんだ。
元親が転校した時に一度遊びに来たのが最後だった」

桃香
「へぇ～……」

半蔵
「……」

風魔
「……」

焔耶
「何か……似てる」

凪
「確かに」

家康
「すまないな風魔、いきなりの挨拶で」

風魔
『構わない。我もいい相手だった』

半蔵
「……同じく」

家康
「そう言ってくれると助かる。ところで半蔵」

半蔵
「はっ」

家康
「お主は今日からこの学園の生徒か？」

半蔵
「はっ、その通りです」

家康
「そうか！　ならば今日の放課後、歓迎会をしよう」

半蔵
「有り難き御言葉。しかし影には無……」

元親
「よっしゃあ！　家康の友は俺らの友だぜ！」

桃香
「派手に行こう！」

半蔵
「……」

半蔵は歓迎会を断ろうとしたが、既に皆はやる気でいた。

風魔
『彼らは祭り事が好きだから何を言っても無駄だ』

半蔵
「……理解した」

風魔は彼らの事を説明し、半蔵はそれを理解した。
だが、半蔵は悪い気はしないのであった。
家康の懐かしき“絆”
影は我が主君の為に任を全うする。

次回に続く……

～おまけ～

朱里
「はわわ！　遅刻です！」

雛里
「朱里ちゃん、急いで！」

朱里と雛里は珍しく遅刻しそうになっており、慌てながら走っていた。
そして玄関で上履きに履き替えて、急いで教室に向かおうとした。

その瞬間……

朱里
「はわ!?」

雛里
「あわ!?」

前方を見ていなかった二人は誰かに当たってしまった。

当たった人物は……

半蔵
「……」

半蔵であった。

朱里
「……」

雛里
「……」

半蔵
「……」

朱里と雛里は半蔵を凝視し、しばらく間が空いた。

そして……

朱里
「はわー！！　ごめんなさぁい！！」

雛里
「あわー！！」

二人は叫びながら去っていった。

残された半蔵は……

半蔵

「……痛嘆」

かなりショックを受けていた。

第五十三話、家康の影（後書き）

今回は家康の影、半蔵でした。

半蔵は無口キャラな為、風魔と被ってしまいますが、彼自身は自分は好きです。

そして此処でキャラ紹介！

≪服部半蔵≫
ＣＶ・黒田崇矢

非常に寡黙なプロフェッショナルで、自らを「影」と称し主に絶対の忠義を誓う。
衣装は紺の忍装束。一人称は「拙者」。
家康とは昔からの関係を持っているが、半蔵は昔から修行に明け暮れていた為、中々会えないでいた。
しかし、そんな半蔵に嫌な顔をせず、自分を友と呼んでくれた家康に感服して、将来は家康の“影”になる事を誓った。
強さは風魔、佐助と同等の強さ。
だが、忍術に関してはずば抜けてレベルが高い。

以上です。

次回は誰がやってくるのか！？

それでは、また次回！

第五十四話、秀吉の絆（前書き）

星華蝶
「其処の者、よろしいかな」

半蔵
「……」

星華蝶
「やはりお主も華蝶であったか！」

半蔵
「何の事だ？」

星華蝶
「よし、今日からお主は“闇華蝶”だ」

朱華蝶
（……ごめんなさい）

恋華蝶
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……始まる」

第五十四話、秀吉の絆

～あらすじ～

半蔵参戦！

～新学期前日・生徒会室～

半兵衛
「もしもし、久し振りだね」

新学期前日、半兵衛は電話で誰かと連絡を取り合っていた。

半兵衛
「来る日は明日で変わりないね。秀吉も喜ぶと思うよ。あと、あの二人も元気かい？　……そうか、それは良かった」

どうやら相手は昔からの付き合いがあるみたいで、親しく半兵衛と話をしている。

半兵衛
「既に手配は終わっているから安心してくれ。それじゃあ」

話が終わり電話を切る半兵衛。

そこへ……

秀吉
「……奴か？」

秀吉が声を掛けてきた。

半兵衛
「そうだよ秀吉。僕達の家族は明日転校してくるよ」

秀吉
「……家族か」

半兵衛
「秀吉？」

秀吉
「……我は自らの力でこの学園を支配する。しかし、一方で家族と呼べる人間がいる……一体我は何がしたいのだ？」

半兵衛
「……」

秀吉
「ならばいっそのこと家族を捨て、我のみの力で支配した方が楽なのではないか？」

半兵衛
「……それじゃあ秀吉」

秀吉
「何だ？」

半兵衛
「もしそのやり方でやるならば僕ら生徒会も捨てないといけない」

秀吉
「……」

半兵衛
「昔の秀吉なら簡単に出来た。だけど、今の秀吉はそんな事できるかい？」

秀吉
「……フッ、愚問だったな」

半兵衛
「そういう事だよ。さぁ、迎え入れる準備をしようか」

秀吉
「……奴は苦手だ」

半兵衛

「ハハハ、そうだね。あと、三成君には内緒にしといてくれ」

秀吉
「……また奴の趣味か」

半兵衛
「ああ、困ったもんだよ」

こうして秀吉と半兵衛は生徒会室を後にした。

～翌日・生徒会室～

三成
「……」

翌日の朝、三成は朝の挨拶運動をする為、生徒会室にて準備を行う。

すると……

???
「お！　三成がいるね。相変わらず不機嫌そうな顔をしてるね」

廊下から女性一人と男性二人が現れ、三成が生徒会室に入る様子を見ていた。

？？？
「いつまで経ってもあのままだな、アイツ」
？？？
「ヘッ！　頭デッカチにはお似合いだぜ」
？？？
「そんな事言わないの……さて、少し遊んでくるね♪」

そう言って女性は先に生徒会室に向かった。

？？？
「……あの方も変わりないな」
？？？
「でもそれが良いところじゃね？」
？？？
「確かにな」

男性二人は女性の悪戯が終わるまで待機した。

～生徒会室～

三成
「……」

その頃、三成は一人で黙々と準備を行っていた。

そこへ……

月
「あ、おはようございます」

三成
「……月か」

扉が開き、月が入ってきた。
三成は月とわかった瞬間に自分の準備を続けた。

月
「いつも早いね」

三成
「当たり前だ。秀吉様の好感度を下げる訳にはいかん」

月
「……アハハ（汗）」

三成
「ところで刑部はどうした？」

月
「刑部君ならさっき落とし物したって言ってたから先に来ました」

三成
「……オイ」

月
「どうしたの？」

三成
「私の名を言ってみろ」

月
「？　何言ってるの三成君？」

三成
「……貴様、何者だ」

月
「え？」

三成
「貴様は何者だと聞いている！　刑部が落とし物をしていたならば一緒に探す筈だ。それに月は私に対し、名前では呼ばん！」

月（？）
「……」

三成
「答えろ！！」

月（？）
「……三成はそんなに月を思っているんだね！　あたし、感動したよ！」

三成
「何を言っている！？　私に斬滅されたいのか！」

月（？）
「わからないの？　よっと！」

そして月（？）はクルッと回転し、煙が蔓延した。
しばらくして煙が晴れると、そこには廊下にいた女性が立っていた。

？？？
「久し振りだね、三成！」

そんな女性を見て、三成は……

三成
「なッ！？　おねね様！　何故此処に？！」

女性、“ねね”に驚愕していた。

ねね
「ホントにおっきくなったね～！　いい子いい子してあげる！」

三成
「ひ、必要ありません！」

ねね
「ありゃ残念」

三成
「……は！　申し訳ありません！」

ねね
「へ？」

三成
「私はおねね様に対し無礼な発言をしてしまいました！　この罪は私の首を持って許しをこう所存です！　おねね様、介錯を！」

ねね
「そこまでしなくていいよ!?　それに、あれはあたしからした事だよ！」

三成
「ですが！」

ねね

「……そうだ！　ねぇ三成」

三成
「はっ！」

ねね
「今日、あたし達が学校に転校してるのを内緒にしといてくれる？
そしたら許してあげる！」

三成
「それは構いませんが……“達”とは？」

ねね
「あ、まだ知らなかったね！　ちょっと待ってて！」

そう言って、ねねは生徒会室を出て行った。

しばらくして……

ねね
「三成ー！　連れてきたよー！」

ねねが再び生徒会室に現れた。

？？？
「久し振りだな、三成」

？？？
「よぅ頭デッカチ！」

更に、先程の男性二人も入ってきた。
それを見て、三成は驚愕する。

三成
「清正（きよまさ）！？　何故貴様が！？」

？？？
「オイ！　俺もいんだろうが！！　はったおすぞゴルァ！」

清正
「おねね様がこちらの学園に来たんだ。俺らもこちらに来るのが筋だろ？」

？？？
「あれ？　清正？　お前もシカトすんの？（汗）」

三成
「フン！　貴様の事だ！　一人で護衛出来ないが故に逃げてきたのだろ？」

清正
「相変わらず憎まれ口調だな……お前友達いんのか？」

三成

「私には秀吉様がいれば問題ない！」

？？？

「二人で無視してんじゃねー！！」

二人

「「うるさい黙れ馬鹿」」

？？？

「おねね様ー、アイツら俺の事イジメてきますよー（泣）」

ねね

「三成はあたしや半兵衛の事はどうでもいいの？」

？？？

「おねね様まで？！」

三成

「い、いえそんな事はありません！！」

ねね

「そうだよね♪　三成はいい子だもんね」

三成

「私は当たり前の事をしているだけです」

清正

「また堅い事を……ところで、お前何かしてたんじゃねえのか？」

三成

「！　そうであっだ！　おねね様、失礼します！」

ねね
「頑張るんだよ～！」」

そして三成は生徒会室を後にした。

清正
「……」

ねね
「三成、変わったね」

清正
「はい……ですが、悪い事ではありません」

ねね
「うんうん」

？？？
「シクシク……（泣）」

ねね
「ほら正則（まさのり）、元気出しな」

正則
「そうやってみんな俺をイジメんッスか？　楽しいッスか！？」

清正
「……悪い、やりすぎた」

ねね
「……あはは～（汗）」

こうして“ねね”“加藤（かとう）　清正”“福島（ふくしま）　正則”は恋ＢＡＲＡ学園の一員になるのであった。

次回に続く……

～おまけ～

島津
「ちゅーわけで今日からおまはんらの新しい仲間になる……」

清正
「加藤清正です」

正則
「福島正則だゴルァ！！」

清正
「いきなり吠えるな馬鹿」

月

「清正君?!」

詠
「げっ、正則……」

正則
「ん？　お、メガネじゃねえか！　相変わらずのメガネだな！」

詠
「メガネ言うな！」

月
「ホントにお久しぶりですね、清正君」

清正
「ああ……ところで」

月
「はい？」

清正
（三成とはどこまでいった？）

月
（……良くも悪くも）

清正
（……大変だな）

月

（はい……）

大谷
「……三成よ」

三成
「……どうした？」

大谷
「この二人がいるという事は……」

三成
「おねね様も来ている」

大谷
「……」

三成
「そういえば刑部は苦手だったな」

大谷
「……ああ」

一方……

ねね
「久し振りだね、お前さま！」

秀吉
「ああ……」

ねね
「相変わらず無愛想だね。そういうところを見せるから三成が真似しちゃうんだよ！」

秀吉
「……」

ねね
「聞いてるの！（怒）」

秀吉
「う、うむ（汗）」

半兵衛
（相変わらず頭が上がらないね）

久々の再会をした秀吉達だった。

第五十四話、秀吉の絆（後書き）

……これ、秀吉か（汗）

まぁ、ねねが生きていたからこうなると思って書きました。

嫌な人は嫌かな（汗）

それではキャラ紹介！

《ねね》
ＣＶ・山崎和佳奈

秀吉の幼なじみ。
肝っ玉母さんみたいな性格をしている。一人称は「あたし」。
秀吉に好意があり、積極的にアタックをしている。
祭とライバルになる予定。
強さは明命以上、佐助以下。

《加藤清正》
ＣＶ・杉田智和

三成と幼なじみ。
いつもクールな性格だが甘党。一人称は「俺」。
家康とは違うが、清正も“絆”を大切にしている。
三成とは腐れ縁みたいな感じだが、大切な友とも思っている。
強さはテクニックでは三成を上回る。

また、政宗を見ると何故かイラつく。

《福島正則》
CV・藤本たかひろ

三成の幼なじみ。
愛すべき馬鹿。大谷の玩具。一人称は「俺」。
三成とは腐れ縁で、彼の事は頭デッカチと呼ぶ。
裏表がない為、元親とは馬が合う。
話し合いは好まず、すぐに喧嘩をしたがる。
強さは力では三成を上回る。

こんな感じでお願いします。

次回は誰が現れるか!?

それでは、また次回!

第五十五話、北条の獅子と姫（前書き）

清正
「……あの」

雛里
「は、はい？」

清正
「もしかして、未来人ですか？」

雛里
「……禁則事項です」

正則
「しゃあ！　恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語！　始まんぜ！！」

第五十五話、北条の獅子と姫

～あらすじ～

ねね、清正、正則参戦！

それから一週間後……

～北条宅～

氏政
「ふぅ～……いいお茶じゃわい」

此処は北条宅。
氏政は一人、リビングでお茶を飲んでいた。

氏政
「風魔も明るくなってきて……儂は嬉しいぞよ」

最近は風魔の友達も来るようになり、自分なりに楽しんでいる。

氏政

「天国の御先祖様方もきっと喜んでくれている筈じゃ」

？？？

「誰が喜んでいるだって？」

氏政

「天国の御先祖様方に決まっているじゃろ……はて？　儂は誰と喋っているのじゃ？」

？？？

「俺はまだ死んでねえだろ……ド阿呆が」

氏政

「へ？」

氏政は後ろを振り向いた。

そこには顔に大きな傷が２つある強面な男性が立っていた。

氏政

「……」

？？？

「よぅ」

氏政

「で、出たァァア！？」

？？？

「だから死んでねえんだよ！！」

氏政
「……あ、そうじゃったわい」

？？？
「死んでんのはテメェのゲームだけだ」

氏政
「あまりそう言った発言は控えましょうぞよ……父上」

その男性の名は北条　氏康（うじやす）
元“北条建設”の三代目社長。

氏康
「つーかテメェ、老けたな」

氏政
「いやーかなり苦労したんじゃ。おかげでこんな喋り方になってしまったのじゃ」

氏康
「ケッ……どうやらあの会社、まだ潰れてねえみてーだな。でかした、氏政」

氏政
「流石に儂で潰す訳にはいかん。だから、腕利きの忍びを雇って頑張ったのじゃ！」

氏康
「あの忍びか？」

氏政
「うむ！　父上がいる時はまだまだじゃったが、今となってはかなり強くなったぞよ！」

氏康
「ったく、テメェを見てるとどっちが年上かわかんねえ」

氏政
「父上が若く見えすぎなのじゃ！」

氏康
「……そうか？」

氏政
「そうじゃ！　……ところで父上は何しに帰って来たんじゃ？　確か、海外で北条建設を発展させるって言って此処を出て行った筈じゃが……」

氏康
「海外は成功して今は他の奴に任せている……あと、帰ってきた理由はこれだ」

氏康は紙を取り出し、氏政に渡した。

氏政
「これは……何じゃと!?　父上はこれを受け入れるのか!?」

氏康
「ああ、最近は暇になってな……アイツらに会うのも悪くねえからな。それに……」

氏政
「それに？」

氏康
「あるお姫様がこの学園に行きたいって言ったんだよ」

氏政
「あの生意気な小娘か!?」

氏康
「仕方ねえだろ。あのお姫様、海外いんのに外国語を学ぼうとしねえし、何より弱い男は嫌だとか小せぇ事しかほざかねえからな」

氏政
「は、はぁ……」

氏康
「ま、やるからにはしっかりやらせで貰うぜ」

こうして1日が終わって翌日を迎えた。

～通学路～

チンピラ
「ほ、ほげ～……」

翌日、恋ＢＡＲＡ学園の通学路。
此処では数人のチンピラがある女性にこてんぱんにやられていた。

？？？
「いい、これに懲りたら二度と陰湿なナンパをすんじゃないわよ？」

チンピラ
「は、はひ～……ガクッ」

？？？
「全く、こんなか弱い乙女に対してナンパは許すけど、“脚太女”って言ったのは許せないわ」

※か弱い乙女は数人のチンピラに勝てません。

？？？
「さて、いよいよアタシの学園生活が始まるわよ！」

彼女は大きな声で意気込みを叫んだ。

？？？

「目指さ！　愛しの王子様探し！　見つけるわよ、ゼッタイ！」

女性、甲斐姫（かいひめ）はとてもメルヘンチックな目標を宣言し、学園に向かった。

～恋ＢＡＲＡ学園・１－Ｄ～

月

「おはようございます、清正君、正則君」

清正

「ああ、おはようさん」

正則

「やっぱ月はいい子だな～、俺にまで挨拶をしてくれるぜ！」

詠

「お世辞に決まってるじゃない！　わかりなさいよ、そんくらい」

正則

「んだと？　月はそんな人じゃねえだろうが！！」

詠

「アンタに月の何がわかるのよ！」

三成
「朝からうるさい奴らだ」

大谷
「ヒヒヒッ！　やはり正則は愉悦よ」

七乃
「止めなくていいんですか？」

清正
「ああ、馬鹿だから仕方ない」

白蓮
「馬鹿だからって……（汗）」

霞
「ぐがぁ～……ｚｚｚ」

恋
「ｚｚｚ……」

朝からかなり自由な教室内である。

そこへ……

島津
「おまはんら席につきんしゃい」

副担任の島津が教室に入ってきて席に座るように呼びかけた。
皆はすぐに席につき、静かになった。

島津
「よかよか！　ほでな、今日から新しい担任がやってくんね！」

ざわ…ざわ…

華雄
「私の代わりか……」

七乃
「どんな気持ちですか？」

華雄
「不思議な気分だな」

島津
「ほな、入ってよか！」

そして扉が開き、男性が入ってきた。

１－Ｄに現れたのは……

島津
「ちゅーわけで今日からおまはんらの担任になる……」

氏康
「北条氏康ってんだ。まぁよろしくな、餓鬼ども」

氏康だった。

詠
「北条ってあの……それに」

月
「な、なんか怖そうな人ですね（汗）」

清正
「あの雰囲気……できるな」

霞
「ぐがぁ～……ｚｚｚ」

氏康の登場でさらにざわつくクラス。

そんな中……

華雄

「う、氏康さん！　どうして此処に？！」

華雄はかなり驚いていた。

氏康
「あぁ？　……オメェ、華雄か？」

華雄
「はい、お久しぶりです！」

氏康
「何でテメェが学生やってんだ？」

華雄
「いや、これには深い訳が……（汗）」

白蓮
「華雄、知り合いか？」

華雄が氏康と話していると白蓮が皆を代表して、二人の関係を聞いてみた。

華雄
「ああ、この方は私の高校の先輩なんだ」

月

「そ、そうだったんですか……」

正則
（あれ？　じゃあ何でコイツ学生やってんだ？）

ちなみに清正は既に月から聞いている。

華雄
「それで高校時代にいろいろとお世話になってな」

詠
「ちょっといい？」

華雄
「ん？」

詠
「アンタ、母校は？」

華雄
「さがみ高校だが……」

詠
「ッ！　思い出した！　“さがみの獅子”！」

清正
「さがみの獅子？」

詠
「かつて信長校長が学生時代に全国制覇を行おうとした時にそれを関東だけで阻止をした三大高校の一つ、さがみ高校。そしてその頂点にいたのが“さがみの獅子”よ」

氏康
「詳しいじゃねーか」

詠
「恋ＢＡＲＡに通ってたら嫌でも聞く話です」

月
「さがみの獅子って、本当にいたんですね」

大谷
「いやはや……まさか三大高校が揃う日がこようとは」

白蓮
「揃う？　あと、二人は誰だ？」

詠
「“かいの虎”武田信玄。“えちごの龍”上杉謙信よ」

正則
「何かよくわかんねえけど……強いって事はわかった」

氏康
「ま、昔の話だ。気にするなよ」

島津

「とりあえず、一回終わらせるね！」

１－Ｄの新しい担任は氏康となった。

～１－Ａ～

謙信
「きょうからあらたななかまになります」

甲斐姫
「甲斐姫です！　よろしくお願いします！」

此方では甲斐姫が新しいクラスに自己紹介を行っていた。

華琳
「あら貴方・・・・・」

甲斐姫
「え？　もしかして可愛いとか？／／／」

華琳
「逞しそうな脚ね」

甲斐姫
「ってそっちかい！！」

風
（ノリがいいですね～）

甲斐姫
「ちょっと！　いきなり失礼な事言わないでよ！」

春蘭
「何だと！　華琳さまはホントの事しか言わん！！」

甲斐姫
「そ・れ・が！　失礼なんでしょう！！」

春蘭
「貴様～！！　華琳さまの悪口は許さん！！」

かすが
「オイ！　貴様らいい加減にしろ！　謙信様が困らせるな！！」

秋蘭
「いや、その前にかすが先輩は教室に戻られた方が……（汗）」

かすが
「愛の前には屈しない！！」

稟
「……末期ですね」

政宗
「……末期だな」

いろいろと騒がしい教室である。
その後、一応謙信が止めた。

謙信
「ではあいているせきにつきなさい」

甲斐姫
「……はい」

謙信に指示され空いている席に向かう甲斐姫。

甲斐姫
（はぁ～……最悪の始まりだわ。こんなんじゃ此処も愛しの王子様には出会えないわね）

甲斐姫は朝に言った“愛しの王子様”に出会う目標を半分諦めていた。
そして席に座り、隣に挨拶をした。

甲斐姫
「あ、よろしくお願いします」

隣に座っていたのは……

小十郎
「ああ、よろしくな」

小十郎であった。

刹那……

甲斐姫
「ッ！！？／／／／（ズキュウウウウウン！！）」

恋のゴルゴ１３が甲斐姫の心を貫いた。

小十郎
「ん？　どうした？」

甲斐姫
「な、何でもないです！！／／／／」

小十郎
「そうか」

小十郎は少し会話をして、前を見た。

対する甲斐姫は……

甲斐姫
（遂に！　遂に見つけたわ！！／／／）

お目当ての王子様に出会える事が出来たようだ。

秋蘭
「……要注意だな」

そんな甲斐姫を見てた秋蘭は警戒するのであった。

次回に続く……

～おまけ～

霞
「ぐがぁ～……ッ！！」

月
「……霞ちゃん、どうしたの？」

先程まで気持ちよく寝ていた霞がガバッと起きて、険しい顔をしていた。

霞
「いやなんか……新しい敵さんが現れた気がすんねん」

月
「……はぁ（汗）」

乙女の感、恐るべし！！

第五十五話、北条の獅子と姫（後書き）

今回は氏康と甲斐姫の登場でした！

氏康カッコいいですよねえ～……氏政より年上だが（汗）

甲斐姫は即効で恋愛フラグを立たせました。

此処でキャラ紹介！

≪北条氏康≫
ＣＶ・石塚運昇

氏政の父
「さがみの獅子」の異名を持つ。一人称は「俺」。
煙管を愛飲し「ド阿呆」が口癖の毒舌家。
べらんめえ口調の不良中年といった雰囲気だが、生徒の気持ちで授業を行う為、なるべく早めに終わらせようとしている。
武田信玄、上杉謙信とはお互いに好敵手と認め合い、意気投合している。
強さは信玄、謙信レベル。
また、昔に甲斐姫を養子にしている。

≪甲斐姫≫
ＣＶ・鈴木真仁

常日頃から武芸を磨く戦姫。一人称は「アタシ」。

「ゼッタイ～」というのが口癖。
男勝りのじゃじゃ馬娘であるが、心は完全に乙女である。
だが、異性にはモテない。むしろ同性にモテる。
また、友達想いで自分や周りの人々の「今」を大切に思っている。

以上です！

次回で一応新キャラは終わります。

そして今回からリクエストを受け付けます！

リクエストは前の番外編？で書いた通りです！

それと、“ゲスト出演”はすいませんがお断りさせて頂きます。

それでは、また次回！

第五十六話、出雲の歌舞伎（前書き）

半兵衛
「歌はいいねえ。歌は……」

佐助
「パターン青！」

大谷
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……全て無に帰す」

第五十六話、出雲の歌舞伎

～あらすじ～

氏康、甲斐姫参戦！

～本願寺金融～

？？？

「ブァッハッハッ！　金と筋肉がいっぱいじゃあ！！」

此方は本願寺金融。
社長は本願寺（ほんがんじ）　顕如（けんにょ）
一円から数億円まで貸しに出来る金融会社。
しかし、金を借りる時は人を選ぶ為、全く回収に困らない。
ちなみに、同じ名前でスポーツジムを兼任している。

顕如
「フッフッフ……このままでは金に溺れてしまうわい」

？？？
「あきまへんよ顕如はん。そないな事やからすぐなくなってまうんやで」

顕如
「む、そういうものか」

顕如がかなり舞い上がっていると京都弁訛りの女性が注意をした。

???
「そんなもんどす。金は命より重いのやから」

顕如
「どこぞのギャンブル？（汗）」

???
「せやから大事に使いまひょうか」

顕如
「……まぁ阿国（おくに）はんの言うことじゃ。素直に従おう」

女性の名は阿国。
本願寺金融の秘書にして副社長。

阿国
「おおきに、顕如はん」

顕如
「阿国はんは拙僧の救いの女神じゃ！　阿国はんの言うことは絶対じゃ！」

阿国
「ふふふ、そんなん褒めんといてなぁ……ウチ、恥ずかしゅうなってもろた」

顕如
「ハッハッハ！」

顕如と阿国は仲良く話し合っていると……

顕如
「お、そうであった。阿国はん」

阿国
「はい、何でっしゃろ？」

顕如
「例の件は進んでおるか？」

顕如は突然、阿国に例の件の話をした。

その例の件とは……

阿国
「ああ、婿はんの話どすか？」

見合い話であった。

顕如
「うむ！　一応、拙僧が選んだ色男だが」

阿国
「あきまへんな。ウチの好み顔がいません」

顕如
「そうか……まぁ尤もこやつらは拙僧らの金目的じゃろ」

阿国
「あら、それをわかっといてウチに見せたんどすか？　いけずなお人やわぁ～」

顕如
「ハッハッハ！」

阿国
「そんないけずなお人に相談やけど……聞いてくれます？」

顕如
「当たり前じゃ！　何でも叶えてやるわ！」

阿国
「おおきに。そんで相談は……」

阿国は顕如にあるお願いをした。
そのお願いを聞いた顕如は……

顕如
「何と！！　それはホンマか！？」

かなり驚いていた。

阿国
「ホンマや。周りからしたらウチもその位、当たり前な事や」

顕如
「うーむ……まぁ阿国はんのお願いや。それはどうにかするしかないわい」

阿国
「感謝どす～顕如はん」

顕如
「ハッハッハ！　この本願寺顕如に任せるで、あ～る！」

どうやら阿国のお願いは大丈夫みたいだ。

阿国

「楽しみやわ～」

阿国はあるところに視線を移し、自分の感想を述べていた。

そして二日後……

～恋ＢＡＲＡ学園・校門前～

生徒１
「お、おい、あれ」

生徒２
「ああ……すげぇ美人だ」

生徒３
「大和撫子を表現した女性だぜ」

恋ＢＡＲＡ学園の朝、生徒達はいつも通っている校門前とは少し違う風景が伺えていた。

何故なら……

阿国
「此処が噂の恋ＢＡＲＡ学園どすか～……ふふふ」

和服を着た阿国が立っていたからだ。
お願いとは、恋ＢＡＲＡ学園の生徒にしてほしいという事だった。
阿国は歳からすれば、秀吉や慶次と同じ、二年生となる。

阿国
「此処ならウチの好みの婿はんが見つかるかもしれまへんな～」

阿国が恋ＢＡＲＡ学園が来た理由は自分のタイプを見つける事であった。

阿国
「ほな行きまひょか」

そして阿国は門をくぐり抜け、学園に向かった。

～２－Ｂ～

利家
「今日から一緒のクラスになる」

阿国
「阿国どす。みなさんよろしゅう」

生徒Ａ
「質問！　彼氏はいますか！？」

阿国
「今はおりまへん」

一同（男子限定）
「「「「「ヒャッホォォォイ！！」」」」」

官兵衛
「わかりやすいな」

慶次
「男なら普通だよ」

阿国の登場に尋常じゃないほどの盛り上がりを見せる男子一同。

一方の阿国は……

阿国
（……あの盛り上がっている中にはいまへんなぁ～）

男子を見定めていた。

阿国
（気になるんは……）

阿国はチラッと……

官兵衛
「ん？」

慶次
「お！　俺ら、見られてんじゃん！」

慶次と官兵衛を見定めた。

阿国
（あの二人はええ感じや。せやけど、手枷の人はなんや不幸そうやし、もう一人は自分の恋には鈍感そうやねぇ……）

阿国は二人の特徴を一瞬で見極めた。

利家
「オイオイ、あんまり迷惑掛けんなよ」

阿国
「かまへんよ、みなはんにあわせますんで」

慶次

「ま、よろしくな！」

阿国
「ええ」

こうして阿国は２－Ｂの一員になった。

～昼休み・廊下～

阿国
「ふぅ、なんやかんやであんま見つかりまへんなぁ……」

阿国は休み時間を使っていろいろと教室を回っていたが、自分の好みのタイプを見つけられなかった。

阿国
「今んとこは慶次はんと官兵衛はんくらいやわぁ～」

そんな事を言いながら曲がり角を曲がろうとした時……

阿国
「あ、すんまへん」

人とぶつかってしまった。

その人物は……

元就
「気をつけろ」

元就であった。

阿国
「……あら？」

元就
「……そこをどけ」

阿国
「あらあらまぁまぁ……」

阿国は元就を見た瞬間、全身を舐めまわすように見定めた。

阿国
「あんさん、彼女は？」

元就

「……何故、名を知らぬ下郎に教えなければならん」

阿国
「あ、すんまへんなぁ～。ウチは阿国っていいますねん。あんさんは？」

元就
「答える義理はない」

そう言って元就は阿国の前から去っていった。

阿国
「ふふふ……かわええなぁ～」

残された阿国は笑いながら後を追った。

～学食～

元就は料理を受け取り、席を探していたら……

冥琳
「遅かったな」

冥琳と遭遇した。

元就
「……」

冥琳
「どうした？」

元就
「貴様とは約束をしとらん」

冥琳
「そう言うな。席はとってある」

元就
「……フン」

元就は仕方なくと思いながら、冥琳と食事をする事にした。

しばらくして……

阿国
「こんなとこにいたんどすなぁ」

追ってきた阿国が元就の前に現れた。

冥琳
「元就、知り合いか？」

元就
「知らん」

阿国
「へぇ～、元就はんと言いますの」

元就
「……」

阿国
「前、失礼おしまいやす」

阿国は断りなく前の席に座った。

阿国
「ふふふ、さぁ元就はん。おせて頂きまんねん、元就はんには彼女はいまっしゃろか？」

元就
「先程も言ったがそれに答え……」

冥琳
「残念だが、私が彼女だ」

阿国
「あら、ホンマどすか？」

元就
「……何を言っている？」

冥琳
（此処は私に任せろ）

元就
「……」

元就は面倒になってきたので喋らないようにした。

冥琳
「本当だ」

阿国
「ホンマのホンマ？」

冥琳
「本当の本当だ」

阿国
「……」

冥琳
「……」

阿国
「そら残念どすな……ホンならウチはこれで」

阿国は立ち上がり、その場から去ろうとした。

阿国
「あ、忘れとった」

しかし、何かを思い出したようで振り返った。

阿国
「あんさん、お名前は？」

冥琳
「……冥琳だが」

阿国
「冥琳はん。一つ忠告を」

冥琳
「……何だ？」

阿国
「ウチに嘘は効かへんよ。ふふふ」

冥琳
「……」

阿国
「ほな、元就はん」

そう言って阿国は元就の元から去っていった。

冥琳
「……まさか、ライバルが現れるとは」

元就
「……くだらん」

こうして冥琳に新たなライバルが現れた。

次回に続く……

第五十六話、出雲の歌舞伎（後書き）

阿国さん登場！

そしてすぐさまフラグ！

こんなキャラもいいですね。

恒例のキャラ紹介！

≪阿国≫
ＣＶ・山崎和佳奈

流暢な京都弁が特徴的な女性。
服装は制服ではなく、いわゆる巫女装束。一人称は「ウチ」。
本願寺金融の秘書にして副社長。
相手の嘘や考え事がわかる千里眼の持ち主。
また、元就に惚れている。
強さは未知数だが、雪蓮とは互角に渡り合える。

こんな感じでお願いします。

さて、今回で新キャラは終了です。

次回はリクエスト作品です！

主役は月です！　お楽しみに！

リクエストも受け付けておりますのでよろしくお願いします。

それでは、また次回！

第五十七話、月の大胆作戦！（前書き）

正則
「しゃあ！　久しぶりだな！　俺と勝負しやがれ！！」

恋
「……？」

正則
「……まさか、俺がわからねえのか？（汗）」

恋
「……（コクッ）」

正則
「……チクショー！！」

清正
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぜ！」

第五十七話、月の大胆作戦！

～あらすじ～

阿国参戦！

～休日・商店街～

月
「……／／／」

休日。
現在、月は一人商店街にてベンチに座って誰かを待っていた。
その誰かとは……

三成
「すまない、待たせた」

三成であった。

月

「いえ、大丈夫です……／／／」

三成
「そうか、ならば行くぞ」

月
「はい……／／／」

そして二人は商店街へと向かった。
何故二人が一緒に行動しているのか？
それは昨日の出来事にあった。

～回想・１－Ｄ～

月
「へぅ……／／／」

清正
「へぅじゃない。いいか、明日は三成を誘ってデートするんだ」

月
「で、でもやっぱり恥ずかしいです／／／」

清正
「あのなぁ……」

放課後、１－Ｄの教室では月と清正は三成のデートの件について、話し合っていた。

清正
「だいたい、お前が今回のデートを切り出してきたんだろ？　既に半兵衛様には話を通している。後はお前が誘うだけだ」

月
「そうですけど……まだ早い気がします／／／」

清正
「早いもんかよ。寧ろ遅すぎる」

月
「う……（汗）」

清正
「ったく……月に然り、アイツに然りだな」

月
「ごめんなさい……」

清正の言い分に月は謝るしかなかった。

清正
「……仕方ない、今回の話はなしに」

？？？
「する必要はない！！」

清正
「ッ！？　誰だ！！」

清正が仕方なく中止にしようとしたらそれを阻止する声が聞こえた。
清正は辺りを見回したがその姿を確認出来ない。

すると……

月
「ッ！　上です！」

清正
「なッ！？」

？？？
「フハハハハ！！」

清正は上を見上げると、顔を隠した橙色の服を纏った奇人が張り付いていた。

清正
「だ、誰だテメェは？！」

？？？
「待て、まずやる事がある筈」

月
「やる事……ですか？（汗）」

？？？
「そうだ」

清正
「何だそれは？」

？？？
「……張り付いたはいいが、降りられなくなってしまった」

二人は壮大に転けた。
数分後、奇人を助け出す。

？？？
「気遣い、感謝する」

月
「は、はぁ～（汗）」

清正
「ところで、テメェは誰なんだ？」

サンデー毛利

「我が名はサンデー毛利！　愛と日輪の申し子なり！！」

サンデー毛利はポーズを取りながら自己紹介をする。

清正
「……月、知り合いか？」

月
「いえ、はじめましてです（汗）」

サンデー毛利
「何を言う！　常日頃から愛の化身の我を見ていたであろう！！」

月
「見ていません！！」

突如として現れたサンデー毛利により、混乱し始める清正と月。

サンデー毛利
「時に少女よ」

月
「は、はい……」

サンデー毛利
「何故貴様は愛に悩む？」

月
「ッ！？」

サンデー毛利
「我慢した愛など夢と同じ儚いものだ。しかし、それは努力次第で手に掴む事も可能なのだ」

月
「……」

サンデー毛利
「貴様ならばわかる筈だ！　貴様が今しなければならない事が！今動かなければならない事が！」

そしてサンデー毛利は力強く拳を上げ……

サンデー毛利
「未来は僕等の手の中！！」

某希望の船の台詞を言った。

月
「……わかりました！　いってきます！」

その言葉で勇気が湧いた月は勢いよく、教室を出て行った。

清正
「あんな月を見るの、はじめてかもな。アンタのおかげ……何処に行った？」

清正はお礼を言おうとしたが、既にそこにはサンデー毛利の姿がなかった。
その後、月は三成をデートに誘い、二つ返事で承諾をしてくれた。

～回想終了～

現在、月と三成は商店街のデパートを徘徊しながら、デートを楽しん……

三成
「……」

月
「……／／／」

でいるかはわからないが、とりあえずは二人の時間を過ごしていた。

そこへ……

???
（月、大丈夫か？）

月
（清正君、大丈夫だよ）

月の耳の小さなイヤホンから清正の声が聞こえてきた。
実は清正は昨日の時点で月にイヤホンを渡し、そこから指示ができるようにすると勧めてくれた。
月は有り難くそれを貰い受け、翌日耳に付けてきた。

???
（まずは俺の名前だが、今日のコードネームは“キョン”だ）

月
（キョン君……ですか？）

キョン
（そうだ。清正だと三成に感づかれるからな）

月
（いえ、その前に名前はどうにかなりませんか？）

キョン
（大丈夫だ、基本的変わらないから）

月
（はぁ……）

月は納得できていないが、此処は清正に任せる事にした。

キョン
（今日は半兵衛様のプレゼントを購入する事だが、それまでに三成の気を引かせるんだ）

月
（ですが……どうすれば？）

キョン
（まずは休憩がてらにレストランで食事をしろ）

月
（わかりました）

三成
「どうした、月？」

月
「い、いえ！　それよりも、この後レストランに行きませんか！？」

三成
「別に構わん」

月

「で、では行きましょう」

月は動揺しながらも近くのレストランに向かった。

～レストラン・蜀卓～

三成
「月」

月
「はい？」

三成
「半兵衛様のプレゼントはどうする？」

月
「みっちゃんは何がいいと思う？」

三成
「私か？　半兵衛様なら……」

キョン
（月）

月
（清……じゃなかった、キョン君どうされました？）

キョン
（先程、大事な事を話すのを忘れていた）

月
（大事な事……ですか？）

キョン
（ああ……今回の目標だ）

月
（目標……）

キョン
（まぁゴールみたいなものだ。そして今回の目標は……）

月
（目標は？）

キョン
（アイツとのキスだ）

月
（……）

月の思考回路は一時停止した。

そして……

月
「えええええええええええ！！！？／／／」

大変大きな声を出しながら驚いた。

三成
「どうした！？」

月
「い、いえ／／／　大丈夫です／／／」

三成はいきなりの咆哮に月を心配したが、月は我に戻り、顔を赤くしながら返事をした。

キョン
（いきなり大きな声を出すな！！　気付かれんだろ！！）

月
（だ、だって……）

キョン
（お前たちにはこのくらいが調度いい。それじゃ頑張れよ）

月
（ま、待って！）

月の言葉虚しく、キョンは連絡を遮断した。

三成
「月」

月
「は、はい／／／」

三成
「半兵衛様のプレゼントだが、腕時計などが喜ばれると思うのだが……どうだ？」

月
「で、ではそれでいきまちょう／／／」

緊張のあまり、噛んでしまう月。
その後、レストランを出た二人は時計屋に入り、何の発展もなく腕時計を購入した。

～夕方・商店街～

月
（ど、どうしよう……これだとこのまま解散してしまいます）

三成の目的は達成され、何も用事がなくなってしまった。
月は慌てて考えるが何も浮かばない。

三成
「では私は帰宅する。月はどうする？」

月
「え、えっと……私も帰ります」

三成
「そうか、では家まで送ろう」

月
「……はい」

結局何も浮かばなかった月は素直に帰宅する事にした。
三成はその見送りをする。
しかし、此処で奇跡が起こる！

まずは風が吹き……

月
「きゃッ！？」

その風が砂埃と一緒に月の目に入った。

三成
「大丈夫か？」

月
「す、少しゴミが目に入りました……」

三成
「見せてみろ」

月
「へ？」

すると三成は月の顔に近付いてきた。
距離は目と鼻の先である。

月
（み、みっちゃんの顔がこんなに／／／）

これだけで気絶ものなのだが……

月
「……へ、へくちッ！！」

此処で月がくしゃみをした。

そして……

三成
「ッ！？／／／」

月
「ッ！？／／／」

ヒャッハー！！　キスだぁー！！

月
「ご、ごめんなさい！！／／／」

三成
「い、いや、此方こそすまない／／／」

顔を真っ赤にしながら背ける二人。

そんな中、月は……

月
（ししししし、しちゃった！／／／　みっちゃんとしちゃった！！／／　……へぅ～／／／）

大変乱れていた。
そんな様子遠くから見る人影が見えた。

清正
「お互い真っ赤にしやがって……中学生かよ」

清正であった。
清正は二人が心配でイヤホンだけではなく、最初っから尾行していたのである。

清正
（ま、これで三成が意識すればいいがな……）

そんな事を思いながら二人を見つめる清正。
この後、二人は顔を赤くなりながら帰宅していった。

～おまけ～

月と三成の事故が起きていた恋ＢＡＲＡ学園の屋上にて……

サンデー毛利

「今日もまた、愛が我を呼んでいる。我は愛の使者！　サンデー毛利がなり！！」

阿国
（何してはるんでっしゃろ？　元就はん）

阿国のささやかな疑問。

第五十七話、月の大胆作戦！（後書き）

リクエスト第一話、紅玉様の作品でした。

上手く書けたがわかりません！（汗）

そして久々に登場、サンデー毛利！　一体何者なんだ……

さて、次回もリクエスト作品！

鬼を想う一人の教師の話です！

それでは、また次回！

第五十八話、ある教師にて……（前書き）

サ●シ
「博士！　ポケモ●ちょうだい！！」

氏康
「……ド阿呆が」

甲斐姫
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語！　ゼッタイ見なさいよ！！」

第五十八話、ある教師にて……

～あらすじ～

月、キスｇｅｔ！！

～放課後・職員室～

紫苑
「お疲れ様です」

祭
「お疲れさん」

孫市
「……ああ」

恋ＢＡＲＡ学園の放課後。
教師陣が続々と職員室に現れ、それぞれの机に座った。
紫苑達も皆に挨拶をしながら座る。
しかし、ある人物はずっと座り込んで溜め息をついていた。

桔梗
「はぁ～……」

桔梗である。
桔梗は朝からこのような感じで、授業なども元気なくただ淡々とこなすだけであった。

紫苑
「……どうしたんでしょうか？」

祭
「朝からあんな感じでは儂らも元気がなくなるわい」

孫市
「珍しいといえば珍しいな」

紫苑達も桔梗の元気のなさを心配していた。

紫苑
「いつからあんな感じなんでしょうか？」

祭
「だが、前に飲みに行った時は普通であったぞ」

孫市
「そうか？　旅行から帰ってきた時からあんな感じだったぞ」

祭

「なんと!?」

紫苑
「きっとわたくし達に心配されないようにしたんでしょうが……」

孫市
「此処で見られては本末転倒だな」

どうやら桔梗は旅行後からあんな感じらしい。
しかし、原因まではわからずにいた。

???
「あれは“恋”の悩みでございまする」

紫苑
「え?」

すると後ろから、声が聞こえてきた。

その声の主は……

祭
「おお!　まつ先生」

まつ
「お疲れ様です。皆様」

まつであった。

孫市
「一体どういう事だ？」

まつ
「そのままの意味でございまする。桔梗様の目は愛しい人を思う目。これは間違いないでしょう」

紫苑
「なら……」

祭
「桔梗は元親の事を思っておるのか？」

まつ
「きっとその通りでございまする」

まつの推測では桔梗は恋に悩み続けていると判断した。

紫苑
「確かに元気がないのは元親君に行動を移せていなかったら……」

祭
「心の奥がモヤモヤして気分が優れないな」

孫市
「合点があったな」

祭
「しかし、桔梗も情けないのぅ。そのくらいで悩みよって」

紫苑
「仕方ないわ。彼女自身の恋はこれが初めてですから」

まつ
「ですが、このままだといずれは……」

紫苑
「……わたくしにいい考えがあります」

祭
「ほぅ」

孫市
「その策とは？」

紫苑
「皆さん、耳を貸してください」

祭達は紫苑に近付いて策を聞いた。

祭

「なるほどのぅ。それならば距離も縮まるわ」

孫市
「ならば元親の事は我がやろう」

まつ
「このまつめも御協力致します」

紫苑
「それでは実行は明日の放課後にてよろしくお願い致します」

一同
「「「「応ッ！！」」」」

そうして紫苑達は一時退散をした。

～翌日・放課後～

桔梗
「はぁ～……」

翌日、相変わらず元気のない桔梗。
これでもかというくらいの溜め息である。

桔梗

（クソ……この儂がこのようでは示しがつかん。しかし、どうしても元親の事が気になりおって物事に集中できん）

どうやら本格的に鬱になりかけている桔梗。

桔梗
「どうしたらよいものか……」

一応は自分で考えてみたがこれが一切。

このまま心のモヤモヤがとれないでいると……

紫苑
「桔梗」

桔梗
「ん？　紫苑か。どうした？」

後ろから紫苑が声をかけてきた。

紫苑
「桔梗はこの後、何か用事はありますか？」

桔梗

「……特にはないが」

紫苑
「なら調度良かったわ。少し頼み事をしてもいいかしら？」

桔梗
「別に構わぬ」

紫苑
「ありがとう。頼み事は用具室の片付けをやって欲しいの」

桔梗
「生徒ではダメなのか？」

紫苑
「勿論生徒にもやらせるけど、彼処にはかなり大切なものがあるからその見張りの意味でも行って欲しいのよ」

桔梗
「そうか。それならば行くとしよう」

紫苑
「ふふふ、ありがとう」

桔梗は頼まれた用事の為用具室に向かった。

～用具室～

数分後、用具室ついた桔梗は扉を開け、部屋に入った。

???

「お、やっと来たか」

するとそこには先客がいた。

桔梗

「ッ！？　ち、長曾我部？！」

元親

「あん？　副先公じゃねえか」

その先客は元親であった。

桔梗

「な、何故主が此処に！？／／／」

元親

「それはさや……じゃなかった、孫市が此処の整理をお願いされたからな」

桔梗

（……は！　まさか！？）

桔梗は紫苑と孫市の組み合わせに疑問を持ち、ある答えを導き出した。

だが、時すでに遅し……

桔梗
「ッ！　扉が開かん！」

元親
「んだと？」

桔梗が外に出ようとしたら外から鍵を閉められ、出られなくなってしまった。

元親
「こっちから開けられねえのか？」

桔梗
「ダメだ。此処の鍵は壊れていて此方からは開けられんのだ」

元親
「チッ！　ならぶっ壊すか！」

桔梗

「それも無駄よ。この学園は北条建設が手掛けた学園。校長の全力攻撃にも耐えられるようにしておるのだ」

元親
「そんなすげぇのに鍵は壊れるんだな」

桔梗
「北条建設ではよくある事だ」

二人は唖然としていたが……

桔梗
（紫苑に嵌められたな。まさか長曾我部と二人っきりにさせるとは……ん？　二人っきり？　……ッ！！／／／）

桔梗はよくよく考え、元親と二人っきりというワードで我に帰り、やや舞い上がっていた。

元親
「ま、此処で慌てても仕方ねえか。誰かが来るまで待つとしようか」

桔梗
「あ、ああ……／／／」

二人は用具室の中で誰かが来るのを待つ事しか出来なかった。

元親
「……」

桔梗
「……／／／」

しかし、二人の間には会話がなく、ただ時間が過ぎていくだけであった。

桔梗
（ま、マズい！？　此処はある意味で絶好の場所だ！／／／　此処でのチャンス活かさなければ意味がない！／／／）

しばらくして桔梗が腹をくくり、元親に話しかけた。

桔梗
「ち、長曾我部／／／」

元親
「あ？」

桔梗

「お主は……一体誰が好きなんだ？／／／」

いきなり爆弾を放り込む桔梗。

桔梗
（しまったぁぁあ！！　いきなり何を言っておるのだ、儂は！？／／／）

そしてすぐに我に帰り、とんでもない発言を後悔する桔梗。

元親
「……前にもそんな質問されたな」

桔梗
「……何と？」

元親
「そん時も言ったんだが、俺はみんな好きだぜ」

桔梗
（いや、そういう事では……）

元親
「わかっているさ。こんな答えじゃあダメな事くらいな」

桔梗

「……」

元親
「だけど、俺はこんな答え方しかできない不器用な人間なんだよ。だから、みんなを愛する。俺を慕ってくれる仲間の為に……な」

桔梗
（……そうだったな。儂はこういう元親が好きだ。だから惚れたのだ）

元親
「ワリィな。変な答え方しか出来なくて」

桔梗
「……」

元親
「副先公？」

桔梗
「桔梗だ」

元親
「……は？」

桔梗
「儂の名前は桔梗だと言っておる。副先公ではない」

元親
「……そいつは悪かったな。桔梗さんよ」

桔梗
「……ククッ」

元親
「あん？」

桔梗
「アーッハッハッハ！！　はぁーすっきりしたわい！」

どうやら心のモヤモヤがとれた桔梗。

すると扉が開き……

紫苑
「申し訳ありません」

まつ
「大丈夫ですか？」

紫苑とまつが入ってきた。

元親
「おぅ。なんとか大丈夫だぜ」

桔梗

「儂も問題ない」

紫苑
「そうですか。では、もう遅いですので此処の整理は後日で構いませんので二人はお帰りになさってください」

元親
「お！　そうかい。なら、甘えさせて貰うぜ」

そう言って元親は帰宅した。

桔梗
「紫苑。それにまつ先生」

紫苑
「はい？」

まつ
「何でしょう？」

桔梗
「言いたい事は山ほどあるが、一つだけ言っておこう」

紫苑
「……」

桔梗
「感謝してる」

一言言い残し、桔梗も帰宅していった。

紫苑
「ふふふ……成功ですね」

まつ
「あの顔は決心なされた顔ですね」

祭
「全く困った奴よの」

孫市
「……」

桔梗が帰った後、隠れていた祭と孫市が姿を現した。

紫苑
「これで少しは正直になれば良いのですが」

祭
「まぁそれは桔梗次第よ」

そう言って教師陣も解散していった。
次の日、そこには元気よく授業をする桔梗の姿が見られた。

次回に続く……

第五十八話、ある教師にて……（後書き）

今回の作品、S様のリクエストでした。

相変わらず上手く書けなくて申し訳ありません（泣）

そして桔梗のキャラが変わっていますね（汗）

まぁこんな桔梗も悪くないと言い聞かせる自分がいる！　……すんません

さてさて、そんなこんなでこの作品も百話までいきました！！

皆様の応援があってこそです！　本当にありがとうございます！

あと、引き続きリクエストを募集しています！

さぁ次回もリクエスト作品！

小蓮が特別な力に目覚める？

それでは、また次回！

第五十九話、魔法少女シャオシャオ！？（前書き）

長政
「ウム……」

白蓮
「ん？　どうしたんですか？」

長政
「いや、何故か赤い髪を見ると“クリス”と呼びたくなるのだが……」

白蓮
「そのネタ、マニアックすぎます（汗）」

左近
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、見てやってください」

第五十九話、魔法少女シャオシャオ！？

～あらすじ～

元親の意志を知る事が出来た桔梗。

～街中～

小蓮
「ふんふふ～ん♪」

恋ＢＡＲＡ学園の休日。
その学園から近い商店街の街中。
今回の主人公、小蓮が鼻歌を歌いながら歩いていた。

小蓮
「今日は買い物の日。お鶴ちゃんは忙しいからシャオだけ～」

少し落ち込んだ雰囲気を見せながらも自分の好きな事が出来る日とあって、テンションはかなり高い。

このまま普通の休日を過ごす……

？？？
「待ちな小娘！！」

事はなかった。

小蓮
「誰！？」

？？？
「ある時は御大将。ある時は不可能を可能にする男。またある時は鼻毛真拳伝承者……しかしその正体は！」

すると地面から勢いよく仮面を付けた迷彩服を着た男が姿を現した。

天狐仮面
「人呼んで天狐仮面！！　只今見参！」

小蓮
「……何してんの、佐助？（汗）」

天狐仮面
「何の事だ？　俺様は天狐仮面。それ以上でもそれ以下でもない」

小蓮
「……あっそ」

天狐仮面
「そこ！　呆れるな！」

突如現れた天狐仮面。
小蓮は見た事ある服装であったが余りにもノリノリな天狐仮面に少し呆れていた。

天狐仮面
「そんな事はいい！　悪いが貴様の命を貰い受ける！！」

小蓮
「な、何よそれ！？　何でそんなことになるわけ！？」

天狐仮面
「貴様が知る必要はない！　死ねぇぇぇ！！」

すると天狐仮面は手に持っていた大手手裏剣を小蓮に投げつけた。

小蓮
「キャアァァ！？」

小蓮はいきなりの事もあって避けられず目を瞑ってしまった。

しかし……

？？？
「ハァ！！」

またもや突如として全身橙色の服を着た奇人が現れた。

天狐仮面
「ッ！　何者だ！？」

サンデー毛利
「我が名はサンデー毛利！！　愛の体現者なりィ！！」

小蓮
「もう！　何なのよ！？　厄日？　今日シャオの厄日なの！？」

サンデー毛利の登場でブチギレする小蓮。

サンデー毛利
「そこの小娘！？」

小蓮
「……何よ？」

サンデー毛利
「もし助かりたいのならば自分自身の秘めたる力を解放せよ！！」

小蓮
「秘めたる……力？」

サンデー毛利
「そうだ！　そしてその力を持って世界の混沌を滅ぼすのだ！」

天狐仮面
「させるか！　ハァア！！」

サンデー毛利は小蓮の中に秘めたる力があると説明してくれた。
しかし、それをせんと天狐仮面が再び大手手裏剣を飛ばしてきた。

サンデー毛利
「さぁ！　今こそ解放するがいい！！」

小蓮
「もう、やればいいんでしょ！！　……メイクアップ！！」

小蓮はやけになりながら大声でそれっぽい事を言った。

すると……

小蓮
「え？　何これ？」

天狐仮面
「うわッ！？　何だこの光は？！」

サンデー毛利
「やはり我の目に狂いはなかった！！」

小蓮の全身が輝き始めた。
天狐仮面はいきなり輝き始めた小蓮によって大手手裏剣を外し、サンデー毛利は何か確信したかのような発言をした。

やがて視界が良好になると……

小蓮
「ふえ？　何これ？」

小蓮は自分自身の服装が変わり、アニメなどで見る魔女っ子の服装に変身していた。

サンデー毛利
「それが秘めたる力なり！　今日から貴様は“魔法少女シャオシャオ”となるのだ！！」

シャオシャオ
「ええ！？　シャオ、魔法が使えるの！？」

サンデー毛利

「そうだ！」

天狐仮面

「クソ、任務失敗か……だが！　貴様の命を奪えば問題ない！！」

シャオシャオ

「そんな事させないもん！！」

そしてシャオシャオは手を前に出し……

シャオシャオ

「シャオ魔法“遠くに行っちゃえ！”」

全く魔法らしくない呪文を唱えた。

すると手から暴風が吹かれ、天狐仮面を襲った。

天狐仮面

「なん……だと……！」

天狐仮面はその魔法を受けてしまい、遠くの彼方へと飛ばされてしまった。

シャオシャオ

「スゴい……本当に魔法が使えちゃった」

サンデー毛利
「見事……と言いたいところだが、貴様はまだその力を使いこなせておらん」

シャオシャオ
「へ？　そうなの？」

サンデー毛利
「その力を使いこなしたいのならば我と共に来るがいい。しかし、その道は険しい棘道だ」

シャオシャオ
「……ま、乗りかかった船だし、このままの方が面白くなりそうだから……いいよ！」

サンデー毛利
「フッ……ではゆくぞ！」

こうして魔法少女シャオシャオの冒険は始まった。

しかし、サンデー毛利の言うとおりその冒険は棘道だった……

次々と現れる敵。

天海
「ンフフ～……私に勝てますかな？」

マダオ
「この世を破滅へと誘う……ヒヒッ！　愉快愉快」

シャオシャオ
「そんな事はさせないもん！！」

友との闘い。

シャオシャオ
「どうして……どうしてなのお鶴ちゃん！？」

鶴姫
「わたし見ちゃったの……この世界の未来を。だからわたしはこの世界を粛正するの！」

シャオシャオ
「それはエゴだよ！」

師との別れ……

サンデー毛利
「我は……ここまでだ」

シャオシャオ
「いや！　こんなところでお別れなんていや！」

サンデー毛利
「我が名は……サンデー……」

シャオシャオ
「ッ！　いやぁぁぁあ！！」

心も身体も疲れたシャオシャオにも一筋の光……

星華蝶
「我ら華蝶仮面、魔法少女シャオシャオを助太刀致す！！」

シャオシャオ
「ありがと、星ちゃん！！」

星華蝶
「星ではない！　星華蝶だ！」

そして最愛なる風……

天海
「何者ですかアナタは？」

？？？
「……」

シャオシャオ
「漆黒の翼さん！？」

漆黒の翼
「……」

様々な困難を乗り越え、シャオシャオは最強の敵“久秀”に挑む！

久秀
「卿なぞ……私の相手にならぬ」

シャオシャオ
「シャオは……この世界を救ってみせる！！」

久秀
「くだらぬ戯れ言よ」

シャオシャオ
「いっけえええ！！」

果たしてシャオシャオはこの世界を救えるのか！？

“魔法少女シャオシャオ”……連載開始！！

～小蓮の部屋～

小蓮
「か、完璧だわ……」

小蓮は自分の書いた小説を見て絶賛していた。

小蓮
「ノリで書いたとはいえ此処まで完璧な小説が書けるなんて……
自分の才能が怖いわ」

そして小蓮は立ち上がり……

小蓮
「これを出版社に見せれば見逃さないわね！」

勢いよく部屋を出て行った。

余談だが、この小説が世間の目に映らなかったのは言うまでもない
……

第五十九話、魔法少女シャオシャオ！？（後書き）

今回の作品、龍の骨様からリクエストを頂きました。

今回が一番悪乗りした作品になったと思います。

そしてサンデー毛利の使い勝手の良さにビックリしています（汗）

さて、次回もリクエストです！

華琳がある悩みを抱えて政宗に相談します。

それでは、また次回！

第六十話、怪盗鍋奉行仮面参上！（前書き）

小蓮
「ねぇねぇ」

清正
「ん？　どした？」

小蓮
「空鍋ってどう思ってる？」

清正
「……現実逃避するな（汗）」

半蔵
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……刮目せよ」

第六十話、怪盗鍋奉行仮面参上！

～あらすじ～

小蓮が小説を書いている日の休日……

～華琳の部屋～

華琳
「よく来たわね政宗」

政宗
「……正確には拉致られたんだがな」

華琳
「それはどうでもいいわ」

政宗
「よくねえから！　犯罪だからね、犯罪！」

此処は華琳邸の華琳部屋。
そこにいたのは華琳率いる華琳隊（春蘭、秋蘭、桂花、風、流琉、いつき）と拉致られた政宗。
ちなみに政宗は朝起きた時には既にこの部屋だった。

政宗
「で、なんか俺にｂｕｓｉｎｅｓｓがあんのか？」

華琳
「ええ、あるわ。……とりあえずアナタ達は部屋の外へ」

華琳隊
「「「「はっ！！（んだ！！）」」」」

すぐさま部屋から出ていく華琳隊。
そして部屋には政宗と華琳だけになった。

華琳
「さて……これで二人っきりになったわね」

政宗
「はやく言ってくれ。俺はこの後、小十郎の畑仕事をやんなきゃいけねえんだ」

華琳
「……その小十郎の畑に用があるの」

政宗
「Ｈａ？」

華琳
「小十郎の……野菜を貰いたいのよ」

政宗
「……一体どういう事だ？」

華琳がいきなりのお願い事に戸惑ってしまった。

華琳
「……のよ／／／」

政宗
「Ａｈ？　なんつった？」

華琳
「だから……なのよ／／／」

政宗
「だから聞こえねえっての」

華琳
「だから！！／／／　便秘なのよ！！／／／　何度も何度も言わせないでよ！／／／（怒）」

政宗
「……ｓｏｒｒｙ」

華琳の理由に心の底から謝る政宗。
しかし、此処である疑問が出てきた。

政宗
「つーか、俺じゃなくて小十郎に直接言わねえんだ？」

政宗は何故小十郎ではなく、自分に頼み込んだのかわからなかった。

華琳
「アナタはまず女性の気持ちを学びなさい（怒）」

政宗
「……？」

華琳
「ハァ～……」

政宗の鈍感に溜め息一つ。

華琳
「まぁいいわ。とりあえず、小十郎のところに案内してくれるかしら？」

政宗
「ＯＫ。別に問題ねえぜ」

華琳

「感謝するわ。なら早く行きましょう」

こうして華琳率いる華琳隊と政宗は小十郎がいる畑場に向かうのであった。

これが波乱の幕開けとも知らずに……

～畑場～

小十郎
「なん…だと…！？」

此処は小十郎が趣味で畑仕事を行っている庭。
いつも通りに作業服に着替え、いつも通りに仕事を行う予定でいた。
だが小十郎は畑場に来た瞬間、それは絶望へと変わった。

そこへ……

政宗
「遅れてすまねえ、小十郎」

政宗達が現れた。

政宗
「遅れて言うのも何だがちっとお願いしたい事が……」

小十郎
「……」

政宗
「小十郎？」

政宗は小十郎に頼み事を言おうとしたが、小十郎の様子がおかしかった。

政宗は何が起きたのかわからずに畑場に目をやると……

政宗
「ッ！？　……これはどういう事だ？」

そこには野菜が一つもなく荒らされた形跡だけがある畑場だった。

春蘭
「な、何だ？」

秋蘭
「これは一体……」

流琉

「酷い……」

風
「あれま～」

いつき
「あぁー！　大事な畑様が！」

その光景に華琳隊はただただ唖然とするしかなかった。

政宗
「小十郎、一体何があった？」

小十郎
「朝方に畑場を見たら……このような物と一緒に荒らされておりました」

そう言って小十郎はある紙を政宗に渡した。

政宗
「これは？」

政宗は紙を預かり、中身を見た。

そこに書かれていたのは……

【野菜はこの怪盗鍋奉行仮面が頂いた！　ｂｙ怪盗鍋奉行仮面と天海】

とても奇妙な怪文書だった。

政宗
「……何だこれ？」

小十郎
「怪盗鍋奉行仮面……最近現れた新鮮な野菜だけを奪う輩です」

政宗
「詳しいな」

小十郎
「全国新鮮野菜愛好会でレベル５まで繰り上がった最重要危険人物でもあります」

政宗
「オイィィイ！！　いけない領域までいっちゃったよ、この人！」

ちなみに会長はいつき。

秋蘭

「時に小十郎よ」

小十郎
「何だ？」

秋蘭
「小十郎は怒っていないのか？」

小十郎
「……そんなもん」

すると小十郎は片手に持っていた鍬を両手に持ち替え……

小十郎
「怒るに……決まってんだろうがぁぁぁぁあ！！！」

バキッと鍬を折りながら怒りをあらわにした。

秋蘭
「こ、小十郎？！」

小十郎
「こちとら今日までいろんな野菜に愛情を送り込んできたんだ。嵐の日も雷の日も共に過ごしそして立派に育った……それが１日にして跡形もなく消え去った。更にはふざけた怪文書を置かれて“盗みました”と堂々と窃盗を認める始末。これが許せるか？　否ぁぁ

ぁあ！　許さん！！（怒）」

小十郎は長々と自分の訴えを説明した。

政宗
「あ～あ、あれは本気でキレてんな……つーわけで悪いんだが野菜はないって事だぜ」

華琳
「……」

政宗
「……Ａｈ？」

春蘭
「華琳さま？」

政宗は華琳に野菜がない事を言ったが、華琳は返事もなくただ沈黙を守っていた。

すると……

華琳
「毎日毎日この腹痛に襲われ、いつもいつもストレスが溜まる一方の中で唯一見えた一筋の光。だがそれすらも閉ざされた。こんな屈辱ははじめてよ。天は私に喧嘩を売っているのかしら？　これほど

までに私をコケにしたいのかしら？　上等だわ、この喧嘩買ってあげましょう」

華琳は自らの殺気を出しながらこちらも怒りをあらわにしていた。

春蘭
「こ、このカリスマは！？」

秋蘭
「かつて中学生自体に秀吉先輩に会長決定戦を挑んだ時と同じカリスマか！　いや、それ以上！？」

桂花
「華琳さま……どうやら本気のようね」

政宗
「いやいやいや！　間違ってるからね！　間違ったカリスマだからね！！」

華琳のカリスマに政宗はツッコミを入れた。

そんな事を気にせずに小十郎と華琳は向き合い……

小十郎
「……どうやら目的は一緒みてぇだな」

華琳
「そのようね。私が覇道の為、その力……貸しなさい」

小十郎
「俺は政宗様の右目だが……今回限りは協力してやる」

華琳
「感謝するわ。そして犯人が捕まえた時には……」

小十郎
「そいつを……」

二人
「「血祭りじゃぁぁぁあ！！！」」

二人は般若のような顔をしていた。

政宗
「……ｈａｐｐｙな奴らだな」

その光景に政宗はただただ呆れるだけであった。

～夜中・華琳宅～

華琳と小十郎が協力したその日の真夜中。

小十郎
「怪盗ー……」

華琳
「狩りじゃぁぁぁあ！！」

現在、華琳宅の中庭では殺気立った二人が大声で叫んでいた。

そんな二人の周りには……

政宗
「何でこうなんだよ……」

春蘭
「いい加減に諦めろ政宗！」

桂花
「そうよ！！」

秋蘭
「小十郎の頼み事だからな」

流琉
「野菜を盗むなんて許せません！」

いつき

「そうだべ！　必ず成敗するべ！」

季衣
「うへ～……ボクもやるの？」

風
「ぐぅ～ＺＺＺ」

稟
「風、起きてください」

霞
「よっしゃ！　怪盗狩りは任しとき！」

星
「フッ……面白くなってきたな」

甲斐姫
「え？　え？　なにこれ？」

政宗を筆頭に華琳隊や小十郎を好む人らが集まっていた。

小十郎
「いいかテメェら！　これは戦争だ！」

華琳
「既にこの家の周りにはＭＤ－８２Ｂをたくさん仕掛けてある！
気を抜いたら死と思え！！」

政宗
「何してくれてんじゃテメェらぁぁぁぁあ！！？」

※ＭＤ－８２Ｂ
もっともカンボジアに多い地雷のひとつである。

甲斐姫
「ちょ、ちょっと！　なんでそんな危ない目にあわないといけないのよ！？」

華琳
「言った筈よ。これは既に戦争よ」

甲斐姫
「いやいやいや！　ただ泥棒を捕まえるだけでしょ！？」

華琳
「誰が捕まえろと言ったの？　私は殺せと言ってるのよ」

甲斐姫
「もっとできるかぁぁあ！！」

甲斐姫は華琳に食い付いたが……

小十郎

「甲斐よ」

甲斐姫
「ッ！／／／　な、何、小十郎？／／／」

甲斐とは甲斐姫のあだ名である。

小十郎
「俺はどうしてもこの犯人が許せねぇんだ……だから」

そう言って小十郎は甲斐姫の肩を叩き……

小十郎
「俺に協力をしてくれ」

熱い眼差しで甲斐姫を説得した。

甲斐姫
「は、はい……／／／」

そんな小十郎の頼みに甲斐姫は顔を赤くしながら承諾した。

甲斐姫
「必ず捕まえるわよ！！　ゼッタイ！！」

政宗
「……まぁいいか。作戦は？」

華琳
「それも任せなさい。桂花、説明を」

桂花
「はっ！！」

桂花の説明が始まる。

桂花
「まずは囮となる野菜をこの中庭の真ん中に置く。次にそれぞれの配置に皆が隠れて怪盗鍋奉行仮面が姿を現すまで待機する。そして怪盗鍋奉行仮面が現れたら皆で捕まえる……仮に逃げようともこの敷地内は地雷だらけ。逃げ場なんてないわ」

政宗
「ＯＫ、そんじゃあ始めるか」

華琳
「各々は配置につけ！！」

一同
「「「「はっ！！」」」」

こうして作戦は実行された。

数分後……

政宗
「……」

小十郎
「……」

華琳
「……」

作戦が実行されて数分が経つが一向に姿を現さない。

華琳
「現れないわね……」

小十郎
「まさかこの作戦に気付いたのか？」

政宗
「……なぁ」

華琳

「何かしら？」

政宗
「よくよく考えたらあの野菜、かなりｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓじゃねぇのか？　こんな中庭に綺麗に籠に入れられた野菜なんて」

華琳
「……確かに怪しいわね」

小十郎
「お見事です、政宗様」

政宗
（嬉しくねぇ……）

政宗の言葉にこの作戦の無意味さを知った華琳は桂花に無線を掛け……

華琳
「こちら華琳こちら華琳、この作戦は中断する。桂花は至急野菜を回収しなさい」

桂花
“こちら桂花、了解”

すぐさま桂花に野菜を回収するように指示した。

桂花は言われた通りに回収しようとしたが……

桂花
「きゃぁぁぁぁあ！！」

爆発音と共に桂花の悲鳴が木霊した。

政宗
「……テメェら」

小十郎
「……はっ」

華琳
「……何かしら？」

政宗
「まさかとは思うが地雷を設置した場所を忘れてなんかいねぇよな？」

二人
「「……」」

政宗
「何してんじゃボケぇぇぇぇえ！！」

政宗は壮大にツッコム。

政宗
「どうすんだよこの状況!!　これじゃあ作戦もクソもねぇだろ!!」

華琳
「……あ」

小十郎
「どうした?」

華琳
「明日朝に配達が来るわ。配達人が爆発するわね」

政宗
「それ言ってる状況じゃねぇだろ!!（怒）」

こんな状況が続いていると……

???
「な～っべっべ!　な～っべっべ!」

政宗
「ッ!　何だ!?」

突如として笑い声が響いた。
その笑い声の方に振り向くと……

？？？
「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。野菜を食せと鍋が呼ぶ！」

華琳宅の屋上でひょっとこのお面を付けた小柄な男性が高笑いをしていた。

小十郎
「何者だッ！？」

怪盗鍋奉行仮面
「鍋の名は怪盗鍋奉行仮面！！　通称“怪鍋”！」

天海
「ンフフ～……私、天海もおります」

“盗食鍋男”
怪盗鍋奉行仮面……怪現！

政宗
（最悪だぁぁあ！！　最悪のタイミングで現れやがったぁぁあ！！　しかもアイツ小早川じゃねぇかぁぁあ！！）

政宗は心の中で絶叫していた。

小十郎
「貴様が怪盗鍋奉行仮面か！？」

怪鍋
「そうだ！」

華琳
「ちょうどいいわ。今貴方を血祭りにあげようとしていたところよ」

怪鍋
「そうはいかない！　鍋は世界中の新鮮な野菜を食すまでは死ぬわけにはいかん！」

華琳
「ならばその野菜の為に死になさい……皆の者、かかれぇ！！」

華琳の号令で隠れていた皆が一斉に姿を現した。

秋蘭
「フッ！！」

最初に秋蘭が二人を狙って矢を放った。

怪鍋
「いくぞ天海よ！」

天海
「お任せください」

怪鍋と天海は矢を回避し、屋上から飛び降りた。

春蘭
「貰ったぁぁぁあ！！」

霞
「しゃらおらぁぁぁあ！！」

甲斐姫
「はぁぁぁあ！！」

飛び降りた先には春蘭、霞、甲斐姫がおり、すぐさま攻撃を行っていたが……

天海
「……甘いです」

三人

「「「へっ？」」」

天海がそう言うと、三人の足元からカチッと鳴る。

そして……

三人

「「「ぎゃぁぁぁあ！！」」」

爆発と一緒に三人を吹き飛ばした。

怪鍋

「よし！　このまま一気に野菜を貰いにいくぞ！！」

天海

「わかりました……」

怪鍋は中庭にある野菜を頂く為に一気に駆けていった。

いつき

「そうはさせねぇべ！　いくべ、流琉ちゃん！　季衣ちゃん！」

流琉

「わかった！　てやぁぁぁあ！！」

季衣
「おうりゃぁぁぁあ！！」

その野菜の前にいつき達が立ちはだかった。
そして流琉と季衣が互いの武器を二人に目掛けて攻撃をした。

怪鍋
「天海！」

天海
「ンフフ～……わかっております」

これに対し天海は……

天海
「おゆきなさい！」

怪鍋
「ほあちゃぁぁぁあ！！」

鎌に怪鍋を乗せ、天高く飛ばした。
そして天海自身も二人の攻撃を避ける。

流琉
「嘘ッ！？」

いつき
「まだだべ！　雪ころ……」

いつきは怪鍋に必殺技を繰り出そうとしたが……

天海
「足元がお留守ですよ」

天海が忠告したと同時にいつきの足元から何かを踏む音が聞こえ……

三人
「「「うぎゃぁぁぁあ！！」」」

爆発した。

天海
「他愛もないですね……さて私も」

？？？

「何処に行くつもりだ？」

天海は怪鍋の目的である野菜に向かおうとしたが、ある者に阻まれてしまった。

その人物は……

天海
「おやおや……貴方もいらしていたんですか」

星華蝶
「闇の影あるところに華蝶の姿あり……よもや忘れたわけではない筈だ」

華蝶仮面だった。

天海
「ンフフ～……これもいい機会です。貴方にはこの世から退場して貰いましょう」

星華蝶
「それは此方の台詞だッ！　ハァァァア！！」

こうして天海と華蝶仮面の熱き闘いが始まった。

一方の怪鍋は……

怪鍋
「フッ！」

野菜の籠の目の前で見事に着地した。

怪鍋
「これでまた鍋の元に野菜が集まる……」

そしてその籠を手に持つ。

しかし……

稟
「そこまでです」

風
「動かないでくださ～い」

怪鍋
「……」

その背後に稟と風が現れた。

稟
「既に貴方の周りには地雷がたくさんあります」

風
「ジャンプして避けても此方には秋蘭さんがいらっしゃいますので～」

秋蘭
「王手だな」

そこに秋蘭も駆けつけ、怪鍋は絶体絶命の状況に立たされたが……

怪鍋
「な～っべっべっべ！　そんなものでこの怪鍋を止めたつもりか！」

稟
「止めたつもりはありません。既に止めました」

風
「最後の悪あがきですか～？」

怪鍋
「フッ……ならばこれを受けるがいい！！」

そう言って怪鍋はジャンプをし……

怪鍋
「光魔法！　カッコいいポーズ！！」

空中でカッコいいポーズをとった。
その瞬間、怪鍋の背後からまばゆい光が放たれた。

稟
「ッ！　まぶしい！？」

風
「あれま～……」

秋蘭
「しまった……クッ！？」

そのまばゆい光に完全に目を瞑ってしまった三人。
その間に怪鍋は三人を通過してしまった。
その直後、風達の場所から爆発音が聞こえた。

怪鍋
「な～っべっべっべ！　この野菜は頂く！」

？？？

「悪いが……それだけは譲れねぇな」

怪鍋
「ッ！？」

怪鍋は後ろで勝利宣告を言いながら立ち去ろうとしたが……

政宗
「これ以上馬鹿みたいな事をすんのはｂａｄだ……此処で終わらせるぜ！！」

政宗が怪鍋の前に立ちはだかり、怪鍋に向かっていった。

怪鍋
「いつの間に！？」

政宗
「テメェが調子に乗っている間だ！　ＭＡＧＮＵＭ！！」

そして必殺技を繰り出し怪鍋に襲った。
だが踏み込んだと同時にカチッと踏む音が聞こえた。

政宗
「……あ」

そして爆発した。

怪鍋
「な～っべっべっべ！　やはり天はこの鍋に」

？？？

「まだだ！！」

怪鍋
「なッ！？」

怪鍋は今度こそ勝利したと思い、高々と笑っていた。

だが、まだ終わっていなかった……

小十郎
「覚悟しな！！」

小十郎が此方に向かっていたのだ。

そして……

小十郎
「穿月ッ！！」

怪鍋
「なべ～～～！！」

小十郎の必殺技で怪鍋を吹き飛ばした。
怪鍋は喰らったと同時に、野菜の籠を手放した。

そしてその籠は……

華琳
「……これで終わりね」

華琳の手元に戻ってきた。

小十郎
「テメェの野菜に対する愛は伝わった。だがそれで人様の野菜を盗むのは頂けねぇな」

華琳
「これに懲りたら二度としない事ね」

怪鍋
「なべ～～～……」

華琳と小十郎の説教は怪鍋の耳には届かなかった。

天海
「おやおや……やられてしまいましたか」

星華蝶
「安心するがよい。貴様も同じようにしてくれる」

天海
「ンフフ～……では此処は一旦退かせて頂くとしましょう」

そう言った瞬間、天海から白い煙が発生した。

星華蝶
「ッ！　待て！」

星華蝶は天海を追いかけるが見失ってしまった。
そして視界が良好になった時には既に天海と怪鍋の姿はなかった。

星華蝶
「……逃げられたか」

小十郎
「あの怪盗鍋奉行仮面もいなくなったな」

華琳
「まぁ私的にはすっきりしたわ」

小十郎
「俺も少しは気分が晴れた」

星華蝶
「……仕方ない。今回は見逃すとしよう」

華琳
「それじゃあこの野菜でも頂くとしましょうか」

小十郎
「軽い料理なら作れるぞ」

星華蝶
「ほぅ……それは楽しみだな」

そう言って三人が部屋に戻ろうとしたがその途中で何かを踏んでしまった。

三人
「「「……あ」」」

その直後、大爆発がおきた。

翌日、政宗達が欠席したのは言うまでもない……

第六十話、怪盗鍋奉行仮面参上！（後書き）

今回の作品、黒神様のリクエストでした。

今回から小説の書き方を変えさせて頂きました。

感想など意見などをよろしくお願いいたします。

そして今回は長くなりましたね（汗）

相変わらず上手く書けているかわかりませんが……（泣）

そして今回登場した“怪盗鍋奉行仮面”の紹介をします！

盗食鍋男

怪盗鍋奉行仮面　属性：炎　／　武器：鍋　／　一人称：「鍋」

鍋料理が好きな鍋奉行男。

他人の野菜を奪う事から野菜好きな怪盗である。

その為、数多くの八百屋や農業の人達は彼が野菜に奪われている。

天海とはコンビでいる。

小十郎が野菜つくりの名人と言う噂を聞いて、小十郎の野菜を１つも残さず奪いだす。

以上です。

次回は長編です！

ですので一旦リクエストは中止させて頂きます。

それでは、また次回！

決戦の余興……

～あらすじ～

怪盗鍋奉行仮面事件から一週間後……

～１－Ｂ～

夏休みが過ぎ、涼しさが感じられた季節。
恋ＢＡＲＡ学園に一つの学園行事が行われようとしていた……

紫苑
「明日から体育祭となりますが……」

そう、体育祭である！
この恋ＢＡＲＡ学園の体育祭はかなり有名で観客席が設けられるほど。
恋ＢＡＲＡ学園“三大行事”の一つである。（残りの二つは武闘大会、文化祭である）

紫苑
「……以上です。それではまた明日」

そう言ってＨＲは終わった。

家康
「体育祭か……楽しみだな、元親」

元親
「あぁ！　腕が鳴るぜ！」

家康と元親は恋ＢＡＲＡ学園の初の体育祭に興奮していた。

桃香
「楽しそうだね、家康君」

愛紗
「元親殿も」

そこへ桃香と愛紗がやってきた。

家康
「ああ！　此処の体育祭は派手な競技が多いと聞いていたからな！」

桃香
「あ、あはは……（汗）」

愛紗
「派手というか……何というか（汗）」

元親
「？　どういう事だ？」

家康の派手という言葉に苦笑いする二人。

愛紗
「この学園の体育祭は非常に派手にやります……いや、やりすぎるんです」

元親
「やりすぎる？」

桃香
「ウチってね、生徒の他に先生と教頭に校長、それに理事長も参加するんだよ」

家康
「……それって」

元親
「もしかして……」

家康と元親はそのメンバーを想像してみた。

～想像～

卑弥呼
「見えたぞ！　汗のひとしずく！」

信長
「消え去れ虫けらがぁぁぁあ！！」

久秀
「私は私の欲望に動くまでだ……」

信玄
「侵略すること火の如く！」

謙信
「びしゃもんてんのごかごを……」

氏康
「ド阿呆が……！！」

祭
「やれ……戦るか？」

紫苑
「うふふ……」

桔梗
「あーっはっはっは！！」

孫市
「我は誇り高き八咫烏！！」

島津
「今や示さん大和魂ぃぃ！！」

宗茂
「ユニバァァァス！！！」

～終了～

二人
「「……」」

愛紗
「わかりましたか？」

家康
「ああ……（汗）」

元親
「嫌ってほどな……（汗）」

桃香
「それでもこの体育祭は凄い人気なんだよ」

愛紗

「はい、今回もまたテレビ中継が行われるらしいですから」

家康
「そうか……何はともあれ楽しみだな！」

そして家康は体育祭を待つ。

そして当日……

～運動場・関ヶ原～

此処は恋ＢＡＲＡ学園が所有する運動場、関ヶ原。
桁違いな広さ。所々にある森林。そして川や湖。
そんな関ヶ原は普段、一般に提供している。
だが、このような行事が行われる場合は優先的に恋ＢＡＲＡ学園が使えるようになっている。

久秀
「これより体育祭の開会式。まず校長の言葉」

信長
「戦わぬ者には……死をくれてやる」

久秀
「以上で開会式を終わりにする」

佐助
（終わりなの！？）

そしてチーム分け……

～東軍～

総大将・織田信長

生徒代表・前田慶次

クラス
A組・B組

教師
A組の担任、副担任・B組の担任、副担任

～西軍～

総大将
卑弥呼

生徒代表
豊臣秀吉

クラス
C組・D組

教師
C組の担任、副担任・D組の担任、副担任

いざ、決戦！！！

決戦の余興……（後書き）

体育祭編が開始します！

そして前書きネタも封印で（汗）

今回は軽いチーム分けでしたが次回も説明が入りますので短いです。

次回は体育祭のルール説明です。

それでは、また次回！

体育祭説明・両軍の意気込み

～説明～

一つ・五十種目の競技を行い点数の多い方の軍の勝利とする。

一つ・勝利した軍は褒美として各々に十万の金を授与する（協力・本願寺金融）

一つ・敗者した軍は罰として地域清掃を二週間行う（教師も含む）

一つ・基本的に真剣、銃器などは許可する

一つ・死者を出さない限りあらゆる手段を許可する。

以上の事を守り、安全な体育祭を送るように。

～東軍ｓｉｄｅ～

信長

「全てを亡き者にせん」

政宗

「いや、ダメだろ」

東軍が集まり信長は生徒の士気を上げる為の意気込みだったが、完

全に間違った意気込みに終わった。

慶次
「あ～あ、そんなんじゃダメだって。此処は俺に任せてくれるかい？」

信長
「……好きにせい」

信長は自分の代わりに慶次を皆の前に立たせた。

慶次
「やぁやぁ皆さん！　気分はどうだい？　今日は待ちに待った体育祭だよ！　気になるあの子に自分のカッコいい姿を見せる絶好の機会！　そんな子がいなくても汗水垂らしても泥んこになっても隣の仲間と一緒に協力すればいつの間にか恋仲になっているかもよ～。だからみんなで頑張ろうじゃないか！！」

そして慶次の意気込みは終わった。

慶次の言葉は……

一同
「「「「ウオォォォオ！！！」」」」

皆の士気は上がった。

家康
「よし、頑張ろう！　なぁ半蔵！」

半蔵
「主が望むのならば……」

桃香
「愛紗ちゃん頑張ろう！」

愛紗
「はい！」

元親
「よっしゃあ！　気合い入れてくぜえ！！」

風魔
『御意』

政宗
「ｃｒａｚｙに決めようぜ、なぁ小十郎」

小十郎
「ここいらで真剣勝負を願いたいですな」

華琳
「これも我が覇道の為よ」

春蘭
「私も協力致します！」

長政
「今回は義兄上の正義に協力しよう」

お市
「長政様……兄様と仲良くして」

官兵衛
「今こそ！　生徒会にギャフンと言わせようぞ！」

阿国
「なんや気合い入っとるなぁ～」

謙信
「わたくしもぜんりょくでまいりましょう」

かすが
「謙信さま！　このかすがも協力します！」

それぞれの士気が上がり、東軍は活気に満ちていた。

～西軍ｓｉｄｅ～

卑弥呼

「見ろ！　東方は……」

三成
「赤く燃えているぅぅぅう！！」

清正
「……変わったな、アイツ」

西軍も間違った意気込みを行っていた。
しかしながら此方には卑弥呼の存在が大きく、既に士気が上がっていた。

幸村
「ウオォォォオ！！」

左近
「こっちも燃えていますね」

蓮華
「頑張りましょう、思春」

思春
「はっ」

大谷
「ヒヒッ！　愉快なり」

正則

「相変わらず気味ワリィなぁ……」

月
「み、みっちゃん……」

詠
「ああいった三成も珍しいわね」

雪蓮
「ぶーぶー、慶次がいないのはつまんないぃ～」

冥琳
「仕方あるまい」

秀吉
「さぁ信長よ！　我の拳に平伏すがよい！」

半兵衛
「僕も協力するよ秀吉」

祭
「儂も燃えておるわ！」

孫市
「……」

此方も東軍に向かう為、さまざまな準備を行った。

そして、最初の競技が始まる……

体育祭説明・両軍の意気込み（後書き）

今回も短く終わりました。

さて、此処からが本番です！

さまざまな競技にチャレンジする皆さんを楽しみにしててください！

それでは、また次回！

午前の部・A

蒲公英
「皆さん！　いよいよ始まりました体育祭！」

地和
「実況はお馴染みのちぃとたんぽぽがお送りします！」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

蒲公英
「このままぐだぐだやっていても仕方ありません！　早速競技に移りたいと思います！」

地和
「記念すべき一回目は……これだぁ！！」

第一の競技・１００ｍ走

蒲公英
「おぉーっと！　これは体育祭恒例の１００ｍ走だぁ！」

地和
「ルールは読者の体育祭や運動会と変わりないのでそちらを想像してください！」

佐助
（手抜き?!）

蒲公英
「ではでは選手入場!!」

そして入場してきたのは……

政宗
「さぁて……やるか」

家康
「頑張るとするか!」

幸村
「ウオォォォオ!　みなぎるァァァァア!!」

三成
「家康ぅぅぅう!!」

主人公ｓだった。

蒲公英
「な、なんという最初っからクライマックス状態!?」

地和

「はじめっからこんなのでいいのか！？　いいんです！！」

蒲公英
「それでは選手は指定された位置に！」

選手達は指定された場所にてスタートを待った。

地和
「位置について、よーい……」

蒲公英
「どん♪」

そして競技が始まった。

そのスタートと同時に……

家康
「忠勝！」

忠勝
「！！」

幸村
「大紅蓮脚ゥゥウ！！」

三成
「イエヤスゥゥゥウ！！」

家康は忠勝に乗り、幸村は大紅蓮脚になり、三成は恐惶を使った。
三人はとてつもないスピードでゴールした。

政宗
「……ついてけてねぇ（汗）」

その場に残された政宗はただただ呆れる事しか出来なかった。

一着、家康・百点。
二着、三成・七十点。
三着、幸村・四十点。
四着、政宗・零点。

その後の１００m走は普通に行われた。

第二の競技・玉転がし

地和
「続いては玉転がし！　一人で直線２００mまで押して貰います！」

蒲公英
「選手は……コイツらだぁ！」

そして入場してきたのは……

官兵衛
「小生の出番ダァ！」

秀吉
「我が力に屈しよ！」

この二人であった。

地和
「……既にフラグが成立したようですが続けます！」

官兵衛
「オイ！　どういう事だ！？（怒）」

蒲公英
「気にしない事が長生きの秘訣です！」

官兵衛
「何！？　それは本当か？！」

地和
「はぁい、これ以上はめんどくさいのでスタートしま～す」

二人はスタート地点に立った。

蒲公英
「よ～い……どん！」

そして合図と同時に……

官兵衛
「おっしゃあああ！！」

秀吉
「フン！！」

二人は玉を“吹き飛ばした”

佐助
「玉転がしは！？」

佐助のツッコミは虚しく響いた。

一着、秀吉・五十点
二着、官兵衛・二十点

此方も後の選手は普通に行った。

地和
「始まって早々に波乱の幕開けとなった体育祭！」

蒲公英
「果たしてどちらが勝つのでしょうか！？　というか無事に終わるのでしょうか！？」

次回予告！

光秀
「ンフフ～、楽しみです」

お市
「市……頑張るね」

大谷
「不幸が目に見えるわ……ヒヒッ！」

久秀
「ほぅ……これは愉快だな」

蒲公英
「最悪だぁ～！！（汗）」

この四人が行う競技とは！？

蓮華（病）
「ユキムラの為……死ンデ」

月（病）
「それはデキマセンヨ」

地和
「何で病んでんの！？」

何故二人は病んでいるのか！？

宗茂
「ユニバァァァアス！！！」

小十郎
「ボルテッカァァァァァァアア！！！」

この二人が叫んだ理由とは！？

次回、混沌が増す体育祭！！

佐助
「絶好調でぁぁぁぁぁぁあるぅぅぅう！！」

刮目せよ！

午前の部・A（後書き）

……すいません、短くて（泣）

今回はスタートという事でこのような体育祭だよ！　的な話です。

次回から本格的に競技を書いていきたいと思います。

次回は波乱の体育祭！　お楽しみに！！

それでは、また次回！

午前の部・B

激しい体育祭が始まった！

地和
「さぁいきなり度肝抜いた幕開けをした体育祭！」

蒲公英
「果たして今年は何人生き残るのでしょうか！？」

佐助
「やめてくんない！？　結構冗談に聞こえないから！」

蒲公英
「冗談ではない！　さてさて、ネタも決まったところで競技に移りたいと思います！」

地和
「続いての競技は此方！」

第三の競技・宝探し

蒲公英
「この競技は森の中にある宝玉を探して頂きます！」

地和

「しかし、森の中には数々のトラップが仕掛けてありますのでご注意を！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

蒲公英
「それでは、選手入場！」

蒲公英の掛け声と共に四人が入ってきた。
しかしその面子を見た瞬間、会場が絶句した。

その面子は……

光秀
「ンフフ～、楽しみです」

お市
「市……頑張るね」

東軍、明智光秀・お市。

大谷
「不幸が目に見えるわ……ヒヒッ！」

久秀

「ほぅ……これは愉快だな」

西軍、大谷義継・松永久秀。

蒲公英
「さ、最悪だぁぁぁあ（汗）！！」

地和
「これはマズい！　放送コードがギリギリの面子だ！」

家康
「……あそこの面子じゃなくて、良かったと心から思った（汗）」

一同
「「「「同じく……（汗）」」」」

そして四人はスタート地点に立ち、合図を待つ。

蒲公英
「それでは、位置について……よ～い」

地和
「どん！」

競技開始！

合図と同時に……

お市
「……ツカマエタ」

お市の大魔の手が大谷と久秀の身体を蝕んだ。

久秀
「おや、これは……」

お市
「これでいいの？」

光秀
「よくやりましたね、お市さん」

大谷
「なるほど、してやられたわ」

どうやら光秀の策のようだ。

光秀
「貴方達はそこで休んで貰います。大丈夫です、すぐに終わらせますから……では」

そして光秀とお市は森の中に入っていった。

地和
「おぉーっと！　いきなりの拘束攻撃！　西軍は一切動けません！」

蒲公英
「そして東軍は早速、森の中に入っていきました！　これは勝負が見えたか！？」

久秀
「……解けるかね？」

大谷
「少し時間が掛かる」

久秀
「構わぬ」

大谷
「ならば……」

そう言って大谷は何かを唱え始めた。

しばらくして……

大谷
「……フン！」

大谷の掛け声で大魔の手は吹き飛んだ。

久秀
「ご苦労。さて、今から追いかけてもあちらが有利……」

大谷
「ならばどうする？」

久秀
「何、簡単な事よ」

そしてゆっくりと森の入り口に近づく久秀。
果たして久秀の策とは？

一方の光秀とお市は……

～森・内部～

光秀
「……見つかりませんね」

お市

「……」

森の中周辺を探していたが、見つからないでいた。

光秀
「森の中にあると言いましたが……これはかなり堪えますね」

お市
「……そうですね」

数少ない会話をしていると光秀がある事に気付く。

光秀
「……おや？」

お市
「どうしました？」

光秀
「何か臭いませんか？」

お市
「臭い？」

光秀

「ええ、何か焦げ臭い……まさか」

光秀が気付いた時には手遅れであった。

～入り口前～

久秀
「これで……終わりだ」

久秀が指でパチンと鳴らすと森から大爆発が起きた。

蒲公英
「ば、爆発したぁぁぁぁあ!?」

地和
「何してんのぉぉぉぉお!?」

久秀の爆発に実況の二人は度肝抜かれた。

大谷
「ヒヒヒッ！　これが主のやり方か！　我と同じ滑稽な男よな！」

久秀

「私は自分の欲望に素直なだけだ」

大谷
「……まぁこれで邪魔者は消え去ったか」

久秀
「いや、まだのようだ」

そう言って久秀が入口を指差すと……

光秀
「ああ、痛い、痛いですね～……全く酷い事をします」

お市
「何でこんなコトスルノ？　市がワルイノネ」

ボロボロの光秀と大魔の手に守られたお市が炎の中から現れた。

久秀
「ほぅ……あの爆発でまだ歩けるかね。関心するよ」

光秀
「この償いは……貴方の生き血でお願いします！」

お市
「市とナカヨクナリマショ？」

大谷
「不幸よ！　さんざめく降り注げ！」

こうして“兇変”とも言える戦いがはj……

※放送事故が起こりました。しばらくお待ちください。

蒲公英
「誠に見苦しい物を御見せしてすいません！」

地和
「只今の競技はなかった事にします！　忘れてください！」

蒲公英
「気を取り直して次の競技です！」

第六の競技・障害物二人三脚

地和
「この競技は様々な二人で協力しながら障害物を避けていきゴールを目指して頂きます！」

蒲公英
「因みにこの競技は女子限定です！」

地和
「んじゃ選手入場！」

～今回の選手～

東軍、春蘭・愛紗。

西軍、蓮華・月。

春蘭
「いいか！　私に合わせるのだぞ！」

愛紗
「承知した！」

蓮華
「まさかあの二人が相手とはな……」

月
「仕方ありませんね」

気合いの入る東軍に対し、相手を見て気を落とす西軍。

蓮華
（こんな勝負でも……幸村は応援してくれるかしら？／／／）

月
（これでも……みっちゃんは見てくれるでしょうか？／／／）

西軍の二人は心の中で好意の人を思っていた。

そしてその人に視線に移すと……

天和
「ユッキ～♪」

幸村
「てててて天和殿！／／／　近いでござる！？／／／」

華雄
「オイ！／／／　次の競技は私が出るから見ていろ！／／／」

三成
「秀吉様の為に頑張るのだ！」

一切二人を見ていなかった。

二人
「「……」」

その瞬間、二人からブチっとキレる音が聞こえた。

二人
「「フフフフフ……」」

春蘭
「な、何だ？　急に殺気が！？」

蓮華
「ねぇ……ユキムラの為……死ンデ」

愛紗
「な、何故死ななければならない！？　正々堂々勝負を致しましょう！」

月
「それはデキマセンヨ」

愛紗
「何故ですか！？」

蒲公英
「おぉーっと！　突如として西軍からやる気というか殺気が出てきました！」

地和
「というか何で病んでんの！？」

そしてそのままスタート地点に立つ。

地和
「よ～い……どん！」

競技開始！

春蘭
「うおおおおお！！」

愛紗
「はあぁぁぁぁぁ！！」

蓮華
「フフフ……」

月
「……」

開始直後、四人はとてつもないスピードで駆けていった。

～第一の障害、鉄球～

走っていると横から巨大な鉄球が現れた。

春蘭
「こんなもの！」

東軍は春蘭が難なくこれを跳ね返す。

月
「ジャマデス」

西軍は月がこれを破壊する。

詠
「……月、そんな力は何処から（汗）」

～第三の障害・連続矢（プラスチック製）～

愛紗
「なんのこれしき！」

東軍の愛紗は自分の得物で矢を打ち落とす。

蓮華
「ヌルイワ！」

西軍の蓮華は自分のオーラで矢を消滅させる。

思春
「蓮華様?!」

左近
「……あれは人間ですかね?（汗）」

この後、様々な障害物を避けていった。
リードをしているのは西軍。
西軍は既にゴール直前まできていた。

地和
「何という事でしょう！　先頭にいるのは西軍です！」

蒲公英
「このまま大番狂わせとなるのでしょうか!?」

蓮華
「これで……」

月
「オワリデス！」

そしてゴールまであと数センチのところで……

～最後の障害・落とし穴～

二人
「「キャァァァァ！！？」」

落とし穴に落ちた。
そしてそのまま東軍が先にゴールをした。

蒲公英
「おぉーっと！！　最後の最後で障害に引っかかった西軍！」

地和
「という事で勝者は東軍です！」

観客
「「「「ワァァァァ！！」」」」

一着、東軍・百点

地和
「さぁさぁ続いての競技は此方！」

第八の競技・声量測定

蒲公英
「この競技は単純に自分の大声が点数となる競技です！」

地和
「最初の選手はこの方です！」

宗茂
「……頑張らせて頂く」

宗麟
「早くやりなさい宗茂」

宗茂
「は、はい」

マイクの前に立つ宗茂。

地和
「それでは、どうぞ！」

宗茂
「……では！」

そして……

宗茂
「ユニバァァァァァァアアアス！！！」

蒲公英
「ッ！？　な、何という声でしょう！！」

見事に大声を出し切った宗茂。

地和
「点数は……１１０デシベルです！　これは工場サイレンの近くに匹敵する音です！」

ザビー
「オォ！　スゴイですね！！」

宗麟
「見事ですよ、宗茂」

宗茂
「ありがとうございます」

宗茂・百十点

蒲公英

「いきなりの高得点が出ました！　さて、続いては……」

信長
「……我、下天に帰す」

蒲公英
「最凶校長、信長だぁー！！」

蘭丸
「信長さま！　頑張ってください！」

信長はマイクの前に立った。

地和
「どうぞ！」

信長
「……虫けらがぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！」

蒲公英
「あうぅ～……耳が痛い（泣）」

地和
「点数は……１００デシベルです！　電車の駅内と同じ音です！」

濃姫
「御見事です」

信長
「……フン」

信長・百点

蒲公英
「さぁ次の方は？」

佐助
「俺様みたいだな」

地和
「苦労人、佐助です！」

明命
「頑張ってください！」

佐助
「あいよ～」

蒲公英
「……大丈夫なんでしょうか？　それだはどうぞ！」

佐助はマイクの前に立ち……

佐助

「……絶ッ好調であぁぁぁぁぁぁぁぁぁるうううう！！！！」

壮大な声量を見せた。

地和
「こ、こんな声出せるの？　……１２０デシベル！？　飛行機のエンジン近くと一緒です！」

佐助
「あぁ～喉いて～」

幸村
「見事であったぞ！」

佐助・百二十点

蒲公英
「もうやだ～……最後はこの方です！」

小十郎
「やるからには本気で行こう」

地和
「小十郎です！　果たしてどのくらい出すのでしょうか！？」

政宗

「全員、耳を塞げ！！」

華琳
「何故かしら？」

政宗
「鼓膜を破らない為だ！」

家康
「？　まぁわかった」

蒲公英
「それでは、どうぞ！」

小十郎
「では……」

小十郎は深呼吸をして……

小十郎
「ボル……テッカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

これまでとは比べものにならない声量が発せられた。

蒲公英
「ギャァァア？！　耳がァァア！！」

地和
「……測定不能?!　マイクを壊したっていうの?!」

政宗
「……わかったか?」

一同
「「「「はい!!（汗）」」」」

小十郎・二百点

次回に続く……

午前の部・B　（後書き）

今回は三つの競技を行いました。

段々と蓮華と月がぶっ壊れているような気がしますが気にしない方針で！

次回は一つの競技をピックアップします！

それでは、また次回！

午前の部・借り物競争

第十五の競技・借り物競争

この競技は恋ＢＡＲＡ学園が誇る尤も白熱する競技の一つである。
ルールは他の借り物競争と変わらないが、白熱する理由は“借り物”時に簡単な借り物、時に恥ずかしい借り物、そして時に無理難題な借り物が用意されているのである。
故に生徒にはかなりの人気があるのだ。

蒲公英
「さぁ午前の部の人気競技、借り物競争です！」

地和
「去年はかなり無理な借り物がありましたが、今年も健在か？！」

蒲公英
「ちなみに去年の参考ですが……“オーラ力”“Ｔ－ウィルス”“ベヘリット”です！」

桃香
「実在するものがない！？」

地和
「なければ似ているものでも構いませんので、始めましょう！」

競技開始！

蒲公英
「最初はこの人達です！」

政宗
「Ｈｕｍ～……頑張るか」

愛紗
「いざ！」

佐助
「まぁ～やるしかないな」

詠
「ボクはこういうの苦手なのに……」

地和
「ＴＨＥツッコミーズです！」

四人
「「「「略すな！！」」」」

蒲公英
「おぉ！　見事なツッコミです！」

流石の貫禄、ＴＨＥツッコミーズ。

蒲公英
「それでは、位置について、よ～い……どん！」

蒲公英の合図によりスタートした選手達。

佐助
「先手必勝！　いかせて貰うぜ！」

一番手に到着した佐助。
そしてテーブルに置かれている紙を取り、中身を確認した。
書かれていたのは……

『死兆星』

佐助
「死ぬわボケぇぇぇえ！！」

確実に不可能な借り物だった。

佐助
「何だよこの借り物?!　死ねってか?!　遠回しに死ねって言っ

てるのか?!　ふざけんな!」

事珍しくキレながら怒鳴り散らす佐助。

政宗
「Ｈａ!　功に焦って自滅したか!　悪いがこの勝負頂くぜ!」

そんな佐助をしり目に紙を取る政宗。

そこには……

『ひとつなぎの大秘宝』

政宗
「クソがぁぁぁあ!!」

壮大な冒険をしないと手に入らない借り物であった。

政宗
「何だコレ!?　今からグランドライン行ってこいってか?!　今から新世界に入れってか?!　ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅだろ!」

こちらもかなりキレる政宗。

蒲公英
「いきなり無理難題な借り物を要求された政宗選手と佐助選手！」

地和
「果たしてどうやって借りてくるのでしょうか！」

政宗
「だからｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅなんだよ！」

佐助
「世紀末にならないと無理だからね！」

地和
「相変わらずツッコミにキレがありますねぇ～、流石です」

政宗
「嬉しくないわ！」

愛紗
「政宗殿！」

実況と漫才をしていると愛紗がやってきた。

政宗
「愛紗か！　気をつけろよ！　ツッコんだら負けだ！」

愛紗
「わかりました！」

そして紙を取り出す。

内容は……

『はずれ』

はずれだった。

愛紗
「はずれぇぇぇえ?!」

愛紗は我慢できずにツッコミを入れてしまった。

愛紗
「此処へきてのはずれって何ですか?!　無理難題な借り物ではないんですか?!」

蒲公英
「あ、はずれですか？　失格です」

愛紗
「うがぁぁぁぁあ！！」

地和
「愛紗選手壊れました！　この競争がどれほど過酷な競争か物語っています！」

政宗
「全然ｓｅｖｅｒｉｔｙじゃねぇよ！　この借り物が可笑しいだけだ！」

蒲公英
「恐るべし、借り物競争！」

佐助
「だから恐ろしくないっての！」

再び始まった漫才をさておき、地和は実況を進める。

地和
「さぁ残りは詠選手です！」

詠
「残り物には福がある……この勝負貰ったわ！」

詠は残りの紙をとり内容を確認した。

～とある家族～

その家族は男の子が一人いる三人家族。
しかし家族の仲は良いものとは言えなかった。
いつもいつも両親が喧嘩をする日々。
母親はその腹癒せに男の子にも手を出す。
しかし男の子は泣きもせずにいつも笑っていた。
それが気に食わないのか時間が経つに連れて暴力は増す。
だが子供は笑っていた。
ある日、いつものように喧嘩をしていると男の子が二人の間に入ってきた。

母親
「邪魔よ！　退きなさい！」

母親は子供に怒鳴りつける。
しかし男の子は退かない。
いつも通り笑いながら手を広げている。

母親
「そこを退きなさいっているのよ！　それにいつもいつも笑っていて気持ち悪い……何で笑っていられるのよ！」

母親は勢いをそのまま、男の子に理由を聞いた。

男の子は黙り込む。

男の子
「……ぼ、僕が」

しばらくして男の子が沈黙を破り、笑っている理由を述べる。

男の子
「僕が悲しんでいたら……パパとママがもっと喧嘩しちゃう。だから僕は泣かない。僕が笑っていたらいつかパパとママも笑ってくれるから……」

二人はその言葉を聞いた瞬間絶句した。
まだ幼い子供にこれまで気を使わせていたのかと。
そしてこんなにも自分達が馬鹿らしい事をしていたのだと。
それを知った瞬間二人は泣きながら男の子に謝った。
しかしその代償は大きかった。
男の子はいつも笑っていた為、それ以外の感情が出せなくなってしまったのだ。
どんな事をしても笑っている。
それはもう“仮面”のように……
母親は願った。
もし時間が戻るなら喧嘩をしない人生を暮らしたい。
そして子供に愛情を。
借りの人生でもいい。

子供に……

『救い』を……

～終了～

詠
「何なのよコレは!?」

詠は紙に書いてあった文章にツッコんだ。

詠
「何この悲しい話!?　思わず涙ぐんだじゃない！　何を借りてくればいいのよ?!　救い?!　どうやって貸せばいいのよ!」

詠が紙にツッコミを入れていると肩を叩かれた。

詠が振り向いて確認すると……

佐助
「……感動させて貰ったぜ」

詠

「……は？」

涙を流していた佐助だった。

佐助
「まさかこの俺様が涙を流す日がくるとは……」

詠
「え？　え？　どういう事？」

佐助
「あの紙に感動したんだよ」

詠
「いや、そもそもボクが書いたんじゃないし……（汗）」

佐助
「それに俺様だけじゃないぜ」

佐助が観客を指差すと……

桃香
「がんどうじだよ～（泣）」

家康
「……ワシもだ」

蓮華
「ぐすっ……立派な男の子だな」

春蘭
「ひっぐ、えっぐ……（泣）」

美羽
「びえぇぇぇぇん！（泣）」

ねね
「感動したよ～（涙目）」

会場は涙だらけだった。

地和
「ずぅ……ちぃも感動してしまいました！　もはや勝負は詠選手の勝利で構いません！　皆さん、どうですか！？」

観客
「「「「ワァァァア！！」」」」

蒲公英
「それではこの勝負、詠選手の勝利です！」

一着、詠・百五十点

詠
「納得できるかぁぁぁぁぁあ！！」

詠のツッコミは会場に響き渡った……

地和
「さぁ気を取り直して次にいきましょう！」

蒲公英
「次はこの人達です！」

凪
「頑張ります！」

焔耶
「お館！　見ててください！」

思春
「……」

恋
「……ん」

地和
「特に共通点がない面子です！」

蒲公英

「長居は無用！　よ～いどん！」

競技開始！

各者は紙に同時に着いた。
そして内容を確認した。

『好意の人物』

確認した瞬間、各者の得物が仲間同士で相俟った。

凪
「やはり中身は一緒か！」

焔耶
「ならば貴様が消えろ！」

凪
「それは貴様だ！」

思春
「……去れ」

恋
「……出来ない」

地和
「おぉーっと！　いきなり仲間割れです！」

家康
「……何故仲間割れを？」

元親
「さぁ？」

仲間割れの原因は鈍感であった。

その後も過酷な競争が続いた……

～朱里の場合～

『バカ』

朱里
「春蘭さん、いいですか？」

春蘭
「任せろ！」

そしてそのまま一着でゴールした。

一着、朱里・百五十点

春蘭
「ところで、内容は何だったんだ？」

朱里
「はわ！　……強い人です」

春蘭
「おぉ！　そうか！」

朱里
（ごめんなさい……）

～慶次の場合～

慶次
「まつ姉ちゃん！」

まつ
「わかりました！」

一着、慶次・百五十点

慶次
「よっしゃ！」

まつ
「やりましたね、慶次。それで、内容は？」

慶次
「ああ、コレだよ」

『恐怖の存在』

まつ
「五郎丸！（怒）」

慶次
「うぎゃぁぁぁあ！！」

～ザビーの場合～

『愛情』

ザビー
「お金を貸してクダサーイ！」

宗茂
（あの人の愛情は金か？！）

～斗詩の場合～

斗詩
「麗羽さま！　お願いします！」

麗羽
「おーっほっほっほ！　お任せあれ！」

二着、斗詩・百点

斗詩
「はぁ、はぁ……惜しかったです」

麗羽
「キィー！」

斗詩
（でもある意味良かったかも……）

紙の内容は……

『復讐したい人物』

～正則の場合～

『暗愚』

正則
「……どういう意味だ？」

清正
（内容はわからないがお前の事だと思うぜ……）

～ダイジェスト終了～

地和
「さぁ白熱した借り物競争も最後の一組となりました！」

観客
「「「「ワァァァァ！！」」」」

蒲公英
「最後の組はこちらです！！」

真桜

「いったるで～！」

桃香
「いきます！」

雪蓮
「頑張るわね～」

祭
「ふぅ……」

蒲公英
「爆発メロンです！」

ちなみに会場の男性は前屈み状態。

地和
「……なんか黒い感情が出てきます」

蒲公英
「まぁまぁ。それでは、よ～い……どん！」

競技開始！

雪蓮
「よし！」

最初に到着したのは雪蓮。

内容は……

『名前に数字が入っている人』

雪蓮

「……三成！」

早速見つけた雪蓮。

だが……

月

「み、みっちゃんは今いません……トイレかと思います」

雪蓮

「ちょ！　……なら小十郎！」

そして雪蓮は東軍に向かっていった。

それと同時に……

三成
「月」

三成が現れた。

月
「あ、みっちゃん」

三成
「何か呼ばれたような気がしたが？」

月
「……もう行っちゃいました（汗）」

三成
「？」

三成はわからずに競技は進む。

祭
「やっと着いたか」

真桜
「あの先輩、早すぎるねん」

次に到着したのは祭と真桜。

まず祭に書かれていたのは……

『生徒会長』

そして真桜は……

『自分と同じ趣味を持つ男性』

祭
「この勝負……」

真桜
「貰ったで！」

二人はそれぞれいる場所に向かった。

桃香
「やっと着いた～」

そして最後に到着した桃香。
そして紙を取り、内容を確認した。

『仮面を付けた忍者』

桃香
「風魔君と半蔵君……どっちがいいだろう？」

桃香が悩んでいると……

風魔
「……」

半蔵
「……参る」

桃香の後ろに風魔と半蔵が現れた。

桃香
「へ？」

いきなり現れた事で呆気にとられているととてつもない速さでゴー

ルに向かっていった。

桃香
「きゃぁぁぁぁぁあ！？」

桃香を引きずりながら……

雪蓮
「もう少し！」

小十郎
「敵であろうとやるからには本気だ！」

真桜
「おっしゃ大将！　もう少しやで！」

元親
「ああ！」

祭
「体が堪えるのぅ」

秀吉
「負けは許されない！」

風魔
「……」

半蔵
「……」

桃香
「た～す～け～て～！！」

直前で横一線に並び、そのままゴールした。
順位は……

一着、雪蓮・百五十点
二着、祭・百点
三着、真桜・七十点
四着、桃香・失格（本人が気絶していた為）

雪蓮
「やったわ！」

祭
「これで少しは差がついたわい」

真桜
「ちょい頼んますわ～」

桃香
「きゅ～……」

地和
「以上をもって借り物競争を終了します！」

観客
「「「「ワァァァァ！！」」」」

～おまけ～

元就
「……」

元就は紙を持ったまま、動かなかった。

しばらくして……

元就
「……チッ！」

舌打ちをしてあるところに向かった。

元就
「貴様」

冥琳
「私か？」

元就
「来い」

元就は冥琳を連れてゴールに向かった。

一着、元就・百五十点

冥琳
「ところで、内容は何なのだ？」

元就
「……」

冥琳が内容を聞いてきたが元就は黙り込んだ。

そして……

元就
「……気にくわない人物だ」

そう言って紙をクシャクシャにし、立ち去っていった。

冥琳
「……すいません、少しいいですか？」

審判
「はい？」

冥琳は近くにいた審判を止めた。

冥琳
「先ほどの毛利元就って人の借り物の内容はわかりますか？」

審判
「えっと、毛利元就……あった。『友達』でしたね」

冥琳
「……わかりました。ありがとうございます」

そして審判は自分の位置に戻っていった。

冥琳
「フフッ……友達か」

冥琳は微笑みながら戻っていった。

午前の部・借り物競争（後書き）

今回は借り物競争をピックアップして書きました。

ちなみに自分が中学生の時に借り物競争をやりましたがその時に書かれていたのは『自分が思うおばさん先生』でした。

一着でしたが、こっぴどく怒られた記憶があります（汗）

次回は昼休みに入ります。

何人か恋フラグが立ちます。

それでは、また次回！

昼休み

地和
「此処で一旦休憩です！」

体育祭の午前の部が終了し、地和が休憩と言った瞬間、それぞれ御飯の準備をした。

ちなみに途中結果は……

東軍・三千二百点

西軍・三千点

という感じに東軍が一歩リードしている。

桃香
「家康君、一緒に御飯食べよう！」

家康
「ああ！」

そして各々は食事に移り始めた。
この状況にチャンスと思っている乙女がいた。

詠
「スー‥ハー‥スー‥ハー‥」

詠である。
詠は一つ大きな弁当箱を手に持ち、深呼吸をしていた。

詠
「だ、大丈夫よ……これはいつもより多く作っただけでアイツの為に作った訳じゃないわ」

何か独り言をブツブツと言っている詠。

???
「……ちゃん」

詠
「大丈夫、大丈夫……」

???
「詠ちゃん！」

詠
「ウキャア！？」

詠は背後から聞こえた声に驚き振り向いた。
そこには……

月
「詠ちゃん、どうしたの？」

月の姿があった。

詠
「ゆ、月じゃない。脅かさないでよ」

月
「？　私はずっと後ろにいたよ」

詠
「……そうだっけ？」

月
「そうだよ……変な詠ちゃん」

詠
「うぅ……」

詠は月の存在に全く気付かなかった。

月
「ところで詠ちゃん」

詠
「何？」

月
「もうお弁当は渡したの？」

詠
「な、何の事よ……」

月
「正則君に渡すお弁当だよ」

詠
「ッ！？／／／」

月の言葉に詠は顔を真っ赤にした。

詠
「な、何でアイツの為に弁当を作らないといけないのよ！／／／」

月
「だって詠ちゃん、昔から正則君を気にかけていたから」

詠
「そ、それはアイツがいつも危なっかしいから仕方なく……／／／」

月
「ふふふ……そういう事にしとくね」

詠
「ゆ、月～……」

珍しく月が詠で遊ぶ。

月
「とにかく行こう。早くしないと昼休みが終わっちゃうよ？」

詠
「え？　ちょ、ちょっと待って！／／／／」

そうして月は詠を引っ張り出し、皆の場所に向かった。

～購買部～

月と詠が会話をしている中、購買部では……

七乃
「んしょ……んしょ……」

七乃が大量の飲み物を持ちながら歩いていた。

七乃
（お嬢様が喉が渇いたから飲み物を買いに来たのに……まさか生徒会全員の飲み物を買うハメになってしまうとは）

飲み物は生徒会のようだ。

七乃
「う～ん……にしても重いですね～（汗）」

そして曲がり角を曲がろうとした。

その時……

七乃
「キャア！？」

ちょうど誰かにぶつかってしまった。
そしてそのまま倒れそうになる。

すると……

???

「おっと」

ぶつかってきた相手が七乃の手を掴み、それを阻止した。
その代わり飲み物は全部落ちた。

???

「あ～あ、飲み物が全部落ちちまったな……アンタは大丈夫か？」

七乃

「……」

???

「……おい」

七乃

「……あ、はい。大丈夫です」

???

「ん？　アンタは確か同じクラスの……」

七乃

「七乃ですよ、清正さん」

清正
「そうだったな、すまん」

どうやらぶつかってきた相手は清正だったようだ。

七乃
「とりあえず飲み物を拾わないと……」

清正
「俺も手伝うぜ」

七乃
「だ、大丈夫ですよ！　私の不注意でこうなったのですから！」

清正
「おいおい……仮にそうだとしても手伝うに決まってるだろ。困った時はお互い様だ」

そう言って飲み物を拾い始めた清正。

七乃
「……あ、ありがとうございます」

そして七乃も飲み物を拾い始めた。
数分後、全ての飲み物を拾い終わった。

七乃
「ありがとうございます。助かりました」

清正
「いや、気にするな」

七乃
「それでは私は失礼しますね。んしょ……」

七乃は再び飲み物を手に持ち、歩こうとする。

それを見かねた清正は……

清正
「……ったく。ほれ」

そう言って飲み物の片方を持つ清正。

七乃
「え？」

清正
「そんないっぱいに持ってたら大変だろ。一緒に持ってやるよ」

七乃
「……そこまでしなくても」

清正
「困った時はお互い様……だ」

七乃
「……それじゃあお願いしていいですか？」

清正
「ああ」

そして清正と七乃は生徒会が待つ場所に向かっていった。

～グランド～

孫市
「……」

清正と七乃が飲み物を運んでいる時に、孫市は一人グランドで次の準備を行っていた。

孫市
「……ん？」

いろんな準備をこなしている中で孫市は自分の腕から流れる血を確認した。

孫市
（いつかの競技で怪我をしたか……まぁいい）

孫市は特に気にせずにすぐさま準備に戻ろうとした。

その時……

???
「君！　怪我をしているではないか！」

孫市
「……我の事か？」

突然、背後から聞こえた孫市は声をした方に振り向いた。

そこにいたのは……

孫市
「……華陀先生か」

華陀

「すぐに治療する！　動かないでくれ！」

華陀であった。
華陀は血をだしている方の腕を掴み、すぐに治療をする。

孫市
「大丈夫だ。こんなものすぐに治る」

華陀
「何を言ってる！　たとえ治ったとしても傷が残ってしまう！　そうしない為にはすぐに治療して、痕を残さないようにする事だ」

孫市
「そんな小さな傷の痕など気にしな……」

華陀
「馬鹿者ッ！！」

孫市
「ッ！？」

華陀
「自分をもっと大切にしないか！　君は女性なのだから」

孫市
「……（汗）」

華陀の勢いに呑まれる孫市。
そして治療が終わり、包帯を巻いた。

華陀
「よし、これで傷が残らない筈だ」

孫市
「……感謝する」

華陀
「気にしないでくれ。怪我をした人を助けるのが医者の務めだ。それじゃあ」

そう言って華陀は去っていった。

孫市
「……次の準備を……？」

孫市はすぐさま次の準備に移ろうとしたが此処である事に気付く。

孫市
（鼓動がいつもより早い？）

自分の鼓動が普段より早かったのだ。

孫市
「……何なのだ、コレは？」

孫市は鼓動が早い事に疑問を持ったまま準備に移った。

これが“恋”の予兆とは知らずに……

～関ヶ原・グランド～

地和
「さぁさぁ皆さん！　いよいよ始まります午後の部！」

蒲公英
「果たして午前の部を越す熱い闘いはあるのでしょうか！？　お楽しみに！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

体育祭、午後の部……開幕！

昼休み（後書き）

今回は笑いなしのフラグだらけの話でした。

完全にキャラが崩壊していますが今更止まりません！　……ごめんなさい。

いつもふざけている分、恋愛に持っていきにくいもので……その為更新が遅れました（汗）　すんません！

次回からは午後の部です！

様々な競技をお楽しみください！

それでは、また次回！

午後の部・A

地和
「これより！　体育祭、午後の部を始めたいと思います！」

蒲公英
「盛り上がっていこー！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

地和
「さて、午後の部最初の競技は……こちらです！」

第二十六の競技・玉入れ

地和
「玉入れです！」

蒲公英
「こちらは高い場所にある五個の籠に玉を投げて入れて頂きます！」

地和
「今回は全員でお願いします！」

そしてグランドに全ての選手が入る。

地和
「それでは、よ～い……どん！」

競技開始！

開始と同時に……

家康
「東風の乱舞！！」

小十郎
「乱れ十六夜！！」

慶次
「恋つづり！！」

家康らの連撃と共に玉が宙に浮き……

元親
「四縛！」

宙に浮いた玉を元親が全て纏め……

政宗
「ＤＥＡＴＨ　ＦＡＮＧ！」

政宗がそのまま籠に入れた。

対する西軍も……

秀吉
「伝衝裂鬼！！」

秀吉が大量の玉を掴み、そのまま籠に入れたり……

半兵衛
「甘く柔らかに……」

半兵衛が自分の得物で玉を籠に入れたり……

大谷
「戻るな鎮星！！」

大谷に至っては玉自体を操っていたりする。
完全に玉入れの概念を覆している。

地和
「終了ーーー！！」

しばらくして終了の掛け声が響き、玉入れは終了した。

蒲公英
「それでは結果発表です！！」

結果発表

東軍・２５３個

西軍・２５０個

地和
「ただいまの競技、東軍の勝利です！」

観客
「「「「「ワァァァァア！！！」」」」」

東軍・二百五十点

蒲公英
「というか数多すぎ！？」

地和
「甘いですよ蒲公英さん！　この体育祭には常識は通用しません！」

佐助
（そんな体育祭ヤだな～）

地和
「さぁさぁ次の競技は！？」

第二十七の競技・綱引き

地和
「綱引きです！」

蒲公英
「ルールは簡単です！　単純に綱を引くだけです！」

地和
「この競技は代表選手２０名でお願いします！」

そしてそれぞれ代表選手が発表された。

しかし西軍の代表者は……

卑弥呼
「ふむ、頑張るかの」

信玄
「これも戦よ……」

島津
「ブァッハッハッハ！！」

宗茂
「やりますかな」

ザビー
「ＯＨ！　ミナサンに愛をーー！！」

秀吉
「我が力に屈しよ！」

恋
「……頑張る」

どれも強豪揃いであった。

東軍
（（（（絶対に勝てない！？））））

東軍は既に敗北モードである。

蒲公英
「既に勝敗が決まっているような感じはしますが気にせずに進めたいと思います！！　よ～い、どん！」

競技開始！

西軍
「「「「「ドウリャァァァァアアア！！！！！」」」」」

東軍
「「「「「オワァァァァァァアアアア！！！！？」」」」」

……

地和
「はい西軍の勝ち～♪」

蒲公英
「わかってはいましたが一瞬でしたね（汗）」

西軍・二百五十点

蒲公英
「さてさて、次の競技は……」

第二十八の競技・棒倒し

地和
「棒倒しです！！　この競技は東軍、西軍にあるお互いの棒を守りつつ、先に棒を倒した方が勝ちとなります！！」

蒲公英
「それとこの競技では棒を守る総大将を一名決めて頂きます！　その総大将が気絶した場合は無条件で敗北となりますのでご注意を！　あと、今回は外からの助言は禁止です！」

地和
「それでは、両軍、代表５０名と総大将をお願いします！」

～東軍ｓｉｄｅ～

家康
「総大将はワシがやろう！」

桃香
「えぇー！？　危ないよ！？」

家康
「大丈夫、ワシは耐える事には慣れている」

愛紗
「ですが……」

慶次
「まぁまぁ。わかってやんなよ、嬢ちゃん達」

華琳
「本人がこれほどまでやりたいと言っているのだからやれせればいいじゃない。ただし、簡単に倒れない事ね」

家康
「ああ、承知している！」

桃香
「……無事に帰ってきてね？」

家康
「ああ！」

総大将・家康

～西軍ｓｉｄｅ～

氏康

「総大将は俺がやる」

華雄
「氏康さんが直々に？」

氏康
「むしろ俺にしか向かねぇな。なぁに策はできてる」

三成
「フン！　それだけ言うのだ。負けたら許さんぞ！！」

氏康
「任せな」

総大将・氏康

～グランド～

地和
「さぁ！　代表選手も決まったようですので始めたいと思います！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

蒲公英
「それでは、よ～い……どん！」

競技開始！

家康
「此処はワシが守る！　皆は存分に攻めてくれ！」

氏康
「いいかテメェら！　此処は守り切るぞ！」

東軍は攻め、西軍は守りを起点に始まった棒倒し。
攻めの東軍は勢いがあり、西軍を薙ぎ払っていく。

西軍1
「がッ！？」

西軍2
「ぐえ！？」

対する西軍は一切攻めようとはせず、ただただやられていくだけであった。

信玄
「……相変わらず食えん男だ」

左近

「戦場ならありえませんが……この競技特有の策ですね」

穏
「スゴイですね～」

冥琳
「ああ、全くだな」

詠
「え？　どういう事？」

半兵衛
「見てればわかるよ、詠君」

詠
「はぁ……」

謙信
「ふふふっ……おもしろきさくです」

官兵衛
「ああ……このままだと負けるな」

朱里
「はわわ……マズイです！」

桂花
「……」

しかし、両軍の軍師達は既に気付いているようだ。

家康
「いけるぞ！　このまま押し切るのだ！」

東軍
「「「「ウォォォオオオ！！」」」」

そんな心配を余所に家康は最後の猛攻撃を指示する。

氏康
「……ド阿呆が！　吠え面かきやがれ！！」

そして今まで守りに入っていた西軍が遂に動く。

すると、突然……

西軍1
「おっしゃあ！！」

西軍2
「復活じゃああ！！」

気絶していた西軍の選手が復活し、東軍に攻め込んだ。
否、気絶していた“フリ”をしていたのだ。

家康
「何と?!」

これには家康も驚愕するしかなかった。

氏康
「戦は常に騙し合いだ……それを味わいな!!」

そして西軍の奇襲により、東軍の棒は倒れた。

蒲公英
「この競技、西軍の勝利です!」

観客
「「「「ワァァァア!!!」」」」

西軍・二百点

家康
「……すまない」

慶次
「ま、今回はしょうがないよ」

謙信
「おちこむひまはありません。これをつぎにいかしてがんばるのです」

家康
「……はい」

家康は自分の弱さを改めて触れ、次に活かすのであった。

次回に続く……

午後の部・A（後書き）

今回は三種目をお送りしました。

いかんせん、棒倒しがフラグにしか見えませんが……気にしないでください。

さてさて、次回も様々な競技をお送りする予定です。

お楽しみに！

それでは、また次回！

午後の部・宝運び

蒲公英
「負けられない戦いが、そこにはある……」

地和
「さぁ……興じるぞ！」

霞
「いや、何してんねん？（汗）」

地和
「気にしないでください！　それでは競技に移ります！」

第三十の競技・宝運び

蒲公英
「宝運びです！　これは宝となる袋に包まれた小さな宝石を運んでゴールして頂く競技です！」

地和
「コースは主に森林が多い為、身軽な人がお勧めです！」

蒲公英
「それでは、選手入場！」

その合図と共に選手が入場された。

かすが
「いいか！　この競技は必ず勝利するぞ！」

風魔
『御意』

半蔵
「……御意」

東軍
・かすが
・服部半蔵
・風魔小太郎

ねね
「頑張ろうね、みんな！」

明命
「はい！」

佐助
「う～す」

西軍

・ねね
・周明命
・猿飛佐助

地和
「ほっほ～、どうやら忍びの皆様が選手のようです！」

蒲公英
「この様子だと若干東軍が有利か？！」

ねね
「む！　今の言葉は頂けないね！」

地和
「むむ！　ということは何か秘策があるのでしょうか！？」

ねね
「そこは気合いだよ！」

佐助
「気合いなの？！」

蒲公英
「根性論を唱えたねね選手！　そろそろ指定の位置に移動をお願いします！」

両軍はそれぞれ指定された位置に立つ。

最初の走者は……

半蔵
「任を全うする……」

明命
「頑張ります！」

この二人であった。

地和
「この競技は一体どうなるのか！？」

蒲公英
「いきます！　よ～い……どん！」

競技開始！

半蔵
「……！」

明命
「いきます！」

蒲公英の合図で二人の姿は瞬く間に消えた……

～森林～

半蔵
「……」

明命
（うぅ……やはり速いです）

瞬く間に消えた二人は森の中で争っていた。
現在は半蔵が一歩リードしている。

明命
（このままでは……ならば）

そう思った明命は懐から手裏剣を取り出し……

明命
「ヤァア！！」

半蔵に投げつけた。

半蔵
「！　フン！」

一方の半蔵は明命の手裏剣にすぐさま気付き同じく手裏剣を投げ、
撃ち落とす。

半蔵
「……沈め」

明命
「はぅわ！？」

半蔵も反撃で鎖鎌を明命に投げる。
その攻防が続き、横一線となった。
そのまま交代選手の場所まで来た両者。

半蔵
「……頼む」

かすが
「任せろ！」

明命
「お願いします！」

ねね
「わかったよ！」

そしてほぼ同時に交代した。

かすが
「悪いが此処は勝たせて貰う！　ハァ！」

ねね
「わわ！？　危ないよ！」

かすがはスタートをした瞬間に苦無をねねに投げる。

かすが
「好機！　行かせて頂く！」

ねねが避けている間にかすがは一足早く次の指定場所に向かう。

ねね
「あらら、やられちゃったよ……」

先を越されたねねは策を考えながら追いかける。

ねね
「む～……む？　確かかすがちゃんが好きな人って……それなら！」

どうやら策が浮かんだようだ。

その頃かすがは……

かすが
「……よし、このまま行けば勝てるぞ！」

一度後ろを確認し、相手の姿がない事で勝利を確信していた。

かすが
「これならば……謙信様に／／／」

かすがは妄想の中にダイブするが足は止めずに森の中を駆けていく。

かすが
「あぁ……早く謙信様の下に／／／」

？？？
「わたくしがどうかしましたか？」

かすが
「……へ？」

かすがはいきなり聞き覚えのある声に反応して、後ろを振り向く。

そこには……

謙信
「ふふっ……わたくしのうつくしきつるぎ」

かすがの想い人、謙信の姿があった。

かすが
「けけけ謙信様？！／／／／」

かすがはその姿に動揺し、足を止める。

謙信
「うつくしきつるぎよ……わたくしのおねがいをきいてくれますか？」

かすが
「はい！／／／　何なりと仰ってください！」

謙信
「それでは……すこしめをつむってくれますか？」

かすが
「は、はい！」

謙信の言葉通り目を瞑るかすが。

かすが
（それにしても謙信様は一体何をなさるのだ？　……は！　まさか、キキキキス！？／／／　謙信様とキスが出来る！？／／／　遂に謙信様と！／／／　謙信様！　このかすがはいつでも準備は出来ております！　さぁ！　美しいキスを……／／／）

目を瞑るだけでここまで妄想が出来るかすが。
最早、人の領域を越えている。
しかしいつまで経っても何もしてこない謙信に疑問を持ち始める。

かすがは決心して目を開けると……

かすが
「……謙信様は？」

そこに謙信の姿がなかった。

その謙信は……

謙信
「……もうよろしいでしょう」

かすがを置いて森を駆けていった謙信。
そう言ってボンッと謙信の身体から煙が発する。

ねね
「上手くいったね！」

すると謙信の姿からねねの姿になった。
既にわかった方もいるだろうが、ねねは謙信の姿に変身していたのだ。
その姿でかすがを騙し、目を瞑っている間に先を急いでいたのだ。
ねねは先に佐助のいる場所に到着し、宝石を渡す。

ねね
「後は任せたよ！」

佐助
「お任せくださいっと！」

そして即座に姿を消す佐助。

しばらくして……

かすが
「クソ！　騙された！」

かすがが悔しがった顔をしながら到着した。

風魔
「……」

かすが
「すまない！　後は頼……」

かすがは宝石を渡し、言葉を掛けようしたが、受け取った瞬間に風魔は姿を消した。

かすが
「……頼んだぞ、風の悪魔」

かすがは風魔の姿を見て、勝てると思った。

佐助
（かなり離れてはいるが……相手が相手だ。油断したらこの勝負負けるな）

その頃、東軍とかなり距離を離した佐助だが、相手があの“風の悪魔”という事を気にかけ全速力でゴールに向かう。

佐助
（よし、もう少しだ！）

そして森を抜け、ゴールが見えてきた佐助。

地和
「おぉーっと！　最初に姿を見せたのは西軍の佐助選手です！」

蒲公英
「後ろには東軍の選手の姿がありません！　このまま西軍がゴールしてしまうのか？！」

観客
「「「「ワァァァァ！！！」」」」

佐助が姿を現した瞬間、会場は大盛り上がりを見せる。
そして残り数十？までとなり、西軍の勝利が決まったかに見えた。

……だが。

佐助
（……！　来やがったか！）

佐助は一陣の風が訪れた事に気付く。

そして……

風魔
「……」

佐助の後ろに風魔が現れた。

蒲公英
「な、なんという事でしょう！　完全勝利と思われた西軍の後ろに東軍の風魔選手が現れました！」

地和
「一体いつ現れたのでしょうか！？　これで勝負はわからなくなりました！」

観客
「「「「オォォォォ！！！」」」」

そして再び横一線に並んだ。

風魔
「……」

佐助
（クッ！　スピードなら完全に負ける……ならやる事が一つ！）

そう思った佐助は大型手裏剣を取り出し……

佐助
「引寄の術！！」

風魔に投げつけた。

しかし……

風魔
「……」

それをいとも簡単に避け、ゴールへと向かった。

佐助
「……やっぱダメか」

そして……

風魔
「……」

地和
「ゴーーール！！」

蒲公英
「決まったーーー！！　勝者、東軍です！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

家康
「みんな、良くやったぞ！」

元親
「おっしゃあ！！」

桔梗
「これでまた差がつく筈よ！」

風魔の勝利で盛り上がる東軍。

明命
「あぅあぅ……負けてしまいました」

ねね
「あちゃ～……でもみんな頑張ったよ！」

佐助
「……」

明命
「猫神様？」

先程到着し、競技に負けて落ち込んでいる西軍の選手。

しかし、佐助は黙りながら東軍に歩き……

佐助
「ちょいと待ったァァア！！」

待ったを掛ける。

地和
「どうかしましたか？　勝負はつきましたけど……」

蒲公英

「もしかして文句ですか？」

佐助
「いや……とりあえず風魔の宝の袋を確認してくれ」

地和
「？　ともかくお願いしまーす」

そして審判が風魔に近付いて、風魔は審判に袋を渡す。

審判が中身を確認すると……

審判
「……！？　ほ、宝石ではありません！！　小さな石ころです！！」

蒲公英
「嘘ッ！？」

地和
「な、なら本物は何処へ！？」

佐助
「……やっぱりな」

かすが
「な、何がだ！？」

佐助
「その袋は元々俺らの袋だ。多分そこの半蔵が明命と争っている時にすり替えたんだろう」

明命
「ふえ!?　本当ですか!?」

半蔵
「……いかにも」

佐助
「それで俺様の出番の時にこの袋に違和感を感じた。だが、中身を確認する時間はないんでな……だから俺様は賭けに出た」

ねね
「賭け？」

佐助
「ああ……最後に放った“引寄の術”だ」

風魔
「……」

佐助
「俺様はアンタを狙ったんじゃない。アンタの宝石を狙ったんだ。そしてそのまま袋をすり替えた……」

そして佐助は自分の懐から袋を取り出し……

佐助
「でもって俺様の賭けが成功したってわけなんですよ。いや～良かった！　良かった！」

笑顔で宝石を輝かせた。

地和
「つ、つまりこれは……」

蒲公英
「宝石を持っていなかった東軍のゴールは無効！　勝者は西軍に変更です！！」

西軍
「「「「ヒャッハー！！！！」」」」

その言葉を聞いた西軍は大盛り上がりした。

明命
「す、スゴイです！」

ねね
「良くやったね佐助！　いい子いい子してあげるよ！」

佐助

「い、いや……遠慮します（汗）」

この競技は佐助の活躍により西軍が勝利した。

西軍・二百点

午後の部・宝運び（後書き）

今回は宝運びでした。

本当は様々な競技を書こうとしたんですけど書くにつれてどんどん長くなっていき最終的に一つになってしまいました。

すいません。

次回も多分一つの競技をピックアップすると思います。

よろしくお願いします。

それでは、また次回！

午後の部・騎馬戦

蒲公英
「最後の最後で大どんでん返しが起こりました先ほどの競技・宝運び！」

地和
「このような盛り上がりは現在見られずに競技が終わっていきました。果たして再び見られるのでしょうか！？　続いての競技……」

第四十二の競技・騎馬戦

蒲公英
「騎馬戦です！　この競技は特殊な競技となっております！」

地和
「この騎馬戦なんですが……本当の馬に乗って頂きます！！」

観客
「「「「な、何だってーーー！！？」」」」

蒲公英
「そして背中に旗を付けて競技に移ります。ルールは簡単！　お互い１００人を選抜して頂き、騎馬をして貰い、旗を奪い合いをして貰います！」

地和
「制限時間内に旗を奪う、馬から降りる、騎馬者が気絶するなどをし、終了した時点で生き残りが多かった方の勝利です！」

蒲公英
「なお、今回１００人の中で総大将を決めて頂きます」

地和
「総大将は馬から降りても旗が健在なら復活が可能です。その代わり大将が旗を奪われる、気絶などをした場合は競技終了、強制敗北となります！」

観客
「「「「ワァァァァ！！！」」」」

蒲公英
「それでは、総大将を選抜してください！」

～東軍ｓｉｄｅ～

政宗
「暴れ馬なら任せな」

小十郎
「この小十郎も行かせて頂く」

利家
「某も行こう！　そろそろまつに良いところを見せなければ！」

翠
「此処で馬術部の真骨頂を見せてやるぜ！」

どうやら政宗、小十郎、利家、翠が参戦を決めた。

慶次
「よし、後は大将だけだな……」

謙信
「ならばわたくしがまいりましょう」

慶次
「お！　謙信、やってくれるのか？」

謙信
「ええ。かならずやあのおかたがでるはず。わたくしはたのしみにしています。……ふふふっ」

慶次
（……楽しそうだな、謙信）

総大将・上杉謙信

～西軍ｓｉｄｅ～

幸村
「うぉぉぉおおお！！！　この幸村！　全身全霊を賭ける思いで行かせて頂く！！」

清正
「ここ辺りで貢献しねぇとな……参加するぜ」

霞
「ウチも出るでぇ～！」

西軍は幸村、清正、霞が参戦する。

幸村
「そして勿論！　某は総大将をお館様にお願いしたい所存ですぞ！」

幸村は総大将に信玄を推薦する。

しかし……

信玄
「……否、ワシは総大将をやらん」

信玄はそれを拒否した。

幸村
「な、何と!?　どういう事でございまするか!?」

佐助
「あ～れま、そんな事言うなんて珍しいですね。相手はきっと謙信だと思いますぜ?」

信玄
「心配するな、競技自体には参加する。しかし、ワシは一般兵として戦う」

霞
「なんやびっくらこいたわ～」

秀吉
「……ならば誰を総大将に座らせる?　謙信相手にそれ相応の相手でなければな話にならんぞ」

信玄
「安心せい。ワシは一人の男を推薦する」

半兵衛
「へぇ～……あの信玄先生が推薦ですか。気にはなりますね」

そんな信玄はゆっくりと歩んでいき、ある男の前に止まった。

その男は……

信玄
「ワシはお主を推薦する……左近よ」

左近
「……俺ですかい？」

左近であった。

左近
「冗談は止めてくださいよ信玄公。こんなつい最近やってきた人間にそんな大役は似合いませんよ」

信玄
「ワシは本気だ左近」

左近は冗談だと苦笑いしていたが信玄の目は真剣そのものだった。

左近
「……信玄公はあの謙信公と戦いたくないんですか？」

信玄
「……戦いたくないといえば嘘になる。だがな左近よ、ワシはお主……いや、お主らの成長を見届けなければならん。故にワシの感情より若き魂を活かす事を優先させる」

左近
「……」

信玄
「それを含めワシはお主を総大将に推薦する。わかってくれたか？」

幸村
「お館様……左近殿、某も貴殿を総大将としてやって貰いたい。頼む」

左近
「……皆さんはどう思っていますか？」

左近は出場する選手に聞く。

清正
「俺も最近コッチに来たから何も言えないが……ここまで信頼されているんだったらやってもいいんじゃねぇか？」

霞
「あんな信玄先生見たんははじめてや。ちゅーわけでウチはええで！」

しかし二人は簡単に承諾する。

左近

「……ハァ」

左近は軽くため息をつき……

左近
「わかりました。どこまで出来るかわかりませんがやってみます」

総大将を承諾した。

信玄
「それでこそワシの弟子よ！　天晴れ！」

総大将・島左近

地和
「それぞれの総大将が決まったようです！」

蒲公英
「それでは代表者はグランドにお願いします！」

そして両軍の代表者は馬に乗り、グランドに立つ。

地和
「準備は良いですか？　よ～い、どん！」

競技開始！

左近
「まずは……幸村さん率いる先駆け隊（２０人）、突撃してください」

幸村
「心得た！　参るぞ！」

西軍
「「「「応ッ！！」」」」

先に動いたのは西軍。
幸村率いる先駆け隊が東軍に突撃する。

謙信
「（かいのとらがたいしょうではない？）　……それぞれのぶたいはたいき、てきをぞんぶんにひきつけなさい」

謙信は向こうの総大将が信玄ではない事を気にしていたが、すぐさま指示をし、全員を待機させる。

左近
（攻めてこない？　……なにかの策か？）

そんな東軍の動きに左近は少しながら疑問を持つ。
しかし、此処は策があったとしても突撃をさせる。
そして待機している東軍と突撃した先駆け隊が衝突する寸前になった時……

謙信
「いまです。せんとうぶたいはうかいをおねがいします」

東軍が遂に動いた。
しかし、先駆け隊との衝突をさけ、突如迂回をはじめた。

幸村
「敵を前にして衝突を避けるとは情けなし！　皆の者！　目指すは大将ぞ！」

西軍
「「「「応ッ！！」」」」

幸村は相手を情けないと思い、総大将の謙信に突撃する。

だが……

左近
「マズい！　幸村さん、後退をお願いします！」

左近は謙信の策に気付き、幸村に後退を呼び掛ける。

幸村
「後退だと！？　何故だ！」

左近
「説明の時間はありません！」

だが、それすらも遅かった……

東軍
「「「「うぉぉぉぉお！！！」」」」

幸村
「ッ！？　何と！」

迂回した先頭部隊とは別の部隊が左側から現れ、先駆け隊に奇襲した。

幸村
「下がれ！」

幸村はどうにか奇襲を避けたが、先駆け隊の半数以上は脱落した。

謙信
「ゆっくりとしんぐんを」

奇襲した部隊は先程の部隊と同じように迂回をはじめる。
すると左側から別の部隊が現れ、奇襲した部隊と同じように動く。
それを四つの部隊（一つの部隊、１５人）が謙信を軸にぐるぐると回る。
その中心にいる謙信はゆっくりと進軍する。

左近
（車懸りの陣……扱いにくい陣形をいとも容易く扱うなんてな）

“車懸りの陣”
正史においても上杉謙信が得意とされ、川中島の戦いでも使われた経緯がある陣形。
しかし、効率の悪さから実際に実用されたかは不明。

左近
「（いや、謙信公からすればあの陣形すらも囮。本命は……）清

正さん、何人か連れて幸村さんの援護に向かってください」

清正
「了解した！」

左近は謙信の動きを読みながら指示をする。

一方の幸村は……

幸村
「クッ！　情けないのは某であったか……一時撤退せよ！　殿は某が仕る！」

情けない自分を噛み締めながら残りの先駆け隊を撤退させる。

政宗
「Ｈａ！　自ら殿とは大したもんだ！　軍神、悪いが出るぜ！」

謙信
「かまいません」

小十郎
「この小十郎もお供します」

政宗
「ＯＫ！　しっかりと俺についてきな！」

そして政宗と小十郎は殿を行っている幸村へと向かった。

幸村
「ぬぅぅぅおぉぉぉぉぉおりゃぁぁぁぁぁあ！！」

東軍
「「「「グハァァアッ！！」」」」

その幸村は力一杯槍を振り回し、東軍を吹き飛ばしていた。

そこへ……

政宗
「真田ァァア！！」

幸村
「ッ！？　政宗殿！」

両手を離しながら馬に乗った政宗とその後ろに合わせるように馬に乗る小十郎が現れた。

政宗
「小十郎！　邪魔だけはすんなよ！」

小十郎
「はっ！」

小十郎は一旦止まり、政宗は幸村に全速力で向かい……

政宗
「Ｙａ－Ｈａ！！」

幸村
「うぉぉおお！！」

幸村と相俟った。
幸村もそれに答え、槍を全力でぶつける。

政宗
「相変わらずｃｒａｚｙな奴だな！」

幸村
「政宗殿こそ！」

そう言って幸村と政宗は激しい打ち合いが始まる。
そこへ……

清正
「間に合ったか。真田、今助ける！」

幸村の援護として清正がやってきた。

そしてそのまま幸村に向かおうとしたが……

小十郎
「待ちな。ここからは通行禁止だ」

小十郎が立ちふさがった。

清正
「……なら、まずはテメェの旗を狩って真田を助ける」

小十郎
「……やってみせな。出来るならな」

そして清正と小十郎の得物が激突した。

謙信
「（……そろそろ、おわりにいたしましょう）ぜんぐん、じんけいをやめ、しんげきをおこなってください」

利家
「よし！　全軍、突撃だ！」

翠
「よっしゃあ！」

その様子を見ていた謙信は好機と捉え、陣形を解除し、全軍を進軍させた。

左近
「全軍、それぞれ反撃を行ってください。信玄公は利家公に向かい、霞さんはあの女性に応戦をお願いします」

信玄
「心得た」

霞
「頑張るで！」

それに対し左近は冷静に判断を行い、反撃に転じた。

利家
「信玄公が相手か！　手は抜けんぞ！」

信玄

「抜けば主が負けるぞ、犬千代」

翠
「コッチとら馬には慣れてんだよ！　悪いが負けねえぜ！」

霞
「へぇ～……なら、相手にとって不足なしや！」

地和
「これは凄まじい戦いになりました！」

蒲公英
「果たしてこの騎馬戦を制するのはどちらなんでしょうか！？」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

両軍の主力がぶつかり合い、残ったのは総大将のみとなった。

左近
「……これが軍神、謙信公の軍略ですか？」

謙信
「……」

左近

「まずはあの陣形を作り、距離を確実に近付かせる。その後、政宗さんと幸村さんを戦わせ、それを起爆剤として軍の主力同士を戦いに行かせる。そして……残った俺の旗を直接狙う。間違っていますか？」

謙信
「いえ、そのとおりです」

左近は謙信の軍略を全て言い当てる。
しかし、そこに疑問が生まれる。

謙信
「そこまでよめたのであれば、なぜみずからわたくしのぐんりゃくにはまったのですか？」

左近は既に上杉の軍略に気付いていた。
だが、左近はその軍略にワザと引っかかったのだ。

左近
「ええ、引っかかっりましたね。ですが……もし、この軍略こそが俺の“軍略”だったとしたらどうしますか？」

謙信
「……ほぅ」

左近

「この状況は確かに仲間を呼べない。しかし、それは謙信公も一緒な筈です」

謙信
「……つまり、わたくしにかつということですか？」

左近
「それはどうですかね？　ハァア！」

掛け声と共に、左近は全速力で謙信に向かう。

謙信
「ちまよいましたか？」

左近
「さぁね！」

そして左近は自分の得物を思いっきり振り下ろし、謙信を横切る。

謙信
「……」

左近
「……流石は軍神です」

謙信

「あなたもみごとでしたよ」

左近
「謙信公に褒められるとは……少し自慢に……なり‥そう……だ」

そして左近が倒れると同時に旗が折れる。

地和
「競技終了！！　西軍の総大将が倒れました！」

蒲公英
「勝者は東軍です！！」

観客
「「「「ワァァァァア！！！」」」」

東軍・二百五十点

謙信
「みなさん、よくがんばりました」

政宗
「ああ……だが、納得はできねぇな」

謙信
「なっとく……ですか？」

政宗
「俺は真田と戦っていたがな、正直馬の上では真田がＷｉｎｎｅｒだな」

小十郎
「俺も銀髪にやられそうになりました」

利家
「某なんか信玄公に敗れたぞ……」

翠
「あたしもだ……あ～あ、馬術部の名に傷をつけちまったぜ」

謙信
「……」

謙信はそれぞれの感想を聞き……

謙信
「これが……ねらいだったのですね」

左近の軍略に気が付いた。

謙信
「（みずからをぎせいにし、しょうりをもたらそうとしたのですね）

……きばつなぐんりゃくですが、しょうらいがたのしみなじんぶつですね。かいのとら、すばらしきいつざいをみつけましたね」

謙信は微笑みながら若き魂を見届けた。

佐助

「……これ、体育祭（汗）」

午後の部・騎馬戦（後書き）

今回は騎馬戦でした。

完全に体育祭の領域を越えている……（汗）

しかも、ギャグが非常に書きづらい（汗）

そろそろギャグが書きたい……

次回で体育祭の競技は終わります！

それでは、また次回！

最終競技・決闘

最終競技・決闘

体育祭において尤も人気がある競技。
ルールは1対1の武力勝負（一回のみ）。
単純だが、この競技は非常にポイントが高い。
更に、選手はランダムで誰が闘うかも皆知らない。
武力で有名な恋ＢＡＲＡ学園故に観客はこれだけを楽しみしている人は多い。

蒲公英
「いよいよ最終競技・決闘です！」

地和
「非常に人気のこの競技。果たして今年はどんな熱き闘いが見れるのでしょうか！？」

観客
「「「「ワァァァァ！！！」」」」

最終競技とあって会場の雰囲気は最高潮を迎えていた。

地和
「最早説明など不要！　すぐにクジを引かせて頂きます！」

皆は電光掲示板に注目する。
地和がボタンを押す。
すると電光掲示板が光始め、名前が次々と出てくる。

地和
「まず、東軍代表者は……この人！」

地和が再びボタンを押すと、電光掲示板は一人の名前を残し、止まった

“徳川家康”

蒲公英
「家康選手です！」

家康
「……ワシか？」

桃香
「家康君、頑張ってね！」

慶次
「頑張りな！」

家康

「……ああ」

そして家康は舞台に上がる。

蒲公英
「新生ＢＡＳＡＲＡ大会では三成選手と互角の勝負をしました家康選手。今回も熱き闘いの予感がします！」

地和
「さてさて、そんな家康選手と闘いを繰り広げる西軍代表者は！？」

地和はボタンを押し、西軍の電光掲示板を止めた。

そこに書かれていた名前は……

“真田幸村”

幸村だった。

地和
「幸村選手だ！」

幸村
「おお！　某か！？」

蓮華
「幸村、頑張ってね！」

信玄
「恥じぬ闘いを見せよ！　幸村ァア！」

幸村
「はい！！」

幸村も舞台に上がり、両者は舞台の真ん中で闘いの時を待つ。

蒲公英
「新生ＢＡＳＡＲＡ大会では政宗選手に惜しくも敗れましたが間違いなくかなりの強者です！」

地和
「この闘いは非常に期待できます！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

蒲公英
「それでは……試合開始！！」

競技開始！！

幸村
「家康殿、良き闘いにしようぞ！」

家康
「……行くぞ幸村！」

幸村
「応ッ！！」

短い会話の後、最初に動いたのは家康だった。

家康
「虎牙玄天！！」

幸村
「フッ！」

家康の素早いボディブローを繰り出すが、幸村はその攻撃を防御する。

幸村
「次は此方だ！　千両花火！！」

家康
「グッ！　危なかったなぁ～」

次に幸村が懇親の一撃を放つ。
その攻撃を家康はギリギリのところで避ける。

家康
（しかし……これが幸村の実力か？）

だが、今の一撃に疑問を持つ家康。
幸村の実力はわかっているつもりだが、今の一撃は明らかに脆弱な一撃。

幸村
「オラ、オラ、オラァァア！！」

家康
（やはり……何か足りないぞ）

それを余所に幸村は次々と連撃を繰り出す。
その攻撃を容易く避ける家康。
そして先程の疑問は確信へと変わった。
やはり、いつもの幸村ではない。
それは会場の実力者にも伝わっていた……

政宗
「……何だアレは？」

華琳
「あら、どうかしたの？」

政宗
「俺はアイツと闘ってｒｅａｌ　ａｂｉｌｉｔｙを知っているつもりだ。だが、今のアイツは何かにＨａｕｎｔｉｎｇなのか知らねぇがそこら辺の雑魚と一緒だ。ｒｉｖａｌと思っていた俺が馬鹿みてぇだ」

華琳
「……厳しいわね」

政宗
「今のアイツには充分過ぎる」

信玄
「……やはりな」

蓮華
「幸村、どうしたのかしら……」

信玄
「主も気付いたか」

蓮華
「はい。今の幸村は何かに怯えているような攻撃しかしておりませ

ん」

佐助
「あ～あ、俺様見てらんない」

信玄
「……幸村は騎馬戦の時、自らの熱き魂が軍の敗北に導いたと勘違いしておる」

蓮華
「……それじゃあ」

信玄
「うむ、幸村は今、熱き魂を殺しながら闘っておるのだ」

幸村
（落ち着くのだ幸村。此処で熱くなっては先の戦の二の舞ぞ）

家康
「相手を前に考え事か？　幸村よ」

幸村
「ッ！？」

家康
「天道突き！」

幸村
「ゴハッ！！」

信玄の言う通り、幸村は自らの魂を殺しながら闘っていた。
常に自分との闘いもあってか家康が懐に入られてた事すら気付かず、
強烈な一撃を喰らってしまい、吹き飛ばされてしまう。

幸村
「ゴホッ……クソ！」

家康
「……幸村」

幸村
「な、何でござるか？」

家康
「何故本気で闘わないのだ？」

幸村
「……」

家康
「今のお主は一撃の重みが軽い。何があったかわからんがいつもの幸村ではない」

幸村
「……否、某は今熱くなってはいけん！　ハァア！」

幸村は家康の言葉に焦りを感じ、我を忘れ槍を振るう。

家康
「……フッ！」

幸村
「何と！？」

しかし、その槍は家康に簡単に止められてしまい、槍を掴まれてしまった。

家康
「それではダメなんだ幸村！」

幸村
「ッ！」

家康
「それでは……お主は後悔しか生まん！」

そう言って家康は拳を強く握り締め……

家康
「ハァァア！」

幸村
「ガハッ！！」

幸村の顎目掛け、殴り飛ばした。
幸村は宙に舞い、そのまま倒れ込んだ。

地和
「おぉーっと！　幸村選手倒れていまいました！！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

蒲公英
「此処でカウントです！　ワン！　ツー！」

そしてカウントが開始され、敗北が近付いてくる。

幸村
（……やはり、某は弱き男か。ならばこのまま負けを認めよう）

その中で幸村は自ら弱さを噛み締め、ゆっくりと目を瞑る。
そのまま負けを認め、起き上ろうとはしない幸村。

しかし……

政宗
「いい加減にしやがれ！！」

幸村
（……政宗殿？）

その様子を見ていた政宗が幸村に怒鳴りつけた。

政宗
「テメェはそんな事で負けを認めんのか！？　そこまで落ちぶれたのか！？　ならそのまま負け犬のように一生寝ていろ！！」

幸村
「……」

政宗は今までの幸村に納得が出来ず、同時に怒りが我慢が出来なかったようだ。
そして自分の気持ちをぶつけた政宗。

さらに……

信玄
「幸村ァァア！！」

幸村

（ッ！？　お館様！）

信玄もまた幸村に声を掛ける。

信玄
「お主は勘違いをしておる。先の敗北はお主一人の敗北ではない、皆の敗北なのだ！！　それをいつまでも引きずるではない！」

幸村
「お館様……」

信玄
「自分に返るのだ！！　幸村ァァア！！」

幸村
「ッ！！」

信玄の言葉で自分の情けなさに気付く幸村。

蒲公英
「シックス！　セブン！」

幸村
「グググ……」

地和

「ッ！　立ち上がりました！」

観客
「「「「オォォォォオオ！！！！」」」」

蒲公英
「それでは再開です！！」

幸村が立ち上がり、試合が再開された。

幸村
「スー……ハー……」

家康
「……？」

幸村は立ち上がった途端、深呼吸を始める。
家康はその行動で疑問を持つ。

しかし、すぐさま……

幸村
「ぬううおおォォォォォォォォオッ！　み、な、ぎ、るあァァァァァァ！！！！」

家康

「ッ！？」

幸村と叫び声で家康は身構えた。

幸村
「往くぞ！　家康殿！！」

家康
「む、来るか！」

幸村
「大車輪！」

家康
「甘い！」

いきなり動きが変わった幸村に少し驚くが、空中へと打ち上げようとする攻撃には反応して後退する家康。

だが……

幸村
「鳳凰落！！」

家康
「なッ！？　……グッ！！」

家康の後退を読んでいた幸村。
飛び上がってすぐさま槍を家康に叩きつける。
これには家康も反応が遅れ、まともに喰らう。

家康
（いきなり動きが変わった？　いや……）

幸村
「闘いの最中に考え事でござるか！？　家康殿！！」

家康
「ッ！？」

幸村
「虎炎ッ！！」

家康
「グハァ！！」

まるで先程とは打って変わって凄まじい動きに感心する家康。
そう思っていた家康は幸村に殴り飛し、砂埃が舞う。
先の幸村と同じように。

幸村
「……」

家康
「……どうやらフッ切れたようだな、幸村よ」

やがて砂埃が晴れるとダメージを喰らった家康が立っていた。
しかし、その顔は笑顔だった。

幸村
「某は勘違いをしていた。熱くなる事で周りが見えなくなり、皆に迷惑を掛けてしまっていると思ってしまった」

家康
「……」

幸村
「……だがこの幸村！　槍を奮う以外芸なき男！！　それ以外の道などござらん！！」

家康
「……そうだ。それでこそ、ワシが闘いたかった幸村だ！！」

幸村
「最早自分を殺す事などない！　さぁ家康殿！！　勇んで参られよ！！」

家康
「幸村よ……ワシもやるからには負けん！」

幸村
「ウオオオオオッ！！　熱血ゥゥゥ大噴火ァァァア！！！」

二人は自らの氣を最大限まで高める。

そして……

家康
「東風の乱舞ッ！！」

幸村
「大、烈火ァァァァァァア！！」

激しい連撃が始まる。
目にも止まらぬ速さでぶつかり合う両者。

政宗
「やっと目覚めたか……あの馬鹿は」

華琳
「嬉しそうね、政宗」

政宗
「……ああ」

蓮華
「……いつもの幸村ね」

佐助
「ハァ～……旦那も単純だな」

家康
「ハァァァアア！！！」

幸村
「ぬおおおォォォォォオオ！！！」

凄まじい打ち合いはスピードが落ちる事はなく、逆に増していっている。

しかし……

家康
「セヤァア！！」

幸村
「オゥラァァア！！」

二人は打ち合いをやめ、一旦距離を置く。

そして……

家康
「架け橋となれ、ワシの拳よ!!」

幸村
「巡れ火之魂、螺旋の如く!!」

互いの渾身の一撃を繰り出した。
その瞬間、地面は抉れ、会場には突風が吹く。

地和
「わわッ!?」

蒲公英
「は、果たして勝者は!?」

皆が舞台に目を向けると……

家康
「……」

幸村
「……」

両者は互いに背を向き合いながら静かに立っていた。

家康
「……」

幸村
「……感謝する、家康殿」

家康
「ワシは何もしておらん」

幸村
「否、貴殿でなければ某は間違った道を歩んでいた。本当の自分を見つける事が出来た」

家康
「……」

幸村
「これで……後悔しなくて……すむ」

そして幸村はそのまま倒れた……

地和
「幸村選手倒れました！！」

蒲公英

「それではカウントを……」

信玄
「否、もう必要ない」

蒲公英
「へ？」

信玄
「今の幸村に立つ気力は既にない。勝負は決した」

蒲公英
「で、では幸村選手の敗北で構いませんか？」

信玄
「うむ」

地和
「という事で、勝者は家康選手です！！」

観客
「「「「ワァァァァ！！！」」」」

会場は素晴らしい闘いが見れ、大盛り上がりしていた。

家康
「……」

幸村
「……」

家康
「……見事だ、幸村よ」

家康は幸村に頭を下げ、舞台から降りるのであった……

最終競技・決闘（後書き）

今回は家康ｖｓ幸村の闘いでした。

二人とも熱い男ですね～

さて、次回は結果発表と後日談になります。

そして再びアンケートを実施します。

それでは、また次回！

結果発表・後日談

地和
「結果発表ォォォオ！！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

体育祭が終わり、全生徒がグランドに集まっていた。

蒲公英
「まずは選手の皆様、お疲れ様でした！」

地和
「今年も様々な熱き闘いが展開されました。汗と涙の場面もいっぱいありました」

蒲公英
「しかぁぁぁあし！　勝負とは非情なり！　常に勝ち負けの世界！　ある軍は勝利を勝ち取り、ある軍は泥水を啜る……」

地和
「なんかこれ以上は面倒くさいのでさっさと始めましょうよ」

蒲公英
「えぇ～…もっと遊びたい～」

地和
「いやいや、みんな気になっているから（汗）」

蒲公英
「ちぇ……それでは！　まずは東軍からです！」

そして皆は電光掲示板に注目する。

地和
「東軍の点数は……此方です！」

“東軍・六千四百点”

蒲公英
「六千四百点です！」

家康
「うむ！　中々の点数だな！」

桃香
「そうだね♪」

政宗
「……他の体育祭もこんなもんなのか？」

華琳

「それはないわね」

政宗
「……」

地和
「さてさて……高得点を叩き出した東軍に、果たして西軍は勝てるのでしょうか!?」

そして再び電光掲示板に注目する。

蒲公英
「では……西軍の点数は!?」

幸村
「……」

蓮華
「……」

三成
「……」

月
「……」

秀吉
「……」

観客
「「「「「……」」」」」

皆は点数が気になり、異様な静寂が訪れる。

蒲公英
「此方です！」

“西軍・六千三百五十点”

地和
「六千三百五十点！　つまり……」

蒲公英
「勝者は、東軍です！」

観客
「「「「ワァァァア！！！」」」」

東軍
「「「「ヒャッホォォォォオオイ！！！」」」」

勝利とわかった瞬間、異様な盛り上がりを見せる東軍。

卑弥呼
「フム、負けたか……」

久秀
「これも一興ですな」

卑弥呼
「ブァッハッハッハ！　この儂も老いたわ！」

秀吉
「言い訳は好かん。敗者は黙って勝利に従うのみぞ」

三成
「クッ、また負けたのか……家康ゥゥ！」

信長
「敗者は斬首のみ……ぞ」

官兵衛
「物騒な事を言うな！」

元親
「やっぱ勝つってのは気持ちが良いぜ！」

紫苑
「ふふふっ♪」

地和
「それでは！　体育祭に勝利しました東軍の総大将と生徒代表は前にお願いします！」

名前を呼ばれた二人は前に立ち、賞状とトロフィー、そして副賞の賞金が渡された。

蒲公英
「勝利しました信長校長、何か一言お願いします」

信長
「この世に死をくれてやる！」

地和
「はい、全く意味不明な答えありがとうございま～す」

こうして歓喜に包まれながら体育祭は終了した……

～翌日・１－Ｂ～

桃香
「か、身体中痛い……（涙目）」

愛紗
「全く……だらしないですよ、桃香様」

桃香
「だ、だって私愛紗ちゃんみたいに強くないもん」

星
「……気付かぬ内に出来たお腹周りの肉」

桃香
「ギクッ！（汗）」

星
「いつかダイエットを行う予定で1ヶ月が経過……未だに行動に移せていない状況」

桃香
「ギクッ！　ギクッ！（汗）」

星
「流石に危機感を感じ、様々なダイエットを試すが全て3日坊主……」

桃香
「ギクッ！　ギクッ！　ギクッ！（汗）」

星
「そして興味本位で体重計にいざ乗ると……」

桃香
「いやぁぁぁぁぁぁあ！！？」

星
「それが嫌なら常日頃から運動をやる事だな」

翠
「星……お前鬼だな（汗）」

体育祭翌日。
１－Ｂのクラスは昨日の体育祭の疲れがきていた。
主に体育祭の次の日は出席のみ。
そこからニ日間は休みとなる。

愛紗
「星の言う通りですよ。さ、明日からしっかりと運動を致しましょう」

桃香
「うぅ……でも～」

愛紗
「でも～……ではありません！」

家康
「どうした愛紗？　そんな怒鳴ったりして」

愛紗が桃香に注意をしていると家康がやってきた。

桃香
「あ、家康君」

愛紗
「家康殿からも言ってやってください」

家康
「？　何をだ？」

愛紗
「桃香様は少し運動をした方が良いという事をです」

家康
「ああ、そういう事か。確かに少しは運動した方が健康的だぞ」

桃香
「あはは……それはわかっているんだけどね～（汗）」

家康
「それなら、ワシも一緒にやろうか？」

その何気ない一言により……

桃香
「ッ！！　ホント！？」

乙女（獣）の心に火をつけた。

家康
「ああ、本当だ。ワシも少し体を動かしたくてな」

桃香
「やる！　絶対にやるよ！！」

家康
「おお！　ならば一緒に頑張ろう！」

桃香
「うん！」

予想外な嬉しいアクシデントにより家康との時間が増えた桃香。
だが、此処で思い出して貰いたい。

乙女（獣）は……

愛紗
「それならば私も協力しましょう」

桃香
「む！」

1人ではない事を。

愛紗
「せっかく桃香様がやる気になったのです。その努力をこの目で確かめたいのです（ヒトリジメハダメデスヨ？）」

桃香
「そんなに心配しなくても大丈夫だよ～。愛紗ちゃん（ヤルヨウニナッタネ、アイシャチャン……）」

表向きは仲の良い会話をしているが、内面はドロドロ過ぎる二人。
だが、もう一度思い出して頂きたい。

乙女（獣）は……

朱里
「わ、私も参加したいです！」

焔耶
「お館！　是非この焔耶めも参加させて頂きたいです！」

大勢いると！

家康
「うむ、みんなで体を動かせば楽しい筈だ！」

朱里

「あ、ありがとうございます」

焔耶
「頑張ります！」

こうして皆で体を動かす事になった１－Ｂ。

桃香
（家康君と絶対に二人っきりに……）

愛紗
（家康殿は必ず私と！）

朱里
（はわわ……雛里ちゃんと協力しよう）

焔耶
（お館と一緒に体を動かす……この上ない喜びだ！）

家康
「……？」

女性陣の想いを熱くさせて……

体育祭編……

“完”

結果発表・後日談（後書き）

今回で体育祭編は終了します。

うむ、終わり方が最悪だな！

……すんません。

体育祭編は競技に力を入れた為、終わり方を一切考えておりませんてした。

お許しを（泣）

さて、次回からは日常編に入ります。

リクエスト募集中です！

よろしくお願いします！

それでは、また次回！

第六十一話、生徒会室にて……（前書き）

～前書き劇場～

恋
「……」

忠勝
「……？」

恋
「……ん」

忠勝
「！！？」

恋
「……わかった」

霞
「何がやねん！？」

白蓮
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぞ～」

第六十一話、生徒会室にて……

～あらすじ～

体育祭が終わり、一週間が経過した……

～廊下～

麗羽
「痛ッ！？　……全然、筋肉痛が取れませんわね～」

麗羽は筋肉痛に悩まされながら放課後の会議の為、生徒会室に向かっていた。
ちなみに、猪々子と斗詩は用事の為、遅刻している。

麗羽
「ともかく早く生徒会室に行かなければなりませんね。愛しの半兵衛様が……アタタ（汗）」

ヨレヨレながら生徒会室に向かう麗羽。

～生徒会室～

麗羽
「や、やっと……着きましたわ」

体中悲鳴を上げながらもようやく生徒会室に到着した麗羽。

麗羽
「この扉の向こうには半兵衛様が……／／／」

軽く妄想に入りながら、扉を開ける麗羽。
そこには……

秀吉
「む、麗羽か。ご苦労だ」

半兵衛には程遠いムサい男、秀吉が席に座っていた。

麗羽
「……半兵衛様は？」

秀吉
「半兵衛は少し用事があるらしく、遅刻する」

麗羽
「……他の人達もですか？」

秀吉
「ああ」

麗羽
「そうですの……では、わたくしも待たせて頂きますわ」

麗羽は自分の席に座り、皆が来るの待った。

秀吉
「……」

麗羽
「……」

秀吉
「……」

麗羽
（き、気まずいですわね……）

二人に接点はない為か、生徒会室は異様な静寂が訪れていた。
麗羽はその空気に耐えられず、何かないかと考え始める。

そして……

麗羽
「ひ、秀吉さん！」

秀吉
「む、何だ？」

麗羽
「皆が来る間、ゲームで時間を潰しません？」

ゲームを提案した。
……何故ゲーム？

秀吉
「……良かろう」

麗羽
「おーっほっほっほ！　負けませんわよ！」

秀吉
「やるからには全力で立ち向かおう！」

秀吉も秀吉で麗羽の提案に乗り、何故かやる気を出していた。

麗羽
「ではまずは……これですわ！」

そして麗羽が取りだしたのは……

麗羽
「黒髭危機一●ですわ！！」

某剣刺しゲームだった。

秀吉
「……まぁよかろう」

麗羽
「では、わたくしからですわ」

麗羽は剣を持ち、一つ目の穴に刺した。
刹那、人形が勢いよく飛んだ。

麗羽
「……」

秀吉
「……」

しばしの無言。

秀吉
「……次は我から始めよう」

麗羽
「……お願いしますわ」

そして人形を戻し、秀吉から再び再開された。

秀吉
「……此処だ！」

すると再び人形が勢いよく飛び出してしまった。

秀吉
「……」

麗羽
「……」

何故か一刀目で飛び出してしまう二人。

だが、これは運が悪いのではない
運が良すぎて穴を当ててしまうのだ。

麗羽
「……他のゲームに致しましょう」

秀吉
「……ああ」

二人剣刺しゲームを片付け、他のゲームに移る。

麗羽
「次はジェン●でも致しましょう！」

秀吉
「構わぬ」

次に用意したのは某積み上げゲーム。

麗羽
「では、わたくしが華麗に始めますわよ！」

秀吉
「うむ」

そして麗羽はブロックを持ち……

麗羽
「そぉい！」

引き抜いたと同時に華麗な（？）ポーズを決める。
その瞬間、麗羽の周りに薔薇の花びらが舞う。

麗羽
「ご覧になりましたか秀吉さん！　この可憐なポーズ！　何もない空間から突如として現れる薔薇！　全てが完璧！　パーフェクトですわ！　おーっほっほっほ！」

何かに納得したようで高笑いしていた。

秀吉
（……何だ？　この無意識に湧き出る苛立ちは？）

人それを“ストレス”と言う。

麗羽
「さぁ秀吉さん。次は貴方ですよ」

秀吉
「……わかった」

次の番の秀吉は麗羽が取ったブロックの逆サイドを掴み……

秀吉
「フン！」

凄まじい速さで引き抜いた。
ジェン●は鐚一文動かない。

麗羽
「な、中々やりますわね……」

秀吉
「これくらいの芸当、我にとっては容易い！」

麗羽
「おーっほっほっほ！　やっと勝負らしくなってきましたわね！
これは負けられませんわ！」

秀吉
「我に敗北などありえん！」

ジェン●でかなり盛り上がる二人。
その後はかなり白熱した戦いとなり、両者一歩も譲らないブロックの引き合いが続く。

そして……

麗羽
「……積み上げ終わりましたね」

秀吉
「うむ」

全てが一本のブロックで支えるタワーが完成した。

麗羽
「はぁ～……何か貴方とは勝負が着かない気がしてきましたわ」

秀吉
「……そうか」

麗羽
「それにしても皆さん、遅いですわね～……一体、何処で何をしてらっしゃるのですか？　全く……」

秀吉
「そう言うな。皆とて暇ではないのだ」

麗羽
「……」

秀吉
「どうした？」

麗羽
「いえ……秀吉さんが随分と丸くなられていたので少し呆気にとられていましたわ」

秀吉
「丸く？」

麗羽
「昔の秀吉さんは力無き者はすぐに捨てる御方。ですが、今は弱き者にも救いの手を差し出すようになりましたわね」

秀吉
「……」

麗羽
「秀吉さん。一体何かありましたの？」

麗羽は秀吉に思っていた疑問をぶつけた。

秀吉
「……」

麗羽
「……まぁ、言いたくなければ無理に」

秀吉
「……されたのだ」

麗羽
「え？」

秀吉
「説教されたのだ。我が1年生の時に。同じ1年生に」

麗羽
「……説教？」

秀吉
「うむ。そのやり方で学園は良くならんと言われ、全力の拳を喰らった」

麗羽
「……」

秀吉
「その説教で我は過去を振り返った。そして自らの過ちに気付いたのだ」

麗羽
「そこからですの？　性格が丸くなったのは？」

秀吉
「かも知れぬな……」

そして生徒会室は再び、静寂が訪れる。

しかし、すぐ……

半兵衛
「すまない、遅くなったね」

生徒会室の扉が開き、半兵衛が入ってきた。

麗羽
「半兵衛様！／／／　お待ちしておりましたわ！／／／」

半兵衛の登場でテンションが急上昇した麗羽。

更に……

猪々子
「すんませ～ん！　遅れたッス！」

斗詩
「文ちゃん……しっかり謝ろうよ～（汗）」

三成
「申し訳ありません秀吉様！　謝罪は私の首を差し上げます！」

月
「それはやり過ぎだよ……みっちゃん（汗）」

大谷
「これも世の理か……」

七乃
「大谷さん、何言ってるんですか？」

清正
「すいません、遅れました」

正則
「すんません！」

ねね
「お前さん、暇だから来ちゃったよ！」

続々と生徒会メンバーが入ってきて、全員集まった。

秀吉
「……全員、直ちに着席。会議を始めるぞ」

一同
「「「「応ッ！」」」」

こうして、いつも通りの生徒会が始まった……

第六十一話、生徒会室にて……（後書き）

今回はリクエスト、百鬼丸様から頂きました。

上手く書けない……すいません！

さて、気を取り直して……

次回はリクエストではなく、忙しい人がサクッと読める話を書きます。

それでは、また次回！

忙しい人の為の小話・その？（前書き）

この話は本編に関わっておりません。

読みたい御方だけどうぞ！

忙しい人の為の小話・その？

～授業風景・国語編～

最上
「それじゃあ今から我が輩直々の小テストを行うよ！」

春蘭
「なッ！　聞いてないぞ！」

最上
「仕方ないんだよ。何故なら我が輩が特別な存在だからね！」

小十郎
（答えになってねぇ……）

小テスト中……

最上
「終了だよ！　それじゃあ君、回収したまえ！」

採点中……

最上

「採点が終わったよ！　一人ずつ取りにきたまえ！　秋蘭君」

秋蘭
「はい」

最上
「良かったよ。君にはスーパーデラックス点を差し上げよう！」

秋蘭
「あ、ありがとうございます（汗）」

最上
「次に春蘭君、君はもう少し妹を見習いたまえ。ミドル点だ」

春蘭
「……クッ！」

最上
「そして華琳君！　君は大変素晴らしい！　ウルトラスーパーデラックスダイナミックスペシャル合格点を上げよう！！」

華琳
「……」

政宗
（う、うぜぇぇぇぇえ！！！）

～何故か……～

昼休み……

清正
「クソ……おねね様と話してたら出遅れた」

清正は昼御飯を買うため購買に来ていた。

同じ頃……

政宗
「Ｈａ～……まさか小十郎の弁当を忘れるなんてな」

政宗もまた購買に買いに来ていた。

清正
「えっと……お、焼きそばパンが一つだけあるな」

政宗
「ん～……焼きそばパンが一つ余ってるな」

二人は購買されている物を確認し、焼きそばパンに手を伸ばした。

そして……

清正
「ん？」

政宗
「Ａｈ？」

二人の手が重なった。

清正
「……悪いが俺の方が早かったな。手を離してくれ」

政宗
「Ａｈ？　寝言は寝てから言え。俺の方が早いに決まってんだろ」

清正
「テメェこそ何言ってんだよ。どう見たって俺だろ……なぁ購買のおばちゃん？」

購買のおばちゃん
「え？　いや、わかんないわよ」

政宗
「テメェｈａｌｌｕｃｉｎａｔｉｏｎでも見たんか？　明らかに俺だろ……なぁ購買のおばちゃん？」

購買のおばちゃん

「だからわかんないわよ！　あと、焼きそばパン千切れそうなんだけと！？」

二人は一向に焼きそばパンを離そうとはせず、千切れそうになっていた。

清正
「オイ、焼きそばパンが千切れそうだとよ。手を離したらどうだ？」

政宗
「そうやって焼きそばパンをｇｅｔする気だろ？　テメェが離せ」

清正
「……よし、なら“いっせ～のっせ！”でお互いの手を離そうじゃねぇか」

政宗
「ちょっと待て。そのｔｉｍｉｎｇは“いっせ～のっせ！”の“せ！”か？　それとも“！”か？」

清正
“！”って何だよ！？　そんな難しいタイミングでやるわけねぇだろ！」

購買のおばさん
「何でもいいから早く買っておくれぇぇぇぇえええ！！！」

～金銭感覚の違い～

麗羽
「猪々子！　斗詩！　食事に行きますわよ！」

猪々子
「いいッスよ～」

斗詩
「何処に行くんですか？」

麗羽
「おーっほっほっほ！　よくぞ聞いてくれましたわ！　このわたくしが！　わ・た・く・し・が！　滅多に行かないお店ですのよ！」

猪々子
「それって……」

斗詩
「つまり……」

二人
（（かなり豪華なお店！？））

麗羽
「それじゃあ行きますわよ」

二人
「「はぁ～い！！」」

麗羽を先頭に滅多に行かないお店に向かう。

そして、到着した場所は……

～コンビニ～

麗羽
「さぁ！　どれでも好きな物を買いなさい！」

猪々子
（……コンビニをお店って……）

斗詩
（……これが金銭感覚の差だね）

二人
「「はぁ～……」」

麗羽
「？　どうかなさいましたの？」

～遊び～

璃々

「大喬さ～ん！　小喬さ～ん！」

大喬
「あ！　璃々ちゃん！」

小喬
「どうしたの？」

璃々
「えっとね、ふたりが帰ってるの見えたから遊ぼうと思ったの！」

小喬
「遊ぼうって……あたし達でいいの？」

璃々
「うん！」

小喬
「まぁ璃々ちゃんがいいなら……お姉ちゃんは大丈夫？」

大喬
「わたしも大丈夫だよ」

小喬
「わかった。それで何するの？」

璃々
「おままごと！」

小喬

「懐かしいわね～……じゃ、まずは公園に行くわよ」

大喬
「わかった」

璃々
「はぁ～い！」

三人は近くの公園に向かった。
しばらく歩いて公園に到着。

小喬
「じゃあおままごとを始めるわよ」

璃々
「大喬さん、いつもやってるおままごとしよう！」

大喬
「あれだね。いいよ」

小喬
「いつもの？」

大喬
「たまに璃々ちゃんと遊んでるの。小喬ちゃんはお父さん役でいい？」

小喬

「まぁ何でもいいわよ」

璃々
「それじゃあ、お父さんは家に帰ってきたところからはじめて♪」

小喬
「はいはい」

小喬は少し離れて、おままごとは開始された。

小喬
「ただいま～」

璃々
「……おかえりなさい」

小喬
「（……あれ？）ご、御飯はあるかな？」

璃々
「そのまえに話があるの。そこに座って」

小喬
「は、はい……」

小喬は流れが掴めぬまま璃々の流れに身を任せた。

璃々
「今日も帰りが遅かったね。何してたの？」

小喬
「し、仕事だよ」

璃々
「ふぅ～ん……」

小喬
「な、何だよ（汗）」

璃々
「……見ちゃったの」

小喬
「へ？」

璃々
「アナタが知らない女と歩いているのを！！　見ちゃったのよ！！」

小喬
「え？　え？」

璃々
「こたえて！　あの女は誰なの！？」

大喬
「わたしが何かしら？」

璃々
「ッ！　お前は！？」

小喬
（あれ？　これおままごと……あれ？）

璃々
「よくも夫を！！」

大喬
「あら、出し抜かれる方が悪いんじゃないの？」

璃々
「クッ！」

大喬
「悲しいわよね～？　数十年以上結婚生活をしていたのに……こんな数日付き合った浮気相手に寝取られて」

璃々
「お前さえいなければ幸せだったのよ！」

大喬
「ふふふっ……負け犬の遠吠えね」

小喬
「終了ーー！！」

大喬

「どうしたの？」

璃々
「今から盛り上がるところだったのに～」

小喬
「何コレ！？　ねぇ何コレ！？」

二人
「「おままごとだよ？」」

小喬
「ドロドロしすぎじゃァァァアア！！」

～危険な笑顔～

月
「みっちゃん」

三成
「何だ？」

月
「さっき氏康先生がクラス委員長は職員室に集まれって言ってたよ」

三成
「何？」

月
「え？」

三成
「私は先程、秀吉様に呼ばれた」

月
「ど、どうしよう、流石に担任を断るのは……」

三成
「秀吉様の命令は絶対だ！」

月
「へぅ……困ったよ～」

月が困っていると……

大谷
「ならば我が秀吉様の用件に行こう」

大谷が協力してきた。

三成
「本当か？　形部」

大谷

「ああ。我も少し用があるのでな」

三成
「そうか。では頼む」

月
「形部君、ありがとうございます」

大谷
「気にするでない。これもギの為よ」

月
「いえ、私達も助かりましたし、感謝しないと。本当に」

そして月は……

月
「ありがとうございます」

最大級の笑顔で感謝の言葉を述べた。
普通の人間なら萌えて死ぬ。

しかし……

大谷
「ッ！　グハァァァァアア！？！！？」

大谷にとっては最大級の毒であった。
目を抑えながら悶え苦しむ大谷。

三成
「馬鹿者!!　形部の前では笑顔を見せるなと言った筈だ!!」

月
「はッ!　す、すいません形部君!」

大谷
「目が!　目がァァァアア!!」

霞
「つーか、友達じゃないんか!?」

～終わり～

忙しい人の為の小話・その？（後書き）

ギャグのリハビリ作品でした。

難しいな～、ギャグって……

頑張ろう。

次回はリクエスト作品です！

それでは、また次回！

第六十二話、活動報告（前書き）

～予告～

蒲公英
「さぁ……いよいよ始まります」

地和
「女性の頂点と言っていいかもしれない闘い……」

遂に始まる！
全ての女性の頂点を決める闘い！

それは……

蒲公英
「萌一１グランプリーーー！！！！」

萌一１グランプリ！！
ルールは単純明快！
会場にいる男性百人を萌えさせろ！

華琳が！？

華琳

「は、早く起きなさい……お兄ちゃん／／／」

桃香が！？

桃香
「貴方がいたから……私は恋を知ったんだよ／／／」

蓮華が！？

蓮華
「もう貴方なしでは……生きていけないの／／／」

全ては萌一1グランプリにて近日連載……

しない！

佐助
「しないの！？」

※しません

今川

「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるでおじゃる！」

第六十二話、活動報告

～あらすじ～

生徒会が会議をしている最中……

～？？？～

桂花
「全員揃ったかしら？」

朱里
「大丈夫みたいです」

とある場所にて。

其処に集まっていたのは……

風
「ぐぅ～」

雛里
「あわわ……お、起きてください（汗）」

小蓮
「寝かせとけば？」

鶴姫
「そうですよ☆」

明命
「お猫様～」

地和
「それにしても暗いわね～」

いつき
「もうちっと明るくなんべぇか？」

個性豊かな人達が集まっていた。
しかし、彼女らにも一つの共通点があった。

それは……

桂花
「ではこれより……“貧乳党”の活動報告を始める」

貧乳党
「「「「御意！！」」」」

極めて胸囲がない事である。

桂花
「まずは……」

佐助
「ちょい待て」

桂花が始めようとした瞬間、佐助が待ったを掛けた。
そもそも何故、佐助が貧乳党の会議にいるのか？

桂花
「何よ？　というより何でアンタが此処にいんのよ！？　７００文字以内で答えなさい！」

佐助
「此処、俺様ん家」

見事７文字で答えた佐助。
どうやら此処は佐助のアパートのようだ。

佐助
「じゃあ俺様も聞きたいんだけど……何で俺様ん家がわかったの？　７００文字以内で答えてくんない？」

桂花

「明命に聞いたの」

此方も7文字以内で回答した。

佐助
「明命ちゃん？」

明命
「あぅあぅ……お、お猫様に手頃な部屋はないかお聞きになりまして」

猫
「にゃ～」

佐助
「なるほど。そこまでは良いとして、どうやって開けたの？」

風
「あ、それは風が開けました～。ピッキングは得意なもので～」

佐助
「いやいや！　犯罪だからね！」

桂花
「諄いわね。そろそろ始めるから黙ってて」

佐助
「家主より偉い！？　……もういいや」

そして佐助は自分のベットに座り込んだ。

桂花
「じゃ、改めて……朱里、報告を」

朱里
「はい」

名前を呼ばれた朱里は返事をし、立ち上がった。

朱里
「今回我らの怨敵、桃香さんに対しての報告です」

佐助
（え？　怨敵？）

朱里
「それは体育の着替えで起きました。桃香さんが体操服に着替えている最中で“あれ？　少し苦しい。また胸が大きくなってるよ～”と一言」

桂花
「あの鉛巨乳が！！（怒）」

雛里

「あわわ……首もげろ」

佐助
（クロッ！？　考え方クロ！？）

話を聞いていた佐助は若干、引いていた。

小蓮
「はいは～い！　シャオもある！」

桂花
「では小蓮。報告を」

小蓮
「あのね、シャオが自宅のリビングでゆっくりしてたら、風呂上がりの雪蓮お姉様が“はぁ～最近、胸が重くて肩が凝るのよねぇ～”と言ってその胸を見せびらかしながら歩いていたのよ！　ホントに有り得な～い！！」

桂花
「あの兇乳！　許すまじ！！」

鶴姫
「その行為は宣戦布告と見做して宜しいですか！？　桂花さん！」

桂花
「否、落ち着きなさい。我らの敵はまだいるわ。その報告が終わってからよ」

鶴姫
「……わかりました」

佐助
（つーかこの会議、俺様ん家でやっていいの？　俺様居ていいの？）

プライバシーが一切ない会議に戸惑う佐助。
そんな気持ちを気にせずに会議は進む。

地和
「ちぃもあるわ！　天和姉さんに対してよ！」

桂花
「報告を許可する」

地和
「それはちぃ達、三人で食事して、その食事が終わった時よ。ちぃと天和姉さんが背筋を伸ばした瞬間……天和姉さんの胸のボタンが外れたのよ！　ちぃが一生懸命伸ばしたのに一切なのに！」

いつき
「そ、そんな羨ましい事をだべか！？」

風
「ぐぅ～」

明命

「穏さんはその胸を武器とし、幸村さんを誘惑していました！」

桂花
「……どうやら鶴姫の言う通りみたいね。これは宣戦布告と見做す必要があるわ」

朱里
「では桂花さん！」

桂花
「ええ。遂に我らが表舞台に出る時が来たようね」

地和
「……長かったわ」

いつき
「おら達が貶された日々が懐かしいべ」

小蓮
「社会に活躍しているのはいつも巨乳！　世界が欲していたのもやはり巨乳！」

桂花
「その日々も終焉よ！　立ち上がれ貧乳！　敵は巨乳なり！」

貧乳党
「「「「貧乳党、万歳！！」」」」

佐助
（血気盛んだな～）

貧乳党を見て、年上視線的から見る佐助。
すると、佐助の部屋からチャイム音が響く。

佐助
「ん？　客か？」

佐助は玄関に向かい、扉を開けた。
そこには……

風魔
「……」

風魔が立っていた。

佐助
「……何してんの、風魔？」

風魔
『バイト』

佐助
「バイト？」

風魔
『ピザ五人前。チキン十五ピース。牛乳六個。バニラアイス十二個』

佐助
「……は？」

風魔
『以上であってるか？』

佐助
「え？　いや……え？」

見覚えのない料理に戸惑う佐助。

風
「あってますよ～」

そんな中、風が現れて風魔に対応した。

風魔
『何処に置けばいい？』

風
「部屋の机に置いてくださ～い」

風魔
『承知』

そして家に入っていった風魔。

佐助
「……どういう事？」

風
「いえ、少しお腹が空きましたので。注文しときました～」

佐助
「いや、此処俺様ん家だよな？」

風
「そうですね～」

佐助
「おかしくない？」

宝慧
「兄ちゃん、諦めが肝心だぜ？」

風
「おお！　たまには良いことを言いますね～」

佐助

「……はぁ～」

風の独特の空気感に諦めた佐助。

佐助
「もういいや。んで、お金はどうすんの？」

風
「……」

佐助
「……」

風
「ぐぅ～」

佐助
「……俺様の財産が（泣）」

その後、しっかりと支払いを済ませた佐助。

桂花
「もぐもぐ……」

地和
「んぐんぐ……」

雛里
「はむはむ……」

佐助が部屋に戻ると、凄い勢いで食事をする貧乳党。

佐助
「……」

佐助はそれを黙って見守る。

桂花
「ゴクゴク……よし！　腹拵えは済ませたわね！」

貧乳党
「「「「ゴクゴク……応ッ！！」」」」

桂花
「ならば出陣よ！　これからの時代に巨乳はいらない！　必要なのは貧乳である事を証明させに行くわよ！！」

貧乳党
「「「「貧乳党、万歳！　万歳！　万歳！」」」」

そして貧乳党は勢いよく佐助の部屋から出て行った。

佐助
「……片付けは？（汗）」

佐助に多大な迷惑を残し……

～数日後・佐助の部屋～

桂花
「ではこれより第二回、貧乳党会議を行うわよ」

佐助
「出てけぇぇぇえええ！！！」

第六十二話、活動報告（後書き）

今回のリクエスト、ケン様からの作品です。

今回は前書きネタも凝ってみました。

勿論、嘘告知ですので気にしないでください。

そして久々の貧乳党。

普段はこんな事をして佐助に迷惑をかけています。

佐助……頑張れ！

次回もリクエスト作品です！

それでは、また次回！

第六十三話・A、いざ！聖地へ！～前編～（前書き）

孫市
「……」

官兵衛
「ん？　何だ？」

孫市
「……我らはどっかで夫婦になったことはあるか？」

官兵衛
「……意味がわからん」

武蔵
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぜ！」

第六十三話・A、いざ！聖地へ！～前編～

～あらすじ～

貧乳党会議が行われてから三日後……

～1－B～

家康
「電工街に行きたい？」

桃香
「うん♪」

1－Bの教室にて家康と桃香が話していた。
桃香が言う電工街とは、電化製品が豊富としている商店街。
更に、様々なアニメ製品やゲーム商品、さらにはフィギュアなども置いてある。
その為、その手の人達からは“聖地”と呼ばれている。

家康
「別に構わないが……いきなりだな」

桃香

「えっとね、そろそろ学園祭も近いからいろんな商品を見てみたいな～と思ってね」

家康
「なるほど……ワシは構わんぞ」

桃香
「それじゃあ日程は今週の日曜日で大丈夫？」

家康
「ああ」

桃香
（よし！　確か日曜日は愛紗ちゃんは風紀委員の仕事があって来れない筈！　二人っきりのデートだよ～♪）

家康と桃香は電工街の約束をし、その日は解散した。
桃香はウキウキしながら、日曜日の日を楽しみにして待ち続ける。

そして約束の日曜日……

～電工街・改札口～

電工街の改札口。
日曜日もあって人の通りは混雑していた。

桃香
「ふんふんふふ～ん♪」

その中で桃香は待ち合わせ場所でかなり早く集合していた。

桃香
（今日は待ちに待った家康君とデートの日。少し気合い入れてきちゃったな♪　……少し眠いけど）

この日を待ちわびていた桃香。
その為、軽い睡眠不足みたいである。
何とも乙女な桃香。

そこへ……

家康
「お～い！　桃香！」

背後から愛しの人、家康が声を掛けてきた。

桃香
「あ！　家康……君」

その声に反応して、後ろを振り向く桃香。
だが、それと同時に言葉も失った。

何故なら……

家康
「遅れてすまない。少し道に迷っていた」

焔耶
「……お許しを」

凪
「申し訳ありません」

家康だけと思っていたら、焔耶と凪の存在があった為である。

桃香
「え、えぇーっと……（汗）」

家康
「ん？　……おお！　そういえば桃香には言っていなかったな！
元々その日は焔耶と凪で修行する予定だったのだ。それで桃香の話をしたら二人とも連れてってくれと頼まれてしまってな」

焔耶
「学園祭の準備ならば手伝いますよ」

凪
「私も少し電工街に私用がありまして……大丈夫ですか？」

二人は普段通り接しているかに見えた。

だが、内心は……

二人
（（二人っきりのデートなど許さん！！））

どす黒い感情が渦巻いていた。

家康
「駄目か？」

桃香
「（……チッ！）全然大丈夫だよ♪」

表向きは笑顔で接するが心の中で舌打ちをする桃香。

家康
「すまない。感謝する」

凪

「ところで桃香さん、一体何処に向かわれるのですか？」

桃香
「えっとね……まずはコスプレショップかな」

家康
「コスプレショップ？」

桃香
「うん。色々と必要な洋服があると思うから」

家康
「なるほど。では向かうとしよう！」

焔耶
「はい！」

こうして家康達はコスプレショップに向かった。

～コスプレショップ～

家康
「……スゴい数だな（汗）」

桃香
「何でも日本中のコスプレがこの店にあるみたい」

焔耶
「……（汗）」

凪
「……（汗）」

家康がコスプレショップに入ると凄まじい数のコスプレが並べられており、軽く圧倒されていた。
桃香は笑顔で慣れた様子に振る舞うが、焔耶と凪はこういった店は初めてらしく此方も家康と同じように圧倒されている。

桃香
「此処なら似合った洋服が見つかりそうだね♪」

家康
「うむ……ん？　あれは……」

ふと家康があるところに目を向ける。

そこには……

政宗
「おい……いい加減出て来い」

春蘭
「ふふふざけるな！／／／」

華琳
「ふふふっ……」

秋蘭
「姉者は可愛いなぁ～」

小十郎
「……」

政宗御一行の姿があった。

家康
「政宗達か？」

桃香
「へ？　……あ、本当だ」

凪
「華琳さま達の姿もありますね」

焔耶
「一体何を？」

家康
「わからんが……とりあえず行ってみるか」

家康の一言により、政宗達のところに向かった。

政宗
「どうすんだよ華琳。このままじゃ一生出て来ねぇぞ？」

華琳
「そうね……春蘭」

春蘭
「は、はい／／／」

華琳
「私は貴方のコスプレ姿が見たいわ。出て来てくれるかしら？」

春蘭
「か、華琳さまでもこの醜態を晒す訳には行きません！／／／」

秋蘭
「大丈夫だ姉者。私は全ての姿を受け入れるぞ」

小十郎
「その前にテメェは鼻血を止めろ」

現在、秋蘭の服は真っ赤っか。

華琳
「春蘭、貴方はこのまま負け犬でいいの？」

春蘭
「ま、負け犬などではありません！」

華琳
「あら、ならば姿を見せたらどうかしら？」

春蘭
「うぅ……（汗）」

華琳の問いかけに戸惑う春蘭。

春蘭
（こ、このままでは華琳さまに嫌われてしまう！　……ええい！
もうどうにでもなれ！）

春蘭は半ばヤケクソになりながらカーテンに手を掛けた。

それと同時に……

家康
「政宗」

政宗
「Ａｈ？　家康じゃねぇか」

桃香
「どうも～♪」

華琳
「あら？　桃香じゃない」

家康達が政宗達と合流した。

そして運悪くカーテンが開き……

春蘭
「どうですか！　華琳……さ……ま？」

春蘭が姿を現した。
その姿は極短のチャイナドレス。（原作の格好と同じ）
しかし春蘭は家康達がいる事を知らずに開けてしまった。

政宗
「……Ｈａ～」

華琳
「ふふふっ……」

秋蘭
「姉者は可愛いなぁ～（ボタボター！）」

小十郎
「おい秋蘭、死ぬぞ」

家康
「お、可愛いじゃないか！」

桃香
「うわ～／／／」

焔耶
「は、破廉恥な！／／／」

凪
「……／／／」

各々の感想を述べる。

春蘭
「あ…あぁ…／／／」

その光景に絶句し、しばらく膠着する春蘭。

そして……

春蘭
「うわぁぁあぁぁあぁああ！！！／／／」

もの凄いスピードで店から出て行った。

華琳
「ふふっ……少しイジメ過ぎたかしら？」

政宗
「相変わらずイヤな趣味してんな」

華琳
「それを含めての私の愛育よ」

政宗
「そうかい。とりあえず追いかけるか？」

華琳
「そうね。そういう事だから私は先に失礼するわ」

家康
「わかった」

桃香
「じゃあねぇ～」

春蘭を追いかける為、政宗達は店を後にした。

桃香
「それじゃあみんな。此処で色々と回ってきていいよ♪　自分の気に入ったコスプレがあったら着替えてきてもいいからね」

家康
「了解した。それでは二十分後に此処に集合で大丈夫か？」

焔耶
「わかりました！」

凪
「はい」

そして家康達は一旦、解散した。

～桃香ｓｉｄｅ～

桃香
「う～ん……何がいいかな～？」

様々な種類のコスプレを物色する桃香。
ちなみに、今のコーナーは“バニーガール”

桃香
「ちょっと……派手かな／／／」

一着のバニーガールを手に取り、顔を赤くする。
すると……
???
「うわ……大胆だな／／／」
桃香
（……あれ？　聞いた事ある声？）
背後から桃香と同じように恥ずかしそうに発言をする女性。
聞き覚えのある声に桃香は後ろを振り向く。
桃香
「蓮華ちゃん!?」
蓮華
「え？　……桃香?!」
そこにいたのは蓮華だった。
蓮華
「どうして此処に?!」

桃香
「えっとね、学園祭が近いから……蓮華ちゃんは？」

蓮華
「私は……穏がこの街に用事があるから幸村と一緒に来たのよ」

桃香
「へぇ～、そうなんだ～」

蓮華
「えぇ……」

桃香
「……」

蓮華
「……」

しばらく会話をしていたが、二人は手に持っていたバニーガールを確認する。

桃香
「とりあえず……この事は内緒で／／／」

蓮華
「あぁ……／／／」

そして恥ずかしくなってきた二人は元の場所に戻す。

桃香
「それで幸村君は？」

蓮華
「穏の手伝いにいっている筈よ」

その幸村は今……

～本屋～

穏
「はぁ……はぁ……／／／」

幸村
「お、穏殿、どうなされた？（汗）」

穏の用事を手伝いに来た幸村。
だが、穏の様子が異常になっており、かなり引いている。

穏
「もう……ダメ……です…ハゥ！／／／」

幸村
（き、危険な気配がする……）

穏
「幸村さぁ～ん！！／／／／　この火照った身体を癒やしてくださぁ～い！！」

我慢の限界に達した穏は幸村に抱きつく。

幸村
「ぬお？！　おおおお穏殿！？／／／／」

穏
「はぁはぁ／／／／　幸村さぁ～ん／／／／」

幸村
「は……は……破廉恥でござぁぁぁあああぁあるぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」

そんな穏を振り解き、凄まじい勢いで店を出る幸村。

穏
「あぁ～ん／／／／　待ってくださぁぁぁあああぁあい！／／／／」

対する穏も、普段では有り得ないスピードで幸村を追いかけていった。

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

蓮華
「桃香は一人か？」

桃香
「ううん、家康君と焔耶ちゃんと凪ちゃんが一緒だよ」

蓮華
「……大変だな」

桃香
「……お互い様だよ」

二人
「「はぁ～……」」

二人は何かを察し、溜め息をつく。
そして再びコスプレ選びをするのだった。

～焔耶ｓｉｄｅ～

焔耶
「……一体どういう物を選べば良いのだ？」

ファッションに無頓着な焔耶はどういう物が可愛いのか解らず、一人困っていた。

焔耶
「う～む……わからん」

？？？
「とりあえず家康さんに可愛いって言って貰えれば良いんじゃない？」

焔耶
「そんな事はわかって……ん？　誰だ？」

突然、背後から声が聞こえ振り向く。

そこには……

蒲公英
「キャハ♪」

蒲公英が笑いながら立っていた。

焔耶
「お前は確か、翠の妹の……」

蒲公英
「たんぽぽだよ♪」

焔耶
「そうか。そのたんぽぽが何か用か？」

蒲公英
「そのたんぽぽがコーディネートしてあげるの♪」

焔耶
「……はぁ？」

蒲公英の発言に焔耶は理解出来ていないようだ。

焔耶
「なぜ貴様にコーディネートされなければならんのだ。くだらない」

蒲公英
「えぇ～……たんぽぽなら絶対に家康さんを喜ばせるのに～」

焔耶
「……お館を？」

蒲公英

「うん」

焔耶
「……」

蒲公英
「まぁ～強制してもつまんないからいいや。じゃね」

そう言って蒲公英は焔耶の前から立ち去ろうとした。

だが……

焔耶
「待て」

焔耶が蒲公英の肩を掴み、立ち止まらせた。

蒲公英
「うん？」

焔耶
「……だろうな？／／／」

蒲公英
「？　何言ってるかわかんないよ～」

焔耶
「……本当にお館を喜ばせる事が出来るだろうな？／／／」
顔を真っ赤にし、モジモジしながら言う焔耶。
それを見た蒲公英は……
蒲公英
「（ニシシシ……面白くなってきたかも♪）任せてよ！」
新しい玩具を見つけた感覚であった。
こうして蒲公英のコーディネートが始まった……
～凪ｓｉｄｅ～
凪
「これも可愛いな／／／……あ、これもいい／／／」
凪は焔耶とは違い、乙女な感情を忘れていない為、多少なりわかるようだ。
ちなみにコーナーは“女子高生”

凪
「可愛いけど……私などには勿体無いな」

服を見つめながら自虐的な発言をする凪。

凪
「さて、もう時間だな」

手に持っていた服を置き、集合場所に向かおうとした。

その時……

???
「待つの!!」

凪
「ッ！　な、何だ?!」

背後から怒鳴り声が響き、驚く凪。

そして後ろを振り向くと……

凪
「沙和!?」

軍服を身に纏った沙和が仁王立ちしていた。

凪
「い、一体何をしてるんだ沙和？」

沙和
「違うの！！」

凪
「さ、沙和？（汗）」

沙和
「今の沙和は“ハートマン沙和”なの！！」

凪
「な、何を言ってるんだ？（汗）」

沙和の豹変ぶりについて行けない凪。

ハートマン沙和
「いいか！　これより貴様のその弱くなった心を鍛えてやるの！」

凪
「き、鍛える？」

ハートマン沙和
「規制が何だ！　この小説を終わらせる勢いで罵倒していくの！
この蛆虫！　ゴミ屑！　イカレビッ●！」

凪
「……（汗）」

ハートマン沙和
「返事は！？（怒）」

凪
「は、はい！」

ハートマン沙和
「違うの！　返事は“サー！　イエッサー！！”なの！」

凪
「サー！　イエッサー！！」

こうしてハートマン沙和のコーディネートが始まった。

～集合場所～

桃香
「ちょっと恥ずかしいなぁ～／／／」

時間となり、集合場所に一番に到着した桃香。
散々悩んだ結果、春蘭のより丈が長いチャイナドレスを選んだ桃香。
それでも過激なコスプレの為、周りの男性はチラチラと桃香を見る。

桃香
「うぅ～……早く来ないかな～／／／」

羞恥心を持ちながら皆を待つ桃香。

そこへ……

焔耶
「こ、これでお館が喜ぶのか？／／／」

凪
「さ、沙和の言う通りにしたが……大丈夫だろうか？／／／」

メイド服を纏った焔耶とセーラー服を纏った凪が到着した。
二人とも非常に恥ずかしそうにしている。

桃香
「焔耶ちゃん！　凪ちゃん！」

凪
「桃香さん！　遅くなりました」

焔耶
「……大胆な格好ですね（汗）」

桃香
「そうかな？　焔耶ちゃんは可愛いよ♪」

焔耶
「……／／／」

純粋に褒められ、照れる焔耶。
そして桃香達は家康を待つ。

しばらくして……

家康
「すまないみんな！　遅くなってしまった！」

遅れてきた家康が到着した。

桃香
「家康く……ん？」

焔耶
「おやか……た？」

凪
「し……しょう？」

桃香達は家康の方を向くが、その後の言葉が出なかった。
何故なら……

家康
「いや～非常に良い衣装があった物でつい買ってしまったんだ」

家康の格好が奇抜であったからだ。
緑の帽子をかぶり、黒いタンクトップを着用、そしてカメラを手に持っている。
それはまるで“ひぐら●”の某カメラマンである。

桃香
「……えぇーっと（汗）」

家康
「ん？　……おお！　可愛いじゃないかみんな！！」

桃香
「え？　可愛い？／／／」

焔耶
「ほ、本当ですか！？／／／」

家康
「ああ！　みんな女の子らしく素敵だよ」

凪
「素敵……／／／」

桃香達は家康に突っ込もうとしたが、その前に家康に褒められ、どうでもよくなっていた。

家康
「そうだ！　この際だからこのカメラで撮らせてくれないか？」

桃香
「大丈夫だよ♪」

焔耶
「お、お館の好きにしてください！！／／／」

凪
「じ、自分も……／／／」

家康
「ならばそこに並んでくれ」

家康の言う通りに横一線に並ぶ桃香達。

家康
「そのまま動かないでくれ……よし！　ハイ！」

ベストポジションが決まった家康はそのままカメラを構える。

そして……

家康
「●竹フラッシュ！！」

変なタイミングでシャッターを押した。

三人
「「「それ違う！！」」」

流石の桃香達も突っ込ざるおえなかった。
こうして家康達は、そのままの格好で電工街を探索するのであった。

後半に続く……

第六十三話・A、いざ！聖地へ！～前編～（後書き）

今回のリクエスト、三国同盟様の話……をかなりアレンジした作品となりました。

申し訳ありません、三国同盟様！

今回、出て来た“電工街”ですが、まんま秋●原です。

秋葉●をイメージして頂ければ簡単かと思います。

そしてまさかの後編！

引き続き暴走が止まらない恋ＢＡＲＡメンバーに注目してください！

それでは、また次回！

第六十三話・B、いざ！聖地へ！～後編～（前書き）

～前書き劇場～

“大食いチャレンジ！　全て食べ切れたら五万円！”

鈴々
「ハグハグ！！」

恋
「ムキュムキュ……」

元親
「うし！　このままいけば儲けもんだ！」

真桜
「大将……アンタ、鬼やで（汗）」

元親
「おぅよ！」

思春
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、開始だ」

第六十三話・B、いざ！聖地へ！～後編～

～あらすじ～

コスプレに着替えた家康達。

～電工街・歩行者天国～

家康
「凄い人だかりだな」

桃香
「ホントだね～」

コスプレに着替えた家康達はそのままの格好で店を出て、歩行者天国に到着した。
そこには一般人、その手の人、家康達と同じ格好をしたコスプレイヤー、更には外国人までいる。
その為、物凄い人の数になっていた。

焔耶
「お、お館／／／」

家康

「ん？」

焔耶
「ど、どうしてもこの格好でなければなりませんか？／／／」

凪
「じ、自分も……／／／」

顔を赤くしながら、家康に質問する焔耶と凪。
家康と桃香とは違い、コスプレの格好にはまだ慣れていないようだ。

桃香
「どうして？」

凪
「いや、なんというか、その……／／／」

焔耶
「流石にこの衣装は合わないかと……／／／」

家康
「アッハハハ！　それは心配ないぞ。二人とも似合っているから安心してくれ」

焔耶
（お、お館にそう言われるのが……／／／）

凪

（一番、恥ずかしいのです……／／／）

家康は二人を安心させようとしたが、逆効果である。
しかし、満更でもない二人は仕方なくそのままの格好で妥協した。

家康
「桃香よ、次は何処へ行く？」

桃香
「えっとね……この先にあるレストランに行かない？」

家康
「お？　もうそんな時間か……ワシは大丈夫だ。二人は？」

焔耶
「お館に任せます」

凪
「自分も」

家康
「よし！　では行くとしよう」

桃香
「うん♪」

そして家康達はレストランに向かった。

～レストラン・洛陽～

レストラン・洛陽。
電工街では有名なレストラン。
料理は抜群に上手く、その料理を目的とした客も多い。
だが、此処のレストランの大きな目玉は……

“とてつもなく可愛い店員服”

様々なレストランが可愛い服をチョイスし、対抗しているが、此処の洛陽は次元が違うのである。
その為、店員服目当ての客が大半である。

ちなみに此処の店長は……

店長
「可愛さこそ正義……良い時代になったものだ」

可愛さを全面的に売りにしている。
何はともあれ、有名なレストランである為、常に行列が出来ているお店なのだ。
そのレストランでバイトとして働いている恋ＢＡＲＡの生徒が二名いる。

月
「いらっしゃいませ～」

詠
「ご注文を受けたまります」

月と詠である。
二人は夏休みが終わった頃から此処のバイトを始めており、客からは
“笑顔の萌将軍（月）”
“ツンデレの伝承者（詠）”
とまで轟かせた。

月
「へぅ～……今日もお客さんがいっぱいだよ」

詠
「月、大丈夫？　辛かったらボク一人でやるわよ」

月
「大丈夫だよ。もう少しでバイトの時間も終わるから」

詠
「でも……」

月
「……あ、次のお客様が来たから行くね」

詠

「あ！　ちょっと月！」

心配する詠を振り切り、入り口で客の対応する月。

月
「いらっしゃいま……」

しかし、客を見た瞬間、月は言葉を失った。

何故ならその客が……

家康
「ん？　月？　月じゃないか！」

桃香
「月ちゃん可愛い～」

焔耶
「何故此処に？」

凪
（……可愛い／／／）

家康達であったからだ。

月
「……へぅ～／／／」

月はその場でうずくまり、顔を真っ赤にした。

詠
「月？　一体どうし……ってアンタ達？！　何で此処にいんのよ！？」

家康
「いや、桃香が教えてくれたんだが……」

桃香
「電工街一番のレストランって雑誌に書いてあったから♪」

詠
「……まぁバレちゃしょうがないか。四名様でいい？」

家康
「ああ」

詠
「それじゃあ案内するわ」

月
「あ、ありがとう、詠ちゃん／／／」

詠
「月はそのまま休んでて」

そして家康達は詠の後についていき、席に到着する。
しかし此処で、一つの問題が起きる。

桃香
「……」

焔耶
「……」

凪
「……」

家康
「どうしたみんな？　席に座らないのか？」

家康の隣は誰だｂａｔｔｌｅ勃発！
三人は家康の隣の座席を睨みつける。

焔耶
「……やはり勝負するしかないようですね」

桃香
「わかってはいたけど……仲間で戦うのは悲しいね」

凪
「仕方ありません。勝負とは非情です」

焔耶
「では……」

桃香
「恨みっこなしの……」

凪
「勝負！」

そして三人は拳を天高く振り上げ……

三人
「「「最初はグ～！！　じゃんけんポン！」」」

日本一平等な戦いを繰り広げた。

その結果……

家康
「一体何のじゃんけんだったんだ？」

焔耶

「気にしないで大丈夫です。お館」

焔耶が家康の隣を勝ち取った。
桃香と凪は向かいの席で焔耶を恨めしそうに睨みつける。
その後は何事もなく、食事を済ませる家康達。

家康
「さて、腹拵えは済んだところで……次はどうする？」

桃香
「ん～……少しこの街を歩いてみない？　私もいろんなところに行ってみたい」

家康
「うむ。ワシは構わないぞ」

焔耶
「私は大丈夫です」

凪
「自分も」

家康
「そうか。では、行くとするか！」

家康の掛け声で皆は立ち上がり、会計を済ます。

月
「あ、あの！」

会計を済ませたと同時くらいに月がやってきた。

家康
「月？　どうした？」

月
「こ、この事はみっちゃんには内緒でお願いします」

桃香
「三成君に内緒？」

凪
「何故……ですか？」

月
「へぅ……じ、実は」

焔耶
「実は？」

月
「ま、前から欲しかった洋服がありまして、それを買う為にバイトを始めたんです」

桃香
「へぇ～……それが何で三成に内緒なの？」

月
「……みっちゃんは優しいからそんな事を言っちゃうとすぐに自分に無理をしてまで買ってくるんです。だから、自分の事は自分で解決したいと思ったんです」

月は自分がバイトを始めた理由を家康達に言った。

家康
「なるほど。それならば内密にしよう」

月
「あ、ありがとうございます」

桃香
「それじゃあバイト、頑張ってね♪」

月
「はい！」

月は一礼をして家康達を見送った。

～歩行者天国～

桃香
「う～ん……改めて見ると凄く広いね（汗）」

家康
「全くだ。みんな、此処は離れずに行動をしよう」

焔耶
「はい！」

凪
「わかりました」

家康は皆がはぐれない為に声を掛ける。

しかし……

家康
「やはり凄い人数だ。みんなは無事か？　……ん？」

一分もかからない内にはぐれてしまった。

家康
「お～い！　……やれやれ、参ったな～」

頭を掻きながら困った表情を浮かべる家康。

家康
「ともかく探さなければなるまい」

そう言って家康は歩き始める。

家康
「何処にいるんだ……ん、あれは……」

皆を探していると、あるところに目をいく。

その視線の先に……

朱里
「はわわ……／／／」

雛里
「あわわ……／／／」

朱里と雛里の姿があった。

二人は本屋の前でキョドりながら本を立ち読みしている。

家康
「朱里に雛里か？　何をしているのだ？」

その行動が気になった家康は二人に近付く。

朱里
「こ、こんな激しい××の本が……はわわ／／／」

雛里
「掘り出し物だね、朱里ちゃん／／／」

朱里
「こんな姿、家康さんには見せられませんね」

雛里
「うん。バレたら大変だよね」

？？？
「ワシがどうした？」

二人で会話をしていると、いきなり後ろから声を掛けられた。

二人
「「……へ？」」

二人はすぐに振り向く
そこには……

家康
「やぁ、二人とも」

愛しの家康が立っていた。

二人
「「……」」

家康
「……？」

しばしの沈黙。

そして……

朱里
「はわわーーー！？！？？！！？」

雛里
「あわわーーー！？！？？！！？」

家康
「うお?!」

驚愕した。

朱里
「はわわはわはわはわはわわ?!!?」

雛里
「あわわわわわわわわ……」

その後、発狂。

家康
「お、落ち着くのだ!」

家康も慌てながらも二人を落ち着かせる。

数分後……

二人
「「取り乱してすいませんでした」」

家康
「あ、ああ……（汗）」

どうにか落ち着かせる事が出来た家康。

家康
「一体何があったのだ？　あんなに慌てて」

朱里
「そ、それは……／／／」

雛里
「あわわ……／／／」

家康
「……まぁ言いたくなければ良いぞ」

二人の様子から何かあるみたいだったので家康は言わなくても良いと告げた。

家康
「お、そうだ。二人に一つ聞きたい事があるんだ」

朱里
「はい、何でしょう？」

家康
「この辺りで桃香か焔耶、凪を見なかったか？」

雛里
「えっと……すいません、私達はずっと此処にいましたのでわからないです」

家康
「……そうか」

雛里
「す、すいません」

家康
「いや、大丈夫だ」

朱里
「……家康さん、少し良いですか？」

家康
「ん？」

朱里
「家康さん……携帯は持っていますか？」

家康
「……あ（汗）」

家康はすっかり携帯の存在を忘れていたようだ。

かなりの凡ミスである。

雛里
「電話は来ていますか？」

家康
「えっと……お！　桃香から着信があるな」

朱里
「なら、大丈夫ですね」

家康
「ありがとう朱里！　雛里！」

朱里
「はい」

雛里
「お気をつけて」

家康
「うむ！　それでは！」

そして家康は急ぎ足で去っていった。

朱里
「……行っちゃったね」

雛里
「うん」

朱里
「ところで……気になっていた事があるんですが……」

雛里
「やっぱり朱里ちゃんも気になっていた？」

朱里
「そう言う雛里ちゃんも？」

雛里
「うん……」

二人
「「何であんな格好してるんだろう？」」

家康が去った後、二人のささやかな疑問であった。

～集合場所～

桃香
「あ！　家康君！」

二人と別れた家康は桃香と連絡を取り合い、集合場所を決めてそちらに向かい再会した。

家康
「みんなすまなかった！　ワシが離れてしまっては意味がないな」

焔耶
「気にしないでください、お館」

凪
「仕方のない事です」

家康
「本当にすまん」

深く頭を下げる家康。

桃香
「だ、大丈夫だから頭を上げてよ！」

焔耶
「私は全く迷惑をしておりません！」

凪
「じ、自分もです！」

その行動に慌てる桃香達。

家康
「しかし……」

桃香
「ほ、本当に大丈夫だから、ね？」

家康
「……わかった」

桃香の一言で頭を上げる家康。

桃香
「ほっ……良かった～」

家康
「時に桃香、今後の予定は？」

桃香
「ううん、もう大丈夫だよ♪」

家康
「そうか。ではみんなで帰るとしよう！」

焔耶
「……そ、その前に着替えても良いですか？／／／」

凪
「できれば……自分も／／／」

こうして家康達の聖地巡りは終わった。

～おまけ～

月
「ふぅ……やっと落ち着いたね」

詠
「そうだね。あと、何回かのバイトで洋服が買えると思うから頑張ろう」

月
「うん」

二人で会話をしていると店の入り口が開く。

月
「あ、いらっしゃいま……」

月は挨拶をしようとしたが、客を見た瞬間、凍りつく。

その客は……

三成
「……何をしている？　月」

大谷
「……混沌か」

正則
「お！　可愛い洋服だな、月ちゃんにメガネ！」

清正
「……」

三成御一行であったからだ。

月
「……へぅ～」

詠
「……はぁ～」

月の秘密計画が崩れるのであった……

第六十三話・B、いざ！聖地へ！～後編～（後書き）

後編は月と朱里、雛里が登場しました。

いや～もっとやりたかったんですが……これ以上いくと一生終わらないと思うので、此処で切り上げました。

すんません！

次回は自分のネタを書きたいと思います。

それでは、また次回！

第六十四話、すき焼きは……戦場だ！！（前書き）

武蔵
「バ●ニィィィィイイイ！！」

長政
「ミンチにより酷くはないぞ！」

お市
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語……ハジマルヨ？」

第六十四話、すき焼きは……戦場だ！！

～あらすじ～

皆が電工街に出掛けた一週間後……

～休日・華琳邸～

華琳
「よく来たわね、政宗」

政宗
「あぁ……」

恋ＢＡＲＡ学園の休日。
政宗と小十郎は華琳に呼ばれていた。

華琳
「まぁ、ゆっくりしてなさい」

政宗
「ＯＫ。いつ頃やるんだ？」

華琳

「もう少ししたら呼ぶわ」

政宗
「……ま、ゆっくりしようぜ、小十郎」

小十郎
「はっ」

どうやらこの後に何かやるようで、政宗とその為に呼ばれたようだ。
そもそも、この後に何をやるというのだろうか？
それは後々にわかる事だ。

数分後……

秋蘭
「お待たせした。では向かうとしよう」

政宗と小十郎が待機していた部屋の扉が開き、秋蘭が入ってきた。
準備が出来たようで、迎えにきたらしい。

政宗
「そうか、んじゃ……これからｅｎｊｏｙするか！　なぁ小十郎！」

小十郎
「はっ」

そして政宗と小十郎は秋蘭についていった。
果たしてこれから何が始まるのか？

それは……

～リビング～

華琳
「それじゃあ、これより“すき焼き大会”を始めるわよ」

すき焼きであった。
この時期になると知り合いから高級牛が届くらしい。
その為、華琳はどうせならと皆に振る舞う。
そして今年、政宗と小十郎は呼ばれたのだ。

ちなみに、今年のメンバーは……

春蘭
「今年もやってきたな！　よし！　いっぱい食べるぞ！」

秋蘭
「姉者は可愛いなぁ～」

桂花

「華琳さまのお肉……ハゥ！／／／」

星
「うむ、実によいお肉だな」

風
「はい～」

稟
「こ、小十郎さんが……近くに／／／」

季衣
「お肉♪　お肉♪」

流琉
「お肉もいいけど、野菜も食べなよ」

以上のメンバーである。（尚、霞・甲斐姫・いつきは用事が重なり、不参加）

華琳
「慌てる事はないわ。お肉は逃げたりしないんだから」

政宗
「まぁ焦る必要なんてねぇかんな。ｔａｋｅ　ｏｎｅ‘ｓ　ｔｉｍｅ」

そう言って何故か皆は野菜しか取らず、肉を取らない。
しかし皆の視線は明らかに肉に注がれる。

華琳
（やはり皆の気持ちは一緒のようね……）

政宗
（当たり前だ。誰もが狙っている……）

一同
（（（（（誰よりも数多くの肉を食す事を！！！））））

高級な肉には数に限りがある。
当たり前だが皆は肉を食べたい気持ちでいっぱいだ。
その為、皆は簡単に手を出せずにいる。
しかし、此処で一つの疑問が生まれる。
そもそも華琳は何故、肉を独り占めしないのか？
その理由に華琳曰わく……

華琳
「独り占めしたお肉に興味はないわ。全ての敵を我が覇道の前にひれ伏し、優雅に食べる事こそに意味がある！」

何とも嫌な覇道である。
まぁ何はともあれ、今はすき焼き大会はその名を借りた“戦場”と

化していた。

華琳
（流石は政宗……隙あらば横取りしようとしたが、甘い考えだったみたいね）

政宗
（俺をなめんじゃなぇ……伊達に場数を踏んできたんじゃねぇぞ？）

華琳
（あら、言うわね。それでこそ私が求める独眼竜ね）

政宗
（Ｈａ！　まだ勝負は始まったばっかりだぜ！）

華琳
（甘いわね……此方には数多くの仲間がいるのよ）

桂花
（アンタの食べるお肉なんてないわ！　）

春蘭
（諦めるんだな！！）

秋蘭
（すまん小十郎……）

風

（すいません～）

稟
（……）

華琳の周りに桂花、春蘭、秋蘭、風、稟が立つ。

政宗
（勝負に勝つのは数じゃねぇ……質だ）

小十郎
（貴方の背中はこの小十郎にお任せあれ）

星
（ふむ……此方の方が面白そうだな）

対する政宗の周りに、小十郎と星が立つ。
季衣と流琉は普通に白滝を食べている。

華琳
（さぁ……私を楽しませなさい）

政宗
（ＯＫ！　派手なｐａｒｔｙにしようか！！」

こうして本当にくだらない戦いが幕を開ける。

政宗
（先手必勝！　小十郎！）

小十郎
（お任せあれ！）

先に動いたのは政宗達。
政宗は小十郎に指示をする。

そして小十郎は……

小十郎
「稟！」

稟
「ッ！／／／」

稟の肩を掴んだ。

小十郎
「……」

稟

「あ……あぁ……／／／／」

小十郎は黙って稟を見つめる。
稟はみるみるうちに顔が赤くなっていく。

そして……

稟
「プハァ！！／／／／」

鼻血を噴射しながら気絶した。

稟、Ｏｕｔ！

政宗
（ＯＫ！　上出来だぜ小十郎！）

小十郎
（ありがとうございます）

星
（うむ、これで流れは此方に……）

風
（甘いですよ～）

流れを掴んだと思われた政宗達に風が待ったを掛ける。

星
（何が甘いのだ風？　見ての通り稟は脱落したが？）

風
（それも風の手の内です～）

政宗
（Ａｈ？　どういう事だ？）

風
（答えは小十郎さんの右下にあります）

小十郎
（俺の右下？）

小十郎は自分から見て右下に目をやる。

小十郎
（ッ！　馬鹿な？！）

すると小十郎は驚愕し、全身が震え出す。

政宗
（どうした小十郎！？　何があったんだ！？）

小十郎
（……す）

星
（す？）

小十郎
（炊飯器が……ありやがる！）

政宗
（炊飯器？　何だ脅かすんじゃ……）

星
（……してやられた）

政宗
（Ｈａ？　何言ってんだテメェ？）

星の慌てように政宗は理解出来ずにいた。

星
（政宗殿……御飯をおかわりする時、貴殿ならどうする？）

政宗
（そりゃ勿論、近くにいる奴に……は！）

星
（そう、近くにいる人物に頼む筈だ。それが今の小十郎殿のポジション……）

政宗
（お、おかわり係りダァァァア！！）

事の重大さに気付いた政宗。

星
（さらに……）

政宗
（ま、まだあんのか？！）

星
（あちらを見てみよ）

星は小十郎の方に指差す。

その方向に目をやると……

季衣
「御飯おかわり！！」

小十郎
「あ、あぁ、わかった……（汗）」

小十郎が季衣のお茶碗に御飯を入れていた。

政宗
（大食いｍｏｎｓｔｅｒ――――――！！？！？！）

星
（あの純粋さ故に嫌とも言えず、いくら足しても足しても無意味と化す大食い・季衣。あれはまるで……）

二人
（（生きた屍！！））

風
（稟ちゃん……仇は討ちました）

風は稟の近くで涙（嘘）を流す。

小十郎、Ｏｕｔ！

風
（さて……これで勝負は振り出しに戻りましたね）

星

（……ふっ）

風
（……？）

星
（甘くなったのは……風も同じようだな）

風
（一体なん……あ、れ……）

星と会話をしていた風は急に視界がぼやけてきた。

星
（やっと聞いてきたようだな）

風
（これ…は、まさ…か……青酸カリ）

星
（いや、睡眠薬だ）

自分の危機にも関わらず全力でボケる風。

風
（い、いつ、風に…睡眠薬を……貴方には…けい…かい、を

して……いた）

星
（だが、身内には優しいようだな）

風
（……ま、まさか……）

風は思い当たる節があった。

その犯人は……

宝慧
（すまねぇ風。俺がいつものキャンディーに睡眠薬を塗った……）

いつも風の頭にいる宝慧であった。

風
（ほ、宝慧？）

宝慧
（こんな事しなかったが、俺も男だ……星にあんな事されちゃあ断れねぇ。許してくれ）

ちなみにあんな事とは膝枕である。

風
（ふふっ……風も命運も……此処までみたいです）

宝慧
（裏切っといて言うのも何だが付き合うぜ）

風
（そう……です…か……ありがとうです、宝慧）

宝慧
（ああ……）

風
「ぐぅ～」

風、Ｏｕｔ！

政宗
（何だ今のｉｍｐｒｅｓｓｉｏｎは？）

星
（気にするな。今はお肉だけを考えよう）

そして再び肉に注目が集まる。

華琳
（まさか軍師二人もやられるなんて……）

華琳は自慢の軍師を2人も失い、軽く焦っている模様。

春蘭
（華琳さま！　どうぞこの春蘭に御命令を！）

桂花
（いえ華琳さま！　御命令ならばこの桂花に！）

華琳
（……ならば二人に命ずる！！）

二人
（（はっ！！））

そして華琳は立ち上がり……

華琳
「私は喉が渇いたわ。飲み物を買ってきなさい。早かった方には私の飲みかけをあげるわ」

何故か飲み物を要求した。

二人
「「（華琳さまの飲みかけ！！／／／）　御意！！」」

しかし2人は疑う姿勢を見せずに部屋を出て行った。

政宗
（Ａｈ？　わざわざ味方を減らしてどうする？）

星
（何かの策か？　ともかく油断は禁物だな）

華琳の行動に理解出来ない政宗と星。
何があるかわからないので緊張を解かない。

華琳
（さて、これで……）

政宗
（……）

星
（……）

華琳
（……私の食べるお肉が増えたわ！！）

政宗
（う、裏切りだとォォォオオォォォ！？！）

星
（か、家臣を捨ててまでお肉に食らいつきたいのか！！）

華琳の裏切り行為に動揺する政宗と星。

華琳
（ふふふっ……貴方達は勘違いをしているわ）

政宗
（勘違い……だと？）

華琳
（二人の物は私の物。私の物は……私の物よ！！）

二人
（（ジャ、ジャイ●イズム！？））

華琳の後ろには某いじめっ子が現れていた。

星
（秋蘭！！　このままだと貴殿も裏切られるぞ！）

星はこれをチャンスと見て、秋蘭を此方に呼び込もうとした。

だが……

秋蘭
（ふっ……愚問だな）

政宗
（……Ｈａ？）

秋蘭
（それを含め……私は華琳さまに従っているのだ！！）

星
（なッ？！）

華琳
（残念だったわね）

政宗
（チッ！　今見せる忠義じゃあねぇだろ！）

そして再び睨み合いが始まる。

政宗
（……こうなったら全てＮＯ　ｐｌａｎだな）

星
（うむ……）

華琳
（そうね）

秋蘭
（どうやら此処からが勝負になるようだな）

政宗
（いざ……）

華琳
（尋常に……）

一同
（（（（勝負！！））））

そして一同は一斉に鍋に箸を向けた。

が、その瞬間……

季衣
「ハクション！！」

一同
「「「「なッ！？！」」」」

突然の奇襲により、箸を止める一同。
季衣のくしゃみによって鍋全体に季衣のご飯粒が満遍なく広がっていった。

政宗
「……」

星
「……」

華琳
「……」

秋蘭
「……」

季衣
「えへへ～／／／／　ごめんなさい」

流琉
「季衣！　何てことをしてるの！　すいません！　本当にすいません！」

その光景に一同は沈黙し、季衣は平謝り、流琉は頭を深々と下げ謝罪する。

政宗
「ま、まぁ、仕方ない事だな（汗）」

華琳
「そ、そうね……流琉、厨房から新しい鍋を持ってきてちょうだい（汗）」

流琉
「わ、わかりました！！」

流琉は勢いよく部屋から出て行き、厨房に向かった。

華琳
「季衣、この鍋は貴方が食べなさい」

季衣
「いいんですか！？」

華琳
「ええ」

季衣
「わーい！　ありがとうございます！」

季衣は喜びながら鍋を自分の近くに寄せる。

政宗
（今回ばかりは……）

華琳
（純粋な気持ちの勝利……かしら）

星
（流石にこればかりは……）

秋蘭
（勝てませんね……）

その場にいた全員が季衣の純粋さに感服し、戦いは終息を迎えた。

かに思われた……

季衣
（……ふふふっ）

政宗

（Ａｈ？）

季衣
（計画通り……このお肉は全部ボクの物だ）

そんな季衣からは鼻から白滝か出ている。

政宗
（き、季衣ィィィイイィィイィィイ！？！！！？？！）

華琳
（この娘！　鼻から白滝が出ているだと！？）

星
（そんな……馬鹿な？！）

秋蘭
（どうした季衣？！　お前はもっと優しい心の持ち主な筈！）

季衣
（勝負の前にはそんな気持ちすら武器になるんですよ。秋蘭さま）

秋蘭
（誰？！　こんなの季衣ではない！？）

季衣
（先輩達がお肉を狙っている事なんて百も承知……だから最初は純粋に白滝ばかり食べておけば勝手に争って敵が減る。そして最後

に策がなくなって勢い任せにお肉を狙いにいくところを……くしゃみで一発って訳ですよ）

政宗
（腹黒過ぎんだろコイツ！？）

季衣
（そして……全てのお肉はボクの手の内になった！　先輩達は何も抵抗出来ないまま、ただただ見ているしか出来ないんですよ！）

星
（クソ！　全て仕組まれた罠だったというのか！？）

季衣
（そのまま恨めしそうに見ててください……これが）

そして季衣は鍋の両端を掴んで、持ち上げ……

季衣
（贅沢食いじゃァァアアアアァ！！）

そのまま口に放り込んだ。

政宗
（ぜ、贅沢食いだと？！）

華琳
（勝者だけが許された食べ方を！？）

その食べ方に驚愕する政宗達。
しかし、そんなのはお構いなしに季衣は着々とすき焼きを胃の中に入れる。

そして……

季衣
「ぷは～！　おいしかった～！」

空になった鍋を放り投げ、お腹をパンパンと叩く季衣。
政宗達はただただ見てるしか出来なかった。

そこへ……

流琉
「変わりの鍋を持ってきました」

部屋の扉が開き、流琉が肉のない鍋を持ってきてくれた。

流琉
「あ、そういえば華琳さま、お客様がお見えになっていますが……

・」

華琳
「……通して大丈夫よ」

流琉
「わかりました！」

流琉は再び部屋を出て行き、客を迎えにいく。

そしてやってきた客は……

秀吉
「久しいな華琳よ」

半兵衛
「まぁ学校では会うんだけどね」

意外にも秀吉と半兵衛であった。

政宗
「Ａｈ？　何で生徒会長らがいるんだ？」

華琳
「私が呼んだのよ。毎年この鍋には参加して貰っているの」

政宗
「どういう関係だ？」

華琳
「私が倒すべき人間よ」

秀吉
「フン、相変わらず口が達者な奴よ」

華琳
「それは褒め言葉として受けとっときます」

政宗
「……石田は？」

半兵衛
「三成はきっと月君のところにいる筈だ。此処には呼んでいないからね」

政宗
「……そうか」

政宗は理由を聞き、納得した。

季衣
（ふっふっふっ……どう足掻いてもお肉はもうないんだよ）

などと思っている季衣。
本当に黒い。

半兵衛
「ん？　あの空鍋は何だい？」

華琳
「あれは先輩達が来るまでの間に軽く食べていたんです」

秀吉
「そうか……あまり食べ過ぎるとこの“高級な牛肉”が無駄になってしまうからな」

季衣
（……え？）

季衣はあるキーワードに耳を疑った。

政宗
「何だ……オメェの知り合いってのは生徒会長だったのか」

華琳
「ええ、そうよ」

秋蘭
「此処のお肉は絶品ゆえに華琳さまはいつも楽しみにしているんだ」

星
「ほぅ～、それは是非食べてみたいな」

しかし政宗達は普段通りに振る舞う。

季衣
（え？　嘘？　ボクが食べたのは牛肉だよ？　いつも寮に出てくるお肉だって……兄ちゃんがたまに食べさせてくれた牛丼だって……）

華琳
（まだわからないの？）

政宗
（テメェの食に対するｐｒｉｄｅも低いな……）

季衣
（か、華琳さま？　兄ちゃん？）

困惑している季衣に小声で話し掛ける政宗と華琳。

華琳
（いいわ、教えてあげる。貴方がいつも牛肉と思いながら食べていた肉は全部……）

政宗
（豚肉なんだよ！！！）

季衣
（ッ！？！！？？？！）

その言葉に季衣は声にもならない叫び声を発する。

華琳
（寮の食堂など買収してしまえば簡単に指示出来るわ）

政宗
（最近の豚丼はｑｕａｌｉｔｙが高くてびっくりしだな？）

季衣
（そ、そんな……ボクは今まで華琳さまを信じてきたのに！）

華琳
（あら、その割にはお肉を独り占めしたように見えたわよ？）

季衣
（うぐッ……）

政宗
（わかったか？　俺達を嵌めようするなんて……愚かな考えだったな）
季衣
（い、嫌……）
今の状況を受け入れなれない季衣。
今までの信じてきたものが全て壊されてしまった……それだけで充分な理由だ。
政宗は体が震えている季衣に肩を叩き……
政宗
（……ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ）
現実を叩きつけた。
季衣
（嫌ァァアァアアアァアァアアァァァァアァアァアァ！！？？！？！！）
そして季衣は心の中で絶叫し……

季衣
「……」

バタンと気絶した。

季衣、Ｏｕｔ！

流琉
「き、季衣?!　どうしたの!?」

政宗
（さて、子供がｓｌｅｅｐしたところで……決着といきますか？）

小十郎
（この小十郎も戦場に復帰します）

星
（うむ、形勢逆転だな）

華琳
（ふっ……忘れていないかしら？）

政宗
（Ａｈ？）

政宗は華琳の言葉を理解出来なかったが、それは突如訪れる。

春蘭
「買ってきました華琳さま！　さぁ、お飲みください！」

桂花
「ちょっと！　私の方が早かったわよ！」

此処で買い物に出掛けていた春蘭と桂花が帰宅した。

華琳
（二人とも、後で褒美を差し上げるから今は私に協力しなさい）

二人
（（はっ！！））

政宗
（Ｈａ！　派手なｐａｒｔｙが再開出来そうだな！）

華琳
（そうね……その勝利者は私になるけどね）

鍋にお肉が導入され、“すき焼き大会”が再開された。

政宗
（独眼竜……推して参る！！）

華琳
（我が覇道……誰にも止められないわ！！）

そして一目散に肉目掛け箸を運ぶ一同。

だが……

政宗
「ッ！？　ぐはッ？！」

華琳
「ぐッ？！」

突如として出現した“覇気”に吹き飛ばされる一同。

皆が何事かと鍋に目を向けると……

秀吉
（我らの力に屈しよ！！）

半兵衛
（誰の邪魔はさせないよ……）

秀吉と半兵衛が凄まじい覇気を醸し出しながら、目に追えぬスピードで肉を食らっていた。

政宗
（な、なんてｓｐｅｅｄだ！？）

華琳
（クッ……毎年先輩達に食われてしまうが、このままだと今年も同じ目に遭っしまうわ！！）

どうやら秀吉と半兵衛は毎年このようだ。

春蘭
（ならば……）

桂花
（私達が活路を開きます！）

二人
「「うおぉぉおおぉおぉぉおお！！！」」

此処で春蘭と桂花は意を決して鍋に突貫する。

が……

秀吉
「消え失せろ！！」

二人
「「ギャアアァァアアァア！！」」

簡単に吹き飛ばされてしまった。

政宗
（ｗｈａｔ！？　春蘭は仮にも武人だろ！？）

華琳
（やはりダメね）

秋蘭
（流石は天を掴んだ男……）

星
（だが、此処で引き下がる訳にはいかんな）

小十郎
（ああ……一度は地獄を見た俺に怖いものなどねぇ！！）

次に秋蘭、星、小十郎は迅速に鍋に向かう。

しかし……

半兵衛

「甘いよ君達……」

いつの間にか関節剣を手にした半兵衛が立ちはだかり……

半兵衛
「ハァ！」

全力で振り回した。

秋蘭
「ぐはッ！？」

星
「がッ！？」

小十郎
「ごふぁッ！？」

その関節剣をまともに喰らってしまった秋蘭達はそのまま気絶した。

政宗
（オイオイ……マジかよ）

華琳

（これほどまで差があるとは……）

あまりの実力さに愕然とする華琳。

しかし政宗は……

政宗
（オモシレぇ……上等だぜ！！）

心を熱くして、闘争心を高めていた。

政宗
「Ｙａ―Ｈａ―！！」

そして政宗は六爪流（箸バージョン）に構える。

政宗
「オイ華琳！　テメェはそこでただ見てるだけか！？」

華琳
「……冗談じゃないわ。私は天を掴むのが宿命。ならば今天下人を倒すべきね」

そう言って華琳はお玉を手にとり、悠然と構える。

秀吉
「力無き者が口答えするな！！」

半兵衛
「無意味な抵抗は哀しくなってくるよ」

政宗
「Ｈａ！　言ってろ！　最後に立つのは……」

華琳
「私達よ！」

そして政宗と華琳は秀吉と半兵衛に向かっていった。

最後決戦が今！

季衣
「ボ、ボクが……」

始まろうとした瞬間、気絶していた季衣が鍋に近付いて……

季衣
「お肉を食べるんだァァァアアァアアアァァァァアアァアアアァ！

！！」

再び口に放り込んだ。

一同
「「「あ……」」」

急な事で対応出来なかった一同は唖然としていた。
そして空になった鍋を置き、季衣は一言。

季衣
「ゴックン……ん〜、豚肉の方が美味しいかも」

その一言に……

政宗
「ふざけんなァァァアァアアァアァァァァアァアァアァァァアアアアァァアァアァアアアア！！！！」

政宗はブチギレた。

こうして激しくも虚しい戦いは幕を閉じた……

第六十四話、すき焼きは……戦場だ！！（後書き）

今回はオリジナルではなく、黒神様からのリクエスト作品です。

いや～、やりすぎたか？

……ま、いっか！

次回こそオリジナルを載せます！

GWでも関係なく載せます！

それでは、また次回！

第六十五話、貴様が某でワシがオメェ？（前書き）

～前書き劇場～

猪々子
「なぁなぁ斗詩～」

斗詩
「何、文ちゃん？」

雪蓮
「何で斗詩は官兵衛を好きになったんだ？」

斗詩
「……」

猪々子
「……」

斗詩
「め、目が可愛いところ……かな／／／」

猪々子
「……目、見えなくね？（汗）」

ザビー

「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語～！　ハッジマリマ～す！！」

第六十五話、貴様が某でワシがオメェ？

～あらすじ～

すき焼きという名の戦争が終わった翌日……

～恋ＢＡＲＡ学園・廊下～

政宗
「Ｈｕｍ～……朝から雑用させんなよ」

家康
「そう言うな。先生の頼み事は断る訳にはいかんだろ」

恋ＢＡＲＡ学園の朝。
政宗と家康は朝から謙信と紫苑に呼び出され、用件を済ませていた。
ちなみに今の時間は朝ＨＲの１時間前である。

家康
「まぁ時間はいっぱいあるんだ。ゆっくり行くとしよう」

政宗
「……ＯＫ」

そして2人は教室に戻って行く。

幸村
「急がれよ三成殿！　このままでは遅刻でござる！」

三成
「貴様に言われんでもわかっているわ！！」

一方の幸村と三成は今、職員室に向かっている。どうやら先ほど呼び出されたらしい。
ちなみに幸村は“熱血大噴火”を、三成は“恐惶”を使用中であり、凄まじいスピードで走っていた。（危険ですので真似しないでください）

そして曲がり角を曲がろうとした瞬間……

政宗
「Ａｈ～眠い……」

家康
「さっきからそれしか言ってないぞ（汗）」

政宗と家康が現れた。

幸村・三成
「「なッ?!」」

幸村と三成は驚き止まろうとしたが、急には止まれなかった。

政宗・家康
「「ん?」」

一方の政宗と家康は朝早かった為、対応が出来なかった。

そして……

四人
「「「「グハッ?!」」」」

衝突した。
その後４人は気絶してしまい、たまたま通りかかった華陀により保健室に連れて行った。

～数分後・保健室前～

小十郎
「政宗様が倒れたってのは本当か?!」

佐助
「ホントみたいだぜ。ウチの旦那も倒れたみたいだし……」

大谷
「三成も同じよ」

半蔵
「……同じく」

数分後、家康達が気絶していると聞き、迎えに来た小十郎達。

そこへ……

華陀
「お、来たか」

保健室の扉が開き、華陀が出てきた。

小十郎
「オイ！　政宗様は無事なんだろうな！？」

華陀
「いや、無事は無事なんだが……」

佐助

「？　何かあったの？」

華陀
「……まぁ百聞は一見に如かず。とりあえず、保健室に入ってきてくれ」

半蔵
「……御意」

華陀の言葉に疑問を感じながら保健室に入っていった。
そこでは、信じられない光景が目に映った。

幸村
「貴様ァァアア！！　許さんぞォォオオオ！！」

三成
「おわッ？！　お、落ち着いてくれ！！」

政宗
「こ、これは一体どういう事でござるか？！」

家康
「Ｈａ～……めんどくせ～な」

四人
「「「「……（汗）」」」」

今の状態を説明すると……

幸村は三成を襲い、三成はそれから逃げ、政宗は自分自身の身体を触りまくり、家康はめんどくさそうに頭を掻いていた。
それを見ていた一同は開いた口が塞がらなかった。

大谷
「事態を纏める。まずは名を名乗ってみよ」

家康（？）
「ＯＫ、俺は政宗だ」

政宗（？）
「某は真田幸村！！」

幸村（？）
「……三成だ」

三成（？）
「ワシは徳川家康！」

半蔵
「……摩訶不思議」

華陀
「身体自体に問題はない。しかし、何らかの影響によって身体が移り変わってしまったと見える」

小十郎

「政宗様、何かあったのですか？」

政宗（幸）
「片倉殿、某は政宗殿ではないでござる」

家康（政）
「コッチだ小十郎」

小十郎
「ッ！？　申し訳ありません政宗様！　この失態はこの右目を抉り出す所存！」

家康（政）
「そこまでしなくていい。まぁｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎするわ」

政宗説明中……

政宗
「……つー訳だ」

大谷
「把握した。ならば同じように頭突きをすれば良いのでは？」

幸村（三）
「無駄だ形部。先ほど腐るほどやった」

三成（家）
「まぁ三成が気絶してしまったんだが……」

幸村（三）
「黙れ！！」

大谷
「……治療法は？」

華陀
「すまんが具体的な治療法はわからない。とりあえずはこのままで過ごして貰うしかないな」

幸村（三）
「ふざけるな！！　今すぐ治せ！！」

華陀
「とは言っても仕方ないだろう。ちゃんとした治療でなければ身体に異常が出てしまう可能性がある。それならしっかり治した方が良いだろう？」

幸村（三）
「……チッ！！」

三成（家）
「まぁまぁ良いじゃないか三成。少しは変わった身体で楽しんだらどうだ？」

幸村（三）
「貴様は喋るな！　その姿が一番腹立たしい！！」

政宗（幸）

「うむ！　ならば政宗殿らしく振る舞わなければ！」

家康（政）
「テメェは一生無理だ」

こうして身体が変わった家康達はその姿に成りきって振る舞うのであった。

～1－A～

政宗（幸）
「某は政宗殿某は政宗殿某は政宗殿某は政宗殿……」

小十郎
「……別にそこまでしなくていいぞ（汗）」

自分の席に座っている政宗（幸）と小十郎。
政宗（幸）は何とか自分が政宗みたいに振る舞える為に呪文のようにブツブツと自分自身に訴える。
その光景に少し引く小十郎。

小十郎
「あんまり緊張しながら振る舞うとすぐにバレる。政宗様は普段から英語を使われる。オメェも英語を使うようにしろ」

政宗（幸）
「う、うむ（汗）」

小十郎
「英語を使え！」

政宗（幸）
「お、おーけー？（汗）」

小十郎
「違う！　ＯＫだ！」

政宗（幸）
「お、ＯＫ？（汗）」

小十郎
「それでいい……来たぞ！」

小十郎がある人物を見つけ、政宗（幸）は身構える。

ある人物とは勿論……

華琳
「おはよう政宗」

華琳である。
その後ろには春蘭、秋蘭、桂花を連れている。

政宗（幸）
「……（汗）」

春蘭
「オイ！　華琳さまが挨拶をしているのに無視とは何事だ！」

桂花
「そうよ！　一遍死になさい！！」

政宗（幸）
「そ、そんなつもりはないでござる！」

華琳
「……ござる？」

小十郎
「（あの馬鹿……）今政宗様は体調が悪いんだ。なぁ？」

政宗（幸）
「そ、そうだ（汗）」

へまをした政宗（幸）に小十郎はフォローを入れる。

しかし……

秋蘭

「……小十郎」

小十郎
「ん？」

秋蘭
「いつから政宗とはそんなに親しくなったんだ？」

小十郎
（ッ！　しまった！）

こちらも墓穴を掘ってしまった。

華琳
「……貴方達、私達に何か隠し事をしていない？」

政宗（幸）
「……な、何でもない（汗）」

華琳
「ホント？」

政宗（幸）
「あ、あぁ……（汗）」

華琳
「……」

政宗
「……（汗）」

華琳は真剣な眼差しで政宗（幸）を見つめる。
対する政宗（幸）はその眼差しを直視出来ずタジタジしていた。

華琳
「……まぁいいわ。貴方が誰であろうと政宗の身体には変わりがなさそうだし」

政宗（幸）
（た、助かった……）

華琳は政宗（幸）の目を見て何かを察したようだ。

謙信
「みなさん、せきについてください」

しばらくして教室の扉が開き、謙信が入ってきた。
皆はすぐに席に座る。

謙信
「ではしゅっせきを……おや？」

政宗（幸）
「む？　それが……じゃなくて、俺か？」

そして出席を取ろうとした瞬間、政宗（幸）と目が合った。

謙信
「……なぜ、“わかきとら”がこのくらすに？」

政宗（幸）
「なッ？！　どうしてわかったでござるか！？」

一同
「「「「「……え？」」」」」

小十郎
「……やはり無理があったか」

謙信の一言で全てが台無しとなった政宗（幸）であった。

～１－Ｂ～

家康（政）
（クソ……コイツ自身の性格は否定しねぇが、俺には無理な相談だ）

一方の１－Ｂのクラス。
此方では家康（政）が1人、悩んでいた。
この身体上、その性格に合わせなければならない。
しかしながら家康（政）はいつも純粋な笑顔ではいられない為、どうしたらいいかで悩んでいたのだ。

家康（政）
（この事実を知っているアイツも……）

半蔵
「……」

家康（政）
（そんなに話した事ねぇから頼りずれぇ……）

そんな事を考えていると……

桃香
「家康君おっはよ～！」

愛紗
「おはようございます家康殿」

星
「おはよう」

桃香と愛紗が家康（政）に挨拶をしてきた。

家康（政）
「（此処はとりあえずｎｏｒｍａｌにいくしかねぇ……）あぁ、おはよう」

桃香
「……あれ？」

愛紗
「……どうかされたのですか家康殿？」

家康（政）
「……何がだ？」

愛紗
「い、いえ、いつもより元気がない感じでしたので（汗）」

家康（政）
「（……その手でいくか）少し気分が晴れなくてな……」

桃香
「だ、大丈夫なの？（汗）」

家康（政）
「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ」

愛紗

「家康殿？」

家康（政）

「い、いや何でもない（汗）」

家康（政）はとりあえずこの場は体調不良で通すつもりらしい。

星

「……ふむ」

そのやりとりを一部始終見ていた星はそんな家康（政）に疑問を持つ。

そしてある行動に移す……

星

「本当に大丈夫なのですか？」

家康（政）

「本当に大丈夫だ。そこまで心配しなくてもいい」

星

「あまり無理はなされるな。なんなら……」

そう言って星は家康（政）に近づき……

星
「私が看病してもよいぞ？」

桃香・愛紗
「「ッ！？」」

抱きついた。
その行動に桃香と愛紗は驚愕した。

桃香
（えぇぇぇえ！？？！！　星ちゃんが好きな人って政宗君じゃないの？！）

愛紗
（これはどういう事だ？！　確か星が好きなのは政宗殿の筈……）

我に返った桃香と愛紗は心の中でかなり焦っている様子。

家康（政）
「……オイ」

星
「ん？　どうされた？」

家康（政）
「テメェ……俺の正体、知ってやってるだろ？」

星
「やはり政宗殿であったか」

一方の家康（政）と星は皆に聞こえないくらいの声で会話をしていた。
既に星は家康（政）の正体に気付いたらしい。

家康（政）
「後々面倒なことになっからもう止めろ」

星
「良いではないか。別に好きな御仁には変わらんのだからな」

家康（政）
「……Ｈｕｍ～」

家康（政）は星の相手にも疲れ、ただただ溜め息をつくのであった。
その後朱里と焔耶も加わり、より一層面倒な事になってしまった。

その頃、半蔵は……

風魔
『何事？』

半蔵
「……別人」

風魔
『承知』

先ほど入ってきた風魔と会話をしていた。

～１－Ｃ～

その頃、１－Ｃのクラスではざわめきが起きていた。

その原因は……

幸村（三）
「……」

幸村（三）であった。
彼は朝からの修行バカ故に、いつも何かしらで騒いでおり、その光景はいつの間にか１－Ｃのいつもの光景になっていた。
しかし、今の彼はその行為を一切せずに静かに席に座っていた。

佐助

（ちょっと石田の旦那～……）

そんな幸村（三）に佐助は自分の生き方を全うする姿に呆れていた。

蓮華
「さ、佐助……」

佐助
「ん？」

呆れていた佐助に話しかける蓮華。
その後ろには思春、天和、穏、亞莎、明命がいる。

天和
「あれって本当にユッキー？」

佐助
「……ホンモノダヨ？」

穏
「ですが、いつもより静かですね～」

亞莎
「あ、あんな幸村さん、始めてみます（汗）」

佐助

「キノセイダヨ？」

思春
「何故、先ほどから片言なのだ？」

佐助
「ハハハハハ……」

渇いた笑いで誤魔化す佐助。
何はともあれ、皆はあんな幸村（三）の姿に心配している様子。

蓮華
「な、何かやりづらいわね（汗）」

天和
「そうかな～？　私はあんなユッキーも素敵だよ～♪」

穏
「ですよね～♪」

蓮華
「ッ！　貴方達！　またそう言って幸村を誘惑する気でしょ！？」

天和
「ダメなの？」

蓮華
「ダメに決まってるでしょ！！」

穏
「自分が出来ないからって八つ当たりは良くないですよ～？」

蓮華
「八つ当たりじゃないわよ！！／／／」

亞莎
「あ、あの、喧嘩は……（汗）」

段々と白熱する争奪戦。
そのまま騒がしくしていると……

幸村（三）
「煩いぞ貴様ら。私は騒がしいのは嫌いだ」

幸村（三）が蓮華達の前に現れ、注意をした。
そしてそのまま席に戻る幸村（三）。

一同
「「「「……」」」」

その光景に一同は目を見開いた状態で膠着する。

明命
「ほ、本当にあの人幸村さんなのですか?!（汗）」

佐助
「……もうお手上げ」

そんな姿に佐助はお手上げ状態であった。

～１－Ｄ～

１－Ｃと同様に１－Ｄのクラスもまた、ざわめきが起きていた。
何故ならば……

三成（家）
「みんなおはよう!」

三成（家）がめちゃくちゃ気持ちよい笑顔で挨拶をしていたからだ。

一同
（（（（誰!!?!?））））

一同はすぐに三成（家）を疑った。

月
「み、みっちゃん（汗）」

三成（家）
「ん？　どうしたんだ月？」

月
「ど、どこか具合でも悪いんですか？（汗）」

元気が良すぎて心配される三成（家）
最早、何が体調不良なのかわからなくなる。

三成（家）
「ワシ・・・じゃなく、私なら問題ないぞ」

そんな心配を気にせず、笑顔で答える三成（家）。

月
「へ、へぅ～・・・・・／／／」

これほどまでに見せたことのない笑顔だった為、少し照れる月。

清正
「……形部」

大谷
「何か？」

清正
「アイツに何があったんだ？」

大谷
「元気な三成がそれほどまで嫌か？」

清正
「俺はいいんだが……」

清正はチラッと後ろに目をやると……

詠・正則
「「オヴェぇぇぇえ！！！！」」

詠と正則がゴミ袋に凄まじい勢いで吐いていた。

清正
「この二人が生理的に受け付けないみたいだ」

大谷

「ヒヒヒ！　滑稽な姿、愉悦愉悦」

清正
「オイオイ……」

大谷
「まぁ我もあのままでいられると戦慄くのでな……」

そう言って大谷は三成に近づいていった。

大谷
「三成」

三成（家）
「ん？　どうした形部！」

大谷に声を掛けられた瞬間、笑顔で振り返る三成（家）。

すると……

大谷
「ッ！？　グハァァアアアアァ？！！？！？！？」

大谷は目を抑えながら苦しみ始めた。
どうやら三成（家）の笑顔に耐性がついていないようだ。

三成（家）
「ぎ、形部?!（汗）」

月
「だ、大丈夫ですか!?（汗）」

大谷
「ヌア〝ァァアアアア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア?!?!!?」

三成（家）
「と、ともかく保健室に連れて行こう!」

月
「は、はい!」

そうして三成（家）と月は教室を出て行った。

残った教室では……

霞・恋
「「ｚｚｚ……」」

七乃
「面白い写真が撮れました♪」

華雄

「な、七乃！／／／　後で一枚くれ！／／／」

白蓮
「やばい？！　宿題のノートを家に置いてきてしまった！」

さほど気にしていなかった。

清正
「……ま、いいか」

気にしていた清正も普段通りの雰囲気を見て、気にするのやめた。

その後、家康達は華陀が新たな治療方法で元通りになったが、色々と勘違いされる日々が続くのであった……

第六十五話、貴様が某でワシがオメェ？（後書き）

今回は作者がたまたま見ていた漫画から思いついたネタを書きました。

幸村の冷静な態度や三成の満面の笑み……想像できねぇ（汗）

リクエストがあれば女性編も書いてみようかと思っていますが……多分、これで完結しますね（汗）

次回はリクエスト作品です！

それでは、また次回！

第六十六話、政宗漫画を極める？　（前書き）

※今回は後書きにてアンケートがございます。
御協力をお願いします！！

秋蘭
「恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語、始まるぞ」

第六十六話、政宗漫画を極める？

～あらすじ～

皆の魂が入れ替わって、元通りになった3日後……

～1－A～

政宗
「Ｈｕｍ～……どうすっかな～」

放課後の1－A。
現在、政宗は帰ろうとはせず、何かを考えていた。

そこへ……

華琳
「政宗」

政宗
「ん？」

華琳が、1人で政宗の前に現れた。

政宗
「よぅ。テメェ一人か？」

華琳
「ええ。私の私情で残って貰うのも馬鹿らしいから先に帰って貰ったわ。そういう貴方も一人？」

政宗
「まぁな。小十郎はいつきと一緒に“全国野菜一決定戦”ってのに参加するらしい」

華琳
「……大丈夫なの？（汗）」

政宗
「一応止めたんだが、小十郎の目はｂｅａｓｔみたいだったぜ……」

華琳
「そう……それで貴方は何をやっているの？」

政宗
「俺か？　実は……」

政宗は華琳にとある説明をした。

～説明～

政宗を慕っている舎弟が漫画家を目指すと言い出した。
政宗は舎弟を大切にする人物であり……

政宗
「困った事があったら俺に迷わずｃｏｎｓｕｌｔａｔｉｏｎしな」

と言ってその日は舎弟は帰っていった。
しかし、今日の昼休みに昨日の舎弟が現れ、どのような漫画を目指したらいいかと相談してきた。
政宗自身、漫画はあまり読まない為、どう答えたらいいかわからなかった。
そして少し時間をくれと舎弟に言って今に至る。

～説明終了～

華琳
「……貴方も中々不器用ね」

政宗
「……あぁ、今日で自覚した」

説明を聞いた華琳は少し呆れる。

政宗
「ま、そういう事だ。何かＩｄｅａはねぇか？」

華琳
「あら、貴方から頼むなんて珍しいわね」

政宗
「俺だって好き好んで頼まねぇよ。けど、こればっかりはお手上げだ」

と言って手をヒラヒラさせる政宗。
どうやら本当に困っているみたいだ。

華琳
「そう言われてもいきなりは無理ね。どのくらい時間があるの？」

政宗
「はっきりとした時間は決まってねぇな」

華琳
「……なら策はあるわ」

政宗
「……ｒｅａｌｌｙ？」

華琳

「ええ」

政宗
「どんな策だ？」

華琳
「簡単よ。皆で考えればいいのよ」

政宗
「……Ｈａ？」

華琳
「何も貴方一人で考える必要はないわ。皆の意見を取り入れるのも上に立つ者……つまりは王にとっては必要な事よ」

政宗
「俺は王じゃねぇ」

華琳
「これは私的な意見よ」

政宗
「……大体はわかった。しかしどうやって意見を集めんだよ？」

華琳
「それも任せなさい。貴方は舎弟にもう少し待てと言ってくれれば大丈夫よ」

政宗
「……ま、俺に選択肢はねぇんだ。テメェの策に乗るしかねぇか」

華琳
「うふふっ、それでいいのよ」

そして華琳は政宗の為に動くのであった。

そして2日後……

～某会社～

華琳
「華琳と！」

政宗
「……政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！！」

2人は何故かラジオ番組を行っていた。
どうやら華琳の策とはコレだったようだ。
ちなみに、このラジオを放送している会社は既に買収済みである。

華琳
「皆さんこんばんは。今日から始まりました新番組“恋ＢＡＲＡ学

園ラジオ”略して“コバラ”です。司会進行は私、華琳と」

政宗
「ちょ・っ・と・ま・て」

華琳
「どうかしたの？　早く自己紹介をしなさい」

政宗
「……何だコレは？」

華琳
「何って……見ての通りラジオ番組よ？」

政宗
「何でこうなるんだよ！　俺の話聞いてた？！」

華琳
「聞いてない！」

政宗
「何で強気なんだよ！　つーか元々コレ、読者様のリクエスト何だけど！？」

華琳
「そのリクエストをブチ壊すわ！！」

政宗
「しねぇと困るんだよ！　大切な読者様からのリクエストだぞ！
それといちいちＪＯＪＯ立ちすんじゃねぇ！　コレｒａｄｉｏだか

ら伝わんねぇから！！」

今の華琳のジョジョ立ち……右手の人差し指で天を差し、左手で腕を組み、人差し指と小指を立てる花京院立ち。

華琳
「さてお遊びは此処までとして……そういった事は後にわかるわ。とりあえず今は自己紹介をして頂戴」

政宗
「……政宗だ」

華琳
「この二人で進行するわ」

政宗は渋々自己紹介をして、番組は進んでいく。

華琳
「では最初の企画に移るわ」

政宗
「企画？」

華琳
「ええ……よいしょっと」

そして華琳は大量のハガキを取り出す。

華琳
「まずはコレ！　オリジナル漫画を考えてみよう！」

政宗
「ッ！？」

華琳
「これは自分で考えてきたオリジナル漫画を投稿して、この場で発表するコーナーよ。ちなみに、此処で読まれたハガキには番組特製携帯ストラップを差し上げるわ。さらに、その中で尤も良かった作品は“ベスト漫画賞”として賞金が出るわ」

政宗
（……そういう事か）

華琳
「これで良いかしら？」

政宗
「……あぁ」

このラジオの意図がわかり、納得した政宗。

華琳

「それじゃあ最初のお便り、ペンネーム“Ｊ・バウアー”さんからの作品です。題名は“とある不幸の物語”」

～とある不幸の物語～

これは晴天の日に起きた物語……

主人公
「さて、今日も一日頑張りますか」

主人公は何処にでもいる青年。
しかし青年には大きな悩みがあった……

トラック運転手
「あ、危ねぇ！！」

主人公
「ん？　なッ？！」

青年はとてつもなく不幸だったのだ。
物語のスタートは入院生活から始まる！

主人公

「何故じゃぁぁぁあ!?!?!!!?」

入院先では様々な患者でいっぱいなドタバタコメディ?!

老人
「お前さんには沢山の悪霊が憑いておるぞ」

主人公
「何だと！　どうやったら除霊できる!?」

悪霊
「ムリムリ。だってアンタの身体、居心地がいいんだな～」

主人公
「お前さんが話すんかい!!」

そんな彼にも新たな恋が……

女性
「私、貴方の事が好きになっちゃったかも……」

主人公
「そ、それは本当か?!」

女性
「うん。だから……この壺を買ってくれないかしら?」

主人公
「……」

女性
「これを買えば貴方も私も幸せになるよ？」

主人公
「何故じゃぁぁぁあああ！？！？！！！？」

そんなこんなで毎日は過ぎていく。
果たして彼に幸せは訪れるのか！？

～終了～

華琳
「……どうかしら政宗？」

政宗
「……ＮＯ　ｃｏｍｍｅｎｔで」

華琳
「そう……とりあえず官兵衛先輩には携帯ストラップを差し上げるわ」

政宗
「Ｐｅｎ　ｎａｍｅで言え！！」

華琳
「そんなのはどうでもいいわ。次に行くわよ」

政宗
「自分勝手な奴だ……次のお便り、ｐｅｎ　ｎａｍｅ“風音”さんからの作品。ｔｉｔｌｅは“世界でいちばん不器用な恋愛？”」

～世界でいちばん不器用な恋愛？～

ヒロイン
「私と付き合って！！」

それは一つの告白から始まる恋愛物語……

青年
「おお！　そなたも修行に付き合うでござるか！」

ヒロイン
「……へ？」

じゃなかった！？
こうして勘違いで生まれた修行が始まった！

お館様
「この馬鹿者がぁぁぁあああ！！」

青年
「グハァァアアアアァァ！！！！」

ヒロイン
「だ、大丈夫？！」

お館様
「何度言ったら分かるのだ！　今のお主はまだ未熟！　もっと精進するがよい！！」

青年
「は、はい！」

ヒロイン
「と、とりあえず落ち着いて！」

こうして数々の試練を潜り抜け、卒業試験の日が来た。
しかし、それは悲惨の幕開けでもあった……

青年
「ゴホッゴホッ！　……さ、流石で、ござるな」

ヒロイン
「もうしゃべらないで！！　今すぐ止血するわ」

卒業試験……それは二人の決闘であった。
そして決着がつき、青年のお腹から血が出ていた。

青年
「もう…一度……そなたの……おに、ぎり…を……」

そう言って青年は目を開ける事はなかった……

ヒロイン
「ッ！？　いやぁぁあああぁぁあぁぁあああぁぁあああ！！！」

その現実にヒロインは泣き崩れ、その場に留まった。
しばらくして、泣く涙もなくなったヒロイン。

ヒロイン
「こ…こんなに……こんなに苦しいのなら、悲しいのなら……
愛などいらぬ！！！」

こうしてヒロインは愛を捨て、激しい戦の世界に身を投じるのだった……

～終了～

政宗
「後味悪!?　つーより恋愛モノじゃねぇのか?!　最後に関しては帝王だし!!」

華琳
「そうかしら?　こういった作品も中々、魅かれるモノがあるわ」

政宗
「……（汗）」

華琳
「次のお便りにいくわ。ペンネーム“坂上智代”さんからの作品。題名は“ギャラクシーソード”」

～ギャラクシーソード～

ドレットダーク軍
「「「「ヒャッハー!!」」」」

時は二十〇世紀……
世は悪の“ドレットダーク軍”によって恐怖の世界となっていた!
民は苦しみ、怯えながら暮らしていた。
しかし!

？？？
「待て！」

その闇に突如として光が見えた！
そこには一人の少女が立っていた。

ドレットダーク隊長
「誰だ！？」

ヒロイン
「貴様らの命運もここまでだ！　変身！」

説明しよう！
ヒロインは自らの正義の心により“ギャラクシーソード”に変身する事ができる！
そしてその力はドレットダーク軍を倒す、正義の力なのだ！！

ギャラクシーソード
「さぁ！　貴様の罪を数えろ！」

ドレットダーク隊長
「ふざけんじゃねぇ！！　テメェら！　やっちまいな！」

ドレットダーク軍
「「「「ヒャッハー！！」」」」

ギャラクシーソード
「私は闘う！　この世に光を照らすまで！！」

こうしてギャラクシーソードの闘いが始まった！！

～終了～

政宗
「……戦隊モノだな」

華琳
「まぁ子供には受けが良さそうね」

政宗
「確かにな。でも読者が傾くｐｏｓｓｉｂｉｌｉｔｙがある」

華琳
「でも女性が闘うのなら一般のファンは心を掴めるわ」

政宗
「ま、それもアリだな。そんじゃ次のお便りに行くぜ。Ｐｅｎｎａｍｅ“北條五代記”さんからの作品。ｔｉｔｌｅは“Ｍｙ　ｍｏｔｈｅｒ”」

～Ｍｙ　ｍｏｔｈｅｒ～

主人公
「すいません、この女性を知りませんか？」

ボロボロの服装でたった一人、母の行方を探す青年。
幼い時に消えてしまった母。
青年は母を探しながらいろんな街に向かう。

男性
「何故君は母に会いたいのかね？　そいつは君を捨てたんだぞ？」

主人公
「……感謝したいんです」

男性
「感謝？」

主人公
「僕の前から消えた時に母の手紙と写真が僕の服に挟まっていたんです。幼いながらそれを読んで見て、母の愛と痛みを知りました」

男性
「……何て書いてあったんだ？」

主人公
「……読めませんでした」

男性

「？　一体どういう事だ？」

主人公
「文字が涙で滲んでて、読めなかったんです。それだけで僕をどれだけ愛してくれたのかがわかったんです」

男性
「……そうか。さっきはすまなかったな」

主人公
「いえ、大丈夫です」

こうして様々ば人物に出会い、青年は成長していく。
そして遂に……

青年
「……母さん」

母
「……ほ、本当に……お前なのかい？」

青年
「うん……」

母
「うぅ……うぅぅ」

それは母を探す運命の物語……

～終了～

華琳
「……感動的な物語ね」

政宗
「あぁ。中々泣かしてくれるな……」

華琳
「さて……今回はこの辺りで終了するわ」

政宗
「それじゃあ、Ｂｅｓｔ漫画賞を決めるとするか？」

華琳
「そうね。では……第一回！　ベスト漫画賞は！」

政宗
「……」

長い溜めで、ラジオ内が静寂となる。

そして……

華琳
「……“Ｍｙ　ｍｏｔｈｅｒ”です！！」

華琳の口から大賞が発表された。

政宗
「この作品が選ばれた理由は何処の世代でも通用するＭｏｖｉｎｇ物語だからな」

華琳
「そういう事。北條五代記さん、おめでとうございます」

こうして政宗は次の日に舎弟にこの“Ｍｙ　ｍｏｔｈｅｒ”の内容を伝えた。

そしてその漫画が後に様々な賞を総なめするのは先の話……

～おまけ～

風魔
『元親』

元親
「ん？」

風魔
『部活が終わった後、皆で御飯に行かないか？』

元親
「別に構わねぇが……珍しいな、お前から飯に誘うなんて」

風魔
『あるラジオで賞金が貰えた』

そして彼らは部活へと足を運んだ……

第六十六話、政宗漫画を極める？　（後書き）

今回は、龍の骨様のリクエスト……を、完全に破壊して、アレンジをした作品です。

龍の骨様、本当に申し訳ありません。

さて、今回のアンケートなんですが……次回の長編、学園祭編の方向性と恋ＢＡＲＡ学園ラジオに関してです。

１・学園祭のテーマは？

Ａ・笑いに決まっているだろ！！

（完全な笑いメイン。しかし、日常編とさほど変わらない可能性アリ）

Ｂ・此処は一つ恋愛に行ってみたらどうだ？

（甘酸っぱい恋がメインで女性陣全ての恋愛を書く予定。だが、笑い的要素が少なくなる可能性アリ）

Ｃ・作者よ……混沌（カオス）をくれ！！　そして死んでくれ！！

（両方を取り入れ、作者が本気でふざける。また、他のアニメ作品も登場する可能性大。しかし、長編最多の話数になりうる為、作者の命運が尽きる可能性アリ）

２・今回の恋ＢＡＲＡ学園ラジオは存続させるべきか？（存続の場合、後書きとなる。内容は質問などを受け入れるコーナーなど）

A・させるべき

B・必要ない

以上です。

よろしくお願いします！

次回から長編に突入します。

それでは、また次回！

第六十七話、学園祭とは準備の段階で盛り上がる（前書き）

今回で長編に入りますので前書きネタは停止します。

そして学園祭のテーマは“混沌（カオス）”です！

それではどうぞ！

第六十七話、学園祭とは準備の段階で盛り上がる

肌寒くなってきた季節。
そんな季節を吹き飛ばすビッグイベントがやってくる。
それは……

“学・園・祭！”

学生達が尤も楽しみにしていた行事である。
学園祭は5日間という少し長い期間で行われる。
更に、恋ＢＡＲＡ学園では他の学校とは違い、それぞれのクラスで売り上げた金額は全てクラスのモノとなるのだ。
これは部活動や委員会も例外ではない。
それ故に、学生達はこの行事を待ち望んでいるのだ。

～1－B～

紫苑
「皆さん、いよいよ学園祭が近付いてきましたね。ですから、これより学園祭を何をやりたいのか考えて貰います」

桔梗
「此処からは学生だけでやるがよい。儂らは席を外すぞ」

１－Ｂのクラスはその学園祭に向けての会議が行われていた。
此処からは学生が仕切るように指示をして紫苑と桔梗は教室から出て行った。

家康
「では此処からはワシと桃香で仕切る」

桃香
「皆さんは学園祭で何がやりたいですか？」

先生が出て行った後はクラス委員長の２人が積極的に動く。
桃香はまず、クラスで何がやりたいのかと皆に聞く。

星
「はい」

桃香
「星ちゃん、どうぞ」

星
「うむ、此処は無難にノーパ●喫茶はどうかな？」

一同（男限定）
「「「「賛成ー！！」」」」

星の発言に男共は敏感に反応する。

愛紗
「ダメに決まっているだろ！！／／／」

星
「む？　何故ですかな？」

愛紗
「常識的に考えろ！！／／／」

一同（男限定）
「「「「えぇー……」」」」

愛紗
「……斬るぞ？（怒）」

この一言によりノー●ン喫茶は却下となった。

桃香
「あはは……（汗）」

翠
「●ーパンはともかく、喫茶店ならやっても良いんじゃね？」

家康
「うむ、喫茶店か……では候補として残しておこう」

桃香
「喫茶店っと……他に何かないかな？」

元親
「クラスで作った物を売るってのはどうだ？」

家康
「売店か……よし、候補にしよう」

桃香
「売店っと……」

朱里
（ば、売店なら八百一本も販売出来るかな……／／／）

家康
「他に意見のある者はいるか？」

蒲公英
「此処にいるぞー！！」

家康
「うお？！」

翠
「たんぽぽ？！　何してんだよ！？」

蒲公英
「いや～、十八番の台詞だけは譲れないからね～」

翠
「訳わかんねぇ事言ってねぇで早く自分の教室に戻れ！」

蒲公英
「はいは～い」

そして蒲公英は教室を出て行った。

家康
「さて……他に意見は？」

家康の問いに答える人はいなかった。

家康
「ならばこの二つのどちらかだな」

桃香
「どうやって決めようかな？」

家康
「やはり此処は多数決で行こう。みんなはそれで構わないか？」

一同
「「「「大丈夫です！」」」」

桃香
「それじゃあ今から紙を配るからそこにどっちがやりたい書いてください」

皆は配られた紙に好きな方を書き、投票する。
そして投票が終わり、発表される。

家康
「……ではワシらのクラスは“喫茶店”をやる事にする！」

どうやら喫茶店をやるみたいだ。

桃香
「じゃあ次はどんな喫茶店がいいか意見を言ってください」

こうして１－Ｂは順調に出し物を決めていくのであった……

～１－Ａ～

政宗
「よーく聞けテメェら、これから学園祭に向けていろんなｏｐｉｎｉｏｎを言って貰う。これによって今後、準備する物が変わってくるから早急に決めたい。わかったテメェら？」

１－Ａのクラスでも学園祭に関しての話し合いが進められていた。
クラス委員長の政宗が皆に早急に決めたいと伝えるが……

クラス１
「遂に始まるぜ学園祭！」

クラス２
「みｗなｗぎｗっｗてｗきｗたｗｗｗ！」

春蘭
「秋蘭、華琳さまへのプレゼントは何が良いだろうか？」

秋蘭
「……とりあえず、クラスの出し物を決めてからにしようか（汗）」

桂花
（華琳さま華琳さま華琳さま華琳さま……）

沙和
「ねぇねぇ、凪ちゃんは家康さんと廻るの？」

凪
「ば、馬鹿を言うな！！／／／」

真桜
「工学部の売り上げは貰たで！」

甲斐姫
（アタシも……小十郎と／／／）

風
「ぐぅ～」

直江
「俺は無敵の主人公！！」

皆は全く聞いていなかった。

華琳
「……聞いてないわね」

政宗
「……小十郎」

小十郎
「……」

小十郎は静かに立ち上がり……

小十郎
「唸れ！　鳴神！！」

鳴神を放った。

政宗
「よーく聞けテメェら、これから学園祭に向けていろんなｏｐｉｎｉｏｎを言って貰う。これによって今後、準備する物が変わってくるから早急に決めたい。わかったテメェら？」

一同
「「「「わっかりやしたぁぁぁああ！！！」」」」

鳴神を喰らった一同は黒こげになりながら元気よく答えた。

小十郎
「元気が足らねーなぁゴルァ」

政宗
「もういいぞ。話が進まねえ」

そして本題に移る政宗。

政宗
「さっきも言ったが出し物を決めなければ意味がねえ。テメェら、何かねえか？」

しかし、政宗の問いに答える人はいない。

政宗
「……誰もＮｏｔｈｉｎｇか」

華琳
「……ならば私に良い考えがあるわ」

政宗
「Ａｈ？　何かあんのか？」

華琳
「ええ、これよ」

そう言って華琳は政宗にある紙を渡した。

その中身を確認して見ると……

“ドキッ！？　美少女だらけの喫茶店！！　アフターサービスもあるよ！”

とんでもない事が書かれていた。

政宗
「何してんじゃテメェェェェエエエ！！！（怒）」

華琳
「何って、喫茶店よ？」

政宗
「そこじゃねぇ！！　俺が言ってるのはこの“Ａｆｔｅｒ　ｓｅｒｖｉｃｅ”の事を言ってんだよ！！」

華琳
「これが一番重要じゃない！」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！！」

口論中……

政宗
「……ともかく、華琳の提案で“普通”の喫茶店で行こうと思っている。異論はあるか？」

一同
「「「「「……」」」」」

政宗
「ＯＫ、なら喫茶店で話を進める」

その後も様々な話し合いをするのであった……

～１－Ｃ～

蓮華
「みんなは何かやりたいのはあるかしら？」

他のクラスと同じように１－Ｃのクラスも学園祭の出し物を考えていた。

幸村
「はい！」

蓮華
「……誰かいないかしら？（汗）」

幸村
「はぁい！！」

蓮華
「……はぁ」

蓮華はわざと無視していたが、幸村の圧倒的な存在感に負けた。

蓮華
「それじゃあ、幸村」

幸村
「うむ！　某は……」

佐助
（まぁーたしょうもない事を言うんじゃないだろうな～……突っ込みの準備してよ）

思春
（……まぁ佐助が突っ込むだろう）

左近
（さて……どんな事を言い出す事やら）

天和
（ユッキー、カッコいいな～／／／）

穏
（今日はどんな事を言うんでしょう～？）

亞莎
（だ、大丈夫でしょうか……）

明命

（はぅ！／／／　木の上にお猫様が……／／／）

幸村の発言をあまり期待していない一同（二名を除く）。

しかしその予想は……

幸村
「皆で作った作品を販売する事をやってみたいでござる！！」

意外にも普通の意見だった。

蓮華・佐助
「「……へ？」」

思春
「なッ！？」

左近
「ほぅ……」

天和
「……ほえ？」

穏
「あらあら～」

亞莎
「……（唖然）」

明命
「はぅはぅ～／／／　お猫様～／／／」

意外な一言に一同は唖然とする（一名を除く）。

幸村
「……ダメでござるか？」

蓮華
「い、いや、幸村からそんな事を言うとは思わなかったから……（汗）」

幸村
「そうでござるか？　某は普通の意見を述べたんだが……」

最早、普通の意見を言う事自体が意外となってしまう幸村。

蓮華
「ま、まぁ幸村の意見を取り入れたいんだが……皆はどうだ？」

一同
「「「「か、構いません（汗）」」」」

クラスの皆も唖然としていた。

蓮華
「じゃあ幸村の意見で行きましょう」

幸村
「おぉ！　忝ない！」

こうして１－Ｃのクラスは売店となった。

幸村
（よし！　上手くいったでござる。後は……）

その中で幸村はとある気持ちを胸に秘めながらクラス会議は過ぎていく……

～１－Ｄ～

三成
「さぁ意見を言え。言わねば斬首だ」

一同
「「「「あんまりだ！？」」」」

１－Ｄのクラスも例外なく、学園祭に向けて話し合っていた。

月
「お、落ち着いてみっちゃん（汗）」

三成
「……フン」

詠
「……いつも通りね」

清正
「ま、あれはあれでクラスの為に動いているから良いんじゃないか？」

正則
「でも相変わらず頭デッカチだな～」

三成
「そこ！　話す暇があったら意見を言わんか！」

詠達を苛立ちながら注意する三成。

大谷
「まぁ落ち着くのだ三成」

三成
「形部？」

そこへ大谷が三成に近付いてきた。

大谷
「三成、我に案がある」

三成
「案だと？」

大谷
「あぁ……クラスの出し物についてだ」

月
「な、何をやるんですか？」

大谷の言葉に注目する一同。
そして大谷は皆に案を告げる。

大谷
「我は“化生屋敷”を推薦する」

正則
「……けしょう？」

清正
「要はお化け屋敷だ」

大谷が推薦したのは“お化け屋敷”であった。

月
「お、お化け屋敷ですか（汗）」

大谷
「あぁ……他のクラスは基本的に茶室やら売店やらをやる筈よ。ならば、我らはその基本から外れ、腹を満たした人間をこの娯楽施設に引き寄せれば此方の得となる」

七乃
「なるほど、それでしたら他の喫茶店やら売店やらとは競争せずに簡単に客を呼び込める訳ですね♪」

大谷
「左様」

三成
「流石は形部だ」

月
「皆さんはお化け屋敷で大丈夫ですか？」

大谷の説明に皆は納得したようで反論はない。

月
「それでは、私達のクラスはお化け屋敷にします」

三成
「指揮は形部に任す。良いか？」

大谷
「構わぬ。元々は我の意見だ」

こうしてお化け屋敷の準備に取りかかる１－Ｄ。

大谷
（ヒヒヒッ！　これでより多くの不幸が見れるわ！）

大谷の黒い感情と共に……

第六十七話、学園祭とは準備の段階で盛り上がる（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

ＯＰと共にはっちゃける華琳。

華琳
「さぁ！　いよいよ始まりました恋ＢＡＲＡ学園ラジオ！　前はコバラと略したけど、これからは“コバラジ”でよろしくね！」

政宗
「まさかホントに続くとは……」

華琳
「これもアンケート結果よ。アンケートしてくださった皆さん、ありがとうございます」

政宗
「ま、やるかには頑張るか。それより、今回の話だが……」

華琳
「いよいよ学園祭が始まるわね」

政宗
「やっとだな」

華琳
「それぞれの出し物も決まった事だし今後が楽しみね」

政宗
「ところで真田は何か考えてたみたいだが？」

華琳
「そこはどうだっていいのよ」

政宗
「いいんかい」

華琳
「尺がないの。次のコーナーに行くわ」

政宗
「……ま、そういうことなら仕方ねぇか」

華琳
「次のコーナーは……質問コーナー！」

政宗
「最初の質問、龍の骨さんからの質問」

“桃香達に質問です。気力少年ダイチ！の関平と張包をどう思いますか？”

華琳
「完全に私情ね」

政宗
「そんな事言うんじゃねぇ！！　大事な読者様だぞ！」

華琳
「まぁそうね。それじゃあ、桃香達の返答よ」

桃香
「可愛いらしいよ♪」

愛紗
「私もあのくらい可愛かったら……」

鈴々
「にゃにゃ？　その子はいっぱい食べるのか？」

華琳
「以上よ」

政宗
「鈴々は相変わらずマイペースだな」

華琳
「それが彼女の良いところよ。それじゃあ次の質問、ケンさんからです」

“曹操達に質問です。ＨＥＲＯ’ｓ　ＥＰＩＳＯＤＥに出ている桂花が蒼穹の騎士団に入ることにどう思いますか？”

華琳
「こっちも私情ね」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　とっとと質問に答えんかい！」

華琳
「そうね……まぁ何をするにしても全力でやりなさい。中途半端にはやらない事ね」

政宗
「それにはａｐｐｒｏｖｅ　ｏｆ」

華琳
「今回はこれで終わりね。まだ余裕はあるみたいだけど、増えてきたら繰り越しになるかもしれないから気をつけなさい。それと、この小説の質問もくれたら有り難いわ」

政宗
「注文が多い覇王だな」

華琳
「ま、この小説を読んでくれるだけで感謝してるってのが本音よ」

政宗
「Ｈａ！　同感だ！」

華琳
「それじゃあ今回は此処までね。次回は１－Ｂの動きみたいよ」

政宗
「なら俺はＨｏｌｉｄａｙだな」

華琳
「そうね」

政宗
「ま、俺らがいなくても楽しんでくれよ」

華琳
「次回もよろしくお願いするわ！　さよなら！」

第六十八話・A、それぞれの準備～1－B編～

～あらすじ～

学園祭の準備に取り掛かる1－B。

～1－B～

家康
「よし、その飾りは外に貼ってくれ」

焔耶
「わかりました」

家康
「半蔵、それは中で貼り付けをしてくれ」

半蔵
「承知」

現在、1－Bのクラスは学園祭に向けての準備が行われていた。

桃香
「愛紗ちゃん、そこのテープをちょうだい」

愛紗
「わかりました」

元親
「よっこらしょっと」

部屋の飾り付けの方は順調に進んでいく。

そこへ……

翠
「お～い。みんなの飯を買ってきたぞ～」

風魔
「……」

買い出しに出ていた翠と風魔が帰ってきた。

家康
「お、来たか。ならば、一旦休憩をとろう」

桃香
「わかった♪　お～い！」

そして皆は休憩をとる。
何とも普通の学生らしい行動である。
しかしそんな学生らしい行動とはかけ離れた人達がいる。
それは……

～用具室～

星
「か、完璧だ。このように完璧に作れた自分が恐ろしい……」

朱里
「……」

この二人である。
彼女達は衣装の方を任された二人であり、今はその衣装作りが終わったところらしい。

朱里
「……あの～（汗）」

星
「朱里よ！　私は大変な物を作ってしまった！」

朱里
「……これは一体何ですか？（汗）」

喜んでいる星とは正反対に困惑している朱里。
何故なら……

星
「見よ！　この素晴らしいメンマを！」

衣装と全く関係のない事をしていたからだ。
そんな朱里を置いて、メンマを一口食べる星。

星
「この輝き、この弾力、そしてこの味……全てが完璧過ぎる！！」

朱里
「あの……衣装は？」

星
「そんな事など、知ったことか！！」

朱里
「はわわッ？！」

星
「……そうだ！　このメンマを学園祭で販売しよう！　そうと決まれば迅速に行動しなければ！！」

そう言って星はメンマの壺を持って部屋を出て行った。

朱里
「……（汗）」

唖然としている朱里を残して……

～1－B～

朱里
「……という事です」

しばらくして教室に戻った朱里は先ほどの事情を説明した。

愛紗
「……」

翠
「お、落ち着け愛紗！　気持ちはわかるが周りを考えろ！」

説明を聞いた愛紗は静かに殺気を出しながら、得物を手にする。

家康
「ま、まぁそれでは仕方がない（汗）　しかし、どうしたものか・・・・」

家康が考えていると・・・・・

桃香
「はいは～い！　それじゃあ、女子達が考えるってのはどうかな？」

桃香が提案をしてきた。

家康
「女子が？」

桃香
「うん。こういう事は女子が考えた方がいいかな～っと思って」

家康
「ワシは構わないが・・・・・皆はどうだ？」

元親
「俺はそういった事はわかんねえからな～・・・・・任せるわ」

風魔

『委任』

半蔵
「主の従うままに」

家康
「そうか……ならば、此処は女子に任せていいか？」

桃香
「わかったよ♪」

そして女子達は教室から出ていった。

家康
「よし！　それじゃあワシらは女子の分まで頑張るとするか！」

元親
「おぅよ！　テメェら！　此処が踏ん張りどころだぜ！！」

男共
「「「「アニキィィィイイイ！！！！」」」」

その後、女子が抜けたというのにも関わらず、異様なテンションで出し物の準備を行われていた１－Ｂのクラスであった。

～会議室～

此処は１－Ｂから離れた場所にある会議室。
普段は先生や生徒会、または委員会などで使われる事が多いが、基本的に先生に許可を取れば自由に使う事が出来る。
その会議室に集まった１－Ｂの女子達はどのような衣装にするかで話し合っていた。

桃香
「え～っと……どんな衣装が良いかな？」

翠
「シンプルにメイド服で良いんじゃね？」

焔耶
「それだと他のクラスと被るのではないか？」

愛紗
「ではどうしたら良いのだ？」

朱里
「はわわ……難しいですね」

桃香
「う～ん……困ったな～（汗）」

皆で考えるも中々決まらず、困った表情を見せる。

しかし……

？？？

「ならばその悩み！　我が解決してやろう！」

愛紗

「ッ？！　誰だ！？」

突如、会議室に男性の声が響いた。

女子達は周りを見渡すが何処にもそのような姿が見つからない。

焔耶

「何処だ？！　何処にいる！？」

翠

「隠れてないで姿を見せやがれ！！」

？？？

「無駄だ、我の姿は見る事は出来ない」

朱里

「はわわ……（汗）」

？？？

「時に少女よ」

桃香

「わ、私ですか？」

？？？

「そうだ。貴様は何か忘れていないか？」

桃香

「……？」

？？？

「貴様は電工街に行った事があるだろう。その時、貴様は何をした？」

桃香

「電工街に？」

焔耶

「確か、お館と一緒に……ッ！／／／」

焔耶は電工街の時を思い出したようで顔を真っ赤にした。

桃香

「……そうだ！　コスプレだ！」

愛紗

「コスプレ……ですか？」

桃香

「うん！　コスプレだよ！　コスプレ喫茶をやろうよ！」

翠
「コスプレ喫茶？」

桃香
「コスプレ喫茶ならみんな自由の衣装だから楽しいんじゃないかな？」

朱里
「……なるほど。それなら、他のクラスがやったとしても衣装が複数あるから被る事はないですね」

朱里の説明に皆は納得したような表情を見せる。

桃香
「それじゃあ、私達のクラスはコスプレ喫茶って事で大丈夫かな？」

女子達
「「「「大丈夫で～す！！」」」」

桃香の提案に反対の声はなかった。

桃香
「よ～し！　なら、教室に戻ってみんなに言おう！」

女子達は会議室を出て行き、自分の教室に向かっていった。

そして誰もいなくなった会議室では……

???

「それでよいのだ……恋する乙女達よ」

部屋にあったロッカーから男性が現れて、桃香達を応援した。

その正体は……

サンデー毛利

「我が名はサンデー毛利！！　恋する乙女の愛の使者なりィ！！」

サンデー毛利であった。

～1－B～

家康

「コスプレ喫茶？」

桃香

「うん♪」

教室に戻ってきた女子達から衣装の提案を聞いた家康。

家康
「まぁ桃香達がやりたいのならワシは何でも構わぬぞ」

桃香
「みんなは？」

元親
「良いんじゃねえか？」

風魔
『同じく』

半蔵
「主に従うまで」

その他、男子も反対する者はいなかった。

桃香
「じゃあこの案で行くから、誰か買い出しに行かない？」

星
「ならば、私が行こう」

桃香

「ホント！　ありがと、星ちゃ……」

その瞬間、星に視線が一気に集まる。

星
「む？　どうなされた？」

朱里
「あ、あの……メンマは？」

星
「ああ、あれか。あの後翌々考えてな、あのような素晴らしいメンマを売り出すのが勿体ないので私が大切に保管しとく事にした」

朱里
「そ、そうなんですか……（汗）」

愛紗
「……翠、焔耶」

愛紗の指示で星の両腕をしっかりと抑える。

星
「な、何をする？！」

翠

「今回はお前が悪い」

焔耶
「しっかりと説教を受けろ」

星
「……（汗）」

愛紗
「……星よ」

星
「な、何ですかな？（汗）」

名前を呼ばれ、愛紗を見ると、凄まじい殺気が溢れていた。

愛紗
「……トイレは済ませたか？　念仏は唱えたか？　部屋の隅でガタガタ震える準備はＯＫ？」

星
「あ、愛紗よ！　キャラが変わっておるぞ！？　それにそのネタは既に使われたネタ……」

愛紗
「問答無用！！　ハァァアア！！！」

その後、１－Ｂから壮絶な叫び声が聞こえてくるのであった……

第六十八話・A、それぞれの準備～1－B編～（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、今回も始まりましたコバラジです！」

政宗
「相変わらずｔｅｎｓｉｏｎ高いな」

華琳
「ラジオだからよ」

政宗
「理由になってねぇよ」

華琳
「今回は家康のクラスの話だったけど……」

政宗
「無視すんな！！」

華琳
「いいじゃない。何でも引きずってたら男らしくないわよ」

政宗
「……もういい」

華琳
「それじゃあ、勝手に進めるわね。どうやら家康のクラスはコスプレをやるみたね」

政宗
「まぁ問題はねぇだろ。教育上はな」

華琳
「……何か棘のある言い方ね」

政宗
「心当たりあるんならそれ以上は言わねぇよ」

華琳
「……まぁ、いいわ。それと此処で発表があるわ」

政宗
「発表？」

華琳
「今回、学園祭編で他のアニメ作品からの出演についてよ」

政宗

「ああ、そんな事言ってたな」

華琳
「その学園祭編で出演する作品が決まったの。完全じゃないけどね」

政宗
「ほぅ……」

華琳
「現時点で、決まっている作品はこれよ」

“すごいよ!!　マサルさん”
“東方”
“らき☆すた”
“クレヨンしんちゃん”
“真・三國無双シリーズ（6基準）”

華琳
「まぁこのくらいね」

政宗
「上の二作品は既に出演しているな。あのキャラ以外に参加するのか？」

華琳
「それは考えていないみたいね」

政宗

「そうか……ま、いいか」

華琳
「それと上の作品以外で希望するアニメ・ゲーム作品がある方は連絡をちょうだい。検討次第で出す可能性があるわ」

政宗
「さて、次は質問コーナーだ」

華琳
「まずは“ｃｈａｒｌｅｙ”さんの質問」

“こっちの作品では聖王ザビー教会の名産品ザビッシュによって多くの被害者が出てますが、この作品にザビッシュは登場しますか？”

華琳
「ザビッシュ？　何それおいしいの？」

政宗
「……すんごくｂａｄな野菜だ（汗）」

華琳
「そ、そうなの……（汗）」

政宗
「とりあえず返答だが、出す予定はあるらしいぞ（汗）」

華琳

「絶対に口にしたくないわね（汗）」

政宗
「んじゃ、次の質問だ。“蒼　龍一”さんの質問」

“前に麗羽嬢対秀吉のジェンガ対決をしていましたが、仮にジェンガが無限にあったらどちらが勝っていたのでしょうか?予想でもいいので教えて下さい。あと、筆頭も華林嬢も好きですwラジオ頑張って下さいねw”

華琳
「あら、応援メッセージありがと。ちなみに、私の名前は華琳よ。“林”じゃなくて“琳”よ」

政宗
「そこは許してやれ。それと返答だが、これは秀吉が勝つみたいだ」

華琳
「どうしてかしら?」

政宗
「想像したらな……」

～想像～

麗羽

「……もう飽きましたわ」

～終了～

政宗
「……って感じの絵が浮かんできたからだ」

華琳
「ありえそうね」

政宗
「ま、そういうことだ」

華琳
「それじゃあ、次の質問よ。“黒神”さんからね」

“政宗へ。原作では貴方は見事に人気ランキング５年連続１位と言う大きな結果を残しました。
一方で『戦国ＢＡＳＡＲＡ３』でも主人公を務めている家康は７位と言う結果に終わりましたが、そんな家康を見てどう思いますか？（黒笑）”

“華林へ。（恋の意味で）自分の最大の宿敵は誰だと思いますか？”

政宗
「黒ッ！？　コイツの腹ん中、絶対ｂｌａｃｋだぜ！！」

華琳
「ま、質問は絶対よ」

政宗
「……ランキングに関しては感謝している。家康の件は……ドンマイしか言えねぇ（汗）」

華琳
「……その言葉が一番傷付くのよ」

政宗
「……ｓｏｒｒｙ」

華琳
「それと、私の答えは星と風よ。あの二人だけは油断出来ないから」

政宗
「それじゃあ、ｌａｓｔの質問。“白銀の騎士”さんから」

“学園の制服はどんな制服なんですか？”

華琳
「この学園の？　基本的に聖フランチェスカ学園のと変わりはないわ」

政宗
「ただ、その制服を着ていれば自由な格好は許されてるんだ。家康

は制服の上からフード付きバーカーを着ているぜ」

華琳
「今回のコバラジは此処まで。次回は私達のクラスが活躍するわ」

政宗
「それにちなんで一時的だが、ラジオのＭＣも変わるから注意してくれ」

華琳
「それじゃあ、また次回もよろしく！　さよなら！」

第六十八話・B、それぞれの準備～１－Ａ編～

～あらすじ～

学園祭に向けて準備を行う１－Ａ。

～１－Ａ～

政宗
「……おい」

華琳
「何かしら？」

政宗
「これは何だ？」

華琳
「何って……飾り付けが終わった教室よ？」

それぞれのクラスが準備を行う中、１－Ａのクラスは飾り付けは終わったらしい。
しかし、政宗はその飾り付けに疑問を抱く。

何故なら……

政宗
「……それじゃあ一つずつ聞いていく。まずこれは？」

華琳
「空きの時間を作らない為の６８インチの３Ｄテレビ」

政宗
「……これは？」

華琳
「マイナスイオンが発生する滝」

政宗
「……これ」

華琳
「汗をかいた後に使うシャワールーム」

政宗
「……これがｌａｓｔだ。これは？」

華琳
「３６０度回転式クイーンベット」

政宗
「これラブ●じゃねぇぇぇえかぁぁぁああぁあ！！！」

教室の飾り付けが完全にラ●ホ風であったからだ。

政宗
「テメェ言ったよな！　今回はｎｏｒｍａｌな喫茶店にするってよ！！（怒）」

華琳
「甘いわ政宗！　私はタダで転ぶような人間ではないのよ！！」

政宗
「自慢すんじゃねぇ！！　そもそもよく教室を●ブホに出来たな！？」

華琳
「それは簡単よ。園丁†無双が頑張ってくれたからね」

園丁†無双
「「「「そいや！　そいや！　そいや！　そいや！」」」」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！！（怒）」

華琳の暴走にブチ切れる政宗。

政宗
「……ともかく、こんなラブ●なんていいから今すぐ元に戻せ」

華琳
「えぇー……」

政宗
「……本気で斬るぞ？（怒）」

華琳
「冗談よ。貴方達、しっかり働きなさい」

園丁†無双
「「「「そいや！　そいや！　そいや！　そいや！」」」」

華琳の指示により園丁†無双は作業に取り掛かる。

政宗
「……大丈夫なんだろうな？」

華琳
「さすがにもうふざけないわ。安心しなさい」

政宗
「……なら、いい」

そう言って教室を出ようとする政宗。

華琳

「あら、何処へ行くの？」

政宗
「料理班の奴らがどれだけ進んでいるかｃｈｅｃｋしに行くんだよ」

華琳
「そう……それなら、私も行くわ」

政宗
「良いのか？」

華琳
「良いのよ。元々、私が此処で出来る事なんてないんだから」

政宗
「……んじゃ、行くか」

華琳
「ええ」

そして２人は教室を出て行き、調理室に向かっていった。

～調理室～

恋ＢＡＲＡ学園、調理室。
此処は家庭科の授業や料理部が調理などを行う場合に使われる教室である。

しかし此処も先生の許可さえあれば、自由に使用しても良い。

小十郎
「いいかテメェら、料理は新鮮さが命だ。魂を込めて作るんだ」

クラスA
「はい！」

秋蘭
「そんな切り方だと怪我をするぞ。持ち方はこうだ」

甲斐姫
「こ、こう？」

稟
「な、凪さん、その赤い物質は何ですか？（汗）」

凪
「？　激辛麻婆丼ですが？」

現在、調理室では1－Aの小十郎や秋蘭などのクラス数人が学園祭に向けて料理を行っていた。

そこへ……

政宗
「邪魔するぜ」

華琳
「失礼するわ」

様子を見に来た政宗と華琳が現れた。

小十郎
「政宗様」

秋蘭
「華琳さまもいらしたんですか」

政宗
「まぁ、様子見だ。　Ｈｏｗ' ｓ？」

小十郎
「だいぶ、世間に出せるまでの味にはなってきました」

秋蘭
「まだ何人かは慣れない動きですが……」

甲斐姫
「うぐッ（汗）」

政宗
「Ｈｕｍ～……ま、此処は小十郎らに任せるからしっかりやってくれ」

小十郎
「はっ」

華琳
「ところで、今の料理の状態はどうなの？　少し味見したいのだけれど……」

凪
「あ、此方にあります。どうぞ」

そして凪は自分が作った料理をスプーンに乗せ、政宗と華琳に渡す。

政宗
「ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

華琳
「……随分と赤いのね」

稟
「あ、それは……（汗）」

稟が注意しようとしたが、その前にスプーンを口に放り込む。

政宗
「……ッ！？　これはかなりＶｉｎｄａｌｏｏだな」

味は一口食べた瞬間、口の中が激痛に襲われる味である。
政宗はどうにか耐えられる事が出来たが、それでもかなりのダメージがあるようだ。

政宗
「オイ、テメェは大丈夫か？」

華琳
「……」

政宗は華琳に声を掛けるが、華琳から返事はなかった。

政宗
「……？　オイ」

華琳
「……か」

政宗
「か？」

華琳
「か……か……辛ひぃぃぃぃぃぃぃぃ！？！？！？！！（泣）」

政宗

「Ｗｈａｔ?!」

華琳の突然の叫びに驚く政宗。

華琳
「ひっぐ……えっぐ（泣）」

政宗
「オイ！　何で泣いてんだよ!?」

秋蘭
「……しまった!!　華琳さまは辛いものが壊滅的にダメである事を忘れていた!!」

政宗
「だからって泣くか?!」

華琳
「ひたひ～……（泣）」

政宗
「テメェも俺の制服で口を拭くな!!」

華琳
「だって辛ひんだもん!!（泣）」

政宗

「オイィィィ！！　覇道の欠片もないよこの人！！」

その後華琳が元通りになるまで、４０分掛るのであった。

～１－Ａ～

真桜
「お～！　しっかりと出来とるな～！」

沙和
「スゴいの～！！」

風
「ぐぅ～……」

真桜
「って起きんかい！！」

風
「おぉ！！」

１－Ａでは、園丁†無双の作業が終わり、喫茶店らしくなっていた。
そして、買い出し班に向かっていた真桜らが帰ってきて、教室の出来に驚いていた。

そこへ……

政宗
「……やっと普通の喫茶店らしくなったな」

華琳
「そうね」

調理室から帰ってきた政宗と華琳。

真桜
「お！　筆頭さんやないかい！」

政宗
「よう。テメェらも帰ってきたのか」

風
「はいです～」

沙和
「しっかり頼まれた物買ってきたの～♪」

華琳
「……あら？　春蘭と桂花は？」

真桜
「へ？　なんや、用事があるみたいなこと言って先に帰っとったけど？」

政宗
「Ａｈ？　何言っていやがる。あいつらの姿なんて一回も見てねぇぜ」

沙和
「でもでも、先に帰ったのはホントなの～」

風
「……これは事件の臭いが」

政宗
「話をややこしくするな」

風
「……ぐぅ～」

華琳
「……まさか」

政宗
「何か知ってるのか？」

華琳
「一つ心当たりがあるの。少し探してくるわ」

春蘭と桂花がいない事で、一つ心当たりがある華琳。
そして華琳は教室から出ていくのであった。

～空き部屋～

此処は何も使われていない空き部屋。
しかし、そんな部屋に二つの影があった。

春蘭
「……誰もいないか？」

桂花
「ええ」

春蘭と桂花である。
２人はこそこそと隠れながら何かをやりとりしていた。

春蘭
「それじゃあ……」

桂花
「始めるわよ……」

そして２人は懐からある物を取り出す。
それは……

春蘭
「おぉー！！／／／／　これは華琳さまの生着替え写真！／／／／」

桂花
「きゃー！！／／／／　こっちは体育の授業で汗を流す華琳さま！／／／／」

華琳の生写真であった。

春蘭
「やはり注文しといてよかった！」

桂花
「ええ！　しかし、こんな姿を華琳さまに見られたら大変よ」

春蘭
「ああ、もしかしたら嫌われてしまうかもしれん」

？？？
「私が何かしら？」

二人
「「……へ？（汗）」」

2人の背後から聞き慣れた人物の声が聞こえ、ゆっくりと振り向く。

そこには……

華琳
「春蘭、桂花……何してるのかしら？」

二人
「「か、華琳さま？！？！」」

愛しの華琳が立っていた。

華琳
「私達が準備をしている中、サボりとは……いい度胸ね？」

春蘭
「も、申し訳ありません華琳さま！！」

桂花
「罰なら何でも受けますのでお許しを！！」

華琳
「……何でも？」

二人
「「はっ！！」」

華琳
「そう……」

そして華琳は何かを考え始める。

しばらくして……

華琳
「なら、二人には罰を与えるわ」

二人
「「何なりと!!」」

罰を思い付いた華琳は2人にそれを告げる。

その罰とは……

華琳
「二人は今回の喫茶店で“バニーガール”の衣装を着る事ね」

羞恥心の塊であった。

春蘭
「そ、そんな!?／／／」

桂花

「それは男にも見せなければならないのですか?!／／／」

華琳
「勿論よ。それを含めての罰よ」

桂花
「そ、そんな～……」

華琳
「ま、しっかりやりなさい。もし、これを守らなければ……一カ月私の側近はやらせないわ」

二人
「「……（汗）」」

それは本当に嫌みたいで、２人顔の血の気が引きまくっていた。

華琳
「それじゃあ頑張りなさい。ふふふっ」

二人
「「か、華琳さま～（泣）」」

こうして２人のバニーガールは約束された１－Ａのクラスであった。

第六十八話・B、それぞれの準備～1－A編～　（後書き）

桃香
「桃香と！」

家康
「家康の！」

桃香
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

桃香
「今回は華琳さんと政宗さんに代わってＭＣを務めます桃香と！」

家康
「家康だ！　皆の者、よろしく頼む！！」

桃香
「まずは今回の話なんだけど……」

家康
「まぁ華琳らしいといえばらしいな（汗）」

桃香
「うんうん。それに出し物は被っているみたいだし、こっちも気合いを入れていかないとね！」

家康

「そうだな」

桃香
「さてさて、話の感想は此処までにしまして……今回も他作品のアニメ・ゲームの発表です！」

家康
「今回、追加されるのはこれだ！」

“銀魂”
“よんでますよ、アザゼルさん。”
“ワンピース”

桃香
「へぇ～……いろんな作品があるね」

家康
「それと龍の骨さんから頂いた“ＩＳ”は作者の勉強不足で完璧に把握できていないようなのでナシという事になりました。心からお詫び申し上げます」

桃香
「それと、まだまだ他作品の要望は受け付けますのでよろしくお願いします！」

家康
「さぁ、次は質問コーナーだな。最初は“白い奇術師”さんからの質問」

“慶次たち2年生はいったいどんな出し物を出すんですか?”

“学園祭を潰そうとする命知らずの人物はでますか?”

桃香
「そういえば話の中で出て来なかったからね~」

家康
「先輩達の出し物は先の話で出てくるみたいだぞ」

桃香
「それと、二つ目の質問は……何やら陰で動きがあるみたいだよ」

家康
「許せんな」

桃香
「ホントだよ~……さて、次の質問だよ。“紅玉”さんからの質問」

“皆さんのテストなどの成績はどんな感じでしょうか?”

桃香
「うぅ……(汗)」

家康
「まぁワシは悪くはなかったぞ」

桃香
「わ、私は……あはは（汗）」

家康
「とりあえず、一番上が毛利先輩。一番下が直江兼続だな」

桃香
「直江君は答案用紙に“俺は無敵!!”しか書かなかったみたい」

家康
「わかったかな？　次の質問“黒神”さんからです」

“星へ。隙があれば政宗の奇襲接吻をしますか？”

“愛紗へ。怒るのも大概にしたほうが良いですので。下手すれば『シャマル鍋』を無理矢理飲ませますので（黒笑）”

“蓮華へ。『真・恋姫†無双』では姉の雪蓮を差し置いての1位、おめでとうございます。”

桃香
「……うわ～（汗）」

家康
「と、ともかく、皆の答えだ（汗）」

～返答～

星
「うむ！　毎日狙っておる！！」

愛紗
「……貴方も料理が出来ないのですね（泣）」

蓮華
「ちょっと！　姉様に何ふっ掛けたのよ！　殺気がとんでもないことになっているのだけれど！！？」

～終了～

桃香
「……愛紗ちゃん。意味が違うんだけど（汗）」

家康
「……良しとしようではないか、桃香」

桃香
「……そだね」

家康
「さて、今回は此処までだ！　次回は真田のクラスだな！」

桃香
「という事で次回のコバラジは華琳さんと政宗さんが戻ってきますので安心してくださ い♪」

家康
「それでは次回もよろしく頼もう！　それでは！」

第六十八話・C、それぞれの準備～1－C編～

～あらすじ～

学園祭に向けて準備を行う1－C。

～商店街～

蓮華
「う～ん……どんなものを作ればいいのかしら？」

思春
「……」

学園祭ではクラスの手作り商品を下に売店を展開する1－C。
その手作り商品を何にするかと参考までに商店街に繰り出した蓮華と思春。

蓮華
「ねぇ思春」

思春
「はっ」

蓮華
「貴方は一体何を作るの？」

思春
「私はこんなのを考えております」

そう言って思春は蓮華に紙を渡す。

そして蓮華が紙を開くと……

“これさえあれば誰でも暗殺が出来る！　簡単でお手軽な思春特製、手作り暗殺道具！”

蓮華
「……（汗）」

とんでもない物を販売しようとしていた思春。

思春
「どうですか？」

蓮華
「これはやめて思春……今後の為にも（汗）」

思春

「……蓮華様が仰るのならば」

蓮華の一言により思春特製、暗殺道具はなくなった。
その時、思春は少し悲しそうな顔をしていた。
どうやら自信があったようだ。

蓮華
「しかし困ったわね……一体どんな物を作れば良いのかしら」

そして周りを見渡す蓮華。

すると……

蓮華
「……ん？」

とある店の一つの手袋に目が止まり近付く蓮華。

蓮華
「もうこんな時期なのね。最近まで夏だったというのに……」

思春
「……蓮華様」

蓮華
「何？　思春」

思春
「宜しければ……その手袋をお作りになられては如何ですか？」

蓮華
「……え？」

思春は手作り手袋を蓮華に提案した。
そんな蓮華は再び手袋を見つめる。

蓮華
「……確かにいい案ね。でも、私に作れるかしら？」

思春
「何事も、やってみなければわかりません」

蓮華
「……そうね。ありがとう、思春」

思春
「いえ……」

そして蓮華は参考として手袋を買っていった。

～美術室～

此処は恋ＢＡＲＡ学園の美術室。
普段は美術の授業や美術部に活用されている教室である。
しかし、学園祭が近いという事もあり、今は自由に使用が出来る。

そんな教室には……

天和
「ふんふんふ～ん♪」

亞莎
「これは……こんな感じかな？」

明命
「はぅ！／／／　完璧なお猫様です！／／／」

１－Ｃの女子数名がコップやお皿の裏に絵を描いていた。
これは天和の提案で、市販で売られている商品などを絵を描いたりし、手作りとして販売するというものである。
その案は承諾され、現在女子数名がそれを実行しており、絵を描いているのだ。

亞莎
「それにしても、よくこのような案が思いつきましたね」

天和
「うん。アイドルの時もよく手作りの物を発売していたからね」

明命
「ほぇ～……」

亞莎
「その時は何を作っていたんですか？」

天和
「うんとね……クッキーとかかな～」

明命
「クッキー？　……そうだ！　食べ物も手作りにすればもっと売れるかもしれませんよ！」

亞莎
「……確かにいいかもね」

天和
「面白そうだね～♪」

明命
「それなら、善は急げです！　皆さ～ん、聞いてくださ～い！！」

そして明命はその場にいた女子達に説明をして、皆から承諾を貰って調理室に向かっていった。

～1－C～

左近
「佐助さん。それは壁に貼り付けてください」

佐助
「ほいきた」

1－Cの教室では、左近と佐助率いる男子数名が飾り付けを行っていた。

左近
「ま、だいたいはこんな感じですかね」

佐助
「なら休憩に入る？」

左近
「そうしますか」

左近は皆に休憩を告げ、一時解散となった。
そして左近と佐助は学食に向かっている。

左近
「そういえば佐助さん」

佐助
「ん？」

左近
「佐助さんは何を作るんですか？」

佐助
「俺様は……これだ」

そう言って佐助は懐からある物を取り出し、左近に渡した。

左近は渡された物を確認すると……

左近
「……佐助さん」

佐助
「……何だ？」

左近
「何で……女性の着替え写真があるんですか（汗）」

それは女子達の生着替え写真であった。

佐助

「オイオイ……お前も男ならわかるだろ？　これはかなり内密に行われているんだ。だから……な？」

左近
「……まぁ、俺も男ですから気持ちはわかりますよ」

佐助
「だろだろ？　ちなみに、華琳の写真はもう売り切れたんだ。かなり儲かる気がするぜ」

左近
「……けどね、佐助さん」

佐助
「ん？」

左近
「後ろ」

佐助
「後ろ？」

左近に言われ、佐助は後ろに振り向くと……

幸村
「さ～す～け～！！（怒）」

佐助

「だ、旦那?!（汗）」

怒りで震えている幸村が立っていた。

佐助
「いや、旦那、これは……その……」

幸村
「……破廉恥でござぁぁあぁあああぁぁぁるぅぅぅぅう!!」

佐助
「ぐはぁぁあぁああ!!!?!?!」

言い訳を述べようとした瞬間、幸村の鉄拳制裁を佐助に喰らわせた。

幸村
「このような物は!」

そして勢いをそのままに左近から写真を奪いとり……

幸村
「大!　烈火ぁぁあぁぁあああぁ!!」

佐助

「やめてぇぇえぇえええ！！（泣）」

写真を八つ裂きにした。

幸村
「二度とこのような失態は行うな！　良いな！」

そして幸村は佐助と左近の前から去っていった。

佐助
「……俺様の……計画が……」

佐助の落ち込み具合は凄まじく、佐助の周りは負のオーラに包まれていた。

左近
「ま、仕方ありませんね」

佐助
「一言で片付けるな！　貴様にはわかるまい！　この俺様を通して出る嫉妬が！！（泣）」

佐助は血の涙を流しながら左近の胸ぐらを掴んだ。

左近
「大丈夫ですよ。なんせ……」

そう言って左近は懐に手を伸ばし……

左近
「写真なら此処にあるんですから」

先ほど八つ裂きにされたと思われた佐助の写真を取り出した。

佐助
「お……俺様の写真?!　何で此処に!?」

左近
「先ほど八つ裂きされた写真は偽物で、幸村さんに取られる前に交換したんですよ」

佐助
「……感謝はするが何で此処までしてくれるだ?」

佐助は感謝をしているが、何故此処までしてくれるかわからなかった。

左近
「言ったじゃないですか……俺も男だって」

佐助
「アンタ……良い奴だな～（泣）」

そして佐助は左近に抱きつき、男の友を噛み締めていた。

～道場～

此処は恋ＢＡＲＡ学園の道場。
普段は部活動などで使われているが今は学園祭が近い為、使用されていない。

そこでは……

幸村
「此処は……これを通して」

幸村が１人、何かを作っていた。

幸村
「そしてこれは……む？　まただ。またむちゃくちゃになってし

まった……」

そう言って幸村は最初からやり直そうとした。

幸村
「気の遠くなる作業でござる……否！　某は諦めぬぞ！！」

そして幸村は再び作業を始めた。

幸村
（必ず完成させるぞ！　そして……）

こうして幸村は夜遅くまで、作業をするのであった……

～穏の部屋～

穏
「うふ…うふふふ」

時刻は深夜。
そんな真夜中で穏はパソコンに向かってある物を作っていた。

それは……

穏
「やはり此処は王道の“幸村×政宗”の組み合わせでいきましょう……攻めは政宗さんで受けが幸村さん設定で」

八百一本制作であった。

穏
「さぁ……この後もどんどん作りますよ～……ふふふふふふふ」

穏の夜は長い……

第六十八話・C、それぞれの準備～1－C編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回もやってきましたコバラジです！」

政宗
「今回は真田のクラスだったな」

華琳
「あのクラスは売店を出し物で勝負するみたいね」

政宗
「まぁ人それぞれだって事だな。それと真田は一体何を作っていたんだ？」

華琳
「それは秘密みたいよ」

政宗

「……まぁいい」

華琳
「さて、感想は此処までとして……次は他作品からのゲスト出演の方よ」

政宗
「今回はこの作品が参戦だ」

“ボボボーボ・ボーボボ”
“ケロロ軍曹”

政宗
「Ｈｕｍ～……随分とはっちゃけた作品じゃねぇか」

華琳
「作者自身、ギャグ漫画は好きみたいよ。それと、これでゲスト出演は締め切らせて頂くわ。感想をくれは皆さんに感謝します」

政宗
「さて、今回もやるか。質問コーナー」

華琳
「まずは“龍の骨”さんからの質問」

“ＢＳＡＡ学園では、華琳がハジケリストになってしまっていますが大丈夫でしょうか（汗）”

“そして凪は雛里の使い魔になってますが、凪本人はどう思いますか？”

華琳
「問題ない！！」

政宗
「即答かよ！？」

華琳
「私自身が楽しければ問題ないわ！」

政宗
「……そうかい。それと、凪の返事はこれだ」

～返答～

凪
「私は問題ありませんが……そちらではしっかり修行はしているのでしょうか？」

～終了～

政宗

「って感じだ。Ｉｔ　ｈａｓ　ｂｅｅｎ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ？」

華琳
「次にいくわ。“百鬼丸”さんからの質問」

“政宗がだんだんツッコミが暴走してきましたね。それでもし政宗に一ヶ月ツッコミ禁止って言われたら、政宗は強くストレスを溜めてしまいますか？”

政宗
「Ａｈ～……間違いなく爆死するな」

華琳
「爆発するの？！」

政宗
「Ｙｅｓ」

華琳
「……（汗）」

政宗
「ま、軽いｊｏｋｅだ。次に行くぜ。“蒼　龍一”さんからの質問」

“バニーガールの衣装は希望者が出た場合他の人もきますか？”

政宗
「Ｂｕｎｎｙ　Ｇｉｒｌ？」

華琳
「ああ、それね。希望者がいるのならば受け付けるわ」

政宗
「……テメェ、変な事考えてねぇだろうな？」

華琳
「安心しなさい。貴方には害はないわ」

政宗
「……ＯＫ、信じるか」

華琳
「それじゃあ最後の質問“白い奇術師”さんの質問よ」

“この作品には石川五右衛門は出てきますか？”

政宗
「ああ、あの大泥棒か」

華琳
「基本的に考えていないわ。だから、出る希望は薄いわね」

政宗
「今回は此処までだな」

華琳
「そうね。次回は１－Ｄのクラスを……」

政宗
「オイ」

華琳
「あら、何かし……むぐっ？！」

華琳が振り向いた瞬間、何かを口に放り込んだ。

政宗
「今口ん中に入れたのはＰｅｐｐｅｒだぜ」

そう言って政宗は唐辛子を見せる。

華琳
「……」

政宗
「……」

華琳
「ふぇ（泣）」

政宗
「Ｈａ?！」

華琳
「ふぇ……ふぇ（泣）」

政宗
「Ｗａｉｔ　ｆｏｒ　ｉｔ！　それは偽物のチョコだ！」

事実を知った華琳だが、既に涙腺は崩壊しており……

華琳
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！（泣）」

政宗
「Ａｈ～……またか。という事で蒼　龍一さん、こんな風になっちまったぜ」

華琳
「馬鹿馬鹿馬鹿～～！！！（泣）」

政宗
「背中を叩くな！　……次回は１－Ｄのクラスだぜ。それじゃあ次回もよろしくな」

第六十八話・D、それぞれの準備～1－D編～

～あらすじ～

学園祭に向けて準備を行う1－D。

～1－D～

大谷
「福島、お主は外の飾り付けをしておれ」

正則
「へいへい」

それぞれのクラスが出し物の準備を行うように1－Dのクラスも同じように出し物の準備をしていた。

霞
「ウチは何したらええの？」

大谷
「主は化生の衣装作りを頼もう」

霞

「あいよ」

詠
「ボクは何すればいいのよ？」

大谷
「主は……福島の手助けでもしてるがよい」

詠
「何で正則が出てくるのよ！／／／」

大谷
「ヒヒヒッ！　偶々よ」

恋
「……恋は？」

大谷
「……主はそこで座って皆を癒すがよい」

恋
「……わかった」

そして恋はチョコンと座った。

クラスＡ
「ぐはっ？！」

クラスB
「大変だ！　クラスAが血を吐いたぞ！」

クラスC
「効果は抜群だ！！」

大谷
「……まぁ良い」

しかし、それは逆効果を示した。

大谷
（さて……買い出しの三成は上手くやっているか心配だな）

そんな事を思いながら大谷は学園祭に向けて準備を行う。

白蓮
「お～い！　私は何をしたらいいんだ？」

大谷
「……」

白蓮
「……？」

大谷

「……主は自分のクラスの準備をしておれ」

白蓮
「此処なんだけど?!」

～商店街～

三成
「……」

大谷の命により、買い出しを任された三成。

月
「……へぅ」

華雄
「……クッ!」

そして三成が行くならばと月と華雄も一緒に買い出しへと出向く。
しかし、2人は三成と話す事なく、何故か悔しそうな顔をしていた。

何故なら……

美羽

「主様～♪」

三成
「引っ付くな。暑苦しい」

美羽が三成とベッタリくっ付いていたからだ。
そもそも何故美羽が此処にいるのかと？
実は先ほど、３人が学園を出る際に美羽と遭遇し、現在に至る。

美羽
「主様は何処に行くのかの？」

三成
「貴様には関係ない」

美羽
「なら、このまま引っ付いてやるのじゃ！」

三成
「……勝手にしろ」

美羽
「うむ！　勝手にするのじゃ！」

こんな感じで三成にベッタリする美羽。
それゆえに月と華雄は嫉妬していたのだ。

月
（美羽さん……あんな近くに／／／　すごいです……／／／）

華雄
（わ、私が出来ない事を平気で！／／／　……羨ましい／／／）

……嫉妬というより尊敬に近い眼差しであった。

三成
「そろそろ降りろ」

美羽
「嫌じゃ！」

月
「へぅ～／／／」

華雄
（少しは離れんか！！／／／）

こうして三成達は大谷に頼まれた材料を買い、学園へと戻っていったが、美羽は随時、三成に肩車をして貰っていた。

～焼却炉～

清正
「悪いな、手伝わせて」

七乃
「気にしないでください♪」

１－Ｄのクラスの清正と七乃は準備などで出たゴミを捨てにきていた。

清正
「ところで、どうしてゴミ捨てを協力してくれたんだ？　これくらいなら俺一人で大丈夫な量だぜ？」

七乃
「別に理由はありませんよ。ただ、前の借りを返すくらいです」

清正
「そんな事気にしてたのか？　気にする事ねぇよ」

七乃
「それでも借りは作りたくない性格なので♪」

清正と七乃は話しながら教室へと戻っていく。

そんな中、七乃は……

七乃
（さて、どうやって清正さんを振り向かせましょうかね……）

清正を振り向かせる事を考えていた。

七乃は体育祭の時から清正の事が気になり始めた。
しかし、七乃自身は恋愛感情が無知だった為、その感情がわからない日々が続いた。
そんなある日、いい加減にこの感情を知りたくなった七乃は霞に相談する。
すると霞はそれは恋だと教えてくれた。
その瞬間、心にあったモヤモヤは消え、清正が好きだとあっさり認める。

以上の事があり、七乃はどうにかして振り向かせようとしているのだ。

七乃
（何かきっかけがあればいいんですけど……）

清正
「オイ」

七乃
「ッ?!　はいはい、なんでしょうか?」

清正

「何か飲むか？」

七乃が考え事をしてる間に自販機の前にやってきたようだ。

七乃
（……そうだ♪）

と此処で何か思いついた七乃。

七乃
「清正さんは何か飲むんですか？」

清正
「ああ。それのついでで買ってやろうと思ってな」

七乃
「（ビンゴ♪）　いえ、私は大丈夫ですよ」

清正
「そうか。なら、待っててくれ」

そう言って清正は自販機に寄り、飲み物を購入する。

清正
「悪いな。それじゃあ行くか」

七乃
「はい」

そして再び足を動かす2人。
その途中で清正は購入した飲み物を飲む。

清正
「……っふぅ～」

七乃
「おいしいですか？」

清正
「ん？　ああ」

七乃
「（今です）　それじゃあ一口貰いますね」

清正
「……は？」

唖然としてる清正を差し置いて、飲み物を奪い取る七乃。

そして……

七乃
「ん♪」

飲み物を口にした。

七乃は少し飲んでから……

七乃
「ぷはっ、確かにおいしいですね」

一言述べて飲み物を返した。

清正
「……」

七乃
「ん？　どうしたんですか？」

清正
「いや、何ってお前……（汗）」

七乃
「？」

清正
「……何でもねぇよ」

そして飲み物を片手に清正は歩き始める。
その後に七乃も続く。

そんな中、七乃は……

七乃
（あは♪　清正さんも可愛いところありますね。なんかお嬢さまを相手しているみたいな気持ちですね～♪）

変な感情に芽生えていた。

なんだかんだで１－Ｄの準備は順調に進むのであった……

～学食～

昼頃となり、１－Ｄのクラスは休憩を取ることにした。
皆が楽しく食事をしてる中、１人の机だけやたら暗い雰囲気を纏っている

その人物は……

白蓮
「はぁ～……」

白蓮であった。

白蓮
「いくら普通だからって覚えていないって……やっぱり普通ではダメなのかな～？」

どうやら先ほどの事をきにしているようだ。

白蓮
「はぁ～……」

そして再び、溜め息をついていると……

？？？
「隣、いいですか？」

白蓮
「ん？　ああ、構わないぞ」

1人の男が隣に座ってきた。

???

「どうしたんですか？　そんな暗い顔をして」

白蓮

「いや……自分の個性に悩んでいてな」

???

「ほぅ……個性ですか？」

白蓮

「ああ。一度、先輩にも相談してみたんだがな……やはり、個性がないと人にも覚えてくれないんだ。だから、どうしたらいいかと思って」

???

「なら、心配いりませんよ」

白蓮

「……え？」

???

「確かに今は個性がないかもしれません……ですが、それを悩んで人は成長するんですよ。焦ったところで何も成果は生みません。個性ってのは後についてくるものあるんですよ」

白蓮

「……」

???
「見た感じ、周りの個性に焦っているみたいでしたので声をかけたんですが……迷惑でしたか？」

白蓮
「いや、何かスッキリしたよ。ありがとう」

???
「そいつはよかった。それじゃあ俺は失礼します」

白蓮
「もう行くのか？」

???
「ええ、人を待たせているのでね」

そして男は立ち去ろうとした。

白蓮
「待ってくれ。せめて名前を教えてくれないか？」

しかし、白蓮は名前だけでも教えてほしいとお願いする。

???
「構いません。俺は……」

そして男は振り返り……

左近
「島左近と言います。それでは」

名を名乗って白蓮の前から立ち去っていった左近。

白蓮
「左近……面白い奴だったな」

そう言いながら白蓮はまた、左近との再会を願うのであった。
それと同時に、これが白蓮の“恋”の始まりでもある……

第六十八話・D、それぞれの準備～1－D編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁやってきましたコバラジです！」

政宗
「今回は石田の話だったな」

華琳
「ええ。とりあえず、七乃の性格が原作と全く違う件について２０００字で話し合いましょう」

政宗
「終わるわ！！　でも、確かに違うな」

華琳
「まぁ元々原作なんて気にしていないんだからいいんじゃないかしら？」

政宗
「Ｔｈｅ　ｓａｍｅ　ｏｐｉｎｉｏｎ」

華琳
「さて、前回で締め切った他作品の出演だけど、少し増えるわ」

政宗
「参戦するのはこの作品だ」

“魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ”
“侵略！イカ娘”

華琳
「この二作品よ」

政宗
「ちなみに、作者は“なのは”は疎覚えなので注意してくれ」

華琳
「それでは質問コーナーに移るわ」

政宗
「最初の質問。ケンさんからの質問」

“質問があります。明命は迷い猫オーバーランに出てくる希を猫と間違えてモフモフしてしまいますか？”

政宗
「Ａｈ～……確かにあれはｃａｔだな」

華琳
「返答はこれよ」

～返答～

明命
「はぅ～／／／　ネコミミです～／／／　もふもふもふもふもふもふ♪」

～終了～

政宗
「したな」

華琳
「したわね」

政宗
「ま、これでわかったか？」

華琳
「次の質問ね。黒神さんの質問よ」

“桂花へ。
アンタの百合ぶりって原作に比べりゃ薄いですね。
しかも華琳は完全に政宗中心になっちゃっているし。
と言うか、いくら男嫌いでもこのままじゃまずいっしょ。
いっそう、２人が結ばれるところを見届ければ？
そうすれば、アンタの絶望する表情が見られるしね。（黒笑）”

政宗
「……かなりＣｏｕｒａｇｅな質問だな」

華琳
「それじゃあ、返答よ」

～返答～

桂花
「アンタ、チン●ブチ切るわよ？（真顔）」

～終了～

政宗
「逃げろぉぉぉぉおおおぉぉぉぉぉ！！」

華琳

「あれは本気の目ね。気をつけなさい」

政宗
「……ｎｅｘｔ。白銀の戦士さんからの質問」

“質問ですが、政宗と幸村と家康と三成は苦手な人はいますか？”

華琳
「苦手な人ね……政宗は誰が苦手なの？」

政宗
「俺は……星だな。何考えてるかわからねぇからな」

華琳
「ふぅ～ん……ま、いいわ。それと政宗以外はこれよ」

家康……特になし
幸村……露出の多い女子
三成……イエヤスゥゥゥウ！！！

政宗
「最後は違くねぇか？」

華琳
「それでも、苦手には変わりないわ。最後の質問。紅玉さんからの質問」

“モデル事務所や芸能事務所に声をかけられた人はいますか？　絶対いると思うのですが（断言した！？）”

政宗
「ｉｄｏｌねぇ～……そこら辺はどうなんだ？」

華琳
「これについてなんだけど、実はこれ専用の話は作ってあるの。だから、今回は答えられないわ。ごめんなさい」

政宗
「さて、次回は？」

華琳
「最後に先輩達が何を作るか見るわ。それが準備編の最後になる予定ね」

政宗
「ＯＫ！　それじゃあ次回もよろしくな！」

第六十八話・E、それぞれの準備～その他編～

～あらすじ～

学園祭に向けて準備を行う2年生達。

～2－A～

長政
「皆の者！　力を合わせて頑張るのだ！」

2－Aのクラスの男子達は教室の準備を行っている。

2－Aの出し物はダンスを見せ物とした喫茶店風の“ダンス喫茶”である。

クラスA
「長っち、これは何処にやるんだ？」

長政
「それは机の上だな」

クラスB

「長っち、この衣装は？」

長政
「それは当日に我らが着るものだ。元の場所に置いておけ」

クラスＣ
「長っち、トイレ行ってきていい？」

長政
「勝手にしろ！　というより長っちと呼ぶな！（怒）」

一同
「「「「アハハハ！！」」」」

長政
「笑うな馬鹿者！！」

案外、楽しそうにしている２－Ａのクラスである。
一方の女子達は……

～屋上～

猪々子
「１、２、３、４！」

お市
「……」

２－Ａの女子達は屋上で踊りの練習をしていた。
しかし、他に比べてお市が鈍い為、猪々子とマンツーマンで踊りを教えている。

猪々子
「う～ん……まだ動きが堅いな～」

お市
「ごめんなさい……」

猪々子
「……どうすっかな～」

未だに慣れないお市に対策を考える猪々子。

猪々子
「う～ん……そうだ！」

考えていた猪々子は何かを閃き、お市に近付く。

猪々子
（なぁなぁ市）

お市
（……？）

猪々子
（もしこれが上手くなったら……長政が惚れ直すかもしれないぜ）

お市
（ッ？！　……本当ですか？）

猪々子
（ああ、間違いないぜ）

どうやらこれが閃いた事らしい。
しかしその効果はあったようで、今のお市は凄まじい気迫となっていた。

猪々子
「それじゃあ、もう一度やっか」

そして再び、練習を開始しようとした猪々子。

だが……

お市
「はい！」

猪々子
「……え？」

大変素晴らしい笑顔をしているお市に戸惑ってしまった。

猪々子
「えっと……市だよな？」

お市
「そうです！」

猪々子
「……（汗）」

お市
「早く始めましょう！」

猪々子
「お、おぅ……（汗）」

こうして猪々子とお市の練習を再開したが、先ほどと同じ人間とは思えない程の動きを見せ、皆を圧倒させるのだった……

～２－Ｂ～

慶次
「よ～し、やっと出来たぜ！」

全学年が様々な出し物の準備を行っている中で一足先に完成させた２－Ｂ。

その出し物は２－Ｂのクラスがそれぞれの悩みを聞き、様々なアドバイスをする“お悩み相談”である。

官兵衛
「しかし、こんな出し物で大丈夫か？」

慶次
「大丈夫だ、問題ない」

官兵衛
「小生は真面目に聞いてるんだ」

慶次
「なぁに、心配すんなよ。なんせ……」

慶次はチラッとある方向へと向く。

そこには……

阿国

「……？」

阿国が椅子に座っていた。

官兵衛
「？　阿国さんがどうしたんだ？」

慶次
「どうしたもこうしたも、彼女は本願寺金融の秘書兼副社長だ。人生の成功者へのアドバイスなら誰だって参考にするだろ？」

官兵衛
「……まぁ一理ある」

慶次
「それに、俺達は人を楽しくさせるのが今回の目的だ。金稼ぎじゃないからこのくらいでいいんだよ」

官兵衛
「……ま、お前さんの意見だからな。小生は黙って従うだけだ」

慶次
「アッハハハ！　それじゃあ頑張っていきますか！」

そして２－Ｂのクラスは解散となった。

官兵衛
「ところで、あの謙信バカは？」

慶次
「かすがちゃんは、謙信の為にデートプランを考えるらしいから来てないよ」

一つの不安を残して……

～２－Ｃ～

冥琳
「雪蓮、後の準備はどうする？」

雪蓮
「後は当日に届くから大丈夫よ♪」

冥琳
「そうか」

２－Ｂのクラスよりは少し遅いが、出し物の準備が終わっていた。

２－Ｃの出し物は“占い”である。

雪蓮

「ていうより、元就は何処へ行ったのよ？　さっきから姿を見てないんたけど？」

冥琳
「元就なら、トイレに行ってくると言っていたぞ」

雪蓮
「トイレに何十分も掛かる訳ないじゃない」

冥琳
「終わった事を嘆く必要はないだろ？」

雪蓮
「だって～……」

冥琳
「……つい最近まで遊んでた奴は誰だっけ？」

雪蓮
「うっ……（汗）」

冥琳
「その間に元就は働いていたんだ。これくらいの休みは許せ」

雪蓮
「もぉ～……冥琳は元就に甘すぎよ」

冥琳
「ふっ……自覚しているさ」

そして２－Ｃは各自の準備へと取り掛かるのであった……

～２－Ｄ～

秀吉
「半兵衛よ、この硝子細工はどうする？」

半兵衛
「それは真ん中に置こう」

現在、２－Ｄのクラスも出し物の準備に取り掛かっている。
２－Ｄの出し物は心の癒やしを目的とした空間“休息部屋”である。

麗羽
「それにしても……素晴らしい考え方ですわ、半兵衛様！」

斗詩
「皆さんが売店や喫茶店、さらには演劇をする一方でこういった休める店を作る事によって、学園祭で周り疲れた身体を取る。完璧な策略ですね」

半兵衛
「まぁ、僕の意見というよりは大友君も一緒に考えてくれたからね」

宗麟
「これもザビー様のお告げです！」

そう言って宗麟は教室の窓に向かって祈りを捧ぐ。

麗羽
「本当に大丈夫ですの？　あのお方は……」

斗詩
（……麗羽様もあんな感じですよ）

麗羽
「……斗詩さん、何か思いまして？」

斗詩
「い、いえ何も！」

恐るべし麗羽の察知力に慌てる斗詩。

秀吉
「ベットの数はどうなる？」

半兵衛
「ベットは二つ。それ以外はマッサージ付きソファーを完備するよ」

秀吉

「そうか」

半兵衛
「それじゃあみんな、もう少しで完成だから頑張ってくれ」

クラス一同
「「「「応ッ！！」」」」

こうして２－Ｄのクラスは準備に奮闘する。
様々なクラスが準備をし、その時を待つ。

そして……

～校長室～

濃姫
「いよいよ始まりますね」

久秀
「今回はかなり派手な飾りになりましたな。これでは片付けが大変でしょう」

信長
「構わぬ。先の心配より、今の歓喜に心酔せよ」

卑弥呼
「うむ！　お主も言うようになったではないか！」

久秀
「ふっ……卿らもまた、楽しんでおるようだな」

卑弥呼
「楽しむ時に楽しまなくては、長生き出来んぞ」

信長
「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

そして信長は立ち上がり、窓付近まで歩き、校舎を眺める。

信長
「さぁ……興じようぞ」

学園祭……開催！！

第六十八話・E、それぞれの準備～その他編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！」

華琳
「さぁ今回も始まりました、もし恋ＢＡＲＡ学園の女子がドラッカーの『マネジメント』を読んだら」

政宗
「いや、作品違ってくるから！」

華琳
「略してコバラジです」

政宗
「何処を略した？！」

華琳
「冗談よ。さて、今回は先輩達の話だったわね」

政宗

「ああ、それぞれの出し物がわかったな」

華琳
「どれも面白そうだったわ。これは負けてられないわね、政宗？」

政宗
「Ｈａ！　上等だ！　勝負は相手が強ければ強いほどＦｕｎｎｙってもんだぜ！！」

華琳
「ふふふっ……期待してるわ。さて、今回も質問がきてるわ」

政宗
「最初の質問、龍の骨さんからの質問」

“美羽に質問です。『ゾンビゲームＢＣ（バイオハザードクロニクルズ）』のキラービー・アサシンのようになりたいですか？”

“蓮華達に質問です。亜莎がドＳな性格になったらどう思いますか？”

華琳
「亞莎ってあの可愛い子の事かしら？」

政宗
「ああ……ってお前狙ってねぇーよな？」

華琳

「ふふっ、どうかしら？　それと、返答はこれよ」

～返答～

美羽
「嫌じゃ！　妾が物騒な事するのはめんどくさいのじゃ！」

蓮華
「……想像出来ないわね（汗）」

天和
「う～ん……どうなるんだろ？」

穏
「あは♪　面白そうですね～」

～終了～

華琳
「まぁ想定の範囲内の答えね」

政宗
「わかったか？　次の質問にいくぜ。蒼　龍一さんの質問」

“華琳さんと政宗さん、もし自分が没個性になったらどうしますか

”？

政宗
「自分のＰｅｒｓｏｎａｌｉｔｙが？　……まぁその人生を受け入れるな」

華琳
「その人生もまた、後悔をしない生き方をするわ」

政宗
「今回はこんくらいだな。オイ、次回は？」

華琳
「次回はいよいよ学園祭が始まるわ。そして早速、他作品の介入があるわ」

政宗
「Ｈａ！　そいつは楽しみだな！」

華琳
「それじゃあ、次回もよろしく頼むわ。さよなら！」

第六十九話、開催！

～あらすじ～

学園祭、開催！

～恋ＢＡＲＡ学園・校門～

男子
「ようこそ学園祭へ！　ぜひ、ウチのクラスに寄って行ってください！！」

女子
「私達のクラスは二階で～す！！」

血気盛んな掛け声が飛び交う校門前。
それもその筈、今日は待ちに待った学園祭初日。
恋ＢＡＲＡ学園の学園祭は、付近にある商店街や様々な企業がスポンサーとして協力する為、設備や質の高さは他の学校の学園祭を完全に突き放して、頂点に立つ程の人気なのである。
それもあって、先ほどから凄まじい数の客が恋ＢＡＲＡ学園に足を運んでいる。

？？？

「うっは～、すんごい人だかりだね～」

そこへ、1人の小柄な少女が校門前で周りを見渡していた。

？？？

「さてさて、どんな萌えが待ち受けてるか楽しみだね！」

そう言って少女は学園へと消えていった……

～1－B～

桃香

「いらっしゃいませ！」

1－Bの出し物、コスプレ喫茶は中々の客足で、既に行列が出来ていた。

ちなみに、桃香のコスプレは某配管工ゲームのピ●チ姫である。

朱里

「な、なににしまちゅか／？／／」

客に注文を聞く朱里。

朱里のコスプレは園児。
かなり凝っているようで舌足らずなしゃべりをしている。

翠
「あ～クソ……この格好動きずらいんだよ」

文句を言いながら料理を運ぶ翠。
翠のコスプレは某擬人化ゲームのパソコンを擬人化したメイド服。

このように様々なコスプレ店員が縦横無尽に駈ける姿が評判を呼んでいる。

一方、男達は……

桃香
「注文入りました。三番さんにチャーハン二つです」

家康
「心得た！」

元親
「だぁ～！　料理なんて作った事ねぇってのによ！！」

家康
「文句は後で言ってくれ！　ともかく急いで作らなければ！」

半蔵
「完了」

朱里
「ありがとうございます！」

何故か料理をしていた。

～１－Ａ～

華琳
「結果は上々ね」

政宗
「……」

１－Ｂと同様に喫茶店を出し物にしている１－Ａ。
此方も、客足が中々の様子。

政宗
「オイ」

華琳
「何かしら？」

政宗はある方向に指を指す。

そこには……

春蘭

「……／／／」

桂花

「ちょっと！／／／　見るんじゃないわよ！／／／」

秋蘭

「姉者、一体何をしたんだ？」

凪

「な、何故私まで……／／／」

バニーガールの衣装を着た春蘭達の姿があった。

華琳

「何って……政宗はバニーガールも知らないの？」

政宗

「知ってるわ。俺が聞きたいのは何でアイツらがＢｕｎｎｙ　Ｇｉｒｌを着ているか聞きてぇんだよ」

華琳

「春蘭と桂花はお仕置きとして、着せているわ。凪も私に辛い物を食べさせた罰よ」

政宗
「……秋蘭は？」

華琳
「秋蘭は……春蘭の連帯責任で」

政宗
「……あっそ」

華琳
「ふふふ……」

華琳のくだらない感情に突っ込む気力すら込み上げない政宗。
しかしながら、このバニーガール作戦により、政宗らのクラスも好評を呼ぶのであった。

～１－Ｃ～

蓮華
「いらっしゃいませ」

自分達の手作り商品を販売している１－Ｃ。
此方は喫茶店ほどではないが、それでも中々の客足である。

天和
「どうですか～？」

客
「……え？　本物の天和ちゃん？！」

天和
「そうだよ♪　ちなみにそれは私の手作りだよ～♪」

客
「本当ですか！？　買います！　買わせて頂きます！！」

天和
「ありがとー♪」

元アイドルの天和に会えた客は大層喜んで教室を出て行った。

蓮華
（……やっぱり、元アイドルは凄いわね）

その様子を一部始終見ていた蓮華は改めて天和の凄さを感じていた。

そこへ……

女の子
「ねぇお姉さん」

蓮華
「ん？」

小さな女の子が蓮華に話しかけてきた。
蓮華は女の子の視線に合わせるようにしゃがむ。

蓮華
「何かしら？」

女の子
「この手袋も手作りなの？」

蓮華
「ッ！」

女の子が手袋を見せてきたのは蓮華が作った手袋である。

蓮華
「……そうよ。それはお姉さんが作ったんだよ」

女の子
「ホント！？　スゴ～い！」

蓮華
「ふふふっ、ありがと」

女の子
「それじゃあお母さんにこの手袋欲しいって、頼んでくる！」

そう言って女の子は母親らしき人物に駆け寄っていった。

蓮華
（……こうして褒められると、嬉しいわね）

蓮華はこの出し物にして良かったと心から思うのであった。

しかし、この１－Ｃの手作り商品以外に爆発的に売れている商品があった。
それは……

～校舎裏～

佐助
「さぁ続いての商品は“愛紗の水飲み”写真だ！」

客
「「「「うおぉぉぉぉおお！！」」」」

左近
「此方は“斗詩先輩のブルマを直す”写真です」

客
「「「「いやっほぉぉおおぉぉおお！！」」」」

佐助の秘蔵写真である。
ちなみに、この売り上げは１－Ｃのモノとなる。

～１－Ｄ～

詠
「カップル料金は此方です」

男性
「はい」

詠
「……確かに受け取りました。それでは中へどうぞ」

１－Ｄの出し物、化生屋敷に訪れたカップル。
中へ入るとかなり雰囲気があり、不気味な感じを醸し出していた。

女性
「か、かなり雰囲気あるね（汗）」

男性
「大丈夫だよ。どんなに雰囲気があっても所詮は学園祭レベルだから心配すんなよ」

怖がる女性に対し、余裕な態度で振る舞う男性。
しかし、この余裕は一瞬でなくなってしまう。

男性
「……ウワッと?!」

しばらく歩くと男性は誰かとぶつかってよろける。

女性
「だ、大丈夫?」

男性
「ああ……っと、大丈夫ですか?」

男性はぶつかってきた相手に近寄る。

月
「大丈夫です。ぶつかってしまいすいません」

辺り一面薄暗いの為、誰かはわからないが、声からしてどうやらぶつかってきたのは月のようだ。

月
「此方が悪いのに申し訳ないんですが、先ほどぶつかった拍子でモノを落としてしまったんですが……一緒に探して貰っても宜しいでしょうか？」

女性
「大丈夫ですよ。どんな物ですか？」

月
「それは……」

その瞬間、突然月に光が指す。

そこには……

月
「私の頭です」

首から上がないメイド服を着た月が立っていた。

カップル

「「……」」

一瞬の沈黙。

刹那……

男性
「うわぁぁぁあぁぁああぁあ！！？！！？！？！」

女性
「きゃぁあああぁぁぁああぁ！？！？？！？？！」

全速力で月から離れていった。

女性
「くくくくびくびびくがががが！？（泣）」

男性
「おおおお落ち着け！！」

月から離れ、座りながら慌てふためいているカップル。

そこへ……

七乃
「この先曲がり角になっていますので注意してください♪」

七乃が現れ、カップルに話しかけてきた。

男性
「あ、ありがと……」

カップルは七乃に目を向けると、絶句する。

七乃
「気にしないでくださいな♪」

そこには、頭と首しかない“ろくろ首”状態の七乃の姿があった。

カップル
「「うぎゃぁぁぁぁあぁぁああぁあああぁああぁぁあ!?!!??!!」」

その姿に再び、恐怖したカップルは先ほどより早く駆けていく。

女性

「もう嫌！　早く出ましょう！！（泣）」

男性
「そんな事わかってるよ！！　もう少しで出口だから頑張れ！」

そしてカップルが曲がり角を曲がると……

？？？
「……スゥゥウ」

カップル
「「ッ？！」」

薄暗い雰囲気の中から紅い何かが突っ立っていた。

その正体は……

三成
「イエヤスゥゥゥゥゥゥゥゥゥウ！！！！」

恐惶状態の三成であった。

カップル
「「うぎゃぁあぁぁあぁぁぁあ∴£％※@℃☆@＊＆―――――！！

！？？！！」」

その姿に途中、声にならない悲鳴を出しながら、気絶した。

大谷

（ヒヒヒッ！　そうだ！　その魂を待っていたのだ！）

その光景を上から眺めていた大谷はかなり喜んでいる。

大谷

（さぁ！　この生き地獄を共に交歓していこうぞ！　ヒィヒヒヒ・・・・）

そして大谷は暗闇へと消えていく。

この１－Ｄの出し物はリアルな雰囲気が好評を呼び、客足が途絶える事はなかったという・・・・

～廊下～

？？？

「最初は何処に行こうかな～」

ところ変わって、学園の廊下で先ほどの少女が辺りを探り、何処に行こうか迷っていた。

？？？

「む、あれは……」

そう言って少女は足を止め、ある場所へと駆け寄る。

そこには……

雛里

「あわわ……／／／」

雛里が顔を真っ赤にしながら何かを読んでいた。

雛里

（こんな本が学園祭で見つかるなんて……早く朱里ちゃんに教えないと／／／）

ちなみに、雛里が呼んでいるのは“夜の関ヶ原”（達筆者・穏）

？？？

「うっは～、かんなり濃い内容だね～」

雛里
「……え？」

そこへ突如として、背後から声が聞こえる。

雛里が後ろに振り向くと……

？？？
「やっほ～」

雛里と同じくらいの少女が手を振ってきた。

雛里
「……」

？？？
「……？」

？？？

雛里
「あ……あわわわわあわわわああああわ！？！？！？！！／／／」

？？？

「おお！　面白い反応？！」

しばらくして、雛里が我に戻る。

雛里
「す、すいませんでした／／／」

？？？
「いや～、いいっていいって！　こっちも面白いもん見れたし♪」

雛里
「あわわ……／／／」

？？？
「ふむふむ、それにしても……」

雛里
「……？」

？？？
「中々の萌え！　合格です！！」

雛里
「ふぇ？！」

？？？
「そだ！　この後、あたしと一緒に学園を巡ろうじゃないか！！」

雛里
「え？　え？（汗）」

？？？

「というわけで出発進行～！！」

雛里

「あわわーーー！？」

そして少女は雛里の手を握り、強制的に学園を巡る旅が始まった・・・・

こなた

「あ、自己紹介がまだだったね。あたしは泉（いずみ）　こなた。よろしく～」

“狂喜乱舞”

泉　こなた・・・・・参上！

第六十九話、開催！（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！」

華琳
「さぁ今回もやってきたコバラジです」

政宗
「今回の話だが……」

華琳
「それぞれの出し物状況と、こなたの参戦ね」

政宗
「まさか、あのオタク娘がやってくるなんてな……」

華琳
「まぁ、いいじゃない。面白い事だし」

政宗
「別に嫌とは言ってねぇだろ」

華琳
「そう？　言い方的にはそう聞こえたわよ」

政宗
「言ってろ。そんじゃあ質問コーナーに移る。最初の質問、三国同盟さんからの質問」

“前に、政宗の人格が入れ替わる事件がありましたがもし、お二人が互いに入れ替わったらどうしますか？”

華琳
「弄ぶ！！」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　つーか女性の答えじゃねぇだろ！」

華琳
「なら、政宗の答えは？」

政宗
「……早急に華陀に治して貰う」

華琳
「つまらない。却下」

政宗
「却下って？！」

華琳
「冗談よ。次の質問、紅玉さんの質問」

“家康はくすぐられるのが苦手なのは此方でも健在でしょうか？”

政宗
「ああ、そんな事あったな」

華琳
「それじゃあ、返答よ」

～返答～

家康
「昔よりは大丈夫だが、やはり苦手だな（汗）」

～終了～

政宗
「ってな感じだ」

華琳

「それじゃあ次の質問、黒神さんからの質問」

“いやぁ、これは前の質問なんですが……あの後、桂花に襲われちゃって……（以下略”

“石田へ。豊臣秀吉に忠誠する貴方ですが、そんな貴方は華琳に中世する桂花を見てどう思いますか？”

“雪蓮へ。『真・恋姫†無双』では蓮華がランキング1位をとりましたが、姉として誇り高いですか？”

政宗
「黒神ィィィイイイィィイィ！！！　何してんじゃテメェ！！」

華琳
「あら、そんな事してたの」

政宗
「……随分と冷静だな」

華琳
「冷静も何もこんな手紙が置いてあったからわかっていたのよ」

そして華琳は手紙を政宗に渡す。
そこには……

『しばらく旅に出ます。探さないでください』

政宗
「桂花ァァァァアアァァァ！！　Ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ――――――――！！！」

華琳
「さて、桂花の件は既に対策しているわ。そして返答はこれよ」

～返答～

三成
「他人などどうでもいい」

雪蓮
「誇らしいわよ……殺したいほどに♪」

～終了～

華琳
「これが返答よ。それと……」

華琳は突如、ドＳの顔へと豹変する。

華琳
「今回、私の部下を傷物した黒神には罰として、“三回分質問禁止”とするわ（黒笑）」

政宗
「……黒神さんよ、今後は気を付けな」

華琳
「今回はこれまでよ。それと蒼　龍一さん、応援メッセージありがとう」

政宗
「次回は？」

華琳
「次回は恋の話ね。それと、他作品の参戦があるわ」

政宗
「Ｈａ！　そんじゃあ次回もよろしくな！！」

第七十話、これって……

～あらすじ～

こなた、参戦！

～１－Ｂ～

元親
「そんじゃ、後は頼んだぜ」

風魔
『承知』

１－Ｂの入り口付近で元親と風魔が会話をして、その後元親はアチコチ廻っていた。
どうやら交代の時間らしい。

元親
「さてと……何処に行こっかな～」

そんな事をぼやきながら頭を掻く元親。
特に行く宛もなく、どんなところに行こうか迷っていた。

そこへ……

？？？
「お！　大将やないか！」

元親
「ん？　お、真桜じゃねぇか！」

真桜
「どうも～」

真桜が現れ、元親に駆け寄ってきた。

元親
「工学部はどんな感じだ？」

真桜
「かんなり儲けてるで。特に“全自動分別機”がぎょーさん売れとるわ」

全自動分別機とは……様々な物を分別する事が出来る機械。
主にゴミの分別に使われる予定。

元親

「おぉ！　やっぱりアレが売れたか！　いやぁ作っといて良かったぜ」

真桜
「それ以外にもちゃんと売れとるから安心しとってな」

元親
「おぅよ！」

真桜の報告でテンションが上がる元親。

元親
「……ところで」

真桜
「ん？」

元親
「真桜は今暇か？」

真桜
「ウチ？　……まぁ暇っちゃ暇やな」

元親
「ならちょうどいい。今から俺と学園を巡んねぇか？」

この後、1人で廻るより2人で廻る方が良いと考えた元親は真桜を

誘う。

真桜
「ウチならええぇで。どうせなんもやる事あらへんから」

元親
「お、ありがてぇ！　そんじゃあ行きますか」

真桜
「おぉー！」

こうして元親と真桜の学園祭巡りが始まった。

～校庭～

元親
「それにしても、すんごい数だな」

その後、とりあえず校庭にやってきた元親と真桜。
校庭ではすごい人だかりが出来ており、どれだけの人がこの学園祭に来客しているか物語る。

真桜
「ま、みんな祭り好きっちゅー事や。大将も好きなんやろ？」

元親
「おぅよ！　みんなで騒いだら楽しいかんな！」

真桜
「ウチも同じや！　祭りは騒いだもん勝ちやで！」

2人
「「ダァ～ッハッハッハ！」」

一目など気にせずに大声で笑う元親と真桜。
似た者同士である。

元親
「とりあえず、何か食うか？」

真桜
「ウチ、たこ焼きが良い！！」

元親
「ならそこにあるぜ」

そして2人はたこ焼きを購入する。（元親が支払った）

真桜
「……うまい」

元親
「その割にはテンションが低いな」

真桜
「当たり前や！！　学園祭のたこ焼きちゅーたら、中途半端な味が醍醐味やで！　それなのに……それなのに何やこれ！　うますぎにも程があるやろ！」

元親
「いや、本場の人が作ってんだから仕方ねぇだろ」

真桜
「チクショー！　学園祭の味を返せー！！」

元親
「何だよ、学園祭の味って（汗）」

意味のわからない事言い出す真桜に珍しく戸惑いを見せる元親。

元親
「んで、次はどうする？」

真桜
「せやな～……射的なんてどうや？」

元親
「お！　そんならいっちょ勝負でもすっか！」

真桜
「乗った！」

こうして2人は射的場へと足を運び、到着した。

元親
「商品を多く倒した方の勝利って事でいいか？」

真桜
「構わへんで！」

先ほど到着した元親と真桜は既に鉄砲を構えた状態で待機していた。

元親
「それじゃあ……よ～い」

真桜
「始めや！！」

勝負開始！

数分後……

元親
「しゃあ！」

真桜
「負けた～（泣）」

どうやら勝負は元親が勝利したようだ。

真桜
「か弱き乙女に対してこんな仕打ちはあんまりや～（泣）」

元親
「勝負に男も女も関係ねぇぜ！」

ちなみに成績は……

元親・２０個

真桜・１８個

対して差はない。

そんな感じで真桜が悲しがっていると……

沙和

「あ～！　真桜ちゃんなの～♪」

沙和が現れ、２人に近付く。

真桜
「ん？　なんや沙和やないか……どしたん？」

沙和
「えっとね……ユッキーを探してるんだけど、知らない？」

真桜
「ユッキーって……あの真田はん？」

沙和
「そうなの♪」

真桜
「ウチは見てへんな～……大将は？」

元親
「俺も見てねぇな」

真桜
「ちゅーわけでウチらは会ってへんで」

沙和
「……」

真桜
「沙和？」

沙和
「はは～ん」

真桜が話しかけた途端、沙和は不敵な笑みを見せる。

沙和
「真桜ちゃんも遂に春が来たの～♪」

真桜
「……？」

沙和
「何とぼけてるの♪　そこにいる人は彼氏でしょ？」

元親
「……アン？」

真桜
「……へ？」

沙和が元親を指差し、真桜の彼氏だと発言する。
真桜は理解するのに時間が掛かった。

そして……

真桜
「～～～ッ?!／／／／　なななな何言うとんねん!!／／／／」

顔を真っ赤にさせ、全否定した。

沙和
「違うの?」

真桜
「ちが……」

しかし、此処で真桜はある言葉を思い出す。

それは夏休みで……

～回想～

蓮華
「元親……アナタが女性といてワクワクやドキドキする人はいる?」

元親
「……真桜だな」

～終了～

真桜
「……／／／」

沙和
「真桜ちゃん？」

元親
「？　オイ、どした？」

突如、黙り込む真桜。
それを心配して元親が近寄る。

だが、此処で……

真桜
「い……」

元親
「アン？」

真桜
「嫌やぁぁぁぁあああ！！！／／／」

真桜は恥ずかしさの限界に達し、立ち去ってしまった。

沙和
「真桜ちゃん!?　待つの～!」

それを追いかける沙和。

そして取り残された元親は……

元親
「……どうしたんだ、アイツ?」

何故、此処から立ち去っていったのか、悩んでいた。

元親
「……ま、考えてもラチがあかねぇ。俺も探すとすっか」

そして、元親も真桜を追いかける事にした。

しかし、そこへ……

???

「そこのお兄さん、ちょいといいかい？」

突如、背後から声を掛けられた。

元親

「アン？　今いそが……」

今から真桜を追いかけようとした為、すぐに断ろうとして振り向く。
しかし振り向いた瞬間、元親は自分の目を疑った。

？？？

「ここら辺にお酒が飲める店はないかな？」

その姿は何処にでもいそうな少女の姿だが、ある部分だけが他の少女と違っていた。

元親

「……角？」

その少女には角が生えていたのだ。

？？？

「ん？　この角がどうしたの？」

元親
「いや……本物そっくりの角だったから少しビックリしたんだ」

？？？
「本物だよ」

元親
「……は？」

萃香
「私は伊吹（いぶき）　萃香（すいか）。正真正銘の“鬼”だよ」

元親
「……本物の……鬼？」

“百鬼夜行”
伊吹　萃香……出現！

第七十話、これって……（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！」

華琳
「さぁ、最近作者が執筆を引退しかけてましたが、どうにか復活する事が出来ましたという報告と共に始まりましたコバラジです」

政宗
「今回はマジで危なかったらしいぜ」

華琳
「実際、この小説の全消しボタンを押しかけたみたいよ」

政宗
「まぁどうにかフッ切れて、いつも通り書いてくのでよろしくな」

華琳
「さて、今回の話だけど……」

政宗

「ウブだな」

華琳
「ウブね」

政宗
「それと、萃香って奴も現れたな」

華琳
「あの萃香はどうしても元親と絡ませたかったらしいわ。鬼と名乗る人を本物の鬼はどう見るか楽しみね」

政宗
「確かにな」

華琳
「さぁ、今回も質問コーナーをやっていきましょう。最初は紅玉さんからよ」

“家康がくすぐられてどれくらい耐えられるか実験してもいいですか？”

“あと皆さんの得意教科、苦手教科は何ですか？”

政宗
「家康の返答はこれだ」

～返答～

家康
「……してもいいが、多分忠勝が来ると思うぞ？」

～終了～

華琳
「危険だからやめましょう」

政宗
「Ｓｈａｒｅ」

華琳
「それと、私には苦手な教科はないわ。政宗は？」

政宗
「苦手教科？　……俺はＥｎｇｌｉｓｈが案外苦手だ」

華琳
「あれだけ英語を言っといて？」

政宗
「単語は得意だが、長文になったらダメなんだよ」

華琳
「変なの」

政宗
「ほっとけ」

華琳
「あと、それぞれの答えはこれよ」

家康・国語が得意。苦手はあまりなし。

幸村・体育が得意。勉強全般が苦手。

三成・イエヤスゥゥゥゥゥウウ！！！

華琳
「以上よ」

政宗
「いや、一人おかしいからね！？　明らかに答えになってないからね！」

華琳
「アレに関しては触れない事にしたわ」

政宗
「……そうか」

華琳
「じゃあ次の質問。白銀の戦士さんからです」

“政宗と家康と慶次と華琳はどういう時にキレますか？特に政宗と家康はあまりキレないイメージがあるので気になります”

華琳
「私は辛いものを食べると怒るわ」

政宗
「その前に泣くけどな。俺は……舎弟を馬鹿にされたりとかしたらキレるな」

華琳
「各々の返答はこれよ」

～返答～

家康
「う～ん……最近怒ったりしていないからわからん」

慶次
「俺は友達を大切にしない奴に怒るな」

～終了～

華琳
「わかったかしら?」

政宗
「そんじゃあ次。蒼　龍一さんからの質問」

“政宗さんと華琳さんの二人で学園祭の簡単なリポートお願いします。（可能な範囲で）ただし、お化け屋敷は絶対いれて下さい。”

華琳
「リポート?　まぁ簡単にいくわ」

政宗
「まず俺らのクラスだが、基本的に何も飾っていない純粋な喫茶店だ。そしてそれを派性させたのが、コスプレ喫茶やダンス喫茶ってやつだ」

華琳
「そして売店は手作り商品以外にも飲み物やお菓子なども販売しているのよ」

政宗
「最後にお化け屋敷は……」

華琳
「……え?」

そう言って政宗は華琳の服を掴み……

政宗
「行ってこぉぉぉい！！」

華琳
「キャァァアアア！？！？！！」

お化け屋敷に投げつけた。
数分後……

華琳
「ひっく……えっぐ（泣）」

政宗
「とまぁ、こんな奴でも泣きだすくらいの怖さに定評がある感じだな」

華琳
「ズズゥ～……つ、次の質問。三国同盟さんからです」

“張三姉妹から見て、学園の女生徒で一番アイドルとしてヒットしそうなのは誰ですか？”

政宗

「これに関してなんだが、物語の中で第二のｉｄｏｌを発掘する話を作るみたいだから、答えられねぇんだ。ｓｏｒｒｙ」

華琳
「ごめんなさい。最後に黒龍さんからの質問」

“石田　三成さんに質問です。あなたはロリコンですか？”

政宗
「まぁ～たぶっ飛んだ質問をする奴が現れたな」

華琳
「それもいいじゃない。ちなみに、返答はこれよ」

～返答～

三成
「そこで待っていろ。今すぐ斬首する」

～終了～

政宗
「……らしいな」

華琳
「……らしいわ」

華琳
「今回は此処までよ」

政宗
「次回は家康のクラスにある男が現れる。さらに他作品キャラも登場するぜ」

華琳
「それじゃあ次回で会いましょう。さよなら！」

第七十一話、セクシーコマンドー再び！

～あらすじ～

萃香、参戦！

～１－Ｂ～

家康
「桃香、焼きそばが出来たぞ！」

桃香
「了解♪」

１－Ｂの出し物、コスプレ喫茶はかなりの人気を見せる。
それ故に、裏方である家康は様々な料理を作っていた。

家康
「後は……」

翠
「オイ！　家康はいるか！？」

家康

「ん？」

家康が再び、料理に取りかかろうとした瞬間、翠が慌てながら裏方に入ってきた。

家康
「ワシなら此処にいるが……どうした？」

翠
「今、客として変な奴が現れて大変なんだ！　どうにかしてくれ！」

家康
「……変な奴？」

どうやら変な奴が客として、来店して困っているようだ。

その変な奴とは……

～客席～

朱里
「……で、ですから“ヒゲコーヒー”なんて飲み物はありません（汗）」

マサル

「ヒゲコーヒーがない喫茶店なんて喫茶店にあらず！！」

朱里
「はわ？！」

マサルであった。

家康
「朱里、大丈夫か？」

朱里
「い、家康さん！」

そこへ、翠に呼ばれた家康が現れる。

家康
「ん？　お主は確か……」

マサル
「……？」

家康
「その肩の突起物……まさか、マサル殿か？」

マサル
「……そういう君は、まさか、大川君か？」

家康
「いや、全然違うぞ（汗）」

マサル
「違うのか！？　なら君は誰だコンチクショー！！」

家康
「ワシは家康だ。ほら、武闘大会で闘った」

マサル
「………あぁ、家康君か！」

朱里
（絶対に忘れてた……）

心の中で突っ込む朱里。

家康
「懐かしいではないかマサル殿！　一体どうして此処に？」

マサル

「いやー、実はボサンナがアレしてトシ子が宇宙（そら）へと向かい、地上を任された何かがあって此処に来たんだ」

朱里
（……何を言っているんでしょうか？）

家康
「アッハハハ！　なるほど、大変だったな」

朱里
（わかるんですか？！）

２人の独特の空間についていけない朱里。
残念極まりない。

家康
「マサル殿、今後の予定は？」

マサル
「特に考えてないな。まぁ適当に廻るとするよ」

家康
「そうか。なら、このパンフレットをあげよう。もしもの時に使ってくれ」

そう言ってパンフレットを渡す家康。

マサル
「済まないな」

家康
「何、気にするな」

マサル
「それじゃあ、そろそろ行くとしよう。じゃ、また会おう！」

そしてマサルは教室から出ていった。

残された家康と朱里は……

家康
「……ところで」

朱里
「……？」

家康
「マサル殿は何しに此処に来たんだ？」

朱里
「わかってなかったんですか？！」

家康に突っ込みを入れ、持ち場へと戻っていった。

～廊下～

マサル
「ふむふむ……なるほどなるほど」

1人となったマサルは先ほど貰ったパンフレットを逆さまで読みながら辺りを廻っていた。

マサル
「よし！　何一つわからない！」

当たり前である。

マサル
「さて、何処に向かえばいいのだろうか？」

あまり計画を考えていないマサルは何処に向かうか悩んでいると……

？？？
「君、お悩みのようだね」

マサル
「……？」

突如、誰かに話しかけられた。

その人物は……

慶次
「どうだい、俺のクラスに来ないかい？」

慶次であった。

マサル
「……」

慶次
「？　どうした？」

マサル
「……君とは何故か他人に思えないんだが……知らないか？」

慶次
「……いや、知らないな」

マサル

「そうか。それはすまなかったな」

慶次
「ま、いいっていいって。そんな事より、俺のクラスに来ないか？
結構評判いいぜ」

マサル
「何？！　よろしく仮面もいるのか？」

慶次
「いや、そんな事、一言も言ってないよ（汗）」

マサル
「そうか……まぁやる事がないから、そのクラスに行こう」

慶次
「お！　ありがたいね～！　そんじゃあ道案内しますか！」

そして、慶次とマサルは２－Ｂに向かっていった。

～２－Ｂ～

慶次
「阿国ちゃん、客人だよ」

阿国
「ホンマどすか～？　ほな、案内しとくれやす～」

慶次
「ほら、入った入った」

マサル
「失礼する」

慶次の案内で２－Ｂの教室に現れたマサル。
そして、用意された椅子に座った。

阿国
「まぁ……これはまた、個性的なお客さんどすな～」

マサル
「そういう貴方は何か女らしい女性みたいな人物的存在ですね」

阿国
「いややわ～、そんなお世辞いりまへんって」

官兵衛
（……何言ってんだコイツは？）

その場にいた官兵衛はマサルの意味不明な発言を理解出来なかった。

阿国
「ほして、今日はどうしたんどすか？」

マサル
「……実は」

そう言ってマサルは肩の突起物を外す。
すると、みるみる内に髪が縮まっていった。

官兵衛
「なっ？！」

阿国
「あらま～」

その姿に驚く官兵衛と阿国。

マサル
「……最近、この紳士服が売ってないんです。何処に行ったら売ってますかね？」

阿国
「あら、そらえらいどすね」

官兵衛
「ちょっと待てぇぇぇえええ！！！」

マサルの悩み事に突っ込む官兵衛。

マサル
「……？」

官兵衛
「いや、その前にお前さんの髪はどういう仕組みになっとるんだ！？」

マサル
「この髪か？　今はそれどころじゃないと思うんだが……」

官兵衛
「それどころだ！！　というより阿国さんも突っ込んでくれ！！」

阿国
「すんまへんな～。ウチ、流行には弱いさかい」

官兵衛
「こんな流行、どこの世界でも見つからんわ！」

慶次
「アッハハハ！　お前面白いな！」

官兵衛
「慶次は黙ってろ！！」

マサル
「ところで、ここら辺で“ヒゲコーヒー”は売ってないか？」

官兵衛
「帰れぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

その後、マサルを気に入った慶次は一緒に行動するのであった……

～校門前～

？？？
「うわぁぁぁ……すっごいね！！」

校門前では、２人の少女が立っていた。
１人は青髪で、もう１人はオレンジ色の髪をしている。

オレンジ髪
「アンタも子供ね。こんくらいで目を輝かせて……」

青髪
「だってだって、楽しみにしてたんだもん！　きっと上手い料理ばっかな筈だよ！！」

オレンジ髪
「結局食べ物なのね……はぁ～」

どうやら青髪の少女はこの学園祭を楽しみにしていたようだ。
その一方で、オレンジ髪の少女は青髪の少女に連れて来られた様子が窺われる。

オレンジ髪
「ま、早いとこ入っちゃいましょ」

青髪
「うん！！」

そして2人の少女は学園の中へと入っていった。

スバル
「ねぇねぇ、ティアは何処に行く？」

ティアナ
「アンタに任せるわ。スバル」

“外柔内剛”
スバル・ナカジマ

“一言居士”
ティアナ・ランスター……参上！

第七十一話、セクシーコマンドー再び！　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ、今回もやってきましたコバラジです」

政宗
「今回はあのマサルとＳｔｒｉｋｅｒＳのキャラが参戦したな」

華琳
「いいわね。これでより一層楽しめそうで」

政宗
「オメェはそんな事ばっか考えるな」

華琳
「あら、お世辞？」

政宗
「そう聞こえたならＨｏｓｐｉｔａｌに行って来い」

華琳
「冗談よ。さて、恒例の質問コーナーよ」

政宗
「ｆａｓｔ。ケンさんの質問」

“質問です。こっちの華琳はデフォルメキャラになった華琳たんになりました。曹魏の皆さんはどう思いますか？”

華琳
「その回答はこれよ」

～返答～

春蘭・桂花
「「グハァ？！！！？」」

季衣
「春蘭さま？！」

秋蘭
「大丈夫か！？」

春蘭
「あれは……ダメだ……ガク」

～終了～

政宗
「Ａｈ～……まぁ、予想内だな」

華琳
「そうね」

政宗
「わかったか？　そんじゃあ最後の質問。黒龍さんから」

“幸村に質問。と言うか言っておくけど、あなたは抱きつかれただけで破廉恥とか言ってると、この先やっていけませんよ？それと、佐助さんの秘蔵写真を燃やすの行為もあまりいただけませんね。彼のしたいようにさせれば良いと思います。何故なら、そう言う事した人間には大抵酷い仕打ちが待っているからです（黒笑）。とりあえず、女性の免疫は日々の訓練同様身に着ける方が後々の事を考えても良いですよ♪”

政宗
「長いわ！！　もっとｃｏｍｐａｃｔにしてこい！！」

華琳
「まぁ落ち着きなさい。それから、返答はこれよ」

～返答～

幸村
「おぉ！！　修行でござるか！！　どのような修行をするか楽しみでござる！」

～終了～

政宗
「……真田は何もわかってねぇな」

華琳
「ふふふっ……どんな事して遊ぼうかしら」

政宗
「……Ｈａ～」

華琳
「今回はこのくらいね」

政宗
「次回は？」

華琳
「佐助に天罰が下るみたいよ。何をしたのかしら？」

政宗
「……さぁな」

華琳
「それじゃあ、また次回で会いましょう」

七十二話、さらば佐助よ……

～あらすじ～

スバル、ティアナ、参戦！

～校庭～

佐助
「ちょっと！　何あの題名は！？　不吉過ぎるだろ！！」

開始早々、題名にいちゃもんをつける佐助。

佐助
「って、そんな場合じゃなかった！！」

そう言って慌てながら颯爽と逃げ去る。

と、その時……

幸村
「さぁぁあぁすぅぅぅぅけぇぇぇえええ！！！（怒）」

物凄いスピードで幸村が現れ、佐助を追いかけていった。
しかし、何故佐助は幸村から逃げているのか？
実は、佐助が販売していた極秘写真が幸村の耳に入ってしまったのだ。

佐助
「だ、旦那、少し落ち着きなさいって（汗）」

幸村
「黙れ！　貴様のような軟弱な輩は、俺が直々に鍛え直してやるわ！！」

佐助
「だぁ～！！　こうなったら意地でも逃げてやる！」

幸村
「逃がすかぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

こうして佐助と幸村の壮絶な鬼ごっこが始まった……

～廊下～

蓮華
「幸村は見つかった？」

穏
「此方にはいませんでした」

天和
「こっちにもいなかったよ～」

亞莎
「すいません、私の方にも……」

沙和
「こっちもダメなの～」

蓮華達は休憩時間となり、幸村と一緒に廻ろうとしていた。
しかし、肝心の幸村が見つからずにいた。

蓮華
「もぅ……何処に行ったのかしら？」

何処を探しても見つからない幸村に心配する蓮華達。

そこへ……

幸村
「おのれ……見失ってしまったか」

蓮華
「ゆ、幸村？！」

皆が探していた幸村が姿を現した。

幸村
「む？　おぉ、蓮華殿！　それに皆も一緒か！！」

蓮華
「何呑気にしてるのよ！　一体どれだけ探したかわかってるの！！」

穏
「心配しましたよ～」

沙和
「ホントなの」

幸村
「そ、そうか……すまなかった」

そう言って頭を下げる幸村。

天和
「大丈夫だよ」

亞莎

「で、ですので、頭を上げてください（汗）」

その姿に亞莎は慌て始め、頭を上げさせる。

蓮華
「ところで幸村」

幸村
「何でござるか？」

蓮華
「先ほど何か探していたようだけど……どうかしたの？」

幸村
「うむ、実は……」

そして幸村はいなかった事情を話す。

蓮華
「……そう。佐助がそんな事してたのね」

説明を聞いた蓮華からはドス黒いオーラが発せられた。

幸村

「れ、蓮華殿？（汗）」

蓮華
「安心しなさい幸村……ワタシモ協力スルワ」

そして蓮華は手を叩く。

すると……

思春
「蓮華様」

明命
「何でしょう？」

思春と明命が出現する。

蓮華
「今カラ佐助ヲ探シダシ……見ツケ次第排除セヨ」

明命
「ッ？！」

思春
「仰せのままに」

蓮華
「デハ出撃セヨ」

そして思春は姿を消す。

明命
「あ、あの……」

しかし、明命は何か言いたそうに残っていた。

蓮華
「……何か？」

明命
「さ、流石に排除はやり過ぎでは……」

蓮華
「アァン？」

明命
「ヒィ？！（泣）」

蓮華
「グダグダ言ッテナイデサッサト探シテキナサイ。サモナクバ……“ミンチ”ニスルワヨ？」

明命
「い、今すぐ向かいます！！」

そして明命も姿を消した。

天和
「こ、怖い（汗）」

穏
「ア、アハハ～（汗）」

沙和
「ヤ、ヤバいの（汗）」

亞莎
「ガタガタブルブル……」

幸村
「……（汗）」

その蓮華の姿に皆は恐怖する。

そしてもう1人、恐怖している者がいた……

佐助
（コワッ？！　蓮華ちゃんコワッ！）

佐助である。
実は先ほどから“雲隠の術”をして姿を消しながら、天井に貼り付いていたのだ。

佐助
（にしても……めんどくさくなっちゃったな～。あーなった蓮華ちゃんは手強いかんな～）

頭を掻きながら蓮華を見つめる。

すると……

蓮華
「……貴様！　見テイルナァ！！」

佐助
「嘘ッ？！」

突如天井を振り向き、指差す蓮華。
それに驚いた佐助は声を発してしまい、術が解けてしまった。

幸村
「なッ！？　佐助！」

佐助
「チ、バレたか！」

そして佐助は再び姿を消す。

幸村
「待たんか佐助！！」

蓮華
「逃ガサナイワ」

逃げた佐助を追うように幸村と蓮華も姿を消した。

亞莎
「……ど、どうしましょう（汗）」

天和
「う～ん……追いかける？」

穏
「そうですね～」

沙和
「また走るの～？　もういやなの～」

そして天和達も幸村と蓮華の後を追った。

～校舎裏～

佐助
「ぜぇ……ぜぇ……」

どうにかして逃げ切った佐助は校舎裏で息を切らしていた。

佐助
「マ、マジでしんどい……どうにかしねぇと」

そう言って佐助はこの危機の打開策を考える。
しかし佐助自身、あまりこういった事は考えない為、いい策が思いつかないでいた。

佐助
「ヤッベ～な……マジでどうしよう（汗）」

焦る佐助。

するとそこへ……

？？？
「ソノ悩み、ワタシが解決してアゲマ～ス！！」

佐助
「ッ！　誰だ？！」

突如として背後から声が聞こえた。

佐助は急いで振り向くと……

ザビー
「イエス、ウィー、ザビー！！」

ザビーが踊っていた。

佐助
「……」

ザビー
「オンヤ～、ドウシマシタ？　何か心配ソウナ顔をしていマスね？」

佐助
「図星です」

ザビー
「オ～！　アナタは正直者デスね～……デモ、安心してクダサ～イ！　ワタシの策を信用すれば無事にスミマ～す！！」

佐助
「……ホントに？」

ザビー
「大丈夫デス！！」

ザビーはビシッと親指を立てる。

佐助
（……まぁ、何も策がない事だし……）

そして……

佐助
「そんじゃあ、アンタに賭けるとするよ」

佐助はザビーの策に乗った。

ザビー
「オ～！　アンタならそう言ってクレルと思いましタ～！！」

佐助
「アハハ〜、あんがと。そんじゃあ早速教えてくんない？　あんま時間がないから」

ザビー
「そうですカ！　では、最初にコノ紙にサインをお願いシマ〜ス」

そう言ってザビーは紙を取り出す。

佐助はその紙を拝見すると……

“ザビー教・入会届”

ザビー教の入会書であった。

佐助
「ふざけんなぁぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁああ！！！！！！！」

佐助は叫びながら入会書を叩きつけた。

佐助
「結局アンタはそれ目的かい！！」

ザビー
「……バレたか（ボソッ」

佐助
「聞こえてんだよ！（怒）」

ザビー
「仕方ないデスね……こうなったら実力行使デス！　皆の者、デアエデアエ～！！」

そう言いながらザビーは手を叩く。

すると……

宗麟
「呼びましたか、ザビー様？」

ザビー信者
「「「「イエス、ザビ～」」」」

宗麟率いるザビー信者が姿を現す。

ザビー
「ミナサ～ン！　今日からコノ方が信者とナリま～ス！　丁重に扱ってクダサ～イ！！」

ザビー信者
「「「「イエス、ザビ～！！！」」」」

佐助
「勝手に決めんな！　俺はならねぇっての！！」

そして佐助はその場から逃げ去る。

宗麟
「皆さ～ん、絶対に逃がしてはいけませんよ。これも全て愛の為です！！」

ザビー信者
「「「「イエス、ソーリン！！！」」」」

こうして三度、佐助の逃亡が始まった。

その最中……

？？？
「あれ？　あの人は確か……」

ある少女が逃げた佐助を見て、追いかけていった。

～空き部屋～

佐助
（やっべ～よオイ！　どうしてこうもめんどくさくなっちゃうかな！？）

その後、佐助は空き部屋にて身を隠す。

佐助
（旦那や蓮華ちゃんだけじゃなく、あの訳わからん宗教にまで目を付けらちゃったし……どうしてこうなんのよ！　なんか悪い事したか、俺！？）

元の原因は佐助にある。

そんな事考えていると……

佐助
（ッ！？　誰か来たな……）

どうやら空き部屋に誰かが入ってきたようだ。

佐助
（此処は空き部屋の筈……となると、俺の追手か）

追手と察した佐助は静かに大型手裏剣を手に持つ。

佐助
（こうなったら……先手必勝！）

そして佐助は迅速に近付き……。

？？？
「ふぇ？！」

佐助
「動くな」

入ってきた人物を押し倒し、大型手裏剣を首にかけた。

佐助
「……あれ？」

しかし、押し倒した人物は追手でなく……

早苗
「お、お久しぶりです……佐助さん（汗）」

東風谷　早苗だった。

佐助
「早苗ちゃん!?　どうして此処にいんの?」

早苗
「はい、実は……」

早苗が説明しようとした瞬間……

蓮華
「此処にいるの?」

思春
「はい」

幸村
「佐助!　覚悟!!」

明命
「猫神様?」

佐助を探していた幸村達が入ってきた。

佐助
「げ、旦那（汗）」

幸村
「……」

蓮華
「……」

思春
「……」

明命
「ひゃ～／／／」

しかし、幸村達は足を止め、明命に関しては目を背けていた。

佐助
「……どったの？」

蓮華
「いや……随分と大胆なのね／／／」

佐助

「は？　何の事？」

思春
「貴様……その姿でよく言えたものだな」

思春の指摘で改めて自分の格好を確認する。

・現在、佐助が早苗を押し倒している。
・端から見れば、佐助が襲っている図。

佐助
「……いやいやいや！　違うよ！！　これは全くの誤解」

幸村
「黙れ佐助ぇぇぇぇぇぇえええええ！！！！！！」

佐助
「がはぁぁあああ？！！！？！！」

佐助が言い訳を言おうとした瞬間、幸村の拳が佐助の顎へと繰り出された。

幸村
「今日という今日はその根性を叩き直してくれる！！！」

蓮華

「今回ばかりは佐助が悪いわ。私も参加するわ幸村」

思春
「では私も……」

佐助
「……弁解の余地は？（汗）」

幸村
「必要なし！！」

佐助
「うぎゃぁぁぁぁああああぁぁぁああぁぁぁぁああああああぁぁぁぁ!?!?!?!!?!?!!!!!?」

こうして佐助は幸村達から愛の説教を喰らうのであった。

早苗
「えぇーっと……これは止めに入った方がいいんですかね？（汗）」

明命
「やめときましょう……今後の人生の為に」

早苗
「……アハハ（汗）」

佐助よ……さらば！！

七十二話、さらば佐助よ……（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、今回の話は……」

政宗
「猿飛のＤａｙ　ｐｅｎａｌｔｙだったな」

華琳
「自業自得よ」

政宗
「まぁそうだな。あんだけｆｒｅｅｄｏｍにやってればバレるわな」

華琳
「これに懲りたら今後はしない事ね。それと前回も登場した早苗が参戦したわね」

政宗

「あの２Ｐキャラか……出してどうすんだ？」

華琳
「今後の展開に何かあるみたいよ」

政宗
「そうか。そんじゃあ次は質問コーナーだな」

華琳
「まずは龍の骨さんからの質問」

“政宗に質問ですが、『戦国乙女』の伊達マサムネをどう思いますか？”

政宗
「Ａｈ？　あのパチンコのか？」

華琳
「そうみたいね」

政宗
「まぁ、自分にどう思うかなんて考えた事がねぇからな……強いて言えば、少しｐｒｉｄｅが高そうな性格だな」

華琳
「それより……龍の骨さんって１７歳じゃなかったかしら？」

政宗

「最近はアニメもやってるからそれじゃね？」

華琳
「そう……まぁいいわ」

政宗
「次の質問は黒龍さんだ」

“三成さんに質問です。セイバーと相打ちした事実をどう思いますか？　それと、政宗さんに質問ですけど、うちの小説のどのキャラと戦いたいですか？”

政宗
「また俺か……俺自身は誰でもいいぜ？　そのｐａｒｔｙが楽しければな！！」

華琳
「いつもの癖ね……それと返答かこれよ」

～返答～

三成
「認めない！！　そんな結末認めるものかぁぁぁああ！！」

～終了～

政宗
「……駄々っ子かよ」

華琳
「ま、石田らしいわね。次の質問は黒神さんからね」

政宗
「Ｈａ？　アイツは禁止になってんじゃねぇのか？」

華琳
「それがね……アイツ自分のキャラで質問してきたのよ。それは禁止していないから答えるわ」

政宗
「Ａｈ～……そういう事か」

華琳
「そして質問はこれよ」

“おう、そうアルか……じゃあ質問行くアル♪マサッチ（政宗）にカリィ（華琳）に質問アル、私の小説で何かキャロが●ェイソン化してしまったけど、何が原因なのか知ってたら教えて欲しいね”

“……じゃあ次俺の質問、幸村へ……甘党の貴方にもし良かったら銀さん特性の小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』を上げます”

華琳
「……まぁ大体のキャラは察しができるわ。一つ目の質問はどう思うマサッチ？」

政宗
「マサッチ言うな。だが……どうしてキレたんだ？」

華琳
「……鈍感ね」

政宗
「？」

華琳
「まぁいいわ。そして二つ目の質問はこれよ」

～返答～

幸村
「上手かったでござる！！」

～終了～

政宗
「……アイツ舌バグってんじゃないのか？」

華琳
「否定はしないわ。最後の質問は紅玉さんよ」

“男性陣に質問です。嫁にするならどんな女性がいいですか？（幸村！逃げないでちゃんと答えて！）”

華琳
「まぁ気になるわね。政宗はどうなの？」

政宗
「……女らしい女性だな」

華琳
「ありきたりな答えね」

政宗
「思いつかねぇんだよ」

華琳
「まぁいいわ。それと、答えはこれよ」

～返答～

家康
「ワシはワシを好きと思ってくれる女性なら」

幸村
「……嫁とはどういった物でござるか？」

三成
「そんなもの必要ではない」

～終了～

華琳
「全然答えになってないわね」

政宗
「そもそも、コイツらに聞いたのは間違いじゃねぇか？」

華琳
「……それもそうね」

政宗
「今回は此処までだ。次回は？」

華琳
「デートをする話よ。誰かは秘密よ」

政宗
「そうかい。そんじゃあ次回もよろしくな！！」

第七十三話、外見が強そうな女性は大体中身は乙女っぽい傾向がある……ま、

～あらすじ～

佐助が天に向かった……

～玄関前～

孫市
「……」

恋ＢＡＲＡ学園の教師である孫市。
その孫市は現在、玄関先で誰かを待っていた。

孫市
（……何故、こうなってしまったんだ？）

そんな事を思いながらため息をつく。

そこへ……

華陀

「すまない。遅くなってしまった」

華陀が現れ、孫市と合流した。
どうやら孫市が待っていたのは華陀のようだ。

孫市
「別に構わん」

華陀
「そうか。それで、俺に何かようか？」

孫市
「よ、用と言うわけではないが……」

華陀
「……？」

孫市
「華陀先生が暇なのであれば……学園祭の徘徊を一緒にしてほしいのだ」

華陀
「何だそんな事か……俺は構わないぞ」

孫市
「そ、そうか……では向かおう」

華陀

「わかった」

そして孫市と華陀は学園の中へと入っていった。
そもそも何故華陀を誘ったのか？
それは、学園祭が始まる前の事だった……

～回想・職員室～

桔梗
「怪しい……」

祭
「確かに怪しいのう……」

孫市
「……会って早々、何を言い出すのだ？」

授業が終わり、孫市が職員室に帰った早々に怪しい発言をする桔梗と祭。

紫苑
「桔梗も祭も、説明が足りませんよ」

孫市

「……紫苑先生、これはどういう事だ？」

紫苑
「言葉通りなんですが……最近の孫市先生が変わってきたように見えるんです」

孫市
「……我はいつも通りだが？」

紫苑
「いえ、そういう事ではなくて……大方、誰かを気にしたように見えるのです」

紫苑の言葉に桔梗と祭も肯定のようで、大きく頷く。

孫市
「……気のせいだ」

桔梗
「祭！　何秒だ！？」

祭
「……3秒ジャスト！　普段考える時間より2秒も遅くなっているだと！？」

桔梗
「黒か……」

祭
「黒じゃな……」

紫苑
「そろそろ静かにしてくれるかしら（汗）」

紫苑は2人を黙らせ、話を進める。

紫苑
「孫市先生、無理をしてはいけませんよ。正直になる時は正直に」

孫市
「……無理をした覚えはない」

紫苑
「それはまだ自分の気持ちが納得出来てないだけです。ですから、この学園祭を機会に仲良くなってみてはいかがですか？」

孫市
「……」

～終了～

このような出来事があった為、孫市は華陀をよく知るいい機会と思い、誘ったのだ。
しかし、此処で一つ問題が発生した。

孫市
（紫苑先生の言葉で試してみたものの……一体どうしたらいいのだろうか？）

彼女自身が鈍感である為、何も起こらないままで徘徊しているのだ。
流石の孫市もこれでは何も変わらないと思っていたが、いかんせんどう接していいのか悩んでいた。

孫市
（……いっそこのままでいくとするか）

そんな事を思っていた孫市。

すると……

華陀
「ところで」

予想外に華陀から話を切り出してくれた。

孫市
「ッ？！　な、何だ？」

これには孫市も驚きを隠せないでいた。

華陀
「どうして俺を誘ったんだ？　雑賀先生なら、他の先生方と親しいでしょうに……」

孫市
「皆は別の仕事が入ってしまったのだ。その時、空いていたのが先生だったのだか……迷惑であったか？」

華陀
「そんな事はない。ただ、雑賀先生からの急な誘いだったから少し不思議と思ってな」

孫市
「……そうか」

素っ気なく答える孫市であるが……

孫市
（な、何故会話だけで鼓動が早くなる！？／／／）

心の中では非常に困惑していた。

華陀
「ま、これを機会に仲良くしていこう」

そう言って華陀は手を差しのべる。

孫市
「な、何だそれは？」

華陀
「ん？　握手だが？」

孫市
「……そ、それならばそう言え」

そして孫市も手を伸ばし、握手をする。

華陀
「さて、こうして徘徊してると腹が減るな……この際だから何か買ってくるか」

孫市
「そうか。ならば私も……」

華陀
「いや、ついでだから雑賀先生の分も買ってくる。此処で待ってて

くれ」

孫市
「しかし……」

華陀
「なに、すぐに帰ってくるさ。それに……」

孫市
「……？」

華陀
「こういった場面では、男性がしっかりと女性をサポートしなければいけないと言われているのでな」

孫市
「ッ？！／／／」

華陀
「それじゃ、行ってくる」

そして華陀は屋台が並ぶ人混みの中へと消えていった。
残された孫市は近くにあった椅子に座り、ため息をつく。

孫市
（まただ……またアイツは我を女性扱いした）

先ほどの華陀の発言にまた悩まされる孫市。

孫市
（しかし……不思議と悪い気にならん。何なのだ、これは？）

しかしながら、その気持ちには不思議と特別な感情が芽生えていた。

そんな事を思っていると……

？？？
「あれ？　孫市姉さまですか？」

孫市
「ん？　この声は……」

聞き慣れた声が聞こえた孫市。

そしてそのまま頭を上げると……

孫市
「姫か」

鶴姫
「はい☆」

鶴姫が立っていた。

鶴姫
「それにしても、どうされたんですか？　そんなドローンな顔をして」

孫市
「……姫にもわかるくらいの表情か。これは重症かもな」

鶴姫
「孫市姉さま？」

孫市
「……この際だ。姫に話してみるか」

そして孫市はこれまでの経緯を話し、さらに自分の今現在の心境を鶴姫に語った。

それを聞いた鶴姫は……

鶴姫
「キャー！！／／／／　遂に孫市姉さまにも訪れたんですね！」

1人で興奮していた。

孫市
「……どうしたのだ？」

鶴姫
「孫市姉さま！　それはズバリ……恋です！！」

バシッと指差す鶴姫。

孫市
「……恋？」

鶴姫
「恋です☆　愛です☆　ＬＯＶＥなんです☆」

孫市
「……それじゃあ、このもどかしい感情も？」

鶴姫
「恋のみに訪れる淡い乙女心なんですよ！！　ああ……思えばわたしにもありましたね～」

そう言って鶴姫は自分の世界へと入っていった。

孫市
（恋か……ふっ）

一方の孫市は心の中で改めて、自分を見直し、恋の感情を受け入れた。

そこへ……

華陀
「おーい、雑賀先生ー」

買い出しから帰ってきた華陀。

孫市
「……」

華陀
「待たせてすまなかったな。学園祭だから、いろんな料理があって困っていたんだ。一通りはあるが雑賀先生はどれが……」

孫市
「さやか」

華陀
「……え？」

孫市
「本来なら、あまり呼ばれたくない名前だが……これからはそう

呼ぶがいい。華陀よ」

華陀

「……」

突然の事で、唖然としていた華陀だが……

華陀

「そうか。ならば、そう呼ばせて貰うよ。さやか」

すぐに笑顔へと戻し、孫市の名を呼ぶのであった。

その後、２人は徘徊を再開するのであった……

第七十三話、外見が強そうな女性は大体中身は乙女っぽい傾向がある……ま、

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「どうも、劇場版ＢＡＳＡＲＡが公開しているにも関わらず、映画館に一切行こうと思っていない華琳です」

政宗
「嫉妬か？」

華琳
「そんな事ないわ。でも、今後の予定にも入れる気はない」

政宗
「やっぱ嫉妬じゃねぇか！！」

華琳
「まぁいいじゃない。それと、まだ作者も見ていないから」

政宗

「それはどうでもいい」

華琳
「話が逸れたわね。今回はあの孫市先生と華陀先生の珍しいデートね」

政宗
「Ｈｕｍ～、あの三代目が恋ね……想像が出来んな」

華琳
「孫市先生自体のキャラも崩壊しているし……」

政宗
「崩壊は元々だ」

華琳
「それもそうね。それじゃあ恒例の質問コーナーに行くわ。最初は月光閃火さんです」

“佐助の兄さんに質問…あのあと、何とか生きてる？あと、早苗ちゃんや明命ちゃんに助けられてる？”

“男性陣に質問…女性陣（好意の有無問わず・貂蝉・卑弥呼除く）に『ピー』（ご想像に任せます）に迫られたら、どんな反応を示す？ちなみに、逃げる事も抗う事も出来んぞ？”

華琳
「返答はこれよ」

～返答～

佐助
「生きてるよ！　あの後、どうにか早苗ちゃん止めて貰って命拾いしたのよ。それと、明命ちゃんは猫を見つけてどっかにいったぜ」

家康
「……耐えるしかないな（汗）」

幸村
「ははははは破廉恥でででで…ゴファ！！／／／」

三成
「邪魔立てするなら……斬る！！」

～終了～

華琳
「政宗はどうなの？」

政宗
「……打開策を考えるな」

華琳

「全て受け入れなさいよ！！」

政宗
「出来るか！！！」

華琳
「つれない男ね。とりあえず、次の質問よ。カガヤさんからの質問」

“カーちゃん（華琳）のグルグル髪は、ＥＬＳの亜種説、ドリル説、ファング説の他に非常時には右がチョココロネ、左がクリームコロネになる説が出てきましたが…実際はどうなんですか？ちなみに俺はジェット説だと思います。”

華琳
「あら、素敵な呼び名でありがとう」

政宗
「んで、何が入ってんだ？」

華琳
「愛と勇気が入っているわ。それだけが……友達だから」

政宗
「アンパンマ●？！」

華琳
「まぁ実際は秘密ね」

政宗
「それならボケるな。そんじゃあｎｅｘｔにいくぜ。ケンさんからの質問」

“政宗と幸村に質問です。六爪流を使う統夜と二槍を使う遊輔を見てどう思いますか？”

政宗
「アイツの六爪流はまだまだだな。もっとＣｒａｚｙに扱えれば良い線までにはいくぜ」

華琳
「それと、真田の返答はこれよ」

～返答～

幸村
「まだ精進が足らんでござる。この幸村もまだまだ修行の身ゆえに、共に頑張っていこうではないか！！」

～終了～

政宗
「Ｈａ！　真田も言うようになったな！！」

華琳
「まぁ嘘はつかなそうだしね……次は三国同盟さんからね」

“売った写真の中で一番売れたモデルは誰ですか？やっぱり、華琳さん？？”

華琳
「当然よ」

政宗
「オメェに聞いてねぇ。それと、返答はこれだ」

～返答～

佐助
「亞莎ちゃんのゴマ団子を頬張る写真が一位だな。あんな妹が欲しいなどの意見があるし……ちなみに、華琳ちゃんは八位という中途半端な結果でした（笑）」

～終了～

華琳
「喧嘩売ってるのかゴルァ！！（怒）」

政宗
「落ち着け！　Ｃｏｏｌになりあがれ！！」

数分後……

華琳
「……まぁ“今回”は許してあげるわ」

政宗
（絶対に根に持つな……）

華琳
「それじゃあ最後に、黒龍さんからの質問」

“三成に質問です。戦国ＢＡＳＡＲＡアニメ二期で政宗が秀吉を切り殺しました事実についてどう思いますか？”

“桂花に質問。このまま華琳に無駄な恋路を抱いても負け組みのままですよ？（黒笑）”

華琳
「政宗はどう思う？」

政宗
「やるってんなら受けて立つぜ」

華琳
「そう……それと返答よ」

～返答～

三成
「誰であろうと、秀吉様に害をきした者には……私が斬首する！！！」

桂花
「うるさい！！　私は私のやり方で振り向かせてみせるわ！！」

～終了～

華琳
「今回の質問コーナーは以上ね」

政宗
「次回は？」

華琳
「あの貂蝉とかいう気持ち悪いのが何か始めるみたいよ」

政宗
「……何をするってんだ？」

華琳
「それはお楽しみよ。それじゃあまた次回に会いましょう」

第七十四話・A、宝玉を探せ！？～前編～

～あらすじ～

孫市が乙女になっている頃……

～廊下～

家康
「ふぅ……やっと休憩に入ったな」

桃香
「すごい人だったね～」

今まで自分のクラスの出し物を行っていた家康と桃香。
そして休憩時間となり、様々な場所を廻っていた。

家康
「桃香、次は何処へ行く？」

桃香
「えっとね……」

桃香はパンフレットを読み、何処に行くか悩んでいた。

すると……

???

“あー……マイクテス、マイクテス”

家康

「？　放送か？」

突如放送が掛かった。

家康と桃香は足を止め、その放送に耳を傾ける。

２人以外にも、学生や客も放送に集中する。

貂蝉

“どうもみなさ～ん♪　最近ブルァァァアア！　しているん？”

放送の声の主は貂蝉のようだ。

貂蝉

“そんなチミ達に私からの提案があるわん♪”

桃香

「提案？」

貂蝉
“それは……全員参加の宝探しゲームよん♪”

貂蝉の言葉に一同はざわめき始める。

貂蝉
“ルールは簡単。この学園内に隠した宝玉を見つけ出し、屋上の私に渡せればいいのよん♪　でも、それだけじゃないわん。宝玉を持っている人から奪う事は可能だから、最後まであきらめちゃダメよん♪”

客1
「おいおい……それじゃあ怪我すんじゃん」

客2
「私やんな～い。そんなんやったって意味ないもん」

学生
「そうだそうだ！！」

貂蝉の提案に学生や客からブーイングが飛び交う。

貂蝉
“あ、ちなみにその宝玉は数百万する品物なの。勝った人にはそれを景品にするわん♪”

一同
「「「「「「……」」」」」」

その一言て……

一同
「「「「「やぁぁぁあってやるぜぇぇぇぇえええ！！！！！」」」」」

叫びながら発狂した。
その叫びは大地が揺れるほどであった。

家康
「……凄いな（汗）」

桃香
「アハハ～（汗）」

その光景に家康と桃香は圧倒されている。

家康
「しかし、そのゲームは面白そうだな」

桃香

「家康君は参加する？」

家康
「ああ、この機会だ。桃香も参加するか？」

桃香
「うん♪」

家康
「ならば、探しに行くとしよう！」

そう言って家康と桃香は走り出した。

～１－Ａ・窓際～

学生１
「カネカネカネカネカネカネカネ……」

学生２
「宝玉は俺のもんだぁぁあ！！！」

学生３
「ヒャッハー！！」

先ほどの放送により、宝玉を血眼に探す人々で溢れている。

政宗
「ったく……こんくらいで騒ぐんじゃねぇってんだ」

小十郎
「仕方ありません。事情が事情ですから」

そんな光景に政宗と小十郎は呆れながら校庭を見つめる。
先の件で、完全に客足が止まってしまい、商売が出来なくなってしまったのだ。

政宗
「ま、周りが落ち着くまでゆっくりとするか……なぁ？」

小十郎
「政宗様がそうおっしゃるのならば」

宝玉に興味がない政宗は事態が落ち着くまでゆっくり休む予定のようだ。

だが……

華琳
「ダメよ政宗！」

華琳が現れ、政宗に渇を入れた。

政宗
「……一応聞く。何でだ？」

華琳
「こんな面白いゲームを見逃すと思うてか！！」

政宗
「……Ｈａ～」

相変わらずの華琳に溜め息をつく。

政宗
「そんじゃあテメェの部下に行かせろ。俺はｐａｓｓ」

華琳
「既に手配しているわ。それにいいのかしら？」

政宗
「Ａｈ？　どういう事だ？」

華琳
「今回は学生だけじゃない。様々な層からの人々がこの学園祭に来てる。その人々もこのゲームに参加するのよ」

政宗

「……なるほど。そいつらと闘える機会があるって事か」

華琳
「ご名答」

華琳の言い分を理解する政宗。

政宗
「確かにそうなってくると話は別だ。小十郎！　今すぐｐａｒｔｙの準備をするぜ！」

小十郎
「はっ」

華琳
「ふふっ……さて、面白くなるわね」

そして政宗達は教室を出ていった。

～校舎裏～

スバル
「お宝お宝何処にある～♪」

ティアナ

「その唄は何なの？」

先ほどの放送で参加を決めたスバルとティアナ。
現在は校舎裏にて宝玉を探索中である。

スバル
「それにしても、太っ腹な学園祭だね」

ティアナ
「学園祭というより、提案者がね。なに考えてるか理解出来ないわ」

？？？
「そう言いつつも、内心は？」

ティアナ
「必ず宝玉は手に入れるわ！！　……って、なに言わしてんのよ！！」

そしてティアナは振り向きながら突っ込みを入れる。

そこには……

こなた
「あは♪」

雛里

「あ、あわわ……（汗）」

こなたと雛里が立っていた。

ティアナ
「……誰よアンタ？」

こなた
「アタシはこなた。んでコッチはヒナヒナ」

雛里
「ひ、雛里です」

スバル
「あ、スバルです」

ティアナ
「ティアナよ……ってスバル！　何普通に挨拶してんのよ！」

スバル
「えぇ？！　ティアナだって挨拶したじゃん！」

ティアナ
「そんなのはどーでもいいの！」

スバル
「うぅ～……（泣）」

こなた
「……」

ティアナとスバルのやり取りを黙って見ているこなた。

ティアナ
「……何よ？」

こなた
「傲慢な態度……ツインテール……そしてこの妹的要素……」

ティアナ
「……？」

こなた
「ツンデレキタァー！！」

ティアナ
「ちょっ？！　いきなり何叫んでんのよ！」

突然のこなたの発狂に驚くティアナ。

こなた
「いや～かがみんのツンデレもいいけど、コッチのツンデレも乙ですよ、はい」

スバル
「ツンデレ？　ツンデレって何？」

こなた
「お～、コッチは天然世間知らず娘か。フムフム……」

スバル
「……？」

こなた
「いいよいいよ。アタシのオタク魂に火がつくよ。イヤッフゥゥウ！！！」

スバル
「アハハ！　何か面白い人だね～♪」

ティアナ
「タダの変人じゃない」

雛里
「……どうしよう（汗）」

こうしてスバルとティアナは2人の変人と少女に出会ってしまった……

第七十四話・A、宝玉を探せ！？～前編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回もやってきましたコバラジです」

政宗
「今回はあのオカマが提案したゲームに参加する話だったな」

華琳
「それぞれの人達も動くだろうし、これからが楽しみね」

政宗
「Ｓｈａｒｅ」

華琳
「次は質問コーナーよ。最初はカガヤさんね」

“みんなは学園にいる時に自分の武器はどこにしまってるんですか？ロッカー？”

“まっちゃん（政宗）に質問です…マヨネーズとケチャップとタマネギドレッシング…ご飯にかけるならどれをかけますか？”

華琳
「武器に関しては授業や体育の時間はロッカー、それ以外は手持ちよ」

政宗
「二つ目は……ｎｏｒｍａｌに御飯を食う」

華琳
「マヨネーズじゃないの？」

政宗
「俺はマヨラーじゃねぇ」

華琳
「そう……わかったかしら？　次に行くわ。ケンさんね」

“真桜に質問だ。もしデバイスが作れたらアーマードデバイスとドライバーデバイス、アームドデバイス、インテリジェントデバイス、ストレージデバイスの中でどのタイプのデバイスを作りますか？”

華琳

「かなり一般には難しい質問ね。真桜からはこれよ」

～返答～

真桜
「ん～……強いて言うならアーマードやな。作りがいありそうやし」

～終了～

政宗
「次の質問はアストラルさんからだ」

“1体が入れ替わるお話でもし入れ替わるとしたら誰の身体と交換したいですか？”

“2華琳に質問です。劇場版バサラの宣伝をもし任されたらどのように予告しますか？（もちろんおふざけありです。）”

華琳
「私は交換しないわ。私は私よ」

政宗

「俺もＴｈｅ　ｓａｍｅだ。俺は俺一人だからな」

華琳
「二つ目は……劇場版を把握出来ていないから無理ね。実際に見てからならやるわ」

政宗
「Ｈｕｍ～……次は紅玉さんからだ」

“質問ですが、皆さんは劇場版ＢＡＳＡＲＡ見に行きますか？”

華琳
「この質問に恋姫メンバーが答えたわ」

～返答～

恋姫一同
「「「「絶対に行く！！！」」」」

～終了～

政宗
「……Ｄｅｓｐｅｒａｔｅだな」

華琳
「ま、好きな男子が出てるなら見に行くわよ」

政宗
「テメェは見に行く予定がないんじゃねぇのか？」

華琳
「過去の話はいいわ。最後に黒神さんね」

“「私から質問します♪政宗君と華琳ちゃん、私の新作シャマパイを送りますので、良かったら食べてみてください♪」

“「貧乳でに質問だ。２年後の神楽の存在にありったけの呪いォォォォォォォ！！！！！！（血涙）」

“「えー、政宗と華林へ……僕は如何すれば目立てますか？」”

政宗・華琳
「「いらんわ！！！」」

そう言ってパイを地面に叩きつける政宗と華琳。

華琳
「まだ死にたくないわ。そして二つ目に関しては私情なのでカット」

政宗
「最後だが……それも個性だからいいんじゃねぇの？」

華琳
「無理してやっても目に見えているわよ」

政宗
「今回はこんくらいだな。次回はＧＡＭＥの続きだ」

華琳
「次回もよろしくね。それじゃあ」

第七十四話・B、宝玉を探せ！？～中編～

～あらすじ～

貂蝉によって始まった宝探し。

～空き部屋～

慶次
「見つかんねぇな～」

マサル
「焦るなボサンナ」

慶次
「いや、俺はボサンナじゃねぇよ（汗）」

現在、空き部屋にて慶次とマサルが宝玉を探していた。

慶次
「にしても、この学園広すぎなんだよ。これじゃ見つかる前に日が暮れるぜ……はぁ～」

半ば諦めた状態の慶次。
それもそのはず……この学園は膨大な広さゆえに探すのも一苦労なのだ。

慶次
「なぁマサル。俺らは探すのやめてどっか遊びに……」

慶次はマサルと一緒に探すのをやめ、何処かに遊びにいこうと誘う。
そんなマサルは……

マサル
「なぁーーー!?　こ、これは?!」

何か見つけたようで突然叫びだした。

慶次
「どうしたマサル!?　まさか、宝でも見つけたのか!?」

その叫び声に慶次は何か見つけたと思い、マサルに駆け寄る。

慶次
「なッ?!　そ、それは……」

そしてマサルが手に持っていた物を見て、驚愕をする。

マサルが持っていた物とは……

慶次
「……髭？」

マサル
「あぁ……髭だ」

演劇用なので使用される付け髭だった。

慶次
「……そんなんで驚くなよ。こっちが焦ったじゃんか」

髭ごときで驚いたマサルに慶次が呆れながら溜め息をつく。

しかし、マサルは……

マサル
「……なんて」

慶次

「……？」

マサル
「なんて……素晴らしい髭なんだ！？」

慶次
「……は？」

その髭を絶賛していた。

マサル
「これほど本物そっくりな髭は久々に見た。流石は髭を極めた学園だ！！」

慶次
「いや、髭を極めた学園って何だよ？（汗）」

マサルのボケに突っ込む慶次。
その後マサルはその髭を懐に入れ、宝探しを再開し、慶次も仕方なく付き合うのであった。

～裏庭～

此処は恋ＢＡＲＡ学園が所有する裏庭。
あまり使われることはないが、学園の真後ろにある為、昼休みの時

間などに生徒が遊びに使われることは希にある。

そんな裏庭にて……

元親
「はぁ……はぁ……」

元親が何かから逃げるように走っていた。

その元親の後ろには……

思春
「待て長曾我部！」

恋
「……逃がさない」

殺気を醸しながら元親を追いかける思春と恋の姿があった。

元親
「んじゃテメェらの得物をしまいやがれ！」

思春
「事と場合によっては使う」

恋

「……諦めて」

元親
「そんなら尚更無理だ！！」

そう言ってスピードを上げる元親。
そもそも何故元親は追われているのか？

それは……

萃香
「アハハ～、頑張れ頑張れ～」

元親に肩車している萃香に原因があった。
先ほどの放送でやる気が出てきた元親は萃香と一緒に宝探しをしていた。
しかし、その途中で思春と恋と遭遇し、萃香を見た瞬間に得物を持ち始めた。
何かを察した元親は萃香を連れて裏庭へと逃走し、現在に至る。
ちなみに肩車は萃香が途中で行った。

元親
（つーか何で怒ってんだよ、コイツらは！？　何かやらかしたか俺？！）

はい、現在進行形でやらかしています。

元親
（ともかく、捕まったらやべぇぜ！！）

そう思い、さらにスピードを上げようとした元親。

しかしそこへ……

鈴々
「見つけたのだお兄ちゃん！」

地和
「観念しなさい！」

元親
「んな？！」

前方より鈴々と地和が姿を現した。
突然の事で、元親は足を止める。

思春
「追い詰めたぞ」

恋

「……」

そして背後からも思春と恋が追いつき、元親を囲む。

萃香
「あらら……絶体絶命だね」

元親
「あぁ……そうらしいな」

鈴々
「お兄ちゃん！　説明してもらうのだ！」

地和
「その幼女は誰なのよ！！」

萃香
「……幼女？　幼女ってアタシの事かい？」

地和
「アンタ以外誰がいるのよ！　このつるぺた幼女！！」

あまり人の事は言えないような気がするが、此処はスルーする。

だが、その一言で……

萃香
「……うな」

地和
「何？　聞こえないわよ」

萃香
「つるぺたって言うな～！！！」

萃香がぶちギレた。
そして懐からカードを取り出す。

萃香
「鬼符“ミッシングパワー”！！」

すると、みるみるうちに萃香が巨大化していく。

地和
「な、何よあれ！？（汗）」

鈴々
「おっきくなったのだ？！」

恋
「……」

思春
「オ、オイ長曾我部！　一体何なのだアレは?!」

元親
「知らねぇよ！　今日初めて会った奴なんだよ!!」

萃香
「アッハッハ！　恐れ入ったか！」

皆が驚愕する様子を見て、大笑いする萃香。

萃香
「これでもつるぺたって言えるか～！」

地和
「いやいやいや！　つるぺたの次元を越えてるから！」

萃香
「アッハッハ！」

その言葉を聞いて納得したのか、どんどんと小さくなっていく萃香。
そして元通りの大きさになった。

萃香
「さて……宝を探すんだよね、元親?」

元親
「あ、ああ……（汗）」

萃香
「それじゃあ探すとしようか。嬢ちゃん達も一緒に来る？」

恋
「……行く」

思春
「恋に同じく」

鈴々
「鈴々も行くのだー！！」

地和
「ち、ちょっと待って！　さっきので腰が抜けちゃって……」

元親
「んじゃ、俺がおんぶしてやるよ」

地和
「えっ？！」

元親
「あん？　嫌か？」

地和
「嫌じゃないわ！　むしろ喜んで！！／／／」

恋
（……羨ましい）

鈴々
（いいな～……）

思春
（う、羨ましいなど……思わん／／／）

そして元親は地和をおんぶし、宝を探すのであった。

～職員室～

早苗
「し、失礼しま～す」

佐助
「なんで改まってんの？」

早苗
「いえ、他の職員室なんて滅多に入りませんから（汗）」

皆と同じように宝を探す佐助と早苗。

佐助
「それにしてもみんな凄い殺気だったな」

早苗
「やはりお金が関わると醜いものになりますよ」

佐助
「確かにな。まぁゆっくり探すとしようか」

早苗
「はい」

そして2人は職員室を物色する。
しかし、様々な場所を探すが中々見つからないでいた。

早苗
「はぁ～……やっぱり見つからないものですね」

佐助
「ま、そう簡単に見つかったら宝探しにならないでしょ？　取り敢えずこの引き出しを最後にして次の場所に向かおうか」

早苗
「はい」

そして最後となった引き出しを開く。
すると、一つの虹色をした玉が入っていた。

佐助
「……ん？　何だこれ？」

気になった佐助はそれを取り出す。

早苗
「うわぁ～……綺麗な玉ですね～」

佐助
「……まさか、これが例の宝玉か？」

早苗
「え？！　ほ、本物ですか！？」

佐助
「いや、まだわからないから、これを屋上に……」

その時、突如チャイム音がなり始める。

貂蝉
“はいは～い！　此処で報告があるわん♪”

チャイム音が終わると貂蝉がしゃべり出す。

貂蝉
“たった今職員室にて宝玉が見つかったわん♪　現在の所有者は迷彩服を着た佐助ちゃんと緑色の髪をした早苗ちゃんって娘が持ってるわよ～”

佐助
「なッ?!　そんじゃあやっぱこれは宝玉なのか！」

その事実に驚く佐助。

貂蝉
“それじゃあ頑張って持って来てねん♪”

そう言って放送は切れた。

佐助
「うし、そんじゃあ早いウチに屋上に……」

早苗
「さ、佐助さん！　何かとてつもない足音が聞こえてくるんですけど！?」

佐助
「チッ！　動きが早いこったぁ！」

文句を言いながら窓を開ける佐助。

佐助
「確か早苗ちゃんは空を飛べるよね？」

早苗
「？　はい、飛べますが……」

佐助
「よし！　飛ぶぞ！！」

そして佐助は早苗の手を掴み、窓から飛び降りた。

早苗
「うぇ～～？！」

早苗は突然の事で反応が遅れたが、どうにか立ち直し、校庭に着地した。

佐助
「大丈夫か？」

早苗
「は、はい……（汗）」

佐助
「そうか。なら次は走るぞ」

早苗
「……え？」

佐助
「後ろ見てみん」

佐助に言われ、早苗は振り向くと……

金の亡者
「「「「カネェェェエエエ！！！」」」」

金の亡者達が此方に向かってきていた。

早苗
「キャアァァアア！？！！？？！」

その姿に悲鳴を上げながら逃走する早苗。

佐助
「必ず……絶対に逃げ切ってやるぜ！！」

こうして佐助と早苗の逃走劇が始まるのであった。

第七十四話・B、宝玉を探せ！？～中編～（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！」

華琳
「さぁ、最近作者がまた新しい小説を考えているようだけどそんな事は関係なく今回も始まりましたコバラジです」

政宗
「また考えてるのか？　最近この小説の更新が遅いってのに……」

華琳
「ええ、だからこの小説が終わってから載せようと考えてるみたいよ」

政宗
「あっそ。そんなんどうでもいいけどな」

華琳
「そうね。それじゃあ今回の話に移りましょう」

政宗
「今回は猿飛が宝玉をＤｉｓｃｏｖｅｒｙしたな」

華琳
「そうね。これで今回の娯楽が終わってしまうとなると悲しいわね」

政宗
「ま、俺は強い奴と闘えればいいけどな」

華琳
「それだから幸せになれないのよ」

政宗
「関わってくんのそれ?!」

華琳
「冗談よ。それじゃ質問に移るわね。最初は龍の骨さんね」

“ソウスケ
三成に質問だよ。僕は君と同じ声だけど、どうかな?”

政宗
「……アイツに質問しても意味がないような気がするが……とりあえず返答はこれだ」

～返答～

三成
「どうでもいい」

～終了～

華琳
「やっぱりね。まぁしょうがないわ」

政宗
「んじゃｎｅｘｔ。三国同盟さんの質問」

“貧乳党はまだ、佐助の家を拠点にしてるんですか？もし、そうなら可哀想だからやめてあげてください。”

華琳
「あの個人的な宗教団体ね。まぁ返答はこれよ」

～返答～

桂花
「安心なさい。最近の拠点はこの学園の空き部屋を使っているわ」

風

「ですがお腹が空いた時は佐助さんの部屋に行きます～」

～終了～

政宗
「アイツ……最近Ｕｎｆｏｒｔｕｎａｔｅｌｙだな」

華琳
「それだから今回の宝玉を狙っているのかしら？　まぁいいわ。次は黒龍さんね」

“１．じゃあ華琳に質問ですが、屁怒絽様に正面きって挑発できますか？”

“２．政宗に質問。あなたには何でもＢＬの疑いがあるようですが、そこんとこについてどう思いますか？”

華琳
「私に死ねと言っているのか！！」

政宗
「まぁあれじゃあ仕方ないな（汗）」

華琳
「ともかく、絶対に無理よ。それと二つ目の質問は……」

政宗
「とりあえず、このラジオが終わったらそっちに向かう。首を洗って待ってろ」

華琳
「完全に怒ってるわ。それじゃあ次の質問ね。黒神さんの質問」

“桂
信玄殿、信州の蕎麦の美味さは俺も知っている。もし良ければどう言う蕎麦が好きか教えてくれ。”

“エリザベス
孫市、官兵衛、鶴姫へ、劇場版戦国ＢＡＳＡＲＡのホームページを見たんだけど3人の姿が見えないんだ。もしかして出ていないの？”

“はやて
華琳に質問や。恋姫シリーズの映画は出てへんけどアーゲートで新しいゲームが出るらしんやけど、正直言って嬉しい？”

華琳
「嬉しいに決まってるじゃない！！」

政宗
「Ｔｈａｔ　ｉｓ，　ａｎｓｗｅｒだな」

華琳
「政宗にはわからないのよ！　最近映画化されて調子に乗っている政宗にはね！！（怒）」

政宗
「怒んなよ」

華琳
「それと、ほかの返答はこれよ」

～返答～

信玄
「儂の好物は武田名物“溶岩蕎麦”じゃ！」

孫市
「そこに触れるな。風穴を空けるぞ？」

官兵衛
「何故じゃあぁぁぁああ！？！？！！！」

鶴姫
「……ぐすん（泣）」

～終了～

華琳
「まぁ実際、作者は見に行ってないからもしかしたら出ているかも

しれないわね」

政宗
「相変わらず武田はＭｏｎｓｔｅｒみたいな食べ方をしてるな」

華琳
「それだから熱いのかしら？　それじゃあ最後の質問ね。白銀の戦士さんね」

“アニメの戦国ｂａｓａｒａに出てきた伊達軍の兵（良直、左馬助、孫兵衛、文七朗　）と武田軍の小山田は出ますか？”

政宗
「Ａｈ～……アイツらは出てくる予定はないみたいだ」

華琳
「それと、小山田も出る予定はないわ」

華琳
「今回は蒼　龍一さんから差し入れが来ているわ」

政宗
「お、そいつは有り難いな」

華琳
「でも、食べ方が特殊ね。とりあえず電気を消して」

政宗
「ＯＫ」

そして電気が消え、辺りは暗くなった。

華琳
「それで、差し入れは鍋で闇鍋で食して欲しいみたいよ」

政宗
（……なんか嫌なＰｒｅｍｏｎｉｔｉｏｎするな）

華琳
「さぁ食べましょう」

政宗
「あぁ……お前から食べていいぞ」

華琳
「そう？　それじゃあ頂くわ」

そう言って華琳は野菜らしきものを口にする。

華琳
「あら、食べた事がないあじゅア！？！」

最初は大丈夫な感じだったが、途中で食べていた物を吐きだし、倒れる。
政宗はその様子を見て明りを付けると……

華琳
「……（ピクピク」

華琳が口にしていたのはザビッシュだった。

政宗
「やっぱりな。それじゃあ今回は此処までだ。次回は宝探しの続きだな。そんじゃあな。それと……今から向かうぜ黒龍さんよ！！」

第七十四話・C、宝玉を探せ!?～後編～

～あらすじ～

宝玉は佐助の手に渡った。

～校庭～

金の亡者
「「「「待てぇぇえええ!!!」」」」

早苗
「いやぁぁぁあああ!?!!（泣）」

佐助
「おっほ～！　すんげ～な～!!」

現在物凄い勢いで金の亡者達に追いかけられている佐助と早苗。

早苗
「どどどどうするんですか?!」

佐助
「どうするもこうするも逃げるしかないでしょ?」

早苗
「ひぃ～（泣）」

泣きながら逃げ惑う早苗。

佐助
「というより早苗ちゃんは宝玉を持ってないから普通に逃げればいいんじゃないの？」

早苗
「確かにそうなんですが、向こうの人達は私を佐助さんの仲間と思っているみたいです（汗）」

佐助
「あぁ～……んじゃ、逃げるしかないか」

早苗
「で、でも逃げてるだけだと何も発展しないようなんですが……」

佐助
「そうなんだよね～」

佐助はこの危機に策を考える。

しかしそこへ……

明命
「佐助さん！　大丈夫ですか！？」

佐助
「明命ちゃん？！」

佐助の隣に明命が現れる。

佐助
「良いところ来てくれたな明命ちゃん！　悪いんだけどこの宝玉を持って屋上に向かってくれ！」

そう言って佐助は宝玉を明命に渡す。

明命
「い、いいんですか！？　私何かに持たして……」

佐助
「明命ちゃんだから頼めるんだ！　そんじゃ、任したぜ！」

早苗
「そ、それでは！（汗）」

そして佐助と早苗はスピードを上げる。

金の亡者達もそれを追いかけるようにその場から去っていき、残ったのは明命1人だけとなる。

明命
「……」

しかし明命はその場から動かずに誰かを待っていた。

そこへ……

正則
「チィ～ッス！　上手くいきましたね！」

詠
「流石です」

正則と詠が姿を現す。

明命
「作戦大成功だよ♪」

すると明命の周りにボンッと煙が立つ。

そして煙の中から……

ねね
「よし、この宝玉を屋上に持っていこう！」

ねねが立っていた。
実は先ほどの明命は変化の術を使ったねねだったのだ。

正則
「くぅ～！　やっぱおねね様は痺れますね～！」

ねね
「ありがと、正則」

詠
「ねね先輩、早いとこ持っていきましょう。此処に留まっているのは危険かと……」

ねね
「大丈夫だよ。今、宝玉を持っているのは佐助達と勘違いしているからね！」

そう言って宝玉を手に持つねね。

詠
「ちょっ！　そんな堂々と出さないで下さいよ！（汗）」

ねね
「詠は心配性だね～……それにしても綺麗な宝玉だよ」

太陽に翳し、虹色に光る宝玉を見つめながらうっとりとするねね。
しかしその余裕が仇となってしまった。

???
「フン！」

ねね
「あッ？！」

手に持っていた宝玉は何者かに盗まれてしまった。

その宝玉を奪った人物は……

半蔵
「略奪…成功」

半蔵である。

ねね
「半蔵！　人の物を盗むなんて悪い子だね！（怒）」

半蔵
「まだ……貴様の物ではない」

正則
「ゴタゴタ言ってねぇで、それを返しやがれ！！」

短気な性格の正則は半蔵に襲い掛かる。

半蔵
「無力……」

正則
「おわっ？！」

しかし、その攻撃を難なく避ける半蔵。
そしてそのまま姿を眩ます。

ねね
「あー！！　逃げられたぁー！」

詠
「やっぱりこうなったか……はぁ～」

正則
「溜め息ついてる場合か！　早く追うぞ！」

そしてねね達は半蔵の後を追うのであった。

～裏庭～

半蔵
「……」

宝玉を手に入れた半蔵は裏庭にてある人物と待ち合わせをしていた。

その人物はもちろん……

家康
「半蔵！」

桃香
「半蔵さん！」

家康である。
その後ろには桃香の姿もあった。

家康
「すまないな半蔵。このような危険な事を任してしまって……」

半蔵
「心配……無用……」

家康
「その言葉で安心した。それでは、早急に屋上へと向かおう」

桃香
「うん♪」

半蔵
「御意」

そして屋上に向かう為、家康達は歩き始めようとした。

だが……

家康
「ッ！　うぉ？！」

桃香
「キャア！？」

半蔵
「……これは」

一陣の強風が家康達に襲った。

それと同時……

風魔
「……」

風魔が突如として姿を現す。

家康
「ふ、風魔?!　どうして此処に!?」

風魔
『元親の為』

桃香
「へ？　どういう事ですか？」

半蔵
「……不覚」

風魔の言っている意味がわからない家康と桃香だが、半蔵は既に理解しているようだ。

家康
「半蔵、どうした?」

半蔵
「……宝玉は奴の手に」

桃香
「嘘ッ!?」

家康と桃香は風魔に目をやる。
すると風魔は、懐から宝玉を取り出した。

半蔵
「ならば……再び略奪するのみ!」

風魔
『無駄』

そう言って風魔は宝玉を上に投げる。

すると……

元親
「いやっほぅー!」

家康
「も、元親?!」

弩九状態の元親が宝玉を掴んだ。

元親
「ワリィな家康！　この宝玉は工学部に使わして貰うぜ！！」

そしてすぐ立ち去っていく元親。

半蔵
「逃がさん！」

家康
「ワシも追うぞ！」

半蔵と家康はすぐさま追いかけようとするが……

思春
「すまんが追わせる訳にはいかん」

鈴々
「観念するのだぁー！！」

萃香
「アタシも協力するよ」

風魔
「……」

目の前に工学部メンバーと萃香が家康と半蔵に立ち塞がる。

半蔵
「邪魔だ……」

家康
「くそ、これほど多いとは……」

桃香
「り、鈴々ちゃん?!　どうして此処に!?」

鈴々
「元親お兄ちゃんの為なのだ!」

家康、絶体絶命。

しかし、その土壇場に……

??
「やっと着いたな……って此処は何処だ?」

突如地面から男性が現れた。

家康
「なッ？！　だ、誰だお主は！？」

？？？
「む、すまんな。決して怪しい者ではない」

桃香
「いやいやいや！　普通の人は地面から現れませんって！」

？？？
「何、単なる趣味だ。気にするでない」

思春
「なお怪しいわ！」

突然の男性の登場に困惑する一同。

家康
「ま、まぁ、とりあえず名前を教えてくれるか？」

？？？
「む、それもそうだな」

そして男性は地面から抜け出し、自己紹介をする。

桂
「俺の名は桂（かつら）　小太郎（こたろう）。攘夷志士だ」

“神出鬼没”
桂　小太郎……出陣！

第七十四話・C、宝玉を探せ！？～後編～　（後書き）

こなた
「こなたと！」

マサル
「マサルの！」

こなた
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

こなた
「さぁ今回も始まりましたコバラジです！」

マサル
「今回はフーミンの登場がなかったな。一体いつになったら登場するんだ？」

こなた
「いや～、そんなマサルに残念なお知らせなんだけど……フーミンは出て来ないよ」

マサル
「何だと？！」

こなた
「さぁ～てさて、そんなマサルを置いといて、質問コーナーに行きたいと思います！」

マサル
「最初の質問、ロベルトさんからのしつも……」

政宗
「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！！！」

マサル・こなた
「「うぎゃぁぁぁあぁぁぁああああ？！！？！？！！！」」

※しばらくお待ちください……

華琳
「さて、今回も始まりました」

政宗
「流すな！！　どういう事か説明しやがれ！」

華琳
「いや、このラジオも普通ではつまらないから、この際ゲストを呼ぼうって感じになって呼んだのよ」

政宗
「完全に乗っ取られてたけどな」

こなた
「まぁまぁ落ち着きなさいよ、伊達ちん」

政宗
「誰が伊達ちんだ!!（怒）」

マサル
「そうカリカリするな。せんべえ食うか？」

政宗
「いらねぇよ!!」

華琳
「政宗が突っ込んでいる間に感想に移るわ。今回は宝玉争奪戦に桂の介入ね」

こなた
「みんな必死だね～」

マサル
「仕方ないさ。それが人間なんだ」

政宗
「何言ってんだ？　とりあえず、この争奪戦は長くなりそうだな」

華琳
「それに関して、次回の完結編はA面とB面に分けるらしいわ」

政宗
「Ｈｕｍ～……ま、いいか」

こなた
「それにヅラの登場はびっくりしたね～!!」

政宗
「また訳分からん奴がやってきたな……」

マサル
「ああ、とんでもない奴が現れたな」

政宗
「オメェは言える立場じゃねぇだろ」

華琳
「ともかく今後が楽しみね」

こなた
「そんじゃあ質問コーナーにいっきま～す！　最初はケンさんの質問」

“官兵衛に質問だ。もし第二次スーパーロボット大戦Zに出てくる破界の王ガイオウの力があったらどうする？”

“二つ目の質問じゃ・・・凪は統夜が使う天神拳や修羅達が使う滅神拳、覇皇拳に興味はあるかの？”

“三つ目は華琳ちゃんと政宗さんに差し入れとしてワッフルを作ってみたのですが・・・食べますか？”

華琳
「とりあえず……」

政宗
「このワッフルは……」

政宗・華琳
「「テメェら（貴方達）が食いやがれぇぇぇええええ！！！」」

こなた・マサル
「「ふがががあががががああ！？！？！？！？！！！？？」」

そしてこなたとマサルは白目になりながら気絶した。

政宗
「なんてもんを送りつけてきやがるんだ……（汗）」

華琳
「ゲストを呼んでおいて良かったわ。それとそれ以外の返答は此方よ」

～返答～

官兵衛
「勿論！　天下統一じゃあ！！」

凪
「興味はありますが……自分では扱えないと思います（汗）」

～終了～

政宗
「ま、Ｎａｔｕｒａｌな答えだな」

華琳
「それじゃあ次の質問にいくわ。紅玉さんの質問ね」

“ゲームではよく小十朗自慢をしていた政宗、佐助自慢をしていた幸村ですが、政宗に小十朗の良さ、幸村に佐助の良さを語らせたらどうなりますか？”

政宗
「小十郎のか？　言わなくても俺の考えを察し、黙って背中を守ってくれるところだな」

華琳
「信頼が強いのね」

政宗
「Ｈａ！　そうでなきゃ俺の背中は守れねぇからな」

華琳
「ふふふっ……それと真田の意見はこれよ」

～返答～

幸村
「佐助は任された仕事は必ずこなす。某でも難しい事をよくやってくれる」

～終了～

こなた
「いや～美しい信頼関係だね～」

マサル
「ああ、トシ子も感動してる筈だ」

政宗
「復活早いな」

華琳
「流石はギャグキャラね」

こなた
「いや～……それじゃあ最後の質問だね。黒神さんの質問だよ」

“はぁい、結野アナでぇす♪今回は『リリカル銀魂ゲスト杯』に参加してくれた政宗さん、華琳さん、春蘭さん、星さんに占いしまぁ

す♪貴方達は数多くの難関に立ち向かう事になります！！特に政宗さん、人生で飛んでもない事が起こりまぁす♪”

“ぐぁはははははは。元親と真桜に質問じゃ！！今、ワシは転送装置を開発しておるところじゃ。以前完成させたのじゃが、あまりにも高度なエネルギーに耐え切れなくなったので、壊れてしもうた。今、直しているところじゃが、お前さん達も興味持ったのなら作ってみるか？発明家としての血が騒ぐじゃろ！！”

“ええ、三成君へ。映画じゃ君はものすごく政宗に強い恨みを持っているようだね。それはアニメで政宗が秀吉を討ったからだろうね。アニメを見たら、今すぐに政宗を斬滅したいかね♪（黒笑）”

政宗
「何が起こるってんだよ！？　オイ！」

華琳
「気にしちゃダメよ」

こなた
「うんうん」

マサル
「そうだぞボサンナ」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！！」

マサル

「それと、他の返答はこれだ」

～返答～

元親
「おぅよ！　今すぐにでも作りたいぜ！！」

真桜
「発明したいに決まっておるやろ！！」

三成
「私が憎んでいるのは家康のみだ！　それ以外には興味がない！」

～終了～

政宗
「……ま、実際に襲ってきたところで、俺は絶対に負けねえがな」

華琳
「そう……それは楽しみね」

華琳
「今回は此処までね。それと、ゲストのこなたとマサルには感謝するわ」

こなた
「いや～楽しかったよ！　また呼んでね～」

マサル
「次回はめそを連れてこよう」

政宗
（……疲れるわ）

第七十四話・D、宝玉を探せ！？～完結編・A面～　（前書き）

今回は前に話した他作品ゲスト以外の作品から参戦します。

それではどうぞ！

第七十四話・D、宝玉を探せ！？～完結編・A面～

～あらすじ～

桂、参戦！

～裏庭～

家康
「攘夷……志士？」

桂
「うむ。まぁ侍と思ってくれていいだろう」

突然の桂の登場により、一同は困惑する。

桃香
「え～っと……何で下から？（汗）」

桂
「侍たるもの、いかなる状況でも地中から登場するものなり……
攘夷志士の中では当たり前だ」

桃香

「当たり前なんですか？！」

桂
「うむ。最近入ったワトソンも日々奮闘しておる」

桃香
「誰ですかワトソンって？！」

桂のクールボケに突っ込みを入れる桃香。

そこへ……

思春
「ええい！　貴様が誰であれ、此処を通す訳には行かぬ！！」

鈴々
「そうなのだ！」

萃香
「ま、アタシはどうでもいいけど……協力するからには通せないな」

風魔
「……」

痺れを切らす工学部メンバー。
各々は自らの得物を手に取り、家康達に近づく。

家康
「くっ……」

半蔵
「主は……死守する」

桃香
「ど、どうしよう……」

その状況に再び危うくなる家康達。

その中で……

桂
「……何やら困っているようだな」

桂が家康達の状況を理解する。

思春
「去れ。貴様には関係のない事だ」

桂
「すまないが目の前で困っている人を見捨てる事は攘夷志士の作法に反するのでな……此処は協力させて頂こう」

そして桂は懐に手を伸ばし、お菓子を取り出す。

桂
「んまい棒……」

そのお菓子を……

桂
「混捕駄呪（コーンポタージュ）！！」

地面に叩きつけた。
その瞬間、叩きつけたお菓子から膨大な煙幕が出現する。

鈴々
「にゃにゃ？！」

思春
「な、何だコレは？！」

萃香
「アハハ～何も見えないね～」

突如現れた煙幕に困惑する思春達。

風魔
「……」

しかし、風魔は冷静に判断して忍術を行い、煙幕を消滅させる。

煙幕がなくなり、視界が良好になると……

半蔵
「……」

その場には半蔵以外の姿はなかった。

思春
「チッ！　逃したか！」

萃香
「それじゃ、追いかけるかい？」

鈴々
「おぉー！！」

思春達は逃した家康達を追いかけようとした。

だが……

半蔵
「この場は……闇が相手をする」

半蔵が思春達の前に立ち塞がる。

そして半蔵が忍術を唱えると……

影1
「……」

影2
「……」

影3
「……」

半蔵の姿をした全身真っ黒の分身が続々と現れる。

思春
「くそ！　貴様の忍術か！？」

鈴々

「真っ黒だらけなのだ！？」

萃香
「ほぉ～、人間にしてはやるね～」

風魔
「……」

半蔵
「……参る！」

こうして半蔵と思春達の戦いが始まるのであった……

～校庭～

元親
「よっしゃあ！　飛ばすぜぇ！！」

現在、宝玉を手に入れている元親は裏庭を突破し、弩九で校庭を爆走していた。

元親
「順調順調。このまんま行けば屋上なんてあっという間だな！」

最早この宝玉は自分の物。
そう思いながら屋上へと目指す元親。

その時……

元親
「ッ！　うおッ？！」

目の前から一つの砲弾が襲い掛かってきた。
元親はギリギリでそれを回避し、弩九をやめる。

元親
「な、何だってんだ？」

突然の砲弾。
元親は何があるのかと遠くを見つめる。

その先には……

忠勝
「……！！」

砲撃形態の忠勝の姿があった。

元親
「た、忠勝だと?!」

何故こんなところに忠勝が?

そんな困惑している元親を置いて……

忠勝
「!!!」

再び忠勝は元親目掛け砲撃する。

元親
「チィ!」

すぐさま砲撃を避ける元親。
しかし、忠勝は砲撃を止まらずに撃ち続ける。

元親
(ッたく、家康もやりやがる……だが、そろそろ何かしねぇとこっちがやられちまうぜ)

防戦一方の元親。
このままでは確実にやられる状況の中、どうするか考える。

しかし……

忠勝
「……！？」

突然砲撃を止める忠勝。

それと同時に……

恋
「……ん」

忠勝
「？！」

上から恋が現れ、忠勝に得物を向ける。
しかし忠勝はすぐさまその攻撃を反応し、恋を吹き飛ばす。

恋
「……」

元親

「恋！　大丈夫か！？」

恋
「……うん」

吹き飛ばす瞬間、恋は身体を捻った為にダメージは少なかった。

元親
「そうか。なら、一緒に忠勝と闘うと……」

恋
「……（フルフル）」

元親
「アン？」

恋
「……此処は、恋が闘う」

元親
「……大丈夫なのか？」

恋
「……（コクッ）」

言葉数は少ないが、恋の目はいつもより強い目をしていた。

その目を見た元親は……

元親
「……そうか。なら、存分に闘ってきな！」

恋の意志を尊重し、その場から立ち去っていく。

忠勝
「……」

一方の忠勝は逃走する元親を止めず、恋を見続ける。
事珍しく、忠勝は自らの闘争本能が湧き出ていた。

恋
「……」

忠勝
「……」

そして此処に……

恋
「……いく」

忠勝
「！！！」

“最強”の名に相応しい闘いが始まった……

～1F・廊下～

元親
「此処で弩九は使えねぇか……なら、走るとするか！」

最強の闘いが始まった頃、校舎に到着した元親は先ほどのような弩九は使えない為、走って移動していた。
そして階段に到着し、2階に上がろうとした。

その時……

？？？
「ちょい、まちぃや兄ちゃん」

元親
「アン？」

後ろから声が聞こえ足を止める。

振り替えると元親と同じように片方の眼に眼帯を着けた男性が仁王立ちしていた。

???

「兄ちゃん、えらい強そうやの～……どや？　このおじさんと闘ってみとうないか？」

元親

「……確かに闘いてぇが、こちとら暇じゃねぇんだ」

???

「なぁ～に言うとんねん！　そないなつまらへん事したらあかん！　あかんでホンマ！」

元親

（何だ、このオヤジは？）

突如現れた関西弁の男性に呆気に取られる元親。

そこへ……

???

「なら、そのｂａｔｔｌｅは俺が買うぜ」

元親

「……テメェか。独眼竜」

政宗
「よぅ」

2人の逆方向から政宗が現れる。

???
「お！　そっちの兄ちゃんが相手してくれるんか？　ワイはどっちでもえぇけどな～」

そう言って男性はストレッチを始める。

政宗
「向こうはもうやる気みたいだな」

元親
「……気をつけろよ独眼竜。あのオヤジ、ただ者じゃねぇ」

政宗
「Ｈａ！　だったら端から相手するような事はしねぇよ。テメェも気をつけな。上には宝玉を狙ってる奴らで一杯だぜ？」

元親
「そうかい！　なら、そいつらをぶっ飛ばしていくとするか！！」

そして元親は階段を昇っていった。

？？？
「さぁ～兄ちゃん……ごっつい死合いでも始めようや。準備はええか？」

政宗
「その前に名前を名乗らして貰う。俺の名は伊達　政宗……ｃｒａｚｙな独眼竜だ！！」

政宗は腰に差していた６本の刀を引き抜き、六爪流となる。

？？？
「ヒィ～ヒャッハッハ！！　えらいごつそうやないかい！　ワイは大好きやで、そういうのは！」

そして男性は背中のドスを抜き取り、独特な構えをする。

？？？
「ほんなら、こっちも名乗ろうやないかい」

真島
「ワイは真島（まじま）　吾朗（ごろう）や。さぁ……いっちょやったるやないかい！！」

“闘志満々”
真島　吾朗……狂演！

第七十四話・D、宝玉を探せ！？～完結編・A面～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ、今回も始まりましたコバラジです！」

政宗
「今回は恋と忠勝の闘い。さらに“龍が如く”からの参戦、真島吾朗の登場だったな」

華琳
「真島の兄さんに関しては完全な私情ね」

政宗
「俺にとっちゃいい相手になりそうだがな」

華琳
「ま、これ以上の私情は持ち込まないから安心しなさい」

政宗

「OK。そんじゃ、質問コーナーにいくぜ。最初は龍の骨さんからだ」

“政宗に質問よ！ＢＳＡＡ学園！の主人公北郷零斗と同じ声だけど、マイティ真拳をどう思ってるの？答えなきゃ風穴開けるわよ！”

政宗
「アレか……自由な拳法だが、使いこなすのは至難の業だな」

華琳
「まぁ性格は問題だらけだけどね」

政宗
「言うな。んじゃ次は白銀の戦士さん、それと三国同盟さんの連続質問だ」

“元親は史実では幼少の頃は女々しさゆえに姫若子と呼ばれていましたが、こっちの元親は小さい頃はどんな感じだったんですか？”

“鬼ヶ島の鬼と呼ばれている元親さんですが、本物の鬼に会ってどう思いましたか？”

華琳
「元親の質問ね。それじゃあ本人に答えて貰うわ」

～返答～

元親
「俺は子供ん時からはっちゃけてたな……ま、人見知りだったから一人で遊ぶ事は多かったがな。それと萃香は……本編で話すから内緒にしとくように言われたから答えらんねぇぜ」

～終了～

政宗
「……アイツ、人見知りだったのか」

華琳
「人はわからないものね」

華琳
「それと政宗」

政宗
「Ａｈ？」

華琳
「蒼　龍一さんから差入れがきてるわ。飲みなさい」

政宗
「ｓｔｏｐだ。それは明らかに罠だな」

華琳
「ま、飲む飲まないは貴方次第ね。私はもういくわ」

そう言って華琳は部屋を後にする。

政宗
「……此処で飲まないのは失礼か」

そして政宗はドリンクを飲み干す。

するとミルミル内に身体が細くなっていき……

政宗
「やっぱりこうなったかぁぁぁぁぁぁあああ！！！！」

“戦国乙女”の伊達　マサムネスタイルになっていた。

マサムネ
「つーかなんで女になるんだよ！？　おかしいだろうが！！」

愚痴をこぼすマサムネ。

そこに……

華琳
「忘れ物をしたわ」

華琳部屋に戻ってきた。

マサムネ
「なッ？！」

華琳
「……」

ばったりと鉢合わせしてしまう両者。

華琳
「……お」

マサムネ
「……？」

華琳
「お持ち帰りィィィ！！！」

マサムネ

「ぬわぁぁぁあぁあああああ？！！？！」

マサムネの姿で暴走した華琳。

強制終了！！

第七十四話・D、宝玉を探せ！？～完結編・B面～

～あらすじ～

真島、参戦！

～校庭～

恋
「……ん」

忠勝
「！！」

双方の武がぶつかり合いを見せる校庭。
既に至るところに抉れた形跡があり、2人がどれほど打ち合っていたかが分かる。

忠勝
「！！！」

先に動いたのは忠勝。
忠勝が背中より小型の射撃装置“ビット”を発射させて恋に向け、

迎撃させる。

恋
「……」

しかし、そのビットを容易く避ける恋。
いくら攻撃をさせようとも、当たる素振りも見せずにビットを破壊する。

忠勝
「……！？」

恋
「……次は、恋の番」

そう言って恋は軌道が定まらない連撃を忠勝に披露する。
一般人では最初の一撃で気絶する攻撃。

しかし、忠勝は……

忠勝
「……！！」

その連撃を苦とせずに全て受け止める。

恋
「……強い」

忠勝
「……！！」

互いの強さは互角。
しかし、それを超えようと奮闘する両者。

忠勝
「！！！！！」

此処で忠勝が螺旋槍を地面に刺す。
すると忠勝の周りには雷が発生し始める。

そして……

忠勝
「！！！！！」

一気に落雷させた。
落雷の量とスピードは尋常ではない程凄まじかった。

恋
「……！？」

流石の恋も反応出来ずに落雷の中へ飲み込まれてしまう。
しばらくして落雷が終わり、忠勝は地面に刺していた螺旋槍を引き抜く。

忠勝
「……」

落雷の影響で砂埃が発生していた校庭も、次第に晴れてきた。
忠勝は辺りを確認する。

忠勝
「……？」

しかし、いくら辺りを見渡しても恋の姿は確認出来ない。

その時……

恋
「……甘い」

忠勝
「！？！」

背後から恋が現れ、忠勝に刃を向けていた。
対応しようとするが、時既に遅く……

忠勝
「！？！？！！？」

忠勝を吹き飛ばした。

恋
「……」

忠勝
「……」

恋の攻撃により、動かなくなる忠勝。
しかし恋は得物を降ろそうとはしない。

恋
「……まだ」

静かに呟く。

すると……

忠勝

「……！！」

起動音と共に忠勝が復活し、得物を手にする。

恋

「……いく」

忠勝

「！！！」

そして両者は再び得物をぶつけるのであった。

～1F・廊下～

真島

「オゥリャァァア！！」

政宗

「Ｙａ――Ｈａ――！！」

真島のドスと政宗の六爪が火花散らす廊下。

政宗
（何者だコイツは！？　ｋｎｉｆｅの使い方が普通じゃねぇぞ？！）

内心、真島のドス捌きに動揺する政宗。
それもその筈だ。
トリッキーな動きかつスピードの扱いが上手い真島。
普通ならば、既にやられていてもおかしくないほどの強さなのだ。

真島
「どした！？　まさか、ワイのごっつさに驚愕しとんのか？」

政宗
「Ｈａ！　冗談は俺を倒してから言え！」

政宗は真島を押し飛ばし、距離を置く。

政宗
「見せてやるぜ……これが俺のＦｕｌｌ　ｂｕｒｓｔだ！！」

そう言って政宗は自分の氣を高める。

真島
「ほぉ～……これはどえらい感じやな～。よっしゃ！　此処は受けたるわい！！」

そんな政宗に対し、真島は避けようともせずに受ける態勢に入る。

政宗
「Ｈａ！　上等だ！！」

真島の挑発に乗る政宗。

そして……

政宗
「ＨＥＬＬ　ＤＲＡＧＯＮ！！」

蒼い雷光を真島に放った。
凄まじい勢いで真島に向かっていく。

真島
「キタキタァ～！！」

政宗の奥義に何故か興奮する真島。
そしてドスを握り締め……

真島
「ハァァアアア！！！」

蒼い雷光を殴った。
すると、蒼い雷光は消え去った。

政宗
「Ｗｈａｔ？！」

これには政宗も驚愕せざるおえなかった。
自分の自慢の奥義をドス一つで消されるとは誰が思うだろうか。
しかし、目の前ではそれが現実として行われたのだ。

真島
「……ま、こんなもんやろ」

そんな中、真島は首を回しながらダルそうにしていた。

真島
「兄ちゃん、どないしよっか？　まだやるんか？」

政宗
「……どういう意味だ？」

真島
「どうもこうも、兄ちゃんではワイには勝てへんで。さっきで分かったやろ？」

政宗
「……確かに今はアンタの方が上だ。だがな……」

真島
「アン？」

政宗
「それを黙って納得すると思ってんのか？　ふざけんじゃねぇ！！」

真島の言葉で声を荒げる政宗。

真島
「……じゃ、どないにすんねん？」

政宗
「答えはｓｉｍｐｌｅだろ？　テメェに勝つまで闘うんだよ！！」

そう言って政宗は刀を構え、戦闘態勢に入る。

真島
「わっかいな～……せやけど、嫌いやないで」

対する真島もドスを構え、闘気を出す。

政宗
「さぁ……テメェを倒して、俺はｓｅｃｏｎｄ　ｓｔａｇｅに昇ってやるぜ！！」

真島
「やってみろや……クソガキがぁ！！」

そうして再び政宗と真島は刃を交えるのであった……

～裏庭～

家康
「……という事をやっておるのだ」

桂
「ほぅ～……」

一方、家康と桃香は桂に現在行われているゲームの説明をしていた。

桃香
「わかってくれましたか？」

桂
「うむ、2割ほど」

桃香
「それわかってないじゃないですか？！」

桂
「大丈夫だ。2割わかってるのだぞ、2割」

桃香
「何で2割に自信あるんですか？！」

相変わらずのクールボケの桂。

桂
「まぁ、その宝玉は既に屋上に向かっている筈だ。ならば、早く追うとしよう」

家康
「そうだな」

一応理解していたようで、元親を追う事を優先させる。

家康
「……ん？」

だが、向かおうとした瞬間に家康が後ろを振り向き、足を止めた。

桃香
「家康君？　どうしたの？」

家康
「……何かが近付いてきているな」

桂
「何？」

桃香
「も、もしかして、思春さん達？！」

家康
「いや、これは初めて会う氣だ」

どうやら思春達とは別のようだ。

桂
「うむ、敵か味方でもないか……どうするのだ？」

家康
「ならば、ワシが向かおう」

桃香
「うぇ？！　あ、危ないよ！」

家康
「なぁに、心配いらん。少し話すだけだ」

桃香
「で、でも……」

家康
「桂殿、桃香を任せた！」

そして家康は森の奥へと消えていった。

桃香
「あ……行っちゃった（汗）」

桂
「彼ほどの人物ならば大丈夫であろう。さ、此処を早く出ようぞ」

桃香

「……うん」

少し心残りはある桃香だが、此処は一旦森を抜ける事を優先させ、桂と共に森の出口へと向かった。
一方の家康は微かな気を頼りに、足を進める。

家康
（この感じは……闘気に似ているが全く違うものだ。一体何なのだ？）

家康が尤も気になったのは“気”。
普段、家康や政宗が使うのは“闘気”だが、今感じるものは似ているようで本質は全く違うもの。
家康はそれが気になってしまい、我慢できずにその気を探っていた。

そんな感じでしばらく歩くと……

スバル
「ティア～疲れたよ～」

ティアナ
「我慢しなさいよ。こっちだって辛いんだから」

家康
「……ん？」

スバル達と合流した。

家康
「どうしたのだ、お主達？」

スバル
「ヒィ？！」

ティアナ
「ちょ！　アンタ何者よ！！？」

いきなり声を掛けた家康に大層驚く2人。
勢い余って、武器を構えてしまった。

家康
「うぉ？！　あ、危ないじゃないか！？」

ティアナ
「いきなり声を掛ける方が悪いでしょ！！」

家康
「り、理不尽だな～」

スバル
「す、すいません！　いきなりだったもので、つい……」

家康
「いや、気にするな。ところで、お主達はどうしたのだ？」

スバル
「は、はい、実は……」

スバル、説明中……

家康
「なるほど、つまりは迷子という事か」

ティアナ
「そうよ。宝玉が見つかった今、此処でのんびりしている訳にはいかないの」

スバル
「そ、それで、相談なんですけど……」

家康
「ああ、道案内ならば任せてくれ」

スバル
「あ、ありがとうございます！！」

ティアナ
「……フン、感謝するわ」

家康

「では、出口はこっちだ。ついてきてくれ」

そうして家康はスバル達を出口へと誘導するのであった。

その中で、家康は……

家康
（間違いない。この娘達から感じるな……後で聞いてみるか）

2人から探していた“気”が感じられており、後に聞いてみようと思っていた……

～3F・廊下～

元親
「ダァ～クソ！！」

家康がスバルとティアナを道案内している頃、元親は……

孫市
「何故逃げるのだ？　元親よ」

元親

「オメェが銃を乱射しているからだろうが！！」

孫市
「ならば、その宝玉を渡せ。さすれば無事に生かせてやる」

元親
「何処に生徒の命を狙う教師がいんだよ！？」

孫市
「しゃべれる余裕はあるようだな（……アレで華陀との軍資金を作る事が出来るか／／／）」

大変な事になっていた。

第七十四話・D、宝玉を探せ！？～完結編・B面～（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回も始まりましたコバラジです」

政宗
「今回は忠勝ｖｓ恋、真島の兄さんｖｓ俺の闘いだったな」

華琳
「とりあえず、忠勝と恋は化け物ね」

政宗
「まぁ次元が違うからな。そう思っても仕方ねえな」

華琳
「それと、家康とスバル達が出会ったわね。特に闘う素振りは見せなかったけど、いつか闘うのかしら？」

政宗

「一応考えてるみたいだぜ。まぁ、Ｒｅａｌｉｚａｔｉｏｎするかわかんねぇがな」

華琳
「そう……それじゃあ質問コーナーへと移るわ。最初は白黒さんね」

“政宗、幸村、家康、三成に質問です。
この人とは戦いたくないって人は誰ですか？”

華琳
「政宗は誰と闘いたくないの？」

政宗
「怒った小十郎。アレはｔｒａｕｍａもんだ」

華琳
「あぁ……アレは嫌ね（汗）」

政宗
「他の奴らはこういう答えだ」

～返答～

家康
「織田校長だな。少し慣れない感じがあるのだ（汗）」

幸村
「怒った蓮華殿は手に負えないでござる」

三成
「秀吉様に刃を向ける事は出来ぬ！！」

～終了～

政宗
「こんな感じだな。ｎｅｘｔは？」

華琳
「ケンさんの質問ね」

“雪蓮達三姉妹に質問だ。俺らの所にいる雪蓮達は虎の妖怪の力を持っています。これを三人はどう思いますか？”

政宗
「返答はこれだ」

～返答～

雪蓮

「あの力は面白いわよね～♪」

蓮華
「確かに最初は驚きましたが……此処もさほど変わりませんね（汗）」

小蓮
「シャオもあんな力欲しい～！！」

～終了～

華琳
「まぁ、此処は空飛んだり、火山から飛び出したり、魔王になったりしてるからね」

政宗
「まともな奴はいねえって事だな。そんじゃあ次は黒神さんだな」

“その１　最近質問コーナーで出番が増えています。
２人はどんな感想を抱いてますか？
これからもがんばってね。”

“僕の小説、『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』の中で２人が注目している人物は誰ですか？”

華琳

「喜ばしい事よ。皆が私の為に手足になってくれるのだから」

政宗
「いや、なってねぇから。でも、嬉しい事は俺も同意見だな」

華琳
「応援ありがとう。それと、気になるのは『チーム・マイティアテム』『チーム・ファイター』の二チームね」

政宗
「ま、それ以外にも全チーム気になるがな」

華琳
「最後は紅玉さんね」

“質問ですが、恋ＢＡＲＡ学園には七不思議とかあるんですか？”

華琳
「ないわ」

政宗
「いや、あっただろ？　確か……」

華琳
「ないったらないの！！　これで終わりよ！」

政宗
（……逃げたな）

華琳
「次回も宝玉探しね。いつになったら終わるのかしら？」

政宗
「さぁな」

第七十四話・D、宝玉を探せ?!～完結編・C面～

～あらすじ～

様々な闘いが展開されていた頃……

～玄関～

桂
「……」

こなた
「……」

マサル
「……」

凄まじい覇気を醸し出しながら、睨み合う3人

桃香
「……えぇ～と（汗）」

雛里
「あわわ……」

慶次
「……何だコレ？」

そんな3人の連れは困惑していた。
先ほど玄関先でバッタリと遭遇してからずっとこの状態である。

桃香
「うぅ～……どうしたらいいのかな？」

雛里
「と、とりあえずは様子を見ましょう」

慶次
「そうだな……んじゃ、ゆっくりとしようか」

そう言って見届ける事にした3人。

桂
「……」

こなた
「……」

マサル
「……」

一方、相変わらず睨み合いが続き、発展を見せない３人。

一体何を考えて睨み合っているのだろうか……

桂

（……ヤバい、家の電気消し忘れた）

こなた

（……不味い、今日からやる新番組のアニメ、録画するの忘れてた）

マサル

（……今日のアレ、３にしようかな～）

何にも考えていなかった。

～３Ｆ・廊下～

元親

「ハァ……ハァ……」

此方は孫市からの壮絶な攻撃を避け切った元親。

元親
「ったく、本気で命狙ってきやがって……」

そんなボヤきを溢しながら肩を回す元親。

元親
「さぁて、そろそろこの宝玉を……」

そして懐に手を伸ばし、宝玉を取り出そうとした。

元親
「……アン？」

しかし、いくら探しても宝玉が見当たらない。

つまり……

元親
「……落としちまった（汗）」

そういう事である。

そこへ……

貂蝉
“あー……マイクテス、マイクテス”

突如、放送が掛かり貂蝉の声が響いた。

貂蝉
“はぁ～いみんな♪　元気にしてたん？”

元親
「アン？」

貂蝉
“此処で報告があるのよねん。実は……”

～屋上～

貂蝉
「宝玉を届けてきてくれた人がいるわん♪　それは……佐助ちゃんです」

佐助
「ははっ……ども」

早苗
「あはは～……（汗）」

～３Ｆ・廊下～

元親
「んだと?!　じ、じゃあ、俺が今まで持っていた宝玉は?」

孫市
「これの事か?」

元親が困惑している中、孫市が宝玉を見せてきた。

元親
「さやか！　テメェが持ってたのか!?」

孫市
「ああ。だが、これは偽物なのだろ?　ならば、持っていても仕方がない」

元親
「んじゃ……一体どっからだ?　これが偽物だったのは」

～玄関先～

桃香
「えぇ～！！　もう届けちゃったんですか？！」

雛里
「あわわ……終わっちゃいました」

慶次
「というより、俺は何もしてないな～」

桂
「うむ……行事も終了した事だ。俺は帰らせて頂こう」

こなた
「アタシも帰って録画の準備をしなきゃ」

マサル
「今日のアレは3だな」

そう言って桂達は帰宅していった。

桃香
「……何しに来たのかな、あの人達は（汗）」

～裏庭～

半蔵
「……終焉か」

風魔
『終わり』

思春
「しかし、猿飛はどうやって宝玉を？」

萃香
「細かい事はいいんだよ。アタシらは負けたんだから」

鈴々
「お腹すいたのダァ～！」

～裏庭・入口付近～

家康
「アッハハハ！　いやぁ～、これは一本取られたな！」

ティアナ
「結局こうなるか……ハァ～」

スバル
「まぁまぁ。楽しかったし、良かったじゃん！」

ティアナ
「……それもそうね」

家康
「この後、お主達はどうする？」

スバル
「時間も時間ですし、もう帰らせて頂きます。でも！　明日もこの学園祭に来たいと思っています！！」

家康
「そうか。ならば、明日はワシのクラスに来てくれ」

スバル
「はい！　是非行かせて頂きます！！」

ティアナ
「わかりました」

～校庭～

恋
「……終わり」

忠勝
「……」

～１Ｆ・廊下～

真島
「なんや、もう仕舞いか……」

そう言ってドスを仕舞う真島。

政宗
「どういうつもりだ？　俺との闘いは終わってねぇぜ」

真島
「アホか。こういった祭り事は終わったら意味はないねん。せやから、次はちゃんとした場所で死合おうやないかい。ほな、さいなら」

そして真島は手を振りながら去っていった。

政宗
「……読めねぇ野郎だ」

政宗は真島の性格に呑まれ気味であった。
そして刀を仕舞う。

小十郎
「政宗様」

華琳
「此処にいたのね政宗」

そこへ小十郎と華琳が現れる。

政宗
「残念だったな。宝玉を見つけられなくて」

華琳
「いえ、気にしてないわ。そんな事より……貴方は何か楽しそうね」

政宗
「まぁな。世界は広いって事がわかった気がするぜ」

小十郎
「？　どうかされましたか？」

政宗
「気にすんな。独り言だ」

～屋上～

貂蝉
「約束通りその宝玉は差し上げるわん」

佐助
「あんがとさん」

貂蝉
「いいのよん♪　それじゃあね……ぶるぁぁあぁぁあああ！！！」

そう言って貂蝉は奇声を上げながら姿を消した。

佐助
「はぁ～、疲れた……」

早苗
「お疲れ様です」

早苗は手に持っていた飲み物を佐助に渡す。

佐助
「お、サンキュー」

早苗
「……ところで佐助さん」

佐助
「ん？」

早苗

「その宝玉はどうやって偽物とすり替えたんですか？」

佐助
「ああ、簡単だよ。ちょうど明命ちゃんと合流した時に渡したのが偽物だな」

早苗
「え？　あの時にですか？」

佐助
「そもそも、あの明命ちゃんは変化の術で変装してたねね先輩だってのはわかってたしね」

早苗
「嘘？！　あの人、偽物だったんですか！？」

佐助
「そうなんだよね～。ねね先輩も詰めが甘かったぜ……」

早苗
「ど、何処で気付いたんですか？」

佐助
「ああ、それは……」

～回想～

明命

「佐助さん！　大丈夫ですか！？」

佐助
「明命ちゃん？！」

～回想終了～

佐助
「早苗ちゃんはわかんなかったかもしれないけど、明命ちゃんは俺様の事を“猫神様”って呼んでるんだ。だから、最初からわかっていたって事よ」

早苗
「へぇ～……凄く冷静だったんですね」

佐助
「ま、これでも一応忍びだからね～……さて、この宝玉はどうする？」

早苗
「私自身は何もしていないので、それは佐助さんが使ってください」

佐助
「いいのか？」

早苗
「はい。それではもう時間ですし、私はこれで」

そして早苗は屋上から飛んでいった。

佐助
「……そこにいんだろ？　左近」

左近
「おや、バレていましたか」

佐助は後ろに振り向き、左近の名を呼ぶ。
すると、物陰から左近が現れた。

左近
「まずはおめでとうございますってところですかな」

佐助
「あんがと。それにしても、お前が参加しなくて良かったぜ」

左近
「何故ですか？」

佐助
「何故って……お前は気付いていたんだろ？　宝玉のある場所が」

左近
「理由は？」

佐助
「直感のいいお前だから、既に宝玉を見つけて職員室に移動させたんだろ？　普通あんな場所に置いといたら一人くらいわかるって」

左近
「そこまでわかっていますか……佐助さんも読めない御方だ」

佐助
「そんじゃ、教えてくんない？　最初は何処にあったのか」

左近
「いいですとも」

そして左近は今までの経緯を話した。

～回想・１－Ｃ前～

貂蝉
“あ、ちなみにその宝玉は数百万する品物なの。勝った人にはそれを景品にするわん♪”

左近
「……随分と太っ腹な御方だ」

１－Ｃの前で放送を聞いていた左近。

左近
「まぁ、どうせやるならとことんやりましょうか。まず……俺なら何処に隠す？」

左近は自分が隠す場所を考える。

左近
「人が来ない場所。あえて堂々と隠す……だとすれば」

そう言って左近は歩き始める。
そして到着した場所は……

～校長室～

左近
「失礼します」

校長室であった。
そしてノックをし、校長室に入ると……

信長
「貴様……何用だ？」

覇気をいかんなく醸し出す信長の姿があった。

左近
「いきなりお邪魔をして申し訳ありません」

信長
「御宅はいらん……用件を述べよ」

左近
「では、手短に……この部屋に宝玉はありますか？」

信長
「……だとすれば貴様はどうする？」

左近
「それを譲って貰えたら有り難いですね」

信長
「……」

左近
「……」

一時の沈黙。

信長
「ふん……うつけが」

最初に発言したのは信長。
そう言って信長は懐に手を伸ばし、宝玉を左近に投げる。

信長
「持って行け」

左近
「感謝します」

～回想終了～

左近
「という事があった訳です。その後、俺は職員室でこの宝玉を隠した」

佐助
「最初っからから左近の手の内ってことかよ……でも、お前が宝玉を手にした時は放送が掛かんなかったな？」

左近
「それは俺が隠した後に、屋上で貂蝉さんと話をしてやった事です

からね」

佐助
「……左近はこの宝玉は欲しくなかったの？」

左近
「俺自身は見つける事に意味がありますから……その宝玉は佐助さんの物ですよ」

佐助
「欲がないこと……」

左近
「ま、一人で逃げた謝罪も込めて贈りますよ。それじゃあ」

そう言って左近は屋上を後にする。

こうして学園祭の一日が終わった……

第七十四話・D、宝玉を探せ?!~完結編・C面~（後書き）

華琳
「……」

政宗
「Ａｈ？　どうした？」

華琳
「……これだけ話数を使ってまだ一日しか経っていないとは……末恐ろしいわ」

政宗
「……確かにな」

華琳
「まぁ、それでもネタはあるのだから大丈夫でしょう」

政宗
「だが、このｐａｃｅだと長くなりそうだな。これだと読者に愛想尽かれる」

華琳
「それは此方が頑張ればいいのよ」

政宗
「ま、そうだな」

華琳

「ちなみに、一日目に参戦したゲストは引き続き登場することがあるからお楽しみにね」

政宗
「ＯＫ」

華琳
「それじゃあいつもの質問コーナーに移るわ。最初は龍の骨さんね」

“華琳に質問よ！あんた、私のドレイ（仲間）になる気は無い？答えなきゃ風穴開けるわよ！”

華琳
「愚問ね。私を奴隷になるつもりはないわ」

政宗
「よく読め。（）に仲間って書いてあるだろ」

華琳
「私に命令出来るのは私だけ。それ以外は認めないわ」

政宗
（聞いてねぇな……）

華琳
「それじゃあ次の質問にいくわ。ｓさんからの質問ね」

“伝説の男、桐生一馬は出ないんですか？”

政宗
「真島の兄さんのｒｉｖａｌか……出す予定はないが、同じ声優の半蔵とは何か絡みがあるみてぇだな」

華琳
「ごめんなさいね」

政宗
「次の質問。蒼　龍一さんだな」

“質問１：真桜へ、忠勝のドリルを改良（魔改造でも可）するとしたらどう言ったコンセプトで改造しますか？”

“質問２：華琳さん、雪連さん、デカチ・・・ゲフンゲフン！桃花さんへの質問です。この人だけは絶対戦いたく無い、勝てそうに無いと思う方はいますか？”

政宗
「テメェはどうなんだ？」

華琳
「貂蝉という化け物。会いたくもないわ」

政宗
「Ｓｈａｒｅだ。それと、他の返答はこれだ」

～返答～

真桜
「飛ばせるドリル！　浪漫があってえぇやろ！？」

雪蓮
「う～ん……お市ちゃんと闘うのは気が進まないわね（汗）」

桃香
「私はあんまり闘わないから……というよりデカチチって言おうとしましたよね！！」

～終了～

政宗
「まぁこんなものか」

華琳
「最後に黒龍さんからね」

“１．政宗さん。あなたの異名は『マヨネーズドラゴン』でＯＫ？”

“２．華琳さん。今のあなたは覇王として威厳がありませんね（黒

笑”

政宗
「よくねぇわ!!　勝手に決め付けんな!!」

華琳
「凡人には見えないだけよ。ねぇ政宗？」

政宗
「いや、俺にも見えん」

華琳
「今回は差し入れが来ているわ。はい、政宗」

政宗
「？　写真か？」

そうして写真を目にする2人。

華琳
「あら、可愛いじゃない」

華琳に渡された写真はマサムネ〔女体化〕の体操着だった。
非常に御満悦である。

政宗
「……（汗）」

一方の政宗は顔色が悪くなっている。

華琳
「？　どうかしたの？」

そう言って政宗の写真を見る華琳。
そこには……

華琳
「ッ！？」

健康そうな小麦色をした肌の……貂蝉メイド服ｖｅｒ
その姿に……

華琳
「うっぷ？！」

政宗
「耐えろ！　吐いたら終わりだ！！　……っぷ！！」

嘔吐寸前までに追い込まれていた。

華琳

「ぜぇ……ぜぇ……じ、次回は学園祭二日目よ」

第七十五話、焔耶の新たな恋……？

～あらすじ～

学園祭、2日目開始！

～学食～

焔耶
「……」

凪
「……」

皆が笑顔で楽しむ学園祭のに対し、仏頂面で席に座る焔耶と凪。

焔耶
「わかっているな？　今回はお館に免じて“仕方なく”同行を許してやる」

凪
「はい、貴方が“どうしても”というお願いでしたから仕方ありません」

話を聞く限り、どうやら家康との見回り（デート）を約束した2人。しかし、時間が限られた学園祭で1人ずつ見回り（デート）を行うのは難しいと判断した家康は3人と一緒に見回り（デート）を提案した。本当なら嫌と言いたいのだが、尊敬と好意を寄せる家康の頼みもあって断れずに承諾してしまい、今に至る。
余談だが、家康は2人は大の仲良しと勘違いしている。

そんな2人の前に……

家康
「待たせたな。焔耶、凪よ」

家康が到着した。

焔耶
「お館！」

凪
「師匠……」

家康
「すまないな。予定が合わず、2人同時になってしまって……」

焔耶
「とんでもありません！　私はお館と一緒ならどのような形でも構いません！」

凪
「自分も一緒です」

家康
「そうか。ならば、出掛けるとしよう」

凪
「行き先は？」

家康
「そう固くなるな。行き当たりばったりも悪くはないぞ」

そして家康達は様々な場所へと足を進めた。

～２－Ｃ～

家康
「此処は占いか？」

凪
「そのようですね……どうやらよく当たるみたいです」

焔耶
「ふん、下らんな……」

最初に訪れたのは２－Ｃが開く占い屋。
此処の占いはよく当たると噂されており、客足も非常によい。

家康
「まぁよいではないか。とりあえず、入るとしよう」

凪
「はい」

焔耶
「わかりました」

家康の誘いで２－Ｃの教室に入っていく。
中に入ると、一つ一つ別れた机があり、個室感覚で他人のプライバシーを守るようになっている。

家康
「本格的に作っておるな～」

凪
「みたいですね」

焔耶
「……」

家康
「焔耶はこういうのは嫌か？」

焔耶
「嫌というか、こういった神頼みはあまり信用出来なくて……」
？？？
「あら、心外ね。甘く見ない方がいいわよ～」

家康達の背後から声が聞こえ、振り向くと……

雪蓮
「やっほ～♪」

雪蓮が手を振りながら立っていた。

家康
「おぉ、雪蓮殿」

雪蓮
「相変わらず貴方はモテるわね～」

家康
「いやいや、そんな事はないですよ」

雪蓮
「……苦労してるのね」

凪・焔耶
「「はい……」」

鈍感な家康を見てため息をつく凪と焔耶。

雪蓮
「ま、ウチに来たからには占いを受けて貰うわよ。最初は誰がいいかしら？」

家康
「そうだな……焔耶、受けてみたらどうだ？」

焔耶
「わ、私ですか？！」

家康
「うむ、こういう神頼みも何かのキッカケになるかもしれんぞ？」

焔耶
「……わ、わかりました」

家康の助言もあり、焔耶は雪蓮の後についていき、個室へと入る。
そして用意された席に座った。

雪蓮
「さぁて、何を聞きたいのかしら？　仕事？　それとも健康？」

焔耶
「……運を」

雪蓮
「？　何て？」

焔耶
「だから……を／／／」

雪蓮
「そんなボソボソって言われてもわからないわよ。ハッキリ言いなさい」

焔耶
「わ、わかっている……ふぅ～」

気合いを入れる為か、思いっきり深呼吸を始める焔耶。

焔耶
「……よし！」

そして覚悟を決めた焔耶は雪蓮の目をまっすぐ見て……

焔耶
「れ、恋愛運を頼む！／／／」

女の子らしい質問をした。

雪蓮
「あら、信用しない割りに随分と乙女っぽい質問するのね」

焔耶
「し、仕方ないだろ……お館が鈍感なのだから／／／」

雪蓮
「そうね。なら、早速占っていくわよ」

そして雪蓮は中央にある水晶に手をかざし、ブツブツと何かを唱える。

数分後……

雪蓮
「……結果が出たわ」

焔耶
「ほ、ホントか？！」

その言葉で勢いよく机を叩く。

雪蓮
「お、落ち着きなさいって、ちゃんと説明するから」

焔耶
「あ、すまん」

雪蓮
「全く……それじゃ、簡潔に説明するわ」

焔耶
「た、頼む／／／」

雪蓮
「貴方の恋愛だけど……正直言って上手くいかないわ」

焔耶
「な、何だと?!」

雪蓮
「このままだと、髪が桃色の女の子とくっついてハッピーエンドね」

焔耶
「そんな……私は、もうお館とは無理なのか?」

先ほど占いを信じないと語っていた焔耶だが、マイナスな結果に落胆する。

雪蓮
「けど、これを避ける方法があるわ」

焔耶
「ホントか?!」

雪蓮
「えぇ……」

焔耶
「その方法を教えてくれ！　お館と幸せになるのであればなんだってやる！」

雪蓮
「その言葉に嘘偽りはない?」

焔耶
「この命に賭けて誓う！」

焔耶は燃え上がるような眼差しで雪蓮を見つめる。

雪蓮
「そ、なら教えてあげるわ。その方法は……」

焔耶
「ほ、方法は?」

雪蓮

「……」

焔耶
「……」

かなり長いタメに息を飲む焔耶。

そして開かれた雪蓮の言葉は……

雪蓮
「簡単よ。その人ごと愛したらいいのよ♪」

焔耶
「……は？」

あまりにも大胆であった。

焔耶
「な、何を言っているんだお前は！？／／／」

雪蓮
「だってそうじゃない？　片方が好きなら両方好きになっても同じよ」

焔耶
「む、無茶苦茶過ぎるだろ！！／／／」

尤もである。

雪蓮
「あら、なら諦めるの？」

焔耶
「……え？」

雪蓮
「せっかくチャンスを掴もうとしているのに、貴方はそれを手放すの？」

焔耶
「そ、それは……」

雪蓮
「チャンスは来るべき人にしか来ない。しかし、それすら逃す人はタダの凡人。貴方は凡人のままでいいの？」

焔耶
「……」

雪蓮
「もう一度自分を見つめ直しなさい。貴方なら出来るわ！　チャンスを掴む事が！！」

焔耶

「ッ！　そうだ……私なら出来る！！」

雪蓮
「さぁいくのよ！　自らの幸せの為に！！」

焔耶
「おう！」

それからの焔耶の行動は早かった。

まず個室から出て……

家康
「お、結果はどう……」

焔耶
「お館！　申し訳ありませんが用事が出来ましたので失礼します！！」

家康
「うお？！　え、焔耶？」

家康に一言申し、２－Ｃの教室を後にする。

家康
「ど、どうしたのだ、焔耶は？」

凪
「さ、さぁ？」

雪蓮
「ちょっと！　お金を払っていきなさいよ！！」

そんな状況にただただ唖然とする家康と凪。
雪蓮は支払いを済ませていない事に気付くが、その後家康がキッチリ支払いを済ませた。

そして焔耶が向かった先は……

～１－Ｂ～

桃香
「ありがとうございました～♪　……さて、どんどん働かないと」

焔耶
「失礼する！！」

自分のクラスであった。

桃香
「あ、焔耶ちゃん、どうしたの？」

焔耶
「桃香……いや、桃香様！！」

桃香
「……へ？」

突然の事で時が止まったように動かなくなる桃香。
そんな桃香を差し置いて焔耶は肩を掴み……

焔耶
「これよりこの焔耶……桃香様を愛してみせます！！／／／」

桃香
「……え？　へ？　うえぇぇぇぇぇ！！？？！？！」

いきなり告白をされた桃香。
桃香以外にも、そのクラスにいた客も唖然とする。

桃香
「ま、待って焔耶ちゃん！　わ、私は家康君の事が……」

焔耶
「充分に承知しております！」

桃香
「……は？」

焔耶
「だから私は……お館と桃香様を同時に愛しますので安心してください！」

桃香
「ど、どういう事のなの？　ちゃんと説明してくれないかな？」

焔耶
「説明など不要です！　さぁ頑張っていきましょう桃香様！！」

桃香
「お願いだから説明してぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

こうして焔耶は新たな恋（？）を知るのであった……

～１－Ａ～

政宗
「売り上げはどうだ？」

華琳
「上々よ。このまま行けば昨日の売り上げを超えるわね」

焔耶が絶賛告白している中、１－Ａのクラスでは政宗と華琳がクラスの手伝いをしていた。

華琳
「ま、これも私のおかげね、感謝しなさい」

政宗
「最初にラブ●テル作っといてよく言う……」

華琳
「若気の至りよ」

政宗
「若さで解決できないからね、アレ！！」

華琳
「さて、そろそろ手伝わないといけないわ」

政宗
「無視すんじゃねぇ！！」

そんな政宗を置いてクラスに入ってきた客に近付く華琳。

華琳
「いらっしゃいま……」

？？？

「ほぅ……お主がそのような格好をするとは珍しい」

？？？

「これが学園祭の力というべきか」

入ってきた客は華琳に似た雰囲気を出す髭を生やした男性と、髪を結んだ青年であった。

華琳

「……何故貴方達が此処にいるのかしら？」

どうやらこの男性と青年は華琳の知り合いのようだ。

男性

「ふっ……仕事が落ち着いたので少しお邪魔した」

青年

「貴様も相変わらずの態度だな。もう少し敬意を払ったらどうだ？」

華琳

「貴方達に送る態度などこれで充分よ」

青年

「そうか……」

政宗

「おい、何やってんだ？」

そこへいつまで経っても来ない華琳を迎えにきた政宗。

華琳
「あら、政宗。ちょうどいいところにきたわね」

政宗
「Ａｈ？　……ａｃｑｕａｉｎｔａｎｃｅか？」

華琳
「ええ、そうよ。曹（そう）　孟徳（もうとく）に曹　子桓（しかん）よ」

孟徳
「実の父と兄に対し、呼び捨てとは……流石はわしの娘だ」

子桓
「……まぁよかろう」

政宗
「……Ｈａ？」

“威風堂堂”

曹　孟徳

“初代皇帝”

曹　子桓……圧参！！

第七十五話、焔耶の新たな恋……？（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、今回は焔耶の新しい恋と私の身内が出てきたわね」

政宗
「雰囲気そっくりだな」

華琳
「此処で余談になるけど、作者はいつかこんな時が来ると思って恋姫メンバーの名字はあえて一文字にしておいたのよ」

政宗
「Ｈｕｍ～……」

華琳
「ま、私は絶対に孟徳と子桓を超える人物になってみせるわ」

政宗

「ま、頑張んな」

華琳
「それじゃ、質問コーナーに移るわ。最初は三国同盟さんからの質問ね」

“幸村は暴走モードになったらその記憶はあるの？”

政宗
「質問の返答はこれだ」

～返答～

幸村
「？　暴走モードとは何の事でござるか？」

～終了～

政宗
「覚えてねぇな」

華琳
「ビデオでも見せたら自害するんじゃないかしら？」

政宗
「やりかねんな」

華琳
「それでは次にいくわ。紅玉さんからの質問ね」

“ＢＡＳＡＲＡ３の第二衣装とお楽しみ武器についてどう思いますか”

政宗
「アレか。アレはアレでＧｏｏｄなんじゃないのか？」

華琳
「でも、石田や毛利先輩のお楽しみ武器って……」

政宗
「……」

華琳
「……質問したら怖いから次にいくわ。次は百鬼丸さんの質問よ」

“桂とこなたとマサルが戦ったらどっちが勝ちますか？”

華琳
「難しいけど……実際に戦場に出ていたヅラが勝つんじゃないかしら？」

政宗
「ま、大人と子供相手なら勝つのは当たり前だな」

華琳
「わかったかしら？　それじゃあ次はドラゴンノーツさんね」

“１、ｍｕｇｅｎに政宗の神キャラ「雷神政宗」がいるんですが政宗も本気になれば「雷神政宗」になるんですか？”

“２、原作弱キャｒ……ゴホン…政宗、ナイ…ゲフンゲフン…華琳、忠勝ファンネｒ…ゴホン…家康、デカチ……ゲフンゲフン……桃香のトラウマは一体なんでしょう？”

華琳
「１の質問は忠勝の雷を喰らえばなる……と思うわ」

政宗
「いや、あんな風魔みたいなスピード出ないから！　限界あるから！！」

華琳
「そして２番なんだけど……とりあえず、ナイチチの件は後で反省文を提出しなさい」

政宗
「俺のｔｒａｕｍａは怒った小十郎だな」

華琳
「私にトラウマなどないわ」

政宗
「お化けだろ？」

華琳
「……そ、そんなもの、ここ怖くないわ（汗）」

政宗
「わかりやすい動揺だな。それと返答はこれだ」

～返答～

家康
「ワシはやはり信長だな」

桃香
「わ、私は怒ったお母さん……いつも池に飛ばされるの（泣）」

～終了～

華琳
「わかったかしら？　最後に黒神さんからね」

“僕の小説『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』では『第八十九訓：たまには本編でもゲストを出したほうが面白い』の最後、シャマル鍋ではこんなにも凄い美女になりました。（以下略”

政宗
「全くの別人だな、オイ」

華琳
（……これはこれでアリね。どうにかしてならないかしら？）

政宗
「オイ、テメェ変な事考えてなかったか？」

華琳
「ナニイッテルノ？　ゼンゼンカンガエテナカッタワ」

政宗
「片言過ぎるから！　バレバレだから！！」

華琳
「気のせいよ。それと真田なんだけど、質問の紙を見た瞬間に気絶したから答えられないわ」

政宗
「ま、わかりきってたな」

華琳

「今回は此処までよ。それと、蒼　龍一さんの差し入れは次回に載せる予定なので今回はなしでよろしく頼むわ」

政宗
「悪いな。そんで次回は？」

華琳
「さぁ？」

政宗
「……未定か」

第七十六話、風魔の世話

～あらすじ～

焔耶、桃香に恋（？）をする。

～校門前～

風魔
「……」

翠
「……」

校門前では風魔と翠が静かに誰かを待っている様子。

翠
（ヤバいヤバいヤバい！　ふ、風魔から誘われたから舞い上がってたけど、なに話していいかわかんねぇよ！！／／／）

正確には翠が勝手に暴走して会話がないだけであった。
しかし、このままだと気まずいのは百も承知。
翠は思い切ってある質問をした。

翠
「き、今日は何か用事あるのか?!／／／」

風魔
『重要』

翠
（重要?　……ま、まままままさか！　ここ告白?!／／／）

何処から告白のキーワードが出てきたかわからないがまたも暴走する翠。

そこへ……

氏政
「風魔～！　元気にしとったか～!?」

翠
「……へ?　氏政のおじさん?」

いつもお世話になっている氏政が現れた。

風魔
『無論』

氏政
「そうかそうか、儂は嬉しいぞよ」

翠
「ど、どういう事だ風魔？」

氏政
「ん？　何だ教えていないのか？」

風魔
『連れてきた』

氏政
「ちゃんと説明せんか！　……ゴホン、それじゃあ儂から説明するぞい」

翠
「は、はい」

氏政
「儂はこれからこの学園を廻ろうかと思っておった。しかし、この学園は何分広すぎて道に迷ってしまうのじゃ。そこで儂は風魔に頼み、道案内をしてくる約束をしたのじゃ」

翠
「……それで何でアタシが？」

氏政
「翠ちゃんを呼んだのは儂じゃ。風魔は見ての通り無口での……

少しでも会話が弾むようにと思っておったのじゃ」

翠
「……本当か風魔？」

風魔
『あぁ』

翠
「……それならそうと説明しろーー！！」

紛らわしくなった事を怒る翠。
その後、何かを殴った鈍い音が響いた。

～1F・廊下～

氏政
「ほぉ～、随分と賑やかじゃの」

翠
「まぁ、年に一度の祭り事だしな」

風魔
「……」

氏政と翠、風魔（頭にたんこぶ付き）の3人が最初に訪れたのは主

に1年生が管轄している1F・廊下。
血気盛んな1年生達が大いに賑わっていた。

氏政
「それじゃ、まずはお主達のクラスに行くとするかの」

翠
「へ?!」

氏政
「なんじゃ、悪いのか?」

翠
「あ、いや、えぇ〜っと……ほ、他のクラスの方が楽しいですって!」

風魔
『同じく』

何故か自分達のクラスを勧めない翠と風魔。
それもその筈。

現在、1ーBのクラスでは……

〜1ーB〜

元親
「野郎ども！　盛り上がっていくぜ！」

子分
「「「「アニキー！！」」」」

元親
「俺の名前は！」

子分
「「「「モ・ト・チ・カ、うぉぉぉおおお！！」」」」

朱里
「はわわ……（汗）」

元親とその子分達でばか騒ぎしていたからだ。

～1F・廊下～

翠
「ほら、Aクラスが近いからそっちに行こうぜ！！」

氏政
「これ、そんなに引っ張るでない！」

とりあえず自分のクラスに行かせたくない為、Aクラスに向かって

いった。

～1－A～

氏政
「ぜぇ……ぜぇ……この老いぼれを殺す気か！？」

翠
「体力ねぇな～」

風魔
『皆無』

氏政
「阿呆！　限界があるじゃろ！！」

そうは言っても先ほどの場所とは１０ｍもない。

氏政
「まぁえぇじゃろ。早速入るとするかの」

そして氏政はＡクラスの扉を開けた。

甲斐姫

「いらっしゃいませー！！」

氏政
「……」

翠
「……」

風魔
「……」

そして黙って閉める。

甲斐姫
「いや、何で閉めるの？！」

すると向こうから扉を開けてきた。

氏政
「いやいや、間違えて動物園に来てしもうた。すまんの～」

甲斐姫
「よし、殺す。そこに直れ！！」

氏政の発言にキレた甲斐姫は自分の得物を手に取り、氏政に襲い掛

かる。

翠
「ちょっ?!　落ち着けって!」

それをどうにか羽交い締めする翠。

甲斐姫
「止めないで!　あの死にかけのクソジシイに引導を渡してやるわ!!」

翠
「気持ちはわかるがあの人はアタシの恩人なんだよ!　それが殺されかけてるのに黙って見過ごせるかっての!」

氏政
「はぁ〜……これだから単細胞脳みそは困るのじゃ」

甲斐姫
「ウガァァァアアア!!!!!!（怒）」

翠
「何で挑発すんだよ!?　頼むから黙ってくれ!」

風魔
『今の甲斐姫……狂気』

翠
「風魔は手伝えぇぇぇぇぇえ！！！」

その後風魔の加勢もあり、甲斐姫はどうにか落ち着きを取り戻し、喫茶店で一休みした。

～２Ｆ・廊下～

氏政
「うむ、中々良い店だったぞい」

翠
「……そうかい。それは良かったな」

風魔
『どうした？　疲れてるのか？』

翠
「疲れてるに決まってんだろ！！　さっきのやり取り見てたよな！？」

現在、氏政達は２Ｆの廊下に来ていた。
しかし、先ほどのやり取りもあった為に翠は少し疲れた様子。

氏政

「全く、若い衆が情けないの～」

翠
「アンタの為にやったんだろが……！」

風魔
『冷静になれ』

翠
「……はぁ～、もういいよ」

これ以上やったとしても意味がないと判断した翠は溜め息をつく。

翠
「んじゃ、この近くに“休憩室”があるみたいだからそこに行こうぜ」

氏政
「えぇじゃろ。クラスは何処ぞい？」

翠
「えっと……Dクラスだ」

それから氏政達は少し歩き、２－Dのクラスの前にやって来た。

氏政

「さて、ゆっくり休むとするかの」

呑気な口調で扉を開ける氏政。

氏康
「……何やってんだ阿呆せがれ？」

氏政
「……」

そしてすぐさま閉める。
その手はかなり震えていた。

氏政
「ささささささて、ゆっくり休みもとったし他の場所へと行くかの～（汗）」

翠
「いや、休んでねぇし入ってもねぇぞ」

風魔
『同じく』

氏政
「そ、そうじゃったかの～？　最近物忘れが激しくて……」

氏康
「んじゃ、俺が脳を活性化させてやろうか？」

氏政
「うぎゃあぁぁぁぁぁぁぁあ！？？！！！！？」

背後から氏康の声が聞こえた瞬間、驚愕と共に風魔に抱きつく氏政。

氏康
「このど阿呆が！　何処に自分の親父を見て怖がる息子がいるってんだ！」

氏政
「怖いものは怖いんじゃ！」

氏康
「ならその根性叩き直してやるよ！　ちょっくら来い！」

そう言って氏康は氏政の服を掴み、引きずり出す。

氏政
「嫌じゃぁぁぁあ！　風魔ァァァ！　ふぅぅぅぅまぁぁぁあ！！！」

氏政は号泣しながら風魔に救済を求めるが……

風魔
「……」

風魔はそれを黙って見過ごします。

氏政
「何故じゃぁぁぁあああぁぁぁあ！！！？？！！！？」

氏政の叫び虚しく、風魔が動く事なく、氏康に連れ去られていった。

翠
「助けなくて良かったのか？」

風魔
『死ぬ訳ではない』

翠
「確かにそうだけど……」

少し可哀想に思えた翠。
しかし、此処である事に気付く。

翠
（ん？　氏政のおじさんがいなくなったって事は……アタシと風魔の二人っきり！？／／／）

俗に言うデートである。
再び訪れたチャンスに翠が見逃す訳なかった。

翠
「な、なぁ風魔？／／／」

風魔
「……」

翠
「こ、これからふた、ふふふ二人で……わ、悪い！」

デートをしようと言おうとしたが中々言葉に出来ない翠。
そして一度落ち着く為に後ろを向く。

そんな翠の前に……

人和
「此処にいたんですか。風魔さん」

人和が現れた。

風魔
『どうした？』

人和
「いえ、少し手伝って欲しい事がありまして……よろしいでしょうか？」

風魔
『構わない』

人和
「ありがとうございます。それでは行きましょう」

風魔
「……」

そして風魔と人和はその場から離れていき……

翠
「……よし、風魔！　……あれ？」

ただ1人取り残された翠であった……めでたし、めでたし。

翠

「めでたくねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！（怒）」

～校庭～

祭
「ん～うまい！　これは酒に合うのぅ」

小喬
「ま～たお酒の事考えてる～」

祭
「こればっかり譲れん。少しくらい良いであろうに」

大喬
「か、身体を壊しますよ？」

風魔達が学園巡りをしている中、祭達は校庭にて屋台巡りをしていた。

祭
「心配には及ばん。きっと先代様も許してくれる筈よ」

大喬

「うぅ～……いつもそう言ってお酒をやめません」

祭
「何言っておる。儂なんかより先代様の方が飲んでおったぞ」

小喬
「そんなにその先代様とやらはお酒を飲んでいたの？」

祭
「儂が言うのもなんだが……先代様の酒癖は手に負えん」

？？？
「ほぉ～……どのくらい酒癖が悪いんだ？」

祭
「ともかく、次々と酒を空にさせて自分の部下にも酒を飲ませるのじゃ。儂なんて可愛いもんじゃよ……って小喬、お主そんなに声だったか？」

小喬
「へ？　今のはお姉ちゃんじゃないの？」

大喬
「ち、違うよ～」

祭
「それでは、一体……」

？？？
「俺だ、祭」

悩んでいる祭達の背後から声が聞こえそちらに振り向く。
そこには、白髪のダンディな男性が立っており、その姿を見た祭は驚愕した。

祭
「な、何と?!　いつ此方に!?」

???
「ついさっき到着したんだ」

祭
「それならば迎えにいかれましたのに」

???
「そこまで老いぼれてはない。それに、少しながらこの周りを徘徊してみたいと思っていたところだ」

祭
「ですから儂が迎えに行くと申し上げた筈ですが……」

???
「何ごとも挑戦が必要だ。そこは許せ」

祭
「全く、何も変わってはおりませんな」

小喬

「……？」

大喬

「えと……祭さまのお知り合いですか？」

その男性と楽しげに話している祭。

しかし、大喬と小喬は首を傾げたままだった。

祭

「む？　……そうか、お主らは海外に行っておったから会った事はなかったのか。この御方は」

？？？

「祭、このくらいは自分で挨拶をする……俺の名は」

文台

「孫（そん）　文台（ぶんだい）。孫三姉妹の父にあたる」

大喬・小喬

「「……ええぇぇぇぇぇぇえええ！？？！？！？？！！？」」

“江東紅虎”
孫　文台……参上！

第七十六話、風魔の世話（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗と」

孫市
「……孫市の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回はゲストが来ています」

政宗
「工学部顧問の三代目雑賀孫市先生です」

孫市
「……よろしく頼む」

華琳
「孫市先生には後々やって頂きたい事があるのでよろしく頼むわ」

孫市
「わかった」

華琳
「さて、今回の話は風魔と翠ののほほん的な話だったわね」

政宗
「最近、風魔のボケ役がしっくりきてるな」

孫市
「しゃべられないのによくやる人物だ」

華琳
「それと孫家の父、文台も登場したわ」

政宗
「ちなみにこの親シリーズは“三國無双シリーズ・6”のキャラで構成されているから注意してくれ」

孫市
「……あまり娘達と似てないな」

華琳
「それは御法度よ」

政宗
「それを言い出したらキリがねぇぜ」

孫市
「……そういうものか」

華琳

「それじゃ、質問コーナーに移るわよ」

孫市
「最初の質問。ケンさんからだ」

“恋姫キャラに質問です。自分の作品であるＨＥＲＯ'ｓ　ＥＰＩＳＯＤＥに華蝶仮面（星）と華琳、桂花、雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳、月が出ています。これを見て出ていない人達はどう思いますか？”

華琳
「……これ、全員言っていったらこのコーナー終わるわね」

政宗
「なら一部の人間に答えてもらうか」

～返答～

貂蝉
「ぬふふ～わたし達の出番はあるのかしら～？」

卑弥呼
「むむむ、楽しみじゃ！！」

華陀
「ゴットヴェイドーーー！！！」

～終了～

華琳
「……ゴファ！！」

政宗
「よりによって何でコイツら！？　もっと恋姫メンバーいたよな！？」

孫市
「確かに華陀が出るかどうかは気になるな」

政宗
「オメェは私情じゃねぇか！　ともかく、一旦ＣＭを入れる！」

～ＣＭ～

戦国ＢＡＳＡＲＡシリーズの続編が登場！

その名は……戦国ＢＡＳＡＲＡ３宴！！

今回のテーマは“ドラマ＆パーリィー”
圧倒的ボリュームで生まれ変わった作品となっている
遂にあの“松永久秀”が武将プレイヤーとして登場！
さらに片倉小十郎、猿飛佐助など計８人の武将が操作可能に！

ＢＡＳＡＲＡシリーズ最新作、戦国ＢＡＳＡＲＡ３宴……２０１１秋に発売予定！

～終了～

華琳
「ぜぇ……ぜぇ……こ、今度からはしっかりキャラは選んだ方がいいわね」

政宗
「Ｃｅｒｔａｉｎｌｙ」

孫市
「……次にいく。紅玉さんからの質問」

“華琳は「自分に命令できるのは自分だけ」と言ってますが、政宗がものすごい色気を出して頼み事をしてきたらどうしますか？”

華琳
「勿論受け入れ……そんなに私は安くないわ」

政宗
「いや、受け入れようとしてたよね？！　明らかに長い間があったよな！？」

華琳
「木の精よ」

政宗
「“気のせい”だろ！　明らかに動揺してんじゃねぇか！！」

孫市
「……」

華琳
「それじゃ次にいくわ」

政宗
「Ｉｇｎｏｒｅか！？」

華琳
「ドラゴンノーツさんからの質問」

“１：家康は本気になればｍｏｓａ氏製作の「Ｓトミー」になりますか？”

“２：幸村はうさぎ耳が好きですか？”

華琳
「これらの返答はこれよ」

～返答～

家康
「衣装があればその気になれると思うぞ？」

幸村
「……ウサギの耳がどうしたでござるか？」

～終了～

政宗
「真田に“萌え”はまだわからないみたいだな」

孫市
「ま、当り前だな」

華琳
「それと作者はＭｕｇｅｎをやっていないけど、見るのは好きなの。何か面白いＭｕｇｅｎ動画があったら教えて貰えないかしら？」

政宗
「私情をはさむな。次は黒神さんだな」

“家康・桃香・幸村・連華・三成・月へ２つの質問。１つ目　この質問コーナーにより政宗と華琳の出番が通常より増えました。そんな２人が羨ましいですか？”

“２つ目　僕の小説で、『リリカル銀魂ゲスト杯』と言う大会で政宗と華林はもちろん、春蘭と星もゲストに出ており、さらには秀吉も出す予定です。この小説で彼等がこの小説代表として勝って欲しいですか？”

政宗
「さて……この返答はどうだろうな」

～返答～

家康
「羨ましいというより二人は頑張っているな。ラジオに然り、そちらに然り」

桃香
「いろんなところで一所懸命やるしね～……それとゲスト杯は応援しています」

幸村
「某もらじおをやってみたいでござる！！」

蓮華
「その前にラジオを言えるようにしないといけないわね」

三成
「秀吉様……どうか、優勝を」

月
「み、みっちゃん……」

～終了～

華琳
「……案外普通ね」

孫市
「あぁ、普通だな」

政宗
「Ｎｏｒｍａｌだな」

華琳
「ま、それでもいいから次にいくわ。黒龍さんの質問ね」

“１．政宗に質問。前に政宗がマヨ政宗になった時のビデオがあるので、コレを見てどう思ったか感想ください（黒笑”

“２．スネ男ヘアーの三成に質問。屁怒絽大閣下に挑む勇気がありますか？”

政宗
「Ａｈ？　マヨ政宗って何だ？」

華琳
「このビデオに入っているわ」

閲覧中……

政宗
「なんじゃこりゃぁぁぁあああああ！！！」

華琳
「さ、感想をどうぞ」

政宗
「感想もクソもあるか！？　一体どうしろってんだ！？」

孫市
「……新しいキャラ作りか？」

政宗
「ｓｈｕｔ　ｕｐ！！」

華琳
「それと石田の返答はこれよ」

～返答～

三成
「命令とならば……斬滅させる」

～終了～

華琳
「髪に関しては怒っていなかったわね」

政宗
「アイツは秀吉絡み以外は怒んねぇかんな」

孫市
「不器用だな」

華琳
「それじゃあ、今回は特別コーナーに移るわよ」

政宗
「特別？　何だそれは？」

華琳
「題して……孫市先生、ダーツでドン！」

孫市
「……何だそれは？」

華琳

「このコーナーは孫市先生への差し入れで成り立ったコーナーです。
商品は以下の通り」

“指輪”
“ザビッシュ”
“温泉旅行（二組）”
“狙撃命令（政宗・元親・春蘭どれでもおk）”
“結婚式場案内書”
“メイド服を着る”

政宗
「ちょっとまてぇぇぇぇぇえ！！！」

華琳
「待たないわ！！　さぁ孫市先生、どうぞ！」

孫市
「狙いは外さん……」

政宗
「本当に待たないよコイツら！？」

そして素早く投げた孫市。
刺さった的は……

“温泉旅行（二組）”

華琳
「おめでとうございま～す！　温泉旅行を獲得しました～！！」

政宗
（危なかった……）

孫市
「……感謝する／／／」

華琳
「さて、次回は……未定よ」

政宗
「ま、いつも通りだな」

華琳
「あ、それと、次回は質問コーナーはないわよ。気を付けてね」

※黒龍さんの焔耶の差し入れは次回に送ります。申し訳ございません

第七十七話、それでも小生はやってない

～あらすじ～

氏政の世話が行っていた同時刻……

～体育館～

役員１
「おい！　そっちにいたか？」

役員２
「ダメだ、見当たらん！」

役員３
「まだ遠くには行ってない筈だ！　必ず見つけ出せ！」

皆が賑わっている学園祭とは相反し、険しい空気の中で慌ただしく誰かを探している生徒会役員。

さて、この生徒会役員達が懸命に探している人物は……

官兵衛
（マズイぞこれは！　こんなところで捕まっては小生の人生は終わ

りだ！）

官兵衛である。
現在、体育倉庫の跳び箱の中に隠れている。（鉄球は丸出しだが）
何故官兵衛はこのような事態になってしまったのか？

それはつい先ほど起きたばっかりであった……

～回想・校庭～

官兵衛
「このステーキ串、中々いけるな」

２－Ｂのクラスに所属する官兵衛は休憩の時間を貰い、学園祭をぶらぶらと徘徊していた。

官兵衛
「さて、何をすれば良いだろうか……回りたい場所も特にない」

断言されてもどうしようもない。

官兵衛
「仕方ない、少し早いがクラスに戻るとするか」

そう言って官兵衛は後ろを振り向く。
その瞬間から不幸が始まった。

官兵衛
「うお?!」

ますポイ捨てされていた空き缶を踏み、壮大に前に転ぶ。
そして目の前には何故か何も置いていていない台車に乗り込み、勢いそのままに台車は動き出す。

官兵衛
「ぬおぉぉおお?!!」

半ば暴走状態の台車（官兵衛乗せ）は止まる様子は見られない。

客1
「危な!?」

客2
「何だあれは!?」

客3
「バッキャロー！　気を付けろ!!」

官兵衛
「何故じゃぁぁぁああ！！」

様々な客から罵倒を受ける官兵衛だが、実際彼も被害者の1人である。

そんな官兵衛を乗せた台車が縦横無尽に爆走していると……

斗詩
「はぁ～……もう麗羽さまの相手は疲れます」

目の前に斗詩が立ちはだかった。
前を向いている為に官兵衛に気づかないようだ。

官兵衛
「んな？！」

斗詩
「え？」

そして……

官兵衛

「うぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

斗詩
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！？？！！！！」

衝突した。

官兵衛
「アタタタ……ん？」

衝突の反動でようやく台車から降りる事が出来た官兵衛。
しかし、彼の不幸までは止まらない。
起き上がろうとした瞬間、手に弾力のあるものを触っている事に気付く。

それは……

斗詩
「ヒィン！／／／」

斗詩の胸であった。

そこから導き出される答えは……

生徒
「た、大変だぁ～！　官兵衛が斗詩さんを襲っているぞ！！」

官兵衛
「……あれ？」

そういう事になる。

官兵衛
「ち、ちょっと待て！　これは事故だ！　小生はその気なんて更々ない！！」

生徒
「そんな姿で言われても説得力がねぇんだよ！」

官兵衛
「確かにそうだが……ともかく小生は無実なんだよ！！」

自分の無罪を唱える官兵衛。

しかしそこへ……

役員１
「斗詩さんを襲っているとは本当か？！」

役員２

「生徒会としては見過ごせん！！」

役員３
「官兵衛！　おとなしくお縄につけ！！」

生徒会役員が到着し、状況は更に悪化した。

官兵衛
「だから！　小生は何も悪さなんてしとらん！！」

役員２
「やってるではないか現在進行形で！」

役員１
「話は後で詳しく聞く！　とりあえず生徒会室に来い！」

官兵衛、絶体絶命。

そんな官兵衛がとった行動は……

官兵衛
「冤罪で捕まるのは嫌じゃぁぁぁあ！！！」

当然、生徒会から逃げる事である。

役員1
「あ、逃げたぞ！！」

役員2
「逃がすか！　追えー！！」

官兵衛
「畜生ー！！　何故こうなるんじゃぁぁぁあ！！！」

～回想終了～

以上の出来事があった為、官兵衛は逃亡していた。

官兵衛
（そもそも小生は悪くないだろう！　何故追いかけられなくちゃならない？！）

その意見は尤もなのだが、官兵衛だから仕方がない。

官兵衛
（しかし、このままでは小生の人生が終わってしまう……どうしたらいいんだ？）

そんな事を考えていると……

役員１
「オイ！　此処に官兵衛の鉄球があるぞ！」

官兵衛
「ッ！　見つかったか！！」

役員に見つかり、跳び箱から飛び出した。
しかし、入り口は塞がれている。

そこで官兵衛がとった行動は……

官兵衛
「どっせぇぇぇい！！」

壁に鉄球をぶつけ、大きな穴を開けた。

役員１
「貴様！　痴漢では飽きたらずに破壊行為まで！」

官兵衛
「だから小生は無実だぁ！」

そして再び逃亡する官兵衛。

役員１
「生徒会に告ぐ！　現在、容疑者は体育倉庫から脱走した！　余っている役員がいたら現場に駆けつけるように！！」

一方の役員も無線で生徒会に呼び掛けた後、官兵衛の後を追うのであった。

～校舎裏～

官兵衛
「ぜぇ・・・ぜぇ・・・な、何故小生ばかりこうなる？」

どうにか生徒会役員を撒いた官兵衛は校舎裏にて休息をとっていた。

官兵衛
「しかも勢いとはいえ、倉庫の壁を壊してしまった・・・・・これは停学だけではすまされんな」

その前に痴漢で捕まったら社会的抹殺を受けるであろう。

官兵衛
「……は、そうだ！　斗詩に無実の証明をして貰えれば解決できるではないか！　そうと決まれば……」

策が決まった官兵衛はすぐさま斗詩を探そうと校舎裏から外に出る。

だが……

半兵衛
「やぁ、遅かったじゃないか」

官兵衛
「なッ？！」

外には半兵衛率いる生徒会役員達が官兵衛の回りを囲んでいた。

半兵衛
「残念だけど君の逃げ場はなくなった。おとなしく捕まってくれないか？」

猪々子
「ヤイ！　よくもアタイの斗詩を汚してくれたな！　絶対に許さないぜ！！」

長政
「痴漢は削除なり！」

官兵衛
「くそ……小生の人生も此処までか」

流石の官兵衛もこれにはお手上げである。
最早此処までかと思った時……

斗詩
「ま、待ってください！！」

半兵衛
「……斗詩君？」

この場面を救う鍵、斗詩が現れた。

官兵衛
「遂に小生にも星が来たぞ！！　頼む斗詩！　この生徒会に説明をしてくれ！」

斗詩
「は、はい！　え、えぇーと……」

官兵衛は最後の望みである斗詩に全てを任した。
しかし、斗詩は生徒会の方を向かずに官兵衛と向き合った。

官兵衛
「？　どうした？」

斗詩
「あの……その……／／／」

官兵衛からの質問には答えず、急にモジモジとし始める斗詩。

そんな斗詩が一言……

斗詩
「か、官兵衛さん……私の胸は気持ち良かったですか？／／／」

官兵衛
「……」

半兵衛
「……」

猪々子
「……」

長政
「……」

役員達

「「「「……」」」」

……。

半兵衛

「……連れていってくれ」

役員達

「「「「はっ！！」」」」

官兵衛

「何故じゃぁぁぁあぁぁぁぁぁぁあぁぁああああ！！！？！？！？！？！？！」

その後、官兵衛の姿を見た者はいない……（嘘である）

〜2F・廊下〜

久秀

「賑やかで結構。これも人の欲望だ」

学園祭の見回りをしている久秀は独自の理論で辺りを伺っていた。

久秀
「さて、この階は特に問題はない……次の場所へと移るか」

そして別の場所へと移ろうとした時……

???
「ねぇねぇ、ちょっといい？」

久秀
「……私かね？」

誰かに声を掛けられた久秀は後ろに振り向く。

???
「あ、やっぱ父ちゃんと同じ声だ」

そこには幼稚園児くらいの子供が立っていた。

久秀
「……君は一人かね？」

???
「ううん。父ちゃんがいるぞ」

久秀
「そうか。では、その父は何処にいる？」

？？？
「きっとキレイなおねえさんのところ」

久秀
「……そうか、君は迷子か」

？？？
「オラは迷子じゃないぞ！　それにオラ、“君”って名前じゃないぞ！」

久秀
「これは失敬、では名前を聞くとしよう」

しんのすけ
「オラ、野原（のはら）　しんのすけ５才！　好きな電車は東武伊勢崎線だぞ！」

“最凶園児”
野原　しんのすけ……参上！！

第七十七話、それでも小生はやってない　（後書き）

華琳
「投稿がが遅れて申し訳ないわ。次回からは3日ペースに戻したいと思うから安心しなさい。それと今回コバラジは休みをとるわ。前に差入れをくれた黒龍さんの家康人形』と『桃香ちゃん人形』はこの場を借りて答えるわ」

～返答～

焔耶
「こ、これは……お館と桃香様のお人形！／／／」

その人形を見た瞬間に悶え苦しむ焔耶。

焔耶
「ん？　なんだこのボタンは？」

ポチッと。

家康人形
“焔耶……好きだ”

桃香
“焔耶ちゃん……好きだよ”

焔耶
「そ、そそそそそんな事を急に……ゴファ！／／／」

焔耶……萌死！！

～終了～

華琳
「ま、予想通りね。それじゃ、次回もお楽しみに」

第七十八話、宴再び！

～あらすじ～

しんのすけ、参戦！

～校庭～

家康
「ふぅ～、終わった～」

桃香
「大変だったね～」

愛紗
「お疲れ様です」

１－Ｂの手伝いが終わり、休息の時間となった家康達。

家康
「さて、何処かいきたい場所はあるか？」

桃香
「う～ん……愛紗ちゃんはどうする？」

愛紗
「私は桃香様に任せます」

桃香
「えぇ～？！　ズルいよ～！」

愛紗
「何を言われようとも、私は桃香様に任せます」

桃香
「うぅ～……愛紗ちゃんが反抗期だよ～」

家康
「アッハハハ！」

とても微笑ましい光景である。

しかし、とある放送により……

卑弥呼
“あー、マイクテス、マイクテス”

状況が一変した。

家康

「ん？　放送か？」

桃香
「何だろ？」

愛紗
「……あまり期待出来ませんね」

家康
「……まぁな」

前の放送はろくでもない事だったのであまりいい期待が出来ない家康達。

卑弥呼
“聞けぃ！　己の武に誇りを持つ武士（もののふ）よ！”

桃香
「……何か、凄い気迫だね」

卑弥呼
“主らは望んでおらんか？　己の武がどれ程通用するかと！　己より強き荒武者と闘う事を！”

卑弥呼からは凄まじい迫力で全校舎に響かせる。

卑弥呼
“そんな武士に喜ばしい学園行事を行うとする！　名付けて【学園バトル大会】じゃ！！”

家康
「……学園バトル大会？」

卑弥呼
“ルールは簡単じゃ！　時間内にこれより配布する紙に書いておる人物……ターゲットを撃退すれば景品を差し上げる！　しかし、ターゲットが時間内まで生き残ればターゲットに景品を授けるとしよう！”

愛紗
「な、何ですかそのメチャクチャなルールは！？」

卑弥呼
“気にするでない！　それでは紙を配布としよう！　頑張るのじゃ！！”

そして放送が途切れると空から紙が降ってきた。

家康
「お、これが例の紙か」

愛紗
「一体どのような事が……」

家康達は紙を取り、内容を確認する。

【学園バトル大会開幕！】

・心得

一、制限時間内にターゲットを気絶、又は降参させれば撃退と認める。

一、武器の制限は問わない。

一、人数制限も問わない。（ターゲットも協力アリとする）

一、制限時間はチャイムより三時間とする。

一、ターゲットは学園の外に出る事を禁ずる。

一、景品は各々によって変わる。詳しくはターゲット欄を拝見するべし。

～ターゲット（写真付き）～

・奥州筆頭、伊達　政宗

傲岸不遜かつ大胆不敵で、自らの信じる生き様「粋」を貫く独眼竜。
刀を六本使う六爪流使い。

強さに関しては新生ＢＡＳＡＲＡ大会で優勝するほどの実力者。
また、ツッコミのセンスも高い。

景品……三泊四日、温泉旅行券。

・剛毅木訥、楽　凪

自らの武を高める為に身体中に傷を負った乙女。
ターゲット内の実力では低いものの、うち秘めた力により、ひっくり返す事も……
趣味は料理や人形集めなどの乙女らしい性格を持つ。

景品……女性に優しいマッサージ店、年間パスポート。

・東照権現、徳川　家康

“絆”の力を根源とする人情家。
また、拳一つで数々の強敵を打ちのめしてきた武士。
彼の氣は温かく、受けた者の心を癒すという噂もある。
鈍感。

景品……レストラン・蜀卓の食事券、数百万相当。

・天衣無縫、長曾我部　元親

数々の強敵にも自分の闘いを魅せる風雲児。
彼が扱う碇槍は伸縮自在で、自分のペースに持っていく。

おおらかで面倒見がよく、頼りになる兄貴分として部下より慕われている。
手に負えない鈍感。

景品……カップルで行くテーマパーク、無料チケット。

・天覇絶槍、真田　幸村

勇猛果敢な若き虎。
彼の二槍は唯一無二の槍裁きである。
恋愛には全く免疫がない為、女性の恋話で吐血する。
甘党。

景品……デザート食べ放題券。

・暗中飛躍、島　左近

この秋に学園の仲間となった転校生。
実力は未知数だが、信玄曰く“幸村と紙一重”
また、奇策を用いるそのスタイルは闘う者を困惑させる。

景品……“天下統一”一日無料券、三ヶ月分

・君子殉凶、石田　三成

主君である秀吉を神の如く崇拝する“豊臣の左腕”
彼の刀に斬られた者は二度と消えないと言われている。

とある事情により、家康を狂気的な殺意と憎悪を抱いている。
あだ名は“みっちゃん”

景品……電化製品一式（テレビ、エアコン、洗濯機、炊飯器、パソコン）

・無双武神、呂　恋

デタラメ尚且つ、相手の急所を確実に斬撃してくる“飛将軍”
普段はボケーっとしていて何を考えているか分からない。
実力は文字通り武神並に強いが、食べ物に弱い。

景品……ペットに囲まれる動物園、無料チケット（三ヶ月）

・絢麗豪壮、前田　慶次

祭と喧嘩が好きな傾奇者。
超刀を豪快かつトリッキーに扱い多彩な攻撃を繰り出す。
人懐っこい性格で困った人がいると見逃せない。

景品……お酒、一年分。

・裂界武帝、豊臣　秀吉

威風堂々とした筋骨隆々の覇王。
憎き信長を倒す為、日々力を蓄えている。
素手で敵を掴んで攻撃し、体術を駆使した様々な技を使う。

ねねに頭が上がらない。

景品……現金（数百万相当）

・征天魔王、織田　信長

第六天魔王を自称する学園長。
傲岸不遜・残忍非道な振る舞いが目立つが、子供は好き。
実力は言うまでもなく、最狂クラス。

景品……望む物（可能な限り）

～終了～

家康
「ワシが乗ってるのか……これはまた大変なことになるな」

桃香
「だ、大丈夫？」

家康
「あぁ、少し手を焼くかもしれんが、何とかなるだろう。それよりも……」

桃香
「ん？」

家康
「愛紗の姿が見えんのだが……」

先ほどまで一緒にいた愛紗の姿が見当たらない。

桃香
「え、えっと……元親君の景品を見た瞬間、消えちゃった」

家康
「……元親、頑張れ」

家康はまだ見ぬ元親に敬礼した。
すると、突然にチャイムが響いた。

家康
「始まったか……桃香、此処にいては危ない。何処か安全な場所に向かってくれ」

桃香
「うん、わかった」

桃香はその場から離れ、残った家康は手甲をしっかりと固める。

家康

「さて……久々に暴れるとするか！！！」

学園バトル大会……開幕！！

第七十八話、宴再び！（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋バラ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、今回から始まる学園バトル大会だけど……」

政宗
「ま、俺は気にしてないぜ。つえー奴と闘えるのであればＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍだ」

華琳
「そうなの……まぁどうなるかは楽しみにしとくとするわ」

政宗
「ＯＫ」

華琳
「さて、今回も質問コーナーに移るわ。最初は白黒さんね」

“織田信長に質問です。もし、一つ他作品の技が覚えられたら、何の技を覚えたいですか?”

“華琳に質問です。政宗以外で自分の物にしたい男性は誰ですか?”

華琳
「政宗以外なら小十郎、それと長曾我部もいいわね」

政宗
「小十郎はわかるが……なんでアイツも何だ?」

華琳
「彼は使い方で十分な人材になるわ」

政宗
「Ｈｕｍ～……そんなもんか」

華琳
「それと校長の返答はこれよ」

～返答～

信長
「……興味なし」

～終了～

華琳
「ま、アレ以上人間離れされても困るけどね」

政宗
「Ｃｅｒｔａｉｎｌｙ」

華琳
「それじゃ、次は月光閃火さんね」

“斗詩の嬢ちゃんに質問…官兵衛の旦那とのハプニングで胸を揉まれて、正直言って満更でもなかった？というか…官兵衛の旦那に惚れた？”

華琳
「返答はこれよ」

～返答～

斗詩
「えぇ～っと……ひ、秘密です／／／」

～終了～

華琳
「黒ね」

政宗
「黒だな」

華琳
「わかりやすい反応なのよね」

政宗
「全くだ。そんじゃ、次に行くか。三国同盟さんからの質問」

“官兵衛さんは鉄球をつけて日頃生活してますが、それで勉強などがしっかりできるんですか？”

政宗
「言われてみれば毎日付けてるな、アレ」

華琳
「実際どうなのかしら？」

～返答～

官兵衛
「大丈夫だ。これは椅子代わりとして活用してる」

～終了～

華琳
「……馬鹿も使いようね」

政宗
「精神が鉄人みたいな奴だからな」

華琳
「あ、それと、蒼　龍一さんの差し入れなんだけど、既に持っていたらしいわ。何でも同じ不運の持つ人の話は泣けるみたい」

政宗
「ま、ドンマイとしか言えねえな」

華琳
「まぁね。それでは、次に紅玉さんの質問ね」

“半兵衛は三成に対して結構親バカだということをよく聞きますが、実際どうですか？（可愛がってるのは事実だろうけど）”

華琳
「石田自身は神の如く心酔してるけど、向こうはどうなのかしら？」

～返答～

半兵衛
「どのくらいと言われたらわからないけど、人並み以上には接しているよ」

～終了～

政宗
「つまり親馬鹿はミ認めんだな」

華琳
「まぁそれほどしないとあそこまで心酔しないでしょうね」

政宗
「言えてるな。そんじゃあＬａｓｔの質問だ。黒龍さんより」

“１．官兵衛はその不幸な体質からマダオと言う称号を与えますが、どうですか？”

“２．政宗に質問。とりあえず、一番華琳にして欲しくない事はなんですか？”

“３．三成に質問。秀吉に勝負を挑まれたらどうしますか？”

政宗
「……とりあえず、勝手に家に入ってくる事だ」

華琳
「あら、勝手じゃないわよ。ちゃんと玄関から入ってきてるじゃない」

政宗
「玄関から堂々と不法侵入するなって言ってんだよ！！」

華琳
「難しいわね」

政宗
「何処が！？」

華琳
「ま、前向きに検討するわ。それと返答はこれよ」

～返答～

官兵衛
「嬉しくないわ！！！」

三成
「……自害する」

～終了～

華琳
「それと差し入れはしっかり渡したわよ。この後の展開に期待しなさい」

華琳
「さて、今回はこれまでよ」

政宗
「次回は？」

華琳
「宴の様子を見るわ。それと次回のコバラジはＭＣを変更するから気をつけなさい」

政宗
「ＯＫ！」

華琳
「それじゃ、また会いましょう」

～差し入れ直後～

三成
「イエヤスゥウゥウ！！！！！」

家康
「ウオッ？！　どうした三成！」

三成
「貴様……秀吉様を侮辱するとはいい度胸だな！！」

家康
「……何の事だ？」

三成
「黙れ！　そして死ね！！！」

家康
「危なッ！？」

三成
「避けるなぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！」

家康
「一体何の事なんだ！！！？」

第七十九話、幕開けの序章

～あらすじ～

学園バトル……開幕！！

～理事長室～

貂蟬
「あら、こっちでも闘いが始まったわん」

卑弥呼
「うむ、よい闘いが始まりそうじゃの！」

此処は特定の人物しか入れない理事長室。
そこでは、現理事長の卑弥呼と貂蟬が学園内のモニターを拝見していた。

貂蟬
「それにしても、卑弥呼も面白い提案するわねん♪」

卑弥呼
「儂は己の武を純粋に披露する場を提供しまで。この闘いを盛り上げるのは武を志す武士ぞ！」

貂蝉
「とか言っちゃって、本当は男達の息切れ姿が見たかっただけじゃないの～？」

卑弥呼
「ち、違うに決まっておろうが、この阿呆が！／／／」

貂蝉
「むふふ……どうかしらねん」

そして再びモニターに目をやる貂蝉。

そこには様々な出会いが写っていた……

～１－Ａ～

１－Ａのクラスにも学園バトル大会の紙が配られ、中身を確認した政宗。
そこには自分の名前が載っていた。

政宗
「……俺がｔａｒｇｅｔ？　面白いじゃねぇーか」

政宗は特に驚きも見せず、逆にその状況を楽しんでいるようにも見

える。

孟徳
「ふっ……華琳の言った通りの男だな」

子桓
「……」

そんな政宗と対峙するは華琳の肉親、孟徳と子桓。

政宗
「俺は温い闘いは好きじゃねぇ……何ならテメェらが相手になるか？」

孟徳
「ふっふっふ……いい目をしている。華琳が欲しがるのもわかる」

子桓
「父上。この者は私が相手をします」

そう言って子桓は両手に剣を持ち、政宗の前に立ちはだかる。

政宗
「Ａｈ？　オメェが相手か？」

子桓
「自惚れるな小僧。貴様ごとき私で十分だ」

政宗
「随分と自信があんだな。嫌いじゃねぇぜ、そういうのも。だが・・・悪いが相手は俺じゃねぇ」

子桓
「・・・・・何？」

政宗の言葉を理解できない子桓。

その時・・・・・

小十郎
「穿月ッ！！」

子桓
「ッ！？」

小十郎の凄まじい突きが子桓に迫ってきた。
その突きを間一髪で避ける。

小十郎
「テメェじゃ政宗様の相手が務まらねぇ！　俺が相手をしてやる！！」

子桓
「……この野蛮人が」

そう言って子桓は小十郎に刃を向ける。

子桓
「貴様に使う時間はない。早めに終わらせて貰うぞ」

小十郎
「やってみろ……出来るならな！！」

そして小十郎は再び、子桓と刃を交える。

孟徳
「これで2対2か……よかろう、貴様はわしが相手をしてやろう」

孟徳は剣を構え、自らの覇気を政宗にぶつける。

政宗
「Ｈａ！　面白くなってきたじゃねえか！」

それに対し、政宗は六爪流で構え、堂々と立ち向かう。

孟徳
「さぁ……かかってくるがよい！」

政宗
「ＯＫ！　派手なｐａｒｔｙにしようぜ！！」

“奥州双竜”
伊達政宗・片倉小十郎

ｖｓ

“曹魏不破”
曹孟徳・曹子桓

決戦！！

～屋上～

幸村
「烈火ァァァアアア！！！」

客
「「「「うぎゃぁあぁぁあああぁ！？！？！？！？！？！？！」」」」

此処、屋上では幸村とそれを狙いにきた客達が交戦状態でいた。

幸村
「オゥラオゥラオラァァァア！！！　この二槍を恐れぬ者から来るがよい！！」

客１
「ダ、ダメだ……勝てっこない！」

客２
「やっぱこの学園は化け物揃いだ！！」

客３
「に、逃げろーーー！！」

圧倒的武力を感じた客達はその場から立ち去っていき、最終的に幸村１人となってしまった。

幸村
「なんと情けなし！　日本男児たるもの、敵に背を向けるは死も当然！　それがわからぬというのか！！」

その逃げる姿に地面を叩きながら情けなく思う幸村。

幸村
「ともかく、この大会が終わるまでは油断は出来ぬ。それまでは‥‥腕立て５０００回でござる！！」

どの思考からそんな流れとなるのかわからないがすぐさま腕立てを始めてしまった。

その時‥‥‥

？？？
「あれほどの相手をして腕立てをするとは‥‥‥大したものだ」

幸村
「フン！　フン！　フン‥‥‥む、貴殿は？」

背後から白髪の男性が話しかけてきた。
幸村は一旦腕立てを止め、立ち上がり、男性の目を見る。

文台
「すまない、お前の様子を伺っていた。俺は孫文台というものだ」

幸村
「某は真田幸村と申す！　‥‥‥ん？　孫？」

文台
「お前のクラスにいる蓮華の父だ」

幸村
「なッ？！　れれれれ、蓮華殿の父上でござるか！？」

文台の正体を知った幸村は驚愕する。

文台
「お前の話は娘より聞いている。自らの武を磨く為、日々精進してるようじゃないか」

幸村
「そ、某はまだまだ未熟者故、日々の積み重ねで補っているだけでござる」

文台
「はっはっは！　それが出来るから凄いんじゃないか。もう少し自分に自信を持て」

幸村
「励ましの言葉、感謝します」

何処か信玄と同じ雰囲気を出す文台に素直に感謝する幸村。

文台
「さて……無駄話は此処までにするか」

幸村
「……この気迫、出来るでござる」

そう言って文台は腰に差していた剣を手に持ち、幸村に向けた。
幸村もまた、文台の気迫を感じ取り、二槍を構える。

文台
「俺はお前との決闘を楽しみしていた……だから、失望だけはさせるなよ？」

幸村
「おぅ！　この幸村、誰であろうとも全身全霊をもってお相手致す！！！」

文台
「気力はよし……では実力はどうかな？」

幸村
「その目でしかと見せようぞ！！　ウオォォォォォオオオ！！！！」

“天覇絶槍”
真田幸村

ＶＳ

“江東紅虎”
孫文台

決戦！！

第七十九話、幕開けの序章（後書き）

月
「ゆ、月と！」

三成
「……」

月
「み、みっちゃん、自己紹介（汗）」

三成
「……三成の」

月
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！」

月
「こ、今回は華琳さんと政宗さんの代わりでＭＣを務めさせて頂きます！」

三成
「……」

月
「そ、それでは時間もないので質問コーナーに移りたいと思います！」

三成
「……最初は白銀の戦士だ」

月
「み、みっちゃん、さん付け！」

“官兵衛は最近運が良かった事ってありますか？あるならそれは何ですか？”

三成
「……どーでもいい」

月
「へ、返答は此方です！！」

～返答～

官兵衛
「５ヶ月前に十円を拾ったぞ！」

～終了～

三成
「救えん馬鹿だな」

月
「可哀想ですね……次は三国同盟さんです」

“慶次に質問。今、恋を応援したいカップルとかいますか？”

月
「そ、それでは返答です」

～返答～

慶次
「最近は三成と月の様子が気になるねぇ。頑張って貰いたいよ！」

～終了～

月
「へぅ……／／／」

三成
「何故私の名前が出てくる？」

月
「わ、私にもわかりません……／／／」

三成
「……まぁいい。次は紅玉の質問だ」

“三成は秀吉や半兵衛、ねね以外にこいつはいないとダメ！という人はいますか？”

三成
「刑部はいなければなるまい……それ以外は必要ない！」

月
「へぅ……みっちゃん」

三成
「うっ……」

月
「……（涙目）」

三成
「それと……月も必要だ……」

月
「ッ！！　みっちゃん……ありがとう」

三成
「ふん！　次だ！」

月
「はい♪　次はドラゴンノーツさんの質問です」

“1、三成に質問。秀吉か半兵衛、どちらを護衛したい？”

“2、政宗に質問。実はがんばレイセンで上杉謙信（戦国ランス）となかなか良い雰囲気になっているようですがそこはどう思います？”

“3、家康に質問。忠勝を強化したいのならナインボール・セラフ、ゴッドエンペラーのどっちがいいですか？”

三成
「そんなもの！　二人を守らねばいかんに決まっているだろ！！」

月
「えと……大丈夫なの？」

三成
「当り前だ！！」

月
「わ、わかった。それと返答は此方です」

～返答～

政宗
「まぁあれほどじゃないが、こっちの謙信とは酒を飲むぜ」

家康
「う～ん……どちらかというのならゴットエンペラーだな。なんか新しい発見が出来そうだし」

～終了～

三成
「それでは次だ」

月
「えと……黒龍さんの質問です」

“三成に質問。なんでもあなたは家康とＢＬの噂がありますが、本当ですか？（黒笑）”

“政宗に質問。実は政宗×幸村と言う本を見つけました。やっぱあなたはＢＬですか？あと、証明のためにこのＢＬ本贈っておきます。（黒笑）”

三成
「そんなのがあってたまるか！！！」

月

「そ、そうです！　そんな事があってはなりません！」

三成

「……珍しく反論をするのだな」

月

「ふぇ？！　え、えと……／／／」

三成

「まぁいい。それと、返答は此方だ」

〜返答〜

政宗

「そんなわけあるかぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！　つーか気持ち悪いもん見せんじゃねぇえぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

〜終了〜

月

「やはり同じ反応でしたか……そ、それじゃあ最後の質問です。黒神さんの質問です」

“貧乳共よぉぉぉぉぉ！！あのチャイナ娘（神楽）は2年後には胸に脂肪を溜め込んでまがい物の姿になっているぞォォォ！！コレは

我等貧乳に対する侮辱なり！！よって、巨乳に対する憎しみをあのチャイナ娘（神楽）にぶつけて天誅をォォォォォォ！！！！！”

月
「……とても強い感情があるんですね（汗）」

三成
「たがが、胸ごときで騒がしい奴だ」

月
（……つまり、みっちゃんは小さい胸でも大丈夫ってことかな／／）

三成
「まぁいい。これが返答だ」

～返答～

桂花
「その感情を受け取ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

貧乳党
「「「「巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！　巨乳に死を！！」」」」

～終了～

三成
「……くだらん」

月
「え、えと、みっちゃん……」

三成
「どうした月？」

月
「黒龍さんから差し入れが届いているんだけど」

そう言って家康人形と三成人形を手渡す。

三成
「何故、私が家康の人形を持たねばならぬ！！」

月
「け、けど、差し入れだし……」

そんな感じで月が宥めていると、三成は三成人形のボタンを押す。

すると……

三成人形
『秀吉様はウ〇コゴリラだ！！』

家康人形
『その通りだ三成！！』

三成
「……」

月
「……え？　みっちゃん？」

突如人形から声が発せられ、秀吉を侮辱した。

三成
「そんな……この私が……秀吉様の侮辱を……ぬわぁぁあぁぁぁぁぁぁっぁあ！！！！！！！！」

その瞬間に、三成は尋常ではない速さでこの場を離れてしまった。

月

「みっちゃん!?　……えぇーっと、とりあえず、黒龍さんは作者からの伝言で“自身、及びキャラでの質問を三回禁止。差し入れも同じく三回禁止”ということです（汗）」

月

「そ、それではまた次回です！」

第八十話、序盤の出会い

～あらすじ～

政宗、幸村……決戦！

～廊下～

元親
「ぜぇ……ぜぇ……」

学園バトル大会が開幕となって数分経過した頃。
息切れをしながら武器を構える元親。
彼は幾度の強敵と闘ってきた猛者。

そんな彼を苦しませる相手とは……

愛紗
「チケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケットチケット……」

蓮華
「フフ……フフフフフ」

月
「……」

既に人の枠を越えていた。

元親
（何だコイツら……強さの前に気迫がスゲェぜ）

そんな彼女達に少し引く元親。

蓮華
「モトチカ……アナタが持ってルチケットを私にワタシナサイ」

月
「何言っているンデスか？　チケットは私とミッチャンのモノですよ」

愛紗
「夢は寝てから言え。チケットは我が頂く」

蓮華
「……アァン？」

月
「ヤリマスか？」

愛紗
「構いませんよ」

チケットを巡り、いつの間にか仲間割れが起きている愛紗達。

元親
（……仲間割れか？　なら、今しかねぇ！）

その光景を見て、好機と読んだ元親はすぐさま行動に移す。

元親
「四縛！」

三人
「「「ッ？！」」」

まずは四縛で愛紗達の身動きを封じる。
次に自分の得物を回し始め、氣を充満させる。

元親
「悪いな嬢ちゃん達……俺も此処で負けるわけにはいかねぇんだ
！！」

そして……

元親
「撃零！！」

振り回していた得物を愛紗達にぶつける。
その瞬間、愛紗達から爆発が発生し、辺りは煙に纏っていた。

元親
「……はぁ～、危なかったぜ」

事が終わり、地べたに座り込み元親。
どうやら、相当追い込まれていたようだ。

元親
「ま、とりあえずは安心だな。さて、俺も……」

？？？
「何がアンシンなんですか？」

元親
「ッ？！　んだと！？」

元親は先ほど、爆発が起きた場所に目を移す。
しかし煙がある為か、はっきりと辺りを確認出来なかった。
やがて、煙がなくなり、視界が良好になると……

蓮華
「ヌルイ、ヌルスギルわ」

愛紗
「この程度で倒そうなどとは……呆れて何もいえません」

月
「ちょうど縄がほどけて、楽にナリマシタ」

元親
「なん……だと……？！」

そこには、傷一つ負っていない愛紗達が堂々と立っていた。

元親
「アンタら……人間か？」

愛紗
「少なからずは」

蓮華
「これも幸村をオモウ力なり」

月
「愛の力は無限大です」

元親
「愛の力で人間辞めれたら世話ねぇだろ」

全くもってその通りである。

元親
（だが、こっちが不利な事には変わりねぇか……どうすっかな）

この圧倒的な不利な状況に打開策を考える元親。
しかし、相手は人にして人にあらず者。
どのように考えようとも全て覆されると予知する。

元親、絶体絶命！

そこへ……

？？？
「おや、こんなところにいたのかい？」

元親
「アン？　……何だ萃香か」

萃香
「オイ～ッス」

先日の出会いから仲良くなった萃香が現れた。

萃香
「何やら困っているように見えるけど……どったの？」

元親
「あぁ、今目の前にいる奴らをどうするか考えてるところだ」

萃香
「目の前？」

元親の言葉で前を見る萃香。

愛紗
「……ハヤク、チケット、ワタセ」

蓮華
「フフフフフフフ……」

月
「ミッチャン……モウスグダヨ」

萃香

「……此処は地獄かい？」

元親
「あながち間違いじゃねぇな」

目の前の光景に地獄にいた鬼すら地獄と感じるほど、醜いものとなっていた。

萃香
「……ま、これも何かの縁。手伝うよ」

元親
「アァン？　こっちに協力しても得はねぇぜ？」

萃香
「いいの、いいの。こっちの方が楽しめるし」

元親
「……ま、アンタの好きにしな」

萃香
「んじゃ、好きにさせて貰うよ～」

“鬼神夜行”
長曾我部　元親
伊吹　萃香

ｖｓ

“狂愛愚雄”
関　愛紗
孫　蓮華
董　月

狂幕！

～体育館～

三成
「斬滅！！」

客
「「「「うぎゃぁあああ？！！！！？？！」」」」

体育館で次々と人を倒していく三成。
その周りには既に気絶している人達も数多くいる。

三成
「貴様らなどに興味はない！　さっさと消えろ！！」

客１
「うるせー！　アンタがなくてもこっちにあるんだよ！」

客2
「少しでも家族の為に動かないと、後が怖いんだよ！」

客3
「アンタにわかるか？　いつもいつも家族の為に頑張っているのに……家族は素っ気ない態度で俺を邪魔者扱いをするこの儚さが！！」

客4
「チクショウ！　人生とは残酷だ！」

そう言って泣き始める客達。
どうやら、全員家族持ちのようだ。

三成
「そんな戯言に付き合っている時間などない！　私は一刻も早く秀吉様の元へ急がねばならんのだ！！」

客1
「なら俺達を倒してから行きな！」

客2
「今の俺達は怖いものなど……あんまりない！」

そして客達は一斉に襲い掛かる。

三成
「いいだろう……ならば二度と立てなくなるまで斬り刻んで」
???
「その必要はないぞ、三成」
三成
「ッ!?」
三成が客達に斬りかかろうとした瞬間、背後から声が聞こえた。
刹那……
客3
「う、うわぁぁぁああ?!」
客4
「あ……足場が腐ってる!?」
突如として、客達の足場が腐り始め、身動きが取れなくなってしまった。
三成
「……刑部か」

大谷
「ヒヒヒ！　やはり無事であったか」

三成は後ろを振り向き、大谷に話しかける。

さらに……

清正
「三成、無事か！？」

正則
「勝手にくたばってたら俺がぶっ飛ばす！！」

清正と正則が駆けつけ、三成と合流する。

三成
「……何故、貴様らが此処にいる？」

清正
「秀吉様がお前を守れと言われたんだよ」

正則
「有り難く思えよ、頭でっかち！」

三成
「フン！　手助けなど不要だ」

大谷
「そう言うな三成よ。これもギの為よ」

体育館の人々は既に気絶していた為、少しながら休息の時間が取れたようだ。

しかし、そこへ……

???
「アァー！　写真の人だぞ！」

入り口から5才くらいになる子供が現れる。

三成
「何だ貴様は？」

???
「オラ、貴様って名前じゃないぞ。しんのすけって名前だぞ！」

しんのすけ、参上！

三成
「貴様の名前など聞いていない！」

正則
「子供相手に怒鳴るなんて……情けねぇな」

しんのすけ
「あ、何かバカそうなおじちゃん」

正則
「んだとこの餓鬼!!」

清正
「正則、お前も情けないぞ」

正則
「……」

清正
「まぁいい、ところで俺らに何か用か？」

しんのすけ
「うん。この写真のお兄さんを倒せば何かくれるって言ってたぞ」

大谷
「……では、主は我らを含めて倒すとでも？　しかも、たった一人で？」

しんのすけ
「一人じゃないぞ！」

そう言ってしんのすけはガードらしきものを手に取り……

しんのすけ
「スゲーナスゴイデス！！」

と唱えた。
すると、突如そのガードが光始める。
そして光が収まると……

アクション仮面
「アクション仮面、参上！」

カンタムロボ
「カンタムロボ、参上！」

ぶりぶりざえもん
「ぶりぶりざえもん……参上」

しんのすけの愉快な仲間達が現れていた。

正則
「き、清正！　突然人が現れたぞ！？」

清正

「オイオイ……此処は仮装パーティーか何かか？」

大谷
「ヒヒヒ……奇怪な連中よ」

三成
「私の邪魔をする者は……誰であろうと斬滅するのみだ！！」

しんのすけ
「よーし！　みんなで頑張るぞ！」

アクション仮面
「任せてくれ、しんのすけ君！」

カンタムロボ
「いつものように頑張るとしよう！！」

ぶりぶりざえもん
「しんのすけ……救い料百億万円、ローン可だ」

“主君神愛”
石田　三成
大谷　義継
加藤　清正
福島　正則

ｖｓ

“愉快痛快”
野原　しんのすけ
アクション仮面
カンタムロボ
ぶりぶりざえもん

騒幕！！

第八十話、序盤の出会い　（後書き）

華琳
「今回は勝手ながらコバラジを休ませて頂きます。誠にすいません」

政宗
「次回は必ず載せますのでよろしくお願い申し上げます」

第八十一話、乙女の戦場（前書き）

華琳
「最近いろんな質問を貰えて有難いのだけれど、基本的にこの小説の質問でお願いしたいの。よろしくお願いするわ」

第八十一話、乙女の戦場

～あらすじ～

三成、元親、決戦！

～剣道場～

凪
「ハァア！！」

客達
「「「「ウギャァァアアァア！？！？！！！？」」」」

ターゲットの1人である凪は剣道場にて、自分に襲い掛かった客達を薙ぎ倒していた。

凪
「はぁ……はぁ……」

しかしながら、客達の多さに手こずっているようだ。

凪
（クソ、一人一人ならば楽なのだが……数が多すぎる）

客1
「オイ！　アイツの動きが鈍くなったぞ！」

客2
「奴とて人の子！　このままいけば勝利が見える！」

凪
「クッ……調子に乗るな！！　猛虎蹴撃！！」

客達
「「「「ウボァァァアアア！！！？！！？！？？！」」」」

そう言って氣弾を飛ばす凪。

凪
「はぁ……はぁ……くそっ」

しかし、氣弾の使い過ぎによって足に力が入らず、膝がついてしまった。

客1
「好機なり！　者ども、かかれぇぇぇ！！！」

客達
「「「「「ヒャッハーー！！！」」」」」

それを好機と見た客達は一斉に凪に襲い掛かる。

凪
「クッ……」

避けようにも体の自由がきかない凪はそのまま目を瞑ってしまう。

その時……

焔耶
「陽岩割り！！」

客達
「「「「「ぐぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？！？！？！？！」」」」」

凪
「ッ！　貴方は？！」

焔耶が陽岩割りをかましながら凪の前に姿を現す。

焔耶
「どうした凪？　貴様はその程度の人間か？」

凪
「……どういう事ですか？」

焔耶
「そのくらいでお館の弟子と名乗れては、お館にまで迷惑をかけてしまうぞ」

凪
「ッ！　……それは困りますね。師匠の名を汚すわけにはいきません」

そして凪は先ほどの疲れなど吹き飛ばしたかのように元気よく立ち上がる。

焔耶
「ふっ……その顔つきなら、まだいけそうだな」

凪
「当たり前ですよ」

客1
「ヤ、ヤバい……これじゃ、こっちが完全に不利だ」

客2
「どうする……」

元気になった凪と助っ人の焔耶の登場により、慌て始める客達。

しかし、その状況に……

???

「ならば！　この二人はアタシが引き受けようじゃないか！！」

堂々と闘いを挑む人物が現れた。

客1
「あ、貴方は……」

客2
「もしや……」

客達
「「「「伝説の少女・A！！？」」」」

少女・A
「ふっふっふ……」

焔耶
「……いや、誰？」

客1

「貴様、知らないのか?!　この少女・A様を!」

凪
「私も知りません」

客2
「貴様もか!　この方は別名“萌えを極めし者”と謳われた伝説のヲタクなのだ!」

凪
「……つまり、どうしようもないダメ人間と?」

客2
「なんたる無礼……どうやら、命が惜しくないようだな!」

少女・A
「ま、本当の事だからね〜」

周りは少女・Aの侮辱で激怒しているが、少女・A自身は特に気にしていないようだ。

少女・A
「さて、お遊びはここまでにして……どっちから相手する?」

焔耶
「どっちからだと?　やれやれ、私も甘く見られたものだ……」

そう言って焔耶は自分の得物を手に取り……

焔耶
「貴様など、私一人で充分だぁ！！」

少女・Ａに振り下ろした。

少女・Ａ
「……」

その攻撃に対し、静かに見つめる少女・Ａ

そして……

少女・Ａ
「……見えたぁ！！」

何か起点を見つけ、凄まじいいスピードで攻撃を避けると同時に焔耶に向け、拳を繰り出した。

焔耶
「ッ！？　クッ！」

驚くべき速さにかろうじて防御する。

焔耶
（な、何だ今のは……普通の人間が繰り出せる技ではないぞ）

凪
「え、焔耶!?」

焔耶
「どうした凪？」

凪
「そ、その頭は……」

焔耶
「頭？」

凪の指摘で頭を触る焔耶。

焔耶
「ん？　何か柔らかいな……それに毛みたいなものがついてるのか？」

凪
「それは……ネコミミです」

焔耶
「……はぁ？！」

何処からともなく現れたネコミミが焔耶の頭に装着されていた。

焔耶
「どういう事だ！？　いつの間にこんなのが……ハ、まさか！」

焔耶はもしやと思い、少女・Ａに目をやると……

少女・Ａ
「にょほほ～……やはりアタシの目に狂いはなかったね～」

少女・Ａの手にはネコのしっぽと首輪を持っていた。

客１
「流石は少女・Ａ！　俺達には到底出来ない事を簡単にやってのけるぜ！」

客２
「そこにシビれる！　憧れるゥーー！！」

客達
「「「「ヒャッホーイ！！！」」」」

焔耶のネコミミ姿に歓喜する客達。

少女・Ａ
「さぁさぁさぁ！　次はしっぽを着ける？　それとも首輪？　なんなら、ネコミミスクール水着にする？」

焔耶
「ふ、ふざけるな！／／／／　そんなモノを着けるわけないだろ！！／／／／」

凪
「私も手伝います。次に犠牲になるのは私になりますから……／／／／」

こなた
「ならばこのアタシを越えて見せてみよ……このこなたに対してな！！」

“忠義師弟”
楽　凪
魏　焔耶

ＶＳ

“萌的覇者”
泉　こなた

萌幕！！

～裏庭～

恋
「……」

ターゲットの1人、恋は裏庭にて……

宗茂
「貴殿に恨みはありませんが……我が君の為、此処は倒させて頂きます」

宗茂と刃を交えていた。

恋
「……強い」

宗茂
「手前、武を磨く以外に取り柄がない男。それ故、生徒に負けるような失態は避けなければいけないのです」

宗茂は手に持っていた得物を恋に目掛ける。

恋
「ッ……」

その攻撃を防ぎ、一旦距離を置く恋。

宗茂
（はぁ～、我が君も嫌な役をやらせるよ。賞品を使って信者を増やそうって魂胆だろうけど……よりにもよって女子生徒と戦わせるなんて）

どうやら宗茂自身はあまり乗り気ではないようだ。

恋
「……次は恋」

次に恋は凄まじい連撃を繰り出す。

しかし……

宗茂

「甘い！」

その連撃を容易く防御する宗茂。

恋
「ッ！」

宗茂
「軌道をわざとずらし、相手の急所をつく……見事な攻撃ですが、手前には通用しません」

宗茂は学園内の教師の中でも強者の部類に入る人物。
そう簡単には倒れないのである。

宗茂
「恋殿……どうか降参して頂けぬか？」

恋
「……ヤだ」

宗茂
「……そうですか。ならば仕方ありません。この雷切に倒れてください！」

そして宗茂は恋に得物を振るった。

その時……

島津
「チェストォォォォオオ！！！」

宗茂
「ッ！？　グッ！」

突如、島津が現れて宗茂に一太刀を振るう。

宗茂
「島津殿？！　どうして此処に！？」

島津
「なぁに、オイの武の勘が導いじゃけのぅ。それに……オイの生徒を守るんもオイの仕事か！」

恋
「……1人で、大丈夫」

島津
「それは宗茂どん“1人”の話。オイは武の勘でこの場に訪れただけの話か」

宗茂
「……どういう事ですか？」

島津
「上を見ればわかっと」

島津の言葉で上を見上げる宗茂と恋。

そこには……

忠勝
「！！！！！」

宗茂
「んなッ？！」

恋
「……昨日の」

上空より忠勝が急降下していた。
そしてそのまま豪快に着陸し、戦闘態勢に入る。

宗茂
「き、機械？　いや、この気迫からして1人の武人とお見受けいたす」

島津
「ぶぁっはっは！　よかよか、忠勝どんは相変わらず豪快じゃ！」

忠勝と島津は休日に決闘をするほどのライバル関係である。

島津
「さぁ、オイは忠勝どんと。恋どんは宗茂どんを頼めっか？」

恋
「……ん」

宗茂
「仕方ありません。すいませんが島津殿は頼みます！」

忠勝
「！！！！！」

“双鬼武神”
呂　恋
島津　義弘

ＶＳ

“東西戦神”
本多　忠勝
立花　宗茂

強幕！！

第八十一話、乙女の戦場（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回も始まりましたコバラジです」

政宗
「今回は溜まりに溜まっている質問を返していく。最初は龍の骨さんからだ」

“月に質問だ～。ソウスケは三成と同じ声してるけどどう思う？”

“あっはは～華琳達に質問だよ～零斗君が作ったマイティドリンクはどうかな～？”

華琳
「いや、飲まないから。自分から死にいく事はしないわよ」

政宗
「同じく」

華琳
「それと、月の答えはこれよ」

～返答～

月
「え、えと……素敵だと思います／／／」

～終了～

政宗
「……何で照れてんだ？」

華琳
「察しなさい。じゃあ次にいくわ。白黒さんの質問よ」

“貧乳党の皆さんに質問です。この巨乳だけは、絶対許さんって人は誰ですか？”

“お市に質問です。こんな人のようになりたいって人はいますか？”

華琳
「返答はこれね」

～返答～

桂花
「巨乳の中の巨乳、穏だけは許すまじ！！」

お市
「雪蓮さんみたいに積極的になれば……」

～終了～

政宗
「ｕｇｌｙだな」

華琳
「まぁそんなものでしょう。次にいくわ。紅玉さんの質問ね」

“世紀末雑魚さんに質問です。ＢＡＳＡＲＡ、恋姫、無双、それぞれ一番気に入ってるキャラは誰ですか？”

政宗
「Ａｈ？　珍しく作者の質問だな」

華琳
「ま、規定はないから答えるわ。此処に作者からの手紙が来ているわ」

“ＢＡＳＡＲＡ”
前田　慶次
長曾我部　元親

“無双”
島　左近

“恋姫”
真桜

華琳
「あら、恋姫は真桜がすきなのね。意外だわ」

政宗
「ＢＡＳＡＲＡは二人ともいい！　ってことで選べないらしい」

華琳
「わかったかしら？　次は三国同盟さんの質問よ」

“以前、家康と入れ変わった笑顔三成といつもの三成、どっちがすきですか？”

政宗
「……あの時か。嫌なｍｅｍｏｒｙだな」

華琳
「ふふっ……さぁ返答はどうなのかしら？」

～返答～

月
「え、えと……どっちもみっちゃんなので／／／」

～終了～

華琳
「あら、大胆ね」

政宗
「何がだ？」

華琳
「……次にいくわ」

政宗
「スルー？！」

華琳
「これが最後ね。黒神さんの質問よ」

“政宗と華琳へ。ゲスト杯でスバルとセイバーの剣士としての誇りをかけた大激戦の感想をお願いします。”

“春蘭と星へ。もしゲスト杯に優勝して願いを叶えられるならどんな願いが良いですか？”

華琳
「あの戦い？　どう思うかしら？」

政宗
「自分のｐｒｉｄｅと相手の誇りを掛けた戦いだったな。いいんじゃねぇか？」

華琳
「ふふっ……同意見ね」

政宗
「それと、春蘭達の返答はこれだ」

～返答～

春蘭
「華琳さまといちゃいちゃする！！」

星
「そうですな……この世にある全てのメンマを貰おうではないか」

～終了～

華琳
「……らしいわね」

政宗
「今回は此処までだ。次回は質問コーナーはなし。その代わりに差し入れを皆に渡す予定だな」

華琳
「いろんな差し入れを受け付けるわ。それじゃ、また次回ね」

第八十二話、合縁奇縁

～あらすじ～

乙女の戦場、開幕！

～旧校舎～

恋ＢＡＲＡ学園から離れた場所にある旧校舎。
今は使われておらず、立ち入りは教師の厳守の下、禁止とされている。
しかし、このような学園行事などの場合は特別に立ち入りを許可している。

そんな旧校舎に人影が２つあり……

佐助
「此処なら安全だな」

左近
「ま、そう願いたいですね」

ターゲットの１人、島左近と武田の忍、猿飛佐助である。
２人は戦う事を避け、人混みが少ない旧校舎にて、身を潜めていた。

佐助
「それにしても、アンタも厄介事に巻き込まれたな」

左近
「えぇ。俺自身は強くないんですが……どうしてこうなったのでしょうかね？」

佐助
「さぁ？」

他愛もない話をしながら旧校舎をうろつく。
このまま何事もなく終わって欲しいと思う左近と佐助。

しかし……

？？？
「探したよ、君たち」

2人に待ったを掛ける人物が現れた。

その人物とは……

左近
「何か用ですか……副会長さん？」

半兵衛
「あるよ。特に左近君にね」

生徒会副会長、竹中半兵衛であった。

左近
「副会長さんからの指名ですか？　こんな凡人なんかに？」

半兵衛
「君が凡人というのなら、僕も凡人になってしまうな」

何処か余裕な雰囲気を出す両者。

佐助
「それで、半兵衛先輩は何が目的なんですか？」

そこへ佐助が間に入り、半兵衛の目的を訪ねる。

半兵衛
「僕は君の賞品に興味はない。ただ……君自身に興味を持ってね」

そう言って半兵衛は手に持っていた関節剣を左近に向けた。

左近
「俺……ですか？」

半兵衛
「君からは僕と同じ匂いがするんだ。友の為なら命を惜しまない……そんな匂いがね」

左近
「買い被り過ぎですよ」

半兵衛
「残念だけど、それを決めるのは僕自身だ。だから……手合わせ願えるかな？」

冷静に、なおかつ情熱的に語る半兵衛。

その語りに左近は……

左近
「……まぁ先輩の頼みです。受けて立ちましょう」

半兵衛
「ふふ……感謝するよ」

渋々ながらそれを承諾した。

左近
「ですが、俺は武人じゃありません」

佐助
「つーわけで、俺様も相手してもらうぜ」

そう言って佐助は大手手裏剣を取り出し、戦闘の準備をする。

半兵衛
「安心してくれ。君には充分な相手を準備したさ」

佐助
「……俺様の？」

不敵な発言をする半兵衛。

すると……

？？？
「ドロン！　お久しぶりですね～、佐助の旦那♪」

佐助
「……何でアンタがいんのよ？」

突如何もないところから、ポニーテールの少女が現れた。
その姿を見た佐助は少し疲れた様子であった。

半兵衛
「彼女は君を探していたみたいだから、僕が雇っておいたんだ。きっと左近君と一緒にいると思ってね」

???
「そういう事ですぜ、佐助の旦那」

佐助
「はぁ～……こっちに来たなら一言くらい挨拶してもいいんじゃない？」

???
「そこはサプライズだってばよ♪」

左近
「佐助さん、知り合いですか？」

2人のやりとりを見ていた左近が佐助に質問をする。

佐助
「あぁ、アンタが武田道場を辞めたと同時に入ってきた女の子だよ」

左近

「へぇ、女の人が自らあの道場に志願するとは……珍しいですね」

佐助
「だろ？　しかも、俺様と一緒で忍びを学んでいたから直属の後輩になるわけ」

？？？
「あん時の旦那は厳しかったです～……およよ～」

佐助
「何言ってんの。俺様を一番舐めていたのはお前じゃん」

？？？
「何の事？　にゃは♪」

どうやら、性格の方は佐助を悩ますほどであった。

左近
「ま、これで役者が揃ったみたいですね」

半兵衛
「そういう事になる。悪いけど手加減はしないよ」

佐助
「んじゃ、久々に相手をしてやるよ……名無しの女忍ちゃん」

くのいち
「旦那～、一応名前はくのいちですぜ～」

“暗中飛躍”
島　左近

ｖｓ

“蒼烈瞬躙”
竹中　半兵衛

“蒼天疾駆”
猿飛　佐助

ｖｓ

“洒洒落落”
くのいち

開幕！！

～生徒会室～

秀吉
「……」

ねね

「お前さま、大丈夫かい？」

恋ＢＡＲＡ学園、生徒会室。
そこにはターゲットにして生徒会長の豊臣秀吉とその幼なじみ、ねねの姿が見えていた。
周りには、秀吉に挑んだであろう客達が気絶していた。

秀吉
「このような数、数の内に入らん」

ねね
「も～、昔から無愛想な態度ね」

秀吉
「仕方あるまい」

無愛想な秀吉と心配性なねねね。
互いの性格は違うが、案外お似合いに見えてしまうから不思議だ。

ねね
「ところでお前さま」

秀吉
「何だ？」

ねね

「どうして此処から移動しないんだい？」

先ほどから疑問に思っていたのだろう。
秀吉は来る相手は拒まずに相手をしていた。
そして普段の秀吉なら自分から動き、相手をする性格とねねは知っていた。
しかし、今日の秀吉は部屋から一歩も出ようとはせず、ひたすら来る相手を倒していくだけであった。

秀吉
「……奴を呼んだ。故に此処から動かんのだ」

ねね
「奴？　奴って誰だい？」

秀吉
「それは……」

秀吉が呼んだ相手の名を言おうとした瞬間……

？？？
「待たせたな、秀吉！」

秀吉
「……来たようだな」

先に生徒会室の扉が開いた。
そして部屋に入って来たのは……

慶次
「俺に何かようかい？」

雪蓮
「もう、クタクタ～」

ターゲットの１人、前田慶次と孫雪蓮である。

ねね
「ありゃ、慶次に雪蓮ちゃんじゃないの。一体どうしたんだい？」

慶次
「俺は秀吉に呼ばれて来んだよ」

雪蓮
「私はその付き添いよ」

ねね
「本当かい？　お前さま」

ビックリしたような表情をしながら、秀吉を見るねね。

秀吉
「本当だ。あの時の借りを返す為にな」

そう言って秀吉は指を鳴らし、臨戦態勢を取る。

慶次
「ん？　あん時って……お前まだ引きずってんの？」

秀吉
「引きずっているわけではない。我は自分の負けを許さないだけだ」

雪蓮
「え？　慶次、秀吉と戦った事あるの？」

慶次
「あれは戦いじゃない。俺なりの説教だ」

秀吉
「何であろうと、我は貴様との戦いを要求する。剣を取れ！　慶次！！」

そう言って自分の覇気を存分に出し、慶次に向ける。

慶次

「ハハ！　面白い！　そんじゃあ、もう一回その顔に拳を入れてやるよ！」

対する慶次も肩に担いでいた超刀の鞘を抜き、秀吉に対峙する。

雪蓮
「まぁいいわ。んじゃ、私はねねさんと戦おうかしら」

ねね
「何か余りもの扱いだね！　これは説教してやらないと！」

こちらの女性陣の臨戦態勢を取り、緊迫した時間が訪れた。

“自由奔放”
前田　慶次
孫　雪蓮

ｖｓ

“一蓮托生”
豊臣　秀吉
ねね

縁幕！！

～校長室～

信長
「やはり、来たか……」

ターゲットにして、この学園の長に君臨する織田信長。
信長は目の前にいる相手に対し、驚きもせず、当然のように振舞っていた。

その人物とは……

久秀
「これも何かの縁……そう答えるか」

恋ＢＡＲＡ学園教頭、松永久秀であった。
久秀は臆する様子も見せず、堂々と信長と対峙している。

信長
「……して、目的は？」

久秀
「卿を倒せば望む物をくれると聞いている。違うかね？」

信長

「うつけが……儚い夢としれ」

久秀
「その答えを出すのは私だ……では」

そして久秀は手に持っていた宝刀を信長に向ける。

久秀
「その首を貰うとしよう……第六天魔」

信長
「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ……」

“征天魔王”
織田　信長

ＶＳ

“天我独尊”
松永　久秀

凶幕!!

第八十二話、合縁奇縁（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ今回も始まりましたコバラジです！」

政宗
「しかし、あの校長と教頭の戦いかよ」

華琳
「まぁこれは作者がやりたかった事みたいよ」

政宗
「Ｈｕｍ～……まぁいいか」

華琳
「そうね。それじゃ、今回は質問コーナーはナシの代わりに差入れタイムといくわよ」

～差入れ～

“月、二泊三日、温泉旅行チケット”

月
「え、えと……これでみっちゃんと／／／」

“三成、秀吉人形（ボタンを押すと『三成いつもありがとう。』と言う）”

三成
「有り難き幸せ！！　秀吉様～！！！！」

大谷
（……少し、真田と被るな）

“お市、『鳥人少年ハヤト』のＤＶＤ”

お市
「綺麗な鳥さんね……潰したらどうなるのかしら？」

長政
「お、お市よ……その表現はどうかと思うぞ」

“鶴姫、にゃ〇ぱいのぬいぐるみ”

鶴姫
「うわ～、可愛らしい人形ですね！！」

（作者は何のぬいぐるみかわからなかったです（泣）

“お勧め”

華琳
「それじゃあ、政宗使用券を貰おうかしら」

政宗
「んなもんねぇわ！！」

“全員、鉄十字勲章”

一同
「「「「「ありがとうございます！！！」」」」」

～終了～

華琳
「沢山の差入れ感謝するわ。それじゃあ次回もよろしく頼むわ」

第八十三話、拳の語り合い

～あらすじ～

全ての宴、開幕！

～校庭～

家康
「陽岩割り！！」

学生
「「「「ギャアァァアアア？！！？！？？！」」」」

ターゲットの１人である、徳川家康は賞品目当ての暴徒（学生）を始末していた。

家康
「ふぅ～……わかっていた事だが、少し骨が折れるな」

拳を回しながら疲れを見せる家康。

家康
「さて、みんなは無事だろうか……」

家康は校舎を見つめながらターゲットとなった人らを心配していた。

すると……

???

「あ！　やっと見つけた！！」

家康
「ん？」

背後から女性の声が聞こえてきた。
家康は何気なく後ろを振り向く。

そこには……

家康
「おぉ！　スバルじゃないか。元気か？」

スバル
「はい！　元気いっぱいです！」

昨日に出会った、スバルナカジマが立っていた。

スバル
「ところで、家康さん」

家康
「ん？　どうした？」

スバル
「昨日言われた通りに来てみたんですが……昨日より静かですね。何かあったんですか？」

家康
「あぁ、その事か。実はな……」

そして家康は近くに落ちていた紙を拾い、今の状況を説明した。

スバル
「レストラン……数百万……食べ放題」

説明を聞いたスバルは家康の景品を見ながら目をキラキラさせていた。

家康
「……ワシの景品が気になるのか？」

スバル
「あ！　いえ、そういう……事……です。す、すいません……」

最初は拒否をしようとしたが、嘘がつけない性格な為、最後には謝りながら肯定してしまった。

家康
「謝る必要はない。このような景品なら誰でも欲しいと思ってしまうからな」

スバル
「……あ、あの！」

家康
「ん？」

スバル
「迷惑でなければ……私と戦ってくれないでしょうか？」

家康
「……理由は、景品か？」

突然のスバルのお願いに、家康は冷静に受け止め、質問をする。

スバル
「それもあるんですが……単純に戦いたい気持ちの方が強いです」

家康
「……ハハ、面白い奴だな」

スバルの理由に家康は短く笑い……

家康
「ならば！　その気持ちを裏切らぬ為、この拳に全てを託す！」

拳を高々と上げ、スバルに身構え、対峙した。

スバル
「ッ！　ありがとうございます！」

一礼をし、家康と同じように構えるスバル。

家康
「……」

スバル
「……」

一時の静寂。

スバル
「マッハキャリバー！」

先に動くはスバル。
何かの名を叫ぶと、両足のローラー“マッハキャリバー”が起動し、
一気に距離を縮める。

家康
「ッ！？　クッ！」

スバル
「ヤァァァアア！！」

驚異のスピードに家康はすぐさま防御の構えをする。
その防御にもスバルは動じず、防御もろとも拳を突き刺し、家康を
吹き飛ばした。

スバル
「まだまだァァァアア！！！」

それだけでは終わらせず、吹き飛ばされた家康を追いかけるように
マッハキャリバーを使い、再び拳を繰り出す。

家康
「やるな！　だが、やられてるばかりではないぞ！！」

しかし、家康もただでは終わらなかった。
吹き飛ばされながらも、両足で地面を蹴り、スバルとの距離を大幅に取り、拳に力を入れる。

家康
「はぁぁぁぁ……」

此方に向かってくるスバルを、静かに待ち構える家康。
2人の距離が近付き、互いの間合いに入った。

その瞬間……

家康・スバル
「「ハァア！！」」

互いの拳同士がぶつかり合った。

スバル
「ッ！　うわッ？！」

この競り合いに負けたのはスバル。
その隙を逃さず、もう一度繰り出そうとしたが、先にスバルがその場から離れた。

スバル
「～ッ！　いったぁ～……」

手をぶらつかせながら痛みを表に出すスバル。
対する家康は……

家康
「……ッ」

表情には出してないが手の痺れに一瞬だけ、顔を歪ませた。

家康
「お見事……といったところだな」

スバル
「ふぇ？！　そ、そんな事ないですよ！　それより家康さんの方が凄いです！」

互いに浮かれる様子もなく、謙虚な姿勢をとる。

スバル
「……でも」

家康
「ん？」

スバル
「だからかもしれません。純粋に……勝ちたい気持ちが強くなっているのが」

家康
「……そうか」

今の想いを正直に伝えるスバル。
家康はスバルの気持ちをしっかり聞き入れる。

家康
「その気持ち、ワシとて同じ……ならば、答えは一つ」

スバル
「……はい」

家康の問いをすぐに察知し、両者は拳に力を入れ始める。

家康・スバル
「「はぁぁぁぁ……」」

スバルの体からは蒼き魔力、家康の体からは黄金色の氣が目に見えるくらいになってきていた。

スバル
「いきます！！」

家康
「あぁ！　来るがよい！！」

短い言葉が交差した瞬間、互いに足を強く踏み込む。

そして……

スバル
「ディバイィィィィン、バスタァァァアア！！！」

家康
「天道突きッ！！！」

蒼き魔法と黄金色の氣がぶつかり合った。

家康・スバル

「「うおぉぉぉぉぉおおお！！！」」

互いの誇りをぶつけるように、その威力は壮大なものとなっていた。

家康
「まだだ！！」

そう叫ぶと黄金色の氣がさらに強くなり蒼き魔法を押し返してきた。

スバル
「クッ……！」

徐々に押されるスバル。
それでも、負けじと押し返そうとする。
しかし、勢いに乗った家康の攻撃はそう簡単には押されない。

そして……

家康
「これが……ワシの強さだ！！」

スバル
「ッ？！　キャアァァアアア！！！」

スバルの魔法が完全に押し負け、家康の想いを込めた黄金色の氣に飲まれていった。

スバル
「ハァ……ハァ……」

家康の氣を喰らったスバルは地面に膝をつき、疲労と痛みで息切れをする。

そこへ……

家康
「大丈夫か？」

優しい笑顔でスバルに手を差しのべた。

スバル
「は、はい。よいっしょ……」

その手を掴み、体を起こす。
そして家康の笑顔を返すように満面の笑みを見せた。

スバル
「やっぱり強いんですね。全く歯が立ちませんでした」

家康
「そんな事はないぞ。もう少しでワシも危うかった」

スバル
「でも、負けたら意味がないんですよね」

家康
「……負けを知らぬは己を知らぬ。だからこそ、今をバネにするといい」

スバル
「……バネ、か」

家康
「ハハ、随分と生意気だな。すまない」

スバル
「そんな事ないです！　すっごくタメになりました！」

家康
「そう言ってくれると助かる。……さて、ワシは次の闘いに望むとしよう」

そう言って家康は校舎に向かって歩き出した。

スバル
「あの！　本当にありがとうございました！！」

校舎に向かう家康の背中を見ながら頭を下げる。

家康は振り向かず、手を上げてそれに答えるのであった……

勝者、徳川家康！

～校門前～

春蘭
「秋蘭！　政宗と小十郎は何処にいる！」

秋蘭
「可能性があるのは我らのクラスだ」

１－Ａの買い出しをしていた春蘭と秋蘭。
だが、突如華琳から連絡があり、現在行われている行事を知り、大急ぎで学園に戻ってきた。
ちなみに、華琳は自分のところではなく、政宗と小十郎の場所に向かうように指示をしていた。

春蘭

「クソッ！　何故華琳さまのところに行けないのだ……」

秋蘭
「仕方がない。幸いに華琳さまはターゲットではないからな。それに、季衣と流琉が護衛にあたっているさ。我らは小十郎の援護に向かおう」

？？？
「何処に向かおうというのだ？　バカ娘よ」

春蘭・秋蘭
「「ッ！？」」

突然、前方から声が聞こえ、姉妹はそちらの方へ向く。
そこには、春蘭と同じように片目に眼帯をつけ、表情が無愛想な男性と、ポッチャリとした体格に整った髭が特徴の男性が立っていた。
その男性らを見た春蘭と秋蘭は驚愕する。

春蘭
「お、お父様？！」

秋蘭
「それに父上まで……何故此処に？」

男性らの名は夏侯（かこう）　元譲（げんじょう）、夏侯　妙才（みょうさい）。
孟徳の側近にて、２人の父に当たる。

元譲
「フン、孟徳が此処に来ているのだ。俺らがいてもおかしくないだろ」

春蘭
「えッ！？　孟徳さまもきているんですか！？」

妙才
「正確には子桓の坊主も来てるぜ」

秋蘭
「子桓さまもですか……突然どうされたのですか？」

元譲
「そんなのは孟徳しか知らん。そして俺らの目的は……」

すると、手に持っていた大剣を2人に向けた。

元譲
「貴様らがどれほど強くなったか……それを見定めるだけだ」

妙才
（ま～た、惇兄（とんにぃ）の悪い癖が出たよ。ま、俺も娘の成長を楽しむか）

それに対し、夏侯姉妹は……

春蘭
「うおぉぉぉ！　久々にお父様との稽古ですか！　望むところです！！」

秋蘭
（ふふっ……やはり、血は争えないか。華琳さまには申し訳ないが、私も父上との闘いを楽しもう）

久々の父との闘いに燃えていた……

“次代曹魏”
夏侯　春蘭
夏侯　秋蘭

ｖｓ

“覇道魏武”
夏侯　元譲
夏侯　妙才

開幕！！

第八十三話、拳の語り合い　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さぁ、今回も始まりましたコバラジです」

政宗
「今回はあの魔法少女と家康の闘いか」

華琳
「それに夏侯姉妹の父が登場したわ。相変わらずの雰囲気だったようね」

政宗
「……何か他人とは思えないのは何故だ？」

華琳
「それは禁則事項。触れないで」

政宗

「……OK」

華琳
「それじゃあ質問コーナーにいくわよ。最初はケンさんの質問ね」

“信長は戦国BASARA3の技や六魔を解放する事はありますか？”

“二つ目は3宴にてプレイヤー武将に昇格したキャラ達に質問です。NPCキャラからプレイヤーキャラに昇格した気分はどうですか？”

華琳
「この学園長はBASARA2の設定だけど……どうなるのかしらね？」

政宗
「さぁ？　それと他の奴はこういう答えだ」

～返答～

久秀
「これも人の欲望。私はそれに従おう」

小十郎
「俺は政宗様を守るのみ」

佐助
「まぁぼちぼちって感じ？」

天海
「ンフフフ……これも慈愛の為です」

秀秋
「あわわ……痛くなければ何でもいいよ～」

最上
「これも！　吾輩の！　魅力なり！」

宗茂
（どうせ良いことないんだろな～……）

宗麟
「おぉ！　これもザビー様のおかげです！」

～終了～

華琳
「……半分以上が適当な答えね」

政宗
「もういい、ｎｅｘｔだ。白黒さんの質問」

“宗茂に質問です。貴方は愛馬を持っていますか？もしよかったら

名前を教えて下さい！”

“愛紗に質問です！家康にこれは治してほしいってやつはなんですか？”

華琳
「質問の返答はこれよ」

～返答～

宗茂
「ペットとして竜巻という名の黒馬を飼っております。普段は牧場の人に預けておりますが」

愛紗
「……とりあえず、あの鈍感さを」

～終了～

華琳
「竜巻……確かドイツ語で」

政宗
「Ｔｒｏｍｂｅだな」

華琳
「……ま、いいわ。次はドラゴンノーツさんね」

“政宗に質問。ｍｕｇｅｎでＨＩＧＥ１１ｐ基準大会おかわりで雷神政宗が優勝しました。その感想をどうぞ”

“２：桃香、家康、政宗、華琳、月、三成、幸村、蓮華に質問。無人島に行くなら持っていく物（者）はだれでしょうか？”

政宗
「感想って……そもそも俺じゃねぇしな」

華琳
「雷神政宗になった気持ちで答えればいいのよ」

政宗
「……次回も優勝を目指すか」

華琳
「つまんないわね」

政宗
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！」

華琳
「ふふっ、それじゃ他の人の返答よ」

～返答～

家康
「う～ん、絆かな？」

桃香
「い、家康君で……／／／」

幸村
「我が熱き魂があれば、どんな局面でも乗り越えられる！！」

蓮華
「……幸村？　それとも、無難に水？」

三成
「……興味がない」

月
「え、えと、みっちゃんの世話が出来る道具でお願いします／／／」

～終了～

華琳
「ちなみに私は可愛い部下達よ」

政宗
「俺も自分の舎弟を連れてくな」

華琳
「それじゃ次ね。ＪＥＴ－Ｘさんの質問よ」

“華琳に質問です！もし政宗と幸村が入れ変わっても、政宗になった幸村を自分のモノにしたいと思いますか？モノにしても覇道を掴めますか？”

華琳
「ならば両方を手に入れるわ！！」

政宗
「……Ａｓ　ｅｘｐｅｃｔｅｄだな」

華琳
「そうでなければ覇道を掴めないわ。わかったかしら？」

政宗
「んじゃ、次はｃｈａｒｌｅｙさんの質問だな」

“華琳に質問。私の作品では政宗の従弟の成実が登場しましたが、もしこの作品でも政宗に弟がいたらどうしますか？”

華琳
「まずはどのような人物か見定めるわ。それから使えるかどうか判断するわ」

政宗
「とりあえず、自分のモノにする考えを捨てろ」

華琳
「能ある者は全て手に入れる。それが私の覇道よ」

政宗
「言ってろ。そんじゃ次だ」

華琳
「ふかやんさんの質問ね……これは長すぎるから此処には載せられないけど、質問は答えるわ。一つ目の質問は多節鞭ね。二つ目は……自分の力ではないから拒否をするわ」

政宗
「Ａｈ？　てっきり全部とか言いそうだったが……」

華琳
「自分の力で使えなければ意味がない。それが私なりの考えよ」

政宗
「Ｈｕｍ～……まぁいい。次は白い奇術師さんだな」

“突然ですが黒田官兵衛さんに質問です。枷がついた手でどうやって弁当とか食べてるんですか？”

華琳

「というより、あの枷は何の為に付けてるのかしら？」

政宗
「知らん。とりあえず、返答はこれだ」

～返答～

官兵衛
「基本的にオニギリしか食わんから、今度試してみる。多分ミスると思うがな」

～終了～

華琳
「……らしいわ」

政宗
「……らしいな」

華琳
「まぁいいわ。それじゃ最後にソルバ１３さんの質問よ」

“１，この流れで言うと、やはり、月の父親はあの董卓ですか？
その場合、月にとってどんな父親ですか？”

“三成と面識はありますか?ある場合はお互いにどう思っています?”

華琳
「その返答はこちらね」

~返答~

月
「わ、私の父親は……小さい時に亡くなりました」

三成
「その時に引き取ったのが秀吉様だ。だから、私は面識などない」

~終了~

華琳
「今回は此処までね」

華琳
「次回は政宗と孟徳の戦いを見せるわ。それじゃ、みんなの差し入れと共にお別れよ。さよなら」

～差し入れ～

“桂花、政宗の女体化と華琳がいちゃつくビデオ”

桂花
「ぬわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　殺すなら殺せぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

“華琳の部下、華琳たん人形（浴衣Ｖｅｒ）”

春蘭・桂花
「「ごふぁっ？！？！！！」」

秋蘭
「まぁ……こうなるか」

“政宗、某主人公の解答用紙”

政宗
「……何の文字だ、これ？」

“華琳、猫耳＆ａｍｐ；尻尾＆ａｍｐ；手足セット（オマケで首輪付き）”

華琳
「此処はあえて私が付けるにゃ！！」

政宗
「何で?！　しかも、ノリノリだし！」

明命
（はわ～……可愛いです～／／／）

“恋姫メンバー、家康・三成・政宗・幸村のチビキャラ人形を送ります（取り外し可能のネコミミ付き）”

桃香
「な……何て破壊力なの?！」

月
「へぅ……もう……ダメ」

蓮華
「諦めないで！　クッ……華琳は大丈夫かしら?」

華琳
「……」

蓮華
「た、立ったまま気絶……だと?！　これが覇道なの！」

～終了～

第八十四話、竜のＰｒｉｄｅ

～あらすじ～

家康とスバルの闘い。
勝者は家康となった。

～１－Ａ～

政宗
「ＭＡＧＮＵＭ！！」

孟徳
「甘いわ！」

独眼竜、政宗の刀と覇道の体現者、孟徳の剣がぶつかり合い、火花が散る。

その同じクラスで……

子桓
「……消えろ」

小十郎

「貴様がな！！」

孟徳の血を継ぐ者、子桓と竜の右目、小十郎が相まっていた。

孟徳
「勢いはよし……いや、若さゆえの突撃ともいえるか」

政宗
「Ｈａ！　好きに言ってな！　俺は俺のＳｔｙｌｅを変えるつもりはねぇ！」

孟徳の言葉を受け流す政宗。
その勢いのまま、３本の刀を振り上げるが、孟徳は軽々避ける。

しかし……

政宗
「ＹａａａａａａａＨａａａａａａ！！！」

政宗の猛攻撃は続く。
振り上げた状態からジャンプし、そのまま刀の向きを変え、孟徳目掛け降り下ろす。

孟徳

「ほぅ……面白い」

孟徳はその攻撃を冷静に剣で対処し、一旦距離を置く。

孟徳
「勢いの流れに乗れば勝利の“道”となる……だが、時としてその勢いは自らを滅ぼす“刃”となりえる。貴様はそれを理解しているのか？」

政宗
「さぁな。少なからず、それをテメェが知る必要はねぇ」

堂々たる覇気に全く臆していない政宗。

孟徳
「そうか……ならば、強制的にわからせてやろう」

そう言って孟徳は自らの力を剣に籠める。

そして……

孟徳
「我が覇道に……潰えろ！！」

無数の氷が現れ、政宗を対象に襲いかかる。

政宗
「……」

一方の政宗はその氷を避けようとも、防御しようともせず、それをただ見つめていた。
そして、氷は政宗に直撃した。
その後、反動で政宗の場所からは煙が発生する。

子桓
「……終わったか」

小十郎
「……」

剣を交えていた子桓は孟徳と政宗の勝負を見て、剣を仕舞う。
それに従うように、小十郎も刀を仕舞い、政宗と孟徳を黙って見つめる。

子桓
「父上に挑もうとした心意気は認める。しかし、自分の器を見えていない輩には少し無謀だったかも知れぬな」

小十郎

「……テメェは何もわかってねぇ」

子桓
「……何だと？」

小十郎の一言を子桓は理解出来なかった。

だが、その言葉はすぐに理解出来るようになる。

政宗
「……これがテメェの覇道か？」

孟徳
「……ほぅ」

煙が晴れると政宗は傷を負いながらも、痛がる様子も見せず、立っていた。

政宗
「さっきから聞いていれば自分の覇道やら自分の生き方やら語りやがって……はっきり言ってくだらねぇんだよ」

孟徳
「……」

政宗

「テメェがどんな風に生きようが俺には関係ねぇし、興味もない。
だが、テメェの説教じみた自分の自慢をする奴らは嫌いなんだよ」

政宗は刀を一本だけ残し、それを孟徳に向けた。

政宗
「俺の人生を決めるのは俺だ。他人にガタガタ言われて変える気なんて更々ねぇ。それが俺の……竜としてのＰｒｉｄｅだ」

自分の人生は自分の物。
今まで華琳の誘いを断り続けた理由は此処からわかるだろう。

その言葉を聞いた孟徳は……

孟徳
「……ククッ」

政宗
「Ａｈ？」

孟徳
「アッハッハッハ！！　ハァーッハッハッハ！！」

壮大に笑い出した。

政宗
「……何が可笑しい？」

孟徳
「いや、馬鹿にしてるわけではない。貴様の生き方に感服したのだ」

政宗
「……訳わかんねぇ」

孟徳
「それでも良いぞ。さて……今回はわしの負けだ」

政宗
「……Ｈａ？」

子桓
「父上、それでは部下に……」

孟徳
「構わん。わしの敗北などで下の者が去るようならばいらん。元譲と妙才なら、わしの考えも理解するであろう」

子桓
「……父上がそこまで言うのであれば何も言えまい」

子桓は孟徳の覚悟に負け、素直に従う。

政宗
「なら、もう此処に用はねぇな。小十郎、俺は次のｓｔｅｐに行かせてもらうぜ」

小十郎
「……はっ」

一方の政宗と小十郎と共に教室から退出し、ある場所へと向かっていった。
残された孟徳と子桓は政宗の話をする。

子桓
「自分の生き方を変えぬか……何とも不器用な生き方だな」

孟徳
「子桓、お前はまだわかっておらん。あの男の真意を」

子桓
「何を言おうと私には理解出来ないでしょう」

孟徳
「相変わらずだな……我が子らは」

そう言って孟徳が扉に振り向くと……

華琳

「あら、察しがいいわね。孟徳」

覇道の子、華琳の姿があった。

孟徳
「華琳よ……お主があの男にこだわる理由がわかった。だが、残念な事にあの男の意志は相当なものだ」

華琳
「だからこそ我が物にしたいのよ。私は覇道を貫く者……でしょ？」

孟徳
「ふっ……愚問だったな」

そして華琳は鎌を、孟徳は剣を握りしめ、合い対峙する。

孟徳
「子桓……わかっておるな？」

子桓
「言われずとも」

子桓は離れた場所で2人の様子を伺う。

華琳
「今日こそ貴方を越えるわ……孟徳」

孟徳
「娘にやられるほど、老いてはおらぬぞ。華琳よ」

互いの誇りがぶつかり合う１－Ａ。

その先の結末は、曹一族しか知らない……

～校庭～

孫市
「……此処も違うか」

家康とスバルが対決した校庭に工学部顧問、雑賀孫市が立っていた。
目的は元親の暗さ……ではなく、交渉の為に探していた。

孫市
（あのカラスが簡単にやられるとは思わんが……）

そうは思いながらも、何処かに不安な感情を捨てきれない孫市。

孫市
「……ともかく、探すしかあるまい」
???
「誰を探してるんだい？　さやかちゃん」
孫市
「ッ?!」

孫市は再び、元親の捜索を始めようとした瞬間、背後から何者かが話しかけてきた。

孫市が慌てて振り向くと……

孫市
「……二代目」
孫六
「おっと、今は雑賀孫六って名前だ」

二代目・雑賀孫市、現・雑賀孫六が立っていた。

孫市
「どうして此方に？　今は海外で働いていると聞きましたが……」

孫六
「可愛い愛弟子の成長ぶりを拝見しにきた……とても言っておくか」

孫市
「相変わらずですね、その性格は」

軽いノリで孫市と接する孫六。
どうやら昔からの性格のようだ。

孫六
「ま、ホントは祭でもたのしもうかと思ったけど……気が変わった」

そう言って孫六は剣を装着させた種子島（鉄砲）を孫市に向けた。

孫市
「私からは何も景品は出ませんよ？」

孫六
「どーでもいいんだよ、そんな事。それに言ったろ……可愛い愛弟子の成長ぶりを拝見しにきたってな」

孫市
「ふっ……」

孫六の言葉に一つの笑みがこぼれ、足に隠していた拳銃を取り出す孫市。

孫市
「我らは誇り高き雑賀衆！　戦場にて我らの生き様を轟かせる！！」

孫市が名乗った後、辺りから物音が聞こえてきた。

孫六
「……囲まれたか。ま、いいさ。俺は俺のやり方で勝つからな」

その状況にも臆さない孫六。

孫六
「んじゃ、久々に名乗ってみるか……雑賀孫市見参！！　てかぁ？」

“煙鳥翔華”
雑賀　孫市

ＶＳ

“銃弾無限”

雑賀　孫六

開幕！

第八十四話、竜のＰｒｉｄｅ（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「まずは謝罪を。この度は長い更新が出来ずにいて、申し訳ありません」

政宗
「これからはしっかりと更新していきますのでよろしくお願いします」

華琳
「それじゃ、早速質問コーナーに移るわ。最初はケンさんの質問ね」

“愛紗ちゃんはシャマパイを超えたマズさを誇るパイを作れますか？（黒笑）”

“美羽へ質問だ。原作のように雪蓮を見てビクビクして恐怖しないか？これだけ気になってな。次回も楽しみにしてるぜ”

華琳
「この返答はこれよ」

～返答～

愛紗
「わ、私はあそこまで酷くありません！！」

美羽
「ほえ？　雪蓮は怖くないぞよ？」

～終了～

華琳
「この段階ではまだ怖がってはないみたいね」

政宗
「んじゃいつ、恐怖の存在になるんだ？」

華琳
「そう遠くはないわ。では次よ、龍の骨さんね」

“はい雛里にしつも～ん、ＢＳＡＡ学園の雛里先生をどう思ってますか？二つ目は月と恋に質問！呂布レイをどう思ってますか？”

政宗
「そいつらの返答はこれだ」

～返答～

雛里
「す、少し過激かと思います／／／」

恋
「……？」

音々音
「恋殿以外に興味はないのです！！」

～終了～

政宗
「……Ａｓ　ｅｘｐｅｃｔｅｄ」

華琳
「ま、いいわ。次に三国同盟さんの質問ね」

“官兵衛に質問。連行された後どうなりましたか？まさか、そのまま警察に逮捕……なんてことにはなってないですよね？”

政宗
「Ａｈ～……どうなったんだ？」

華琳
「ま、見てみましょう」

～返答～

官兵衛
「あの後は斗詩の証言で無事だったぞ」

～終了～

華琳
「そういう事よ、わかったかしら？」

政宗
「次にいくぜ。ソルバ１３さんの質問だ」

“ＢＡＳＡＲＡ武将の皆さん、戦国無双シリーズの方の自分と同じ名前の武将について、３のストーリーモードを最後までやった後の感想をお願いします。佐助さんとかは無双の方の主等関りの深い人の感想をお願いします。”

“宗茂さんへ、主の為なら腹を切る覚悟で政宗に手を上げたり、刀を向ける小十朗さんについてどう思いますか？”

“宗茂さんへ、奥さんとどういう会話をしますか？それと、そろそろ登場しますか？”

“どちらかというと、『ＢＡＳＡＲＡ』の方の謙信の姉として違和感が無い綾御前はこの世界に存在しますか？”

“政宗さんへ、戦い方がさり気無く格好いい最上義光さんは貴方の伯父さんですか？”

“斗詩以外の生徒会の皆さんへ、生徒会を首になった黒田さんと『戦国無双３』の黒田さん、どちらがいいですか？
どちらかを必ず選んでください。”

政宗
「多いわ！！　なんつー量だよ！？」

華琳
「だが、どくぢゃ……読者の質問は絶対よ」

政宗
「噛んだな。今絶対噛んだな？」

華琳
「そ、それより、質問に答えなさい」

政宗
「ま、実際の世界じゃそうかもしれんが、此処の世界じゃ無関係だ」

華琳
「そう……なら、返答の時間よ」

～返答～

幸村
「何という生き様……某、感服しましたぞ！」

家康
「それぞれのやり方があるが……結末は泰平の世か」

佐助
「う～ん……こっちのお館様となら馬が合いそうだね」

三成
「ふん……興味ない」

官兵衛
「あれ、最終的に不幸になってね？」

半兵衛

「僕が元就君とねぇ～……ありえないね」

宗茂
「個人の考えがある為……その生き方には何も言えません。あと……奥とは別居中で会話はしておりません」

秀吉
「使える方は無双だな」

半兵衛
「僕も同じだよ」

大谷
「無双は張り合いがなさそうだ……ならば、こちらの官兵衛を選ぼう」

詠
「……こっちの官兵衛で」

麗羽
「何か無双の方は気色悪いですね。わたくしはこちらで」

～終了～

華琳
「これでいいかしら？」

政宗
「んじゃ次だ。ござる猫ちゃんさんの質問」

“華琳に質問です！華琳はレズビアンと聞きましたが、政宗を自分のモノにしたいと言ったじゃないですか？ということは男性も好きなんですか？俺は華琳が大好きです！”

華琳
「あら、ありがとう。お礼に私の靴下をあげるわ」

政宗
「やめんか！　それよりちゃんと答えろ！」

華琳
「わかってるわ……私は！　両刀使いよ！！」

政宗
「……Ｉｔ＇ｓ　ｔｏｏ　ｌａｔｅ」

華琳
「好きに言いなさい。それじゃ次に黒龍さんの質問ね」

“ちょっと質問と言うか助けて欲しいんです！！何故か知らないんですけど読者から罵詈雑言の嵐なんですよ最近！これをなんとかするアドバイスをください！！”

“私から三成に質問だ。お前は秀吉と言う男を大層慕っているそうじゃないか？それでもし私がお前の慕う男を手に掛ければ、お前はどんな絶望を見せてくれる？”

華琳
「……うん。●ねば？」

政宗
「どストレートだな？！　向こうはＳｅｒｉｏｕｓｌｙなんだぞ！！」

華琳
「それじゃ、何か策はあるの？」

政宗
「……」

華琳
「という事よ。それじゃ、返答に移るわ」

政宗
（……ｓｏｒｒｙ）

～返答～

三成
「誰であろうと！　秀吉様を害なす者は生きては帰さん！！」

～終了～

華琳
「いつも通りね」

政宗
「だな。そんじゃ、次の質問だな。炎鳳さんから」

“信玄と幸村とサスケに質問。テイルズオブのコングマンとキール、ジェイドについてどう思いますか？”

“三成と大谷に質問。テイルズオブのスタンとクラトスについてどう思いますか？”

華琳
「……完全にテイルズ関係ね」

政宗
「……だな」

華琳
「……作者、テイルズ系は無知よ？」

政宗
「調べた結果でいいから答えろ！」

～返答～

信玄
「ほぅ……中々の男、いや漢ぞ。一度はやり合いたいものだ」

幸村
「素晴らしい剣裁き！　これは期待出来ようぞ！！」

佐助
「あら、けっこういい顔してんじゃん。キザな性格なんだろうな」

三成
「……喋る剣などいらん」

大谷
「こやつも力を欲するか……ヒヒヒッ！　愉快愉快」

～終了～

華琳
「無知なり頑張ったわ。それじゃ、最後に百鬼丸さんの質問ね」

“官兵衛に質問ですが、鋸と鑢を使って枷を外そう都しましたか？”

政宗
「この回答はこれだ」

～返答～

官兵衛
「いや、これを外したらキャラがなくなるぞ？」

～終了～

政宗
「何でこだわり持ってんの？！」

華琳
「それが、あの男よ。今回はこれまでね」

華琳
「次回は幸村と文台の決闘よ。それじゃ、また次回逢いましょう」

～差し入れ～

“幸村・某小説での映像”

幸村
「破廉恥なりぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！」

佐助
「どして殴られんの～～～～？！」

“桃香、家康・テイルズオブエクシリアのミラ、ジュードの衣装”

桃香
「ね、どうかな？　強く見えるかな？」

家康
「……いや、変わんないぞ？」

桃香
「……ですよね～」

第八十五話、若虎の魂（前書き）

華琳

「今回のコバラジにて、重大な報告があるわ。詳しくは後書きにて」

第八十五話、若虎の魂

～あらすじ～

自分を曲げない政宗に感服した孟徳。その頃、屋上では……

～屋上～

幸村
「うおぉぉぉぉぉおおお！！！！」

文台
「はぁぁぁぁあああああ！！！！」

幸村の二槍と文台の剣がぶつかり合っていた。

幸村
「千両、花火ィィイ！！！」

文台
「まだだ！　セィヤァァアア！！！」

双方の全力が交じり合い、凄まじい気迫が膨張する屋上。

既に至るところに傷が見えている。
ぶつかり合いを見せた後、文台は一旦距離を置く。

幸村
「はぁ……はぁ……」

文台
「……」

先の激突で幸村は息切れを見せるが、文台は疲労した姿を一切見せず、ただ静かに幸村を見つめる。

文台
「……惜しいな」

そして幸村に一言告げ、剣を仕舞う。

幸村
「はぁ、はぁ……お、惜しい？」

文台
「あぁ、惜しいのだ。お前は自分の限界を知らぬまま闘いを続けている。その結果が今の答えだ」

幸村

「某の……限界？」

文台の言葉は幸村の奥深くに突き刺さる。

文台
「己を知らないまま闘い続けるのは危険だ。後に体を壊し、色んな人を悲しませる事になるぞ」

幸村
「……」

決して貶している訳ではない。
本気で幸村の体を心配するからこそ出てきた言葉なのだろう。
そんな言葉に幸村もまた素直に受け止め、真剣に考える。

しばらくして……

幸村
「実直な言葉、心から感謝致します」

真剣に考えいた幸村が文台に頭を下げた。

文台
「……わかってくれたか？」

幸村
「はい、自分の愚かさが身に染みました」

文台
「そうか」

幸村
「……ですが」

文台
「？」

幸村
「どれだけ言われようとも……このやり方だけは変える事は出来ぬでござる」

文台
「……理由を聞こう」

その時の幸村の目は濁りのない真っ直ぐな目をしていた。
その目に興味を持った文台は理由を聞く。

幸村
「文台殿の言う通り、このやり方には自らを犠牲にしなければいかぬ。しかしながら、某はこのやり方でしか生きる道がないのでござる」

文台
「それが自分の身を滅ぼすとしてもか？」

幸村
「それで“後悔”しなければ悔いはない」

文台
「後悔？」

意外な言葉に首を傾げる。

幸村
「某は武芸以外に芸なき男。故に全力で挑まなければ相手に失礼を掛けてしまわれる。それと同時に自分の成長すら妨げてしまうのだ」

文台
「ほぅ……」

幸村
「全力で挑んだとて勝利に繋がる訳ではない。しかしながら、勝利してきた者達は皆、全力で挑んだ筈。それで例え、闘いに負けようとも後悔する事はない」

文台
「……なるほど。それがお前の理由か」

幸村
「そうでござる」

全てを語り、何処か安心したような表情を見せる幸村。

文台
「真っ直ぐな生き方をしてるな。自分に嘘すら付けないくらいに」

幸村
「ですが、このような軟弱者には出過ぎた真似でござる」

文台
「そんな事はない。自分なりに答えを見つけている者に軟弱者はいない」

幸村
「し、しかし……」

文台
「ふっ……娘から聞かされた通りの男だ。不器用で自分を飾らない猛者」

幸村の語りを聞き、娘の蓮華に言われた通りの人物で納得していた。

文台
「お前なら、娘を任せても問題はないな。頼んだぞ」

幸村

「……？　良くわからぬが、承知した」

文台
「ハッハッハッ！　これで孫家も安泰だな」

そう言って幸村の背中を叩く文台。
しかし、幸村はその意味を理解していないだろう。

文台
「さぁ、蓮華を迎えに行って来い。きっとお前を待っている筈だ」

幸村
「何と?!　それはマズイでござる！　うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！!!」

そして幸村は全力で屋上から去っていった。

文台
「……全力で挑むこそ意味がある。それもお前の教えか？」

残された文台は誰かに語りかけるように話し始める。
すると……

信玄
「フン！！」

空から幸村の師である信玄は降ってきた。
原理なんてものはない。

信玄
「幸村は自分で答えを見つけたに過ぎない。儂はそれを見守っていたのみ」

文台
「ふっ……面白い奴だ」

すると文台は、先ほど仕舞っていた剣を取り出し、信玄に向ける。

信玄
「……何のつもりだ？」

文台
「実はな、先の闘いで心残りがあってな……どうしても強い奴と闘うと血が騒ぐんだ」

信玄
「ほぅ……わしは幸村ほど甘くはない。それでも良いか？」

文台

「そのつもりで剣を抜いた。さぁ……」

信玄
「……やるか」

“戦神覇王”
武田　信玄

ｖｓ

“江東紅虎”
孫　文台

開幕！！

～１Ｆ・廊下～

愛紗
「……」

蓮華
「きゅ～……」

月
「へぅ～……」

元親
「はぁ……はぁ……やっと終わったぜ」

萃香
「あはは～」

元親の景品を狙っていた愛紗達だが、萃香の介入により、その欲望は閉ざされてしまった。
今は気絶しながら、廊下の隅で寝ころんでいた。
そんな愛紗達に勝利した元親は地面に座り込んで息切れをし、萃香は頭に手を掛け笑っていた。

元親
「ったく、面倒な事をしてくれるぜ」

萃香
「そうかい？　アタシは面白かったけどな～」

元親
「……随分と元気な事だ」

腰に吊るしていた酒を飲む萃香に少し呆れる元親。

萃香
「ング、ング……ぷは～！」

元親
「……んで？」

萃香
「ん？」

元親
「オメェはどうすんだ？　俺とやり合うか？」

萃香
「ん～……それも面白そうだね」

そう言って肩を回し始める萃香。
対する元親も立ち上がり、得物を手にする。

萃香
「やり合う前に一ついいかい？」

元親
「アン？」

萃香
「元親はどうして“鬼”を語るんだい？」

萃香の疑問は自ら“鬼”と語る元親に不思議に思っていた。
鬼は人間に恐れられるもの。

しかし、目の前の人間は自ら“鬼”と語っている。
それが不思議で仕方なかった萃香。

元親
「あ～……それはな、子供の頃に見た昔話が忘れなくてな」

萃香
「昔話？」

元親
「確か……“赤鬼と青鬼”だったかな？　その話に感動して鬼になりたいと思ったぜ。子供ながら仲間を思いやる気持ちが印象深かったんだろうな」

萃香
「へぇ～……んじゃ、アタシを見た時はどう思った？」

元親
「……嬉しかったよ。本当に鬼がいた事がな」

正直な気持を伝える元親。
その目に嘘はない。

萃香
「フフッ……んじゃ鬼らしく、此処は勝たせて貰うよ」

元親

「悪いがそれはさせねぇぜ……この“悪鬼”が喰らうからな！！」

“天衣無縫”
長曾我部　元親

ＶＳ

“百鬼夜行”
伊吹　萃香

開幕！！

第八十五話、若虎の魂（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、今回もやってきたわね」

政宗
「今回は真田の話だが……アイツらしい生き方だな」

華琳
「貴方も同じような生き方よ」

政宗
「だからこそ、アイツをｒｉｖａｌと呼べるのかもな」

華琳
「フフッ……面白いわね」

政宗
「そうかい。そんじゃ、この話はここまでにして、質問コーナーに

いくぜ」

華琳
「最初はござる猫ちゃんさんの質問ね」

“また華琳に質問です！もし俺も政宗と同じ力があれば、自分のモノにしたいと思いますか？ちなみに俺も右目が見えません。それと、政宗は一生マヨネーズドラゴンでいいと思います。”

政宗
「何で悪口言われてんの？！」

華琳
「仕方ないわ。それと質問だけど、いきなり取るような真似はしないわ。しっかりと履歴書を送りなさい」

政宗
「バイトかよ！」

華琳
「これが常識よ。さて、次は白黒さんの質問ね」

“月に質問です。貴女の三成への愛の力はどれくらいですか？”

“ＢＡＳＡＲＡキャラ全員に質問です。ＣＡＰＣＯＭキャラで誰と戦いたいですか？もし、知っていたら答えてください。”

華琳
「ＢＡＳＡＲＡキャラは多すぎるわね。勝手ながら絞り込ませて頂くわ」

～返答～

月
「えと……スカ●ツリーと同じ高さくらいです」

家康
「ワシはリュウと闘ってみたいな」

幸村
「ケン殿とは何か引き合う者があるでござる」

三成
「秀吉様を害なす者全てだ！！」

元親
「俺はあのルビィって奴だな」

元就
「……興味などない」

秀吉

「我は豪鬼とやらに挑むとしよう」

半兵衛
「僕は成歩堂君と口論で闘いたいね」

慶次
「ん～……灰燼の蒼鬼だな」

佐助
「んじゃ、忍者ってことで飛龍ちゃん」

信長
「大魔王……ぞ」

～終了～

華琳
「これが限界ね。それじゃ、次に黒神さんね」

“秀吉へ。準決勝当たりから貴方の出番が来ますのでご安心を。”

“小十郎へ。今、政宗、華琳、春蘭、星の４人は順調に勝ち進んでいます。
そんな政宗達の様子を見てどう思いますか？”

華琳

「あそこでは順調のようね」

政宗
「ま、当然だな」

華琳
「それじゃ、返答するわ」

～返答～

秀吉
「やるからには勝利するまでだ！！」

小十郎
「政宗様なら天下を目指せます」

～終了～

華琳
「相変わらずね、二人とも」

政宗
「そうだな」

華琳
「ふふっ……続いては炎凰さんね」

“信玄。お前は幸村に子供ができたら孫のようにかわいがるか？それとも、厳しくか、静かに見守るか？…返答を待っている”

“政宗に質問です。ワンピースのロロノア・ゾロの三刀流はどう思いますか？それと、もしゾロの技が習得出来るのなら、どんな技を習得したいですか？”

“亜紗（あーしぇ）に質問だ。あまり出てきていないがお前の意中の相手は誰？それと、もし俺が恋バラ学園に来ても……関節技を極めるのはやめてくれるよな？”

華琳
「この炎凰さんはこのラジオと同じような企画で感想をくれるわ」

政宗
「大変だと思うが頑張ってくれ。ゾロはｔｏｕｇｈな野郎だな、少し小十郎に見えるぜ。それと俺は俺のやり方で刀を使うから遠慮する」

華琳
「それじゃ返答よ」

～返答～

信玄

「わしならば厳しくも優しく育てようぞ」

亞莎
「ふぇ?!　そそそそれは……ゆゆゆきゆきむしゃんでじゅ／／／」

～終了～

政宗
「焦り過ぎだな」

華琳
「普通はあんなものよ。続いてはケンさんの質問です」

“鶴姫に質問です。僕の作品のオリキャラであるメアリは貴方と同じ声ですが、胸の大きさは貴方より遥かに大きいです。それを聞いてどう思いますか?”

政宗
「返答はこれだ」

～返答～

鶴姫
「……チッ」

～終了～

華琳
「純粋な子が舌打ちすると、怖いわね」

政宗
「……ああ」

華琳
「ま、いいでしょう。次は白銀の戦士さんね」

“質問です。政宗にとって一番大切な人は誰ですか？”

政宗
「Ａｈ？　そんなもん小十郎（華琳）に決ま……って、ちょっと待て！　何だあの（）の中は？！」

華琳
「はい、政宗の大切な人物は華琳でした」

政宗
「ｓｔｏｐだ！」

華琳
「それを無効にするわ！！」

政宗
「Ｈａ？！」

華琳
「それと次の企画は次回にやりたいと思っているわ。お楽しみに」

政宗
「本気でスルーする気かよ……」

華琳
「政宗は無視でいくわ。最後の質問は黒龍さんね」

“華琳に質問。政宗と結婚した暁には世界制服するんですか？”

“政宗に質問。もし猛徳が義父親になったらどうしますか？”

華琳
「そうね……一つの星じゃつまらないから、宇宙を乗っ取る気でいくわ」

政宗
「なんつー事考えるんだよ……そんで質問は俺は俺のｓｔｙｌｅを貫くまでだ」

政宗
「んで、最初の前書きのＭａｊｏｒな報告は？」

華琳
「あぁ、それね。実はこの小説が始まって一年弱経ったの」

政宗
「Ｈｕｍ～……随分とｓｐｅｅｄｙだな」

華琳
「えぇ。そして作者はある覚悟を決めた」

政宗
「覚悟？」

華琳
「それはね……」

政宗
「……」

華琳

「この学園祭編をもって……この小説は完結させます！」

政宗
「……ｒｅａｌｌｙ？」

華琳
「えぇ。そろそろこの小説の限界が見えてきたみたい」

政宗
「……そうか」

華琳
「ま、まだ学園祭は続くから終わらないけど、一応頭に残しておいてね」

政宗
「次回は？」

華琳
「三成としんのすけの話よ」

政宗
「……大丈夫か？」

華琳
「さぁ？　それじゃ、また会いましょう」

～差し入れ～

“月・某小説のＤＶＤ”

月
「りょ、呂布レイさんですか……恋さんとは全然違いますね」

“蓮華・幸村のぬいぐるみビッグサイズ”

蓮華
「ハァ……ハァ……／／／」

思春
「蓮華様……怖いです」

“炎凰さんの差し入れ（多すぎる為）”

信玄
「ほぅ……ならば、幸村と共に参ろうか」

幸村
「ぐぬぬぬぬ……む、難しいでござる」

佐助
「ん～っと……どしたらいいの？」

三成
「貴様に言われなくとも秀吉様は死守する！　……奥義書は貰おう」

大谷
「やれ、残念ながら我は酒は飲めん……しかし、生き血は好物ぞ」

～桃香・愛紗、某小説のＤＶＤ～

桃香
「いろんな人が出てきたね～」

愛紗
「桃香様は全員覚えましたか？」

桃香
「勿論だよ！！」

愛紗
「では主人公から」

桃香
「……」

愛紗
「そこからですか？！」

～華琳・政胸人形～

華琳
「そんなもので、この覇道が揺らぐと思うてか？」

政宗
「その前に、その鼻血を止めろ」

連載一周年記念特別回！～前編～

～某会社～

佐助
「祝！　連載一周年記念特別回！　その名も……猿飛プロデュゥウゥウゥウス！！！」

左近
「凄まじいテンションと共に始まりました、猿飛プロデュース。司会は私、左近と」

佐助
「漢の欲望のお友達、佐助です」

左近
「……さて、佐助さん」

佐助
「どうした？」

左近
「今まで普通に進行しましたが……これは何なんですか？」

佐助
「フッ……まぁ新米にはいきなり過ぎて難しいかもしれんな」

左近
「いや、読者の皆さんも困っていますよ」

佐助
「落ち着きなｃｈｅｒｒｙ　ｂｏｙ。ちゃんと説明すっから……んじゃ、説明よろしく～」

説明しよう！
猿飛プロデュースとは……連載一周年記念という節目でどうしようかと考えいた作者が突発的に閃いたと同時に、最近ネタ不足という作者の欲望が渦巻き始めた結果作り出された特別回なのである！

佐助
「……という感じで前編、中編、後編とお送りする特別回って事だ。わかったか？」

左近
「はぁ……それはわかったんですがね」

佐助
「何？　まだあんの？」

左近
「こういった事は伊達さんや曹さんのラジオでやればいいのでは？」

佐助
「……」

左近

「……」

佐助
「……さぁ！　記念すべき一回目の内容はこちら！」

左近
（流されましたね……）

“没ネタコーナー”

佐助
「はい、説明は左近に任せた！」

左近
「えーっと……これは恋ＢＡＲＡ学園でやる予定だったネタが都合上、没になった物を掘り下げるコーナーになっていますね」

佐助
「これまで様々なネタが思い付いた作者が断念した記録だな」

左近
「ま、百聞は一見に如かず。とりあえずご覧ください」

～一つ目・第二のアイドル大作戦～

ある日、張三姉妹は窮地に立たされていた。

人和
「……困ったわ」

天和
「どうしたの～？」

人和
「これまでコツコツと貯めてきた貯金がもう底につきそうなの」

地和
「嘘ッ？！　じゃあどうやって生活してけばいいのよ！」

人和
「……バイトをしながら」

天和
「えぇ～！　そんなのヤダよ～！」

地和
「そうよ！　何でちぃがそんな事を……」

人和の提案に駄々をこねる天和と地和。

人和
「でも仕方ないでしょう。こんな緊急事態に我が儘言っても……」

人和の言う通り、この緊急時に我が儘は言ってられない。
しかし、三姉妹には特別な武器があった。

地和
「なら、またアイドルをやればいいじゃない！」

三姉妹は元人気アイドルの肩書きを持っていた。

だが……

人和
「それは難しいわ。アイドルの流行りなんて長くはない。私達が出たところで簡単に売れる訳じゃないの。わかるでしょ？」

地和
「……だからって」

天和
「それなら、新しいアイドルを作れば？」

人和
「……それだ」

～終了～

左近
「なるほど、あの三姉妹がプロデューサーとなってアイドルを作る話ですか」

佐助
「立場上、尤もアイドルを知ってるからな～」

左近
「……ですが、どうして没になったんですか？」

佐助
「ちょっくら待ってな……“歌制限がされ、扱いづらくなった為”らしいぜ」

左近
「あ～、それは仕方ないですね」

佐助
「だろ？　だから没になったわけよ。んじゃ次」

～二つ目・テスト大戦争～

テスト……それは戦争なり。
１－Ｂのクラスでは、テストに向けて勉強会が行われていた。

桃香

「あ～う～……全然わかんないよ～」

愛紗
「此処は“桃園の誓い”です……ってこれは絶対に覚えといてください！」

家康
「朱里よ、此処の答えはわかるか？」

朱里
「えっと……“三方ヶ原の戦い”です」

愛紗
「家康殿も！」

テストに向けて頑張る家康達。

その頃、政宗達は……

～華琳邸～

政宗
「……オイ」

華琳
「……何かしら？」

政宗
「どうにかならんのか？　……“アレ”」

冷や汗を掻く政宗と華琳。
そして政宗はある場所に指す。

そこには……

春蘭
「桂花さん、そこの答えは間違いですよ」

桂花
「ヒィ！　近寄らないで！！」

春蘭
「あら、どうされたのですか？」

かなり性格が変化された春蘭が勉強していた。

その時、幸村達は……

～武田道場～

信玄
「この……馬鹿者がァァァァァァアア！！！！」

幸村
「ごふぁぁあぁぁぁぁぁああぁ？！？！？！？！！」

蓮華
「幸村？！」

ぶん殴られていた。

その時、三成達は……

～三成宅～

三成
「……」

月
「……」

大谷
「……」

霞
「って普通かいな？！」

普通に勉強していた。

果たして彼らは点を取れるのか？

～終了～

佐助
「二つ目はテストを題材にした長編。これは武闘大会編と競り合って没になってしまったネタだな」

左近
「俺はこの時、出ていないので何とも言えませんが……これはギャグ方面に向かっていきますかね？」

佐助
「そういう風に考えたからな。まぁこれもいい思い出だ」

左近
「そうですか」

佐助
「さて、このコーナーはこんくらいにして……次に移るぜ！！」

～特別質問コーナー～

左近
「これはですね……普段は読者から来る質問を、この小説に出ている人物が質問するというコーナーです」

佐助
「ま、要は恋ＢＡＲＡ版の質問コーナーだな」

左近
「それにしても……結構な数がありますね」

視線をずらすと、かなりの量の手紙が積まれていた。

佐助
「こうでなくては面白くない！　早速質問に答えていくぞ！！」

左近
「最初は“覇道大好きっ子”さんのお便りです」

“変態独眼男の始末を頼む”

佐助
「……って、これ暗殺依頼？！　送る場所違うからね！」

左近
「いや、佐助さんなら得意でしょうに」

佐助
「そこ！　物騒な事を言わない！」

左近
「まぁ、なんにせよこれは出来ません。次にいきます」
佐助
「え～っと、“地獄乙女”さんからのお便り」
“長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政様長政
様長政様長政様……‥”

佐助
「怖ッ？！　これ質問じゃないよね！？　完全にアレだよね！？」
左近
「ここまで行き過ぎるとホラーになりますな」
佐助
「つーより質問がないんだけど！　これをやる意味ないんだけど！」
左近
「……お、これはちゃんとした質問ですよ」
佐助
「よし！　その質問を読み上げろ！」

左近
「差出人は……“ケンプファー”さんですね」
“もとち……ではなく、長曾我部の休日を知りたい”

佐助
「あ、思春ちゃんね」

左近
「簡単にばらしましたね。大丈夫なんですか？」

佐助
「大丈夫だよ。そんじゃ、質問の返答はこちら」

～返答～

元親
「基本は外で遊んでるな。海が近くにありゃいいんだけどな～……」

～終了～

佐助

「アイツらしい答えだな」

左近
「俺自身はあまり関わりはないんですが……どうも兄貴分の存在感がありますね」

佐助
「その解釈で問題ないぜ。そのまんまの人柄だからねぇ～」

左近
「ほぅ……是非とも会ってみたいですな」

佐助
「まともな質問がなかった為、質問コーナーは此処までだ！」

左近
「では、今回はここまでですか？」

佐助
「何を言っているんだ……ここからが本番だろうが！！！」

左近
「……どういう事ですか？」

佐助
「今回の大目玉コーナーは……これだ！！」

“ニヤニヤ写真売上ベスト１０”

佐助
「これは俺様が今までに集め、販売してきた写真を売上順に発表していくコーナーだ！」

左近
「……これがやりたかったんですか？」

佐助
「当たり前だ！　読者もこれを望んでいるに違いない！」

今の佐助は目が血走っている状態。

左近
「そうですか……ですが、佐助さん」

佐助
「ん？」

左近
「後ろ」

左近に指摘され後ろを振り向く佐助。

そこには……

思春
「……言い残す言葉は？」

殺気全開の思春が得物を構えながら立っていた。
左近は怖かった為、言う事が出来なかった。

佐助
「……ごねんちゃい」

思春
「…………」

佐助
「うぎゃぁぁぁあぁあぁあぁあぁぁ！？！？！？！？！？！！？？！」

こうして佐助の欲望は断たれた……

連載一周年記念特別回！～前編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さ、今回もやってきましたコバラジです！」

政宗
「今回は急遽変更となった連載一周年記念だったが……本当Ｎｏｐｒｏｂｌｅｍ？」

華琳
「それは大丈夫でしょう。どんな事態も乗り切る気でいるから」

政宗
「……ま、いいか。んじゃ質問コーナーに移ろうぜ」

華琳
「そうね。今回は一通だけね。黒龍さんの質問」

“元親が鬼を目指した理由はやっぱり世紀末雑魚さんのオリジナルですか？”

“華琳に質問。政宗に“俺と一緒に来てくれ”と言われたら、覇道を諦めて政宗のお嫁さんになりますか？”

“幸村に質問。東大のテスト贈ります。解いてみてください。あ、最初から投げ捨てると武士としての恥ですよ？”

華琳
「最初の質問は完全にオリジナルね。元親が鬼を目指した事を考えたら自然とこういった形になったのよ」

政宗
「これだったら鬼を目指すのもあり得るな」

華琳
「そうね。そして私の質問は……断ると思うわ」

政宗
「……理由は？」

華琳
「どれだけ魅力的な誘いでも、誰かの物になるのは趣味じゃないわ。私は私なりのやり方で自分の物にしなきゃ意味がないの。それが答えよ」

政宗
（カッコよく言ってるが……俺、めんどくさくなってね？）

華琳
「それと幸村の返答はこれよ」

～返答～

幸村
「数字……日本……漢字……イッパイ」

佐助
「旦那ァァァアア！！！」

～終了～

政宗
「アイツにｓｔｕｄｙは無理だ」

華琳
「そうだったみたいね」

華琳
「さて、今回は特別な質問があるの」

政宗
「Ｓｐｅｃｉａｌな質問？」

華琳
「まぁこれを見なさい」

“政宗と幸村が好きな女子に、以前私の書いている小説で政宗がチビ&猫耳に幸村が犬になったんですが、その時の写真をあげます（ただしそれぞれ一枚しかない）”

華琳
「こう言った形の質問が来たの」

政宗
「……んで？」

華琳
「やってもらうわ」

政宗
「オイオイ……Ｊｏｋｅが重いぜ」

華琳
「なんにしろ、答えて貰うわ。さぁ……答えなさい！」

政宗
「Ｈｕｍ～……ほら」

そう言って政宗は写真を華琳に渡す。

華琳
「……え？」

政宗
「そんな遠回しで言うより、ｓｔｒａｉｇｈｔに言った方が楽になるぜ？」

華琳
「……馬鹿／／／」

～幸村バージョン～

幸村
「蓮華殿」

蓮華
「何？」

幸村
「何やら大切な人に渡してほしいとの事ゆえに、蓮華殿に受け取って欲しいでござる」

蓮華
「へッ！？／／／　わ、私に？」

幸村

「うむ！　迷惑でござるか？」

蓮華
「全然！！」

幸村
「おぉ！　そうでござるか！　忝いでござる！」

そして幸村は立ち去っていった。

蓮華
（……ところで、この写真は何なのかしら？）

幸村がいなくなった後、蓮華は写真を確認する。
その後、その場が血だらけとなったのは言うまでもない……

華琳
「今回はアンケートがあるの。お題はこれ」

“ニヤニヤ写真売上ベスト１０の結果……貴方は知りたいですか？”

1、はい

2、いいえ

華琳
「アンケートは次回まで有効だからよろしくね。それじゃまた次回会いましょう」

～差し入れ～

“恋・元親人形”

恋
「……嬉しい／／／」

“雪蓮、蓮華、小蓮・イメージイラスト”

蓮華
「虎の力……今の私じゃ無理ね」

小蓮
「向こうのシャオ、カッコいい～！！」

雪蓮
「あら、かなり凝ってるのね。ありがと♪」

連載一周年記念特別回！～中編～

前回、突如始まった猿飛プロデュース！
果たして今回はどうなるのか？

～天下統一・屋上～

佐助
「再びやってきた……猿飛プロデュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥス！！！」

佐助
「さぁ始まりました、深夜の救世主、猿飛プロデュース！　司会は……深夜帯は俺様無双！　……でお馴染みの猿飛佐助と」

真桜
「真桜の科学力は宇宙一！　李真桜と」

左近
「……普通のツッコミ担当、島左近で」

佐助・真桜
「「お送りします！！」」

観客（漢）

「「「「ぬおぉぉぉぉおおお！！！！！」」」」

真桜
「……凄い漢達や」

今回の会場は大型アミューズメントパーク“天下統一”の屋上でお送りしております。

左近
「さて、始める前に一ついいですか？」

佐助
「ん？」

真桜
「なんや？」

左近
「どうして真桜さんがいらっしゃるのですか？」

佐助
「き、貴様！　我が同士たる盟友の真桜に何という事を！！」

真桜
「えぇんや猿っち。ウチなんて……戦隊シリーズで皆がピンチな時、突拍子に現れてくるブラックやらホワイトやらの存在や」

左近

（……対して責めてないですね）

佐助
「安心しろ！　お前は初期メンバーのグリーンやイエローの存在だ！」

左近
（その慰めもどうかと思いますが……）

決して口には出さず、心の内でツッコミを入れる左近であった。

佐助
「まぁ真桜さんがいる理由は後に語るとする」

真桜
「とりまいつものコーナーに移りまひょか」

～没ネタコーナー～

佐助
「このコーナーは前回説明した通りのヤツだな」

真桜
「んじゃ、説明要らずっちゅー訳やな～」

佐助
「そういう事だ！　それじゃ行ってみよー」

～一つ目～

これは……女性ならではの物語である。

斗詩
「……」

険しい表情である物と向き合う斗詩。

斗詩
「ふ……ふ……」

その物とはある時は歓喜となり、ある時は絶望を見せる……その名も！

斗詩
「増えてる……」

体・重・計！

斗詩は体重を減らす為に絶対に痩せられると言われる“断食”道場に足を踏み入れる。

そこには……

斗詩
「桃香さん？　それに天和さんまで……」

桃香
「ふぇ……斗詩先輩？」

天和
「やっほ～」

同じ悩みを持つ同士達の姿が見えた。

しかし、時としてそれは残酷な形となって彼女達に降り注ぐ……

師範
「アタシは断食を極めし者。この参加者、１００人の中で痩せさせられるのはたった１人だけだよ」

その言葉で始まった生き残り（断食）を懸けた戦いが始まった！
果たして斗詩は痩せられるのか？
そして同士らの運命は！？

～終了～

左近
「なるほど、ダイエットの話ですか……これはこれで面白そうですが」

真桜
「女性の永遠の課題やな～」

佐助
「これはな……“時期を考えていたら全部に当てはまる”から没になったらしい」

真桜
「まぁよく秋の話になりがちやけど実際問題、全部の時期に悩むっちゅうねん」

左近
「確かに言えてますね。それでは次に行きましょう」

～二つ目～

これは……一つの放送から始まった。

信長
「これより……貴様らには殺し合いをしてもらおう」

この一言により、平和だった学園は突如として殺戮場と化した。

政宗
「……どういうつもりだ？」

華琳
「あら、此処は戦場になったの……これは当然の行いよ」

鎌を政宗の首に置く華琳。

翠
「何でだよ……何でこんなことが出来るんだよ！？」

横たわる蒲公英の姿に戸惑いながらも、ある人物に槍を向ける。

翠
「どうしてなんだよ……風魔ッ！！！」

風魔
「……」

風魔は答えることなく、翠に攻撃をしかけた。

大谷
「ヒャハハハ！！　これぞ我が望む世！　平等の世界！　何もかもが信じられなくなる混沌の世紀！　さぁ狂え！　そして絶望しろ！」

狂った感情を浮き出す大谷の周りには恋、音々音、霞、詠の倒れていた。

元親
「……やっぱり来たか」

思春
「……」

元親
「覚悟は出来てる。仲間を喰らうぐらいなら此処で果てるのが本望だ」

振り向きもせず、胡坐をかいたまま語りだす元親。

思春
「……どうにもならんのか？」

元親
「……ああ」

思春
「くっ……」

そして思春は元親の首を目掛け、得物を振りかぶる。

幸村
「……蓮華殿」

蓮華
「喋らないで！　今血を止めるから！！」

腹部から大量の出血状態の幸村とそれを懸命に止めようとしている蓮華。

幸村
「某はもう……ダメでござ、る」

蓮華
「諦めないで！　幸村らしくないわ！！」

幸村
「これで……よいの…かも、しれん……な」

幸村は目を閉じ、その目が開く事はなかった。

冥琳
「やはり……こうなったか」

そう呟き、静かに倒れる冥琳。

元就
「フン……これで邪魔者は消えたか」

その背後には冷徹な目をしている元就の姿が確認できた。

元就
「これで我の身も安全か……」

そして元就は闇に消える……

舞台は最終戦！
様々な狂乱が相見えたこの学園も終わりな近付く。

三成
「私は貴様を許さない！　秀吉様だけでは飽き足らず……あまつさえ月も！！」

家康

「……ワシはこの馬鹿げた混乱を止めたかった」

三成
「それが……貴様の言う事かァァァァァア！！！！！」

この物語に……終わりはあるのか？

～終了～

左近
「これは全く路線違いですね」

真桜
「せやな。でもこれやはこれやでアリやね」

佐助
「ま、今の話を見てわかる通り、この話に無双メンバーは登場してない。何故ならこの話は“テスト”編と同じ路線で考えていた為だ」

左近
「ほぅ……つまり、この話で三成さんが家康さんに対し憎しみを抱くフラグがあると……」

佐助
「そゆこと～。まぁ、実際はめちゃくちゃな設定だから出来たかどうかもわからんが」

真桜
「深い。深いで～」

左近
「ま、今回も此処までにしまして……次のコーナーに移りましょうか」

～特別質問コーナー～

佐助
「……今回は大丈夫なんだろな？」

真桜
「あったり前や！　今回はウチが厳選して質問を受け取ったさかい安心せい！」

左近
「それは心強い。それでは最初の質問を読ませて頂きます。“覇道大好きっ子”さんからです」

“政宗の弱点は何ですか？”

左近
「本当に普通の質問ですね」

真桜

「疑っとったんか?!」

佐助
「まぁ真桜だしね」

真桜
「ヒドッ！」

佐助
「まぁまぁ。とりあえず質問の回答は……俺様視点で考えるとお酒だね」

左近
「お酒ですか……これは意外ですね」

佐助
「この小説でも色んな場面で酒を飲むシーンが見られたんだが、アレはノンアルコールだから問題なかった」

左近
「おわかり頂けましたか？　それでは次に行きます」

真桜
「“アホの桶狭間”さんのお便りや」

“まろにもっと出番を……”

佐助

「あるわけない。次」

左近
「“爆破が趣味”さんからの質問」

“この学園を燃やしたら……面白いと思わんかね？”

佐助
「思わんわ！！　物騒な事考えんな！」

真桜
「あれ～？　ちゃ～んと審査したはずたんやけどな～」

左近
「頼みますよ。えっと“実は愛紗にも興味があります”さんからの質問」

“愛紗の趣味はなんや～？”

佐助
「あー見えて料理が好きみたいだぜ」

左近
「料理ですか……おいしいんですか？」

佐助

「……大体食べた人間は保健室行きだ」

左近
「……そうですか」

左近
「さて、今回はここまでですが……何か一言」

佐助
「フッフッフ……次回はあの企画が始動！」

真桜
「語られるウチが呼ばれた理由！」

佐助・真桜
「「お楽しみに！！！」」

連載一周年記念特別回！～中編～　（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「さて、２週間以上空けて掛った今作ですが……」

政宗
「ったく、少しはｐａｃｅを速めろってんだ」

華琳
「まぁいいじゃない。投げ出されるよりまマシよ」

政宗
「確かにな」

華琳
「ま、特に話す事もないから質問コーナーに移るわ」

政宗
「最初の質問はケンさんの質問だ」

“小早川秀秋に質問よ。貴方にとって魂と思えるものは何？”

華琳
「あの弱虫ね。ま、興味ないからちゃっちゃと終わせるわ」

～返答～

秀秋
「もちろん鍋でｓ」

～終了～

華琳
「さ、いくわよ」

政宗
「ＯＫ」

最早ツッコミもしない政宗。

華琳

「次は紅玉さんの質問ね」

“みんなでカラオケをすると誰が一番上手ですか？（デュエットも有りです）”

華琳
「誰が上手いね～……誰かしら？」

政宗
「普通に歌えば稟が上手かったな」

華琳
「あと、七乃と焔耶も中々ね」

政宗
「……このｍｅｍｂｅｒは確か」

華琳
「次にいくわ。地獄の傀儡師さんね」

“お市に質問です。長政に、別れてくれと言われたらどうしますか？”

“謙信に質問だ。錬金術とか月光蝶とか出来るか？”

“信長に質問。サラリーマンのアナゴさんと、人造人間のセルとか声が同じ奴と会ったらどう思う？ついでに孫悟空という人間に心あ

たりはないか？”

政宗
「この返答はこれだ」

〜返答〜

お市
「アア………」

謙信
「わたくしは………びしゃもんてんしかだせません」

信長
「………知らん。興味もなし」

〜終了〜

華琳
「あの校長は仕方ないわね」

政宗
「あの性格だからな。そんなことりお市」

華琳
「私は何も聞いていないし何も見ていない。次は超人カットマンさんの質問ね」

“鶴姫さんへ、「百花繚乱」の「シャルル・ド・ダルタニアン」と「おまもりひまり」の「緋鞠」をどう思いますか？後この二人のうち、どちらかになれるとしたらどちらになりたいですか。”

“猿飛佐助さんへ。「戦国無双」と「戦国ＢＡＳＡＲＡ」どちらかの幸村に仕えることになった時、義理とか貸しといった観点を除くと、あなたはどちらへ仕えたいですか”

華琳
「この返答はこれね」

～返答～

鶴姫

「アタシは猫さんが好きなのでアッチになりたいです！　向こうは少し怖そうなので……」

佐助
「う～ん……俺様はいつもの旦那でいいや。無理に働くのは向いてないし」

～終了～

華琳
「これが最後ね」

華琳
「さて、次回もこの企画が続くみたいね」

政宗
「ま、気楽にいこうぜ」

華琳
「そうね。それじゃあ、またね」

～桃香・某小説のフィギュア～

桃香
「……」（背中のボタンを押す）

フィギア
“いや～ん！　見えちゃう～！！”

桃香
「……どうしよう」

～華琳部隊・華琳たん人形（頭に猫耳、手に肉球グローブをし、メイド服姿）～

春蘭
「ゴファ？！」

桂花
「もう……死ぬ／／／」

秋蘭
「いや……これは／／／」

稟
「ブフッ！！！／／／」

～恋・大きなセキトのぬいぐるみ～

恋
「もふもふ……／／／」

ぬいぐるみ
“ワン！”

～お市・大きな長政のぬいぐるみ～

ぬいぐるみ
“市、愛している”

お市
「フフ……フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ
フフフフ」

連載一周年記念特別回！～後編～（前書き）

佐助

「恋ＢＡＲＡ学園ふっかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁつ！！！　我が世の春がきたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

連載一周年記念特別回！～後編～

前回、普通に終わった特別回。果たして今回は大丈夫なのか？

～天下統一～

佐助
「さぁ！　今回行われるコーナーはこれだ！！」

天下統一の屋上で佐助の声が響き渡る。

そして高々と……

佐助・真桜
「「ニヤニヤ写真！　ベスト１０！」」

漢
「「「「ぬおぉぉぉぉおお！！！！！」」」」

左近
「……」

コーナーの題名を叫ぶ佐助と真桜。
漢達は咆哮し、左近は呆れながらその様子を伺っていた。

佐助
「前々回のアンケート結果により、遂に実現となったこのコーナー！！」

真桜
「ウチはその協力者という名目で此所におるっちゅーわけや！！」

漢達
「「「「な、なんだってー！？」」」」

左近
「楽しそうですね……」

左近はただただ呆れる事しか出来なかった。

佐助
「それでは早速始めるぞ！　写真は一口５００円で計算してくれ！
１０位～７位の発表だ！！」

真桜
「それぞれの感想もあるさかい楽しんでいってな！」

佐助・真桜
「「カウントダウン！」」

“１０位・汗を拭くために体操着を捲り、お腹丸出しの翠”

～売り上げ・４４０００円～

（翠たんのお腹キレキレです！）

（素晴らしい臍だ。アレは真似できんよ）

“９位・酒に酔い、淫らな格好となってしまっている祭と桔梗”

～売り上げ・４９５００円～

（スゴく……大きいです）

（お前らみたいなババアがいるか）

“８位・最近の下着を着てみたいがサイズ上の関係で服越しで我慢する穏”

～売り上げ・５１０００円～

（ええい、今年の一年は化け物か！）

（口で語るな。胸で語れ！！）

“７位・そんな穏の姿を自分の胸と比較する明命”

～売り上げ・５４５００円～

（母性が襲ってきた。全てを受け止めよう）

（何かに目覚めた……不思議と嫌ではない）

佐助
「どうだこのクオリティは！　俺様が厳選を尽くした作品ばかりだぜ！」

真桜
「流石は変態紳士！　そこにシビれる憧れるゥゥゥゥ！！！」

漢達
「「「「ＷＲＹｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ！！！」」」」

左近
（……もう手遅れですね）

最早突っ込む気力すらわかない左近。
そんな左近を置いてテンションを上げまくる佐助達。

真桜
「にしても……１０位の翠は少しマニアックすぎへん？」

佐助
「紳士たるもの、全部（オープン）を見るより部分的（チラリズム）が見えた方が萌える……
否！　燃えるんだよ！！」

何処か間違っていると言うならば全て間違っている佐助の力説。

左近
「此処まで来ると清々しい気持ちになりますね」

真桜
「さこっちも解る口か？」

左近
「（さこっち？）まぁ男ですからね。分からない事はないです」

真桜
「ふぅ～ん……ムズい、難しいで～」

変なあだ名で呼ばれた左近だが、冷静に真桜の質問を返す。
そんな男の感情に真桜は少し理解出来ないでいた。

佐助
「んじゃ、会場にいる漢達にも聞いてみるか」

真桜
「リポーターはウチに任しとき！　ほなアンタ、どれが良かったん？」

漢１
「９位と８位の爆乳……やはり胸はいい！」

真桜
「素直すぎる感想、感謝やで～。ほな次」

漢2
「ハァ、ハァ、ハァ……な、7位の明命ちゅわん、凄くかわいいよ……」

真桜
「こっちは犯罪ギリギリやな……」

漢1
「ちょっと待て、女性は胸がステータスだろ？」

漢2
「ハァ？　あんなものは飾りです！　お偉いさんには分からないのです！！」

巨乳同盟
「「「「巨乳ッ！　巨乳ッ！　巨乳ッ！」」」」

貧乳党
「「「「貧乳ッ！　貧乳ッ！　貧乳ッ！」」」」

盛り上がりを見せていた会場が一変、巨乳ＶＳ貧乳の闘いへと変わってしまった。

佐助
「これは……どっちが勝っても」

真桜
「変態に変わらへんな」

佐助
「だな。んじゃ続きをやるとしようか」

左近
「では、続いて6位から4位の発表です」

佐助・真桜
「「カウントダウン！」」

“6位・睡眠中の秋蘭”

～売り上げ・58000円～

（普段見せない姿、Gj！）
（冷静な秋さんが熟睡してる……ちょっとトイレ）
（ブラボ～！　おぉブラボ～！！）

“5位・木に隠れながら長政の様子を伺うお市”

～売り上げ・61000円～

（お市かわいいよお市）
（見ろよ……これで魔王の妹なんだぜ？）
（此処は決死の寝取りを……ん？　なんだこの黒い手は？）

“４位・水着姿の華雄”

～売り上げ・６３５００円～

（至高の可愛さ……それが華雄さんだ！）

（ほっとけないよな……華雄って）

（濡れるッ！！）

佐助

「おっと！　此処で華雄が入ってきた！　これはダークホースか！？」

真桜

「でも華雄って人気なんやろ？」

左近

「そうなんですか？」

佐助

「まぁな。教師の時も戦闘狂以外では親しみやすい人だったからな。生徒になっても変わらないしな」

左近

「へぇ……面白い人ですね。今度話してみましょうか」

左近は華雄との面識はあまりない為、此処での情報は有難いもの。

佐助
「そして6位の秋蘭は真桜の写真だ」

真桜
「普段は周りに気を使う秋蘭やけど、こういった姿を見るとなんや……心がまったりせぇへん？」

漢
「「「「まったりぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」」」」

左近
「いや全然まったりしてませんよね？　逆にテンション上がってますよね？　まったりの意味わかってますか？」

“まっこり”
意味・ゆったりとしているさま。のんびりと落ち着いた気分であるさま。また、だらだらしているさま。

佐助
「そして5位のお市先輩だが……彼氏持ちなのにこの人気」

真桜
「お市、恐ろしい娘！！」

佐助
「実際に2年生の中じゃ雪蓮先輩と斗詩先輩に並んでの人気だからな」

左近
「最近ではねね先輩も人気と聞きましたよ。母みたいな性格だと」

真桜
「あぁわかるわ。あの人って、なんか逆らえへん感じやもん」

佐助
「次回の人気に響くか？」

佐助
「さぁ……残りはベスト3！　果たしてこの戦国時代を生き残った猛者達は一体何者か！？」

真桜
「ひゃあ！　もう我慢できへん！　発表や！」

佐助・真桜
「「カウント・ダウ」」

“ＷＡＲＮＩＮＧ！　ＷＡＲＮＩＮＧ！　ＷＡＲＮＩＮＧ！”

佐助

「ッ！　どうした!?」

漢1
「大変です！　このラジオを聞いていた女性陣がビルに入ってきました！」

真桜
「なんやて?!　警備隊はどないしてん！」

漢2
「全滅です!!」

左近
「絶体絶命ですね」

左近の一言により、周りの漢達に絶望の色が見え始める。
外から逃げ出そうとする者、写真を手に祈りをする者、遺書を書く者。皆が皆、この場で死ぬ運命を受け止めようとしていた。

しかし、この状況にまだ諦めていない人物が一人……

佐助
「……いや、諦めるのはまだ早い」

佐助である。

佐助
「いいか、諦める奴はそこまでの人間だ……だが、俺様達はどうだ？　既にこの世界に足を入れた時点でこんな運命はわかっていた筈だ」

漢達
「「「「……」」」」

佐助
「ならそんな運命に争って見せるのも……また運命なんじゃないか！！　ならば、俺様達はどうする！」

漢３
「……戦争（クリーク）」

漢４
「戦争（クリーク）」

漢５
「戦争（クリーク）だ！」

漢達
「「「「戦争（クリーク）！！　戦争（クリーク）！！　戦争（クリーク）！！　戦争（クリーク）！！」」」」

先ほどまで絶望に浸っていた漢達の瞳には希望の光が宿る。

目の前の死（げんじつ）より明日への生（みらい）の為に……

佐助
「出陣だぁ！！！」

漢達
「「「「うぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」」」」

旅立っていった……

真桜
「……此処までくると、ついてあかんなぁ～」

左近
「ですね。とりあえず、此処に脱出口がありますけど……逃げますか？」

真桜
「……そやな。もう潮時や」

こうして漢達の抵抗は、ものの一分も経たず散っていった。

佐助
「連載一周年記念特別回！　完ッ！！」

連載一周年記念特別回！～後編～（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「本編が復活したのでこのラジオも復活するわ。みんなお久しぶりね」

政宗
「今日は復活したばかりだから質問コーナーはなしだ。つーか作者が覚えてないだけだが」

華琳
「仕方ないわ。それもこの小説の限界だもの。さて、今回はベスト3を残し散っていったわね」

政宗
「なんでこんな事すんだ？」

華琳
「ベスト3は本編で登場するみたいよ。だからあえて残したわけ」

政宗
「そういう事か。まぁ別にどうでもいいが」

華琳
「今回は短かったけど、次回からは質問を受け付けるわ」

政宗
「そして次回はリハビリで外伝を書いていく」

華琳
「この外伝には多少の原作クロスがあるわ。それも期待してね。それじゃ……」

華琳・政宗
「「次回からよろしく！！」」

外伝・玖、決戦！（という名の合コン）～前編～（前書き）

それは……名もなき兵の物語。

名無しの兵1
「今年もやってきたか……」

名無しの兵2
「奴らの進軍は止められんか……クソ！！」

名無しの兵3
「だが、俺達は抗って見せる！　待ってろよ……」

名無しの兵
「「「煉獄空間（クリスマス）よ！！！！！！」」」

璃々
「おかーさん、あれなにー？」

紫苑
「見てはいけません」

外伝・玖、決戦！（という名の合コン）～前編～

それは南蛮王国の旅行が終わった翌週であった……

～レストラン・蜀卓～

佐助
「合コン？」

早苗
「はい……」

南蛮王国で知り合いになり、仲良くなった東風谷早苗。
そんな早苗から早々に連絡が入り、お願いしたい事があると言われ、
このレストランに待ち合わせた。
そして佐助と早苗が合流し、先の言葉に至る。

佐助
「随分と急な話だな……なんかあったの？」

早苗
「……実は私がハワイでバイトをしている事がある人にバレまして」

佐助

「？　お宅の学校はバイト禁止か？」

早苗
「いえ、禁止ではないです」

佐助
「ならいいんじゃないの？」

バイトが禁止されているならば確かに問題だが、そういう問題ではないらしい。

早苗
「あ、いや、その……」

佐助
「……まぁ言いたくないなら構わないぜ」

早苗
「すいません」

問いた出す気はない佐助は戸惑う早苗の様子を見て言いたくない理由があるものだと察した。

佐助
「まぁ俺様的には大歓迎よ。その話は乗らせてもらうぜ。ちょうど明日は登校日だしな」

早苗
「ありがとうございます！」

佐助の答えに深々と頭を下げる。
そこまでの理由があるのだろうか。

佐助
「ま、他者とのコミュニケーションは大事だ。メンツやら場所やらはどうする？」

早苗
「場所は私が決めさせて頂きます。メンツは……6人くらい呼んで頂けたら有難いです」

佐助
「おぉー、結構な人数だな。まぁ頑張ってみますわ」

早苗
「すいませんがよろしくお願します。では、日程が決まりましたら連絡しますね」

こうして佐助と早苗は解散した……

～翌日・学園廊下～

佐助
「さてさて、メンツはどうしましょうかね……」

早苗と別れた翌日、メンツをどうするか廊下で模索中の佐助。

佐助
「まぁ旦那は外せないよな。それと元親も面白そうだし……」

自分の雇い主でもある幸村と中学からの付き合いがある元親は誘う予定である。

佐助
「後は……ま、どうにかすっか」

気楽な考えでメンツを集め始める。

～1－C～

皆が下校しようとしている時間に佐助はメンツ集めに精を出す。
最初のターゲットは自分の雇い主である真田幸村。
幸村は教室にいると知っていた佐助は迷う事なく教室の扉を開ける。
軽く辺りを見回すと、真夏日だというのにダウンジャケットを身に

纏い、至るところにホッカイロを張り、更にその場で空気椅子をやり続ける幸村の姿を発見する。

佐助
「（うひょ～あんなんよくやんな。俺様なら死んじゃうぜ～）……旦那～、ちょいといいかい？」

幸村
「……む、佐助か。俺に何か？」

佐助
「まぁ軽～い用件なんだけど……その格好、暑くない？」

幸村
「例え真夏日でも、冷静さを備えれば火もまた涼し……お館様の教えに従って修行してるまで」

佐助
（ま～……あの人は溶岩を温泉みたいに入る人だからな～）

佐助曰く、かつて幸村に修行する時にひょっとこのお面を付け、溶岩から出てきた事があるらしい。
人間、頑張れば何でも出来る。

佐助
「（ま、ちゃっちゃと終わらせましょうか）そんな旦那に素敵な修行を提案したいんだけど……聞く？」

幸村
「？　新たな修行？」

佐助の“修行”という言葉に反応する幸村。
そんな姿に佐助は頬肉が釣り上がり、にやりと笑みを零す。

佐助
「まずこの写真を見てみん……」

まず佐助は幸村に写真を渡す。

幸村
「これは？　……ぶっ？！」

その写真は夏休みで水着姿で笑顔を振りまく蓮華の姿であった。

幸村
「ささささ佐助！　貴様、なんと破廉恥」

佐助
「それだ」

幸村
「そ、それとは？」

佐助
「旦那は極端に女性が苦手だ。しかし、根本的な弱点を克服しようとしていない……すなわち、女性がお色気攻撃を行った瞬間、旦那はドボンだぜ」

幸村
「ッ！！！」

その言葉に幸村は頭を鈍器で殴られた衝撃を受ける。
佐助の言葉に何一つ間違いがないからだ。

幸村
「お、俺は……知らず知らずの内に苦手を避けていたのか。なんと情けなし！！」

佐助
「旦那……」

幸村
「佐助……教えてくれ。お前の修行とやらを」

佐助
「……修行する内容はまだ言えない。だが、近い内に連絡する。そん時が旦那の修行だ」

幸村
「承知した。では、今日のところは帰らせて頂く」

幸村の少し重苦しい後ろ姿に佐助は……

佐助
（……チョロいな）

任務を達成した清々しい顔をしていた。

幸村、参加！

～1－B～

佐助
「さてと、次は元親にっと」

次なる目標は元親。
彼は人との付き合いが非常に良く、たまに遊んでいる仲でもある。
そんな元親なら快く受けてくれると思い、教室の扉を開ける。

そこには……

元親
「ん？　猿飛じゃねぇか、珍しいな」

目的の元親と……

家康
「猿飛？　ワシらのクラスに何かようか？」

元親の親友である家康が席に座っていた。

佐助
「まぁ元親に用事があってな……」

元親
「俺に？　一体何だってんだ？」

佐助
「実はな、今度他の学校と遊ぶ約束をしてメンツを集めてんのよ。
それで元親のところに来たわけ」

元親
「他の学校？　それに俺が行っていいのか？」

佐助
「一人を除いて俺様も向こうも面識はないから大丈夫だぜ。この際

なら家康もどうだ？」

家康
「ワシもか？」

メンツ確保の為、元親の隣にいた家康にも声を掛ける。

元親
「どうすっかな～……」

家康
「元親、これはいい出会いになるかもしれんぞ。共に参加しよう！」

元親
「……ま、趣味の合う奴がいるかもしんねぇしな。オレも参加すっか！」

佐助
「サンキュー。んじゃ、また連絡するからよろしくな」

元親、家康、参加！

～2F・廊下～

目的の元親とたまたま居合わせた家康も参加を決め、着々と人数を

増やす佐助。
次なる目的はこういう騒ぎの場にうってつけの人物に会うべく2年生の廊下を歩いていた。

佐助
「さ～てと、次なる人は……お！　早速はっけ～ん！」

どうやら早速出会えたようでその人物に向け、足を進める。
佐助が探していた人物とは……

佐助
「前田先輩、少しいいっすか？」

慶次
「お？　お前は……確か、佐助だったよな？」

前田慶次であった。

佐助
「早速で悪いけど質問します。アンタにとって女性とは？」

慶次
「育てる人がいないと枯れる花みたいな存在だよ。だからこそ大切にしたい」

佐助
「祭りとは？」

慶次
「一瞬の輝きで周りを魅了する花火さ！　やっぱ祭りは楽しいもんだよ！」

佐助
「死神とは？」

慶次
「卍解ッ！！　……これ関係あんのか？」

佐助
「すいません、少し遊びました」

慶次に余り関係性の見られない質問をぶつける佐助。
しかし、先の質問でこの人ほど頼もしい人はいないと確信出来た。
そして本題に入る。

佐助
「そんな前田先輩にピッタリの話があるんだけど……どうすっか？」

慶次
「俺にピッタリ？　何だいそれは？」

自分にピッタリと言われ少し食いついてきた。
佐助は大丈夫だろと慶次だけには本音で言う。

佐助
「実は今度合コンするんすよ。それでメンツを集めてる最中なんすけど出てくれませんか？」

慶次
「へぇ～、合コンか。面白そうだな！　いいぜ、参加するよ」

佐助
「あざーす！　いや～、話が早くて助かりますわ」

こうして佐助は４人目の参加者を獲得する事が出来た。

慶次、参加！

～１Ｆ・下駄箱～

佐助
（残り２人か。他の奴らは断られたしな……最悪、俺様が分身すればいいかな？）

順調に来ていたメンツ集めだが、これ以降さまざまな人物に声を掛けたが、ことごとく断られた。
此処に来ての大きな壁……佐助は少し弱気になる。
しかし、まだ時間はある。
今日のところは引き上げて、次回に移そうと考えいた。
そして靴に履き替え、帰ろうとした。

佐助
「ん？　この感じは……」

すると、佐助にどこからか氣のぶつかり合いを感じとる。
しかも覚えのある氣。
何か惹き付けられるように佐助はすぐに姿を消した。

場所は……

～校庭～

政宗
「Ｙａ――Ｈａ――！！」

三成
「ッ！！　こざかしい……！！」

政宗の一太刀と三成の居合いが激しい衝撃と金属音が響く校庭。

政宗
「最近体が鈍ってたところだ！　Ｗａｒｍｉｎｇ－ｕｐにはうってつけだな！！」

三成
「貴様の我が儘に私を使うな！！」

政宗
「その割には剣を止める気はないみたいだが？」

三成
「口を閉ざせッ！　そして死に絶えろ！！」

政宗を罵倒しながらもその手は止まることはない。
互いの斬撃が最高潮に達しする……その時。

政宗
「……！？　チッ！」

三成
「……ッ」

２人の間に突如として関節剣が現れ、決闘の邪魔をする。
その関節剣の矛先に目をやると……

半兵衛
「そこまでだよ。君たち」

副生徒会長である竹中半兵衛の姿があった。

三成
「半兵衛様!?　どうしてこちらに?!」

半兵衛
「校庭で誰かが暴れているとの報告があってね……それを止めにきたんだ」

政宗
「Ｈａッ！　別に迷惑を掛けてるわけじゃねえ。ならＮｏ　ｐｒｏｂｌｅｍだろ？」

半兵衛
「それでも暴れている事には変わらない。故にこれ以上はやめてほしい」

三成
「半兵衛様に手を煩わして……申し訳ございません!!」

半兵衛の介入により三成に闘う意欲はなくなった。
その姿に政宗も、やる気がなくなり刀を仕舞う。

半兵衛
「話が早くて助かるよ。納得はしていないようだけど」

政宗
「当たり前だ。こんな中途半端な形で終わらせやがって……生殺しもいいところだ」

半兵衛
「へぇ……三成もそうかい？」

三成
「……少なからずは。ですが、半兵衛様の迷惑とならば剣を仕舞います」

秀吉や半兵衛を生きがいとする三成が自分の意見を語る。
それはとてもではない限り語らない三成も相当、欲が溜まっている事。
学園で暴れても困るがこのままではどこかで問題が起きてしまう。

半兵衛はどうするかと悩んでいると……

佐助
「あれま？　もう終わっちゃった感じ？」

先の闘いに釣られ、校庭に姿を現した佐助。

半兵衛
「おや？　君は？」

佐助
「いや～、さっき覚えのある殺気が漂ってたんで急いできただけですよ～」

半兵衛
「でも、この通りもう終わってしまったんだ。すまないね」

佐助
「いやいや、他に目的があるんで大丈夫っす」

そう言ってクルリと回り政宗と三成に近付く。

政宗
「Ａｈ？　何だ？」

三成
「……」

佐助
「実は頼みがあんのよ。聞いてもらえな？」

政宗
「頼みだ？」

佐助は頭に手を当て、困った表情を見せながら事態の話をする。

政宗
「Ｒｅｊｅｃｔ」

三成
「そんな事、私の知ったことではない」

佐助
「うへ？！　そいつは困るぜ！　そこをなんとか！！」

予想してたとはいえ、こうも簡単に断られると引き下がれない。
頭を下げ、ダメもとで頼み込む佐助。
すると、意外な場所から助け舟が現れる。

半兵衛
「そうは言わず、参加してみてはどうだい？　２人とも」

先の話を聞いていた半兵衛である。

政宗
「Ａｈ？　なんで俺まで参加しねえといけねえんだ？」

半兵衛
「君たち2人はどうも“力”で勝敗を決めたがる……だからこそ、たまには“非力”で勝敗を決めるのもいい」

政宗
「だからってこれには出なくてもいいだろ？」

半兵衛
「こういった場所ではたくさんの“遊び”が存在すると聞いた。そうだろ、猿飛君？」

佐助
「あ、ああ。当然あるぜ！」

半兵衛
「なら、そこで決めても問題はないだろ？　それとも負けるのが怖いのかい？」

政宗
「……」

此処まで言われると納得してなくても参加せざる負えない状況までに追い込む。万が一不参加となると“逃げ”の姿勢を見せてしまうからだ。

そんな姿勢を一番嫌う政宗は……

政宗

「そこまで言われて黙っていられるほど気は長くねえ。参加してやる」

半兵衛
「ふふっ。いい判断だよ。三成はどうする？」

三成
「半兵衛様が言われるならば、参加します」

政宗、三成、参加！

こうして想定外な場所でまさかのメンツが揃ってしまった今回の合コン。
果たして無事に終われるのか？

外伝・玖、決戦！（という名の合コン）～前編～（後書き）

華琳
「華琳と！」

政宗
「政宗の」

華琳
「恋ＢＡＲＡ学園ラジオ～！！」

華琳
「メリークリスマス！！」

政宗
「ｔｅｎｓｉｏｎたけーな、おい」

華琳
「こういったものは乗っかった方が得なの」

政宗
「そうかい。俺には理解出来ん」

華琳
「ま、それは人それぞれだわ。さて、今回は合コンのメンツ集めね」

政宗
「恐ろしく恋姫メンバーが出てこなかったな」

華琳
「まぁ、仕方ないわ。そして相手は……もう察しがついてると思うけど」

政宗
「確か“東方”とかというＮａｍｅだったよな？」

華琳
「ええ。まだ誰が参加するとかは決まってないけど、楽しみにしてなさい」

政宗
「んじゃ、質問コーナーに移るか。最初はドラゴンノーツさんからだ」

“黒田官兵衛に質問。ｐｉｘｉｖで武器の鉄球がネイチャーアドベンチャーゲーム【大神】のラスボス【常闇ノ皇】になっている絵を見ましたが、もしかして装備するつもりですか？つけるとしてら様々な形態に変化しますがますます不運になるのでは？”

華琳
「これの返答はこれね」

～返答～

官兵衛
「いや待て！　これは逆に好機と見て天下をとってみるか！？」

～終了～

華琳
「……強いわね」

政宗
「そうでもしねえとやっていけないんじゃねえのか？　アイツの場合」

華琳
「ま、ありえるわね。なら次にいくわ。黒一文字さんの質問」

“恋と忠勝に質問。どちらが強いですか？それと政宗にリクエスト。喋るのを全部英語にしてみてください”

華琳
「まずは政宗の全文英語だけど……」

政宗
「作者の英語力は壊滅的だ。そんな感じだから全文英語はＩｍｐｏｓｓｉｂｌｅだ」

華琳

「そういうことなの。ごめんなさいね。それじゃ返答ね」

～返答～

恋
「……？　どっちが強いの？」

忠勝
「？？？」

～終了～

華琳
「彼らに聞いたのが間違いだったわね。他のメンツに聞けば解決するかもしれないわ」

政宗
「ま、力と守りは忠勝で技量と速さは恋だな。結果はＥｖｅｎだろ」

華琳
「中々の返答よ。それじゃ次に商品番号７７２８さんの質問」

“質問？かは解りませんが刑部にお願いがあります。クリスマスに不幸を撒いて下さい”

華琳
「歪んでるわね」

政宗
「言うな。そんなことより返答だ」

～返答～

大谷
「ヒヒッ！　我が動かずとも大河のごとく不幸が流れる！　故に聖夜こそ最大の力(ふこう)ぞ！！」

～終了～

華琳
「歪んでるどころの騒ぎじゃないわね。あれ」

政宗
「関わるな。次」

華琳
「サルえもんさんの質問ね」

“筆頭、幸村、家康、光成、桃香、華琳様、蓮華、月に質問です。

最近ポケモンと信長の野望を組み合わせたまったく新しいゲームが発表されました。
質問はこれを受けて思った事でもし最初のぽけもんを好きなの1匹だけ選べるとしたらなにがいい？”

政宗
「あれはＳｕｒｐｒｉｓｅだったな」

華琳
「あそこまで来るとなんでもアリね。まぁ私達が言えた事ではないけど」

政宗
「ま、それもそうか。んじゃ返答よろしく」

～返答～

家康
「ワシは……エビワラーとかいうポケモンは好きかもしれんな」

桃香
「私はプリン！　あのまんまる姿可愛い！」

幸村
「某はヒノアラシで頼もう！　共に修行出来る気がするでござる！」

蓮華

「ロコンよ。あの尻尾が心地よさそうなのでな」

三成
「……ラルトスだ」

月
「私は……ヘルガーさんなら心強いかも」

～終了～

華琳
「私はバンギラスね。大地を納めるにはうってつけの存在よ」

政宗
「俺はレックウザだな。天昇る姿はまさに“竜”だ」

華琳
「質問は以上ね。次回は後編よ」

政宗
「それと今回は差し入れコーナーはナシになった。溜まってきたら公開する」

華琳
「それじゃ、またね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8231n/

恋姫†BASARA学園物語

2011年12月25日09時53分発行